潁原退藏著

俳諧名作集

大日本雄辯會講談社版

序言

江戸時代に出版された書物の中で、その數の最も多いものは俳書であらう。もとよりその中には僅か數葉の片々たる小冊子も少くないが、とにかくそれらの俳書に錄された句の數は驚くべきものであらう。江戸時代に入つてからの最初の撰集たる『狗猧集』一部をとつて見ても、すでに發句一千五百三十、附句千句餘を數へて居る。爾來三百年間、俳諧の行はれる範圍は益〻廣く、俳書の出版は年と共に多きを加へたのだから、おほよそ想像にあまりがある。

本叢書の一として『俳諧名作集』が收められることになり、自分がその編纂を引受けた。そこでまづ考へねばならないのは、いかなる組織の下に編纂すべきかといふ事であつた。勿論作品を主として評釋するのであるから、大體名作と認めらるべき作品を選び出せばよいのであるが、右の如き多數の俳書の中からどうしてそれを選び出すのか。各時代の最も代表的な句集類だけに限るとしても、それは中々容易な事ではない。かつ、とにかくさうして選び出したとしても、今度はその排列を如何にするか。問題は次から次と起つて來る。

元來名作集である。名作が多數集つてさへ居ればよいのかも知れぬ。しかし少くとも一冊の書物として編纂される以上、單に一句一句獨立した評釋では面白くない。その間に俳諧の歷史的展開のあとが窺はれ、又諸家の作風の特色をも分るやうにしたい。即ち主とする所はもとより名作の評釋ではあるが、又一面一部の俳諧史とも見られ、諸家の評傳ともなる事が出來たらと考へた。その爲にはやはり作家を中心とする編纂法が最も便利である。よつてまづ貞門・談林以來の代表作家を選び、更に各作家の代表的作品を選ぶ事にした。たゞし場合によつては必しも名作家・名作品でなくても、或は史的展開のあとを示し、或は句風の特色を說くのに必要であり、都合のよいものは、なるべくこれを採る事にした。作家に不角・淡々等が入つて居るのもその爲である。また文藝的には高く評價する事が出來ない作でも、古來人口に膾炙された類のものは、何等かの意味に於てやはり時代を代表するものとして、特にこれを收めた所以でもある。

發句篇は大體右の方針で出來上つたが、次に連句篇を如何にするか。連句はむしろ俳諧の本體とすべきものであり、本書にもなるべく多く收めたい考であつた。これはほゞ年代順に代表的な作品を排列すればよいのだから、編纂は比較的樂である。しかし實際問題としては、專門家でない一般の人々に連句を說くには、どうしても一通りの豫備知識が必要である。それで特に連句篇にはその概說を添へる事にした。ところがその爲に

豫定以上の紙數を費したので、僅かに芭蕉の連句二卷と蕪村の連句一卷を收め得るにすぎなかつた。しかしこれによつて、讀者が連句の鑑賞創作に興味をもつべき多少の機緣を作る事が出來たら、何よりも幸だと思つて居る。

俳諧の作品として俳文も亦捨て難い。特に芭蕉の紀行の如きはどうしても逸する事が出來ない。最後に俳文篇を設けた所以である。しかしこれも芭蕉の紀行、『風俗文選』『鶉衣』等の中の佳作、それだけを選んでもかなりの數になる。よつてこれは最も代表的なもの一二だけをとり、更になるべく汎い時代に亙つて、諸種のちがつた傾向の文を集める事にした。隨つてやゝ雜駁の嫌はあるが、俳文集としては多方面になつたかと思ふ。

本書の編纂を依囑されてから實は數年を經て居る。最初は發行の期日がいつと定まつて居ない爲に、一度筆を執つてから次を書きつぐまで、長い中休をする事は珍しくなかつた。大體編纂の方針は定めて居ながらも、かうして長い時日を經る中には、いつか前後重複したり、統一を缺いたりした點も少くなかつた。然るに愈〻本叢書出版の機が熟し、『俳諧名作集』も第四回の配本と決定されたので、それまでに出來上つて居た原稿は全部に亙つて修正を加へ、又新に書き加ふべきものは書き加へた。そして出來るだけ重複を避け統一をはかつたつもりではあるが、舊稿については徹底的に加筆すべき時間もなく、恐らくなほ不備の點が多いことであらう。しかし自分が最初に企圖した纒つた評釋

にしたいといふ考は、ほゞ實現し得たと信ずる。

顧みれば長い事であつた。この叢書の計畫について、初めて樋口氏の來訪をうけ、藤井先生と三人瓢亭で語り合つた事を、また新しく思ひ出す。そして愈ゝ原稿の整理もすつかり終へ、かうして序言の筆を執るまでになつたかと思へば、流石に嬉しい氣がするのである。なほ最後に本書挿入の筆蹟肖像等について、伊藤松宇翁から多大の便宜をはかつて頂いた事を深く感謝する。また藤井紫影先生・石田元季氏にもいろ〳〵配慮を仰いだ。その他眞蹟所藏家諸氏の好意に對しても、こゝに謝意を表したい。

昭和十年八月四日

潁原退藏識

凡例

一、本書に收めた作品は、すべて序言中に述べた方針に從つて選擇排列したのである。

一、一家の作品は大體四季の順に排列したが、說明の都合上必しも一定せず、宗因・芭蕉・麥水等の如きは、多く年代順に從つた。特に芭蕉の作品は全部年代順として、その作風の展開を知るに便にした。

一、作品の本文は本書の性質上必しも原典のまゝに從はず、便宜漢字を假字に、假字を漢字に直し、又假名遣・送り假字等の不備誤謬はすべてこれを補正した。

一、作家の傳はなるべく簡明に從ひ、その撰著の如きも代表的なものだけにとゞめた。しかし中には評釋に於て、傳記・撰著等に言及したものもある。

一、發句篇・連句篇では評釋が本文の欄に組まれてあるので、頭註は自然少くなつて居る。

一、連句篇には評釋上の豫備知識として、特に連句概說を附說し、かつ一覽の便宜上全作品を前に掲げた。

一、本文中所々に關係ある諸家の肖像・筆蹟・墓碑等の寫眞を挿入し、その說明を頭註欄に加へた。

一、卷頭に俳人系統表を添へて、俳風の變遷系流を一覽するに便した。その中ゴヂック體で印刷したものは、本書中に選び入れられた作家である。

一、『奥の細道』を讀む際の參考として、別にその足跡地圖を添へた。この作成には專ら本叢書編輯部諸氏の勞を煩はした。

細道足跡地圖
136°
137°
141°
39°
38°
37°
36°
陸中
陸前
平泉
高館
北上川
金華山
阿武隈川
名取川
能登
加賀
越中
越前
飛驒
美濃
近江
琵琶湖
敦賀
白山
九頭龍川
木曾川

俳人系統表

松永貞徳
北村季吟
安原貞室
松江重頼
野々口親重
西山宗因
菅野谷高政
岡西惟中
田代松意
井原西鶴
椎本才麿
伊藤信徳
田中常矩
上島鬼貫
池西言水
小西來山
水間沾徳
北村湖春
山岡元隣
松尾芭蕉
山口素堂
立羽不角
岸本調和
榎本其角
内藤丈草
向井去來
服部嵐雪
森川許六
杉山杉風
各務支考
野澤凡兆
廣瀨惟然
志田野坡
齋部路通
越智越人
立花北枝
岩田凉菟
河合曾良
中川乙由
松井汶村
松木淡々
千代尼
建部凉袋
橫井也有
與謝蕪村
高井几董
黑柳召波
吉分大魯
炭太祇
大島蓼太
松岡青蘿
大伴大江丸
高桑闌更
堀麥水
加舍白雄
加藤曉臺
三浦樗良
夏目成美
小林一茶
松窓乙二
井上士朗
建部巣兆
鈴木道彥
成田蒼虬
櫻井梅室
田川鳳朗

奥の細道足跡地圖

俳人系統表

貞門時代
談林時代
蕉風時代
（貞門）松永
貞徳
石田 未得
高島 玄札
齋藤 徳元
北村 季吟
池田 正式
鷄冠井令徳
山本 西武
高瀬 梅盛
安原 貞室
松江 重頼
野々口親重
（談林）西山 宗因
岡村 不卜
立羽 不角
岸本 調和
中島 隨流
伊藤 信徳
乾 貞恕
上島 鬼貫
池西 言水
田中 常矩
内藤 露沾
前川 由平
岡西 惟中
菅野谷高政
田代 松意
井原 西鶴
椎本 才麿
北條 團水
小西 來山
水間 沾徳
（葛飾風）山口 素堂
（蕉風）松尾 芭蕉
山岡 元隣
北村 湖春
澤
相良
菅沼
松倉
仙
僧
河合
天野
服部
山本
（伊勢風）岩田
立花
越智
齋部
志田
廣瀬
野澤
（美濃風）各務
杉山
森川
服部
向井
内藤
（洒落風）榎本

俳諧名作集

目次

發句篇

連句篇

俳文篇

題簽　安田靫彦
裝幀　小村雪岱

發句篇

山崎宗鑑

本名志那彌三郎範重。近江の人、將軍足利義尙に仕へたが偶〻その陣歿に遭うて出家し、攝津尼ヶ崎・山崎等に閑居した。又晩年讃岐觀音寺に一夜庵を結び、とゞまる事二十餘年であつたといふ。天文二十二年歿、年八十九。その撰集になる『犬筑波集』※は、實に俳書の權輿とされて居る。

元朝の見るものにせん富士の山

句意は說くまでもなく明かである。誰にも分り易い句であるだけ有名になつて居るが、宗鑑時代の俳諧は滑稽を專らにしたものであるから、かういふ寧ろ眞面目な句が果して宗鑑の作であるか實は疑はしい。又この句と共に有名な守武の

元朝や神代の事も思はるゝ

の如きも、當時の俳諧としては眞面目すぎるのである。一體これらの句が宗鑑や守武の作として人口に

讃 山崎宗鑑像

宗鑑像

○犬筑波集　古くは只「俳諧連歌抄」と稱した。當時の俳諧のすぐれた作を集めたもの。大永三年以後天文八年までの間に成つたと推定される。

▽宗鑑像　これは狂歌集「花紅葉」「享保十四年刊」に據る。

膾炙するやうになつたのは、『俳諧温故集』などに採錄されてからの事らしく、古い俳書には全く所見がないのである。しかしかゝる後世の句集を以て證とする事はもとより出來ない。從來古俳人の有名な句には、誤傳が少くないから注意せねばならぬ。但しこの句は宗鑑の作でないといふ反證もないので、今はかうした疑の多い事を注意しつゝ、從來の說のまゝにあげておく。

まん丸に出づれど長き春日かな

春の日はいつもと變らず丸い形で出るけれども一日の日は長いといふので、丸いのと長いのとの矛盾に、をかしみを現はした句である。即ち全く智的興味に基く滑稽を主として居る。誠に幼稚な句だと考へられるだらうが、當初俳諧の滑稽とは要するにかうした程度のものであつた。

宗鑑筆「犬筑波集」

○俳諧温故集　□□編。古今俳人の發句を四季に分類して集めたもの。□□五年刊。

▽宗鑑筆「犬筑波集」　東京　大橋圖書館藏

誹諧連哥

かすみのころもすそはぬれけり
佐保姫の春たちながら尿をして
うそをふき□□花をこそ□れ
軒はたる鮎のすはひに梅さきて
あらうつゝなや花をちらすな
かませたる榛がえここにしやれ男
ひらりしやらりと春の雨ぞい
歸雁きうるんやうの文字にて
かすみより一はねはぬる月もりて
覽といふ字にかへるかりがね
大長刀に春風ぞ吹
辨慶やけふは火花をちらすらん
ながめられつるはなはちりけり
うちかすむささは故さのゝやしきにて
しやがちゝに似てこうもいれかし
たう龜の卵のなかの郭公

○出づれど　一本には「出でても」とある。

○古今集の序文　「花になく鶯水にすむ蛙　中略、いづれか歌をよまざりける」
○耳無草　寛文頃の貞門の俳書。この句を宗鑑の作としたのは、元祿二年の「曠野」などが最初であらう。古集には所見がない。
○うづき　四月の異名卯月と、腫物の痛みうづくのとかけた。
○ねぶと　ねぶと(癤)と音太との言掛。
○月に柄を　摩訶止觀「月隱二重山一兮、擧レ扇喩レ之」。百聯抄「月掛二青空一無レ柄扇　星沈二碧落一不レ穿珠」。班婕妤、怨歌行「裁成二合歡扇一、團團似二明月一」。夫木抄「夏の夜の光まばゆくすむ月を我か物がほにうちはとぞ見る」

手をついて歌申上ぐる蛙かな

『古今集』の序文に因んで、蛙が手をついて鳴く恰好を、歌を申上げるとをかしく言つたのである。これも宗鑑の句として名高いものだが、『耳無草』に道寸といふ人の句として出てゐるのでなほ疑はしい。

うづき來てねぶとに鳴くや時鳥

四月が來て高聲に時鳥が鳴くといふのを、癤の疼くのに言掛けたしやれである。

月に柄をさしたらばよき團扇かな

月を扇や團扇に喩へる事は、頭註にもあげたやうに、古來詩歌に多く見るのであるが、これは更に柄をさしたらばと見立てた所に面白味がある。子供らしい無邪氣な空想が、この句の生命である。

○飛梅　道眞の愛してゐた梅が「東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」といふ歌に感じて筑紫まで飛んだといふ。安樂寺庭中の梅がそれであると言傳へた。

○神の春　老の春・宿の春・浦の春などと結んだ春はすべて新春の意である。「神の春」は神社の新春といふ程の意。

○獨吟千句　天文九年の作。慶安五年に刊行された。今伊勢宇治山田市の徴古館には守武自筆のものが藏せられて居る。次頁寫眞參照。

▽守武像　「寛政板「世中百首」所載」

荒木田守武

伊勢内宮の神官、荒木田七家の一なる薗田家に生る。文明十九年十五歳の時神宮の禰宜に任ぜられ、天文十年一の禰宜に進み薗田長官となつた。天文十八年歿、年七十七。天文九年、名高い獨吟の千句を興行した。

飛梅やかろ〴〵しくも神の春

守武の『獨吟千句』巻頭の發句である。彼は自ら神官の職にあり、又この千句は神意を伺つて催したものであるから、特に神の春を詠じたのである。かつ道眞は古來文學の神として崇ばれたので、今俳諧の文運を祈る意も籠めて、飛梅をもつて來たものと思はれる。しかし句は輕々と飛んだ梅と神(紙)の言掛とで縁をもたせた趣向で、全く言葉の技巧が句の中心となつて居る。これに附

守武像

▽守武筆「獨吟千句」（伊勢　徴古館藏）

誹諧之連歌

第一

飛梅やかろ〴〵しくも神の春
われも〳〵のからすうぐひす
のどかなる風ふくころに山見えて
目もこすさまじ月のこるかげ
あさがほの花のしげくやしほるらん
これ重寶の松のつゆけさ
むら雨のあさにつなげる馬の角
かたつぶりかさ夕暮のそら
ただとりさここそ[illegible]入そくら
何やらんふみつぶしたる音はして
くいつくほどにおもほゆるみち
さるまなこにて花をみるころ
さほ姫や哀うち出さけぶらん
人はさら〳〵かすがのゝ春
さゝらをや若むらさきのすり衣
そでうちしほれさくはしやうきよう
夕時雨おやかつゝの雲井まで
峯のあらしのろんご吹聲

○落花枝に歸らず　五燈會元、十二「落花難上枝、破鏡不重照」

けた脇句は

　われも〳〵の烏うぐひす

といふので、神徳を慕つて飛んだのは梅ばかりではない、烏や鶯まで我も〳〵と飛んで行くといふのであらう。

　落花枝に歸ると見れば胡蝶かな

「落花枝に歸らず」といふ諺を逆用した機智が、一句のをかしみの中心となつて居る。勿論これは花下に舞ふ蝶の姿を、素直に觀察したものではなく、一種の理智的な解釋をそこに插んだわけであるが、當時の俳諧は即ちさうした所を多く狙つたのであるから、この句はその意味で成功した作と言へよう。而してこの句が古來汎く知られた所以も、その點に在る。

守武筆「獨吟千句」

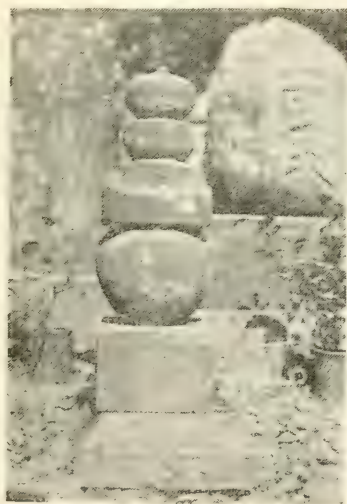
青柳の眉かく岸の額かな

眉と額との縁語で仕立てた句。これまた岸頭になよやかに垂れた柳の糸を、美しい景色として描き出したのでなく、專ら言葉の縁に興味をつないだのである。

せこの者來べき宵なり泊り狩

明朝鷹狩をするので、今夜は勢子の者どもが來べき筈だといふのが表面の意である。しかしそれだけの事ならば、極めて平凡で、何の面白味もない。それが衣通姫が天皇の御出を待つて詠まれたといふ『古今集』の歌の句にもぢつたのが興味ある點である。しかも下に「泊り狩」とおいてそのもぢりの意を生かした所に一層働きがある。

守武墓

○青柳の眉　和漢朗詠集、柳─昭君村柳翠「眉」日暮に」その他柳の線を眉に喩へた事が多く、柳眉は美人の眉の稱となつてゐる。
○岸の額　岸の突出た端の所をいふ。枕草子「あやふ草は岸のひたひに生ふらんも」
○せこ　勢子、列卒。狩場などで鳥獸を狩り立てる者。かりこともいふ。
○せこの者來べき　古今集「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしも」（衣通姫）
○泊り狩　泊り山のこと。連歌俳諧で春季とする。華實年浪草「泊り山とは山野に出で宵に雉子の鳴く所を聞置きて、未明に行きて密に雉子を捕らするを泊山とも、鳴鳥（ナイトリ）狩とも聞きすゑ鳥とも朝鷹ともいふ」
▽守武墓　（宇治山田市浦田町の墓地内に在る。）

○又うへも　この句以下凡て守武の作。

夏の夜は明くれどあかぬ瞼かな

短夜はすぐ明けても、寝足らぬ瞼はなか／＼開かない。あける、あかぬの掛合を興味の中心とした句。

又うへも内宮や立つ神の春（都草）
鈴鹿川こゝを瀬にこせ午の年（境海草）
松やにはたゞ青薬のねのひかな（伊勢正直集）
　ねぶとわづらひてよくなりければ
ぬかれたり櫻でなしの花見哉（伊勢誹諧發句帳）
名乗りてやそも／＼今宵秋の月（同前）
もみにもみきり／＼すなく夕べ哉（同前）
鶯のむすめか鳴かぬほとゝぎす（伊勢踊音頭集）

松永貞德

京都の人、幼名勝熊。長頭丸・逍遊軒・明心居士等の別號がある。父永種は攝津高槻の刺史入江九郎盛重の男五郎政重の長子であるが、後ち姓を松永と改めた。この父が連歌師宗養の門人であつた爲に、貞德もその感化をうけ、少時から連歌を里村紹巴に學んだ。又和歌を九條稙通・細川幽齋等について學び、後ち俳諧一道の祖となつた。承應二年歿、年八十三。「淀川・油粕」「御傘」等の撰者がある。

鳳凰も出でよのどけきとりの年

支那では聖代には麒麟や鳳凰が出るといふ。丁度今年は酉の年で、しかも御代泰平である。鳳凰も出てもよいぢやないかといふのである。酉の年だから鳳凰をもち出したのが趣向である。貞門の新年の句には、干支によつて此の種の趣向をこらしたものが頗る多い。例へば

四國より來る春なれや申の年

霞さへまだらに立つや寅の年

○淀川・油粕　二書で一部をなし、一名「新增大筑波集」といふ。「犬筑波集」にならつて附方の實例等を示したもの。寛永二十年刊。

○御傘　ゴサン。俳諧の指合去嫌の法式を說いたもの。慶安四年、萬治二年刊。

○申の年　四國猿に因む。

○みづのとの酉　「酒」の字に因む。

○昔の歌人　伊勢。歌は古今集に出づ。

▽貞　徳　像
（京都　實相寺藏）

○花より團子　この諺を用ひた古俳諧をこゝに抄出して見よう。

花よりも團子とたれか岩つゝじ
（犬筑波集）

花よりも團子で見たや二十日草　時　之

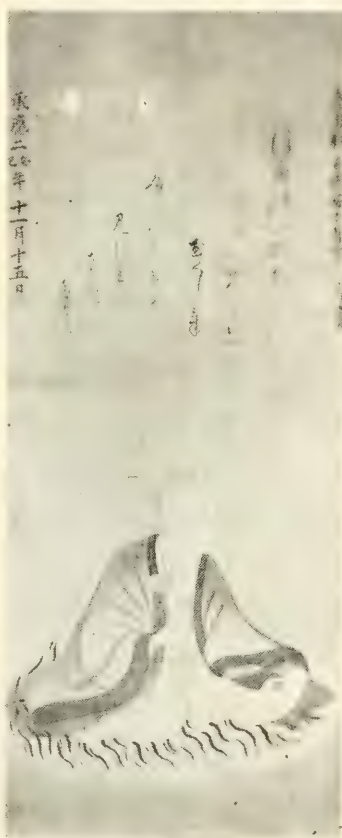
團子よりまさるといふや萩の花　道　保

團子より花といふべし二十日草　實　繼
（以上實筑波集）

みづのとの酉（とり）の先（ま）づ酌（く）むことし哉（かな）の如き類である。

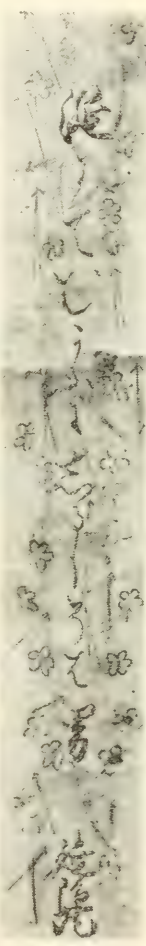
花（はな）よりも團（だん）子（ご）やありて歸（かへ）る雁（かり）

雁（かり）は春になると花を見（み）捨（す）てて北へ歸つて行く。それで昔の歌人も「春霞（はるがすみ）立つを見すてて行く

貞　德　像

雁（かり）は花なき里に住（す）みやならへる」とよんだ。この『古今集』の歌を俗（ぞく）に碎（くだ）いたやうな趣向（しゆかう）である。諺に「花より團子（だんご）」といふが花を見すてて行く雁（かり）は、多分（たぶん）向うに花にまさる團子があるか

○毛吹草　松江重頼著、正保二年刊。
○世話盡　皆虚撰。明暦二年刊。
一貞徳筆蹟（松宇文庫藏）
涎にてむかふにしるしそは男　　延陀丸

らだらうといふ意。

貞門の句にはこのやうに俚諺をとつて一句の趣向を立てたものが頗る多い。だから貞門俳諧の作法書中には『毛吹草』『世話盡』等、諺を多く集めたものさへある。隨つて研究の立場はちがふが、俚諺研究者はぜひ貞門の俳書は一讀せねばならぬ。それほど貞門の句と俚諺との交渉は深いのである。

貞徳筆蹟

しをるゝは何か杏子の花の色

何か案ずると杏子と言ひかけたまでの句。しかもそこが此の句の最も主要な滑稽であることを忘れてはならない。この言掛と緣語とは、當時の俳諧には最も普通な滑稽の趣向で、貞門の俳諧を解するには、いやでもその點を主とせねばならない。しかしその間自ら萎れた杏子の花が擬人化された趣があつて、物案じげな女のさまなどが連想される。

ねぶらせて養ひたてよ花の雨

子供の誕生を祝つてやつた句である。花の雨を飴にいひかけて、そこでねぶるといふ縁語をもつて來たのが一句の手柄。句意は雨が花を養ひ立てる如く、飴を舐らせてその子を養ひ立てよといふのである。

七夕のなかうどなれや宵の月

「仲人は宵の口」といふ諺を用ひた趣向。一句の意は七夕は牽牛・織女の二星が、年に一度の逢瀬を樂しむ夜だから、七日の月は宵のうちですぐ引込むといふのである。今は中學生でもそれだけの解釋をきくと、「何だつまらない。妙にこじつけたものだ

貞德墓

○ねぶらせて　この句には「子をまうけたる人に」といふ詞書がある。

○仲人は宵の口　この諺は媒酌人は愈〻三々九度の盃がすめば、もうそれから用がない。却つて邪魔にされるものだから宵の口で聞いたがよいといふ意である。

▽貞德墓（京都市下京區上鳥羽、實相寺の境内にある。）

○晝寢の種　種は原因となるものの意。

○あなかしこ　恐惶謹言といふのと同じく、書簡の終を結ぶ時など用ひる語。それを蟲類が冬になつて地上から去る暇乞の語と見なしたのである。

な　と一笑に附する事であらう。しかし貞德時代には、この句などこそ最も妙作として喜ばれたにちがひない。貞門の句をよむには、その點をやはり十分理解しておかねばならない。

皆人の晝寢の種や秋の月

秋の夜は月見のために、終夜皆人々が起きて居るので、晝は晝寢をしなければ睡眠不足を補へない。結局秋の月は皆の人の晝寢の種だといふのである。これも幼稚な理窟をひねつた滑稽に過ぎないが、少くとも、言語の技巧のみに終つてゐない點は、いくらか文學としての取柄は多からう。しかもかうした一句全體の意味から齎される滑稽、――それも此の程度の幼稚さでさへ、實は貞門の句には甚だ少ないのである。

冬籠り虫けらまでも穴かしこ

虫けらまでも冬になると暇乞して穴に籠るといふのである。それを例によつて「穴かしこ」と言掛けたのが一句の眼目となつてゐる。

野々口親重

京都の人、雛屋を業とした。若くして連歌を猪苗代兼裁の門兼與に、和歌を烏丸光廣卿に、俳諧を松永貞德に學んだ。後ち重頼と確執を生じて貞德の門を去り一派を成した。法體して立圃と號す。寛文九年歿、年七十五。『發句帳』『花火草』『小町躍』『六日の菖蒲』等を初め、撰著が甚だ多い。その句集を『空礫』といふ。

源氏ならで上下に祝ふ若菜哉

『源氏物語』の中で若菜の卷だけは上下二卷に分れてゐる。それで正月に貴賤上下とも若菜を祝ふのを、これに引きかけた作意で、貞門常套の手段といふべきである。

天も花に醉へるか雲の亂れ足

『朗詠集』の句を用ひて、雲の亂れを花に醉つた千鳥足かとしやれたのである。

○空礫　立圃自撰。自作の發句二百餘を集む。慶安二年刊。

○天も花に　和漢朗詠集、花時天似醉序「天醉于花、桃李之盛也」（菅丞相）

文圃筆自畫賛

綻ぶや尻も結ばぬ糸櫻

「尻も結ばぬ糸」といふ諺によつた句。縫つた糸の尻を結ばねばやがて綻びるといふのを、糸櫻が咲き初める意にかけ、更に糸を糸櫻にいひかけたので、全く言掛と縁語だけで作り上げた句である。

あらはれて見えよ芭蕉の雪女

芭蕉の精が女となつて現はれる。しかもそれが珍しい雪中の芭蕉といふのならば、その女は雪女と現はれて見えよといふのである。謠曲の文によつて、謠曲にない雪女を出して來たのが俳諧である。

○尻も結ばぬ糸　後始末をせぬ事の喩へ。

「文圃筆自畫賛」松平文庫藏

後京極攝政太政大臣

あまの戸をおし明かたの雲間より神代の月の影ぞもりくる

此詠の心をとりて

月見へぬ夜の岩戸か扇箱

文圃書

○芭蕉の雪女　謠曲芭蕉「さては雪の中の芭蕉の僞れる姿と見えしは、疑ひなき芭蕉の女と現はれけるこそ不思議なれ」。雪中の芭蕉とは王摩詰が描いたといふ故事で、炎天の梅花と同じく元來有るべからざる事だから、謠曲の本文では僞の序詞に用ひてある。

松江重頼

京都の人、大文字屋といひ撰糸賣を業とした。連歌を里村昌琢に俳諧を松永貞徳に學ぶ。性質負嫌ひで同門知友と屢ゝ爭ひ、『犬子集』の事によつて親重と不和を生じ、遂に貞徳の門を去つた。貞徳・立圃と對立して又一派をなす。句風は貞門中にあつて最も清新の趣に富んだ。延寶八年歿、年七十四。『犬子集』・『毛吹草』・『佐夜中山集』・『時世粧』・大井川・藤枝集』等多くの撰著がある。

咲きやらで雨や面目なしの花

春の雨は花を養ひ立てる父母であるといふのに、いくらその雨が降つても梨の花は咲かない。雨も面目無からうといふのである。勿論面目無しと梨との言掛が眼目。

やあしばらく花に對して鐘撞く事

能因の歌により謠曲の文をかりて仕立てた句。花の散るのを惜んで、入相の鐘を今や撞かう

○犬子集　エノコシフ。貞門の發句・千五百三十、付句千句餘ヶ集む。寛永十年成。貞門の句集として最も古いもの。

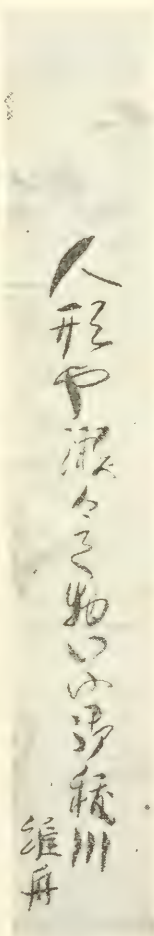
○咲きやらで　「雨ふれど花の遲かりければ」といふ詞書がある。

○やあしばらく　謠曲三井寺、狂女が鐘をつかうとするのを僧が制する詞に「やあ〳〵暫く、狂人の身にて何とて鐘をは撞くぞ。急いで退き候へ。」

○花に對して鐘撞く　新古今集「山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」(能因法師)。謠曲三井寺の中にこの歌も取入れられてある。

とする僧を呼び止めたのである　もとよりそこへ謠曲の文を取入れたのが句の働きであるが、これなどは確かに巧な利用だと言へるだらう。技巧としては正に縱横の機智を弄したものである。のみならず、夕の風にはらくと散りかゝる花の下に、謠曲がかりで呼び止めて居る風狂人の姿さへ目前に浮ぶのである。

順禮の棒ばかりゆく夏野哉

夏草が人のせいより高く茂つた野中を、巡禮が通つて行く。人の姿はすつかり隱れて、手についた長い杖のさきだけが見える。それで遠くから見ると、丁度その棒だけが歩いてゆくやうだ。「棒ばかりゆく」といふ見つけ方が滑稽なのである。しかもそれは又決して誇張や技巧でなく、自らその實景を言ひ現はして居る。そこには、これまでの句のやうに言語の理智的技巧を全く見ないのである。もとより表面的な物の見方ではあるが少くとも貞門の俳諧中で、かうした

人形や瀨々で物いふ御祓川　維舟

重頼筆蹟

▽重頼筆蹟（大阪淺井氏藏）
人形や瀨々で物いふ御祓川　維舟

比較的清新な滑稽をよんだのは他に類がない。重賴が異色に富んだ作家であつたことはこの一句からでも言ひ得られる。

秋やけさ一足に知る拭ひ緣

拭きたての緣をふと一足ふんだ刹那、何となく足の裏にひやひやとした感じがする。その冷たさの感じで、あゝ今朝は立秋だなと氣づいたといふのである。緣の冷たさに立秋を感ずるといふのは、もう滑稽諧謔の戲れではない。自然の推移に對して敏感な詩人的感受性が見られる。それはかの「秋來ぬ」と歌つた古人の心と相通ずるものである。只「一足に知る」と言つた所は、やはり興じた心もちがあつて、そこに實は當時の俳諧たるべき所以があつたのである。

※梅が香をつれ立つ笛の遠音哉　　※花を踏んで惜まぬ物は酒代哉
青き程白魚白し荳の汁　　山彦や瀧ほとゝぎす三拍子
日盛りや瓜も色づく蟬の聲　　九重や踊團扇を初あらし
刈萱は淋しけれども何とやら　　野に嬉し虫待つ宵の小行燈
寒菊は奢らで久し花盛　　※霜月や沖の鯨も鐘の聲

○秋來ぬ　古今集「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」藤原敏行）

○梅が香を　以下「藤枝集」（重賴の發句約五百句を集む。「大井川」と共に一部をなす。延寶二年刊）から抄出。

○花を踏んで　和漢朗詠集「踏ㇾ花同惜少年春」

○霜月や　鐘の聲を鯨音といひ、又鐘の音は霜にさえるからの趣向。

安原貞室

名は正章、通稱鎰屋彦右衛門。一囊軒と號した。貞德の門人でその正統をつぎ花の本二世となる。延寶元年歿、年六十四。「正章千句」「玉海集」等の撰者がある。

歌軍文武二道の蛙かな

蛙は『古今集』の序文に「花に鳴く鶯水に住む蛙」といはれて、歌道にもほまれが高い。それから又蛙合戰といつて軍の方でも名高い。卽ち文武二道を兼ねてゐるとほめたので、結局理智を弄した滑稽。

※これは〳〵とばかり花の吉野山

花盛の吉野山の美景に對しては、只もうこれは〳〵と呆れるばかりで、何と形容稱讚の辭もないといふので、句意は極めて明瞭である。その誰にも解され易い點が、この句を名高くさせ

○これは〳〵　此の句はもと寬文九年刊行の「一本草」といふ俳書に出てゐるが、俳諧七部集中にもとられ、汎く人口に膾炙するに至つた。

た原因であらう。※芭蕉も感をもらした句であるが、それは恐らくなまじつかな言葉で不滿足な表現をするより、只もうその美景に恍惚と魅了されたがよいといふ心境に同感したのであらう。句そのものに不朽の價値ある名吟とは思はれないが、當時の俳諧が緣語や掛詞等言葉の技巧を專らにして居た間にあつて、かうした感じを率直に言ひ現はして居る點に、今日から見て十分の好感をもつ事が出來る。

涼しさのかたまりなれや夜半の月

夏の夜半の月は涼しさの凝り固つたものであらうとの意。夏の月の凉味をそのまゝに敍しないで、理智的な解釋を試みたのである。而してそこが貞門の俳諧たる所以である。

※いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥

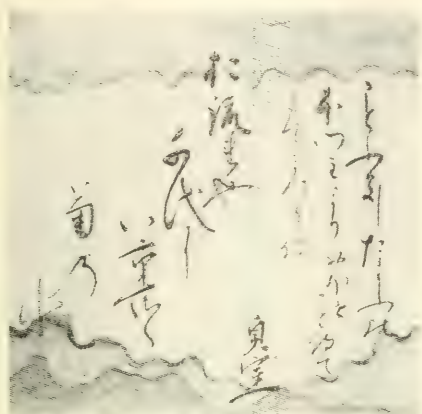
この句はこれだけでも解せられぬ事はないが、詞書によつて一層句意を明かにすることが出來る。都鳥は『※伊勢物語』の話で名高く、隅田川に住んでゐる嘴と脚の赤い鳥だといふ。その

○芭蕉も云々　芭蕉の「笈の小文」に「吉野の花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきに向ひ、有明の月のあはれなるさまなど心に迫り胸にみちて、あるは攝政公のながめに奪はれ、西行の枝折に迷ひ、かの貞室が是は是はと打ちなぐりたるに我れ言はん言葉もなくて、徒に口を閉ぢたるいと口をし」とある。

○いざのぼれ　これも前記の「一本草」に出てゐて、「京に十曉じかりつる友の武藏の國にくだし經て住みけるが、角田川一見せんとさそひければまかりて」といふ詞書がついてゐる。

○伊勢物語の話　業平東下りの條に見えて居る。

都鳥に向つて、さあこゝらで宜からうが、ひとつ嵯峨の鮎を食ひに京へ上らないかと誘つたので、意は勿論友に上京を促したのである。かうした場合の作としては、成程はたらきのある句だと思ふ。

松にすめ月も三五夜中納言

一句の眼目は『白氏文集』の名高い句を裁ち入れて、夜中から中納言といひかけた所にある。これなどは貞門の句の特色をよくあらはしてゐる。これといつて纏つた意はないが、十五夜の月を須磨の舊跡に眺めた心持が、典故や言掛で巧妙に言ひ現はされて居る。「すめ」は「月が松蔭に澄めよ」と言ふのと、「かゝる名所の松蔭に住め」と言掛けたのであらうが、なほ行平が須磨に三年さすらつて居た折愛したといふ姉妹の女、松風・村雨の松も匂はして居るのかも知れない。

貞室筆蹟

○松にすめ　この句は玉海集に出で「須磨の月見にまかりし頃、むかし行平卿の住み給ひし處やいづこと尋ね侍りしに、上野山福祥寺といふ。これ今の須磨寺なり。この山の東の尾につゞき松一村侍るを月見の松と名づけ給ひしなど人の敎へけるまゝに」といふ詞書がついてゐる。

○三五夜中納言　白氏文集、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九に「三五夜中新月色、二千里外故人心」の句を用ひてある。中納言は在原行平のことで、その事蹟は謠曲松風でよく知られて居る。

▽貞室筆蹟（金澤 中山氏藏）

ことぶきしたまふ比本門主より
おほせごと侍てたてまつり侍
　　　　貞室
お流れや千代に八重さく菊の水

北村季吟

名は靜厚、久助と稱す。湖月齋・蘆庵・七松子。拾穂軒等の號がある。近江北村の人、京都に住み醫を業とした。初め貞室に學び後ち貞德の直門となる。古典の註釋書を多く著はし、又幕府の歌學所に補せられ再昌院法印といふ。俳諧に關する撰著にも『山の井』『埋木』『新續犬筑波集』等名高いものが多い。寶永二年歿、年八十二。

地主からは木の間の花の都哉

花盛りの頃地主權現の高みから、花の都を見下した景色である。それを謠曲の文によつて、木の間の花から花の都へと續けたのが句の面白い所。これは『花千句』卷頭の發句で、正立が

殘る雪かと見ゆる白壁

といふ脇をつけて居る。

腹筋をよりてや笑ふ糸櫻

○地主　ヂシユ。京都東山淸水寺の鎭守の神なる地主權現のこと。謠曲田村に「あら〳〵面白の地主の花の景色やな。櫻の木の間に漏る月の」

○花の都　繁華な都。それを木の間の花から言掛けた。

○花千句　季吟・正立・湖春の三人が花を發句として百韻十卷を興行したもの。延寶三年刊。

糸櫻が滿開してゐるさまを、糸といふ語にすがつて、腹筋をよつて笑ふと言つたのだ。よるは勿論糸を搓るに言掛けてゐる。言葉の洒落だけの句。

一僕とぼく〳〵ありく花見かな

句は一僕のボクからボク〳〵と同じ語を重ねた所が面白味であらう。しかしさうした調子をぬきにしても、一僕に瓢簞でも持たせて、悠々と花見て歩く樂隱居などのさまがかなりうまく出て居る。實は今日から見るとボク〳〵の拍子取的な小細工式技巧なんかはどうでも宜いのだが、貞門時代の句としては、どうしてもその點を見のがすわけには行かない。

まざ〳〵といますが如し魂祭

季吟筆蹟

（季吟書[illegible]宗鑑の[illegible]夜庵を再興した折の賛文で、こゝに掲げたのはその終の一部分。）

の情ふかく人の心の邪佞をのづからうせて老を老とし長を長とする禮をしり　上は慈をおこなひ下は忠孝をはげましつゝ久しくして國土安穏の世となりて千世萬代をもはらんことみかさの山にはかぎり侍らじかし　予いにしとし六十の春より新玉津島のしまがくれに門さしこもりて誹諧堂の[illegible]席の交を[illegible]て侍しに彼宗鑑法師[illegible]戸口に入來つゝ其夜庵再興の[illegible]せん事を望みて[illegible]波を[illegible]のぎをかさねて[illegible]此事に上りぬると聞えこしたるに再三の辭退を[illegible]に[illegible]宗の名や[illegible]

貞享元年甲子卯月十三日　季吟

○ぼく〳〵　ゆるり〳〵と歩いてゐるさまにいふ語。芭蕉の句にも「馬ぼく〳〵我を繪に見る夏野哉」といふのがある。

○まざ〳〵と　論語、八佾篇「祭ルコト如シ在スガ、祭レバ神如シ神在スガ」に

『論語』の文句取があまり目立たないで句中に融化されてゐるのは、流石に季吟の手腕の凡でない所が窺はれる。しかし結局言葉の技巧が眼目となつてゐる。

雁は文字おほふや霧の韻塞

霧が一行の文字の如く列い飛ぶ雁を掩ひ隱したさまを、韻塞と見立てたのである。貞門臭の強い句だが、韻塞などを思ひついたのは、いかにも古典研究家らしい季吟の特色をあらはしてゐる。

※盂蘭盆　なき魂の來ますといふ事、一年に數多度あなるとなれど、ことに七月は盂蘭盆にて、久方の雲の上にも御盆供を供へ給ひ、あまさかる鄙人までもあたり〱の持佛の前に、わさ米・枝豆・根芋など所せきまで奉り、※ひわりご・※くぎやうやうの物調へて、身より〱の眷族はさらなり、聞きふれ見なれし無緣法界に至るまで、殘りなくまつり侍る。されば水施餓鬼して火の車のたけさも打消す心ばへ、送火の光に暗闇の地獄の迷なからんを思ひやり、麻がらの杖つくらんよろぼひ姿を悲しみ、燈籠木の如き餓鬼ばらをあはれみ、又蓮葉にふらめく露をのるらん人魂になぞへ、ほえ鼠尾草の露けさを我袖の涙によそへて、古きを思ふ心などすべし。

○韻塞　キンフタギ。詩の韻字を掩うて、それを當てさせる文字の遊戲で、中古の物語などによく散見する。

○盂蘭盆　「山の井」の一節。盂蘭盆の俳句などを場合の參考としてかいた文。

○ひわりご　檜破籠。今の辨當箱。

○くぎやう　供饗。三寶の如き膳。

○夢見草　休安撰。一幽の發句五、附句二が載つて居る。
○牛飼　燕石撰。一幽の發句一、即ちこの「ながむとて」の吟が出てゐる。
▽宗因自畫賛像（宗因百回忌集「梅翁百年香」（谷素外撰）所載）
なきかずにたぐひよそへよ老ほけて
ありとばかりもいくほどの世ぞ

西山宗因

名は豐一。肥後八代の城代加藤正方の家臣。夙くから里村昌琢に師事して連歌をよくした。寛永九年主家の退轉に遭うて浪々の身となり、後ち大阪天滿宮の月次連歌の宗匠となつた。又一方明暦頃から俳諧に親しみ、寛文末年頃から漸々新風を唱へ、所謂談林風の祖と稱せられるに至つた。俳諧では一幽・西翁・梅翁・梅花翁と號した。天和二年歿、年七十八。『西翁十百韻』『天滿千句』『宗因五百韻』『釋教百韻』等の撰著がある。

ながむとて花にもいたし頸の骨

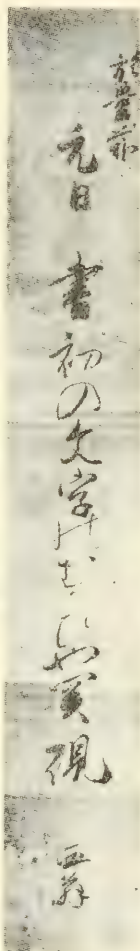
宗因自畫賛像

宗因の俳諧はすでに寛永末年頃の作から知られて居るが、俳書に初めて見えるのは明暦二年刊の『※夢見草』が最も古く、ついで萬治元年刊の『※牛飼』であらう。この「ながむとて」の吟は即ち右の『牛飼』に出てゐるので、宗因が俳諧を盛にやり出した當初の作である。しかもこれは當時よほど名高い句であ

つたと見えて、その後多くの俳書に度々採錄されて居り、又この句を發句にした宗因自身の獨吟百韻などもある。

句は西行の歌のいたくを痛くにとりなして、仰向いて枝頭の花に見入つてゐた爲めに、頸の骨が痛くなつたといふ滑稽である。勿論貞門風な言葉の洒落ではあるが、古歌のみやびやかな言葉から急に「いたし頸の骨」と俗に轉ずる調が、いかにも輕妙で、流石に宗因の機才の凡でないことがうかゞはれる。

※峯入は宮もわらぢの旅路哉

寛文初年の吟である。この句は京都聖護院門跡道寛法親王の峯入を拜んでよんだ句だといふ。これも蟬丸の歌をふまへた句で、高貴な宮樣も、修行のための峯入であるから、草鞋を召してるといふのだが、さうした古歌の知識から生ずる興味以外には何の感興も齎さない。畢竟貞門の舊套をまだ脫しきれない作である。

宗因筆蹟

○西行の歌　新古今集「眺むとて花にもいたくなれぬればちる別れこそ悲しかりけれ」

○峯入は　この句洗濯物（寛文六年刊）を始め今樣姿・吉野山獨案內等に出づ。

○峯入　山伏修驗者が吉野の大峯に入ることで、每年三月熊野から入つて吉野に出るのを順の峯入、七月吉野から入つて熊野に出るのを逆の峯入といふ。

○蟬丸の歌　新古今集「世の中はとてもかくても同じ事宮も藁屋もはてしなければ」

〔宗因筆蹟（大阪 北田氏藏）〕
於豐前元日
書初の文字のむかひや關硯　西翁

○秀でたる　この句懐子に出づ。

○漢詩句　古文眞寶「蘭有秀兮菊有芳」

○價あらば　以下五句共に寛文四年刊の「佐夜中山集」中の句である。

○難波津に　この句は普通下五「梅の花」と傳へてゐるが、「佐夜中山」・「小町踊」等の古俳書には皆「花の春」となつてゐる。

秀でたる詞の花は是や蘭

これも寛文初年の作。これは漢詩句によつた作意で、且つらむを蘭にいひかけてゐる。やはり純粋の貞門式の句。

價あらば何かをしまの秋の景

松島の雄島の勝景をたゝへたので「何か惜まむ」と雄島と言ひかけたのが一句の眼目である。勿論貞門風の技巧にすぎないが、二、三、三、四、五、のはずんだやうなリズムが、一種の輕快味を與へる。

難波津に昨夜の雨や花の春

王仁の作と傳へる「なにはづにさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」によつた趣向で、昨夜の雨に花も開いた難波の春景色をよんだ句である、やはり「さくや」の掛詞が眼目となつて居る。

いかに見る人丸が目には櫻鯛

『古今集』の序文によつた作意で、一本には明石での作だといふ前書がついてゐる。昔の人丸は吉野山の櫻を雲かと見たが、今明石の人丸神社の人丸は櫻鯛を何と見るだらう、といふ句意で、櫻を轉じて明石名産の櫻鯛としたのが所謂俳諧手段である。

宇治橋の神や茶の花さくや姫

宇治は茶の名所であるから、木花咲耶姫の名にもぢつて、名高い宇治の橋姫を茶の花さくや姫だらうと興じた句。これなどはむしろ惡洒落に過ぎぬ作だらう。

花むしろ一見せばやと存じ候

句は小袖幕を廻らした花見の席などに、どんな美人が居るか覗いて見たいといふ意だが、それを謠曲でワキなどがよく「どこそこを一見せばやと存じ候」といふその句調をかりて仕立てたのである。謠曲の文句をかうして俳諧に取入れた例は、さきにあげた貞門の人々の作にも多かつたが、宗因は特に謠曲は俳諧の『源氏物語』だといつて、歌人の修養として源語が必

○古今集の序文 「春のあした吉野山の櫻は人丸が目には雲かとのみなむ覺えける」

○謠曲で云々 例へば高砂に「播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候」井筒に「在原寺とかや申し候程にたちより一見せばやと思ひ候」等とある類。

○宗因は特に云々 其角の雜談集に「謠は俳諧の源氏なりと」

讀の書である如く、俳諧師は謠曲の詞章を盛んに利用せねばならぬと說いて居る。もとより宗因に至つても、なほその利用といふのは形式的な技巧に止つて居たのではあるが、宗因が謠曲の韻律に富んだ調に着目して、之を俳諧で自由に驅使して居る事は、確にその俳風に淸新輕妙な味を齎すものであつた。彼は夙く萬治頃から

里人の渡り候か橋の霜

の如き吟を試みて居り、延寶以後の作になると、この種の謠曲調は益〻多くなつて來る。今その代表的なものを數句左にあげよう。

宿れとは御身いかなる一時雨

時鳥いかに鬼神もたしかに聞け

松に藤蛸木にのぼるけしきあり

秋やくるのう〳〵それなる一葉舟

第一は謠曲「江口」によつた作で、且つその中に「御身はさていかなる人にてましますぞ」

○里人の句　萬治三年刊「境海草」に出で「宇治にて」といふ詞書がある。謠曲景淸「いかにこのあたりに里人のわたり候か」。この「わたり」は居るの意であるのを「橋を渡る」と轉用したのである。句はこの謠曲調を用ひ、温庭筠の詩句「鷄聲茅店月、人跡板橋霜」の趣をあらはしてゐる。

○謠曲江口　攝津國江口の遊女の靈が西行法師と歌をよみかはして昔語をなす事を脚色してある。

○竹生島　その中の句に「緑樹影沈んで魚木に登るけしきあり」

といふ句があるのをとり用ひてゐる。一と人とかけてある。句意は謠曲『江口』の前半を讀めば自ら明かである。

第二は『田村』の「いかに鬼神もたしかにきけ」といふ文句だけをかりて、時鳥の一聲には鬼神も耳を傾けるであらうとの意をきかせたのである。此の句などは謠曲の句を最も巧みにとり入れた點に句の全生命があるのである。前句の如く謠曲の內容と何も交渉があるのではない。これは只唐突としてその一句をかり來つて「時鳥」につゞけ、しかも十分の働きを見せた所が面白いのである。內容的に貧弱ではないかと評すればそれまでの事であるが、それは此の種の句に對する正當な鑑賞の態度ではなからう。

第三は『竹生島』の名高い文句をもぢつたのであるが、これなどはその見立てが俗に墮して、いや味が多い。通俗的には喜ばれるかも知れないが、それは到底低い趣味たるを免れない。

第四はどれと特定した謠の文句ではないが、「のう〳〵それなる御僧」とか、「のう〳〵あれなる山伏」などといふ文句は謠にしば〳〵出て來る。それでその語を用ひて、水上に散り沈んだ桐の一葉に對して、もう秋がやつて來たかと問ひかけた作意である。「一葉落ちて天下の秋を知る」といふのは古い語であるが、それをかうした形で表現すると、そこに又古諺から受ける堅苦しい感じとは別種の、柔かな女性的の情趣を感ずる。それは「のう〳〵それなる」とい

ふ女らしい言葉の響と、それに聯想される※鬘物のシテの動作などがさうした感じを作るのである。そしてこの女性的の弱々しい言葉の感じは、桐の一葉に秋を知る寂しさとよく調和を保つてゐる。

となん一つ手紙のはしに雪の事

これは『徒然草』の故事によつて、今度は「この雪いかゞ見る」と一筆手紙のはしに書いてやつたと、逆に言ひかへたのである。「となん一つ」といつたやうな奇警な言ひ方が、窃かに得意とした點であらう。さうしてこんな奇警な言ひまはしばかりを主とした結果は、やがて談林末流の弊たる怪奇不可解な句を産むに至つたのである。宗因までは流石にさうした極端な句は少いが、この句などはこの怪奇調の最初の傾向を物語るものであらう。

※そよ〳〵昨日の風體けふの春

お靜にござれ夕陽いまだ殘んの雪

○鬘物　能で主人公が女であるものをいふ。

○徒然草の故事　兼好がある雪の面白く降つた朝、人の許へ手紙をやつたが、雪の事を何とも書かなかつたので、その人の返事に「この雪いかゞ見る」と一筆言つてよこさぬ程の無風流者のいふ事は聞かないと言つて來た話がある。

○そよ〳〵　「折ふしかはる俳風の心を」といふ詞書がある。この句、本には「そよやそよ昨日の風體一夜の春」ともあつて、この方が意味はとりやすい。

○惟中　後出四七頁參照。

○今宵の句　芋名月の句である。

車胤が窓今此の席に飛ばされたり

これ等の句は談林のかうした傾向が益々進んだ形である。第一の句は、それ〳〵、昨日までの俳諧の風體も、一夜あけると忽ち年が改まるやうに、今日はもはや古風になつてしまふではないかといふ意である。「そよ〳〵」といふ如き、形式的に變つた調子が、段々一般に喜ばれた事が分る。

第二句なども八、七、六といつた破格なリズムから生ずる意興が主で、句意は寧ろ晦澁に陷つてゐる。惟中の「俳諧破邪顯正返答」によると、此の句は松門亭某といふ人の許で百韻の俳諧があつた後、宗因に追加の發句を所望すると、そのまゝ言下に作つた句であるといふ。卽ち俳諧は一と通りすんだが、まあ〳〵皆さんゆつくりいらつしやい。今日はまだ殘つて居ますから—といふ挨拶の意で、それに眼前の雜事をいひかけたのであらう。しかし此の句だけ突然出されると、解釋に困るやうな句である。尤も宗因の此の句などは、まださまで奇矯といふ程でもなく、流石にふざけた態度は少しも見えない。ところが例へば、談林末流の二三子の作をあげてみると、

今宵の大將たり抑ゝたはらの芋太郎

虱のみいら布目見せけり七用干
小便や灘波はしる山西瓜

の如く、殆んど惡ふざけに近いものが頗る多い。

第三句の「車胤が窓」で螢をきかせたやうなのは、寧ろこのふざけ氣分といはねばなるまい。

且つ格調の方でも、故意に五、七、五の常格を破つて、

冥途にても鰒責にあはんこそ猶をかしき（六、一〇、六）
詩酒家々烟草俳を釣らん良夜の月（六、九、六）
四海豐けし鼓腹して樂しむ鰒の皮（七、九、五）
唐がらしの女調音高し擂子鉢（六、一一、五）

のやうなひどく字餘りのものさへ屢〻見られるのである。しまひには宗因自身すら、この極端な放縱さに呆れて、口をつぐんで晩年は俳諧に遠ざかつたと傳へられる位である。

白露や無分別なる置き所

宗因

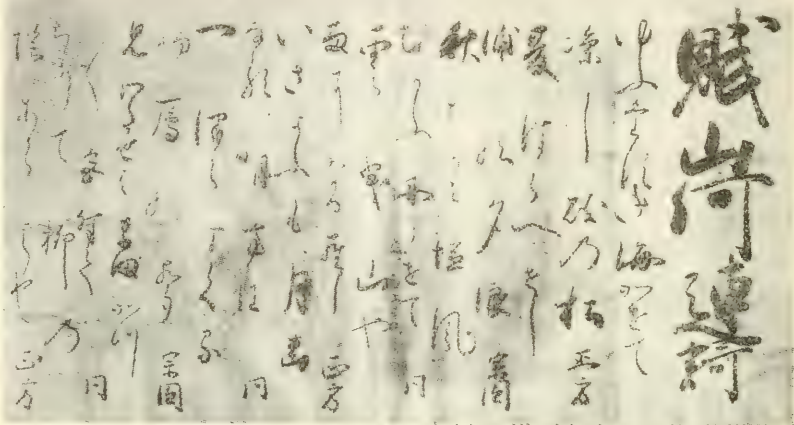
○冥途にても　以下の例句はすべて田代松意撰「軒端の獨活」に見え、江戸談林の人々の作である。

▽宗因筆・連歌懐紙
正保二年六月二日

賦山何連謌

ゆふだすき海かけて涼し礒の松　　正方
夏はらへせし浦の夕浪　　宗因
秋ちかみ鷗ゐむかふ舟うけて　　同
雲見山や雨になるらし　　正方
いさよふも月陰なる明方に　　同
一つらすぐる初雁の聲　　宗因
見わたせば早田かつ〳〵色付て　　同
ありて柳の陰あらば也　　正方

右、賦山何連歌、宗因・吉田正方と両吟した連歌を自ら懷紙に認め、同社に奉納したものの中の一卷で、こゝに掲げたのはその表八句で

筆連歌懷紙

汎く知られた句である。その人口に膾炙した所以は、「無分別」といふ主觀的な言葉に、一種の教訓的意味が寓されて居るからであらう。清淨な白露である。それがことさら汚穢な場所に置いて居る場合とか、或は又葉末のこぼれ易い所に結んで居る場合とも見られる。前者ならばその汚れに染むを難じ、後者ならばその危ふきを悲しむのである。いづれにせよ、白露の美しさ、脆さに對して道德的な警告を含んで居ると解される。さうした主觀的な要素は、もとよりこの句の文藝的價値を高くするものではない。たゞこの句に於て注意すべき事は、從來俳諧の本質的要素とされた滑稽に對する見方が、こゝでは大分變つて來て居る事である。

この句の制作年代はなほ確かに知る事が出來な

○有明の云々　[illegible]

○月出でて　この句今様姿（寛文十二年刊）に出で、「道心者庵」と詞[illegible]

○高瀬舟　舟底が[illegible]

○秋はたゞ　この句筑紫海（延寶[illegible]題してある。西行の「心なき身にも哀れは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」の味によつた作。なほこの句蘆栗等後年の書には上五「秋はこの」とある。

いが、思ふに宗因の晩年の作であらう。「無分別なる」と白露を擬人的に言つたのが、いは[illegible]滑稽なのではあるが、その滑稽はよほど眞面目なものになつて居る。のみならず、こゝには掛詞とか緣語とかいふ技巧的手法は全く見られない。談林末流の弊を知り、俳諧の文學的意義を今少し深めようとする心は、晩年の宗因の心中に若干動いて居た所ではなからうか。この句はたゞ名高いといふ事によつてあげたのであるが、更に

有明の油ぞ殘るほと、ぎす

月出でて一燈空し谷の庵

風に乘る川霧輕し高瀬舟

秋はたゞ法師姿の夕べかな

菜の花や一本咲きし松のもと

等になると、勿論そこにはまだ一味の滑稽氣分を脱し切れない所はあるが、すでに芭蕉の句風に頗る近似して來てゐる點が認められる。最後の句の如きは、全くの客觀句で、もしこれに何かの寓意がないとすれば、――蕪村にまで接近して居ると言つてよい。とに角宗因はかうした句境まですでに俳諧を進めて居たので、彼がもし次の時代まで生き得べき人であつたら、芭蕉の成した事を彼もまた成したかも知れない。

井原西鶴

「見聞談叢」によれば俗稱を平山藤五と言つたといふ。大阪の人、十五六歳の頃から宗因に師事し初め鶴永と號す。談林新風の急先鋒として最も目ざましい活動をし、寛文十三年「生玉萬句」を出して氣を吐いたが、當時すでに阿蘭陀流と呼ばれてゐた。延寶三年號を西鶴と改めて益々活躍したが、師宗因の歿後は專ら小說作家として立つた。元祿六年歿、年五十二。「生玉萬句」を始め『西鶴大句數』『物種集』『西鶴五百韻』『大矢數』等の撰著がある。

心こゝになきかなかぬか時鳥

西鶴像

寛文六年刊『遠近集』に出てゐて、西鶴の句の文献に見える最初のものの一つである。句意は郭公の聲を一向耳にせぬが、それは郭公は鳴いても心こゝにあらざるために所謂聞けども聞えなかつたのか、それとも實際鳴かなかつたのであらうかと疑つたのである。

○心こゝになきか　大學「心不レ在レ焉、視而不レ見、聽而不レ聞」

▽西鶴像

右
長持に春ぞくれ行更衣　　鶴永

（右、「大坂俳諧師」「延寶元年刊」所載。同書は西鶴の撰かと思はれる。まだ西鶴が鶴永と號した若い時の像である。）

▽西鶴筆自畫賛（兵庫 林氏藏）　　西鶴

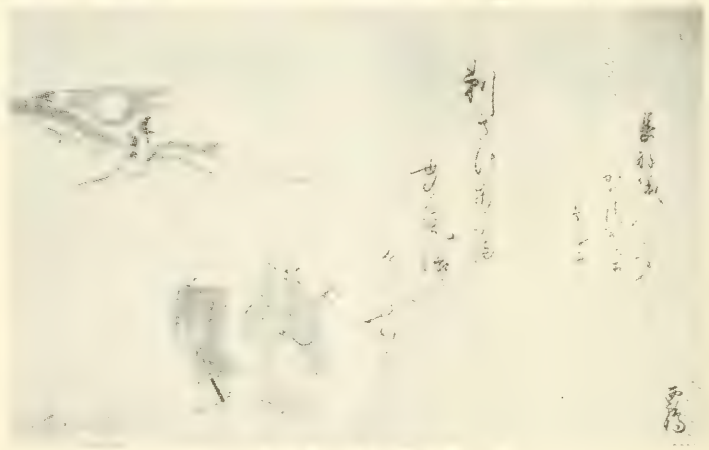
長羽織人のすがたもかはる所ぞ
おかし　是をおもふに
剃さげあたま世の風俗やけふの月

○春ぞ暮れ行く　後世の諸書に「春かくれ行く」と傳へて居るのは誤である。この句の初見たる寛文十一年刊「落花集」——但しこれは上五「長持へ」とある。——や延寶元年刊「大坂誹歌仙」等には皆「春ぞくれ」とあり、特に西鶴自身の眞蹟にさうあるのだから、「隠れ」が誤傳なる事は明である。

「心こゝになきかなかぬか」と言切つた格調は、何となく後年の奔放さを偲ばせぬでもないが、それは寧ろ氣のせゐであらう。「大學」の文句取だけの句で、まだ貞門風な著想の範圍を出ない。たゞ「こゝろこゝ」、「なきかなかぬか」と、この頭韻が、自然に調子を輕くしてゐるのは面白い。

長持に春ぞ暮れ行く更衣

もう四月になつて愈と初袷を着る頃になつた。花見に着て行つた美しい小袖なども長持にしまはれてしまつた。それを長持に春が暮れて行くと感じたのである。

この句もまだ談林の新風が盛んにならない以前の作であるが、構想にも表現にも、もはや著しい變化のあとが見られる。緣語や言掛の技巧か

西鶴筆自畫賛

ら全く離れて、後に談林の特色となつた一種の見立に近い着想が句の要素となつて居る。流石に談林新風の第一線に立つて、目ざましい活躍をした彼の進境を思はしめる。

日高には能登の國迄やさし鯖賣

西鶴は連句の方ではすぐれた手腕を持つて居たのであるが、發句にはどうも出色のものがない。この句などはすでに延寶三年、即ち談林勃興時代の作でありながら、なほ謠曲の文句取はとにかくとして、さしと刺鯖との言掛などに骨を折つてゐる。句意は刺鯖賣はまだ日の高いうちに能登の國まで指すであらうかといふだけのことである。謠曲の文句をかりて、突如刺鯖賣を點じ出す所には成程多少の才が見られないでもないが、趣向は要するに古風の臭味を多分に持つてゐるとしかいへない。

『糸屑集』の中には此の外なほ數句彼の句が出てゐるが、どれも此の程度の作ばかりで、彼が發句の方面にあまり得意でなかつた事が、これだけでもよく窺ひ知られる。思ふに彼が後年俳諧から小說へと移つて行つたのは、彼の藝術的素質に基く創作欲の自らなる展開であつた。元來西鶴の藝術家としての特質は、その鋭く透徹した觀察と自由奔放な描寫とにあつた。

○日高には　延寶三年刊『糸屑集』中の句。

○日高には能登の國　[illegible]

○さし鯖　鯖を背開きにして鹽に漬け二尾を一刺としたもので、七月十五日生身魂（イキミタマ）（生きてゐる父母の[illegible]）に用ひる。能登國はこの刺鯖の名產地である。

○大矢數　一定の時間に一人でいかに多くの連句を制作し得るか、その記錄を爭ふ事が行はれる。それを三十三間堂の通し矢に倣つて俳諧大矢數と稱したが、西鶴はまづこれを[illegible]し、延寶五年には千六百句、同八年には四千句を獨吟したが、遂に二萬句といふ何人も追隨する事の出來ない記錄を作つたのである。

○平樽　角樽とちがつて手のない樽である。

○手なく生る丶　梵網經に、酒を人に勸めた者は五百生の間手のない者に生れるとある。

人間生活の諸相を強く確實に把握して、これを最も端的に如實に描き出さうとするのである。彼が俳諧に於て、發句にはあまり長じて居なかつたのに反し、連句には縱橫の才を發揮して居るのもその故で、前句の要點を機敏にかつ確實に捉へて、次から次へと自由に急速に句境を進展させて行くには、最もふさはしい素質であつた。だから彼は速吟達吟にかけては絕倫の才を有し、所謂大矢數の獨吟を度々興行して、遂には貞享元年住吉神社の神前で、一晝夜二萬三千五百句獨吟といふ破天荒な試みにも成功したのであつた。爾來彼は自ら二萬堂と稱した位であるが、この非凡の天才がやがて小說家として彼を成功せしめた所以であつた。

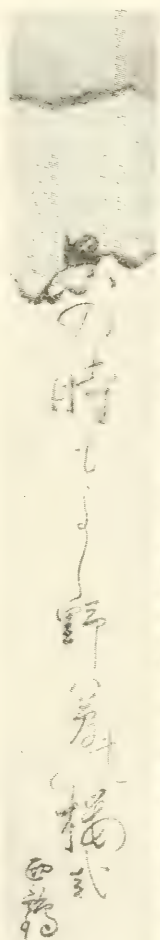
平樽や手なく生る丶花見酒

梵網經から思ひついた趣向であるが、それを花見酒の句にしたのは、いかにも元祿の時代らしい味はひがあつて面白い。

鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

僻遠の地では鯛の生きたのは味はへないであらう。又柳櫻をこきまぜた春の錦も見れない

であらう。しかし今日の名月ばかりは、どんな山家の奥でも賞する事が出來るといふ意で、よほど理智的な分子を多くもつた句である。それだけ通俗的に解し易く名高い句になつてゐる。

西鶴筆跡

其角は此の句に對して

　　鯛は花は江戸に生れて今日の月

と大いに江戸つ子の得意さを示し、また大江丸にも

　　月は雪はおしなべて櫻ながめけり

の吟がある。

　　しゝくし若子の寢覺の時雨哉

子供を冬の夜の寢覺に起して、「しゝくし」などといひながら小便させるのを、時雨と興じたのである。此の句などは大分遊戯氣分が濃厚で、此の種の寧ろ放縱な作は、西鶴などの大い

に得意とする所であつたらう。その甚しいものは例へば、

※なぐれなん紅葉と知らば黒木賣
※みつがしら鶉なくなりくわくくわいく
花にきてや※科をばいちやが折りまする

といつたやうな獨りよがりに陷つたやうな句も大分多い。

枯野哉つばなの時の女櫛

枯野を歩いてゐる足許にふと見つかつた女櫛、それは多分春茅花摘みに來て落したものだらう。草が枯れてしまつたので、今人目にふれたのだなと思つた心もちつ「枯野哉」と上五文字に置いたので、櫛があらはに見える程の枯野となつた事を痛切に感じて居る情が見える。たゞし枯野そのものの情趣よりは、落ちた女櫛に興味を感じて居るのは流石に西鶴らしいが、しかもどこか一脈のわびしさが漂つて居る。この句は西鶴の晩年の作で、彼も五十近い頃からは、だんく\かうした句境の味をも分つて來てゐるやうである。この外晩年の作になる

※山茶花を旅人に見する伏見哉

○なぐれなん　こゝでは零落するといふ程の意。商賣物の黑木が美しく紅葉するまでと氣づいたら、賣るに堪へずしてなぐれてしまふだらうといふ意か。
○みつがしら　京の蕣宿、江戸の松意と三人で催した連句の發句だから、それを鶉合に見立てて言つた。「くわくわ」は鶉の鳴聲。
○科をばいちやが　いちやは乳母などの通名で、「科をいちやが負ふ」とは養育して居る子供のやり損ひを自分の罪に着ることから、古く一種の諺のやうに用ひられた。それを利用した句。
○晩年の作　元祿四年刊の「渡し舟」に出づ。
○山茶花を　以下六句元祿四年刊の「還の曾」に出づ。

世に住まば聞けと師走の碪哉

玉笹や不断時雨るゝ元箱根

里人は突臼かやす花野かな

蟬聞いて夫婦いさかひ恥づる哉

霞みつゝ、生駒見ねども夕べ哉

といつたやうな句には、從來のあの絢爛奔放な談林の句風とは、頗る異なつた趣が感ぜられる。思ふに西鶴がもう少し長生きして、且つ更に句作の方面に歸つて來たなら、一種の濃い俳諧を作り出したのではなからうか。絶えず局面を新しく開いて行つた彼としては、きつとさうであつたであらうと思はれるのである。しかし不幸にして我等はその晩年の動きの、僅かなあらはれしか知る事が出來ないで終つた。

浮世の月見過しにけり末二年

彼の辭世の句で、「人間五十年のきはまり、それさへ我にはあまりたるにましてや」といふ前書がある。彼は元祿六年八月十日、五十二歳で歿したのである。

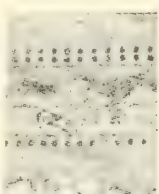
○霞みつゝ　この句元禄五年刊の「姿哉」に出づ。

○浮世の月　この句「西鶴置土産」に出づ。

菅野谷高政

自ら惣本寺半傳連社と稱し、京都に於ける淡林の雄であつた。延寶七年『※俳諧中庸姿』を出して俳壇に問題を起したが、晩年は全く振はず、その歿年・享年等も不明である。貞享年間の作までは殘つて居るから、その後歿したものであらう。

目にあやし麥藁一把飛ぶ螢

句は『平家物語』祇園女御の條に、麥藁の蓑を着た承仕法師の名高い話がある所から思ひついた作意で、螢の光を麥藁に灯火が映つて光つた故事に思ひよせて、麥藁一把か飛ぶやうだと見立てたのである。『俳諧中庸姿』を駁した中島隨流の『俳諧破邪顯正』には

高政筆蹟

目にあやし麥藁の光り飛ぶ螢としたらば、かの火ともしの古事にもあひ、又一句も聞た侍るべきを、麥藁を飛ばせねば嬉しうないと思ひ、無理に麥藁を飛ばせたり。是當風邪俳の

○俳諧中庸姿　ハイカイツネノスガタ。この書は高政が自分の門弟を始めその一派の人々の作を集めて新風の範たらせようとしたのである。爲に俳壇に非常なセンセーションを起し、この書を中心として盛んに論難攻撃が行はれた。

○承仕法師　仕事の雜役を勤める卑しい法師。

『高政筆蹟　大阪　柴田氏藏』
霜月に雪の降こそをかしけれ　高政

作意なり。それ故一向何とも埒あかず、おらんだの島物※也云々
と批難してゐる。この評はたしかに談林の一面の弊を穿つてゐるものであらう。

おどろくや花は嵐のおと御前

嵐の音と乙御前といひかけてある。美しい花の粧ひも、嵐の音には忽ち散らされてしまふのを、乙御前の醜い容貌にたとへたのであらう。

※目にあやし麦藁一把飛ぶ螢
次郎ま次郎吉夏草の陰
白い雨軒のかど屋に玉なして
風に音ある犬の小便
とらはれて石淋なむる古狐
七日鹽斷つしるしと思はん
隙入りて大臣何かと幕の月
膝骨いたくきざはしの露

○島物　出所の怪しいにせ物などをいふ。

○乙御前　乙御前は三平二満の所謂お多福のことである。

○目にあやし　以下「中庸姿」の巻頭にある高政の独吟百韻の表八句である。異様な風調の一斑が知られよう。

○相撲場は　伏見の任口上人との兩吟百韻の發句である。
○みむろ　三室。宇治の附近にあつて、紅葉の名所として知られてゐる。
○任口　ニンコウ。山城伏見西岸寺の三世で、寶譽上人といふ。里村昌程に連歌を、松江維舟に俳諧を學ぶ。後蕉門の徒と往來す。貞享二年歿。

岡西惟中

一時軒と號す。もと因幡の人、後ち岡山に出て醫を業とし、延寶頃大阪に出た。宗因には岡山在住時代から師事して居た。彼は和歌連歌の造詣も深く、談林派中論客として最も知られて居た。正德元年歿、年七十三。『澁團返答』『破邪顯正返答』『俳諧蒙求』『俳諧或問』等論難の書を多く出し、又撰集にも『俳諧三部抄』『近來俳諧風體抄』等がある。

相撲場は※みむろの岸の夕べ哉

この句意は※任口の脇句

二重まはりの紅葉折りかく

で說明されて居る觀がある。相撲取の廻しを紅葉と見立てたので、嵐雪の

角力とりならぶや秋の唐錦

などもこゝから胚胎したのかも知れぬ。しかし惟中の句はその謎風な見立てに興味の中心をおいてゐるので、嵐雪が唐錦の美しさを賞した心とは大分の距たりが認められる。

○破邪顯正　延寶七年刊。
○破邪顯正返答　同八年刊。
○猿とりもち　延寶八年刊。
○惟中筆[illegible]　高野氏藏
[illegible]
○和漢朗詠集の句　春ヲ留ムルニ關城ノ固メヲ用ヒズ、花ハ風ニ隨ヒテ落チ、鳥ハ雲ニ入ル。句はこの關城を惟中の雅名管城公にとりなしたのである。

短冊の旗管城の固前は花

隨流の『破邪顯正』に對して、惟中は『破邪顯正返答』を出して之に應酬した。而してその卷末に獨吟百韻一卷を添へて、暗にこれこそ談林の模範的創作だと誇示してゐる。この句はその發句であるが、しかも高政の『中庸姿』にも劣らぬ異風異體なもので、隨流は更に『猿とりもち』を出してこの惟中の百韻を攻撃して居る。

惟中筆蹟

句は『和漢朗詠集』の句に基き、惟中を管城公といふのに因んで管城の固めといひ、短冊を旗に見立て、かうした備へで、談林の俳壇を守らうといふ意である。「前は花」といつたのは、『朗詠集』の句意により、春を留め花の大手に關をかまへて守護しようといふ意をかけたのである。その脇句は

戈を揮つて留めけり春

と、同じく『朗詠集』の句によつたのであるが、以下頗る衒學的な奇異な調を弄して、談林の極端な句風をよく表はしてゐる。

惟中の本領は元來創作よりも寧ろその論評にあつた。彼の俳諧論の骨子をなすものは、「俳諧は寓言なり」といふ主張で、これはもと師宗因の說に基くものであつた。宗因は「莊子像讃」の中にも言つてゐる通り、俳諧は連歌の寓言で、『莊子』の文章にならふべきものだと解した。談林の俳諧が言葉の形式的技巧から一歩進んで、全體的な一種の見立とも言ふべき譬喩的表現を主とするに至つたのは、全くこの主張に基くもので、俳諧の滑稽たる意義が一歩内容的に深められたわけである。從來談林の特色として說く所、多くは謠曲調とかリズムの自由さ等に止まつてゐるが、實はこの見立の句こそ最も特色とすべき點であつた。而して惟中はこの寓言說を最も理論的に詳しく說いたのである。

※青海苔や浪の渦巻く擂子鉢　曉雲
五月雨や龍燈あがる番太郎　桃青
鬼灯や入日をひたす水の物　來※雪

○莊子像讃　俳文篇六八六頁參照。

○青海苔や　以下三句見立の例として延寶六年刊『江戸新道』から例をとる。第一は擂鉢で擂られる青海苔を、浪の渦巻くさまに喩へたのである。第二は五月雨の闇の中に、夜廻の番太がさし上げる提燈を、龍燈に見立てたもの。(これは芭蕉の談林時代の句。)第三は鉢の水に浸されたあかい鬼灯の形容。

○來雪　山口素堂の前號。

○一夜松　道眞が筑紫で薨去の後、今の北野神社附近に一夜に數千本の松を生じたといふ、その松。

田代松意

江戸談林の主將で、延寶三年春師翁宗因を迎へて、同志の人々と共に興行したのが名高い『談林十百韻』である。歿年、享年不詳。『談林十百韻』の外『虎溪橋』『幕づくし』『軒端の獨活』『功用群鑑』等の撰著がある。

恵み雨深し獨活の大木一夜松

雨後に獨活が急に生育したのを、北野の一夜松の出現に見立てたので、やはり談林らしい特色を見せてゐる。「獨活の大木」は諺である。

鼻息の嵐も白し今朝の冬

「鼻息の嵐」といふ言ひ方は、勿論談林風の誇張した見立ではあるが、この句の場合では譬喩として相當な藝術的效果をあげて居る。前にも述べた通り、談林では譬喩的見立ともいふべき

趣向が非常に多く、談林の句が貞門の句に比して清新な感があるのは、專らこの點によるのである。但しそれもあまり駄洒落に近い見立を弄して、例へば

霜解や草履と下駄の飛鳥川

虱のみいら布目見せけり土用干

等の如きに至つては、全く謎を解くやうな句で、結局甚しい邪道に陷つて居る。前者は霜が解けて、一方は乾き一方はまだしめつてゐるので、草履と下駄を片々に穿くといふので、それを『古今集』の歌にもぢつたのである。後者は土用干に見出した虱の死體を木乃伊だと洒落たふざけにすぎない。談林末流の弊はかうして益々險奇晦澁を喜ぶやうになつたが、松意の前の句の如きは、それが譬喩として成功した例と言つてよからう。

松意筆蹟

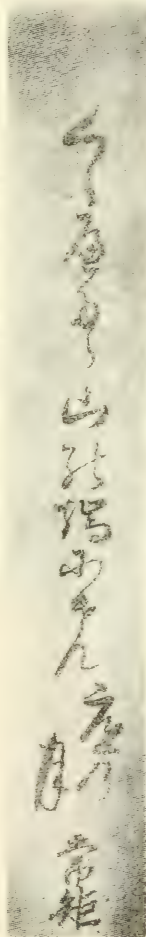
▽松意筆蹟（松宇文庫藏）
　發道法師ぃ繪に
　待物かは人間嵐の花薄　松意

○古今集の歌　「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨となる」

田中常矩

京都の人、もと貞門から出、宗因の直系ではないが、やはり一種の新風を京都に唱へた。蕉門の尙白、許六なども初めは常矩に學んだ。天和二年歿、享年不詳。その撰集としては「蛇之介」が最も知られてゐる。

蛇之介が恨みの鐘や花の暮

常矩の獨吟四百韻卷頭の句である。句意はまだ花見酒も飮み飽かないのに早日も暮るゝこととか、殘り惜しいと晩鐘を恨んだ作である。許六の「歴代滑稽傳」によると、此の句が當時評判になつて、世に蛇之介常矩と異名をとつた程であるといふ。此の句の脇は

七まとひまとふ藤の松陰

常矩筆蹟

○蛇之介　ジャノスケ。俗にいふ底拔上戸の異名。

一常矩筆蹟（大阪　[illegible]田氏藏）

くらべたら山の端にけん庭の月　常矩

といふのであるが、蛇之介といふやうな流行の言葉をもつて來て、しかも道成寺の連想から恨みの鐘といつた趣向などは、確かに新奇を競ふ當時の俳人に歡迎されたにちがひなからう。

馬下駄やひけどもあがらず厚氷

同じく獨吟四百韻中の發句。句意は厚氷に踏込んだ駒下駄があがらないといふだけの事であるが、それを謠曲の物々しい文句をかりて言ひ現はした所が面白いのである。しやれといへばしやれに過ぎないが、日常茶飯の平凡事を、かうした手段で一句に仕立てあげた機智は感嘆に値する。勿論それが藝術的に深い根柢をもつたものでないにしても、とにかくかうした輕妙な機智が我が文藝の大きな一要素となつて居る事は認めねばならないであらう。

○馬下駄　今日いふ駒下駄の事。今様姿「馬下駄の跡もや雪の道しるべ　泉郎子一三」。俳諧呵文集「馬下駄も泥をはねけり雪の道　種竈」等古俳諧にはよく用ひられてゐる。
○ひけどもあがらず　謠曲箙平「深田に馬をかけ落し、ひけどもあがらず打てども行かぬ」

伊藤信德

京都の人、元來貞門の高瀬梅盛門であるが、家事上の事から屢々江戸に往來し、その間に談林の徒と近づいて全く師風を變じた。又芭蕉や素堂と共に『江戸三吟』を催して蕉門の人々とも交つた。延寶末年頃から動き出した俳壇革新運動の先覺者といふべきである。元祿十一年歿、年六十六。

富士に添うて三月七日八日かな

東海道の春の旅である。三島、沼津、原、吉原と、富士に添うて歩く日も七日、八日と二日つゞく。いかにも長閑な心もちである。七日八日といつたのは、四日五日でも九日十日でも構はぬわけであるが、「なぬかやうか」といふ發音のつゞきが、最もゆるやかでのんびりした感じを與へるからであらう。出鱈目にやつたわけではない。しかもこの言葉の選擇は、長閑な春の旅の情趣を十分に現はさうとする爲で、貞門談林の俳諧にいつも見られた所謂言葉の技巧の爲ではない。

○富士に添うて　この句一樓賦（貞享二年刊）に出で「旅行」と題す。又都曲集（元祿三年刊）にも收む。

雨の日や門提げて行く杜若

この句はかつて芭蕉が江戸から書を寄せて、信德に上都の風體を問うた時、信德は和及。我黑等と日々相會して討論した結果、遂にこの吟を得て答へたものであるといふ。さうした逸話の眞僞はとにかくとして、句は誠に素直に囑目のまゝを敍してゐる。貞享三年の作とすれば、芭蕉はすでに古池の吟に心眼を開いたといはれる頃であるから、あへて信德に都の俳風を問ふまでもなかつたかも知れぬが、この句は俳諧がもはや詞花言葉の弄びでなく、自然を素直に見る所から生るべきものだといふ第一義的態度を表明したものとも思はれる。たゞ惜しい哉、信德はなほ時代がやゝ早く生れすぎた爲か、それともその天分が足りなかつた爲か、なほこれらの作を最上とする程度で終つた。

信德筆蹟

○雨の日や　この句貞享三年刊、清風撰「一つ橋」に見えるのが最も早いから、その頃の吟と推定される。

○和及　高村氏、京都の人。常長門。元祿五年歿、年四十四。

○我黑　中尾氏、京都の人。重賴門。寶永七年歿、年七十一。

▽信德筆蹟（神戸　宇野氏藏）

六月や水ゆく底の石青き　信德

○古池の吟　「古池や蛙とび込む水の音」

○名月や　其角の雜談集には「名月よ」とあるが、今、元祿六年刊「浪花置火燵」に「名月や」とあるのに從つた。

名月や今宵生るゝ子もあらん

其角は『雜談集』にこの句を錄して、

いざよひの空や人の世の中といへる觀念か、是は今年就中腸先ッ斷ッと白氏の年を悲しみける心にもかなひて、信德が老の誠なるべし。

と大に感心して居る。もはや光も淡くなつた下弦の月にも喩ふべき老年の信德が、中秋名月の光に對して、最も春秋に富むべき生れ子を思つたのである。今宵生れる子こそは、まさにこの名月の虧ける所もないやうな完全な若さをもつてゐる。それに比べて自分の老年が深く悲しまれると共に、やがて又その生れた子も自分と同じく老を歎すべき時が至るであらうといふ情を含んでゐる。そこが其角の所謂觀念である。かう說いてしまふと甚だ理窟つぽいやうであるが、この句はさまで深く說明的に言つてないので、ある點まで作者の心もちにも同感出來る。

〇今宮草　來山の門人古道・長七・梅七の三子が師の遺吟をもちよつて編したもの。安永七年刊。

〇續今宮草　什山編。前書の遺漏を拾つたもの。天明三年刊。

〇歳旦帳　昔俳諧の點者が歳旦に三ツ物と稱して歳旦歳暮の吟を摺つて出したもの。

「來山像」（「續今宮草」所載）

〇詞書　「おかなうはのかむいはどめ、常盤を名にしたる松も雪のためにはむごい目にあふことあり。ただいつをいつともせず、果てしなの世こそをかしけれ」

小西來山

大阪の人、七歳にして前川由平の門に入り、初め満平と號した。十八歳で宗因から俳諧の宗匠たる事を許された程であつた。十萬堂・湛々翁等の別號がある。晩年今宮に隱棲す。その句は『今宮草』※『續今宮草』※に集錄されてある。享保元年歿、年六十三。

元日やされば野川の水の音

來山像

貞享五年の作でその年の歳旦帳に見える。句意は、元日といふと野川の水の音さへ平常とちがつて改つた感じがするといふ風に普通解されてゐる。しかし右の歳旦帳にはこの句に頭註の如き詞書がついてゐる。隨つて句は「元日だといつて人間は皆改つた形である。だが野川の水は今日も昨日とちつとも變つたさまもなく流れてゐる。さても

○青し青し　この句續今宮草に出づ。

○三味線も　この句今宮草に出づ。

いつをいつともせぬこの水の音の面白いことよ」と解すべきであらう。無始無終な自然の姿を感じた心である。「されば」といふ語に作者の主觀をあらはして居り、またまづ「元日や」と徐ろに置いて、突然「されば野川の水の音」と言ひ下した所に表現の巧みさがある。即ち、さればの一語に句の中心が置かれてゐるが、しかしそこにまた一種のわざとらしさも感ぜられる。まだ句境の醇なるものではない。

青し青し若菜は青し雪の原

青しといふ言葉を三度も使つたのが作者の得意であらう。しかもそれが格別わざとらしさを感ぜさせないのは、幼いけれども純な感情に滿たされてゐるからである。雪中に一點の春色を見出した喜びの情が見える。

三味線も小歌ものらず梅の花

三味線の調子や小唄の節まはしでは、梅の花と何だか調和しないといふのである。梅の高い

▽來山筆蹟（大阪 水落氏藏）

播磨しなの八所がえして行
仕官のともへつかはす
散花や雪の稽古を馬のうえ
あられぬかたにさまよひて
ほとゝぎすぬれて帷子ひとつ也
されは我やどは
蔦窪みな秋風の道具也
神明奉納卷軸
白黑の名の無ひさきも雪ぞ降

〇しらゝ・落窪・京太郎　共に古い物語の名。芭蕉の句は梅の上品な趣をこれらの古物語に取合はせたのである。一五二頁參照。

〇ほのかなる　この句續今宮草に出づ。

〇羅生門　又羅城門。平安京の外廓正南にあつた門。今東寺の西にその遺蹟を殘して居る。

氣品を側面から說明したやうな句である。遊戲的氣分ではないが、かうした着想に自ら興じた心もちから十分脫してゐない。そこに生ぬるさが介在する。梅花の崇高美に對する端的の表現ではない。芭蕉の

梅が香やしらゝ落窪京太郎

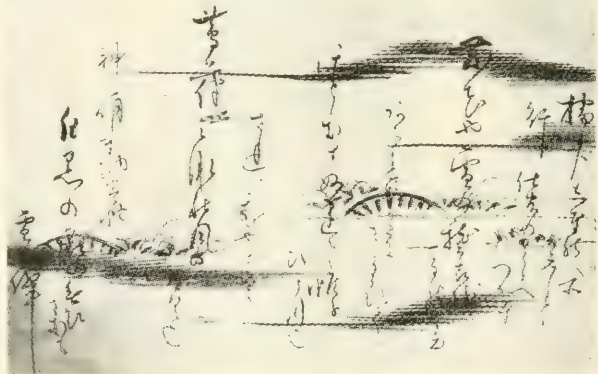
も似たやうな句境であるが、これは說明に墮してゐない點がまだ多とすべきであらう。

ほのかなる鶯聞きつ羅生門

早春の情景である。羅生門といへば郊外に近い洛の片ほとりが想はれる。そこでほのかに聞いた鶯の聲、春めいた心が淡く和ちかに動くのを感ずる。

この句はもう言語の技巧を全く脫して、自然の眞趣を捉へて居る。

來山筆蹟

雨方に髭があるなり猫の戀

この句の次に來山は

ちよつとは雌雄見分けがたし、惠比須どのと大黒殿とは夫婦と思ひつめし尼あり。言うて聞かせても合點せず、雨方に髭のある序にふと思ひ出して爰に書く。

と、かう書きつけてゐる。彼の洒落な滑稽味を見るべき句である。

むしつてはむしつては捨つ春の草

久しぶりで野外に出て、春の草を珍らしさうに挘つては捨て挘つては捨てする。それは大人の心ではない。初々しい童心である。むしつては〳〵と同じ言葉を重ねたのも子供らしい心もちをよくあらはしてゐる。

白魚やさながら動く水の色

○雨方に　この句今宮草に出づ。

○むしつては　この句「今宮草」に「僅か三里に足らぬ所ながら旅の心地せられて何もかも珍らし」と詞書がある。

○水の色　元禄五年刊「如月集」にはこの下五が「水の魂」とある。今「今宮草」に従つた。

白魚のすき通つた身體の色、それは水自體がそのまゝ動いて居るやうであるといふのである。誠に白魚の姿に見入つてその神を得たとも言はうか。纖細な感覺が働いて居るが、それは官能的な感じではない。もつと深く自然の本體に觸れてゐる。一本に下五が「水の魂」とあるが、その方が更に神秘的な感じが加はつて宜いと思ふ。來山は一面豪放磊落な性格があつたと共に、かうした詩人らしい鋭い細い感じの持ち主でもあつた。

春雨や降るともしらず牛の目に

雨戸越す秋の姿や灯の狂ひ

秋立つやはじかみ漬も澄み切つて

これ程の三味線暑し膝の上

これらの句の上には、いづれも感覺的な匂ひが濃く漂つてゐる。大きなうつろな牛の目に映る春雨、雨戸を洩るゝ灯の色の狂ひ、薑漬の澄み切つた冷やかな色、僅かの重さが暑く感ぜ

○春雨や　この句「夢の名残」寶永二年刊」に出づ。

○雨戸越す　この句寶永元年の秋の作で、追悼集「木の葉駒」に出づ。

○秋立つや　この句「今宮草」に出づ。

○これ程の　この句「[illegible]」元禄十二年刊」に出づ。「くさかの集」には「涼み見にて」と前書がある。

○見かへれば　この句平包・元禄九年刊に出づ。

▽來山墓（大阪今宮一心寺境内にある。）

らる、膝の上、そこには皆詩人のみが、感じ得る鋭さと細かさとがある。

※見かへれば寒し日暮の山櫻

私はこの句をよむ度に、二十年前の旅のある情景を思ひ起す。それはあまり人通りもない淋しい街道筋であつた。朝からもう十里近くも歩いた私は全く疲れきつて居た。ふと路傍に見出した茶店の床几に、案内も乞はずに腰を掛けた。まだ目的の地までは一里あまりある。數杯の澁茶を啜つて、白銅一枚を汚れた盆の上に投出したまゝ、又私は歩き出した。一町程も來ただらうか。道が一寸小高くなつた所で、私は何となく立止つてふと後ろを振返つた。するとあの茶店の軒近く滿開の山櫻が——。さつきは疲れたあまり眼にも

來山墓

入らなかつたのだらうか。折から夕日が赤く「御休み所」と書いた茶店の障子のあたりを染めて、櫻の花がはら〳〵と散つた。夕べの風は春ながらうすら寒い。四邊はいつかほの暗くなつて來たが、私はいつまでもそこを立去りかねて居た。

來山の句から讀者が想ひやる情景は區々であらう。しかし山櫻の白々とした花の色に、春の夕日がうつすりとさしてゐるのをふり返つた旅人の、淋しい薄ら寒い思ひは誰の胸にも感ぜられるであらう。

春の夢氣の違はぬが恨めしい

口語調が却つて哀切堪へがたい眞情をそのまゝに吐露してゐる。一體口語をそのまゝ俳諧に用ひる事は談林派ではさして珍らしい事ではないが、それを卑俗に陥らないで、最も有效に用ひてゐるのは、蓋し來山と鬼貫とであらう。來山には此の外、

花咲いて死にともないが病哉　（そこの花）

飯蛸のあはれやあれで果てるげな　（今宮草）

蚊が入つて蚊屋振うたりや夜が明けた　（續今宮草）

○春の夢　この句續今宮草に出で、「淨春童子早春世を去りしに」といふ詞書がある通り、正德二年の春、來山が五十九歳の時、愛子淨春童子に先だたれた時の吟である。

○早乙女や　この句破曉集(元祿三年刊)・花見車(同年刊)を始め、句兄弟・生駒堂・わたまし抄・[illegible]等の諸集に出づ。但し句兄弟には下五「聲ばかり」、わたまし抄には上五「五月女の」とある。
○早乙女　サヲトメ。田を植ゑる少女である。
○涼しさに　この句は元祿十五年刊「花見車」には盤水の吟として出て居り、之を來山の吟と傳へたものは後世の書である。隨つて來山の作と見るのは不穩當である。
○四ツ橋　大阪心齋橋の西方、橫堀と長堀と十文字に交叉した所に架した四つの橋で、西を吉野屋橋、北を上繋橋、東を炭屋橋、南を下繋橋と言ふ。

等のやうな作がある。最後の句の如きは少々ふざけてゐるが、前の二句は口語が立派にはたらいてゐる。

早乙女やよごれぬ物は歌ばかり

名高い句であるが、實は所謂月並の調に過ぎない。手も足も泥に汚れてゐるが、その美しい歌聲ばかりは汚れてゐないといふので、要するに俗人の喜びさうな小理窟である。

涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり

ぶらりと夕涼みに出かけた。橋の上が涼しいので一つ渡つては又一つと渡つてゐる中に、いつの間にか四つ橋を四つ共渡つてしまつたといふのだ。飄然とした輕い心もちが見える。但しこの句は果して來山の句か疑はしく、作者を離れて句だけを味はふならとにかく、來山の句集中からはやはり除くべきである。(頭註參照)

行水も日まぜになりぬ蟲の聲

季節的の哀感がしみじみと湧く。夕べはもう肌が薄ら寒い秋のはじめ、行水も一日おき二日おきにしかしなくなつた。庭の蟲の聲は日毎に滋くなつて行く。芭蕉の所謂さびの境地は來山の句の中にも、見出せるのである。

我が寢たを首上げて見る寒さ哉

冬の夜は氷つたやうに更けて行く。鼠の走る音にふと目がさめた。もう何時だらう。枕許の時計を見ようと首を起すと、布團の中に寒さうにうづくまつた自分の姿が、部屋の眞中に横つて居るのが目につく。さういつた寒夜の情趣が巧みに捉へられて居る。

※お奉行の名さへ覺えず年暮れぬ

○行水も　この句續今宮草に出づ。

○我が寢たを　この句續今宮草に出づ。

○お奉行の　この句今宮草に出で、「大坂も大坂、まん中に住んで」といふ詞書がある。

○春風や　以下すべて來山の句。出典は一書だけにとゞむ。

來山の洒脫な生活態度を物語つてゐる。しかしわざ〳〵から吹聽する所に、まだ幾分わざとらしさが殘つてゐるのかも知れぬ。この句の作句年代は、はつきり分らぬが、大阪の市中に住んでといふのだから、今宮隱棲前の句にちがひない。彼はこの句のために、其の筋のお叱りをさへ蒙つたと傳へられてゐる。

春風や堤ごしなる牛の聲（生駒堂）
錢賣の花にまじるも都かな（續今宮草）
野の花や菜種が果は山の際（難波置火燵）
春草の橋をかぎつて酒屋なし（當野草）
短夜を二階へたしに上りけり（續今宮草）
水踏んで草で足拭く夏野哉（木の葉駒）
若楓一降り降つて日が照つて（續今宮草）
身は老いぬ指かまれたるきりぎりす（如月集）

池西言水

名則好、紫藤軒。風下堂。洛下童等と號す。奈良の人、幼時は江戸で育つた。松江重頼に學んだが、夙に談林の新風に移つて俳風革新に功があつた。「江戸新道」「江戸蛇の鮓」「江戸辯慶」「東日記」等の撰がある。後ち京都に住み享保年間まで俳壇的活動をつゞけた。享保七年歿、年七十三。句集に※「初心元柏」がある。

霞みけり比叡は近江のものならず

※顯昭の歌枕などに比叡山を近江國に屬させてあるが、あの霞んだ姿はやつぱり何といつても都の空にふさはしいといふのである。來山の

三味線も小歌ものらず梅の花

と同じ行き方で、叡山の春の姿を側面から説明したやうな句である。都のものだといふ代りに、近江のものでないと言つた所が、作者の竊かに得意とした點であつたらう。都人の自慢めいた心もちも含まれてゐる。

○初心元柏　享保二年刊。言水が自ら撰びかつ註を附したもの。

○霞みけり　元祿二年刊「前後園集」には下五「名所ならず」とある。今「元柏」による。なほ同書には「打霞む年の曙の姿いふにたへたり。顯昭が歌枕にひえは近江のものといふが、たゞ／＼都の空」と註がある。

○顯昭　鎌倉時代の歌學者、歌人。

○猫逃げて　元祿十三年刊「[illegible]」には中七「梅匂ひけり」とある。今「一七四」による。

▽言水像「海音集」所載

題
紫藤軒言水隱士像
和歌俳諧
何恐狂懷
言水得妙
獨鳴無衡
巨妙子

猫逃げて梅ゆすりけり朧月

都會人らしい趣味の句だ。しかもこの趣味は御所の築地あたりが聯想される種類のものでなくて、妾宅の裏庭か板塀あたりのさまが浮んで來るやうな趣味だ。言水は長く江戸に住んでゐて、かつ談林風に親しんだのだから、自ら市井的な生活情調を喜んだのかも知れない。彼の句にはかうした傾向をもつたものが、かなり見出される。

言水像

例へば

暮は友に[illegible]されてきく千鳥哉
文持つて禿付けけり蘭の舟
初時雨舌うつ海膽の味もこそ
夙に起きて妻に芭蕉を縫はせけり

の如き類である。これらの句には皆、都會人でなければ分らないやうな纖細な味がある。さう

○菜の花や　元祿十三年刊『續都曲集』・同年刊『珠洲の海』等に出で、「東山の臺にて」といふ前書がある。
○忘れ水　野中などの流れが、叢中に沒して人に知られないのをいふ。

してその上更に澁味と侘びとを持つてゐる。卽ち所謂通人趣味なのだ。碁は妾に崩されたまゝ、憎らしいが可愛いゝと言つた心もちで、折からちゝと鳴く鴨川千鳥――この句は京都東山での吟である。――にじつと聞き入つてゐる姿は、正に粋者の典型的情趣ではないか。さうして言水は實はこの情趣をあまり喜びすぎた傾きさへある。芭蕉葉の破れを妾に縫はせたりするのなどは、一寸こり過ぎてあくどい感じがしないでもない。

菜の花や淀も桂も忘れ水

淀川・桂川はいつもほの白く光つて流れてゐるが、菜の花の盛りには、野は一面の雌黃に彩られて、淀・桂さへもその花の影に蔽はれて見えないといふので、菜の花に蔽はれた淀・桂を、忘れ水と見立てたのが働きである。几董は或時蕪村等と清水寺の閣上から淀八幡あたりの春色を望見して、この言水の句の僞らざるを感じ、その著『新雜談集』中に、「今の人とても菜の花に淀も桂もとまでは思ひよるべし、忘水と慥に置く事難し云々」といつて、この句を激賞してゐる。それほどこの忘水がきいて居るかどうかは一寸問題だが、とにかくこの大景を十七字中にまとめおほせた手腕は認めてよからう。

○卯の花も　「初心元柏」に出づ。

○江戸八百韻　江戸の幽山の發起で、[illegible]八、素堂、一鐵等八人が催した八吟八百韻である。延寶六年刊。

▽言水筆蹟　大阪　森氏藏

木枯の果は有けり海の音　言水

卯の花も白し夜半の天の川

これは「江戸八百韻」を撰んだ時、素堂とつれだつて歸るさ、夜もいたく更けた頃本所の一鐵の許に立寄つた。そこらは家がまばらで垣根に白く卯の花が咲いてゐたのでよんだのだ、と言水自ら説明してゐる。

言水筆蹟

卯の花の垣根が白く闇の中につゞいてゐる。夜半の空にも白い星の流れが一筋、――たゞ天の川といへば句は秋季だが、こゝでは星群の流れを季節に關せず言つたものと見なければならぬ。雪白の卯花に對して、初夏ながら夜氣冷かに秋らしい感じもしたであらう。――といふのである。勿論特に取出していふ程の句でもないが、「江戸八百韻」が撰ばれたのは、延寶六年のことで、まだ誰もが、談林調に浸り切つてゐる頃である。その頃言水がすでにかうした句境をもつてゐた事は注意しなければならぬ。

鯉はねて水靜かなり時鳥

動いたあとの靜けさ。芭蕉の古池の句に似たやうな趣である。しかし芭蕉の句の底にはいつまでも重い淵默が潛んでゐる。この句の面には、輕いさわやかな氣分がすぐ浮んで來る。それは二人の自然を見る心に、性格的にちがつた所があるからであらう。畢竟言水の句は感覺的な所をはなれてゐない。「元柏」に自ら傍註した意も、十分に現はれてゐるとは言へぬ。

牛部屋に晝見る草の螢かな

薄暗い牛小屋の中をふと覗いて見ると、秣にとまつた螢が、晝も淡い光を放つて居る。たゞそれだけの光景であるが、こゝには言水の例の趣味的な好みがつき纏つて居ないで、自然を素直に見て居るのが宜い。芭蕉の

晝見れば首筋赤き螢かな

の吟は、晝の光らない螢のさまで、句材は似て居るけれども句境は同じくない。

○鯉はねて　「初心元柏」に出で、「伏見江聽蜀魂」と前書がある。

○傍註　「この里のわびたるには時鳥もやと待ちわびしに、さはなく里魚のはぬる音をきく。いやましに淋し、果して時鳥啼けり。句の品は鳶天魚躍、この事を思ひそへぬ」

○牛部屋に　貞享二年刊「稲莚」。同四年刊「京日記」等に出づ。

○晝見れば　この句は「芭蕉句選」の外古集に見えず、やゝ芭蕉の句として確實性には乏しい。

○朝霧や　「初心元柏」に出づ。

○長次郎　鹽の長次郎といふ名高い手品師。當時の浮世草子や談林の俳諧などには屢〻その名が見える。例へば北條團水の「晝夜用心記」に「鹽の長次郎が馬を呑み牛を品玉の曲」などとある通り、牛馬などを忽ち呑み隱して人を驚かせたものだといふ。

○山茶花に　貞享四年刊「京日記」に出づ。又「元柏」の自註に「鄙びたる家の後園に置く一籠、頃は小春の侵にめでて日影のにほひ此の花に對す」とある。

朝霧やさても富士のむ長次郎

朝霧が眼前に富士の姿を隱してしまつたのを、長次郎の奇術に見立てたのである。かつ富士の山姿を「伊勢物語」に鹽尻のやうだと言つてゐる縁で、鹽の長次郎をもつて來たのだと言水は自ら説明してゐる。全く趣向に興じただけの句で、恐らく談林時代の作であらう。流石に、言水も『初心元柏』の中に、「予この句好まず、さりながら雜言の一つ、是慰にもと」とことわつてゐる。晩年彼が此の種の句のとるべからざることを十分に自覺して居た事が分る。さればこそ蕉風にも追隨し得たのであるが、「是慰にもと」とことわりながら、自ら句帖に加へてゐるのは、まだどこか此の句に全く捨ててしまへない愛着をもつてゐたからであらう。しかし實は、この未練を、彼は全く放下すべきであつたのだ。

山茶花に囮鳴く日の夕哉

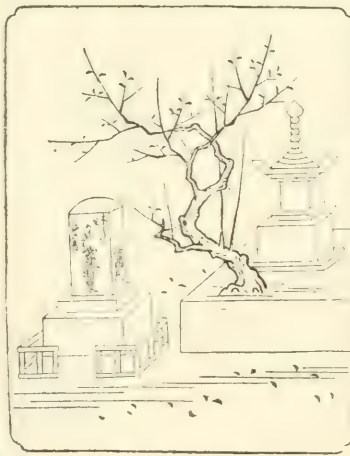
これは佳句である。後園に一籠を置いた所が、多少例の彼のこのみにつきすぎてゐる感じを

○木枯の　元祿三年刊「都曲集」に出で、その後の諸書に多く採錄されて居る。

▽言水墓圖　（「海音集」所載。京都寺町通誓願寺境内に在つた。）

齎さぬでもない。しかし小鳥の聲にたそがるゝ山茶花の庭、小春の夕の情景はそこに餘薀なく描かれてゐるではないか。

※木枯の果はありけり海の音

言水の句中最も人口に膾炙されてゐるものである。爲めに彼は「木枯の言水」と異名されたとまで傳へられてゐる。山から森へ、森から里へ、果てもなく吹きすさんで行く木枯は、どこまであの寒い唸り聲をたてて行く事であらう。野を吹き里を吹きして行つたその果ては、やがて海に落ちてあの凄じい波の音となるのであらうといふのである。それを風の果ては海の音にあるのだと言つた所に、此の句の面白味の全部がある。しかしそれは、風そのものの姿を言ひおほせたのでもなければ、風を聞く人の心境に深く觸れてゐるのでもない。要するに小さな主觀から生れた一種の解釋にすぎない。

言水墓圖

世間的に名高い句は、概して此の種の小主觀をもととした分り易い小理窟を述べたものが多い。卽ちさうした小理窟を含むが故に、汎く俗人に喜ばれるのである。この凧の句なども、吹いて行く風の音の果ては、何處だらう、といふ着想に、決してつまらぬ點はないのである。否寧ろそれは極めて、詩的な考にちがひない。しかもそれを一果はありけり一と解釋してしまつたがために、通俗的には迎へられたが、實は藝術としての價値を乏しくしたのである。

※藁屋根に鳥見ぬ日ぞ蕭燕　(貞享二年刊──稻筵)

行き〳〵て虹の根低し山ざくら　(貞享四年刊──京日記)

※釣りそめて蚊屋面白き月夜哉　(元祿二年刊、前後園集)

妹來ぬ夜蚊帳や夢に食ひ裂きし　(貞享四年刊──京日記)

遊君にかはりて

身を思へばいなする蚊屋の螢かな　(元祿四年刊──蓮の實)

人いまだむばらには寢ず時鳥　(元祿四年刊──團袋)

賤の戸や榲桲にしほむ花木槿　(延寶九年刊──東日記)

島原や葱の香もあり夜の雨　(元祿十三年刊──續都曲)

※白晝に雉子拾ひけり年の暮　(元祿七年刊──歲旦帖)

○藁屋根に　この句吐綬鷄・京日記等にも出づ。以下凡て言水の句。

○釣りそめて　この句物見車・夢物語等にも出づ。

○白晝に　この句反故集にも出づ。

○東日記　言水撰、延寶九年刊。

椎本才麿

大和國宇陀の人。幼少から出家したが故あつて還俗した。始め貞門の山本西武に就いて俳號を則武といひ、後ち宗因・西鶴に師事して西丸と號したが、更に才丸・才麿と改めた。蕉風過渡期の先覺者として知られ、壯年の頃は江戸で活動した。晩年大阪に住み寶名高德を用ひてなほ俳壇の耆宿として重きをなした。元文三年歿、年八十三。「坂東太郎」「椎の葉」「後椎の葉」「ちきゝ」等の撰がある。

笹折りて白魚のたえぐ青し

「東日記」に出てゐる句、即ち才麿の初期の作である。「東日記」の中には芭蕉の、

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

の句も出てゐて、蕉風の萌芽が認められると言はれてゐる。その頃才麿はかうした作を示してゐるのである。籠か皿に青笹を折敷いて、その上に白く透明な白魚が一杯盛つてある。ところどころに笹の葉が青くのぞいてゐるのである。新鮮な白魚の肌と濡れてつやめいた笹の葉と、

○才麿像　『才麿發句拔萃』所載

舊徳翁椎本才麿肖像

辭世

親もなく子もなくひとり手たゝいて
本來空のからりちんなり

○鶯の　元祿九年刊『翁草』・同十年刊『眞木柱』等に出づ。

○梅が香に　『才麿發句拔萃』に出づ。

○御曹司　部屋住の意で武家の若い公達である。

○朧月　元祿十二年刊『皮籠摺』に出づ。

○白雲を　元祿十年刊『眞木柱』に出づ。元祿五年刊『浦島集』には上五「雲に皆」とある。

鮮かな色彩の交錯が見られる。芭蕉の枯淡な薄墨繪に對して、これは鮮かなばかりではない。もつと纖細な美しさがある。芭蕉などよりずつと感受性の細かさが見られる。そしてこれが才麿の句に一種の魅力を持たせる所以である。さうした彼の特色はすでに夙くこの頃から認められるのであつた。だが彼の句がデリケートであればあるだけ、そこには潑剌たる力の感じが足りない。どうかすると美しく飾り立てただけで、魂のない人形のやうな句さへある。それは彼の傾向から生ずべき必然的の缺陷であらう。

才麿像

鶯の細脛よりやこぼれ梅

梅が香に更けゆく笛や御曹司

朧月薫賣がしめりかな

いづれも悪い句ではない。しかしあまりに美しくこしらへ過ぎたといふ感じは確かにする。

白雲を吹き盡したる新樹かな

○猫の子に　陸奥千鳥（元禄十年刊）に出づ。

○五月雨や　「才麿發句抜萃」に出づ。元禄六年刊「此華集」に[illegible]「梅の葉寒き」とある。

○時雨そめ　「假橋」に元禄二年十月四日の作として出づ。

○黒木　薪に同じ。

初夏（はつなつ）のさわやかな風が若葉の梢を吹き渡る。空は紺碧に澄み切つて、一片の雲翳すらとゞめない。「吹き盡したる」といふ強い言ひ方が、爽涼清新の感を十分ならしめて居る。才麿の句としては比較的線の太い感じがする作である。

　猫（ねこ）の子（こ）に嗅（か）がれてゐるや蝸牛（かたつむり）

　五（さ）月（み）雨（だ）や梅（うめ）の葉（は）寒（さむ）き風（かぜ）の色（いろ）

　時（し）雨（ぐれ）そめ黒（くろ）木（き）になるは何（なに）々ぞ

右の三句の如きは才麿の特色（とくしょく）を最もよく見るべきものであらう。可愛らしい猫の子が、けげんな顔をして蝸牛をかいで居る。本當に可憐（プリチイ）な情趣である。梅の葉裏を青く反（かへ）して吹き通る風に、五月雨時（さみだれどき）の肌寒さを象徴したのは、確に鋭い神經のはたらきが見られる。山々に時雨が降り初めた。これから黒木に伐り出される木は何々だらう。それは時雨の冬めいたわびしさから感ずるこまやかな想ひやりである。いづれも詩人の纖細な感受性から生れたもので、才麿の得意とした境地である。たゞし

○[illegible]才麿筆蹟　大丈[illegible]柴田氏藏
青むしろ[illegible]並ぶの美少年　才麿

○思ひ出て　元祿二年刊「續の原」に出づ。

○夕暮の　「才麿發句拔萃」に出づ。

美しい皺を見せけり芥子の花

側顔や少しの間にて美しき

才麿筆蹟

かうなると纖細美をなし強ひる傾がある。かうした世界に、あまり捉はれ過ぎて居るとさへ思はれる。

思ひ出て物なつかしき柳かな

夕暮のものうき雲やいかのぼり

二句共はかな情緒が感ぜられる、そしてしみじみとした哀れさが伴つてゐる。しかしそれは芭蕉の句に感ぜられる深い寂しさではなくて、感傷の甘さに浸る悲しみである　才麿の句の弱さはこゝにも見られる。

○上島　カミジマとよむ說もあるが、なほ確說とし難い。
○七車　ナヽクルマ。鬼貫自選の句文集。天明三年刊。
○鬼貫句選　太祇が「七車」稿本中から發句を拔抄したもの。明和五年刊。
○春の水　以下の句はすべて「鬼貫句選」による。

上島鬼貫

本姓平泉、名は治房、馬樂童・犬居士・槿花翁・佛兄等と號す。攝津國伊丹の人。壯年の頃筑後柳河侯や大和郡山侯等に仕へ、後ち致仕して俳諧を專らにした。その句文は「七車」・「鬼貫句選」等に收めらる。又俳論として名高い誠の說を述べた「獨言」の著がある。元文三年歿、年七十八。

春の水ところ〴〵に見ゆる哉

鬼貫は「獨言」の中に彼が自然に對する句作の態度を述べてゐる。それは要するに四季折々の草木生類、すべて詳しくその所詮を辨へ知つて句にせよといふのである。所詮とはその物の本質特性などと解してよい。そして彼は

　春の雨は物ごもりて淋し、夕立は氣晴れて凉し、五月雨は鬱々とさびし、秋の雨は底より淋し、冬の夜はさるどにさびし。

などと四季の風物の趣を短い詞で巧にあらはしてゐる。かうした特殊の趣致を捉へるには、

（鬼貫筆蹟　上田小林氏藏）
谷水や石も歌よむ山櫻　おにつら

○相國寺　京都今出川通相國寺門前町にある臨濟宗の寺。相國寺派の本山で五山の一である。

自分の心を自然に沒入させなければならない。口先ばかりで言ひおほせるものではない。我が心が自然の心に通じた時、研ぎすまして句も歌も自らに生れる。春の水が所々に見ゆるといふ

谷水や石も歌よむ山櫻　おにつら

鬼貫筆蹟

たゞそれだけの事だが、この句を繰返し〳〵誦して見ると、夏の川にも秋の水にも感ぜられない長閑な氣分が、どことはなく湧いて來る。それが卽ち所詮を辨へ知つたのであり、自然の姿に徹したのである。鬼貫の句にはかうした客觀句で、なほすぐれたものが少くない。

曙や麥の葉末の春の霜

軒うらに去年の蚊うごく桃の花

行く水や竹に蟬鳴く相國寺

これらの句は決して器用さのみで出來るものではない。深く物の姿に見入つた時に、始めてこの詩境が眼に映ずるのである。

草麥や雲雀があがるあれさがる

鬼貫は『七車』の序に誠の意を解して、

乳房を握るわらべの花にゑみ、月に向ひて指ざすこそ天性のまことにはあらめかし。いやしくも智惠といふもの出でて、その朝を待ちその夕を樂しとするより、僞のはしとはなれるなるべし。

といつてゐる。草麥の野に雲雀が高く舞ひ上り、又舞ひ下る、それをそのまゝ子供の言葉で、すら〳〵と言つたのが此の句である。それは彼の所謂まことに發した聲である。しかし僞りがないといふだけでは藝術にはならない。

名月や雨戸をあけてとんで出る

ひう〳〵と風は空行く冬牡丹

の如きは成程その情景に僞は無い。だがそれは畢竟只さうした事實を率直に述べたに止る。

○草麥　青麥のこと。

○庭前に 「空道和尚いかなるか是汝が佛眼と問はれしに即答」と詞書がある。

○しよろ〳〵と 一度び雨が降ると濁流矢の如き大河も、常は僅かにしよろ〳〵の流れにすぎない。千里の馬も槽櫪の間に伏して居る時は、その能が分らないと同じ理を含めた句であらう。

○夏は又 嵐雪撰「其袋」による。鬼貫句選には「冬は又夏がましぢやと言ひにけり」とある。

尤もこの二句などはまだよい。名月を早く見たいといふ子供らしい心、空吹く寒い風の音を思はせる表現、そこになほ作者の感激と詠歎とが幾分見られるが、この鬼貫のまことが極端に解釋された結果は、詩的感興を全く伴はない所謂たゞごとまでを、屢〻彼は正しい俳諧と認めた。

庭前に白く咲いたる椿哉

じよろ〳〵と常は流るゝ大井川

夏は又冬がましぢやといはれけり

これらの句は、彼にとつては寧ろ竊かに得意とした所であつたかもしれぬ、第一句は詞書によつて見ると、所謂柳は綠花は紅といふやうな、禪の悟りめいた事を表はしたものと見える。本來の面目をそのまゝに示したつもりであらう。しかしたとひ言句を絶した藝術の極致が、法悦の三昧境と合致しようとも、此の句のまゝでは、藝術としてはたゞごとたるを免れない。第二句、第三句に至つては、誠の說の藥がきゝすぎた形である。これは確に彼の短所の一面であつた。

面白さ急には見えぬ薄哉

骸骨の上を粧うて花見哉

共によく知られた句である。句意は詳しく說くまでもあるまい。一は花や紅葉とちがつて、薄の面白さは急に見えないが、さて味はつて見ると中々趣の深いものだといふので、一は綺羅を飾つた美女の花見に對して、迷ひの夢をさまさしむべき一喝である。いかにも成程と感心されさうな句であるが、それだけ一種の觀念に墮して、所謂雅趣の味はふべき點がない。これなども鬼貫の誠が、藝術的純眞さの意義を失つて、觀念的な眞理を表現するものの如く解せられた結果である。

そよりともせいで秋立つ事かいの

彼にはかうした口語調の句がかなり多い。談林や來山の句などにも、すでに口語は用ひられ

てゐるが、彼の句には特に多く目につく。それは姿詞を徒らに飾るまいとする彼の主張から、當然生れるべき結果であつた。そして彼の所謂心の誠を失はないために、この調子は相當有效にはたらいてゐる。

なんと今日の暑さはと石の塵を吹く

會話語を取入れることもすでに來山などの試みてゐる所である。しかし鬼貫に於ては特に會話語とみるより、これも彼の口語調の一つとして見てよからう。

風が吹く梅のつぼみはしつかりと
鶯が梅の小枝に糞をして
鶯のなけば何やらなつかしう
春の夜の枕嗅ぐやら日が暮れた
いなうとの花の前なりや留められぬ

これらの句によつて、彼の特色の一斑は更によく窺ひ知られるであらう。巧まない素朴さ、言ひすてたまゝの子供の言葉、さうした特色はどの句にも見られる。只最後の句の如きは、些か

口語調を濫用した傾がある。一體この口語調は、のち伊丹俳人の喜ぶ所となつて一種の特色をなし、惟然などもその風にかぶれて甚しく極端に流れたものである。

行水の捨所なき虫の聲

鬼貫の作中最も人口に膾炙されたもので、川柳子に「鬼貫は夜中盥をもち歩き」と揶揄されてゐるくらゐである。句意は解するまでもなく、虫の鳴音を止めるのを惜んで、行水の水の跡始末に困るといふのであるが、それは千代女の朝顔の句と同じく、畢竟風流を説明したに過ぎない。それが又この句を名高くした所以である。だが來山の

※行水も日まぜになりぬ虫の聲

の方が、遙に情趣に富んでゐる事は言ふまでもなからう。

※秋は物の※月夜烏はいつも啼く

秋は物の哀れに感ぜられる頃であるから、月夜烏の啼く聲も一しほ物がなしい。だが月夜烏

○捨所なき　「鬼貫句選」にかく出てゐるが、恐らく「捨所なし」とあるべきであらう。

○朝顔の句　「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」、二四四頁參照。

○行水も　六五頁參照。

○秋は物の　下に「哀れ深い頃」だとか「趣多い時節」だとかいふ意を含めて略した形。句例

秋はもの、釣針はしきか、り舟　致　鄕

○月夜烏は　室町時代から、はやつた小唄の文句。狂言、花子「こゝは山陰森の下、、、月夜烏はいつも啼く」などとある。

○月夜うらめし　以下俗謠の文句どりである

○吉田通れば　俗謠「吉田通れば二階から招くしかも鹿子の振袖で」

一鬼貫筆蹟　伊丹　岡田氏藏

秋は物の月夜烏はいつも鳴　佛兄書

○園城寺　大津の西方にある天台宗寺門派の本山。又三井寺ともいふ。

はいつとても啼くものである。まあさう悲しがらぬがよいといふのが句の意味だが、それだけでは要するに平凡たるを免れぬ。そこへ小唄の文句をそのまゝ輕く用ひた所に妙味がある。宗因の謠曲調より一層輕快で、言はゞこれも口語調の一體と見てもよからう。その外

野の花や月夜うらめし闇ならよかろ

鶉啼く吉田通れば二階から

鬼貫筆蹟

等もこの類である。「野の花や」の如き巧に文句が利用されて居る。

花散つて又しづかなり園城寺

花の盛りの間は流石に騷々しかつた境内も、花が散つてしまつては參詣の客も稀に、またもとの靜かな古寺にかへつた。それを極く平明に敍した中に、花時の雜閙のあとの靜かな寂しさ

○大津馬　大津の驛から上り下りの東海道に荷を負うて歩いた駄馬。俗にも「大津馬の追ひがらし」と言つて盛んに使はれたものである。

○秋風の　「野徑に遊ぶ」といふ詞書がある。

が一層感ぜられる。別に

　梅散つてそれよりのちは天王寺

といふ句があるが、これは「それから後は普通の平凡な」といふ事を匂はせた敍法だけに、少々嫌味が殘る。

　永き日を遊び暮れたり大津馬

いつもは所謂追ひがらしでこき使はれる大津馬も、今日は荷役も無いと見えて、長い春日を暢氣に遊び暮してしまつたといふのである。これまた平明の中に、長閑な宿驛のさまがはつきり浮んで來る。

　秋風の吹きわたりけり人の顔

これも巧まず飾らず、淡々と敍し去つてしかも秋風蕭殺たる趣が深く味はれる。「吹きわたりけり」といふ言葉は、何氣ないやうであるが、野面を渡つて來る秋風に對して、これ以上の自然な表現があらうか。これは確かにまことから出た句である。最後に「人の顔」と置いたの

も、並々ならぬ心のはたらきである。

によつぼりと秋の空なる富士の山

秋空一碧、そこへ兀として浮んだ靈峰の姿である。「によつぼり」といふ形容が、この場合全く適切に當つて居る。もとより一句の生命はこの上五文字にあると言つてよく、言葉の驅使に自由だといふよりは、かうした場合自然に生れて來る言葉は、やはりこの外にないのだ。それだけこの表現が眞實性に富んで居る。三宅嘯山は『俳諧古選』にこの句を評して、「渾雄得二李青蓮之風骨一」と言つて居る。

さゝ栗の柴に刈らるゝ小春かな

暖かな小春日和である。雜木の中に交つたさゝ栗が、その實は人に拾はれもせず、柴刈の手に刈られて行く。さうした言はゞ平凡な情景である。しかし小春の山里に、可憐なさゝ栗の運命を眺めた作者の心は、決して平凡ではなかつた。さゝやかな自然の中に、不易の生命を見出

○李青蓮　李白のこと。

○さゝ栗　柴栗ともいふ。小さい栗である。

○冬枯や　「宇治にて」といふ前書がある。

○平等院　山城國宇治にある。治承四年源三位頼政がこゝに戰死し、扇の芝と稱して今なほその跡を存して居る。謠曲、頼政に「たゞ一すぢに老武者の、これまでと思ひて、平等院の庭の面、これなる芝の上に扇を打敷き、鎧脱捨て座を組みて」

▽鬼貫墓　（兵庫縣伊丹町墨染寺境内にある。

したのである。

冬枯や平等院の庭の面

その昔宇治川の流れに丹碧の影を映した鳳凰堂、それも星霜幾百年を經て物古りてしまつた。今冬枯の寂しい景色の中に、昔を偲ぶはそればかりではない、この草さへ枯果てた庭の面を眺めて居ると、頼政のはかない最期のさまが、一層物悲しく聯想されるのである。句の中七以下は、恐らく謠曲『頼政』の文句を利用したのであらうが、それが技巧的なわざとらしさがなく、いかにも自然な措辭に聞える。たゞ滿目蕭條たる冬枯の古寺の庭である。そこに「平等院の庭の面」といふ句から、強い歴史的聯想にひきつけられて、數百年前の悲劇の俤を今目前に偲びつゝ、わびしい思ひは更に深められる。

鬼貫墓

山口素堂

名信章、今日庵。其日庵等の號がある。甲斐の人、若くして江戸に出、儒を林春齋に學び、又京に上つて季吟に俳諧を問うた。後江戸で芭蕉と相識り蕉風開發に與つて大に力があつた。所謂葛飾風一派の祖である。享保元年歿、年七十五。

小僧來たり上野は谷中の初櫻

上野谷中の初櫻を告げに、小僧がやつて來たといふのを、謠曲の文句をもぢつて興じたのである。此の句は延寶六年刊の『江戸新道』に出てゐて、すなはち談林調に心醉してゐた時の作である。素堂はもと季吟に學んだが、延寶四年芭蕉と兩吟の百韻を試みた頃には、もう宗因風を學ばうとするのに汲々としてゐた。當時の風調を知るためにこの一句を出しておく。

浮葉卷葉此の蓮風情過ぎたらむ

○小僧來たり　謠曲、鞍馬天狗に「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍」といふ文句がある。これは賴政の歌の句をとつたので、末句は「馬に鞍おけ」である。
○上野は谷中の　延寶八年刊「誹枕」には「上野谷中の」とある。
○浮葉卷葉　「虛栗」に出で荷與十唱中の一である。

▽素堂筆蹟（大橋圖書館藏）

山素堂

こがねは人のもとめなれど求むれば心静かならず色は人のこのむ物からこのめは身をあやまつたゞ心の友とかたりなぐさむよりたのしきはなしこゝに隱士あり其名を芭蕉とよぶはせをはをのれをしるの友にして十暑市中に風月をかたり三霜江上の幽居を訪ふいにし秋の頃ふるさとのふるきをたづねんとて草庵を出ぬしたしきかぎりはこれを送り餞莚をとふ人もありけり

何もなく芝ふく風も哀なり　杉風

他はもらしつ此句秋なるや冬なるや作者もしらず唯おもふ事のふかきならん予も又朝がほのあした夕露のゆふべまたずしもあらず霜結び雪とくれて年もうつりぬいつか花に茶の羽織見ん閑人の市たゝん物を林間の小車久しふきたらずと遠公の心をそもひ出し申候九月待つころに歸りぬかへれは先吟行のふくろをたゝくたゝけは一つのたまものを得たりそも野ざらしの風は下略

（註、右は芭蕉の甲子吟行の跋文の前半である。）

○俳諧次韻　延寶九年刊

素堂筆蹟

この句の「蓮」はレンと音讀せねば一句の手柄がないと芭蕉が評したといふが、それは要するに此の句全體から受ける感じが、漢詩趣味だからである。ハスと訓んではその全體の格調を破る虞れがある。素堂は元來漢學に相當の造詣があり、漢詩の作も大分殘つてゐる位であるが、彼はその素養をもつて、俳諧に新しい一生面を拓かうとした。天和年間の『武藏曲』や『虛栗』等の風調は、もとより彼一人の力で作り出したものではなからうが、少くとも彼がその先達の有力な一人であつた事は疑ひない。芭蕉の『俳諧次韻』なども實は素堂の風調に負ふ所が多かつたのであらう。素堂は芭蕉よりも年長で、芭蕉も常に心友として敬意を拂つてゐた。素堂の此の漢詩調は、俳諧としては到底生硬たるを免れないけれども、談林の行詰つ

た句風を一新した功は少くない。況んや芭蕉も一度は此の道を通つて、遂に眞享の『冬の日』に達したのであるから、蕉風の變遷上から見ても、この作風は注意せねばならない。尤もこれも大分極端に走つた作もあつて、『去來抄』に詩か語か分らぬと冷評されたものなどもある。

なほ荷興十唱中の他の九句をあげると、

鳥うたがふ風蓮露を礫てけり

そよがさす蓮雨に魚の兒躍る

荷たれて母にそふ鴨の枕蚊屋

青蜻花のはちすの胡蝶かな

おのれつぼみ已れ畫きてはちすらん

花芙蓉美女湯あがりて立てりけり

荷をうつて霰ちる君みすや村雨

蓮世界翠の不二を沈むらく

或は唐茶に醉座して舟ゆく蓮の楫

等同樣の調で、中には「礫てけり」、「はちすらん」など隨分無理な語法もあり、談林風な趣味もまだいくらか殘つてるるが、すべてにどこか高踏的な意氣が見える。

○去來抄　芭蕉の敎へを門人去來が[illegible]したもの。傳へられてゐる[illegible]

春もはや山吹白く苣苦し

褪せた山吹の色と、薹の立つた苣の味とに暮春の感を深くしたのである。所謂物によつて情を生ずるもの、必しも山吹と苣とに限らないが、空しい櫻の梢、老いた鶯の聲では俳諧としての新し味がない。山吹と苣だから面白いのである。

目には青葉山時鳥初鰹

この句はまだ談林心醉時代の作であるが、當時すでに諸書に採錄されて、素堂の句中最も名高くなつてゐる。初夏の風物として、時鳥と青葉とは古來歌人の詠にしば〳〵上つてゐる。西行も、

郭公聞く折にこそ夏山の
　青葉は花に劣らざりけれ

とよんだ。そこへ更に鎌倉名物の初鰹を持つて來た所が俳諧である。

○春もはや　貞享四年刊「續虛栗」に出づ。

○目には青葉　「鎌倉にて」・「鎌倉一見の頃」等といふ前書がついて居る。

○諸書　江戸新道（延寶六年刊）・とく〳〵の句合・曠野等。

○鎌倉名物　鎌倉の鰹はすでに徒然草にも書かれて居り、芭蕉にも「鎌倉を生きて出でけん初鰹」の句がある。

一見單に名詞の羅列に終つてゐるが、實は最初の「目には」で、以下「耳には」「口には」を類推させた所が、談林風時代の素堂には會心の點であつたのだらう。句としてはもとより大したものではないが、その輕快なリズムが諷誦に快いのと、初松魚のあしらひ方がいかにも氣がきいてゐるのとが、大いに人氣を博せしめた所以であつた。其角の雨乞の句をはじめ、川柳子の題材になつた俳句も大分あるが、此の句などもその大關株の一つであらう。

目に青葉切りで句のなき京の夏　（柳樽廿八編）

目と耳はいゝが口には錢がいり　（同　三十編）

目と山と耳と口との名句也　（柳樽卅六編）

見るべし、景氣のいゝ初松魚が大いにこの句の人氣を呼んだ事を、そして、とすつかり名句にされてしまつたのである。

西瓜ひとり野分を知らぬ朝哉

三宅嘯山は『俳諧古選』の中にこの句を採つて、「飄然中見二閑雅一」と評してゐる。枝は折れ垣は倒れて、昨日の野分の物凄さを語る朝、もと〳〵地べたに轉つてゐた西瓜だけが、昨日と

○雨乞の句　「夕立や田をみめぐりの神ならば」（一九九頁參照）

○西瓜ひとり　色杉原（元祿四年刊）・勸進牒（同年刊）を始め、西の雲・千鳥掛・翁草・さく〳〵の句合等に出づ。

ちつとも變つたさまがないといふのである。もとより幾分の滑稽味は持つてゐるが、それだけではない。野分のあとの靜けさが、その地上に横はつたまゝの大きな西瓜のさまに深く感ぜられる。嘯山の評は當れりといふべきだ。

※南瓜やずつしりと落ちて暮淋し

ずつしりといふ言葉が、此の場合最も適切な表現となつてゐて面白い。『※とく／＼の句合』に自ら前の西瓜の句と合せ、「西瓜のあした、南瓜の夕、對なるかな對たり」と評してゐる。

※唐土に富士あらばけふの月も見よ

此の句も諸書に出てゐて名高い。九月十三夜の吟である。一體後の月を賞することは、わが宇多法皇の御時から始まつたことで、支那の方には無い風習である。富士は勿論我が國の名山。卽ち富士も後の月も、共に我が日本に特有なものである事を誇つた句である。名高いだけ俗受けをねらつたやうな點があり、眞の文藝的見地から見たら、所詮優れた句とは言へない。蕪村の

○南瓜や　「とく／＼の句合」に出づ。「猫筑波」には「ずつしりと南瓜落ちて秋さびし」とある。

○とく／＼の句合　寛永末年頃素堂が自句三十六番を合せて自ら評したもの。享保二十年刊。

○唐土に　元祿二年刊「曠野」を始め諸書に採錄され、「笈日記」・「陸奥千鳥」には長文の詞書があつて下五「月見せよ」とある。又「舊庵後の月見」にもほゞ同樣の詞書あり、「とく／＼の句合」と共に淡が「後の月見せん」とある。

も同工異曲の句であるが、これは元稹の詩句を利用して、さすがに蕪村らしい才氣が見られる。

唐人よ此の花過ぎて後の月

松陰に落葉を着よと捨子かな

芭蕉は富士川のほとりで捨子を見て、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

とよんだ。そして

いかにぞや汝父に惡まれたるか、母にうとまれたるか。父は汝をにくむにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして汝が性の拙きを泣け。

と言つて、只袂から食物を投げて通つた。しかし芭蕉の心には熱い涙がにじんでゐた。「汝が性の拙きを泣け」といふのは、又芭蕉自身に言つて聞かせる言葉でもあつた。だが素堂の「落葉を着よと」といふのは、むしろ落葉に埋れた捨子のさまを、一の景色として見た餘裕がある。冷やかな心ではないが迫つた情は感ぜられない。素堂は自ら「心無きものに心をつくる體」と言つてゐるが、實はその爲に捨子に對して直接動くべき憐憫の情を稀薄にしてゐる。

○元稹の詩句　「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」の句は唐人よ、日本では菊の後にもなほ賞すべき十三夜があると言つたのである。

○松陰に　「さく／＼の句合」に出づ。

○猿を聞く　この句、次の文、共に「野ざらし紀行」に出づ。

あはれさやしぐるゝ頃の山家集

芭蕉追悼の句で「亡友芭蕉居士近來山家集の風體をしたはれければ、追悼に此の集を讀誦するものならし」と詞書が添へてある。芭蕉の歿したのは時雨降る頃であつたが、そのしぐるゝ頃に亡友の愛した山家集を手にすると、一入感慨が深いといふのである。素堂と芭蕉との交游の狀をしのぶよすがにもなるであらう。

市に入つてしばし心を師走かな

所謂市中の隱者の境涯であらう。世はあわたゞしい年の暮である。その中に悠々自適の生活を送つてゐる隱士が、しばし市中の雜鬧に伍して師走氣分でも味はつて見るといふところである。現代の生活意識から考へると、あまりに現實離れがして居て、同感がもてないと言ふかも知れない。しかし世の中が忙しくなればなる程、又生活が窮迫すればする程、かうした心に餘裕のある態度が藝術に求められるのではあるまいか。さうしてそれが又、實生活をなごやかに導いて行くもとにもなる。

○あはれさや 「陸奥千鳥」（元祿十年刊）に出づ。
○山家集 西行法師の歌集。
○市に入つて 貞享三年の「歲旦帖」・「續虛栗」等に出づ。「千鳥掛」所載芭蕉の「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」を發句とした歌仙中、知足の附句に「市に出てしばし心を師走かな」とあるのは、この句を轉用したものか。
○市中の隱者 文選、反招隱詩「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」

○松尾芭蕉 傳記・著書等については、詳しい研究が多いから、特に省略した。

○姥櫻。月ぞしるべ 二句共寛文四年刊、松江重頼撰「佐夜中山集」に出づ、芭蕉二十一歳の作である。なほ口碑によれば芭蕉は十四歳の時「犬と猿世の中よけれ酉の年」とよんだと傳へて居るが、これは確證がないので直ちに信ずる事は出來ない。

○姥櫻 彼岸櫻に似て花季はやゝ遅い。落花に至るまで葉がないので、老女の歯無きに比し姥櫻といふ。

松尾芭蕉

名宗房、通稱甚七郎、桃青。風羅坊等の別號がある。伊賀上野の人、藤堂良精の嗣良忠(俳號蟬吟)に仕へ、共に季吟に師事した。寛文六年蟬吟の死にあひ致仕して後ち江戸に下り、深川に芭蕉庵を結んだ。かくて生涯俳諧に精進して遂にこれを眞の文藝として大成したのである。元祿七年十月十二日歿、年五十一。

姥櫻咲くや老後の思ひ出

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿

右の二句は芭蕉の作として知られてゐる發句で最も古いものである。一は姥といふのから思ひついた趣向で、年增女が老後の思ひ出に花を咲かせて居るとしやれたにすぎない。二は「入らせたべ」と「たび」とかけ、又月の入るに縁をもたせた言語技巧で、句意はあの月こそ宿へ導く案内者である。その入る方のこちらの宿に早くいらつしやいといふのであらう。いづれも

全く貞門古風の作意で、勿論取るに足らぬ作ではあるが、芭蕉の歩みも所詮こゝから始まつたのであつた。彼の成し得た仕事がいかに偉大であつたかは、自ら領得されるであらう。その意味で特にこゝに掲けたのである。

※あら何ともなや昨日は過ぎてふぐと汁

内裏雛人形天皇の御宇とかや

※夏の月御油より出でて赤坂や

右の三句はいづれも芭蕉が談林風時代の作である。

一は謠曲にしば〳〵用ひられる「あら何ともなや」といふ言葉を利用した作で、元來これは謠曲では別に意味もなく、驚いた時などに發する言葉であるが、それを文字通りの意にとり、昨日鰒汁を食つたが、今日になつても何の異狀もないと言つたのである。文句取りとしては確かに働いた作だが、所詮それは洒落にすぎない。

二は内裏雛を人形天皇と見立てたのが面白味で、句意は解するにも及ぶまい。「御宇とかや」

○あら何ともなや　延寶六年刊「江戸三吟」に出づ。同五年冬の作。

○内裏雛　延寶六年刊「江戸廣小路」に出づ。

○御宇とかや　「芭蕉句選」などには「御宇かとよ」となつて居るが、「江戸廣小路」や「高名集」にはかくある。

○夏の月　延寶七年刊「向の岡」に出づ。なほ元祿十四年刊「涼み石」にはこの句をあけ「大鶴長途の興賞わづかの笠の下すゞみと聞えける小夜の中山の命も廿年の昔たり。今もほのめかすべき一句には」といふ前書がある。「命なりわづかの笠の下すゞみ」の吟と共に、同じ旅中の作と見える。

〔一〕御油・赤坂　共に東海道の[illegible]
[illegible]ので、この二驛の間は僅[illegible]
[illegible]なく、[illegible]最も[illegible]
[illegible]。

〔二〕芭蕉
（元祿十年刊「陸奥千鳥」に據る。）

芭蕉像

といつた古風な言廻しが、勿體らしく感じさせる爲に甚だ效果的である。

二は夏の夜が短くて、月も出たかと思へばすぐ、明けてしまふのを、御油から出て赤坂に入る間しかないと喩へたのである。御油・赤坂、いづれも宿驛。これを御油・赤坂間の實景の如く解する人があるが、それはこの句が芭蕉の談林時代の作たる事を知らぬからの誤解である。

要するにまだこの頃までは、かうした譬喩や見立を俳諧の本義と心得てゐた時代なので、勿論單なる言語技巧に比して文藝的の進歩は認められ、又淸新奇警な見立の中には中々面白いものもある。しかし畢竟なほ文藝として、第二義的な境地に止つて居た事は同一である。芭蕉の作を解するに當つても、かうした時代的な歩みのあとを知らなければ、甚しい誤解に陷る虞れがある。第三の句が、よし事實御油・赤坂間で眺めた夏の月に對してよんだものとしても、それが延寶年間の作である以上、所詮一句の中心は譬喩にあるのである。

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ

右の三句は談林の風を脱して、蕉風に眼を開かうとする正に過渡時代の作を代表すべきものである。蕉風俳諧の開發は、もとより芭蕉のすぐれた天分と不斷の精進とに基くものではあるが、又延寳末年から天和・貞享の交に亙る俳壇全體の動きに促進された事を見逃してはならない。卽ち談林の新調は一時俳壇を風靡したけれども、やがて甚しい放縱に流れ、心ある人々をしてその間に眞摯な反省を起さしめた。かくて俳諧の中にも和歌や連歌と等しい藝術的の理想を求めようとするに至つた。鬼貫の誠の說の如きはその一のあらはれであつた。しかし俳諧はすでにその發生なり展開なりに於て、和歌や連歌とは全くちがつた素質をもつて居る。それは卽ち俳諧の民衆性であつた。貞門時代の俳諧に於ては、この民衆的特質は專ら俳言といふ形式的條件におかれてあつたが、談林時代に至つてはそれが益〻擴充されて用ひられるに至つた。

○枯枝に　延寳九年刊「東日記」に出づ。

○芭蕉野分して　天和二年刊「武蔵曲（ムサシブリ）」に出で、「茅舎の感」と前書がある。

○髭風を吹いて　天和三年刊「虚栗」に出で、「憶ニ老杜一」と前書がある。

○俳言　和歌や連歌に用ひる雅言に對して、俗語・漢語、その他の外國語等をさす。これらの言葉を用ひることが、當時俳諧の必須的條件とされたのである。

○**虚栗の跋文**　その一節に「李杜が心酒を嘗めて寒山が法粥を啜る。これに仍つて其の句見るに遥にして聞くに遠し。（中略）白氏が歌を假名にやつして初心を救ふたよりならんとす。」李杜は李白と杜甫、白氏は白樂天。

然るに今や俳諧の文藝的理想を和歌。連歌と同じ點に求めようとして來ると、この卑賤な俗語までを取入れた俳言を用ひる事は、俳人たちの屑しとしない所であつたらう。さうかと言つて、こゝで雅言のみを用ひようとすれば、それは結局和歌。連歌そのものに復つてしまふ事で、俳諧の特異な性質は全く失はれてしまふ。少くとも從來俳諧の形式的特質とされた俳言を捨てすして、しかも和歌。連歌と同じ藝術的氣品を保たうとする。それには俗語と共に雅言の範疇に屬しないものとされてゐる漢語の使用が、まづ着目さるべきは當然の事であつたらう。延寶。天和の交、前に述べた素堂や芭蕉が、しきりに漢詩趣味を喜び漢語調を弄したのは、かうした要求から發した事ではなかつたらうか。しかし芭蕉は『虚栗』の跋文中に、李杜の心酒を嘗め、寒山が法粥を啜つて、しかも白氏が歌を假名にやつさうといふやうな事を述べてゐる。卽ち彼は單に漢詩漢語の形式の末によつて、俳諧を革新しようとしたのではない。よく李杜の詩腸を探り、寒山拾得の禪骨を體して、その精神を俳諧にうつさうとした抱負が明かに窺はれるのである。かくして芭蕉は、從來俳諧を和歌連歌から分つ形式的條件として最も重要視された俳言を、俳味ともいふべき本質的要素にまで深めて、こゝに始めて和歌連歌と對立した俳諧の文藝的意義を確立したのであつた。だがそれについては、更に後の機會で述べよう。とにかくかうして蕉風の過渡期に於ける俳諧が、漢詩趣味漢語調で養はれた所以が了察されれば、こゝに說

く意は足りるのである。

さて句の解釋にうつらう。

第一の句は後に、中七を「烏のとまりけり」と直した形で汎く知られて居る。「烏のとまりたるや」とひどく字餘りにしたのは、まだ談林風の餘臭を存して居る點である。內容もたゞ漢語の「寒鴉枯木」を飜譯した程度のものにすぎないが、こんな閑寂枯淡な風景をそのまゝ句にするなどといふ事は、從來かつて見ない所であつた。こゝに蕉風開發の第一步があると言はれるのも故なきでない。もとよりこの句は「烏のとまりけり」と直しても、なほ表現の生硬さが幾分やはらげられる位で、所詮單純な敍景句にすぎないであらう。しかしかうして蕉風の展開史上からながめて見ると、特に意義深い作と言はねばならぬ。

第二は深川の芭蕉庵※での吟である。野分の爲に戶外には芭蕉の葉がバサ〳〵と烈しく音を立てて居り、又軒を傳ふ雨漏りでもあらうか、近くの盥にポト〳〵と雫の垂れる音がする。葉の戰ぎ、雫の音、侘しい雨夜の感じが深い。「芭蕉野分して※」といふのがやはり漢文口調である。後に芭蕉の二字を取つたといふ說もあるが、『泊船集※』にもこのまゝの形で出て居り、かうした字餘りの漢文調が、當時の過渡期の風を最もよく代表して居る。只「野分して」ではその歷史的意義を失ふばかりでなく、畢竟平凡の句たるに終るであらう。芭蕉と盥の二つに風雨の音を

○後に云々　元祿二年の「曠野」に「烏のとまりけり」として再錄されてゐる。

○深川の芭蕉庵　深川六間堀にあつた杉山杉風の別墅で、芭蕉は延寶八年（天和元年ともいふ說もある）の冬こゝに移り住み、門人李下から贈られた芭蕉を植ゑて芭蕉庵と號した。なほこの「芭蕉野分して」の句については、其角の「枯尾花」に載せた芭蕉移庵の記中にも述べて居る。

○芭蕉野分して　五雜組の「凄風苦雨之夜、擁二衾燈一讀レ書、時聞紙窓外、芭蕉淅瀝作レ聲亦有レ致、然處理會得過更無レ不レ堪二情景一」などから案じたらうかといふ說もある。

○泊船集　門人風國が芭蕉の句を集めたもの、元祿十一年刊。芭蕉句集としては最も古いものである。

○杜甫の詩句 [illegible]

○秋興八首中の句「[illegible]」の句。[illegible]ては平凡だから、わざと倒語して奇[illegible]のである。

○野ざらし紀行 貞享元年八月門人千里〔チリ〕を伴つて故郷の伊賀に赴いた折の紀行。はじめに「野ざらしを心に風の入む身哉」といふ句があるので、かく呼ばれる。一に甲子吟行〔カツシギンカウ〕ともいふ。

○道のべの [illegible]の句[illegible]の邊の槿は馬の喰ひけり」、歴代滑稽傳には「道のべの木槿は馬に喰れたり」、或問珍・一葉集等には「道はたのむくげは馬にくはれけり」とある。しかしやはり紀行の原形に從ふべきである。

聞くので、句の面白味がある。

第三は前書によつても知られる通り、頭註の如き杜甫の詩句などによつて作つたのであらう。又初句「風髭を吹いて」といふべきを、故らに「髭風を吹いて」と言つたのも、杜甫の秋興八首中の句で名高い倒裝法に倣つたのである。句意は蕭殺たる風に髭を吹かせ、暮秋を嘆ずるのは誰だらうといふので、「髭風を」といふ倒語によつて、粗髯の風に靡くさまが眼前に彷彿とする。

貞享に入つて、かの「野ざらし紀行」の旅に赴いた頃から、芭蕉の句は漸く圓熟の域に進んで來る。以下まづ右の紀行中の作から始めて、順次ほゞ年代に從ひ、彼の代表的作品、もしくは注意すべき作品を評釋して行かう。

道のべの木槿は馬にくはれけり

紀行には「馬上吟」と前書がついてゐる。

自分の乘つてゐる馬が、馬士が一寸立止つてゐる間か何かに、路傍の木槿をぱくりと一口食つてしまつた眼前の即景を、そのまゝ句にしたのである。これを「出る杭はうたれる」といふ教訓的の寓意があるやうに解するのは誤つてゐる。ある說に芭蕉の禪の師である佛頂和尚が、

○庭前に　八二頁參照。

○山路來ての　「山路來て何やらゆかしすみれ草」。一〇七頁參照。

○歴代滑稽傳　許六の編。歴代俳人の作風・略傳等について記したもの。正徳五年刊。

芭蕉に俳諧の如き綺語を弄することを戒められた所、芭蕉は「俳諧は只今日の事目前の事にて候」といつて此の句を即吟した。すると和尚は「善哉々々俳諧もかゝる深意あるものにこそ」と感じて、以後は芭蕉の俳諧を制しなかつたと傳へてゐる。これは恐らく實説ではあるまいが、少くとも此の句の眞意を領した逸話として面白い。この句には確かに一種禪味を帶びた所がある。

しかもかうした句は、鬼貫のかの

庭前に白く咲いたる椿哉

の如く、藝術的感激の稀薄な結果、ひとりよがりの理窟やいや味に陷るものが多い。然るに此の句は流石に禪理を說き示さうなどといふいや味は全くなく、たゞ眼前の卽景を淡々と描き去つて居る。箇中の妙味はそこにある。素堂はすでにこの紀行の序に「山路來ての菫、道ばたの木槿こそ此の吟行の秀逸なるべけれ」と評し、許六は「歴代滑稽傳」の中に、談林を見破つてはじめて正風體を見屆け、躬恒・貫之の本情を探つた句だと稱讚してゐる。

秋風や藪もはたけも不破の關

○新古今集の歌 「人住まぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」

○明ぼのや 紀行には句の前に「草の枕に寢あきて、まだほの暗き中に濱の方に出て」と記してある。

○笈日記云々 笈日記に「おなじ比にや、あの地藏に詣して、雪薄し白魚しろき事一寸。此の五文字いと口惜しとて、後には明ぼのとはきこえ侍し」とある。なほこの句は孤松集に「曙や白魚のしろき事一寸」、熱田三歌仙に「雪薄し白魚白きこと一寸」と出て居る。

新古今集の歌をふまへた作である。芭蕉が通つた頃は勿論その板庇の址すらもない。昔のあとは藪となり畠となつて、物悲しい秋風が空しく吹いてゐるだけだ。そこに立ち盡した芭蕉は、この藪も畠も古への關屋の址であらうと、感慨深い歎息を洩らした。それがこの句である。

明ぼのや白魚白きこと一寸

伊勢の桑名での吟である。芭蕉が旅寢の曉の所在なさに、宿を出てぶら〳〵海岸を散歩してゐると、折から渚に引上げられた白魚が、まだほの暗い中にくつきりと見えた。しかもそれが一かたまりの白さでなしに、長さ一寸ばかりの白さが一つ一つ鮮かに眼に映つた。「白きこと一寸」といふ叙法が、この情景をはつきり描き出してゐる。一寸といへば冬の末から春の初め頃へかけての白魚の大きさだといふから、この句は全く實景を十分に捉へてゐるわけだ。

沼波瓊音氏の解に、「あけぼのや」の大景に「白魚」の纎細が對照された點を說いてゐるのも面白い。なほ支考の『笈日記』によると、此の句はもと上五「雪薄し」とあつたのを、後ちに「明ほのや」と直したのだといふ。芭蕉が推敲のあとを見るべきである。

山路來て何やらゆかしすみれ草

紀行によると「大津に至る道山路を越えて」とあるから、逢坂山あたりでよんだらしい。ところが其角の『新山家』、越人の『鵲尾冠』等をはじめ數書には箱根山での吟だと傳へて居り、又『皺箱物語』には尾張の白鳥山での吟として記されてある。しかし紀行は芭蕉自身のかいたものであるから、それを正しいとする外はあるまい。かつ假令箱根山での吟であつたとしても、場所の如何は此の句の解釋上さして必要な問題ではない。それがどこかの山路でさへあればよい。旅人がその山路でふと見つけた一莖の菫草、普通路傍で見ては大して心も惹かれないのに、かうした寂しい山中で見つけると、異境で知人にめぐりあつたやうな氣さへする。何となくなつかしまれてじつとその可憐な花に見入らずには居れない。「何やらゆかし」とぼんやり言つた所に、その取りとめもなく一莖の花に心が惹かれて行く情が、よくあらはれてゐる。大きくいへば芭蕉が自然に對する愛の發露である。否更に人間に親しむ眞情のあらはれである。だがそこまでは言はぬ方がよい。どこまでも何やらゆかしいほのかな情の動きである。

○山路來て　この中七、皺箱物語には「何とはなしに」とあるが、三冊子によれば後にかく作りかへたのであるといふ。
○新山家　其角が貞享二年五月箱根温泉に遊んだ折の紀行。
○鵲尾冠　越人一派の發句連句集。享保二年刊。
○皺箱物語　扇川堂東藤撰。元祿八年刊。芭蕉が貞享年間熱田に來遊した時の遺詠を錄す。

辛崎の松は花より朧にて

其角の「雑談集」によると大津の尚白亭での吟だとし、千梅の「鎌倉海道」には、この句に千那が

　山は櫻をしぼる春雨

と付けた脇句があるのを證として、堅田の千那亭での作だといつてゐる。しかしこれも作つた場所などは穿鑿する必要がなく要するに前書の如く湖水の眺望たる事が分ればよい。湖水の面も湖邊の花も、すべて朧々と霞んだ春の夜である。中にも辛崎の古松は花よりも朧で、一しほ趣が深いといふので、句意は極めて平明である。たゞこの句は切字が全くないので、古來これについて説をなすものが多い。或は「辛崎祕傳」などといふ愚にもつかないものまでもある。しかし切字とは畢竟形式上の論にすぎない。勿論それも一應必要な事にはちがひないが、格に入つて格にとらはれない所に達人の融通自在がある。「哉」でなく「にて」で終へてゐるので、縹緲たる餘韻が生じて來るのである。芭蕉自身はこの切字の有無について、「いはゞさゞ波や眞野の入江に駒とめて、比良の高根の花を見る哉。たゞ眼前なるは。」と言ひ、又其角と去來の

○辛崎の　「湖水の眺望」といふ前書がある。以上野ざらし紀行中の句。
○尚白　江左氏、伊勢の人、近江大津に住し、医を業とす。芭蕉の門人。享保七年歿、年七十三。
○鎌倉海道　千那の三回忌集として門人千梅の撰んだもの。享保十年刊。
○千那　近江堅田本福寺の住職。芭蕉の門人。享保八年歿、年七十三。
○いはゞ云々　この事其角の「雑談集」に見える。
○眞野の入江　近江國滋賀郡にある。

論を聞いて、「角※・來が辯皆理窟なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみ。」とも言つたといふ。誠に「たゞ眼前なるは」である。芭蕉のこの一語があるのに、なほ論を加へるのは所詮無用の指を立てるものである。

なほこの句について晝夜の論がある。しかし季題としての「朧」は、――この句は「花」もあるが、それは主題となつてゐず、「松」は無季だから、やはり「朧」が季題となつて居るのである。――元來朧月夜の意である。かうした季の詞については、やはり一定の約束が守られて居た當時の事であるから、隨つてこれは夜景と解する外はない。

※古池や蛙飛びこむ水の音

古來やかましい句である。支考は、『俳諧十論』の中に此の句を以て、芭蕉が始めて幽玄の體に眼を開き、俳諧の一道を弘める基となつたものだと說いたので、美濃派の人々には特に尊ばれてゐる。しかしすでに越人は此の說を駁して『※次韻』を以て當流の開基だとし、又其角なども『次韻』が蕉風の根元をなしたものと言つてゐる位で、必ずしも此の古池の一句で突然芭蕉が俳諧の心眼を開いたものと解する必要はなからう。特に『古池眞傳』などといふ書が傳はつ

○角・來が云々　この事「去來抄」に見える。

○古池や　此の句は「春の日」に始めて出てゐるのだが、同じ貞享三年に刊行された西吟の「庵櫻」には「古池や蛙飛んだる水の音」といふ形で出てゐる。しかし勿論之は誤傳にちがひなく「飛んだる」では味ひがすつかり稀薄になつてしまふ。ぜひとも「飛びこむ」でなくてはならない。

○次韻　伊藤信德の「七百五十韻」について、桃靑、芭蕉、其角、才丸、揚水の四人が催した二百五十韻。延寶九年刊。

〔芭蕉筆蹟　東京　本山鼎寶氏藏
ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを

○葛の松原　支考の俳論を記したもの。元祿五年刊。

てゐて、これを全然宗教的な悟りに附會して說いて居るが如きは、此の句を尊重するのあまり、所謂贔屓の引倒しになつたものである。又これを深川の芭蕉庵の實景だと泥んで解するにも及ばぬ。

要するにどこでもよい、青く水の淀んだ古池がある。そこへ突然ポチャンと蛙の飛び込んだ音が聞えたのである。そして水面に大きな波紋を殘したまゝで、やがて又もとの靜寂にかへる。さうしたいはゞ靜中の動、動中の靜といつたやうな刹那の境界を捉へた句である。靜かに目を瞑つて蒼く湛へた古池を思つて見るがよい。そしてその靜けさを破つて突然勢よく跳び込んだ蛙の音を想つて見るがよい。徒らに千言萬語を費す必要はないのである。箇中の消息は自ら領會するものがあるだらう。

芭蕉筆蹟

なほ支考の「葛の松原」によれば、此の句は最初「蛙飛び込む水の音」といふ七五だけを得て、上五文字を案じてゐた時、其角が傍らにゐて「山吹や」とつけた。しかし芭蕉はそれをとらないでたゞ古池と定めたのだといふ。そして支考は

○**君火をたけ**　この句貞享四年の「續虚栗」に出で「對友人」と前書がある。なほ曾良の遺稿「雪丸げ」には此の句に「曾良何某此のあたり近くかりに居をしめて朝な夕なに訪ひつ訪はる。我食物「クヒモノ」營む時は柴を折くぶる助けとなり、茶を煮る夜は來りて軒を叩く。性隱閑を好む人にて交り金を斷つ。ある夜雪に訪はれて」といふ詞書がついてゐる。

○**宗波**　江戸本所原庭の定林寺住職。貞享四年の鹿島詣の時も曾良と共に芭蕉に隨行した。

○**苔翠**　江戸深川の人で芭蕉庵の近くに住んで居た。のち岱水と字を改めてゐる。

○**深川八貧**　米買ひに雪の袋や投頭巾」の句がその一としてあげられてゐる。

山吹といふ五文字は風流にして花やかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也、

といひ、更に、

然るを山吹のうれしき五文字を捨てて、只古池となし給へる心こそ淺からね。

と芭蕉を讃美してゐる。此の話は支考の作りごとではなからう。いかにも山吹では其角らしい花やかさはあるが、到底古池の落ちついた深みは得られない。山吹を配したのでは、畢竟寫生以上の何物をも言ひあらはし得ないであらう。古池だからこそ此の句が芭蕉の名と共に不朽の作となつたのである。

君火をたけよきもの見せむ雪丸げ

「雪丸げ」の詞書で知られる通り、芭蕉が深川の草庵で、雪の夜に門人から訪はれて作つた句である。——謙遜な芭蕉は門人に對しても、多く自分では友人と言つてゐる。曾良は當時宗波、苔翠等の人々と、常に師翁を訪ねて薪水の勞にも服して居たのであつた。「雪丸げ」の深川八貧の句などを見ると、芭蕉のその頃の清貧の狀が想はれる。

さて此の句意は「あ曾良か、いゝ時に來た一人で淋しがつて居たのだよ。ところで、お客

○よく見れば　これも「續虚栗」中の句。

○花の雲　「續虚栗」に出で、「草庵」と前書がある。

樣に差上げる御馳走もなし、まあ爐に火でも焚いてあたつて居てくれ。いゝものを見せて上げるから。それこの庭の雪で、一つ私が雪丸げをこしらへて見せるよ」といふので、芭蕉が雪夜に客を得て輕く興じた心もちが見える。そして主客の親しげな對座のさまもなつかしまれる。

よく見れば薺花咲く垣根哉

詩人の心は萬物をいとほしむ心である。どんな小さな自然の中にも彼は天地の悠久と造化の驚異とを感ずるにちがひない。さうした心が此の句を生んでゐる。

花の雲鐘は上野か淺草か

前書によればやはり深川の草庵に居ての句である。陽春三月世は花盛りで、上野淺草あたりには只花の雲が霞と共にたなびいてゐる。その花の雲を渡つて響いて來る晝の鐘——々の鐘でもよいかも知れぬが、句全體から受ける感じは眞晝の暖かさ長閑さである。それも霞んで上野の鐘とも淺草の鐘とも聞き定められない。眠たい程長閑な心もちである。作者は草庵の中

に靜かに橫はつてゐるのであらう。花の雲は窓外にそれと見えて居てもよいが、勿論實際に見えなくても差支へない。もし其角はこの前年芭蕉がよんだ

　觀音のいらか見やりつ花の雲

と共に、此の句は一聯二句の格だと言つて居るから、實際淺草觀音の屋根位は見えたのであらう。ただ花に包まれた都のさまを想ひやつて居ればよい。そして鐘の音を聞いてゐる。「上野か淺草か」と疑つた叙法が、いかにもさうしたゆるやかな心境を自然にあらはして居る。

　五月雨に鳰の浮巣を見に行かむ

これは格別すぐれた句といふのではないが、土芳の『三冊子』に

春雨の柳は全體連歌なり、田螺取る烏は全く俳諧なり。五月雨に鳰の浮巣を見に行くといふ句は、詞に俳諧なし、浮巣を見に行かんといふ所俳なり。

といふ說が見えるので、これに基いて些か芭蕉俳諧の本質に關して論じて見たいと思ふ。

貞德以來俳諧と連歌とを分つべき要點とした俳言を、芭蕉は俳味ともいふべき內面的の意義にまで深めた事については、さきに一言しておいた。今この『三冊子』に說く意は、たとひ句

○五月雨に　この句「笈日記」に出で、「露沾公に申侍る」と前書がある。なほ杉風の家に傳へた眞蹟によれば貞享三四年頃の作と推定される。

○鳰の浮巣　鳰は葦や藻莖を集めて水上に巣を營む。和歌などではよく寄る邊定めない意などを寓してよまれて居る。

○土芳　伊賀上野の人、服部氏、蓑虫庵・此中庵と號す。芭蕉の門人。享保十五年歿、年七十四。

○三冊子　土芳が芭蕉の說話を記錄したものだといふ。白・赤・黑の三冊子から成る。安永五年刊。

の表に俳言がなくとも、句中の情趣に連歌とちがつた點が認めらるればそれは俳諧だといふので、つまり俳諧と連歌を分つ要點が、形式よりは内容に存する謂である。

さて春雨に烟る青柳の美しさは優雅な和歌や連歌の趣味である。田螺を啄む鳥の姿には、さうした優雅な美しさはないが、そこには又連歌の境地とはちがつた自然の情趣が味はれる。それが即ち俳味なのだ。そしてこの俳味は畢竟連歌の貴族的趣味に對立すべき民衆的趣味である。由來俳諧はその發生から考へられる通り、民衆の文藝として特殊の展開を遂げたものであつた。俳諧の理想を和歌連歌と同一の所に求めても、もしこの俳諧の歴史性に基く民衆趣味を失つたならば、それは結局俳諧を連歌の昔に復したにすぎない。然るに芭蕉は新にかうした所謂俳味の境地を捉へて、そこに連歌と同一の詩趣を見出さうとしたのである。而してこの俳味こそ貞門時代以來の俳諧に代つて、俳諧の民衆性を藝術的に保持すべきものであつた。芭蕉が藝術家としての偉大さは、實にこの俳諧の歴史性・民衆性に即しつゝ、之を和歌連歌と同じ水準線の文藝として大成せしめた點にある。

さて句の解釋にかへらう。田螺とる鳥を俳諧にすれば、その情趣が俳味たるのみならず、「田螺」といふ俳言も自ら取入れられる。然るにこの五月雨の句では、どこにも俳言、即ち俗語や漢語はないのである。特に鳰の浮巣は和歌や連歌にも屢々よまれて居る題材で、形式上から

○旅人と　笈の小文・續虚栗・夏の月等に出で、又「千鳥掛」(知足撰、貞享年間成、正德二年刊)には謠曲「梅枝」の一節「はやこなたへと夕露の蓬の宿はうれたくとも、袖を片敷きて御とまりあれや旅人」といふ文句を、墨譜まで附してそのまゝ前書としてある。

いへば連歌の發句と選ぶ所がない。だが鳰の浮巣を見に行くといふ所に俳趣が生ずる。といふのは、もしこの鳰の浮巣を、和歌・連歌と同じく、水に隨つてよるべないさまなどによんだら全く連歌になる。しかしさうした言はゞ風雅の題材にされる鳰の浮巣を、わざ〳〵江戸から近江くんだりまで見に行かうといふ風狂が、今まで歌人などに見出されなかつた境地である。それは必しも民衆趣味といふものではないかも知れぬが、少くとも鳰の浮巣を詩材とした場合の傳統的な考へ方から解放されて、全く自由な新しい立場をとつて居る事は明かである。しかもそれは決して文藝的に低い俗意俗情から發したものではない。なほこの點については多くの例をあげて述べたいが、今は姑くこれだけに止めておく。しかし又機會ある毎に、この問題に觸れつゝ說いて見たいと思ふ。

旅人と我が名呼ばれむ初時雨

貞享四年十月十一日、芭蕉が江戸を立つて故郷の伊賀に赴かうとした時の吟である。その時の紀行『笈の小文』には

神無月の初空定めなきけしき、身は風葉の行方なき心地して

とあつて此の句が見え、これに岩城の長太郎といふ者が、

又山茶花を宿々にして

と脇を付け、其角の家で餞別會を催してくれたとある。

降りみ降らずみ初時雨の空定めなき頃、かうして寂しい旅に出ようとして居る。だがその自分を旅人として客観的に眺めて見ると、いかにも面白い。どこか行暮れた雀の宿で、御泊りあれや旅人ともてなしてくれる所もあるかも知れぬといふので、寂しさの中に旅を喜ぶ情がある。「旅人と我が名呼ばれむ」と自分が突離して、そこに初時雨に濡れつゝ急ぐ旅人の姿を想見したのである。

故郷や臍の緒に泣く年の暮

芭蕉は江戸を立つてから尾張の鳴海に暫く足をとゞめ、越人と伊良胡崎の杜國を訪ねたりして、その年も暮れる頃故郷にやつて來た。此の句はその時の作で、「千鳥掛」には次のやうな長い詞書がついてゐる。

代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は始めの老も四とせ過ぎ

（長太郎）[illegible]之といふ俳號で見え、當時餞別として[illegible]

（故郷や）この句を「笈の小文」中の作。[illegible]

（杜國）芭蕉の門人、名古屋の米商[illegible]、當時罪を得て伊良胡崎に流謫[illegible]

○伊陽　伊賀。

○三年前　貞享元年の暮であつた。

て、何事につけても昔なつかしきまゝに、兄弟の數多齡傾きて侍るも見捨て難く、初冬の空のうち時雨るゝ頃より雲を重ね霜を經て、師走の末伊陽※の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく思ふ事のみあまたありて、

芭蕉は三年前にも故郷で歳の暮にあつた。しかしまだかうした述懷は洩らして居ない。だが今度は自分の身にも老境を覺え、兄や血族の人々の老い行く事も悲しく思はれたのであらう。自ら亡き父母の事も一入思はれるのであつた。臍の緒といふのは、今も田舍では、やつて居る通り、子供が生れると、その生年月日を記した紙片等と一しよに、大切に藏つて置いたものである。

句は芭蕉が歸省中兄の家で、はからず自分の臍の緒を見つけて、急に父母を思ふ情で胸が一杯になつたのである。但しこの臍の緒といふのは、只兩親に繋がる血縁を具象化しただけで、實際の物を見て居る譯ではないといふ説もある。しかしそんな抽象的な聯想だけでは、此の句の悲愴な感じは到底捉へられない。「臍の緒に泣く」といふ表現は、決して只血縁を具象化した言葉ではない。もつと強く切實に響いて來る。實際眼の前に臍の緒その物を見て居なければ出て來ない痛切さを持つて居る。長い詞書は只此の句の註釋に過ぎないのである。かうした濃やかな人情に溢れて居るのは、實に芭蕉の詩人的要素の一で、彼を單に風雅な自然詩人とのみ解

○お子良子の　貞享五年[illegible]年）の作で、やはり「笈の小文」中の句。

○お子良子　伊勢神宮の神事に奉仕する少女の稱で、[illegible]い者を選ぶといふ。その少女たちの居る所をお子良の館[illegible]。

○景清も　元禄[illegible]年の句。[illegible]に始め諸書に出づ。中七「きれ〴〵」には「花見の座では」とある。

するのは、その一面しか見ない誤つた觀察である。

お子良子の一本ゆかし梅の花

此の句は伊勢での吟で、紀行には

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有る事にやと神司などに尋ね侍れば、只何とはなし、
自ら梅一本もなくて、子良の館の後に一本侍るよしを語り傳ふ。

とあつて此の句が出てゐる。芭蕉はその子良の館に一本だけ梅があると聞いて、そこまでわざわざ出かけた。すると廊下などでふと見かけた一人のお子良子、神に奉仕する無垢な少女のさまが、そこに咲く一本の梅の氣高さにも似通つて居たので、つい「一本ゆかし」といふ句が浮んで來たのであつた。句の表面は勿論梅を季題としてよんで居るのであるが、芭蕉の感興はむしろふと見かけたお子良子の淸楚なさまにあつたのであらう。

景淸も花見の座には七兵衞

景清といへば平家でも聞えた豪勇の武士、何となく四角張つたしかつめらしさを感ずるのだが、その景清も清水あたりの花見の座では、名もいさゝか柔らかい七兵衛殿でをさまつて居るといふので、滑稽の句體である。

特にこゝに景清の名を選んだのは、それがすぐ勇士としての聯想をもつてゐるばかりでなく、一面また五條坂の遊女に馴染んだなどといふ艶めいた傳説があるからであらう。※支考は此の句と

昔聞け秩父殿さへ相撲取

といふ句とを即興體としてあげ、こゝを俳諧の滑利とすと知る可しと說き、江戸の俳諧を俗化させた※不角などは、芭蕉風といつても古池の句の趣一途ではいかぬ、この景清の句を味はへ、と言つて、自分の方に都合のよい解釋をしてゐる。それだけ此の句には談林や後の江戸座風の、感興本位なところがあつて、芭蕉の句としてはやゝ趣を異にしたものである。しかし決してその感興は俗悪なものではない。輕く無邪氣な笑である。

※草臥れて宿かる頃や藤の花

○支考は云々　この事支考の「古今抄」に見える。

○不角　三二〇頁を見よ。この事はその撰した「江戸菅笠」の自序中に論じてゐる。

○草臥れて　この句は笈の小文・猿蓑等に出で、又「泊船集」には「大和行脚の時に丹波市とかやいふ所にて日の暮れかゝりけるを、藤の覺束なく咲きこぼれけるを」といふ前書がついて居る。

芭蕉は元祿元年の春を故郷に迎へて、伊勢參宮をした後、三河からかねての約をふんでやつて來た杜國と一しよに、吉野の花見に出かけた。此の句はその途中大和の丹波市でよんだものである。

一見平凡なやうでしかも容易に到り得ない俳諧の眞趣を捉へて居る作だ。一日の旅に歩き疲れた足を重く引きずつて、とある村里にさしかゝつた。もう日も暮れかゝつたし、今日はこゝらで宿を求めようかしら。さう思つてあたりを見廻すと、そこに覺束なく咲きこぼれた藤の花がある。その淡紫の花の色に、春の夕の淡い旅愁が象徴されて、情と物とぴつたり融け合つて行くやうだ。誠に景情一如、縹渺として盡きない趣が味はれる。

∨ 父母のしきりに戀し雉子の聲

吉野の花を見た芭蕉は、それから高野山に登り、和歌の浦で行く春に追ひついて、灌佛の日は奈良へやつて來た。そして須磨明石まで遊んだのであつた。この句は高野山での吟で、行基菩薩が高野でよんだと傳へる歌をふまへた作である。故郷で臍の緒に泣いた芭蕉が、高野特にこの靈場の高野で、しきりに亡き父母を戀ふ情に堪へなかつたのは、さもあつたであらう。

○覺束なく云々　泊船集の詞書に「藤の覺束なく」とあるのは、徒然草の本文「藤のおぼつかなきさましたる」によつたのであらう。

○父母の　笈の小文中の句で、「高野」と前書がある。

○行く春に追ひついて　笈の小文に「行く春に和歌の浦にて追附たり」の吟が出て居る。

○行基菩薩のうた　「山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」

○蛸壺や　猿蓑・笈の小文等に出で「明石夜泊」と前書がある。

○面白うて　この句は曠野・泊船集・笈日記・青莚・渡し船・初蟬・菊の香・笈の小文等の諸集に出て、芭蕉の作中でも汎く知られたものの一である。元禄元年の作。

蛸壺やはかなき夢を夏の月

明石あたりでは今も蛸壺で蛸を漁つて居る。芭蕉もこゝに一夜を明したをり、蛸壺を海に沈めるさまを實見したのであらう。明日は海から引上げられるのも知らず、蛸は壺の中ではかない夢を貪つて居る。それがはかなく明ける短い夏の夜の月の趣と通つて、こゝに芭蕉の詠歎となつたのである。「はかなき夢を」のをは下に受ける言葉がない。「見るらむ」といふやうな言葉が略された形ではあるが、それをはつきりさうときめてしまふ必要はない。寧ろかうぼんやり言ひ廻した所に蛸壺のはかなさと夏の月の儚さとが、一句の中にかすかなしかも複雑な關係で結び付けられるのである。これは一種の俳諧的修辭であつて、普通の文法で律するわけには行かない。

面白うてやがて悲しき鵜舟哉

岐阜での吟である。「笈日記」によれば鵜飼を見ようと夕方から人々に誘はれ、稲葉山の木陰

に席を設けて盃をあげ、そして

又やたぐひ長良の川の鮎膾

などと興じた後の作であるといふ。そして「鵜舟も通り過る程に歸るとて」といふ前書がある。すると句意は最初は鵜飼の面白さに興じて居たが、やがて夜も更け人も散じ、鵜舟も通り過ぎる程になつたので、歡樂極まつて哀情多き感にうたれたといふのである。

「徒然草」に祭を本當に見たといふのは、その祭が果てたあとの淋しい大路のさまを見てこそ言ひ得る事だといふ一節がある。この句はさうした兼好の心境と一脈似通つた所がある。篝火の光も次第にまばらになつて、鵜舟は空しく流れ過ぎて行く。さつきまであの木陰で打興じて居た心持を振返つて見て、今の淋しさは何といふ變り方であらう。あゝ面白うてやがて悲しい世の中であるわい。芭蕉は目の前に流れ行く鵜舟を見ながら、低く此の句を口吟んだ。

なほ芭蕉の自筆に、この句の中七を「やがてなかるゝ」と書いたものがあつたといふ。「なかるゝ」は「泣かるゝ」で、それを後に「悲しき」と案じかへたものであらう。「悲しき」はあまりに主觀的な叙し方だといふ評もあるが、この歡樂から哀情に移り行く心境は、やはり「面白うてやがて悲しき」といふ方に深く味はれる。そして最後の「鵜舟哉」で眼前の景を點じて、説明的な主觀の單調さから救はれて居る。又これを解して、鵜が魚を捕る面白さか

〇芭蕉の自筆に　「菊の香」にこの句をあげ、又別に此句畫子が所持の翁の自筆には」とあつて、「面白うてやがてなかるゝ鵜ぶねかな」とあげてある。畫子とは何の事であるか。

ら、忽ち殺生の罪に思ひ至り、その悲しみをのべたのであるとする人もあるが、それこそ全く説明的でつまらない俗解である。

棧や命をからむ蔦かつら

芭蕉はこの旅からの歸途尾張に立寄つた。そして折から仲秋の頃であつたので、門人の越人を誘つて更科の月を見に出かける事にした。その途中の吟である。木曾路の嶮岨なさまは紀行の中に委しく記されてある。その名高い木曾の棧道に、蔦かつらが危く纏ひついて居る。芭蕉と越人とは一歩を誤れば溪流に陷る難所を、こは〴〵傳ひ行くのである。命限りとからみついて居るのは蔦葛であるが、それは又二人の心もちそのまゝでもあつた。芭蕉の句には、かうした自然の景物の中に、彼自身の心を提へたやうな作が多い。これを下手に眞似ると主觀の露出に過ぎない月並に墮するが、芭蕉の句の妙味は又こゝに想到しなくては得られない。

冬籠り又寄添はむこの柱

○棧や　更科紀行中の句。

○紀行　いはゆる「更科紀行」である。

○冬籠り　曠野その他諸書に出づ。

去年の冬は旅で過したが、今年はこの草庵に冬籠りをする事だ。いつも自分が寄りかゝる癖のある一本の柱、今年もまたこの柱によりかゝつて冬を暮すことかなあ。さう呟きながらしみじみとその柱を撫でて見てゐる芭蕉の姿が想はれる。「寄添ふ」といふ言葉に十分の親しさと懐かしさとが含まれて居る。この句をよむと、芭蕉の靜かな心もちが、しみぐとなつかしくなつて來る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

芭蕉は元祿二年の春又も道祖神のまねきにあつて、門人曾良を作ひ奥の細道の旅に上つた。この句はその紀行の最初の吟で、

住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

といふ本文からつゞいて居る。卽ち芭蕉は旅行に立つ前、深川の草庵を誰かに讓つて、一時杉風の別莊に引移つて居たものと見える。芭蕉のあとに引越して來た人は、『一葉集』によれば妻や娘等の家族が大勢居たらしい。『笈日記』にも「俗なる人」と言つて居る。とにかく芭蕉のやうな世捨人ではなかつた。そこでこの句がよまれたわけである。

○草の戸も　この句はなほ笈日記・泊船集等にも出、笈日記には「昔この叟の深川を出るとき此の草庵を俗なる人にゆづりて」と註して居る。又一葉集には「はるけき旅の空思ひやるにも、いさゝかも心にさはらむものなつかしければ、日頃住みける庵を相知れる人に讓りて出でぬ。この人なん妻を具し娘孫など持てる人なりければ」と詞書がある。これはこの出典が明でないが、一句の解釋上には大に參考とすべき文言である。

○曾良　信州上諏訪の人、岩波氏。のち河合惣五郎といひ芭蕉に師事す。寶永七年壹岐勝本に客死した。年六十二。

○一葉集　佛兮・湖中共編。文政十二年刊。芭蕉一代の述作・遺語等を集む。

「草の戸」は草庵と言ふに同じい。「住みかはる代」は住みかはるべき時世時節であつて、時代の意ではない。一句は、自分が住みふるした侘しいこの草庵ですら、やはり住みかはるべき時は來るものだ。しかも今度の新しい主は自分のやうな世捨人ではない。妻もあり娘もあるのだから、折から雛祭の頃であるし、今までの侘しさとは引換へて、華やかな雛人形なども飾られるだらうといふのである。住みかはるべき人もあるまいと思はれる草の戸にすら、變替順環の時が至る事を嘆じ、しかも舊主の枯淡索莫であつた生活に比して、新主の華やかなるべきさまを對したのである。

一説※に芭蕉のあとへ雛商人が移つて來たので、住主の交替を、雛の納箱※に雛を入れかへるのに比したのだといふが、「雛の家」をさう解するのは、言葉としてすでに無理であり、又一句の解もそれでは面白くない。

行く※春や鳥啼き魚の目は涙

芭蕉が愈〻奥の細道の旅に出で立つたのは、元祿二年彌生も末の七日の曉方であつた。宵から集つて居た親しい門友たちは、千住※まで舟に乘つて送つて來た。そこで舟を上つて芭蕉は人

○一説　奥の細道を註釋した「菅菰抄」の中に見える説。

○雛の納箱　鏡を納れる箱を鏡の家、秤を納れる箱を秤の家などといふ例に從つた解であるが、雛のいれものを雛の家といつた用例はない。

○行く春や　この句は奥の細道を始め、鳥の道・泊船集・安達太郎根等の諸書に出て居る。

○千住　センヂユ。今は東京市内であるが、昔時は奥州街道の宿驛であつた。

人と最後の別れの言葉を交した。句はその時の留別の吟である。

※幻の巷と思ひ捨てても、流石に前途三千里の思ひには、胸も塞り涙も自ら湧いて來るのであつた。折から春も逝かうとして居る。空に飛ぶ鳥、水に遊ぶ魚も、何となく春の名殘を惜しみ悲しんで居るやうである。而してその魚鳥の情は、やがて芭蕉自身の別離の悲しみに通ふものであつた。

「魚の目は涙」といふやうな、一見技巧的な表現を用ひて居ながら、しかも離別の現實感が惻々と人を動かすのは、自然の情と芭蕉の心とがぴつたりと合つて居るからである。留る者を魚に比し、行く者を鳥に喩へたのだといふ說もあるが、作者の意中まづさうした比喩的觀念が存して、これを一句に表はしたのではない。たゞ離別の悲しみを、そのまゝ魚鳥の情に託したのである。なほこの句の趣向の基く所として、※古詩・古歌等がいろ／＼あげられて居るが、それらの出典は單に參考に止めるべき程度のもので、芭蕉の句が直接それらをふまへて成つたものと見るには及ばない。

※あらたふと青葉若葉の日の光

○留別の吟　見送られる人が、見送りの人に殘す吟。

○幻の巷と云々　俳文篇、奥の細道の本文參照。

○古詩・古歌等　杜甫の詩句「感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心」や古樂府の「古魚過レ河泣、何時還復入」等をあげたり（菅菰抄）、又古今集の「なき渡る雁の涙や落ちつらんもの思ふ宿の萩の上の露」（錦江、奥の細道通解）が引かれたりして居る。

○あらたふと　初蟬にはこの上五が「たふとさや」となつて居る。別案であらう。

日光の東照宮に詣でての吟である。もしこの事實を知らないで、卒然としてこの句に對したならば、讀者は恐らく青葉若葉に照り輝く初夏のまぶしい日の光を、眼前に想ひ浮べるであらう。それは新鮮なしかも莊嚴な自然美である。この景に對して、いきなり「あらたふと」と打出した言葉に、深い感激が籠つて居る。初夏の自然を讚美した句として、誠にすぐれた作だと感ずるにちがひない。しかしこれを「奥の細道」の本文からつゞけてよんで見たなら單に純粹な自然禮讚の作とのみ受取る事は出來ない。況んやその初案が「木の下闇も日の光」であつたとすれば、此の句を芭蕉が制作した動機は、全く家康の威德を稱へるのにあつた事は明かである。而して少くとも右の初案のまゝであつたなら、畢竟それは淺い觀念的な句として以上には評價する事が出來なかつたであらう。しかし芭蕉が日光の廟前に跪き、四邊のすがすがしい初夏の自然に對した時、彼の心に湧いた敬虔な感激は、決してさうした觀念的のものではなかつたのだ。

芭蕉が「木の下闇も」で滿足出來なかつた理由がそこにある。もともと「青葉若葉の」とよみかへた所で、東照宮讃仰の意を籠めて居る事に變りはない。しかしそれはもはや「木の下闇」で天下の蒼生を說明したやうに、一の道具立として用ひられたものではなかつた。青葉若葉に照り輝く日の光の莊嚴さが、そのまゝ四表に光被する家康の威德と感ぜられるのである。即ち

○奥の細道の本文　「今この御光(家康の威光の意)一天にかゞやきて恩澤八荒にあふれ云々」といふ本文が前にある。なほ俳文篇參照。

○初案　芭蕉が行脚の當時高久角左衞門の爲に書殘した眞蹟によれば、

　　日光山に詣

あらたふと木の下闇も日の光

とある。「木の下闇」は卽ち遠國邊境を比喩的に現はしたので、さういふ隈々までも恩澤が届くといふ意。

この場合、偉人讃仰の情と自然禮讃の念とは、全く一にして二でない。この句に於る芭蕉の創作態度は、この純一な心境に求められねばならぬ。だからこそ何心もなくこの句をよんだ時、人は先づ自然禮讃の力を強く感じ、それが家康頌徳の意を籠めたものだと知つても、表現に何等のいやみも感じないのである。

この句の如きは技巧的な句ともいへるであらう。「日の光」を兩樣にきかせた點などは、成程技巧にちがひない。だがその技巧は天衣無縫の境地に至つて居る。これを技巧の句といふならば、まさに技巧の至極至妙なるものであらう。

夏草や兵どもが夢のあと

高館での吟である。夏草の上に笠打敷いて低徊顧望、功名の儚きをあはれみ榮華の空しきを歎じて、冷たい涙が頬に傳はるのを拭はうともしない芭蕉の姿、それは「奥の細道」の本文に盡されて居る。

句は目前に茂る夏草を見て、こゝに奮戰した兵どもの昔を想ひやつたのである。「義臣すぐつて此の城に籠り戰つたが、運拙くして敗れ、功名一時の叢となつてしまつた。誠に思へば三

○高館　俳文篇「奥の細道」の本文參照。

○義臣すぐつて　以下皆「奥の細道」の本文の語句によつて解したのである。

○春望の詩　俳文篇七一七頁頭註参照。

代の榮耀も一睡の中で、往時茫々只夢の如しであると、深く古へを想ひ今を歎じて居る。

この句は、紀行の本文にも假り用ひて居る杜甫の春望の詩と同工異曲であるが、趣はよほど異つて居る。杜甫の詩はひたすらに感傷の涙を濺いで居るが、芭蕉の句はすべてを「夢の跡」と觀じ去つた安らかさがある。だがもとよりその安らかさは、芭蕉が時うつるまでも落した涙に、一杯濡らされたものであつた。

五月雨の降殘してや光堂

この句については二樣の解が下さるゝ。一は降殘すを空間的に解するのと、一はこれを時間的に見るのとである。前者に從へば、折から五月雨の空薄暗く、四邊は濛々として居る間に、ひとり光堂のみが、金碧燦爛と人の眼を奪つて居る。五月雨もこゝだけは降殘してかう明るく光つて居るのだらうかといふのである。又後者に從へば、中尊寺の大部はすでに頽廢してしまつてゐるのに、光堂のみがかうして今まで殘存してゐるのは、幾百年の五月雨もこゝだけは降殘したのだらうかといふのである。

右の二解いづれも通ずるやうであるが、此の句が眼前の卽景を主としたのでなく、懷古の意

から發して居る事は、紀行の本文によつて明かである。既に然りとすれば、當然時間的に解する說に從はねばならない。「四面新たに圍みて甍を覆ひて風雨を凌ぐ。暫らく千歲の記念とはなれり」といふのは、光堂のみが幾春秋の風雨を凌いで、暫らく千載の記念として殘つた事を言つたのである。かつ「降殘してや」のてやは過去に對する詠歎に外ならないであらう。なほ時間。空間兩樣の意味を含んでゐるとする說もあるが、それもむしろ徹底を缺いてゐる。五月雨はたゞ當季の景物によつて、幾年の風雨を代表させただけである。

※閑さや岩にしみ入る蟬の聲

出羽の國立石寺での吟である。「佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ」と紀行の本文には記してある。全山は寂寞としづまりかへつて物音一つしない。心もすみ行くやうな思ひである。そこへふとジーと鳴き出した蟬の聲、それはこの靜けさを透して、そこらの※大きな岩の中にしみ入るやうにひゞく。「一鳥啼山更幽」といふ感じである。

芭蕉が立石寺を訪ねたのは五月だから、まだ初蟬の頃ではあるが、とにかく騷がしいものの喩へにさへされる蟬の聲である。それが却つて一層靜けさを深めて行くのは、芭蕉の主觀の深

○閑さや　俳文篇「奧の細道」の本文參照。なほ「初蟬集」等には「さびしさや岩にしみ込む蟬の聲」とあるが、それは初案であらう。

○大きな岩　吉田東伍氏の地名辭書にも「境內危石怪岩崇洞等羅列して、奇景賞愛するに堪へたり」とある通り、立石寺の山内には大きな岩が多いのである。

○集めて涼し　伊達衣・雪丸げ等には中七がかく出てゐる。

さと統一とから來て居る。卽ち「しみ入る」といふ一語によつて、蟬の聲がたゞ一筋なる靜の中に融け込んで行くのだ。それは靜中の動であり、又同時に動中の靜であつた。芭蕉にして始めてこの靜動無二の相を打出すべき一語が、下し得たのである。

五月雨を集めて早し最上川

芭蕉は最初この句の中七を「集めて涼し」※と作つたが、後に「早し」と直したのであるといふ。「涼し」と「早し」とでは感じがすつかり變つて來る。芭蕉が最初實景を見た時は、兩岸の青葉の色を映して滔々と流れる水を涼しく感じたのであらう。しかし最上川といふ大河から全體的に受けた印象、それをあとで振返つて見ると、涼しでは何か物足りなかつた。庄内の山河に降り注ぐ雨を集めて、矢の如く流れ行く大河、それはやつぱり早しと端的に言つてしまはなくては、あの豪壯な感じは出て來ない。さう思つて芭蕉は後で早しと改めたのであらう。

一體芭蕉は一度句を作つても、それをそれつきり捨ててしまふといふ事はなかつた。折にふれ再案三案、屢々舊作をも練り直した。かの

大井川浪に塵なし夏の月

○一に[illegible]・[illegible]・なぶの[illegible]に載て居る。

といふ句は、それから後によんだ

　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

と紛らはしいからといつて、

　清瀧や波に散込む青松葉

としかへた話などは、「笈日記」に傳へられて居て人のよく知る所であるが、すべての句に亙つてかうした良匠の苦心はあつた事であらう。「涼し」と「早し」とでは全く感じが違ふから、芭蕉が實感に卽しない机上の句を弄したのだなどと解するのは誤りである。

　象潟や雨に西施が合歡の花

句の形は一に

　象潟の雨や西施が合歡の花

と傳へられて居る。その方が句意は聞え易いが、「や雨に」の含蓄ある叙法が、寧ろ縹緲とした句趣にふさはしい。

象潟の景は紀行の本文にも「恨むが如し」と言つて居るが、しかもその雨中の趣はさながら

西施が惱んで眠つてゐるやうだといふのである。眠を當季の景物合歡の花に言ひかけてある。そしてこゝへ特に西施を持ち出したのは、本文にも引いて居る蘇東坡の詩をふまへたのであり、又合歡の花は掛詞であるが、自ら花葉の容姿が女性的な美しさとしをらしさとを持つて居るからである。大體技巧的な句ではあるが、かうした故事古典等をふまへて、しかも知識的な興味のみに終始して居ない。雨に模糊たる象潟の景趣が彷彿として浮んで來る。合歡の花も技巧的に持出しただけでなく、きつとそこらに咲いて居たのであらう。そしてその雨に濡れた花の感じが、しつくりと此の情景に合つてゐるなと芭蕉は思つたにちがひない。

荒海や佐渡に横たふ天の川

これも有名な句で、句意は解するまでもなく明かである。「風俗文選」所載の「銀河の序」などによると、此の句は芭蕉が越後の國の出雲崎から、海上十八里のあなたに横はつてゐる佐渡ケ島を望んで作つたのだといふ。

※日既に海に沈んで、月ほの暗く、銀河半天にかゝりて星きら／＼と冴えたるに、沖の方より波の音しば／＼運びて、魂削るが如く腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば、

○蘇東坡の詩　「水光瀲灔晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜」

○日既に　以下芭蕉の作「銀河の序」の一節をそのまゝ引用したのである。別に「柴橋」「雪丸げ」等にも長い詞書が出て居り、文に異同が多い。

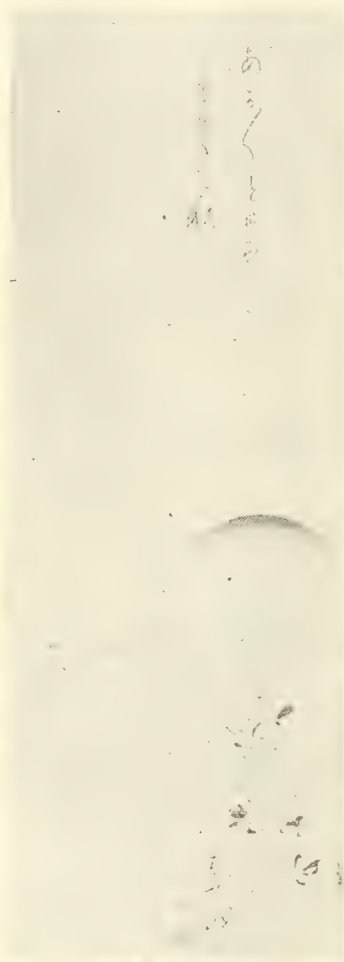
と言つて居る。俯して北海の夜の荒波の音を聞き、仰いで半天にかゝる銀河の流を見る。この天地の大景が僅か十七文字の間に、かくも雄大に言ひおほせられたのは誠に神技といふ外はない。

「横たふ」は他動詞であるから、こゝは文法上「横たはる」と自動詞を用ひねばならぬ。しかしそれでは語勢がたるんで句の強さが失はれてしまふ。かうした特殊の詩形では、文法的な用法などより、感じやリズム等といふ事が、より重視されねばならない。こゝに文法の破格の如きは、所謂問題とするに足りないのである。この句の大きさの前に、さうした問題は自ら消滅してしまふであらう。

、赤々と日はつれなくも秋の風

これも名高い句であるが、しかもその意を誤解して居るものが少くない。その誤解の基く所は、専ら「つれなく」といふ語の本來の意に注意しないのによる。この語は「奥の細道」に「難面」といふ漢字をあてゝある通り、元來物に對して無感情なことを言ふので、「平氣な」とか、「そ知らぬ風な」とか譯すべき語である。そこでこの句意は、もう秋が立つて居るのに、日はそれもそ知らぬ顏で、相變らず赤々と照りつけて居る。しかし流石に季節は爭はれないもの

だ。何といつても吹く風はやつぱり秋らしいといふのである。

これを單に赤い夕日の影に、秋風が物さびしく吹いて居る景色として解するのは、前に述べた如く、「つれなく」の語に不注意な爲である。況んやこれを「暮秋の風姿言外にあり」等と評するのは、全く見當ちがひと言はねばならぬ。曾良の遺稿『雪丸げ』には、

旅愁慰めかねて、物憂き秋もやゝ至りぬれば、流石目に見えぬ風の音づれもいとゞしくなるに、殘暑なほやまざりければ、

とある。又ある人の所持して居た芭蕉の眞蹟には

目にはさやかに見えねどもといひけん秋立つけしき、すゝき苅萱の柴末に動きて、いさゝ

芭蕉筆自畫賛

○暮秋の風姿云々　蓼太の「芭蕉句解」の說。

（芭蕉筆自畫賛　東京　菊本氏藏）
あか〱と日はつれなくも秋の風
はせを

○芭蕉の眞蹟　「句選年考」に下野國長門村長島義左衛門の所持してゐた眞蹟だとしてあげてある。

○目にはさやかに　古今集「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」

か昨日にかはる空のなかめあはれなりけれは、

と前書があつたといふ。初秋の吟である事は明である。殘暑なほやまない間に、はやくも秋風の音に驚いた旅愁の情がくみとられる。又「赤々と」といふ中に、眞晝の光といふよりも、何となく夕日の照り返すさまが感ぜられる。これは所謂言外の餘情であらう。

一※説にこの句の解として

須磨は暮れ明石の方はあかくと
日はつれなくも秋風ぞ吹く

といふ歌を引いてある。果してそんな古歌があるのかどうかは知らぬが、もし有るとすれば芭蕉の句はあまりにその歌に即きすぎて、殆んど存在の必要を認めなくなる。どうもこの古歌といふのや、北枝を試した話等といふのは信用し難いと思ふ。

石山の石より白し秋の風

加賀の那谷寺での吟。この附近は岩石が多くて、觀音の御堂もその岩の上に造りかけてある。その白くからびた石の山に冷たく吹く秋風を、石よりも更に白いと觀じたのである。四季を色

○一説　大江丸の「俳諧袋」に白牛といふ人の説として、これは箕氏の歌で、芭蕉はかねてこの歌を面白いと耳底にとめ、北國行脚の時この詠を得たのだと言つてゐる。そして北枝に最初下五を「秋の山」とおいて示し、その考を試したなどと書いてゐる。

○二見に　其袋・後の旅・泊船集・類柑子等の諸書には「二見へ」とある。
以上奧の細道中の句。

に配すれば秋は白で素秋の稱もある。隨つて秋風を「白し」と形容するのは、決して新しい見方ではないかも知れぬが、それを目前の石山より白いと言ひ切つた所に、此の句の主觀の深さがある。

蛤の二見に別れ行く秋ぞ

半歳の餘に亙る長い行脚を終へて、元祿二年の秋も半ば過ぎた頃、芭蕉は門人達に迎へられて美濃の大垣に入つた。そしてそこで旅の疲れを休める暇もなく、又伊勢の遷宮を拜まうと、舟に乘つて人々と別れたのである。此の句はその留別の吟で、『奧の細道』の本文は此の句で終つてゐる。

「蛤の」は蛤が二見の名物であり、又蓋との言掛から二見の枕詞のやうに用ひてある。次に「別れ行く」も「行く秋ぞ」と下五へ言掛けとなつて居る。全體に言葉の技巧が主となつたやうな作であるが、流石にさうした技巧から來る不自然な破綻を示して居ない。無事に長途の旅を終へて門人たちに迎へられ、今度は輕い氣持ちで再び人々に分れて行く心安さが、自ら句の中に見える。

○初時雨　この句は猿蓑・泊船集等にも出てゐる。又卯辰集には「伊賀へ歸る山中にて」、芭蕉の眞蹟には「あつかりし夏も過ぎ悲しかりし秋もくれて山家に初冬をむかへて」と前書がある。

※初時雨猿も小蓑をほしげなり

『猿蓑』卷頭の句で、集の名の基く所である。芭蕉は伊勢の遷宮を拜して一旦故郷の伊賀に歸つた。その歸る途中での吟であるといふ。淋しい山中である。ハラ〳〵と落葉をうつ雨の音、初時雨が降つて來たのだ。ふと見るとそこの岩鼻か木の枝に、小猿が雨に濡れながら寒さうにしよんぼりしやがんで居る。芭蕉は一寸驚きながら立止つて、その猿をじつと見やつて居た。「おゝお前も蓑でも欲しいんだな」。やがて芭蕉は憐れむやうな、又親しむやうな口調でさう呟いた。芭蕉の情はこの時猿の情へ、そのまゝ移つて行つたのである。

其角は『猿蓑』の序の中に

我が翁行脚の頃伊賀越えしける山中にて、猿に小蓑を着せて俳諧の神を入れ給ひければ、忽ち斷腸の思ひを叫びけむ。あたに懼るべき幻術なり。

と感歎して居る。寒雨に孤猿を配する情景は何人も想ひ及ぶ所であらう。しかしその猿に小蓑欲しげな情を寄せたのは、誠に俳諧の眞趣といふべく、これは和歌や漢詩等の至り得ぬ境地に、物のあはれを深く捉へて居るのである。この句を卷頭として、蕉風の圓熟期を代表する

『猿蓑』が編纂されたのも、決して偶然ではない。

木の下に汁も鱠も櫻かな

花見の句である。樹下には緋毛氈が敷かれてある。折から花は繽紛と散りかゝつて、提重箱の汁も鱠も櫻哉である。『三冊子』によると、芭蕉は自ら輕みを以てこの句をしたと言つて居る。誠に花見る心にふさはしい輕さと朗さとを持つて居る。快い響を作つた句である。

『ひさご』にはこれを發句として、膳所の珍碩が

西日長閑によき天氣なり

と脇をつけ、以下曲水と三吟の歌仙一卷が興行されて居る。この脇句は發句ののんびりした明るい氣もちを承けて、よくその餘情を發揮して居る。

四方より花吹入れて鳰の海

この句は『ひさご』の撰者たる珍碩の居、洒落堂での眺望をよんだので、元來「洒落堂記」

○木の下に　ひさご・華摘・泊船集・木の本・古今短册集等はかくあり、渡し船・浪花置火燵・陸奥千鳥等には「木の下は」とある。

○三册子　一一三頁を見よ。

○珍碩　近江膳所の人、濱田氏、醫を業とし、芭蕉に俳諧を學ぶ。又洒樂堂・洒堂と號す。

○四方より　この句は白馬集・流川集・今日の昔等では下五が「鳰の波」となつて居る。

○鳰の海　琵琶湖の異稱。

といふ文章に添へた作である。その文をよむと、實景は自ら眼前に浮んで來るであらう。

山は靜にして性を養ひ、水は動いて情を慰す。靜動二の間にしてすみかを得る者有り、濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて濁りをすまし、塵を洗ふが故に洒落堂といふ。(中略) 抑おものの浦は勢多。唐崎を左右の袖の如くし、海を抱いて三上山に向ふ。海は琵琶のかたちに似たれば松のひゞき波をしらぶ。比叡の山、比良の高根をなゝめに見て、音羽。石山を肩のあたりになん置けり。長柄の花を髮にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日々にかはるが如し。心匠の風雲も亦これにならふなるべし。

卽ち勢多、唐崎、三上、比叡、比良、音羽、石山、長等、鏡山と、湖を取卷く四方の花が、すべてこゝに吹入れられて、波に散り浮ぶ大觀を叙したのである。「四方より」とか「吹入れて」とか、思ひ切つた言ひ方をした所に、大きな眺望が眼前に展けて來る。「千載集」の古歌の趣に似て、更に雄大である。

先づ頼む椎の木もあり夏木立

名高い「幻住庵記」の終に添へた句である。卽ち元祿三年の初夏の頃、芭蕉が湖南の幻住庵

○山は靜にして　この文、日[illegible]集に出づ。「[illegible]」は元祿十五年刊、[illegible]堂・正秀の共撰。

○珍夕　珍碩の事。

○おものの浦　膳所をいふ。

○長柄　ナガラ。又長等ともかく。三井寺の上方の山。

○千載集の古歌　「櫻咲く比良の山風吹くまゝに花になり行く志賀の浦浪」左近中將良經

○幻住庵記　俳文篇六九六頁參照。

「幻住庵圖」
（文政十年刊「蘆の一もと」所載）

○椎が本の歌　「立ちよらんかげと頼みし椎がもとむなしき床になりにけるかな」

○頼政の歌　「のぼるべきたよりなければ木のもとに椎を拾ひて世をすごす哉」

に入つて、暫く旅杖を留めた時の吟である。句を解するには先づその記の文を一讀せねばならぬ。

　賢愚文質の等しからざるも、いづれか
　幻の栖ならずやと思ひ捨ててふしぬ。

といふ最後の一節から、此の句につゞけて味はふと、芭蕉が此の椎の木陰に身を寄せ

幻住庵圖

ようとする心境が一層よくわかる。旅から旅と世を捨て果てたやうな境界に身を置いた芭蕉も、こゝにしばし草鞋の紐を解くべき草庵を見つけて、やれ〳〵これで先づ當分身を寄すべき蔭が出來たわい。さうした安らかな、しかし淋しい心もちで、芭蕉はこの木陰に身を寄せたのである。

此の句を『源氏物語』の椎が本の歌によつたり、頼政の歌に基いた爲、特に椎の木を持つて來たのだなどと解しては、全く句の本意を誤る。さういふ歌がどこか此の句の背景になつて居るといふのなら宜い。しかしそんな歌をふまへた爲に、椎の木を道具立に用ひたのではない。芭蕉はやはり草庵のほとりに茂つてゐる椎の木を見て、「先づ頼む」と深い感懐を洩らしたのであらう。今も幻住庵の故址を訪れたなら、昔を想はせるやうな椎の木立を見出すであらう。そ

こでこの句を誦して見るがよい。風雅の一筋にたよつて、暫くこゝに身をよせようとした芭蕉の風懐がしのばれるにちがひない。

病雁の夜寒に落ちて旅寝哉

江州堅田にあつて、病中の吟である。落雁で名高い堅田に旅寝して、折から病に臥した自分を、雁に喩へたのである。「去來抄」によれば「猿蓑」撰集の時、此の句と、

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

といづれを入集すべきかについて、撰者たる去來と凡兆との間に議論があつた。去來は病雁をとり凡兆は小海老にまじるいとゞに執し、結局兩句とも入れる事にした。其の後芭蕉はこれを聞いて「病雁を小海老などと同じ事に論じけり」と笑つたといふ。小海老は卽興の句で深く案じ入つたわけではなかつたからであらう。なほ「病雁」はビヤウガンと音讀せず、やはり「ヤムカリ」と訓讀するがよい。

乾鮭も空也の瘦も寒の内

○病雁の　猿蓑には「堅田にて」又横平樂には「堅田にふしなやみて」といふ前書がある。

○海士の家　「病雁の」と同じく芭蕉が堅田でよんだ句。

○ヤムカリ　枯尾花の芭蕉終焉記中には「病ム雁」と假名を送つてある。

○空也忌　十一月十三日。

○住みつかぬ　勸進牒に出で「いねいねと人に言はれても、なほ食ひあらす旅のやどり、どこやら寒き居心をわびて」と前書がある。糸切歯によれば芭蕉が都に旅寝の折、友人竹亭に示した句だといふ。

空也は平安朝の頃空也上人が創めた空也念佛の事で、俗に所謂鉢叩である。空也忌から四十八夜の間洛の内外を鉦と瓢とを叩きながら、念佛唱歌して修行して歩く。その修行に瘦せた空也の僧と、ひからびた乾鮭とを、かれ切つた寒中の感じに配したのである。

『三冊子』によると芭蕉は此の句について、「心の味を云ひとらんと數日腸を絞るなり」と言つたといふから、餘程苦心した作であらう。心の味といふのは、事物の姿の中に潛む本質的なにほひであり、象徴である。それを言取るのは凡眼ではなし難い。鋭い直觀と深い主觀、更に長い間の藝術的修練。それらが相合して始めてこの心の味は味はひ得られる。さうして生れた句は、結局字句の説明註解を超越して居る。讀者の方にもまたその心の味——象徴を十分味はふだけの修練が必要である。それはひとり俳句のみではない。たとへば能。茶の湯。造園。生花。それらはある意味に於ける象徴藝術の粹である。それは歌舞伎芝居や西洋料理や花壇やのやうに、見た者味はつた者には誰にでも分るといふものではない。鑑賞者も亦創作者と同様の修練を經て居なければ、本當の味は分るものではない。

住みつかぬ旅の心や置火燵

○山里は　句は笈日記・泊船集・喪の名殘等に出づ。なほ「蕉翁句集」によると、元祿四年正月伊賀での吟と思はれる。

○蕉門の諸集　篇突・陸奥千鳥・泊船集・梟日記・日團扇（モクウチハ）・續猿・堅田集等に出て居る。但し其の中には句の形に小異あるものもある。なほ續猿には「望湖水惜春」といふ前書がある。

旅を生涯とした芭蕉にもかうした心がある。それは人情の自然である。悪く悟りすましてない所、そこに芭蕉の人間的な親しみを一層深く感ずる。

※山里は萬歳遲し梅の花

山里は萬歳がやつて來るのも大分遲い。その頃には丁度梅も盛りだといふのである。何の奇もないやうであるが、春がやつて來るのさへ遲い山里の長閑な氣分と、暖かに咲きそめた梅の花とが、自然な調和をもつて描き出されてゐる。

行く春を近江の人とをしみける

これは元祿四年、芭蕉が大津あたりに滯在して居た時の吟である。「猿蓑」をはじめ蕉門の諸集に屢々採録され、芭蕉の句中でも古くから汎く知られた作である。

この句については支考の「梟日記」や、去來の「去來抄」等の中に面白い話が見える。門人の尚白がこれを評して、「行く年を近江の人と」と言つても、「行く春を丹波の人と」と作りかへて

も同じ事ではないかと難じたので、芭蕉は去來に向つて、その意見を訊うた。すると去來は、
尙白が言よからず。近江の人と惜み給ふは湖水朦朧たる折節のすみかなればならし。暮春もし丹波におはさば、本よりこの趣向浮ぶまじ。歲暮又近江におはさばこの感なかるべし。風流はおのづからその場にあるものを。
と答へたので、「去來、汝は共に風雅を語るものなり」と、芭蕉の感賞にあづかつたといふ話である。この問答によつて、芭蕉が行く春を近江の人と惜しんだ特殊の感興は、自ら了得されるであらう。誠に風流は求めて得べきものではない。自然にその場にあるのである。偶ゝ近江の國に在つて、湖南朦朧たる暮春の情景に對し、人々と共に之を惜しみ之を愛せずには居れなかつたのである。行く春も近江の人も自然であつて、作爲ではない。だから決して行く年とも丹波の人とも動かせないのである。

京にても京なつかしや時鳥

どういふ折か、こんな心もちは誰も感ずることである。その心もちをそのまゝ素直によんだので、非常にすぐれた作とは思はないが、好きな句である。

○尙白が言云々　畧日記による。

○京にても　この句、己が光・陸奥千鳥・一字幽蘭集・花園・反故集・曠野後集・泊船集・東海道等に出で、一字幽蘭集以下の諸書には上五が「京にゐて」とある。

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

元祿四年の四月十八日、芭蕉は嵯峨に遊んで去來の落柹舍に入つた。さうして五月のはじめまでそこに滯在して居た。その間の日記が卽ち『嵯峨日記』である。落柹舍の舊蹟は——それが去來時代と全く同一の場所であるか否かは疑問だが、大體の見當は勿論違はない。——今も嵯峨に殘つて居るが、あの邊は一體に竹藪が多い。全く大竹藪と大の字をつけて言はねばならぬ程の深い竹藪である。その藪を洩れて斜に月の光がさす、折から空に裂帛の一聲、暗い凄味と淸爽な感じとが句に溢れて居る。一に「大竹原」ともなつて居るが、やつぱり藪の方が實感が深い。

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

此の句を解するには、まづ『嵯峨日記』の本文を引かねばならぬ。

廿二日、朝の間雨降る。今日は人もなく淋しきまゝにむだ書して遊ぶ。其の詞

○ほとゝぎす　嵯峨日記に出づ。

○一に　笈日記・泊船集等。なほか文庫に「ほとゝぎす大竹藪をもる月ぞ」とあるのは誤寫であらう。

○うき我を　嵯峨日記・猿蓑・草庵集・泊船集・蕉翁句集に出づ。

○かんこ鳥　閑古鳥は和歌の呼子鳥と同じもので、淋しい山中などで鳴く鳥で、俳諧では夏の季題になつて居る。その正體は郭公「クワクコウ」であるといふ。

○西上人　西行法師。

○山里に　山家集に「山里にたれを又こは呼子鳥ひとりのみこそすまんと（一本すめりと）思ふに」

○長嘯隠士　木下勝俊。豊臣秀吉の北政所の兄。大[illegible]の役後封を奪はれ、京都東山や大原野に隠棲して風月を樂しんだ。慶安二年歿、年八十一。歌文集に「挙白集」がある。

○客は云々　挙白集、山家記「やがてここに半日とす。客はその静かなる事を得れば、我はその静かなるを失ふに似たれど、云々」

「芭蕉筆自畫賛　東京　[illegible]氏蔵

長嘯のはかもめぐるか鉢たゝき　芭蕉

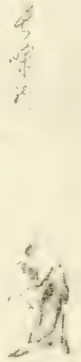
喪に居るものは悲しみをあるじとし、酒を飲むものは樂しみをあるじとし、愁に住するものは愁をあるじとし、つれづれに住するものはつれづれをあるじとす。さびしさなくばうからましと西上人の詠み侍るは、さびしさを主なるべし。又詠める

　山里にこはまた誰を呼子鳥ひとり住まんと思ひしものを

ひとり住む程面白きはなし。長嘯隠士の曰く、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂此の言葉を常にあはれむ。予もまた

　うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に獨居していひし句なり。

芭蕉筆自畫賛

といふのである。獨居して淋しさをあるじとする芭蕉が、この物憂い我が心をお前の淋しい鳴聲で、もつと淋しがらせてくれよと、閑古鳥に呼びかけた句である。寂びの世界に徹したいといふ心願が見える。「うき我」といつたのは、まだ本當に淋しさの世界に住みきらぬ自分への不滿をあらはしてゐる。閑

○色紙へぎたる　笈日記・笈の名殘・泊船集等には「色紙まくれし」とある。

古島に呼びかけたのは、即ち自分自身に呼びかけたものとも見られる。閑寂に生きようとする芭蕉の理想があらはれた句である

なほ此の句は日記にも、或寺での作だとあるが、その寺といふのは伊勢長島の大智院のことで、奥の細道の旅から歸つたをり、曾良のゆかりで暫らくそこに滯在したらしい。同院には今も芭蕉の眞蹟だといつて、寺での吟を傳へて居る。但しその句は下五字が閑古鳥でなくて「秋の寺」となつてゐる。芭蕉がその寺に足をとゞめたのは秋であるから、秋季を結んだのは尤もであるが、「秋の寺」ではすつかり句の味ひが平淺になつてしまふ。それで大智院に傳へる眞蹟を否定する人もあるが、――私も嘗て大智院を訪ねてその眞蹟は見たが、まづ少くともその來歴だけは信じてよいと思つた。――しかしそれは「秋の寺」から「閑古鳥」と再案した所に、却つて芭蕉の心の進みを見るべきではなからうか。前にも言つた通り芭蕉は非常に句の推敲に骨を折つた人である。しかもその推敲は新たに作りかへるといふよりも、創作當時の心境を深めて行くのであつた。「秋の寺」から「閑古鳥」へ、そこにもさうした芭蕉の精進のあとは見られるのではなからうか。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

これも『嵯峨日記』中の句で、

明日は落柿舎を出でんに名殘をしかりければ、奥口の一間々々を見廻りて、

といふ本文につゞいてゐる。一間々々とあるから當時の落柿舎はかなり廣かつたらしい。一體この落柿舎はもと小堀遠州の建てた茶室と言はれ、昔は中々立派なものだつたらしい。日記の廿日の條にも、

落柿舎は昔のあるじの作れるまゝにして處々頽破す。なかなかに作り磨かれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、畫ける壁も、風に破れ雨に濡れて、奇石怪松も葎の下に隱れたる竹緣の前に、柚の木一もと花かうばしければ、

柚の花や昔しのばむ料理の間

とある。見廻つた中のある部屋には、昔色紙短冊などを美しく貼り交ぜてあつた壁があつたのだらう。その色紙もいつの間にかへぎ取られて、その跡だけが薄くにじんだやうな色をして居る。それが五月雨のしめつぽい物憂い心、ことには明日はもうそこを出るといふ侘しい心もちとしつくり合つてゐる。

物言へば脣寒し秋の風

○柚の花や　小文庫・泊船集には「柚の花にむかしを忍ぶ料理の間」とある。

○物言へば　句は小文庫に出で、本文にあげたやうな前書がついてゐる。

○座右の銘　[illegible]たのである。

○言也牙齒寒　史記の文句。

○三井寺の　この句其角の雜談集には[illegible]にて[illegible]書あり、西の雲・篇突・のぼり鶴等には前書なくして出づ。

○月見賦　[illegible]

○賈島の詩句　「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」。この敲字はもと推としようと思ひ、いづれにすべきかと苦心の結果敲に定めたといふ逸話があり、名高い句である。推敲の語はこの故事に基いてゐる。

芭蕉が座右の銘として、「人の短を言ふ事なかれ、己が長を說く事なかれ」と前書を附した句である。隨つて自ら戒め愼しむべき教訓の意を寓した事は明である。教訓だから藝術にならないとは言へない。少くとも芭蕉は自省の嚴を藝術的表現に求めて、この句を得たのである。しかし句の基く所と思はれる「言也牙齒寒」の如き、たゞ觀念的な比喩のまゝでは決して藝術とは言へない。唇に吹く秋風の寒さが、同時に實感される事によつて、始めて單なる觀念の十七字化から救はれたのである。とはいへ、これは芭蕉も最初から教訓の目的をもつて制作したものである。眞にさび・しをりの風雅をこゝに求めようとしたのではない。世には芭蕉の作中、かうした教誡の意あるものをとつて、却つて彼の代表的の吟であるかの如く考へる者もあるが、それはもとより俳諧の眞髓を解せぬものと言はねばならぬ。

三井寺の門たゝかばや今日の月

「※月見賦」によれば、門人等と義仲寺に觀月の會を催し、三盃の興に乘じて湖水の月に船を泛べ、遂に夜は五更も過ぎようといふ頃、千那や尙白を訪ねて驚かしたといふ。その時の吟である。句は※賈島の詩句をふまへた作で、この淸夜の興に乘じて、三井寺の門を敲いて知人を訪は

▽芭蕉筆自畫賛（東京　菊本氏藏）
葛の葉のおもてみせけりけさのしも　はせを

○秋の色　この句杵原集に出で、「庵にかけむとて句空が書かせける兼好の繪に」といふ前書がある。句空は、加賀金澤の門人でこの句を卷頭として「草庵集」を撰んだりしてゐる。なほ思亭（オモヒノテニ）、寶暦六年刊　によれば、茶毘屋に村尾花の畫に芭蕉がこの句を賛したさいふ。又一葉集には上五を「落葉して」とも傳へて居る。

○一言芳談の言葉　「後世を思はん者は糂汰瓶［ジンダガメ］一つも持つまじき事なり」

うといふのである。

芭蕉筆自畫賛

秋の色糠味噌壺もなかりけり

句は「徒然草」の九十八段に「一言芳談」の言葉を引いてあるのに基いてゐる。この糠味噌壺も持たぬといふのは、兼好の理想である。それをそのまゝ兼好の人物をあらはす言葉として用ひたのは面白い。さうしてその執着を離れた境涯を、清爽の天地秋の色に配したのである。秋の色は卽ち糂汰瓶も持たぬ聖僧の生活が、象徴されたものともいへる。秋の空・秋の風。秋の暮。秋の人、そんないくらかでも具象的な言葉をもつて來ないで、秋の色とおいたのは　や

○菊の後　陸奥千鳥・四山集・泊船集・土大根等に出づ。

○元稹の詩　「不三是花中偏愛ュ菊、此花開後更無シ花」。蕪村にもこの詩句をふまへた「唐人よ此の花すぎて後の月」の吟がある。素堂の「唐土に」の句の條參照。

○梅が香や　桃舐集・泉宗類本・忘れ梅・鏡隠等に出づ。

○しらゝ　この物語は今傳はらない。

○落窪　この落窪は平安朝の落窪物語ではなくて、やはり室町時代に出來た小落窪の方だらうといふ。

○京太郎　これも現在傳はらない。

はり芭蕉でなければ言へないやうな氣がする。

菊の後大根の外さらになし

※元稹の菊を詠じた詩句に趣向を構へたので、成程菊花謝して後は愛すべき花もないが、我が俳諧にはなほ大根があるといふのである。「の外さらになし」と否定形で言つてゐるが實は大根を大いに肯定して居る。あの洗ひ立てた肌の白い色、風呂吹にした味　菊後賞すべきは只この大根のみといふのである。古詩をふまへてしかも大根の平俗を點じた所が俳諧である。

梅が香やしらゝ※落窪京太郎

しらゝ・落窪・京太郎は皆室町時代に行はれた小說の名である。成美の『隨齋諧話』にも引いて居るが、淨瑠璃『十二段草子』の中に

まなの上手にかなの一、よみける草子はどれ／＼ぞ。源氏・狹衣・古今・萬葉・伊勢物語・しらゝ。落窪・京太郎・百餘帖の虫盡し、八十餘帖の草づくし、扇流しに硯わり云々。

○三日月に　この句は浮世の北に出てゐる。なほ泊船集には「三日月の地は朧なりけり蕎麥畠」、三日月日記には「三日月や地は朧なる蕎麥畠」となつてゐる。

○爐開や　韻塞・泊船集・陸奥千鳥等に出づ。

○爐開　爐開は冬になつて防寒のために爐を設ける事で、又特に茶湯の爐を開くこともいふ。こゝはいづれでもよいがまづ一般の爐開と解した方がよからう。

と見える。

句は是等の古い物語の名で、古風なお姫様の部屋の有様などが聯想され、それに上品な梅が香をとり合せた作である。此の種の古典趣味的な作は、後に蕪村や曉臺等が好んだ所であるが、芭蕉時代の發句には比較的少い。

※三日月に地は朧なり蕎麥の花

空には淡い三日月の光がかゝつてゐる。地には蕎麥の花が黄昏の暗い色の中に白く朧に浮び出て居る。柔かで靜かな情景である。此の句は頭註に揭げた如く、種々の形で傳へられて居るが、今は最も古く刊行された書に出てゐる形に從つた。たゞし上五は「三日月に」より「三日月の」の方が、限定された感じがなくて、柔か味が加はるやうである。

※爐開や左官老い行く鬢の霜

爐開の折は漆喰など塗りかへるので、毎年左官に來て貰ふ。今年もその左官がやつて來たが、

○年々や　この句は元祿六年歳旦の吟で、[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]・猿舞師・[illegible]等の諸書に採録されて居る。

○芭蕉翁發句集蒙引　月居著。芭蕉の發句を註釋したもの。享和元年刊。

○薦を着て　芭蕉の句「薦を着て誰人います花の春」

一年の間にすつと鬢の白髪も増したやうだ。この左官も大分老けて來たなといふのである。そして左官の鬢の霜を嘆ずるのは、やがて作者自身の老いを覺える心である。寒い冬仕度のわびしさと、老境を歎ずる心とが此の句の中心になつてゐる。

年々や猿に着せたる猿の面

句意は、三冊子に

此の歳旦、師の曰く、人同じ處に止つて同じ處に年々落入る事を、悔いて言捨てたるとなり。

とあるので、よく要を盡して居る。年は改つて行くけれども、人は同じく去年の愚に止つて居る。恰も猿が面を冠つたところで、相變らずの猿の面なのと同じやうなものだといふのである。もとより觀念的な句ではあるが、「芭蕉翁發句集蒙引」に「折から猿曳を見て思ひより給ふか」とある如く、單なる比喩でなくて、芭蕉が實際面を冠つて躍つて居る猿を見て、ふと發した感懐であるかも知れない。「薦を着て」の句などと同じく、見る物によつて感を發するのは詩人の常だからである。だがとにかく猿によつて、かうした感を發したといふのは、いくら人眞似

をしても、畢竟沐猴たるを離れ得ない事によつて、かつは人間の愚さを諷諭し、かつは自ら嘲る意を寓したのであらう。なほ芭蕉は自らこの句を仕損じの作だと言つたさうであるが、思ふにさうした觀念的な着想に慊らない所があつたのだらう。この着想は平凡ではないがきはどい所がある。芭蕉はそれよりもつと自然で、しかも強く心に響くものを欲したのであつた。

この句については古來季語の問題がある。去來が卯七から無季の句の事について問はれた時、同じく無季と言つても二種ある。一はどこにも全く季と見るべきもののない句、一は詞に季はないが一句に季と見るべき所があつて、或は歳旦とも名月とも定めるものだと答へ、その後者の例としてこの句をあげて居る。又支考は上五文字に迎年の意は朧げにあるが、定まつた歳旦の詞がないから、雜の體か無季の格と言ふべきだらうと論じて居る。要するに蕉門ではこれを無季の一格として取扱つたのである。近來「猿の面」を季語と見る說もあるが、まだ芭蕉の時代までは、猿廻しを新年の季語とした例はない。

郭公聲橫たふや水の上

芭蕉はこの句と同時に、

○仕損じの作云々　「本朝文鑑」に載する許六の「直指傳」や「青根が峯」の自讚之論の條中などに見える。

○去來が云々　この事は去來抄・花實集等に見える。

○支考は云々　支考の說は「古今抄」に出てゐる。

○郭公　藤の實・泊船集・千句塚等に出づ。

○一聲の　笈日記、蕉翁句集等に出づ。
この句を種々に案じた事については、笈日記所収許六宛芭蕉の手紙を参照すべく、又篇突にも兩句の論がある。なほ陸奥千鳥には「深川」と題し「時鳥聲や横たふ水の上」、翁草には「時鳥横たふ聲や水の上」とある。

○前赤壁賦　白露横レ江水光接レ天」

一※聲の江に横たふや時鳥

といふ形も案じた。二句いづれに定めようかと決しかねて居る時、水間沾德が訪ねて來たので兩作の評をこふと、「水の上」の方をとつた。その中に素堂。安適などもやつて來て遂に水の上の聲よろしきに定つて事やんだと、芭蕉自ら門人に送つた消息の中に言つてゐる。然るに許六は之に異議を挿み、「水の上」はいらぬ詞である。一言も殘さず言ひつめただけで、只沾德はさうした潤飾を喜んだのであらうと難じた。そして「江に横たふや」の方は、下に「時鳥」と置いたのが舌頭に當つてはねかへるやうだから、之を上においたのだらうが、しかし「江に横たふ」といふ所にいろ〳〵の心を含めてあるのだと論じてゐる。

句は芭蕉自ら註して居る通り、「前赤壁賦※」の趣を時鳥の聲に移したのであるが、さて二句の中果して「水の上」の方がすぐれて居るであらうか。芭蕉が自らそれを決しないで、他の批判に任せた所は、實は芭蕉自身では二句の間に大した優劣を感じなかつたのであらう。さうかと言つて同じ趣の句を二つ共出すわけには行かないので、先づ人のいひなりに從つたものだらうと思ふのである。許六の臆測の如きはあまりに獨斷的である。とに角二句いづれにしても「横たふや」が眼目で、廣々とした江水の上を斜に横ぎつて、鋭い時鳥の一聲が聞えたといふので、「白露横レ江水光接レ天」といふ原句の大きな景趣が十分にあらはされて居る。なほ「横たふ」は

○煤掃は　この句炭俵・陸奥千鳥・泊船集等に出づ。元祿六年歳暮の作である。

○蓬萊に　元祿七年の歳旦吟。炭俵・卯花山・陸奥千鳥・泊船集・笈日記・篇突・皮籠摺・伊達衣・宇陀法師等に採録され、古來よく知られた句。

○蓬萊　初春の祝ひとして、串柿・野老「トコロ」・搗栗・昆布・穂俵・橙・海老等を三方に盛つて飾つたのをいふ。

必しも他動詞として解するには及ばない。

※煤掃は己が棚釣る大工哉

いつもはよその仕事にばかり働いて居る大工が今日自分の家の煤掃をして見ると、道具をしまふのにいろ〳〵勝手が悪い事に氣附く。「ちやこゝらに一つ棚でも釣つてやるかな」と、そこは御手前もので早速棚をしつらへる。自分で自分の家の仕事をするのはあたり前の事だが、よその仕事ばかりしつけて居る大工には、何だかそれがをかしく感じられるのである。その一寸したをかしみを捉へたのが此の句である。

「炭俵」は芭蕉の輕みを代表した集だと言はれてゐる。その輕みといふのは卽ちかうした日常茶飯事の間に、一脈の俳味を見出すことである。それは寂びに捉はれない寂びとも言はうか。一度寂びの境界に徹した者が、再び平俗の世界に返つて眺めた姿である。

※蓬萊に聞かばや伊勢の初便

この句の解釋に當つては、まづ「去來抄」の說を聞かねばならぬ。曰く、

深川よりの文に、此の句さま〴〵の評あり、汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰、都又は古郷の便ともあらず、伊勢と侍るは元日の式の今様ならぬに、神代を思ひ出でて、便聞かばやと、道祖神のはや胸中を騒がし給ふとこそ承り侍れと申す。先師返事に、汝が聞く處に違はず、今日神のかう〴〵しきあたりを思ひ出て、慈鎭和尚の詞にたより、初の一字を吟じ、清淨のうるはしきを蓬萊に對して結びたる也と。

と、芭蕉がこの句案を得た所以は、これによつて詳しく知られる。そこで一通りの解を下すならば、床上に飾つた蓬萊の古代めいた感じから、遙かに伊勢大廟の神々しい元朝のさまを思ひやつて、まづこの伊勢からの初便りこそ聞きたいものだと願つた意である。而して一句の眼目は、初五を「蓬萊に」と置いた所にあるので、これについて支考の說は聞くべきものがある。彼は、誰しも「元日に」と置くべきを、芭蕉がかく初五を案じたのは、蓬萊でなければ一句の風姿を得られないからで、これは「意を破れども姿を破らず」といふ句法だと說いて居る。

支考の意を案ずるに、「蓬萊に聞かばや」では、語脈のつゞきが些か變であるが、それよりは蓬萊を先づ一句の上に置いて、實感から來る一句の風情をとゝのへたのが宜いと言ふのであらう。而してその點で、確にこの句は成功した作であつた。

○慈鎭和尚の詞　拾玉和歌集に出づる「このたびは伊勢に知る人音づれて便りうれしき花柑子かな」の詠をさすのである。

○支考の說は云々　この說は「十論爲辨抄」や「梟日記」の中に見える。

梅が香にのつと日の出る山路哉

山路を朝早く歩いて居ると、どこからか梅花の匂ひがかをつて來る。と向ふにのつと朝日がさし出たといふ景色である。野坡が此の句に

ところ／＼に雉子の鳴立つ

と脇をつけて居る。早春の山路の景がよくあらはれて居る。誰にも分る句でしかも少しも卑俗に陷つて居ない。

八九間空で雨降る柳かな

昔からいろ／＼やかましく論ぜられて居る句である。實際雨の降つて居る景色だとか、いや柳の糸を雨に見立てたのであるとか、さま／＼に說いてゐる。しかし『花は櫻』といふ書には「春興」と題して、

春の雨いと靜に降てやがて晴れたる頃、近きあたりなる柳見に行きけるに、春光きよらか

○梅が香に　炭俵を始め、笈日記・篇突・泊船集・梅櫻・芋頭等に出づ。

○八九間　木枯・鳥日記・續猿蓑・泊船集等に出づ。陸奥千鳥には「空に」とある。

○花は櫻　桃亭秋屋撰。寛政十三年刊。同書にはこの前書を掲げ、特に「是は草屋八九間塘柳といへる書葉にもとづき、家八九間と家の字入れて見るべしとも、また柳を雨に見立てたる句なりとも、門人いろ／＼に註せり。此の句は前書を見ざる故なり。よてこゝにあらはす」と書添へてゐる。

なる中にも、したゝりはいまだをやみなければ

といふ詞書がついてゐる。これで景色は明かであらう。八九間は柳の高さである。その八九間の空から柳の糸を傳つて流る雨雫を、「空で雨降る」と言つたのである。

支考の『梟日記』によると、これは嘗て芭蕉が大佛※のあたりで見ておいた柳のさまであるといふ。『續猿蓑』にはこの句を發句として、

春のからすの畠ほる聲　沾圃

といふ脇以下、一卷の歌仙が催されて居る。

※春雨や蜂の巣傳ふ屋根の漏

『評林』※『師走囊』※等に說がある。共に荒れ果てた住居の體として居るが、かうした景色は藁葺屋根の田舍家などでは屢ゝ見る所である。もとより金殿玉樓の趣ではないが、必しも破屋廢居と解するには及ぶまい。寧ろ大きな田舍家の緣先などで、屋根から軒下、軒下から蜂の巣へと、ほとり〳〵傳はり落ちる春雨を、ぼんやり眺めて居るやうな氣がする。寫生の句であるが、自ら侘びた感じが味はれる。

○大佛　京都の大佛である。

○春雨や　炭俵に出づ。

○評林　正しくは「芭蕉發句評林」。露柴庵杉雨著。寶暦八年刊。

○師走囊　正月堂[illegible]著か。寶暦頃刊。右二書共に芭蕉の發句の註解。

○新古今のうた　「つくぐくと春の眺めの淋しきはしのぶに傳ふ軒の玉水」

○四つ五器の　句は炭俵に出で、「上野の花見にまかり侍りしに、人々幕打ち騒ぎ物の音小唄の聲、さまざまなりける傍らの松陰をたのみて」といふ前書がある。

○木がくれて　炭俵・別座舗・泊船集・陸奥千鳥・篇突等に出づ。

『評林』などに、新古今の歌を引いて居る。和歌趣味と俳諧趣味との境地が、はつきり對照されて面白い。

四つ五器の揃はぬ花見ごころ哉

五器は本來御器と書き食器の汎稱である。托鉢の僧などはその御器を五ッ――大鉢・中鉢・小鉢などといふ風に――一組として携へて居るものだといふ。芭蕉が支考に贈つた句の中にも、

この心推せよ花に五器一具

といふのがある。ところが行脚の僧などは、簡便にその中一種だけ缺いた四ッ一組のものを持つ。それを四ッ五器といふのださうだ。句は人々が珍味嘉肴を携へ、太鼓や三味で騒いで居る中に、自分は何の御馳走もなく花を眺めて居るといふので、侘びを樂しんで居る風情がある。「揃はぬ花見ごころ」といふのは四ッ五器の揃はないやうな心、――卽ち豐滿しないどこか侘びた心で花を見て居るといふのである。

木がくれて茶摘も聞くや時鳥

〇桃隣　天野氏、伊賀上野の人、江戸に住す。芭蕉の甥とも從弟とも傳へる。元祿九年師の足跡を慕つて奥羽を行脚し「陸奥千鳥」を撰んだ。享保四年歿、年八十一。

〇一に　この句は有磯海・泊船集・芭蕉翁行狀記・陸奥千鳥等に出てゐるが、その中陸奥千鳥には中七が「力につかむ」となつてゐる。同書の撰者桃隣は當時見送つた一人であるから師の句を誤る筈はない。恐らくそれが初案であつたのだらう。

折から茶摘時に時鳥の聲を聞いて、あの茶摘に忙しい人たちも、しばし手を休めてこの聲に聞入つて居るだらうと思ひやつたのである。「木がくれて」と言ふので實景が想ひやられる。卽興的の句として面白い。「別座舖」に載する素龍齋の「贈芭叟餞別辭」中には、この句をあげて「これなん佳境に遊びて、奇正の間を歩める作とは知られにけり」と稱して居る。

麥の穗を便りにつかむ別かな

芭蕉は元祿七年の夏、また行脚を思ひ立つた。そして此の度は西國に渡り、長崎にしばし足を留めて唐土舟の往來も見たり、聞馴れぬ人の詞も聞かうなどと思つて、五月八日に江戸を首途した。門人たちはわざ〳〵川崎まで送つて來て、それ〴〵餞別の句などを贈つた。その返しとして芭蕉は此の句をよんだのである。當時見送つた中の一人桃隣は、その時のさまを記して

二時ばかりの名殘、別るゝ時は互にうなづきて、聲をあげぬばかりなりけり。

と言つて居る。「便りにつかむ」といふのに、人々に別れて心細い悲しみの情が託せられてゐる。麥の穗は眼前の實景である。しかしつかむは實際でなくてよい。さうしたつかみたい心もちである。別離の眞情が流露して、惻々として人を動かす所がある。一に「力につかむ」となつ

つてゐるが、やはり「たより」の方が弱々しく縋つて行く情が深いと思ふ。

五月雨の空吹落せ大井川

江戸を立つて東海道を上る途中大井川の川止にあつて、島田の塚本如舟の家に暫く空の晴れるのを待つて居た。その時の吟である。幾日も降りつゞく雨に、大井川は濁流滔々として逆卷き流れ、空には暗雲が低く垂れて、いつになつたら晴れるのか分らない。いつそ一思ひに空ごとすつかり大井川に吹落してしまつてくれ。そしたら雨の根も絶えて晴れるだらうといふのである。「吹落せ」は風に對していふのだが、風を呼ばないで大井川に呼びかけたのは、句趣を複雜にしたのである。大きな豪壯な感じのする句である。

水鷄鳴くと人の言へばや佐屋泊り

名古屋の露川等が佐屋まで送つて來て、その地の隱士山田氏の亭に一しよに旅寢した。その折の吟である。句意はこゝは水鷄が鳴くと人がいふものだから、わざ〳〵一夜を過す事にし

○五月雨の　有磯海・泊船集・芭蕉翁眞蹟集等に出で、有磯海に「大井川水出て島田塚本氏のもとにとゞまりて」と前書がある。又芭蕉翁行狀記には「五月雨や雲吹落す大井川」、笈日記には「五月雨の雲吹落せ大井川」とある。

○水鷄鳴くと　有磯海に出で「露川が等「トモガラ」佐屋まで道送りて共に假寢す」と前書がある。なほ笈日記・泊船集・ゆづり物・四山集等にも出づ。

○佐屋　尾張國海部郡にある地名。

たと言ふので、水鷄聞きに立寄つた風流をよんだのである。「言へばや」は文法的に解すれば、「言へばにや」であるが、實は疑問の意は甚だ輕い。

※朝露によごれて涼し瓜の土

句意は明かである。爽かなそして新鮮な感じがする。此の句は一に下五が「瓜の泥」ともなつて居り、それについて『三冊子』には「此の句は瓜の土と始め有り。涼しきといふに活きたる所を見て泥とはなしかへられ侍る」と言つてゐる。土といへば乾いた感があり、泥の方は濡れて居るやうな感じが多いので、泥にかへたのであらう。しかし土と初案のまゝでも夏の朝の涼味は十分物されるやうである。

※六月や峯に雲置くあらし山

嵐山といへばすぐ春の櫻の景色が聯想されるのであるが、これは眞夏の嵐山の景である。山は鬱蒼と茂つて峯には暑さうな入道雲が立つて居る。春の女性的な色彩と異つて、これは男性

○朝露に　この句續猿蓑・木枯・泊船集等には下五「瓜の土」とあり、笈日記・喪の名殘・藤川集等には「瓜の泥」とある。又笈日記によれば元祿七年の夏、去來の別莊での句だといふ。

○六月や　句兄弟・笈日記・陸奥千鳥・喪の名殘・或時集・佛の兄・泊船集・眞木柱等に出づ。

的な強烈さがある。「六月や」と上五に打出した所に、まづ烈日を思ふ季節感が強められて居る。※支考が之を音讀せよと言つて「人もしみな月と訓にとなへば、語勢に炎天のひゞきなからんとぞ」と說いて居るのは、よく肯綮に中つて居る。

※夏の夜や崩れて明けし冷し物

元祿七年の六月、芭蕉は京都から近江に出かけて、膳所の曲翠のところで支考や惟然などと十六夜の月を賞しながら、一卷の俳諧を催した。その時の發句である。當夜のさまは、支考の「※今宵の賦」に記されてある。

短か夜がはや明ける、起きて見ると冷し物がいつの間にか崩れて居たといふのである。形の崩れた冷し物に、夏の夜明のぼんやりした心持が、所謂同じ匂ひでうつり合つて居る。匂ひ、響きといふ事は、主として連句の方で言つて居る事だが、その精神は發句の方にも移して說く事が出來る。――なほこの事は、後の句解や連句概說の際にも、言及しようと思つて居る。

――「崩れて明けし」とは誠に巧みな表現で寸分の隙もない。

○支考が云々　この說は支考の「古今抄」に見える。

○夏の夜や　笈日記・續猿蓑・喪の名殘・泊船集・ゆづり物等に出づ。

○冷し物　夏の料理で野菜・果物等の類を冷やしたもの。

○今宵の賦　「續猿蓑」に出てある。

○秋近き　鳥の道・[illegible]・泊船集・[illegible]
[illegible]

○鳥の道云々　同書に「元祿七年六月廿一日大津木節庵にて」といふ前書がついて居てゐる。

○木節　望月氏、大津の人、醫を業とした。芭蕉が大阪で病んだ時投薬[illegible]に努めた。

○ひや〳〵と　芭蕉翁行狀記・笈日記・泊船集等に出づ。

秋近き心の寄るや四疊半

『※鳥の道』によれば元祿七年六月二十一日、大津の木節庵での吟だといふ。四疊半の部屋には、主客の外惟然や支考も膝を交へて居た。そして芭蕉のこの句に、※木節が

しどろにふせる撫子の露

と脇をついで、以下一卷の歌仙が催された。まだ暑さはかなり烈しかつたらうが、時折訪れるひやりとした風には、流石に秋近いけはひが感ぜられる。「あゝもうすぐ寂しい秋が來るのだな」。さうはつきり口にこそ出して言はないが、四人の心は、お互に何だかしんみりと寄り合つて行くのだつた。

「秋近き心」が一句の眼目である。巧みな言葉でありながら、少しもわざとらしい不自然さがない。一座の人々の淋しいそして親しい心もちが、言外に深く味はれる。

※ひや〳〵と壁をふまへて晝寝哉

路通の「※芭蕉翁行狀記」には、「粟津の庵に立寄り、暫く休らひ給ひ殘暑の心を」と記して出て居り、又『笈日記』によればこれも木節亭での吟だとある。そして同書には、

此の句は如何に聞き侍らんと申されしを、足も只殘暑とこそ承り候へ。必ず蚊帳の釣手など手にからまきながら、思ふべき事を思ひ居ける人ならんと申し侍れば、この謎は支考に解かれ侍るとて、笑ひてのみ果てぬるかし。

と記してゐる。所在なさにごろりと仰向に寢そべつて、足をそこらの壁にもたせかけて居る。とその足裏が流石に冷え〳〵と感ぜられるのである。蚊帳の釣手でもいぢつて居る人のさまと支考が解したのも面白い。

因みにいふ、今日では「晝寢」が夏の季題として取扱はれて居るが、芭蕉の時代までは無季と見られて居た。それでこの句の季語は上五の「ひや〳〵」にあるので、即ち※秋季の句である。季語の取扱も時代によつて變遷があるから、古句を解する場合には注意せねばならぬ。

※數ならぬ身とな思ひそ魂祭り

壽貞と芭蕉との關係については、從來學者に興味をもつて論ぜられてゐる。それは野坡の門

○芭蕉翁行狀記　路通が師翁追悼の爲に撰んだ集。元祿七年刊。

○秋季　泊船集には夏部に收めてあるので、同書の編者風國は或は晝寢を夏季の詞として取扱つたのかも知れぬが、他はすべて秋部に收めてゐる。それは「ひや〳〵」を季語としたのである。

○數ならぬ　有磯海に出で「尼壽貞が身まかりけるときゝて」と前書がある。

人たる安藝の風律が書殘した『小咄』といふ書の中に、壽貞は芭蕉の若い時の妾で、次郎兵衛といふ子供があり、後に尼になつたといふ事を傳へて居るので、芭蕉研究家の間に一時問題とされたのである。しかし別に壽貞は芭蕉の乳母だといふ傳へもあり、風律の言だけを直ちに信ずる事も出來ない。勿論芭蕉とても全く戀を知らぬ人ではなかつたらう。あの二十九歳の時に自ら撰んだ『貝おほひ』の中には「我も昔は若衆好きの」と言つてる位である。殊に多感な詩人的素質を持つて居た彼が、いつまでも若い折の戀人を忘れられないで居たといふ事も當然考へられる。そこに一層の人間味さへ感ぜられるのである。だが風律の『小咄』だけで壽貞をすぐ芭蕉の妾ときめてしまふのは、早計に過ぎる。『小咄』の文獻的確實性はなほ十分に認め難いのである。只此の句に籠つて居る深い情味から見れば、少くとも芭蕉が濃やかな情愛を注いでゐた人にはちがひなからう。

芭蕉

「芭蕉筆蹟　伊賀　龜井氏藏」

廿二日の書狀ゞ置候へ共御屋敷まで遠方故行留置候處　長兵衛様御内衆御出候而通商書申上候つゞき申候はゞ何とぞとりとめ申度さても／＼難義仕候我御推し被遊可被下候もはや御苦労に御座候故如此御座候　先久殿へはさたなしに仕候

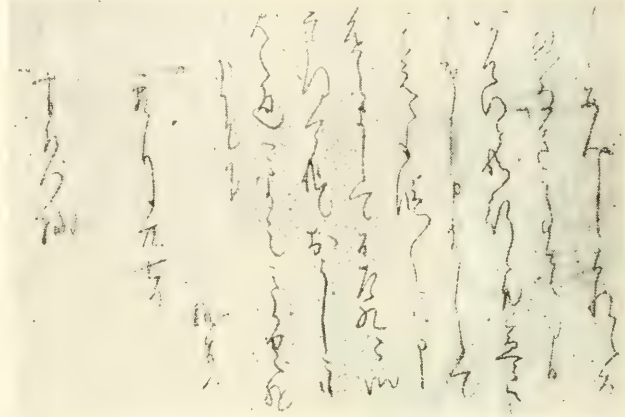
あんじられ候而益なき事に候間いかていと成行候共急には申遣し申まじく候　其元へも段々には申進候まじく候間左様に御意得可被成候　およしにも右之通によみきかせ被遊可被下候　以上

霜月廿七日　　桃青

半左衛門様

（半左衛門は芭蕉の兄。およしの事は半左衛門宛の他の手紙の中にも見え、芭蕉の妹ではあるまいかと思はれる。）

○菊の香や　笈日記に出て「九月九日」といふ前書がある。なほその他陸奥千鳥・泊船集等にも出づ。

筆蹟

又「數ならぬ身とな思ひそ」といふ言葉から推すと、壽貞がこれまで日陰者のやうにして淋しく暮して來た人であることも思はれる。今その亡き魂に對して、決して數ならぬ身だなどと思つてはくれるなと、强く慰めたのである。そしてその慰めは實は又芭蕉の悲しみを慰める言葉でもあつたのだ。

なほ「數ならぬ身」といふのを芭蕉自身のことに解する說もあるが、それでは十分意が通ぜぬやうに思はれる。とにかく亡き魂を慰める言葉として、此の句は始めて深い情愛が感ぜられる。

菊の香や奈良には古き佛達

こゝで些か蕉風俳諧の匂ひについて說かう。匂ひ、響き、位等、いろ〳〵ちがつた言葉は用

ぜられて居るが、意味する所は要するに同一で、いはゞ物の全體的な情趣・風情ともいふべきものである。この句について説けば、まづ菊の香は典雅・高雅などといつた感じをもつてゐる。それが菊の香のにほひである。又奈良の古都に年ふる佛達からは、蒼古・閑寂などといつた匂が感ぜられるであらう。而してこの二者が、一句の中にかうして取入れられたのは、奈良の古い寺の佛たちに、折からどこでも香高い菊の花が手向けられて居るとか、奈良の古佛が特に菊の香を愛して居るとか言つたやうな、何か二者の間の特定な關係をよまうとしたのではない。たゞその菊の香と古い佛との匂に、一種の微妙な調和を感じたからである。即ちこの句の眼目は、全く匂の調和にある。それは因果關係などの如く、決して理智的に説明し得べきものではない。結局この句を解するには、菊の高雅でおくゆかしい香りと、物さびた奈良の寺々におはす端麗な御佛たちの姿とを想ひ浮べて、その情趣の融合した感じを味はふ外はない。

芭蕉はこの匂といふ事を、特に連句の方で重んじた。芭蕉俳諧の特色は、實にこの點にあると言つても宜く、その點は連句篇に於て更に詳説するであらうが、要するに前の句に次の句を附ける場合、たゞ意味の上の連絡のみを主とせず、前句の全體的な情趣即ち匂を捉へて、之に調和すべき匂の句を附けよといふ事である。かくて二句の間の渾然たる調和に、微妙な詩趣が味はれるのである。而してこれはそのまゝ發句の場合にも移して說き得る事で、即ちこの句

の「菊の香」を前句、中七以下を附句と見て解すればよいのである。

ひいと啼く尻聲悲し夜の鹿

これも奈良での吟である。句意は別に解くまでもない。實感をそのまゝ句にしたのである。なほ芭蕉が當時人に送つた書簡によると、中七が「しり聲寒し」とある。恐らく初案であらう。しかし芭蕉は夜の鹿の啼聲を聞いた時の實感を、もつと率直に現はしたかつた。それで「悲し」と改めたものと思はれる。

白菊の眼に立てて見る塵もなし

芭蕉は奈良から難波へと出て行つた。そして一日園女の招きを受けて、その家に赴いた。句は當時の吟である。

「笈日記」には「園女が風雅の美をいへる一章なるべし」とある。即ち白菊の清さを園女の風雅心の氣高さに比したのである。だが始めからさうした比喩の句として見ず、單に白菊の清さ

○ひいと啼く　笈日記・芭蕉翁行狀記・泊船集・夏の名殘・金毘羅會等に出づ。なほ陸奥千鳥・芭蕉句選拾遺集には特に「びいと」と濁つて居る。芭蕉はさうよませるつもりであつたかも知れぬ。

○白菊の　木枯・笈日記・句の墨・泊船集・後ゝ駒・六行會等に出づ。

○園女　伊勢の人斯波一有の妻。かつて芭蕉が伊勢に赴いた時、「暖簾の奥ものゆかし北の梅」の句を送られた。後大阪に移り住み、更に寶永初年江戸に移つた。享保十一年歿、年六十三。

を言つたものと解した方が、正しい見方ではあるまいか。その場合芭蕉が園女に對する比喩を意識して居た事は勿論である。しかし句は白菊の句である。その中に自ら比喩が含まれたのである。同じ事かも知れないが、私はさう解したい。これはじつと一塵も留めない白菊の清さに見入つて居て、始めて發し得る言葉である。普通の人ならかうした挨拶の句といふものは、大抵お座なりの何の感激もないものになつてしまふものだが、芭蕉のこの句に對すると、誠に藝道鍛練の極致が恐ろしいくらゐに思はれる。

※この秋は何で年よる雲に鳥

「笈日記」によると此の句は九月二十六日清水の茶店に遊吟して、その朝から心に籠めて念じた句で、下の五文字にその腸をさかれたとある。即ち「雲に鳥」の五文字は特に芭蕉が思ひを潛めて言ひ出した句である。芭蕉はそれが彼の死の前兆でもあつたのか、此の秋頃からとかく身體もすぐれず氣分も引立たなかつたやうである。しみじみと老いを歎く心も深かつたであらう。句は旅中この老境を歎ずる情を、無心の雲と鳥とに寄せたのである。雲に鳥は漂泊の旅を象徴したもので、必しも實際に雲や鳥をさして言つたのではない。※陶淵明とか※蘇東坡等の詩

○この秋は　この句笈日記には「旅懷」と前書がある。句はなほ住吉物語・喪の名殘・芭蕉翁行狀記・泊船集等に出づ。

○陶淵明の詩句　「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還」

○蘇東坡の詩句　「倦鳥孤雲豈有期」

句に基いて、雲といひ鳥といへば自ら漂泊隱遁の情が想はれるのである。飄々として流れ行く白雲、飛ぶに倦んで歸り行く鳥の姿、その雲や鳥に情を勞しつゝ、又今年も老い行く事かなあと歎じたのである。一讀その意を捕捉し難い句であるが、再讀三讀靜かに句の裏に潜む芭蕉の心に觸れ得たなら、始めて此の句の言葉で說き難い眞趣を味はふ事が出來るであらう。

※秋深き隣は何をする人ぞ

隣り合せに住んで居ながら、あるじは何をしてゐる人なのか滅多に顏を見せた事もない。家の中もいつも何だか森閑としてゐる。秋も更けて行く今日此の頃、「一體隣は何をする人だらう」、さうした疑が一層强く感ぜられるのである。その疑には何となく一種の神祕的な空想が籠つてゐる。

※何食うて小家は秋の柳陰

の吟も、同じやうな趣であるが、これはふと通りすがりの輕い氣もちである。一脈の寂しさはあるが、强く人の心に食ひ入る點はない。「秋深き」は晩秋の寂しさの中に、じつと心耳を澄まして居るやうな感じがする。

○秋深き　笈日記・陸奥千鳥・泊船集等に出づ。芝柏亭での吟。

○何食うて　茶の草子に出づ。芭蕉の句。

この「秋深き」の句は芭蕉の終焉に先立つ事十餘日の吟である。九月廿九日に芝柏の亭に招かれて居たが、すでにその頃は病兆があつたので、廿八日に豫めこの句を作つて送つておいたのだといふ。果して廿九日には出席も出來ず、やがてそのまゝ病床の人となつたのである。

※此の道や行く人なしに秋の暮

行人絶えて暮風冷かに吹き、秋の淋しさを言つたのであるが、「所思」と題したのはその中に眞に我が俳諧の道に志す人の少いのを歎ずる意を寓したからである。此の道は地上の道であつて、同時に芭蕉の理想の道をさして居る。「行く人なしに」の中には蕭條と暮れ行く野徑のさまが思ひ浮べられると共に、眞に俳諧の正道を踏む人の少いのを淋しむ芭蕉の心が思はれる。その景情は一にして二でない。なほ『笈日記』によれば、芭蕉は此の句と共に

人聲や此の道かへる秋の暮

といふ句を出して、此の二句どちらがよいかと支考に尋ねた。支考は「此の道や行く人なしにと獨歩したる所、誰か其後に隨ひ候はん」と答へて、これに所思といふ題をつけたのだと言つて居る。支考は流石に芭蕉の意を悟つたのであらう。獨歩する者の淋しさ、天才や學者の抱く

○此の道や　其便に出で「所思」と題してゐる。句はなほ笈日記・枯尾花・泊船集・金毘羅會・篇突等にも出づ。淡路島には上五「此の道を」とある。

○人聲や　この句のこと笈日記に見え、泊船集にも採錄してゐる。

○旅に病て　枯尾花・笈日記・木枯・泊船集・花濟等に出づ。

孤獨感、それが此の句の中に含まれて居ないとは、どうして言へよう。今一つの「人聲や」の句は又ちがつた境地の淋しみを言つて居る。これは人の聲をなつかしんだ所がある。もう日も暮れかけた淋しい道、芭蕉は一人とぼ〳〵とそこを歩いて居る。と思ひがけなくその道に人聲を聞いたのである。「人聲や」と五文字に打出したのも、その人聲を聞いた時の親しさなつかしさの情がぴつたりとあらはされて居る。空谷の跫音の趣である。而して「此の道や」の句が所思であるとすれば、「人聲や」の句もまた俳諧の眞の知己を得た喜びを寓したものと見なければならない。一體句を寓意的に強ひて解するといふ事は、すべて藝術的解釋として好ましい事ではないが、此の句の場合の如きは全然寓意を離れて解したのでは、寧ろ芭蕉の本意を失ふものといふべきであらう。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

「病て」は「泊船集」「木枯集」に「やんで」と假名書してあるから、「やんで」とよんだ方がよからう。「廻る」は當時の諸書皆假名書きにしたものはないが、勿論「めぐる」とよむべきで、「まはる」ではいけない。

「芭蕉書簡　伊賀　龜井氏藏」

其元舊年御仕舞ひ御不自由に可有御座候　此方も永〳〵旅かへり何やかや取重毎日〳〵客もてあつかひなどにて冬のしまひもはつ〳〵に御座候て金子少も得進じ不申候何とぞ北國下向の節立寄候へ成關あたりより成とも通路いたししみ〴〵可申上候別條無之内細〳〵書狀にも及不申候左樣に御意得可被成候

一山口御無事に御座候哉　御老人無心元存候

一七左衞門方あねじや人御無事に御座候や　以上

正月十七日　　松尾桃靑

半左衞門樣

（半左衞門は芭蕉の兄。）

芭蕉書簡

此の句は誰も知つて居る通り芭蕉の最後の吟である。芭蕉が病中此の句を吐いたをりのさまは、『笈日記』や『枯尾花』によつてほゞ傳へられて居る。『笈日記』には芭蕉は此の句をよんでから、

生死の轉變を前に置きながら、發句すべきわざにもあらねど、よのつね此の道を心に籠めて年もやゝ半百に過ぎたれば、寢ねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲に驚く。是を佛の妄執といましめ給へるただちは今の身の上に覺え侍る也。此の後はたゞ生前の俳諧を忘れむとのみ思ふは。

と、かへす〴〵後悔したと記してある。かくて遂に辭世としての辭世も殘さず、此の句が直ちに辭世の句となつてしまつたのである。弟子が辭世の吟を乞うた時、芭蕉はそのをり〳〵の句がすべて辭世だと答へたといふ話も傳へて居る。『枯尾花』にも、

〇方丈記の末章　「佛の人を敎へ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するもとがとす。閑寂に著するもさはりなるべし」

常にはかなき句どものあるを前表と思へば、今さらに臨終の聞えもなしと知られ侍り。

とあるから、芭蕉は生前すでにいづれの句も辭世となるべき事を覺悟して居たのである。

この句意は別に解するまでもなく明らかである。西は不知火筑紫の果てまでもと思ひ立つた旅路が、まだ半ばにも達しない中に、空しく客舍に病臥しなければならなくなつた芭蕉の吟魂は、誠に夢裡にも枯野をかけめぐつた事であらう。詩に痩せ旅に痩せて一生を終つた芭蕉の最後の吟として、一層深い感慨を覺える。しかも旅へのさうした執着を妄執と觀じて、生前の俳諧を忘れようとした芭蕉の心は、あの『方丈記』の末章の言葉も思ひ合されて愈々尊い。

以上で芭蕉の名句は盡きたのではないが、紙面に限りがあるから、このくらゐで割愛しよう。更に芭蕉の作品の全體を知らうとするならば、相當に信憑すべき全集。句集の類もいろ〳〵出版されて居るから、それらについて見られたい。

なほ從來俗間に芭蕉の句として傳へられて居るものの中には、全くの誤傳も少くないので、それらの二三をこゝに附說して、一般の注意を促して置きたい。

白魚や石にさはらば消えぬべし

白魚の透き通るやうな美しさを詠んだのであるが、これは枳風の作として『續の原』に出てゐる。

もろ〳〵の心柳に任すべし

無抵抗主義を象徴したやうな句である。その悟りすましたやうな心境が、芭蕉の作とするのにふさはしいので屢〻誤られて居る。實は芭蕉の門人凉菟が、信濃の俳人猿山といふ人に對して示した句である。

起きな〳〵起きば浮世の秋を見む

この句も芭蕉らしい匂がする爲に、近來でもよく誤られて居る。實の作者は舎羅で、その撰になる『花の市』に「木陰に熟睡したる乞食を見て」といふ前書がついて出てゐる。

三日月やはや手にさはる草の露

○白魚や　「句解參考」等に芭蕉の句としてある。
○枳風　キフウ。江戸の人、其角に學んだ。
○もろ〳〵の　「もとの水」等に芭蕉の句としてある。
○猿山　戸谷氏、信州長野の人。享保十七年歿、年四十九。
○起きな〳〵　「句解參考」「一串抄」等に芭蕉の句としてある。
○舎羅　シヤラ。榎並氏、大阪の人。芭蕉門。
○三日月や　「一葉集」・「諸國翁墳記」等に芭蕉の句として出て居り、この句を刻した芭蕉塚もある。

淡い三日月の光、地上の草にははや露が結んでゐる。誠に縹渺たる情景である。『一葉集』の編者等が誤つたのも無理はないが、『三日月日記』に桃隣の作として出てゐるのが正しい。

木曾殿と背中合せの寒さ哉

これは芭蕉の墓が、所謂木曾殿の塚たる義仲寺の境内にある爲に、かなり汎く誤傳されて居る。かつて義仲寺ではこれを芭蕉の句碑として、門前に建てた事さへあつたといふ。しかし『葛の松原』『桃の實』『己が光』等の諸集に、

木曾殿と背中あはする夜寒哉　又玄

と出て居り、作者又玄が義仲寺境内の無名庵に一夜を明した折の吟である。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

これは芭蕉の作と誤傳されるより、『續俳家奇人談』等によつて、寧ろ冠里侯の吟としての方が汎く知られて居る。しかし享保十六年刊行の『俳諧五雜俎』に

初雪や是も人の子樽拾ひ　沾德

とある。これは冠里侯生前の集であるし、やはり沾德の作とするのが正しい。

○木曾殿と　「句解參考」等に芭蕉の句としてある。
○背中あはする　己が光には「背中を合す」とある。
○又玄　イウゲン。伊勢の人。
○雪の日や　「蕉句後拾遺」に下五「皮拾ひ」とあり、芭蕉の句として出して居る。
○續俳家奇人談　天保三年刊。
○冠里　安藤氏、信友。備中松山の藩主、後ち美濃加納に轉封さる。其角の指導を多く受けた。享保十七年歿、年六十二。

○麻父　越中の人、乙由の門。安永四年歿。

○菊舍尼　キクシヤニ。田上氏、名みち。長門長府の人。俳諧書畫琴茶をよくし全國を行脚した。文政九年歿、年七十四。

○山門を　この句菊舍尼自撰の「手折菊」にも出てゐる。

「芭蕉墓　大津市馬場「バンバ」義仲寺境内にある。」

飛ぶものは雲ばかりなり石の上

那須野の殺生石の傍に、芭蕉の吟として右の句碑が立つて居るさうだが、これは蝶夢の編んだ『名所小鏡』に麻父の作として載せられてある。麻父はまだ比較的新しい人であるのに、すでにかうした誤りがあり、甚しきは長門の菊舍尼が、宇治の黄檗山でよんだ

山門を出れば日本ぞ茶摘うた

まで芭蕉の句だと言つて居る。

なほ古來諸書に誤傳された句は頗る多く、すでに芭蕉生前の集にさへ杜撰は見られたのである。しかしそれらは忠實な研究者によつて、漸次訂正されつゝあり、なほ疑はしいものも將來ある點までは誤傳か否かが明にされるであらう。然るに一般の人々は割合にかうした事には無頓着

芭蕉墓

○百骸云々　以下「笈の小文」の冒頭の一節で、芭蕉の風雅觀が最もよく現はれてゐる。

であるのみならず、國文學の專門家や國語教育に從ふ人々すら、往々從來の誤を繰返して居る。これは世界に誇るべき我が文藝家芭蕉に對し、國民としてあまりに不忠實な態度と言はねばならぬ。又ひとり芭蕉についてのみならず、俳句の如き小詩形は勝手に附會し易い爲、甚しい誤が汎く流布されがちであるが、これらも國民全體の注意によつて、正しい作者、正しい作品を傳へるやうにしたいものである。

百骸九竅の中に物有り、かりに名づけて風羅坊といふ。誠に羅の風に破れ易からん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好む事久し。終に生涯のはかりごととなす。ある時は倦いて放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人に勝たむ事をほこり、是非胸中に戰うてこれが爲に身安からず。しばらく身を立てむ事を願へども、これが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らむ事を思へども、これが爲に破られ、遂に無能無藝にしてたゞこの一筋につながる。西行の和歌に於る、宗祇の連歌に於る、雪舟の繪に於る、利休が茶に於る、その貫道するものは一なり。しかも風雅に於るもの、造化に從ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

榎本其角

又寶井氏。寛文元年江戸に生る。十七八歳の頃から芭蕉に師事し、始め螺舍と號し、後ち易の交によつて晉其角と言つた。性來才氣にすぐれ、俳諧の外書を佐々木文龍に、畫を英一蝶に、儒を服部寛齋に、醫を草刈三越に、禪を大巓和尚に學んだ。嵐雪と相並んで蕉門の桃櫻と稱せられ、江戸の俳壇に雄飛したが、芭蕉歿後は洒落風の一體を興して漸く邪道に走り、その末流は甚しい卑俗に陷つた。寶永四年歿、年四十七。撰※著は頗る多い。作品は『※五元集』『續五元集』に收める。

日の春をさすがに鶴の歩み哉

貞享三年歳旦の句である。芭蕉の評語だといふ『※初懐紙』の評に、

元朝の日の花やかにさし出でて、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩にかけて云ひつらね侍る。しかも祝言言外にあらはる。流石にといふ手爾波尤も感多し。

と言つてゐる。元朝の旭日を浴びて丹頂の鶴が庭をゆつたりと歩いて居るさまは、歳旦の景物

○撰著　虚栗・新山家・丙寅初懐紙・續虚栗・いつを昔・華摘・雑談集・萩の露・句兄弟・枯尾花・若菜合・末若葉・錦繡緞・焦尾琴・類柑子等、その他なほ多い。

○五元集　其角の自撰。延享四年刊。「續五元集」は百萬坊旨原が其角の附合を集めたもの。寶暦二年刊。

○日の春　歳旦の祝詞として用ひられる季の詞。

○初懐紙　其角のこの句を發句とした百韻一巻を收む。その前半五十句に芭蕉の註を加へたものが「花の故事」（闌更撰、寶暦十三年刊）や「落葉考」（闌更撰、明和八年刊）に傳へられて居る。

○鐘ひとつ　元祿十一年の歳旦吟で「一日長安花」といふ前書がついて居る。

▽其角像（東京、小石川　芭蕉庵安置の木像）

として誠に此の上もなくふさはしいものであらう。連句の場合發句の一般的條件としては、たけ高くと言ふのであるが、この句はその模範的例句として屢〻引用されて居る。

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

江戸の繁華を言つた句で、梵鐘のやうな滅多に需要のない物でさへ、流石に花の御江戸は諸國の人が入込むので、毎日一つ賣れない事はないと誇つたのである。

西鶴が『世間胸算用』に

さる程に大阪の大節季、よろづ寶の市ぞかし。（中略）一つ求むれば其の身一代子孫までも讓り傳へる碾臼さへ、日々年々に御影山も切り盡すべし。

と言つた言葉も思ひ合せられる。商賣の殷賑を側面から言つたのがねらひ所で、そこに其角の才がはたらいて居る。

其角像

○御秘藏に　句は焦尾琴元祿十四年刊に出で、「肅山の賀宴に侍ふ傍に宴遊侍坐しければ」といふ前書がある。

○御秘藏　秘藏はヒサウと濟んでよむ。特に大切にして居る品や人のこと。こゝでは殿御寵愛の美しい御小姓などであらう。

○備角　備前岡山の城主池田綱政侯の俳號。不角の門人であつた。

御秘藏に墨をすらせて梅見哉

前書によると貴人の賀宴に侍しての作と思はれる。――松平隱岐守の家中久松肅山侯の宴だといふ說もある。――この賀宴は表向きの折目正しい方でなくて、ごく內輪の慰み半分のものであつたらしい。それで俳諧師其角なども召されたものと思はれる。さて當時貴顯の邸に出入する俳諧師といへば、多くは殿樣の御機嫌とりの幇間的態度のものが多かつた。其角も屢〻御大名の御傍相手を勤めてゐるが、しかも流石に彼は持する所が高かつた。「其角、一句」と所望されると、その座に侍つた殿御秘藏の美童に、墨を磨らせながら、じつと句案に耽るのである。「御秘藏に墨をすらせて」といつた語氣に、其角がさうした幇間的地位にありながら、少しも阿諛的な卑屈な所を示して居ない。そこが其角の群小俗衆と選を異にして居る點である。かの俗俳の本山ともいふべき立羽不角が、※備角侯に侍して京に上つた途次、大磯に泊つて、

短夜ぞ不角行て寢いあす逢はう　備角
蚊も齒のたゝぬかしこまり膝　不角

と唱和した態度と比べて見ると、自ら氣品の異る事が分るであらう。

梅が香や乞食の家も覗かるゝ

大音寺は吉原の裏手にあつて、當時は全く田圃の中で附近には乞食小屋などが多かつた。さうした場末での卽景である。句意は明瞭であるが、「乞食の家も」のもに理窟が加はつて居るために、多少いや味に陷つて居る。

鶯の身をさかさまに初音哉

古來名高い句である。はやく許六は『篇突』に

鶯といふ句はよのつねになり難き題也。晋子が身をさかさまと見出したる眼こそ、天晴近年の秀逸とやいはむ。亡師の餅に糞するとこなし給へる後、これ程に新しきは見えず。

と激賞した。ところが去來はこれに對して、

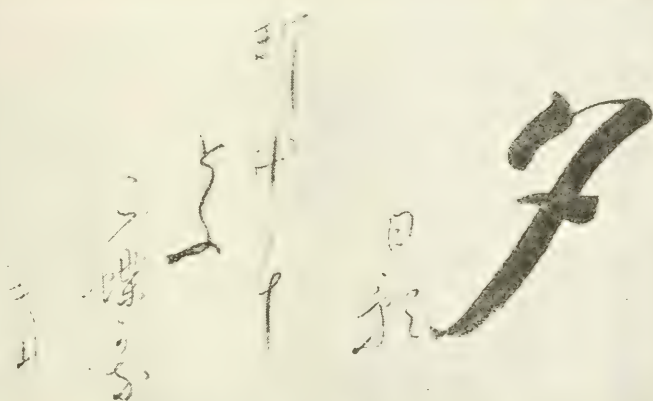
この句は風情あり。然れども初音哉といへるいかゞ侍らん。鶯の身を逆にするは戲れ鶯也。戲鶯は早春の氣色に非ず。初音の鶯は身を逆にする風情なし。初音・ほのめくなどと

○梅が香や　句は續虚栗（貞享四年刊）に出で「遊大音寺」と前書がある。

○鶯の　この句初蟬（元祿九年刊）を始め諸書に出づ。

○餅に糞する　芭蕉の句「鶯や餅に糞する縁の先」

○去來は云々　去來の「旅寢論」の中に見える說。なほ「去來抄」にも「此句は暮春の亂鶯なり。初鶯に身を逆にする曲なし。初の字心得がたし」と難じてゐる。

▽其角筆蹟（東京、日本橋 遠藤氏藏）
夕日影町中にとぶこ蝶かな　　キ角

其角筆蹟

も詠めり。今其角が鶯を見るに、日頃その姿を覺えて句にのぞむ意を、晝屏なんどを見て作したる句也と難じらるゝも尤也。

と貶して居る。この兩評は一見相容れないやうであるが、實はその批評の立場を異にしただけであつて、いづれの言も當つて居る。卽ち着想に新機軸を出したといふ點から見て許六の言は尤もである。しかし早春の鶯の性狀といふ事實に卽して見ると、其角の句は虛妄の譏りを免れぬ。ではこの場合事實に卽すべきか、着想に執すべきか。それは所謂虛實の論として、創作上一つの重要な問題となるべき事である。が結局は作者の心もち一つに歸する事だと思ふ。卽ちそこに作者としての特色が生ずるのである。其角のやうな作者であれば、事實よりも着想に

重きを置いたのは當然であらう。――勿論それが全く事實として存在し得ない着想は許されないが、早春の鶯とてもたとひそれが一般的でなくとも、身を逆さまにして鳴く特殊の場合は推想し得る。　さう解釋して私はこの句を佳句として肯定したい。なほ『五元集』にはこの句に「止丘隅」と題して居るが、これは彼の故事癖から題しただけで、句意とは多く關する所はない。「大學」の本文によつて、鶯が止まる所を知つて却つて人よりもまさる意を表して居るといふやうな說は當らない。

※京町の猫通ひけり揚屋町

句意は吉原の京町の猫が、揚屋町まで通つて行つたといふだけだが、傾城町での猫の戀だといふ所に興趣が湧く。講談などでよく引張り出される句だ。あとでも述べるが、其角の句には小唄や俗謠に取入れられたものがかなり多い。それだけ彼の作は一面又市井の趣味に富み、大衆に迎へられる所があつたと言へる。

※雀子やあかり障子の笹の影

○止丘隅　詩經小雅に「緜蠻黄鳥。止于丘隅。豈敢憚行。畏不能趨。云々」とあり、又大學に「詩云、緜蠻黄鳥止于丘隅。子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎」とある。

○京町の　句は焦尾琴に出で、「近隣戀」と題してある。

○雀子や　この句續虚栗に出づ。

○晋子發句撮解　其角の吟中難解のもの六十五句を選んで註したもの。

○爲氏の歌　「古への犬きがやりし雀の子こびあがりしやうしといふらん」犬きは源氏物語若紫に見える雀の子を逃がした子供の名である。

○この下の句云々　新雜談集に見える。

○虚栗　ミナシグリ。其角の撰、天和三年刊。

莊丹の「晋子發句撮解」によると、其角の自註に「飛上りしやうしといふらん」とあると言つて、「井蛙抄」にある爲氏の歌を引いてゐる。卽ちこの句はさうした故事を踏へて、表面は何氣ない體に言つて居ながら、その間に學才を仄めかさうとした意圖から作られて居る。爲氏の歌は明り障子の隱題であるが、其角はそれを逆に行つて、明り障子で爲氏の歌を句はせたのである。其角崇拜の几董などは、

※この下の句を裁ち入れて明障子といふ作意の手柄、しかも一句の打ちきゝもよく、景情を備へ侍りて、凡力の及ぶべき事にあらず。

と、ひどく感じて居るが、單に才人の才を見るだけで、作句の動機としても不純である。而してこの動機は、其角の句をして、屢〻智的興味以外に何物もない弊に陷らしめた素因を成して居る。

傘に塒かさうよぬれ燕

『虚栗』に出て居り、其角の早い時代の句である。雨に濡れつゝ飛ぶ燕を見て「自分の傘の中にはひつて來い。こゝに濡れないやうに塒を貸してやらう」と呼びかけたのである。俚耳に入

○稲妻表紙　京傳作の讀本「ヨミホン」。文化三年刊。
○才牛　初代市川團十郎の俳名。
○稲妻の　荷翠の句。
○蛇食ふと　華摘集に「美しきかほかく雉のけ爪かなと申したれば」と前書して出づ。

り易くてしかもあまりいや味のない所が、この句のとりえであらう。京傳が『稲妻表紙』を草するに當り、不破伴左衛門の扮裝が才牛の創意で

稲妻のはじまり見たり不破の關

の句に基き、雲に稲妻の模樣に一定してゐるのに對し、名古屋山三郎の衣裳を、この其角の句意からとつて濡燕の模樣とした。それ以來不破・名古屋鞘當の芝居では、雲に稲妻と濡燕とが曾我兄弟の蝶千鳥の如く定つた扮裝になつたといふ。そして「濡燕」といふ端唄の一節にも、

あけていはれぬ胸のうち、包むにあまる袖の雨、紋は三つの傘に挵貸さうよ濡燕

と、其角の句がそのまゝ取入れられて居る。

美しき顔かく雉子の距かな

美しい顔と逞しい距との對照である。芭蕉はこの句に對して、

蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲

と和した。二句とも名高い句であるが、それは畢竟いづれも概念的な理窟が含まれて居るからである。もとより芭蕉も、其角の句に對したからこそ、かうした理窟を述べたのだ。

○明星や　句は續の原（元祿元年刊）に見え、「吉野山ぶみして」と前書がある。
○山かつら　曉山の端にかゝる雲をいふ。

明星や櫻さだめぬ山かつら

名高い句であるが、句意についてはいろ〳〵説がある。「定めぬ」のぬを完了の終止形に見て、「定めた」の意とする説もあるが、それは無理な解し方であらう。やはり否定のずの連體形と見たい。まだ明星の光が淡くまたゝいてゐる靜かな明け方、滿山の櫻の間に曉の雲が搖曳して居る景色である。その曉雲と櫻花の色と共に仄白く匂つて居るので、いづれが櫻いづれが山かつらと定めかねる風情を言つた句である。其角は自ら『句兄弟』の中に、この句をわざ〳〵持ち出して、

當座にはさのみ興感ぜざりしを、芭蕉翁吉野山に遊べる時、山中の美景にけおされ古き歌どもの信を感ぜし叙、明星の山かつらに明け殘るけしき、此の句の羨ましく覺えたるよし文通に申されける。

と吹聽して居る。そして例の『撮解』には、かねて其角の酒狂に心を隔てて居た芭蕉も、此の句に感じて

角が酒は醒むる期あり、此の句の匂ひ萬世消すべからず。

と言つて、勘氣を聽したといふ話まで書添へてある。

饅頭で人をたづねよ山櫻

句意は一向はつきりしないが、去來の『旅寢論』にこの句をあげて、

角が句は自讃といへり。然れどもその句意を聞けば、春花の間に遊んで、奴僕樣のものに饅頭をとらせて、誰を尋ね來るべしといへる句となん。さりとては言足らず云々。

と評してゐるので、さてはそんな意味かと始めて合點が行く。しかし確かに去來の評した如く言足らぬ句である。「饅頭で人を尋ねよ」だけで、「饅頭を駄賃にやるから、誰それを尋ね出して來い」といふ意に解させようとするのは、全く無理と言はねばならぬ。しかも其角は自ら此の句を以て得意としたといふのである。丁度手品の種を割つてあつと言はせようといつたやうな作爲が、卽ち其角の竊かに得意とした所であらう。而してこれこそ實に其角が自ら掘つた邪道の穽であつた。江戸座の俳諧はやがてかうした謎見たやうな句を喜んで、遂に救ふことの出來ない頽廢を來したのである。

○饅頭で　句は「末若葉」に出て居り、又「五元集」には「花田尋友」と前書がある。元祿十年の作。

○旅寢論に云々　なほ「去來抄」にも許六は謎といふ句だと言ひ、去來は言ひおほせざる句だと評してゐる。

○江戸座　其角や沾德（一三三頁參照）の系統に屬する江戸の俳諧を後世江戸座と稱した。

越後屋に絹さく音や更衣

越後屋は江戸駿河町の三井呉服店で、江戸一番の大店であつた。『永代藏』※には一日の賣高百五十兩あつたと言つてゐる。その店で初袷の帛を裂く氣持ちのよい音がスツ〳〵とあつちでもこつちでも聞える。初夏の爽かな氣分が輕く浮き出て來る。許六が『青根が峯』に、新しいものと今めかしいものとの論を試みて居る中に、この句の如きは今めかしい物を題材にしたので、其角ほどの相當の俳人が、こんな輕々しい事では困ると批難してゐる。しかしこの句はさう批難さるべきものではない。寧ろ都會人らしい敏感さから、巧みに季節感を捉へ得た人事趣味の句として、江戸座の風調の善い方面を發揮したものといふべきであらう。

時鳥一二の橋の夜明かな

一二の橋については諸説※がある。『撮解』には江戸本所一ツ目二ツ目の橋だといひ、又京都東福寺門前大和大路にある一の橋二の橋だともいひ、或は又眞蹟に「淀」と題したものがあるか

○越後屋に　この句浮世の北（元祿九年刊）に出づ。

○永代藏　西鶴作の小説「日本永代藏」

○諸説　馬琴の「燕石襍志」卷二には説く事最も詳かで、これを本所一ツ目・二ツ目の橋とする説を駁し、東

福寺門前の橋だとして居る。そして「大阪より夜船にて京のぼりする人、淀のわたりをまだ夜ふかきに過りたるも、深草や東福寺のほとりなる一二の橋を渡る頃は明方なるべし。さらは淀にては夜ぶかに聞きし杜鵑も、一二の橋にては横雲のひまに一聲二聲おとづれたる、なか〳〵にまた珍しき心地すと、夏の夜の短き旅泊の餘情こゝに說きつくすべからず」と言つてゐる。なほ「有礒海」に見える惟然の句「時鳥二つの橋を淀の景」も句解に參考すべきである。

○時鳥　この句「傾廓」と題してある。傾廓は傾城の居る廓の義。

○類柑子　ルヰカウジ。其角の遺稿たる俳文等を集めたもの。寶永四年刊。

ら淀の橋だともいふ。しかしこの句が叙景以外に、特殊の感懐をその中に寓してないとすれば、場所の穿鑿はさまで必要ではない。さうして私はこれを全く叙景の句であると解する。だから何處でもよい。一の橋二の橋と見渡されるやうな川のほとりに作者の位置を定める。そこを夜明に通るのである。四邊はまだ仄暗く川の面だけがほつと白けて、その上に橋が一つ二つと數へられる。折から時鳥が一聲鳴き過ぎたといふのだ。其角の句としては素直ない丶句である。

因みにいふ、この句はかつて國定小學讀本中に採錄され、當時これは其角が遊里歸りの句だといふので、教育界に一問題を起した事がある。しかしこれを單に叙景の句とすれば、遊里歸りとか、旅行の首途とか、種々の條件をそこに設ける必要はないのである。――尤も實際遊里歸りといふやうな詞書でもあるといふのなら別問題だが、いくら其角の句だからと言つて、早速吉原歸りを連想されては、彼も苦笑せざるを得ないだらう。

時鳥あかつき傘を買はせけり

これこそ紛ひもない吉原歸りの句である。『類柑子』の「あかつき傘」と題した文の中にも出てゐる。廓から歸らうとする曉方、折からはら〳〵と降り出た空に、時鳥の聲が聞えたといふ

のである。雨の降り出した事を、傘を買はせたと言つたのはやはり其角らしい。そして曉傘を買ふといふので、吉原情趣が溢れて來るのである。

かたつぶり酒の肴に這はせけり

『いつを昔』には「草庵薄酒の興友五に對す」といふ詞書がついてゐる。即興の輕い句として面白い。其角の磊落な風格が偲ばれる句である。

切られたる夢は誠か蚤の跡

人口に膾炙した句である。『去來抄』にこの句を評して、

其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤の喰附きたる事誰かかくは言盡さん。先師曰く、然り、彼は定家の卿なり。さしてもなき事をこと〴〵しく言ひ連ね侍ると聞えし評、詳なるに似たり。

と言つてゐる。芭蕉の評は流石に其角をよく知る者の言といふべきである。この句などは何で

○いつを昔　其角の撰。元祿三年刊。
○友五　イウゴ。江戸の人、芭蕉門。
○切られたる　この句「華摘集」（元祿三年刊　六月十六日の條に見え、「怖しき夢を見て」と前書があり、又「五元集」には「いき袈裟にすでんごうと打放されたるがさめて後」とある。いき袈裟は生きながら袈裟がけに斬る事。
○先師　芭蕉をさす。
○定家　平安朝末から鎌倉時代の初にかけて名高い歌人、藤原定家。

○水打てや　この句「華摘集」に出で、巴風亭での吟とある。

○夏の月　俗間上五を「夏の夜は」と傳へてゐる。それでは全く川柳である。

もない事に奇想を構へて、人を驚かさうといふ考が、實にあり〳〵と看取される。

〽水打てや蟬も雀も濡るゝほど

庭木や飛石だけではない。そこらの蟬や雀までずぶ濡れになる程打水せよといふのである。一讀爽涼の氣を生ずる。前の句などとは全くその詩境を異にして居る。

夏の月蚊を疵にして五百兩

蘇軾の詩句「春宵一刻直千金」によつた洒落にすぎない。即ち全く理智的な興味をねらつたので、文藝としてはもとよりとるに足らぬ作である。しかしその興味が理智的な點にあるだけ、一般俗衆に喜ばれたので、その結果これなどは全く通り句として、汎く知られるに至つたのである。

夕立や田を見めぐりの神ならば

○後世川柳子に云々　この句を題材にした川柳を少しあげて見ると、
　夕立や十二字ほどと降つて來る
　三圍の雨は豐〔ユタカ〕の折句なり
　きついきゝめ大紙に夕立や
　鳥居僅かに見える向島
　夕立の句にあやまつた稻荷樣
　句をほめるやうに蛙は鳴出し
　雨蛙ぐいに其角の膝をつけ
　傘の貸し手の多いのは其角
　宗匠へ蓑よ笠よと土手の雨
　傘の禮すむと其角の話なり
等枚擧に遑がない。

「ゆふだちや」の句碑
（東京本所小梅三圍神社境内にある

○須臾にして云々　かゝる附會はかなり早くからの事で、淡々の雜談集に「晋子船遊びに出て人々暑をはらひかね、宗匠の句にて雨ふらせ給へとたはぶれければ、其角ふと卄にこたへ、一大事の申事哉と正色赤眼心をさぢて、ゆふだちや田も（ママ）三巡りの神ならば　言ひもはてず雲墨を飛ばし、雨盆を覆すばかり、船をかたぶける事まのあたりにありけり。一氣の萌くる所眞の發する所、あざむくまじきはこの道の威なり」とことぐ〳〵しく述べてゐる。

※後世川柳子に屢ゝ題材とされたもので、其角の句中恐らく最も名高いものであらう。「五元集」には「牛島三遶の神前にて雨乞するものにかはりて」と前書し、句の次に「翌日雨ふる」と書添へてある。牛島は向島で、そこの三圍神社でよんだ雨乞の句である。意は田を見めぐりといふ名を負うて居る神ならば、この旱魃を傍觀する筈はあるまい。きつと夕立がするだらうといふのである。其角は自ら「翌日雨ふる」と書添へてゐるくらゐだから、大きに御利益があつたと己惚れたものであらう。御本人がその氣だから、やがてそれが江戸中の話の種となり、遂には

　ちつとべえ何か言はしつたれば降り

とか、※須臾にして雨降るなどと、大變な事になつてしまつたのである。要するにこの句の名高いのは、さうした世間的の理由によるので、決して藝術的價値が高いからではない、寧ろ其角が自選の集中にわざ〳〵この句を採録した事を

「ゆふだちや」の句碑

彼のために惜しむものである。

なほ馬琴は『燕石襍志』の中にこの句の上五を、「夕立てや」と動詞の命令形によむべきことを主張してゐる。成程その方が句意は解し易くなるが、この頃夕立つといふ動詞が一般に用ひられて居たとは考へられないし、且つ俳句の語法としては上五に切字があるから、直接中七以下と文法上の關係を持たなくてもよいわけである。だからやはりこれは「ユフダチや」とよんで少しも差支ない。

香薷散犬がねぶつて雲の峰

雲の峰が立つ日盛りの頃、あまりの暑さに犬までが香薷散を舐つて居るといふのだが、實はこの句には一寸した手品がしかけてある。それは鷄犬が鼎中に殘つてゐた仙藥を舐めたために羽化登仙し、雲中に鷄が鳴き犬が吠えたといふ支那の故事を使つたのである。それで「日盛りや」などといはずに「雲の峰」をもつて來たわけも分る。種を明かせばつまらぬ事だが、かうしたしかけは其角が屢〻好んで用ひた所である。だが要するにそれは機智を衆愚に誇るにすぎない。

○燕石襍志　馬琴の考證的な隨筆を集めたもの。

○香薷散　この句焦尾琴に出づ。

○香薷散　暑氣拂ひの藥として、昔一般に用ひられたもの。

○支那の故事　事文類聚「淮南王安臨仙去、餘藥在鼎中、雞犬舐之並得飛昇、故雞鳴雲中犬吠天上」

雨蛙芭蕉に乘りて戰ぎけり

磊落な其角にはまた一面詩人らしい細かい神經のはたらきが見られた。鋭く物の性情をつかんで、それに最もふさはしい表現を與へて居る。この句などは正しくその特色を發揮したものであらう。芭蕉の葉にちよこなんと乘つて居る雨蛙の涼しげな姿、それは「戰ぎけり」といふ言葉以外には、決して適切な言葉を見出す事は出來ないであらう。

秋の空尾上の杉をはなれたり

この句も秋空の高く澄んで居るさまを、「離れたり」といふ言葉で巧みにあらはして居る。たゞこの場合あまりに巧みすぎるといふ感がないでもない。

聲かれて猿の齒白し峯の月

○雨蛙　句は「句兄弟」に出で、又「五元集」には「雨後」と題してゐる。

○秋の空　この句炭俵には「尾上の杉に」とある。今五元集に從ふ。

○聲かれて　五元集には「巴江」と題してゐる。巴江は支那の巴峽「ハカフ」。哀猿が叫ぶので名高く、例へば謝觀の清賦に「巴峽秋深、五夜之哀猿叫レ月」とあるなど、古來詩文によく書かれてゐる處である。

○句兄弟　其角撰。元祿七年刊。古人今人の發句三十九句に其角自ら同工の句を配して判したもの。

○十論爲辨抄　支考がその俳論たる「俳諧十論」を自ら註したもの。

頭註に掲げた清賦の一句を翻したやうな作であるが、猿のむき出した白い歯を捉へた所に新しいはたらきがある。『句兄弟』※にこの句と芭蕉の

　　鹽鯛の歯ぐきも寒し魚の店

の句とを並べ出し、自句については、

　是こそ冬の月といふべきに、山猿叫山月落と作りなせる物凄き巴峡の猿によせて、峯の月とは申したるなり。沾レ衣聲と作りし詩の餘情ともいふべくや。

と説明し、なほ

　此の句感心のよしにて鹽鯛の歯のむき出たるも、すさまじくや思ひよせられけむ。云々

と、芭蕉も自分の句からヒントを得たやうな事を言つてゐる。然るに支考は『十論爲辨抄』※の中に、實情と手づまの證文として、この其角と芭蕉の句を持ち出し、

　其角が猿の歯は例の詩を尋ね歌を探して、かれてといふ字に斷腸の情を盡し、峯の月に寂寞の姿をうつし、何やらかやら集めぬれば人を驚かす發句となれり。

と言つて、これを手づまの標本としてゐる。芭蕉の句と比較すると確かにこの支考の評は當つて居る。又『三冊子』にも芭蕉の言として

　猿の歯白し峯の月といふは其角也。鹽鯛の歯ぐきは我が老吟也。下を魚の棚とたゞ言ひた

○鯛は花は　句兄弟に西鶴の「鯛は花は」の吟と並べて出してある。西鶴の吟は四一頁參照。

○名月や　この句雜談集・其角撰、元祿四年刊に出づ。

るも自句也。

といふ言葉を載せてあるが、これも其角の傾向をよく道破したものであらう。芭蕉は日常茶飯事のうちにも詩趣を味ひ、其角は奇想を天外より得來つて人を驚かさずんばやまぬ概がある。

鯛は花は江戸に生れてけふの月

西鶴の「鯛は花は見ぬ里もあり今日の月」の上手を行つたものである。魚河岸のいきのいゝ鯛、上野淺草の花、それに今日のこの名月、それもこれも江戸に生れて十分に樂しめるといふので、大に江戸つ子の氣焔をあげた句である。

名月や疊の上に松の影

とかく名高い句といふものは、俗受けがするだけで、藝術的には大してすぐれてないといふのが多いが、これなどは名高い句で、そして決して惡い句ではない。誰にでもよく分つて、しかも名月の趣を十分に捉へて居る。しかし要するに平面的な寫生の句で、未だ名句と稱すべき

○花影乘レ月上二欄干一　これは王安石の詩句「月移二花影一上二欄干一」を誤つたのであらう。

▽其角筆蹟（松宇文庫藏）

父子有親　鹹汁や脩き姫には猶くれし　キ角

○龍眼肉　龍眼は熱帶地方に産する喬木。その果實は圓形で、六七分。果皮に茶褐色の細紋がある。中に枇杷の樣な種子があり、肉に包まれてゐる。この肉が即ち龍眼肉である。食用又は藥用にする。

程のものではない。言はゞ初心の人などに、俳句とはこんなものだと示すのに、最も都合のよい作だといふ程度のものだらう。

『雜談集』によれば、この句は「花影乘レ月上二欄干一」の詩句と比べて、「疊の上の松影、春秋分明ならず、夏の夜の涼しき體にも通ふべきか」といふ難があつた。つまりこの景色は必しも秋の月に限らない、涼しい夏の月の趣にもとれるといふ批難である。これに對して其角は「春の月なる故、花欄干に上るとは言へり」と答へて、言外に秋の月だから松の影だと反駁の意を含めてゐる。それは確に其角の論が正しい。疊の上にくつきりと印した墨繪のやうな松樹の影は、やはり名月の趣である。

其角筆蹟

十六夜や龍眼肉のから衣

難解の句だ。『晋子發句撮解』には

○からびたる　この句「いつを昔」に出で、「遊園城寺」と前書がある。園城寺は卽ち三井寺のこと。

龍眼肉は殼を少し穿ちて實をとる形の、既望のはじめて缺くるに似たり。から衣は殼をいふ比喩なり。

と言つて居る。すると全く談林風の見立ての句となる。又或る說には、十六夜は昨夜月見のため誰も夜更しをして、寢不足の赤い眼をしてゐる。それが龍眼肉の薄赤い色に似て居るので思ひついた句だといふ。大分窮した說のやうであるが、とにかくかうした持つて廻つた說き方をせねば、句意を解する事が出來ないのは事實である。しかも其角はその難解なのを以て、窃かに得意としたのではなからうか。少くともこの句を作つた動機が藝術的感興によつたのではなくして、謎か考へ物を出題するやうな知識的興味にかられたのである事は、容易に想察し得る。

※からびたる三井の二王や冬木立

三井寺の山門のあたり、冬枯の木立が蕭條として居る中に、からびきつた金剛力士の阿吽の姿が見える。「からびたる」といふ言葉が一句の生命たる事は言ふまでもない。しかもそれは決して技巧から出たものでなく、本當にこの冬枯の情景を見盡した言葉である。こゝにはやはり

其角のすぐれた詩人的素質が見られる。蕪村の

三井寺や日は午にせまる若楓

と宜い對照をなした句だ。

※顔見世や曉いさむ※下邳の橋

顔見世芝居を見物しようと、朝早くから起きてそは〳〵して居るさまを、張良の故事に比した作意である。かうした故事をふまへての着想は、其角の最も得意とする所で、勿論それは俳諧の第一義とすべきではないが、この句などはとにかく才のはたらいた作だ。

※此の木戸や鎖のさゝれて冬の月

『平家物語』月見の條に「惣門は鎖のさゝれて候ぞ。東の小門より入らせ給へ」とあるのから、思ひついた句かも知れない。しかし句の趣致は勿論平家の月見と同じではない。これは寒さうな冬の月であり、嚴めしい城門のもとである。しつかりと鎖された重い扉が黒々と見えるやう

○顔見世　毎年十一月歌舞伎役者の座組等を改め、新しい番附で芝居を興行した。

○下邳橋　張良が黄石公の沓を拾つて、軍法の祕書を授つた所。その時石公は張良に朝早くこの橋上で待てと約したが、張良は來方が遲いので三度目にやつと虎の卷を授けて貰へたといふ。

○此の木戸や　この句猿蓑に入集したが、始め上五を「柴の戸や」と誤られた。

だ。所謂換骨奪胎の作といふべきである。

「去來抄」によればこの句を「猿蓑」に入集した時、書きやうが悪いため「此木戸」が「柴戸」とよめた。それで芭蕉はわざ〳〵大津から手紙をよこして、「柴の戸にあらず此木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり。たとへ出版に及ぶとも急ぎ改むべし」と言つてやつたといふ。又この句最初下五を冬の月・霜の月いづれにしようと置き煩つたが、芭蕉は其角が冬・霜に煩ふべき句でもないと言つて、冬の月に定めたといふ。良匠の苦心、一字も忽にしないさまが想はれてゆかしい話である。誠に去來も評してゐる通り、この月を柴の戸に寄つて見れば尋常の景色で、これを城門にうつして見ればその風情あはれに物凄い事が限りない。そこに作者の苦心も存してゐる。芭蕉がたとひ出版ずみでも、ぜひ改めよと言つたのも尤もである。

※初霜に何と※およるぞ舟の中

狂言「靱猿」の「舟の中には何とおよるぞ、苫を敷寝に楫を枕に」の文句取り。句は淀での吟で、※三十石舟に初霜の置く夜、乘客たちがどんな夢を結んで居ることだらうといふのである。狂言の文句がいかにも巧にはたらいて居る。流石に其角の才だと歎ぜずには居れない。

○初霜に　この句猿蓑に出で「淀にて」と前書がある。
○およる　寢るの意。
○三十石舟　昔伏見から大阪まで淀川を上下した舟。

○夜神樂や　この句猿蓑に「住吉奉納」と題して出で、中七「鼻息白し」とある。今五元集に從ふ。

○我が雪と　句は雜談集に出で、「笠重呉天雪」の詩句を題してゐる。

○笠ハ重シ云々　「詩人玉屑」に出づる詩。

○小傾城　この句「雜談集」には「世の中をいとふまでこそかたからめ」と前書がある。これは西行の歌で、下句は「かりの宿りを惜む君哉」

夜神樂や鼻息しろき面のうち

舞人の吐く白い息が面の内に籠つて、庭燎の光も氷るやうな夜神樂のさまである。但しこれは里神樂のさまと見た方が面白い。

我が雪と思へば輕し笠の上

「笠ハ重シ呉天ノ雪」といふ詩句に據つた作である。句意は解するまでもない。詩句を逆に行つたといふ外に大した働きもない句であるが、その解し易くかつ人情を穿つてゐる點が、世人の好みに投じたのであらう。

我がものと思へば輕し笠の雪

といふ形で、俗謠として俚諺として汎く知られるやうになつた。

小傾城行きてなぶらむ年の暮

これだけでも十分解せられる句である。だが『雜談集』にはわざ〳〵頭註の如き前書がしてある。ではこの西行の歌は句と何の關係があるかといふと、この歌をもとにして仕組んだ謠曲『現在江口』に、「小傾城どもになぶられて云々」といふ文句があるからである。些かの事にもかうして故事を引き才學をほのめかすのもまた其角の癖であつた。

※なつかしき枝の裂目や梅の花
傾城の賢なるはこの柳かな
行く水や何にとゞまる海苔の味
※綱が立つて綱が噂の雨夜かな
※一つところに袷になるや黑木うり
※文七に踏まるな庭のかたつむり
西瓜食ふ奴の髭のながれけり
寺の月葡萄膾は※葉に盛らむ
あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲

○なつかしき　この句以下凡て其角の作。

○綱が　謠曲羅生門「いかに面々さしたる興も候はねどもこの春雨のきのふけふ云々」

○一つところ　一時の意。

○文七　文七元結の製造者。古歌に「牛の子にふまるな庭の蝸牛角ありとても身をな頼みそ」による。

○葉に盛らむ　萬葉、卷二「家にあればけにもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」

○玄峯集　旨原の編。寛延三年刊。後に「嵐雪句集」といふ。
○元日や　この句其袋（嵐雪撰、元祿三年刊）に出づ。
○濡縁や　この句續猿蓑に出づ。
○濡縁　庇の外になつてゐる外緣である。

服部嵐雪

幼名久米之助。元來淡路の人であるが（嵐雪はすでに江戸で生れたといふ說もある。）幼時から江戸に住んだ。其角と同じ頃から芭蕉に師事し、始め嵐亭治助と呼んだ。後嵐雪と改め、又雪中庵・寒蓼齋・不白軒等と號する。新庄隱岐守・井上相模守等に仕へ、又稻葉家に抱へられて越後高田に居たが、遂に致仕して俳諧に專心した。寶永四年歿、年五十四。『若水』『其濱木綿』『杜撰集』『若菜集』『其袋』等の撰があり、その句は百萬坊旨原の編した『※玄峯集』に收められてある。

※元日や晴れて雀のものがたり

一夜明けると世は春、空はうらうらと晴れ渡つて、軒端に囀る雀の聲までが今朝は一入晴れ晴れして居る。「晴れ」に兩意をかねたのが働きである。但しそこに幾分遊戯的な氣分も加はつて居る。雀の囀りを物語りといつたのは、可愛らしい雀の動作もおもはれて親しい言葉である。

※濡縁や薺こぼるゝ土ながら

○元來この句は云々　この句の最も古く見えるのは、嵐雪の一周忌追善集「遠のく」（寶永五年刊）で、それには「寒梅」と題してある。然るに「玄峯集」にはその前書がなく、春季に入れて「此の句ある集に冬の部に入れたり。又面白きか」と書添へてある。

▽嵐雪像（卅三回忌追善集「風の末」所載）

雪中辭世

ひと葉ちる咄一葉散る風の上

○づつでなく云々　「づつ」と傳へて居るのはすべて誤で、「遠のく」を始め信憑すべき諸書にはみな「ほど」となつてる。

濡縁に土の附いたまゝの若菜がちよいと置かれてある。僅かそれだけのさまだが、正月らしい氣分が自ら漂つて來る。「こぼるゝ」といふ言葉が、いかにも適切に用ひられてある事を見のがしてはならない。

梅一輪一輪ほどの暖かさ

嵐　雪　像

名高い句だが句意は屢〻誤られて居るやうだ。※元來この句は「寒梅」と題してあつて冬季の句なのである。それで句意は「寒梅が一輪開いた　ほつかりとどこやら紅味を帶びたその花を見てゐると、冬とは言ひながらその一輪ほどの暖かさがもう感ぜられる」といふのである。梅が一輪づつ開くにつれて暖かさが增すといふ意ではない。※づつでなくほどとあるのに注意せねばならぬ。隨つて「梅一輪、一輪ほど」と上五で切るべきで、「梅一輪々々ほど」ではない。但しかう解すると句意は誤つて居ないとして

も、何だか理窟めいていやな句になるやうに感ずる。しかし「一輪々々づつの」といふ意に解した所で、理窟つぽい事は同一である。要するにそのいくらか理窟つぽい點が、人口に膾炙されるやうになつた所以で、隨つて藝術的にはさまで高く評價さるべき句ではない。

出がはりや幼心に物あはれ

この句も嵐雪の作中最もよく知られた吟で、支考は夙く『葛の松原』に「嵐雪が幼の一字にて人に數行の涙をゆづりける也」とほめて居る。この一年間居馴染んだ下女や下男が、今日は愈々暇乞ひして出て行く。幼な心にもそれが物あはれに感ぜられるといふのである。幼年時代に誰もが同じやうに抱いた感じ、それがそのまゝに言出されてあるので、この句をよむ誰もがまた心を動かさずには居れないのである。人情の眞を穿つて居るが故に、この句は何人にも理解され、同感され、さうして名高くなつて行つたのだ。

石女の雛かしづくぞ哀れなる

○出がはりや　この句猿蓑を始め、此花集・鳥羽蓮花・雛人形等その他諸書に出づ。
○出がはり　昔は三月五日に奉公人が交代するならはしであつた。それをいふ。
○葛の松原　支考の俳論を記した書。元祿九年刊。
○石女の　この句續虛栗・此花集等に出づ。
○石女　子を生まない女のこと。
○かしづく　大事にする意。

これも實情を穿つて居る。其角のやうに作つた句ではない。子を持たぬ女がせめて雛様でも飾り立てようといふ心持ちが、しみじみと物哀れに感ぜられる。嵐雪の妻は實際石女で、子供の代りに猫を可愛がつてゐた。あまり可愛がりすぎて時々夫婦喧嘩までやつたといふ逸話があるが、この句も、あるいは妻の實情をよんだのかも知れない。

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

『源氏物語』横笛の巻に

御齒のおひ出づるに食ひあてんとて、筍をつと握りもちて雫もよゝと食ひぬらし給へば云々

とあるのから、想を得たのであらうといふ。美しい兒が白い可愛らしい齒竝を見せて、竹の子を嚙むさまは、成程『源氏物語』などの優雅な一場面も想ひやられる。單に寫生的の句としても勿論面白い。

五位六位色こきまぜよ青すだれ

○竹の子や　この句炭俵・別座鋪等に出づ。

○五位六位　この句其袋・夜曉集（元祿三年刊）等に出づ。

○色こきまぜよ　昔は位階によつて朝服の色が一定されて居た。五位は淺緋、六位は深綠である。

▽嵐雪筆自畫賛　東京　加藤氏藏

一陣雁影落
新流堅田秋
又しても立さはぐ也春の雁　嵐雪

○嵐雪發句撮解　菜窓莊丹の著。玄峰集中の難解の句百十章をとつて一解を施したもの。文化三年刊。

嵐雪筆自畫賛

五位、六位の官人たちが、緋や緑の目もさめるやうな服裝で、青簾をかけ渡した殿上に立竝んで居る。それは誠に清爽優雅なさまであらう。句はすがくしい青簾に對して、さうした古代のみやびた、美しさを想ひやつて、「色こきまぜよ」と言つたのである。これも『源氏物語』若紫巻の文句「見も知らぬ四位五位こきまぜに、ひまなう出で入りつゝ」などを「嵐雪發句撮解」には引いて居る。

しだり尾の長屋々々に菖蒲哉

百人一首でよく知られた「山鳥の尾のしだり尾の」によつた作意であるが、それを一轉して「長屋々々」と俗にもつて行つた所が俳諧である。長屋の軒毎にさした菖蒲が單調にずつと竝んでゐるのは、成程しだり尾の長々しいと言ひ

○秋風の　この句『嵐雪戊辰歳旦帖』（元祿元年刊）・『續の原』（元祿元年刊）等に出づ。

○相撲とり　この句炭俵・或時集・俳諧曾我・風の末・つのもじ等を始め、後世の類題集類にも多くとられてる。

たい感じだ。「しだり尾の」は長屋の形容でもあり、同時に全體的な感じをも言ひ現はして居る。かなり小手のきいた技巧と言はねばならぬ。

秋風の心動きぬ繩すだれ

初秋の句である。『嵐雪發句撮解』には後嵯峨院の

あし簾夕暮かけて吹く風に
　秋の心ぞ動きそめぬる

といふ御歌を引いてある。繩簾にそよめく風にもう秋が感ぜられるといふので、もしこの御歌によつたのであるなら、一句の手柄はあまりないわけであるが、蘆簾を繩暖簾に化したのはやはり俳諧である。

相撲とり竝ぶや秋の唐錦

頭註で知らるゝ通り、多くの俳書に採錄されて汎く知られた句である。力士たちの花やかな

まはしの色を、秋の千草の織出した唐錦に見立てたのである。句に深い意味もなく、藝術的の匂ひも稀薄である。しかも汎く人口に膾炙して居る所以は、これまた誰にも解し易く、特に「唐錦」の語が秋との聯想をすぐ呼起すので、そこに感心させられたものらしい。相撲は俳諧では秋の季になつてゐる。

名月や烟這ひ行く水の上

眼前には音もなく靜かに流れる川の水がある。その上を白く搖曳する一抹の烟、――それは恐らく川霧であらう。月は皎々と照り渡つて、誠に夢の世界のやうな美しさである、月光の下に展開された水邊の夜色が、縹渺たる趣を湛へて描き出されてゐる。

沙魚釣るや水村山郭酒旗の風

杜牧の詩の第二句をそのまゝ中七字以下に用ひて、原詩の春色を秋興に假りたのである。しかも少しもちぐはぐな感じがなくて、沙魚を釣る江村のさまがそのまゝ浮んで來る。

○名月や　この句萩の露（其角撰、元祿六年刊）に出づ。

○沙魚釣るや　この句虛栗（天和三年刊）に出づ。

○杜牧の詩　千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中。

黄菊白菊其の外の名はなくもがな※

文字のまゝに解すれば、「その外の名は無い方が宜い」だが、實は「その外の菊は」の意たる事は言ふまでもない。それを間接に言廻したのは、露骨を避けて含蓄味を豐ならしめたのである。これで句に鷹揚な品格が生じて來る。但しこの種の間接な表現は、動もすれば理窟めいた主観を含んで、月並臭くなりがちであるが、この句の場合はさうした難がない。

黄紅白紫色さまざまの百菊中でも、やつぱり菊の清香にふさはしいのは黄菊と白菊とだけだといふのである。而してそれは菊の清楚高邁を愛するものの、齊しく同感すべき所で、苟くも詩歌の趣味を解する程の者ならば、何人もこの句を喜ぶにちがひない。即ちこれが嵐雪の代表句の一となつた所以である。

蒲團着て寢たる姿や東山

柔かい線を描いて横はる東山の姿を、巧みに形容したものである。しかもその形容は極めて

○黄菊白菊　この句自撰の其袋集（元禄三年刊）に出で、菊花九唱中のその三、「百菊を揃へけるに」と前書がある。

○もがな　希望をあらはす助詞。何々であつたら宜いの意、こゝは「無かつたらいゝ」即ち「無い方が宜い」の意。

○蒲團着て　この句枕屏風（元禄九年刊）には「東山晩望」、水ひらめ（元禄十一年刊）には「京にて」と前書あり、その他玄峯集・八重桜・嵐の末等の諸書にも採録されて居る。

○今少し　この句刀奈美山（元祿八年刊）に出づ。

平易で、子供にでも成程とすぐうけ入れられる。この句が嵐雪の作中でも最も人口に膾炙された所以は、即ち何人にも容易に解せられ、かつ同感されるといふ點にある。元來名高い句といふのは、多くかやうに萬人向きのする句で、それだけ一面深味に乏しく、又動もすれば理智的な興味に走りがちである。然るに嵐雪の名高い句といふのは、平易ではあるが所謂月並に墮せず、相當に佳句とすべきものが多い。嵐雪の特色は、要するにかうした溫雅平明な所にあると言つてよからう。

なほこれは實際蒲團を着て寢てゐる恰好を、東山の姿に見立てた作だといふ説がある。しかしそれでは何等の詩趣も解せられないばかりでなく、「東山晩望」とか「京にて」といふ前書が無意味になる。東山の句たる事は明である。但し發句の形式的條件からいへば、やはり「蒲團」が季語となつて居り、隨つて冬季の句である。「寢たる東山」で「山眠る」の季語に宛てようとするのは、無理であらう。

※今少し年寄見たし鉢叩

鉢叩といふものは惣じてわびしくかれた感じを持つたものである。ところが今見た鉢叩はま

だなま若い色の小白い男だつた。何だか鉢叩情調にそぐはないやうな氣がして物足りない。もう少し年老つた奴は來ないかなアといふのである。些か興じた心もちがある。

其角が『刀奈美山』の卷頭に記した所によれば、元祿八年霜月十三日の夜、其角・嵐雪・桃隣の三人が去來の落柿舍を訪ね、主客四人、師翁芭蕉の昔を偲んで、泣きつ笑ひつして一夜を明した時の吟であるといふ。その文には

八ッの鐘耳ひそかにして、鉢叩のしはぶき來る。これを嵐雪が馳走にと十錢をなげて、千聲のひさごをならさしむ。

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角
今少し年寄見たし鉢たゝき　嵐雪
瓢簞は手作なるべし鉢たゝき　桃隣
旅人の馳走に嬉しはちたゝき　去來

と、他の三人の句も一しよに記してある。

○霜月十三日の夜　鉢叩はこの夜から瓢を叩いて洛中洛外を徘徊するのである。
○落柿舍　洛西嵯峨にあつた去來の別莊。

内藤丈草

尾張犬山の人、通稱林右衛門。藩侯の異母弟寺尾直龍の近侍として出仕したが、元祿元年廿七歳の時、病弱の故を以て致仕し、かねて參禪して居た犬山先聖寺の玉堂和尚のゆかりを訪ねて、山城深草の里に假寓した。その頃から芭蕉に師事し、師の歿後は粟津龍ヶ岡の佛幻庵に閑居して禪と俳とに精進し、遂にこの庵中に終つた。寶永元年歿、年四十三。俳書の撰はないが、隨筆『寢ころび草』の著がある。

鶯や茶の木畑の朝月夜

鶯が鳴いて居る。場所は茶の木畑だ。時刻は夜の明け方、まだ有明の月が淡い光を投げて居る。春の夜明の新鮮な、そしてにほやかな感じに滿たされた句だ。丈草には別に

鶯や次第上りの茶の木原

の作があるが、朝月夜と時刻を示しただけに、前の句の方が情景がはつきりと浮ぶ。

○鶯や　この句浮世の北（元祿九年刊）に出づ。

○鶯や　この句白馬集　元祿十五年刊　に出づ。

〇大原や　この句北の山（元禄五年刊）・炭俵（同七年刊）・[illegible]の竜（寶永元年刊）等に出づ。大原は洛北の地名で、平家物語の大原御幸の一節などでよく知られ、朧の清水といふ名所もある。

〇白雄夜話　白雄の遺稿を花垣碩々が輯めて刊行したもの。天保四年刊。

〇丈草像（東京、小石川　芭蕉庵安置の木像）

※大原や蝶の出て舞ふ朧月

この名もゆかしい大原の里、朧月夜に白い蝶がひらひらと舞ふ姿は、夢のやうな美しさであらう。全く幻想的な光景だ。この句について、蝶は夜間飛翔しないものだから事實に反するといふ批難もある。しかし實際出て舞つたのは蛾か他の昆蟲であつたにせよ、作者がそれを蝶と思つてよんだのなら少しも差支へはない。藝術の境は科學の世界より自由である。讀者も亦丈草と同じく、月下に舞ふ蝶の姿を、眼前に想ひ浮べる事が出來るであらう。

丈草像

後世の書であるが、『※白雄夜話』には次のやうな話が傳へられて居る。

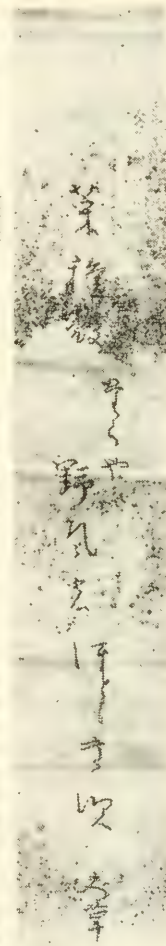
蕉翁の曰、夜蝶の舞ふさまいかゞあらんやと聞き給ひしに、昨夜大原を通りてまさに此の姿を見侍りぬと。翁曰、しかるうへは秀逸たるべし。誠に大原なるべしとぞ頌歎淺からずありしと。

たとひこれが假託の言であつたにせよ、芭蕉と

○丈草誄　丈草が歿した折、去來がこれを悼んだ文章で、丈草追善集「幻の庵」に出で、又「風俗文選」中に収められてある。

〔丈草筆蹟　松宇文庫藏〕
菜種殻たくや野風のほとゝぎす　丈草

○春雨や　この句笈日記（元祿八年刊）に出づ。

丈草とはこの問答をそのまゝ肯定するであらう。去來の「丈草誄」によれば、芭蕉が深川の庵に歸つた頃、知友の句を書集めてたよりをした中に此の句も書加へてやつた。すると芭蕉は丈草の風雅のやゝ上達した事を評し、この僧なつかしと言へ」と去來へ返事があつたといふ。

丈草筆蹟

なほこの大原は洛北の方ではなく、洛西大原野であらうといふ說もある。地勢から言ふと、小鹽山のなだらかな麓につゞいて、東に廣々とした野が開けて居り、句のやうな情景にはむしろふさはしい。地名から來る古典的な聯想も、洛北の大原と限らねばならぬ事はない。のみならず大原野の方にも、やはり朧の清水と傳へる名所はある。とにかく實景を知つて居る者には、大原野の方がよりふさはしく感ぜられる。

春雨や抜け出たまゝの夜着の穴

すぽりと抜け出たまゝ、夜着も疊まぬ春雨のものうい一と日。それは丈草自身の生活のさま

であつたらう。彼は自ら懶窠丈草と號した。性來虛弱な彼は、あまり行脚などもせず、草庵に靜かな日を送る事が多かつた。常に隱れ閑をあまなひ、淋しい生活に浸り切つた彼の境涯が、輕く興じたこの一句の中にも、明かに映し出されてゐる。

取りつかぬ力で浮む蛙かな

芭蕉の風雅は彼の生命であつた。自己の藝術に對する眞摯なそして熱烈な愛が、芭蕉に不斷の努力をつゞけさせた。しかし丈草の俳諧は所詮彼の靜かな淋しい生活の伴侶に過ぎなかつた。彼はあくまで禪に遁れ閑に居するのが本意で、風月に情を勞し花鳥に神を惱ますのもまた執着と觀じて居た。かつて芭蕉から

　※此の僧此の道にすゝみ學ばば、人の上に立たん事月を越ゆべからず。

といふ程屬目されて居た彼であるが、しかも彼は俳諧にも執をとゞめず、たゞ興乘じて來り興盡きて歸るといつたやうな態度で句を作つた。去來も

　性困しみ學ぶ事を好まず、感ありて吟じ人ありて談じ、常はこの事打忘れたるが如し。

と言つて居る。

○取りつかぬ　この句鳥の道（元祿十年刊）に出づ。丈草發句集（蝶夢編、安永三年刊）には中七「心でうかぶ」とある。

○此の僧云々　去來の丈草誄に見える。

○我が事と　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

かうした丈草の心境を知つて居れば、この句の成つた所以も自らうなづけるであらう。由來この種の句は、概念がそのまゝ露骨にあらはれて、藝術的の匂に乏しいものである。この丈草の作も、さうした批難を免れる事が出來ないかも知れぬ。しかし何事にも執着を絶たうとした彼は、本當にとりつかぬ力で浮ばうとしたのである。これは彼が自分自身に言ひきかせる言葉でもあつたらう。

※我が事と鰌の逃げし根芹哉

小川のほとりなどで根芹を取らうとすると、そこに居た泥鰌が自分を捕へようとするのかと思つて、あわてて逃げ出したといふのである。極めて輕いユーモアに富んだ句である。しかしそこには又ユーモアだけですまされない所もある。何か人生のある一面を穿つたやうな意もある。もしこれに「疑心生二暗鬼一」とでも言つた題をつけると、それはすつかり觀念的な句に解されるかも知れぬ。事實丈草がこの句を制作した際に、さうした諷刺的の意が全くなかつたとは言はれまい。だが句はあくまで卽興に出た作である。疑心暗鬼を生ずる意は、その時ふつと丈草の胸を掠めたにすぎない。正面から觀念的に作つたのでは、この句の輕いユーモアは決し

○時鳥　この句芭蕉庵小文庫（元祿九年刊）に出で、なほ續猿蓑・園の華等にも採錄されて居る

て生れて來ないであらう。

丈草は簡易な生活の間に、只管安らかな心境を求めて居た。その安らかな心が、時をりかうした輕いユーモアにもなつて現はれて來るのであつた。

水底を見て來たやうな小鴨かな

つれのある所へ掃くぞきりぎりす

これらは一茶の句境に似てゐるやうで、一茶のやうな皮肉が微塵もない。素直な輕い笑のみが浮んで來る。

※時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り

この湖水は言ふまでもなく琵琶湖であらう。五月雨頃である。水は一帶に淡く濁りを帶びて居る。そこへ時鳥が一聲、湖上を斜にスウッと鳴き過ぎた。と、湖水の面は輕く波立つて、靜寂の氣がかすかにゆらぐ。さういつた光景である。

時は早曉でもあらうか。大きな景色であるが、その間に細かな感覺がはたらいて居る。佛幻庵の窓によつて、じつとこの光景に心を澄ませてゐる丈草の姿が、何となくおもひやられる。

蚊帳を出て又障子あり夏の月

門人魯九が出家した折に與へた句である。『風俗文選』に載せた「贈二新道心一辭」を引いて見よう。

世をのがれて道を求むる程の人は、皆一かどの志を發して、まことしきつとめともしあへれど、年を重ねぬれば、又かれこれに引かるゝ緣多く、事繁くなりて、更にはじめの人ともおもほえぬ振舞のみぞ多かる。古人も此の事を戒めて、出家は出家以後の出家を遂ぐべきよし勸めはけましぬ。魯九子は美濃の國蜂屋の山里に遊びて、いまださかんなる齡のいかなる緣にや、俄に墨の袂に染めかへて、鹿のすみかをかけ出で、山寺にかき籠れるよし、傳へ聞き侍りて、今のこゝろざしの正しきに、なほ後の出家を怠らぬみさをの程を願ひて、拙き辭を申し送りぬ。

句意は右の文章によつて自ら解されよう。蚊屋を出たのは今の出家である。しかしそれだけでは直ちに眞如の月を見る事は出來ない。今一つの障子を開けねばならぬ。それが出家後の出家である。卽ち譬喩を以て出離の得難きを諭し、道心の堅固なるべきを戒めたのである。

○蚊帳を出て　この句は志津屋敷（元祿十五年刊）をはじめ草刈田・幻の庵・風俗文選等に出づ。なほ風俗文選には「贈新道心辭」といふ一文がついてゐる。

○魯九　美濃深田の人、雲華齋と號す。丈草の愛弟で、師の歿後追善集「幻の庵」・「鳰法華」等を撰んだ。

○少し理の云々　許六の「青根が峯」に見える。

○夕立に　この句泊船集（元祿十一年刊）・篇突（同年刊）等に出づ。篇突には「五老井の納涼」と前書がある。五老井は近江彦根の東郊にあつた許六の別莊。

○稻妻の　この句初蟬集（元祿九年刊）に出づ。

許六は丈草を評して、「少し理の過ぎたる方なり」と言つた。前出の「取りつかぬ力で浮む蛙」やこの句などは、確かに理に過ぎて居るだらう。しかし丈草の宗教的信念の中から生れた句として、やはり彼の全人格の反映がある。決して空疎な觀念だけの教訓とは聞かれない。

夕立に走り下るや竹の蟻

『篇突』によれば五老井で涼を納れた折の吟だといふ。沛然として夕立が降つて來た。今まで庭の竹を上下して居た蟻共が、忽ち列をなして走り下る。眼前の卽景であるが、白雨一過する折の涼味が巧に捉へられて居る。

稻妻のわれて落つるや山の上

闇の中にパッと閃いた稻妻が、忽ちさッと二つにわれた。と、その光の下に、眞黑く突立つた山の頂が照らし出される。鋭く緊張した句である。「われて落つるや」が千鈞の重みをもつて居る。その爲に實景が眼前に迫るやうな感じがするのである。

鹿小屋の火にさし向くや庵の窓

佛幻庵の生活の一つであらう。近くの山畠に鹿の番小屋がある。その小屋の火が丁度庵の窓に相對して見えるのである。孤獨に馴れてゐる彼にも、この夜毎窓から見るその火が、何かなつかしいもののやうにさへ思はれるのであつた。

山鼻や渡りつきたる鳥の聲

北の國から長い旅路を飛んで來て、今やつと山鼻にとりついた渡り鳥の群れ。青く澄んだ空の下に、安堵の喜びを歌ふやうなその鳥の聲が高く響き渡つた。句はたゞ「渡りつきたる」と客觀的な敍法をして居るが、その中に嬉しげな小鳥の情が十分に籠つて居る。

病人と撞木に寝たる夜寒哉

○鹿小屋の　この句續有磯海（元祿十一年刊）・猿舞師（元祿十一年刊）等に出づ。

○山鼻や　この句渡鳥集（寶永元年刊）に出づ。

○病人と　この句韻塞（元祿九年刊）に出で「病鄕里荷兮亭」と前書がある。なほ句は皮籠摺・柴橋集等にも見える。

○撞木　鉦を叩く丁字形の棒。

病氣で寢てゐる鄉里の舊友を訪ねて、その病人の部屋に泊つたのである。ところが病人の都合か何かで撞木形に床をとつて寢た。それが枕を並べて寢てゐるのとはちがつて、何となく物足りない侘びしい心もちがした。夜寒の感じも一入深かつたのである。

撞木に寢た離れ〴〵の感じ、病人の低い寢息、肌寒い衾、それらが集つて侘びしい秋の夜の情調を形つて居る。しかもそれらは一つ〳〵の道具立てでなく、渾然として統一されたわびであり、さびである。

※うづくまる藥のもとの寒さ哉

前書にある通り、師翁の病床に侍しての吟である。師の病を氣遣ひながら、藥鍋のそばにしよんぼりとうづくまつてゐるのは、卽ち丈草自身の姿であらう。この句について『去來抄』には次のやうな事が記されてある。

先師難波の病床に人々に夜伽の句をすゝめて曰、今日よりわが死後の句なり。一字の相談を加ふべから

丈草

○うづくまる　この句枯尾花（元祿八年刊）に「はせを翁の病床に侍りて」と前書がある。

「丈草筆蹟　伊賀　龜井氏藏」

木曾川の邊にて
ながれ木や篝の聲のほとゝぎす

別人
別れはのどちらに付ぞかんこ鳥

蟬鳴や別れて上る瀬の山

或山里の夜會に
もち寄の蓋放や綠の先

この關にて
町中の山や五月の上り雲

山行卽興
晝鏡や若竹戰ぐ山づたひ

或人の山莊にて
家の子の見ゆるや峯の蕈笠子取り
つれの有所へ掃ぞきりぐす

山畑の陷に減るや鹿の聲
炭竈や隣の人が燒にゆく
　隣の子供ゝ物買にやりける時のかへるさいと遲かりしを何ゆへぞとたづね侍りしかばしかじかの障ありてと聞へしまゝに
藍瓶に切レを失ふ寒さかな
　筆まかせにあらぬ事まで書付申候御遠慮なく御了簡の上にて御皆ゝ、捌ての、人中候ものはや年内は匆ゝの中書中以も申まじく候
　頃日出京いづゝやより便之刻ご認相置候　草ゝ不宣
　　極月五日　　　丈草　花押
時、いづゝやは京都の書肆井筒屋庄兵衞で俳書を多く出版し、俳人の書簡の取次などをした。

すとなり、さま〴〵の吟ども多く侍りけれど、只この句のみ丈草出來たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ、興を發し景を探るに遑あらんやとはこの時にて思ひ知り侍る。」

と。そしてこの時人々のよんだ句は、芭蕉の終焉記「枯尾花」に左の如く見えてゐる。

病中のあまりすゝるや冬ごもり　去來
引張りて蒲團に寒き笑ひ聲　惟然
叱られて次の間へ出る寒さ哉　支考
思ひよる夜伽もしたし冬籠り　正秀
鬮とりて菜飯炊かする夜伽哉　木節
皆子なり蓑虫寒く鳴盡す　乙州

いづれもわびしい夜伽のさまがあらはれては居るが、わけても丈草の吟にその夜の實情は盡きてゐる。芭蕉がひとりこの句に滿足の意を表し、去來が「かゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ」と感じたのも當然である。

○幾人か　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

○着て立てば　この句[illegible]の庵（寶永元年刊）に出づ。

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋

比良颪が湖面を波立たせて、一しきりハラ〳〵と時雨が欄干を横にうつ。傘持たぬ往來の人は、しばし雨宿りする所もない橋の上の事とて、思ひ切つて驅け抜けて行く。それが一人、二人と、もう幾人かさうして長い橋の上を通つて行つた。全く嘱目のまゝだが、時雨の風情がよく捉へられて居る。

着て立てば夜の衾もなかりけり

たつた一枚の布子だ。寢た時は夜着になり、起きた時はそのまゝ着て居る。「抜け出たまゝの夜着の穴」と同じく、丈草の簡素なそして物うけな生活のさまが想はれる。一體丈草の句には、いつも彼の生活の影が濃く漂つて居る。試みに彼の句集を繙いて見たら、その日常生活の中から生れた作が、いかに數多いかがすぐ氣づかれるであらう。そしてそれは芭蕉などのやうに、水雲の間に詩神を惱ますといふのではなくて、大がい自庵に引籠つたまゝ、隱閑を樂しみ

ながら案じ入つた作である。だから許六の如きは、「自句をやるとて丈草の庵といふも聞き倦き侍るなり」と皮肉な口吻を洩らして居る。實際「庵」の語をあらはに言つた句だけでも

塗樽の庵に立ちよる花見哉
死んだとも留守とも知れぬ庵の花
鶯にとらばや庵の風ふせぎ
谷風や青田をまはる庵の客
晝寝して見せばや庵の若葉風
朝夕べ秋のまはるや原の庵
鹿小屋の火にさし向くや庵の窓
鹿小屋の聲は麓ぞ庵の客
草庵の弱りはじめや秋の蠅
借りかけし庵の噂やけふの菊
早稲の香や雇ひ出さるゝ庵の舟
海山の時雨つきあふ庵の上
筆くれて返事させけり雪の庵

草庵の火燵の下や古狸

守りゐる火燵を庵の本尊かな

等の十數句を數へる。これらの庵が皆自庵といふのではないが、大部分は自分の生活を中心としたものである。勿論「庵」とあらはに言はない句にも、佛幻庵の朝夕を想ふべき句は多いので、成程取材を汎く求めるといふ事から言へば、丈草の作はあまりに範圍が狹く限られて居るかも知れない。しかし彼の特色は又そこにあると言つても宜いのだ。清高な隱者の風格こそ彼の句の生命であらう。

下京をめぐりて火燵行脚かな

丈草が自ら懶窩と號し、物ぐさを口癖にして居たのは、一つはその病弱の爲でもあつた。時にはかうして人の旅するのを羨ましいと言つても居るのである。しかもこの句の中には、羨しいといふよりも、むしろ悠遊自得の趣がある。火燵を庵の本尊として居るといふ寒がり屋が、この冬空に旅などはとても及ばぬ事だから、まあ下京あたりの友人でも次から次と訪ねまはつて、火燵の御馳走にでもあづからうといふのだ。「火燵行脚」といふ言葉が、輕く興じた心もち

（下京を）この句記念題（元祿十一年刊）に出で「人の行脚のうらやましくて」と前書がある。なほ句は幻の庵・けふの昔等にも出づ。

○凡兆の句　「下京や雪つむ上の夜の雨」一九七頁参照。

○鷹の目の　この句「菊の香」（元禄十年刊）に出づ。又は泉川集・淡路島等にも見えるが、淡路島に下たを「寒さかな」としたのは誤であらう。

もあつて誠に面白い。

下京と特に言つたのは、上京に住む人々が一般に上流社會であつたのに比して、こゝは中流以下の住む所として、自ら安易な感じをもつて居るからである。凡兆の「下京や雪つむ上」の句に於る上五文字と併せ味はうて、徒らな措辭でない事を知るであらう。

鷹の目の枯野に居る嵐かな

獲物をねらふ精悍な鷹の目が、いかにも力強く表現されて居る。蕭條たる枯野の中に、きつとすわつた猛禽の眼光は、物を射抜くやう。と、翼の毛を逆立てるばかりに嵐が吹過ぎる。身が引きしまるやうな感じだ。丈草はまたかうした鋭い自然描寫もして居るのである。彼が詩人として天分に恵まれて居た事は明である。

向井去來

名は元淵、諱は兼時、通稱平次郎。長崎の儒醫向井元升の次男である。少時父に從つて上洛し、專ら武道を修業したが、後官途につく念を絶つて俳諧に親しんだ。貞享頃から芭蕉に見え、師に仕へる事極めて篤實であつた。かつて芭蕉から關西の俳諧奉行といはれ、蕉門に重きをなした。寶永元年歿、年五十四。『猿蓑』を凡兆と共に撰び、又卯七を助けて『渡鳥集』を撰んだ。『去來抄』・『去來文』『旅寢論』等はその遺稿として、芭蕉俳諧の神髓をよく後世に傳へてゐる。

元日や家に讓りの太刀佩かん

元日の嘉例として家重代の太刀を佩くといふのである。去來の父兄は儒醫を以て身を立てたのであるが、去來自身は略傳に述べた通り、はやくから武藝を嗜んで弓馬の道に通じ、かつて猛猪を殪して人を助けた事もある程の腕前であつた。彼の作に、この句や

鎧着てつかれためさん土用干

（一）元日や　この句續虚栗（貞享四年刊）・貞享二年其角歳旦帖等に出で、歳旦帖には上五が「初春や」となる。

秋風や白木の弓に弦張らん

など、武士らしい氣品をとゞめたものが見られるのは、成程とうなづかれるであらう。これらの作は、去來のさうした經歷を知つて初めて十分に理解し鑑賞さるべきものである。

※鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり

この間までは夜毎にそこらの小路を通つてゐた鉢叩の音も、いつの間にか聞えなくなつた。「あゝ近頃はもう鉢叩も來なくなつたなあ」と、ふと氣が附いたやうに獨言をいひながら窓を明けると、月の光もいつか春らしく朧に霞んで居る。「朧かな」でなく「朧なり」と言ひ下したので、此の間まで寒く冴えてゐたのにはや朧月だなと、ふいに朧夜を感じたさまが適切に言ひあらはされてゐる。

去來像

※上り帆の淡路はなれぬ汐干哉

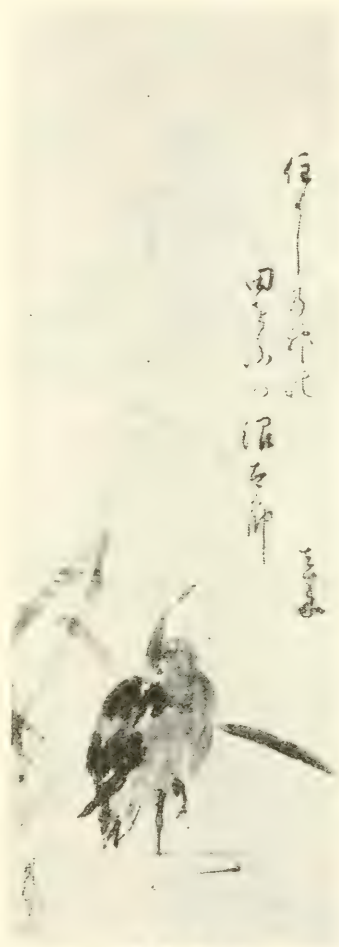
○鉢たゝき　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

▽去來像（明和七年刊「芭蕉堂歌仙圖」に據る）

○上り帆の　この句芭蕉庵小文庫（元祿九年刊）に出で、「三月三日堺の海邊に遊て」と前書がある。句はなほ續猿蓑にも出づ。

〔去來筆蹟　松宇文庫藏〕
住よしの神の田をふめ沼太郎　去來

○動くとも　この句曠野（元祿二年刊）・其袋（元祿三年刊）に出て、前者は下五が「麓かな」とある。これでは句意がはつきりしないので、後に改作したのであらう。

大阪へ上る西國船であらう。帆をゆるやかに孕ませて淡路の島かげに浮んでゐる。それがいつまでたつても動くとも見えない。磯には汐干の人影が霞んでゐる。誠に長閑な春の海の光景である。

去來筆蹟

動くとも見えで畑うつ男かな

これも前句と同じやうな趣の光景である。遠くの畑に折々鍬の刃がピカリ／＼と光る。だがその畑打つ男の影は、いつまでも同じ所から動くやうにも見えない。長閑で平和な景象が滿ちて居る。

瀧壺もひしげと雉子のほろゝ哉

瀧壺に落ち込む水の音が凄じく響いてゐる。とその水音もひしげとばかり、けたゝましい雉子の鳴聲が聞えたといふのである。「ひしげと」といふ四文字に、雉子の鋭い耳を劈くやうな鳴聲が遺憾なくあらはされて居る。萬葉の「たぎの八の、淺野の雉子明けぬとし、立ちとよむらし」も思ひあはせられるが、萬葉の歌は單純な敍景であるし、この句には流石に複雜な主觀が伴つて居る。

何事ぞ花見る人の長刀

人口に膾炙した句である。花見に殺人劍を携へた不風流をなじつたのである。分りやすい通俗的の句だが、それだけ露骨で味はひに乏しい。

一昨日はあの山越えつ花盛り

『葛の松原』『去來抄』等に、芭蕉がこの句を評して「三四年も早からう。數年待たねば聞く

○瀧壺も　この句續猿蓑（元祿十一年刊）に出づ。

○何事ぞ　この句曠野（元祿二年刊）に出づ。

○一昨日は　この句華摘（元祿三年刊）に始めて見え、なほ葛の松原等に出づ。

○郭公なくや　この句己が光（元禄五年刊）に出づ。又風俗文選所載許六の「去來誄」の中にも見え、「郭公なくや雲雀の十文字」とある。

○許六は云々　許六の「青根が峯」参照。

人があるまい」と言つた話が見える。去來自ら密かに得意としてゐた句らしい。見返ると遙か後ろの山つゞきは今櫻の花盛り、たゞ白雲と見えるばかりである。あゝあの山は一昨日越えて來た山だ。あの折はまだ咲きそめたばかりと見えたのに、僅か二日のうちにはや滿開になつたのかなあと、旅人は暫くそこに佇んだまゝ花盛りの山をなつかしげに見入つてゐた。さうした情景が此の句から想はれる。芭蕉が賞したのも去來が自負したのも、要するにこの餘情に富んだ點にあつたのだらう。

郭公なくや雲雀と十文字

去來の作中最も名高いものである。許六はこれを次の五月雨の句と共に、去來一代の秀逸に數へて居る。しかしこの兩句は、決して同日に論ぜらるべき性質のものではない。この句意は解するまでもなく、時鳥と雲雀の飛び方の習性をとり合せたので、時鳥は中空を斜に横切つて飛び、雲雀は麥畑の中などから一直線に舞ひ上る。それで二つが十文字に交叉するといふ對照に興味を持つたのである。言はゞそれは幼稚な興味にすぎず、表現も亦極めて單純である。許六が心からこの句に感心したとすれば、些かその鑑賞眼を疑はねばならぬが、それは要するに

○古歌　源三位頼政の歌、頼政集に出づ。

○湖の　この句雜談集（元祿四年刊）に出で、又風俗文選所載許六の「去來誄」中にも見える。

何人にも解せられ易い點について賞したのであらう。例へば小學讀本の中においても　又全く俳諧の素養がない人に示しても、すぐ成程と肯かせ得るだけの興味をもつて居るからである。

勿論何人にも解せられ易い句だから低級だと言ふのではない。この句の制作が實景から來た感興に基いたのでなく、專ら縱と横との配合といふ觀念的な——しかも幼稚な理智的興味を主としたものだからである。古歌の

引渡す大原山の横霞
　すゞにのぼるや烟なるらん

なども同様な興味だが、これは「十文字」などと露骨に言つて居ないだけまだしもである。

湖の水增さりけり五月雨

一讀雄大な景が想ひ浮べられる。降りつゞく五月雨に、流石の大湖も目に見えて水が增した。いつも百川を容れて變りのない湖水だけに、溢れるやうに漲つた水のさまが、一層五月雨時の感じを深くするのである。許六は「去來誄」に、この句を以て正風體の眼を開いた作だと激賞して居る。これは前の十文字の句とはちがつて、全く實感に發した作であり、しかも何人にも

○舟乘の　この句翠菓合（元祿五年刊）・後れ馳（元祿十一年刊）等に出づ。

○葉がくれを　この句刀奈美山（元祿八年刊）に出づ。落柹舍日記（安永三年刊）には「翁落柹舍に寓居し給ひけるころ」と前書がある。

解され易い事に至つては同樣である。三宅嘯山はこの句を『俳諧古選』中に採つて、「精深眞得蕉老之風骨。此篇惟琶湖可以當之。大哉言也」と評して居る。

舟乘の一濱留守ぞ芥子の花

全村の漁夫たちはすつかり沖に出はらつて、濱の晝は森閑と物音もない。納屋の片わきに美しく咲いた芥子の花がひつそりと午後の日を浴びてゐるといふやうなさまである。この句にはどこが面白いといふやうな趣向もねらひ所もない。たゞそのまゝの句である。しかし男たちの居ない靜かな漁村を背景として、その中に一輪の芥子の花を描き出すことは凡手の直ちに及び得る着想ではない。やはり自然を見る心の修業がつんで居なければならぬ。

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉

芭蕉が落柹舍に滯在中、去來が訪ねて行つた時の吟であるといふ。瓜までが暑さに堪へないでころげ出たといふので、輕いをかし味がある。

※岩鼻（いははな）やこゝにもひとり月（つき）の客（きやく）

この句については「去來抄」に芭蕉と去來との問答が記されてゐる。今その全文を引いて見よう。

去來曰、洒堂は此の句を月の猿とすべしと申し侍れど、予は客まさりなんと申す。先師曰、猿とは何事ぞ。汝此の句をいかに思ひて作せるや。去來曰、明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騷客を見付けたると申す。先師曰、「こゝにもひとり月の客」と名乘り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此の句は我も珍重して『※笈の小文』に書入れけるとなん。予が趣向は一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感もあるにや。

即ち去來は「月の客」を他の人として作句し、芭蕉は作者自

去來筆蹟

○**岩鼻や**　この句笈日記（元祿八年刊）に出で、なほ浮世の北・藁人形・芭蕉盟・鴨矢立等の諸集、風俗文選所載許六の「去來誄」中等に見える。

▽**去來筆蹟**（伊賀　龜井氏藏）

五六本寄りてしだるゝ柳哉　去來

放かさこはるゝ家や冬ごもり　同

夕ぐれは鐘を力や寺の秋

此句此中風國申候は夕ぐれの鐘をおかき邊にて聞候へは却てさびしからず候　此氣色を句にいたし度と存候へども出來不申候よし申され候　右與風仕て見申候可然存候處尤近所にて聞候へはさびしからぬ事に候へ共夕ぐれの鐘のやかましきやうに仕候ほど風流をうしなひ可申候　夕ぐれのさびし（マヽ。下に「さ」を脱したのであらう）を本意に立、却て寺中鐘を力にいたしたる風情はやかましきやうに聞たると少ちがひ可申と奉存候て如此に仕立候　俳句ノ善悪難斗知候且又存寄之邪正も難分候故委細に申上候　御斧正奉願候

○**笈の小文**　吉野紀行とは別で、芭蕉が自ら門人の句を選んで一集にしようと企てゝ居た書名。

○魂棚の　この句韻塞(元祿九年刊)に出づ。

身のことと解したのである。そのいづれの解が宜いかは別問題として、この問答によつて俳句が必しも定つた一つの解釋をのみ持つべきものではないといふ事が明かに證せられてゐる。俳句にせよ和歌にせよ、元來かゝる短小の詩形では、十分に意を盡す事が出來ないから、自然讀者の聯想に任せらるゝ事が多い。隨つて俳句や和歌は、讀者の方にもこれを鑑賞すべく特殊の修養が多少なければならぬ。その修養の如何は、直ちにその句の解釋と關係をもつて來るのである。

この句の場合芭蕉の解は確に面白い。しかし月に興じたあまり、我と同じ風流の士を見て、「こゝにも一人」と岩かけから飛出す風狂は、去來の思ひ及ばぬ所だつたのだ。隨つて芭蕉の解は作者の意とは異つて居るのだが、鑑賞者の立場から言へば必しも誤解とは言へない。そこまで深く味はひ得たのは芭蕉の修養によるのである。芭蕉の鑑賞は同時に彼の創作でもあつたのだ。

魂棚の奥なつかしや親の顔

『去來抄』によると、この句はじめは

○祭る時は　論語、八佾篇「祭如レ在、祭レ神如二神在一」

○故郷も　この句今日の昔（元祿十二年刊）に出で、又渡鳥集（寶永元年刊）には「入長崎記」といふ一文と共に出てゐる。

面影のおぼろにゆかし魂祭

と作つて、手紙の中に

　祭る時は神いますが如しとやらん、靈棚の奥なつかしく覺え侍る。

と書いて芭蕉に送つたら、芭蕉は

　靈祭尤もの意味ながら、此の分にては古びに落ち申すべく候。註に靈棚の奥なつかしやと侍るを、何とて句になさゞるや。

と注意を與へたので、去來は直ちにその言に服して、かう改めたのであるといふ。誠に亡き親をしのぶ悲しみの情は、「おぼろにゆかし」といふやうな生ぬるい言葉では言ひあらはせない。「奥なつかしや」とそのまゝに言放つた所に眞情が溢れて居る。

故郷も今は假寢や渡り鳥

去來が故郷長崎を訪ねた時の吟である。故郷とは言ひながらも、今は都の住居に馴れた身の、さながら旅寢の心地である。折からこれも旅寢の渡り鳥がやつて來るといふので　當季の景物を捉へて巧みに感懷を洩らして居る。

有明にふりむきがたき寒さ哉

この句は當時から名高い句であつたと見えて、頭註に示した通り諸集に採錄され、支考の如きは「その情幽遠にしてその姿をばいふべからず」とほめて居る。曉の風が身を切るやうな中を、頭巾に顏を包んで步いて居る。振返つて西の空に明け殘つた月を仰がうとすると、その白々とした光が一入寒く感ぜられて、思はず首をちゞめるのである。誠に曉の寒さの實情がよく捉へられて居る。

一說にこの有明は有明行燈で、朝早く眼ざめた寢室の寒さであると解するものもあるが、「振向く」と言ふのは、枕頭の行燈に眼を向けるとしては、些か大形である。況んや「堀川を通りて」といふ前書さへあるとすれば、やはり有明の月影を振仰ぐのにちがひない。

木枯の地にも落さぬしぐれ哉

パラ〳〵と降つて來た時雨を、木枯がさあつと橫なぐりにする。雨は地上まで落ちない中に、

○有明に　この句篇突（元祿十一年刊）・續有磯海（同年刊）・泊船集（同年刊）・猿舞師（同年刊）等をはじめ、今日の昔・鳧日記・花の雲等にも見える。又去來發句集には「堀川を通りて」といふ前書があるが、これは何に據つたものか明でない。

○有明　有明の月。

○木枯の　この句初案いつを昔（元祿三年刊）に出で、中七「地まで落さぬ」とある。

○おう〳〵と　この句句兄弟（元祿七年刊 に出で、その他有磯海・錦繡緞・梟日記・ねなし草等にも見える。

どこかへ吹きまくられてしまふのである。この句始めは「地まで」といふのであつた。然るに「地まで」と限つた文字は丁寧でいやしいから、只「地にも」と直したがよいと芭蕉の評した事が、『葛の松原』や『去來抄』等に見える。までとにもと僅かに二字の差ではあるが、それだけで句の品格なり味はひなりがすつかり變つて來る。かうした芭蕉の鉗槌を受けたればこそ、蕉門の人々が眞に風雅を體得する事が出來たのである。『去來抄』については多少疑も持たれてゐるが、少くともそこに芭蕉の言葉として傳へられて居る事は、よく蕉風俳諧の精神を示したものであり、去來が忠實に師の教を書き殘したものと信ずべき點が多い。

おう〳〵といへど敲くや雪の門

雪にとざした表の門をトン〳〵とたゝく音がする。「おう」と内で答へても、降る雪に佇みわびてか、又もせつかちにトン〳〵と敲く。答へる聲、敲く聲、雪に訪ね來た人の風情が、その應答の間にまざ〳〵と描き出されて居る。

『去來抄』によれば、丈草は「此の句不易にして流行のたゞ中を得たり」と稱し、支考は「いかにしてかく安き筋よりは入りたるや」と疑ひ、曲翠は「句の善惡を云はず、當時作せん人を

○尾頭の　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

覺えず」と評し、その他其角・許六・露川等皆佳句と感じて居り、正秀の如きは「たゞ先師の聞き給はざるを恨むのみ」とまで殘念がつて居る。要するにその特に巧んだ所がなくして、しかもよく實情を得て居るからである。

尾頭の心もとなき海鼠哉

海鼠のどこが尾とも、どこが頭とも、要領を得ないやうな恰好を言つたのである。それを「心もとなき」とは、誠に適切な形容だ。あらゆる形容詞の中から、今これに代るべき言葉を見出すことは到底不可能であらう。それほどこの言葉はこの句に於いて重要な役目を持つて居る。

森川許六

名は百仲、字は羽官、通稱五助。居を五老井といひ又菊阿佛の別號がある。近江彦根の藩士。始め田中常矩に學び、後ち芭蕉に歸す。繪を善くし、又文にも長じた。芭蕉の歿後しきりに師の血脈を傳へたと稱して論陣を鼓つた。正德五年歿、年六十。『韻塞』『篇突』『宇陀法師』『正風彦根體』『歷代滑稽傳』『風俗文選』等の撰著がある。

清水の上から出たり春の月

なだらかに横たはつた東山の上から、春の月がほつかりと浮び出た。清水の舞臺も八坂の塔も朧に霞んで、すべてが柔いなごやかな雰圍氣に包まれて居る。誠に縹渺たる春の夜の景である。この句や

四條から五條の橋やおぼろ月

菜の花の中に城あり郡山

○清水の　この句正風彦根體（正德二年刊）に出づ。
○清水　京都東山の清水寺。
○四條から、菜の花の　二句共「正風彦根體」に出づ。
○郡山　大和國。柳澤氏の舊城下。

「許六像（明和七年刊「芭蕉堂歌仙圖」に據る）

○苗代の　この句篇突（元祿十一年刊）に出づ。

等、いづれもその土地にふさはしい情趣を描き出したので、一面から言ふと、それだけあまりに道具立が揃ひすぎ、作りすぎたといふ感じがないでもない。しかし例へば後の句の如き、これを蓼太の

菜の花にのどけき大和河内哉

に比すれば、素直に景色を叙して、印象を鮮かならしめて居るのは、流石に許六の詩人的素質のすぐれて居る事を思はせる。

許六像

苗代の水に散り浮く櫻哉

整然と區切られた苗代。淸らかな水、旣に青々と一二寸ものびた苗。その水に傍の櫻が一片二片散りこんで浮いてゐるのである。色彩に豐かなしかもすらりとした句である。

許六には此の句の如く、一句の中に季題を二つ入れた作が多い。『去來抄』に、

風國曰、彥根の發句、一句に季節を二つ入るゝ手くせあり。難ずべきや。去來曰、一句に

季節二三有るとも難なかるべし。もとより好む事にもあらず。

とあり、この句などは、さうした點の目立たない、すつきりとした句で、許六の句としてはいいものの一つであらう。

※出代りや傘提げて夕ながめ

出代りの物あはれな情である。いよ〳〵主家を去つて行かうとする下女などが、傘を提げて小雨そほ降る夕の空を、じつと眺めてゐる。さすがに半年か一年の思出を殘した家と人とに、名殘が惜しまれるのであらう。門を立去りかねてゐる風情が自ら浮んで來る。「夕ながめ」といふ言葉は、許六の造語でなく、當時普通に用ひられた言葉ではあるが、この句の情にぴつたりはまつて居る。

※梅が香や客の鼻には淺黄椀

許六は發句の取合せといふ事について盛んに論じてゐる。取合せとは要するに配合といふ程

○出代りや　この句韻塞　元祿九年刊　に出づ。

○出代り　奉公人の交替をいふ。昔は三月と九月と二期に出代りしたが、只出代りといへば三月卽ち春季である。

○梅が香や　この句篇突　元祿十一年刊)・記念題(同年刊)に出づ。

の意である。更に蕉風の言葉で說明すれば、芭蕉の所謂匂・響の調和といふ事である。卽ち同じ匂、同じ響をもつ二物を取合はせる事によつて、そこに一つの微妙な調和感が生ずる。それは芭蕉が主として連句に於て唱へた事であるが、それを發句にうつせば、畢竟許六のいふ如く取合せといふ事になる。この梅が香の句について、許六自ら『靑根が峯』の中にはかう說いてゐる。

予此の頃梅が香の取合せに、淺黃椀とり合物なりと案じ出して、中の七文字色々に置けどもすわらず。

梅が香や精進膾に淺黃椀　是にてもなし

梅が香や据ゑ並べたる淺黃椀　是にてもなし

梅が香や何所ともなしに淺黃椀　是にてもなし

など色々に置いて見れども、道具取合物よくて發句にならざるは、これ中へ入るべき言葉たしかに天地の間にある故なり。かれこれと尋ぬる中に、

梅が香や客の鼻には淺黃椀

とすゑて、此の春の梅の句となせり。

と言つてゐる。この意を分り易く說明すると、許六は最初梅が香と淺黃椀と、調和すべきもの

と考へて、その配合の方法を種々案じた末、遂にこの句を得たといふのである。彼は折角取合物を求め得ても、その取合せの方法がよくなければいかぬと言つて、例へば日月の光と水晶とを得てもその水晶の使用法を知らぬと、日月の光をうつして天火天水を得る事が出來ないやうなものだと說明してゐる。

さて以上の說を聞いた上でこの句に對すると、その苦心の點は十分察知する事が出來るが、句としては必しも上乘の作とは言へない。梅が香と淺黄椀との感じが、すでに必しもよい取合物でないばかりでなく、これを「客の鼻には」と結び合せたのは、あまりに露骨で、梅花の清香は抹消し了られた感がある。二者の配合から幽玄な味などは到底求むべくもない。それは畢竟許六があまりに取合せの自說に拘泥しすぎた爲であらう。彼は極めて鋭い直覺力をもつてゐた。だからその說は極めてよく要領を得てゐるが、作品はとかく理論に引きずられがちであつた。

春慶の膳据ゑわたす花見哉　（韻塞）

日野椀の色に咲きけり赤椿　（麻生）

これなども春慶塗の膳と花、日野椀と赤椿とがあまり露骨に配せられて、所謂取合せの妙味を失つてゐる。

○卯の花に　この句炭俵（元祿七年刊）に出で「旅行に」と前書あり、なほ句は句兄弟・刀奈美山・韻塞等にも見え、「韻塞」の田路紀行によれば、元祿六年五月六日許六が江戸を立つて歸鄕の途についた時の吟であるといふ。

○曲輪の云々　去來の「旅寢論」による。同書は許六の「篇突」を難じたもので、もとこの論も「篇突」の發句詞續の評中に見える所である。今要を摘む爲、「旅寢論」の文に從つた。

「許六筆蹟」松宇文庫藏。

一さうに[illegible]若菜つみ　許六

「[illegible]、一さうに」は「一齊に」といふ程の意。

卯の花に蘆毛の馬の夜明哉

許六は取合せの外に曲輪といふ事を論じた。それは句の題材を案ずべき範圍に關する論で、それについて許六はかう言つた。

曲輪の内より求めて新らしき事なし。たまたま殘りたる物も同日隣家の者と同題を案ずる時、同じ曲輪なれば殘りたる物にひしひしと尋ね當るべし。道筋變らざればうたがひなし。

曲輪を飛び出て案じたらんは、親は子の案じ處と違ひ、子は親の作意と格別ならん。

許六筆蹟

卽ち要するに飛び離れた所から着想せよといふのである。去來は『旅寢論』にこれを一片の見解にすぎぬと排して、「曲輪の内を捨得まじき事は自後に思ひ知られなん」と言つてゐる。去來の論は誠に正論である。誠の名吟佳什は曲輪の内外などに拘はる筈はない。しかし實際の句作上新意を得るためには、許六の論は最も適切だと言はねばならない。さうしてこの句などは、

去來も曲輪の外から合せた佳句の例としてあげてあるが、卯の花の句としては實際清新な趣に富んでゐる。卯の花が垣根にほの〴〵と白い朝まだき、蘆毛の馬に跨つて旅立つさまは、誠にすが〴〵しくも勇ましい。

「去來抄」には去來もかつて「有明の花に乘込む」とまで案じて、下に月毛駒、蘆毛駒では言葉がつまるし、の文字を入れると口にたまつていろ〳〵思ひめぐらしても遂に成らなかつたが、許六のこの句を見て大いに感じたと言つてゐる。又其角は『句兄弟』の中に、この句を芭蕉の「六月や峯に雲置く」等と共に、豪句の中に入れてゐる。

佛法を裸にしたる産湯哉

諧謔の句である。灌佛のさまをかく興じたので、許六の句中汎く知られたものの一である。ところが延寶八年刊「軒端の獨活」に竹内松寸といふ人の作で、これと一字も違はぬ句が出てゐる。しかし「韻塞」は許六自身が李由と共に撰んだものであり、その外頭註にあげた通り、『後れ馳』『蝶姿』等にも許六の作として出てゐるのだから、決して剽竊や誤傳ではあるまい。恐らく許六がこの松寸の句をかつてよんだ事があつて、後年それが自作の如く思ひ浮ばれたの

○句兄弟 其角撰。元祿七年刊。

○六月や 前出、二六四頁參照。

○佛法を この句韻塞 元祿九年刊に出で、なほ「後れ馳」「蝶姿」等にも見える。

であらう。俳句を實際作つたものにはさういふ經驗は屢々ある　この句などは勿論談林風の洒落にすぎないのだし、功を松寸に歸して許六句集中から抹殺してよからう。

凉風や青田の上の雲の影

青々とつゞいて居る水田の上を、凉風がサッと吹過ぎる。と蒼空に浮ぶ白雲が、大きく稻葉の上に影を落して行く。すがくしい夏の眞晝である。清新な感じに富む句で、深い味はひはないかもしれぬが、小學生や中學生などに示すには、最も分り易くかつふさはしい作である。

十團子も小粒になりぬ秋の風

許六の句中最も名高いもので、彼自身もまた頗る得意な句だつたらしい。『風俗文選』の「直指傳」中に、彼が江戸で始めて芭蕉に見えた時、宇津山での吟だと言つてこの句を示すと、芭蕉は大いに驚いて「今わが腸は見拔かれたり」と歎じたと言つてゐる。さうして芭蕉はのち嵐蘭に「許子はわが血脈をとゞむるものだ」と語つたといふ事迄吹聽してゐる。

○凉風や　この句韻塞（元祿九年刊）に出づ。

○十團子も　この句韻塞（元祿九年刊）を始め、陸奥千鳥・續猿蓑・鏡箏の諸集に見え、又『風俗文選』の直指傳中にも引いてゐる。

○彼自身もまた頗る得意な句云々　この句についてはなほ『青根が峯』の自讃論中にも詳しく述べて居る。

○嵐蘭　松倉氏、芭蕉門。元祿六年歿、年四十七。

〇十團子　宗長手記、大永四年の條に「折ふし夕立して宇津山に雨宿り、この茶屋昔よりの名物十團子といふ。・杓子に十づゝ、必ずめらうなどに掬はせ興じて、云々」とある。然るに東海道名所記（萬治年間）には「宇都の山（中略）、坂のあがり口に茅屋四五十家あり、家毎に十團子を賣る。その大さ赤小豆ばかりにして麻の緒につなぎ、古へは十粒を一連にしける故に十團子などいふならし」と見え、もうこの頃は數すら十とは定まつてゐなかつたらしい。

※十團子は駿河國宇津の山の名物で、昔は鍋の中から一掬ひに必ず十箇づつ掬(すく)ひ上げたので、この稱があつたのだといふが、後には糸に十箇づつ團子を貫いて賣ることになつた。許六は前に一度宇津の山を過ぎてその名物を味はつた事がある。今度もこゝを通つて前の茶店に足を休めた。そして何心なく團子を取上げて見ると、以前より大分小さくなつたやうな氣がする。やつぱりこんな寂しい山里まで、世智辛(せちがら)い浮世の波はよせて來ると見える。折から秋風は寂しく吹いてゐる。何となく侘びしい感じがひし〳〵と迫る。さういつた情景である。

許六は「小粒になりぬ」といふ中七字に、二日間案じわづらつたといふ。この句全體が、彼が大さわぎして自讃(じさん)するだけのものかどうかは別問題として、すでに『去來抄』にも「此の句しをりあり」と芭蕉が評した由が見える。そのしをりがある所以については說いてないが、少くともこの中七字に一句の生命がある事は言ふまでもなからう。例へばこれを「十團子も小粒なりけり秋の風」とか、「十團子の小粒に吹くや秋の風」などとしたのでは、普通の平凡な句にすぎなくなる。「小粒になりぬ」と曲折(きよくせつ)をつけたので、その間に歳月の推移(すゐい)が自(おのづか)ら感ぜられ、こゝに始めて世智辛い世情を歎ずる情が、蕭殺(せうさつ)たる秋の風とぴつたり響き合ふのである。それはもはや小粒の十團子と秋風との單なる取合せではない。作者の自我(じが)によつて完全に統一(とういつ)された世界から生れたものである。

欄干にのぼるや菊の影法師

「直指傳」の中に先師滅後の句で、今一人もこの句の腸を聞く人がないと歎じた句が、八句あげてある。その中の一つだ。たゞしこれなどは、王安石の詩句を飜案したにすぎず、特に許六自身の手柄は見られぬやうである。

落雁の聲のかさなる夜寒かな

列をなして、池や沼などに雁が降りて行く。その雁の一羽が啼けば、又其の次が啼くといふ風に、だん〳〵と啼聲が重つて聞えて來る。それが一人夜寒を身に沁みて感じさせるのである。雁の啼聲に夜寒を感じるといふだけでは、恐らく陳腐を免れないであらうが、たゞその啼聲が「かさなる」と言つた所にこの句の手柄がある。しかしすでに前書の示す如く畫讃の句であり、實境によつた作でない爲であらうか、むしろそれがわざとらしくも聞える。一歩を誤ると月並に墮しさうなきはどい境にある。

○欄干に　この句風俗文選（寶永三年刊）、直指傳の中に出づ。

○王安石の詩句　夜直の詩に「金爐香盡漏聲殘、剪々輕風陣々寒、春色惱人眠不得、月移花影上欄干」

○落雁の　この句韻塞（元祿九年刊）に出で、「自畫自讃」と前書あり。

新藁の屋根の雫や初時雨

藁屋の雨の音はすべて一種の雅味をもつたものであるが、わけても今年の新藁で葺き終へたばかりの屋根に、はやくも初時雨の雫が傳ひ落ちるさまは、新しいものの中にしつとりした落ちつきと侘びとが感ぜられる。

大名の寢間にも寢たる寒さかな

この句は「旅の賦」の本文と併せ讀むと、一層その趣が深く味はれる。本陣などに泊つて、爰が殿樣の御寢間だといふ所に寢せて貰つた。折から寒い夜の事である。廣々とした部屋、行燈の灯影にキラ〳〵光る金襖、それらが身にそぐはないので、一入寒さを感ずるといふのである。筆者はかつて高野山のさる僧房の客間に一泊して、つく〴〵かうした實感を味はつた事がある。

大髭に剃刀の飛ぶ寒さ哉

○新藁の　この句韻塞（元祿九年刊）に出づ。

○大名の　この句韻塞（元祿九年刊）・「風狂人が旅の賦」中に出で、又風俗文選の中にも見える。なほ句は小文庫・續猿蓑（下五が「夜寒哉」とある）にも出づ。

○大髭に　この句韻塞（元祿九年刊）に出づ。

この句の生命は「飛ぶ」といふ言葉にある。顔も埋まる程の大髭を、ごそ〳〵と剃り落す剃刀の刄が白く光る。全く飛ぶといふ感じだ。寒さがそれで骨身に沁んで來る。

※茶の花の香や冬枯の※興聖寺

茶の花といひ、冬枯といひ、興聖寺といひ、それだけですでに高逸、清淨、閑寂な趣が味はれる。然るにそれが三つかうして取合せられたのでは、些か道具立が揃ひすぎて困る。これは前にも述べた事であるが、許六は土地により場所により、よくその特殊な情景を捉へるに巧であるが、それがあまり誂へ向になる嫌がある。この句の如きもその難點はあると思ふが、初心に示す作としてはまづ差支ないものであらう。

○茶の花の　この句草刈笛（元祿十六年刊）に出づ。

○興聖寺　山城宇治の禪刹。道元禪師の開基で本邦最古の禪刹だといふ。宇治川に臨み境内頗る閑寂の趣に富む。

各務支考

美濃山縣北野の人、始め黄雲山大智寺の僧となつたが還俗して醫となり、伊勢の凉菟に導かれて蕉門に入つた。芭蕉の歿後諸方を遊歷して勢力を張り、久頻りに師説を賣つて同門に忌まれたが、晩年は鄕里に歸り美濃派の祖となつた。獅子庵・野盤子・東華坊・西華坊・蓮二坊・梅花佛等の諸號がある。享保十六年歿、年六十七。『葛の松原』『笈日記』・『續五論』・『俳諧十論』・『本朝文鑑』・『和漢文操』等の撰著があり、句集に『蓮二吟集』がある。彼は創作よりも辯論の雄として知られ、かつて自ら支考終焉記を草して『阿誰話』を出し、その後は支考の遺弟蓮二坊が師説を祖述するといふ體で、盛に論議した。

山鳥の樵夫を化かす雪間哉

昔から山鳥は人を化かすものだと言はれて居る。これは『和漢三才圖會』に、「凡山雞性乖巧ニシテ而難レ捕。人緩則禹歩、急則暴飛。爲レ之終日費二人力一非二鐵銃一不レ可レ獲」などとある

○蓮二吟集　江戸の掬一浮編。寶曆五年刊。

○山鳥の　この句其使（元祿七年刊）をはじめ「住吉物語」・「有磯海」等に出づ。

○雪間　殘雪の消えたところ。

▽支考像（明和七年刊「芭蕉堂歌仙圖」に據る。）

○船頭の　この句夜話狂（元祿十六年刊）に出づ。

通り、山鳥は一寸捕へられさうで中々捕へ難いものである。その爲につい山鳥を追つかけて段段山奥まで深入りし、結局鳥には逃げられ、歸路には迷つて馬鹿を見るといふ事が往々ある。かうした事から、山鳥が人を化かすと言ふやうになつたものであらう。

句は谷間の雪も解けた頃、木こりに出かけた樵夫が、かうして山鳥に引廻されたさまである。樵夫といひ雪間といふので、山奧か谷間などが自づと聯想され、一層神祕的な無氣味さが加はる。

支考像

船頭の耳の遠さよ桃の花

長閑な春の晝である。岸には紅い桃の花が暖かさうに咲いて居る。渡船の客は二三人か、せい〳〵四五人ばかり、棹を操る船頭はもう六十の坂を越してゐる。「爺さん、なか〳〵達者さうだな」と話しかけても、耳が遠いか一向通じない。舟はいつか向岸についた。

馬の耳すぼめて寒し梨の花

梨の花は櫻や桃とちがつて絢爛華美の趣がない。何となく淋しみのあるものだ。まだうすら寒い春の夕べ、馬も耳をすぼめて家路に歸つて行く。その情景に梨の花はまことにふさはしい。去來はこの句に感じて、「馬の耳すぼめて寒しとは我も言はん、梨の花とはよせられし事妙也」と評して居る。

出女の口紅をしむ西瓜かな

はしたなくも西瓜に噛りついた飯盛女が、流石に口紅が剝げるのを氣遣ふのは女の情である。見つけ所が面白い。千代尼の

紅さいた口も忘るゝ淸水かな

は、むしろわざとらしいが、其角の

西瓜くふ奴の髭の流れけり

○馬の耳　この句葛の松原（元祿五年刊）に出づ。

○去來は云々　この事「去來抄」に見える。

○出女の　この句東華集（元祿十三年刊）に出づ。

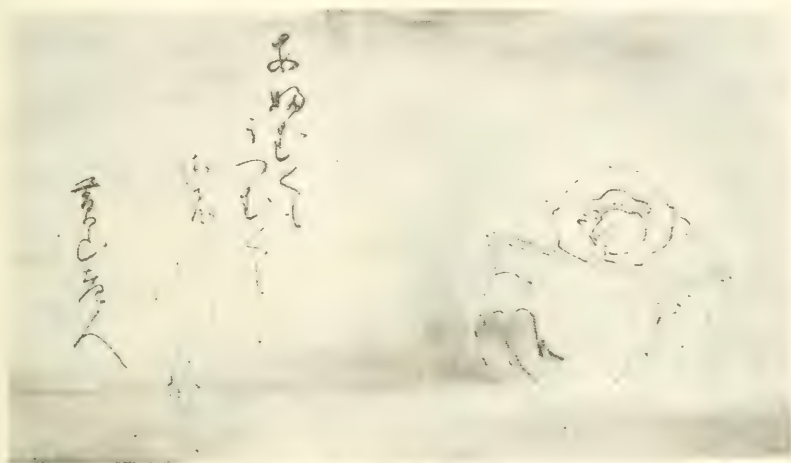
○出女　宿驛の飯盛女。おぢやれとも言つた。お前垂などで往來の旅客を招き、枕席にも侍したものである。

○食堂に　この句流川集（元祿六年刊）・續猿蓑（元祿十一年刊）に出づ。「蓮二吟集」に上五を「金堂に」としたのは誤である。

○食堂　寺院の食堂で、多く本堂の東裏につゞき、廊下には魚板をかけて食事の時の相圖に之を叩く。禪寺などに多い。

▽支考筆自畫讃（松宇文庫藏）

あふむくもうつむくもさびし　ゆりの花
　　　　　　　　　　　　　　黄山老人

支考筆自畫讃

は、よく支考の句と好一對をなしてゐる。

食堂に雀鳴くなり夕時雨

支考は畧傳にも述べた如く、口と筆とはなかなか達者であつたが、作句にはあまりすぐれた伎倆をもつて居なかつた。こゝに僅に數句を選んだのですら、單に佳句といふ程度にすぎないのだが、この句に至つては彼の代表作と稱してよからう。

大きなガランとした禪寺の境内である。薄暗い本堂の奥にはもう灯がついて、外には寒さうに時雨が降つて居る。食堂の軒端に餌をあさる雀が、チユッ／＼と暮の一時を騒がしく啼き立てて、夕闇は次第に濃く迫つて來る。廊の端に

下つた魚板の姿も誠に寒げである。さうした冬の夕べの情景が、客觀的な敍法の中にはつきり浮び上つて來る。それは食堂や雀が單に道具立に使はれたのでなく、作者の主觀によつて完全に統一されて居るからである。かくて渾然たる夕時雨の情趣を形つて居る。

水仙や門を出づれば江の月夜

閑談に夜も更けた。辭して庭石傳ひに門の方へ歩いて行くと、夜目にも白く水仙が高い香を放つて居る。そして一歩門を出ると、そこは川のほとりだ。江上には月光が白く冴え渡つて居る。清澄透明な感じである。

叱られて次の間へ出る寒さ哉

芭蕉翁の病中、附添つて居た門人たちが、各〻夜伽の句をよんだ中の一である。句意は說くまでもなく明かであるが、何か師翁の機嫌でも損じて、流石の支考も悄然と次の間へ引込む姿が想はれる。芭蕉もこの句をきいては、病苦を忘れて思はずほゝゑんだ事であらう。

○水仙や　この句續猿蓑（元祿十一年刊）に出づ。

○叱られて　この句枯尾花（元祿八年刊。芭蕉の追善集）に出づ。

○夜伽の句　前出、丈草の「うづくまる薬の下の寒さ哉」もその一。

歌書よりも軍書にかなし吉野山

支考の作中最もよく知られたものであらう。これは名所の句で無季の格に從つたものである。即ち元來發句にはすべて當季の詞を必要とするのであるが、名所の句に限つて無季を許されるので、例へば芭蕉にも

かちならば杖突坂を落馬哉

朝よさを誰松島ぞ片ごころ

等の吟があり、後の句については、これを自分の撰集に採錄した路通が、

翁執心のあまり常に申されしは、名所のみ雑の句有りたき事也。十七字の中に季を入れ、歌枕を用ひていさゝか心ざしを述べ難しと、鼻紙のはしに書かれし句を、空しく捨て難くこゝに止むなるべし。

と附記して居る。無季を許した理由はこれで知られよう。

句は花の名所として歌にうたはれた吉野よりも、「太平記」などの軍書に傳へられた吉野の方が、人にあはれを催させる事が深いといふのである。格別すぐれた作といふのではないが、吉野山について何人も同感すべき事を、そのまゝによんでゐるので名高くなつたのであらう。

○歌書よりも　この句梅のすがた（正徳三年刊）・誹黄昏（安永六年刊）等に出づ。梅のわかれには上五「歌書よりは」とあるが、今一般に知られてゐる誹黄昏所出の句形に從つた。

○朝よさ　朝夕に同じ。

○自分の撰集　桃舐（もゝねぶり）集。

立花北枝

一に土井氏、通稱源介、鳥翠臺・趙子等の別號がある。加賀金澤の人、牧童の弟で刀磨ぎを業とし、藩侯の御用をも勤めた。享保三年歿、享年不詳。『卯辰集』『喪の名殘』の撰がある。

※田を賣りていとゞ寢られぬ蛙哉

北枝像

喧しく鳴き立てる門田の蛙も、まあ自分の田だから仕方がないとあきらめがついたものの、それを賣拂つて仕舞ふと、今度こそは愈々喧しさが癪にさはつて寢られないといふのである。輕いをかしみを交へた句である。

○田を賣りて　この句『喪の名殘』(元祿十年刊)に出づ。

▽北枝像　(明和七年刊『芭蕉堂歌仙圖』に據る)

○焼けにけり　この句猿蓑（元祿四年刊）に出で、「庚午の歳家を焼て」と前書あり、又卯辰集には「元祿三のとしの大火に庭の櫻も炭になりたるを」と前書して出てゐる。

○池魚の災云々　この書簡は「蕉翁消息集」に載せて居る。

□北枝筆蹟　伊賀　龜井氏藏

かたまらぬ角おもけなり夏の鹿
ふむ花や見上て登る山ざくら
手にうつるこれもはかなや　螢のはく
われ鐘のひゞきもあつし夏の月
しら山にて
うす霧の雨くろみたる行衞かな

誠御はづかしくおそれみ〳〵つたなき事共を懸御目申候扨ここに御上京ノ事夢ばかり承申候はゞ此秋參宮仕奉得尊慮候はゞいか斗のよろこびたるべき事とくりかへして不幸をなげき申候何とぞ〳〵此上には御入湯ノ事おぼしめし御立候へかしと奉待候何かと跡言なる仕合御手紙に申上がたく奉存候猶以萬端跡より可申上候　恐惶頓首

八月朔日　北枝

北枝筆蹟

焼けにけりされども花は散りすまし

前書にもある通り、元祿三年三月十七日の大火に、北枝の家も類焼して庭の櫻も炭になつてしまつた。その騒ぎの間にも、主人はかうした句を口吟んで平氣だつたので、人皆彼の風流に感じたといふ。そんなわけで一層世に喧傳されたのであらう。當時芭蕉も

池魚の災承、我も甲斐の山里に引移り、さまざま苦勞致し候へば、御難義の程察申上候。されども焼けにけりの御秀作、かゝる時に臨み大丈夫感心、去來・丈草も御作驚き申すばかりに御座候　名歌を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御かへなされ候へば、さのみ惜しかる

まじくと存候。

と見舞の手紙を送つて居る。

句は家も櫻も燒けてしまつたが、幸ひにも花はもう散つてしまつたあとだつた。まあく今年の花だけは賞し得た事で、自ら慰めようといふのである。花だけを愛惜した所に、家財などの損失を意としない風流の情が想はれる。しかもこれは風流を氣取つたのではなくて、實際北枝はさうした逸脫の氣分をそなへた人物であつた。なほ北枝はこの後にもまた火事に遭つたが、その時は二月頃だつたので、支考は

燒けにけりされども櫻咲かぬ間に

と見舞の句を送つたといふ。

牡丹散つて心もおかず別れけり

友人の四睡が江戶に行く折の送別吟である。牡丹も散つた。もうあとに心を殘すものもなく出かけて行く事だらうと、先方の心情になつてよんだのである。人に別れを惜しまず、花に心を殘す情を言つたのが面白い。

○燒けにけり　寶永三年刊、家見舞に出づ。

○牡丹散つて　この句卯辰集（元祿四年刊）に出で、「四睡が武府にゆく折」と前書がある。

○淋しさや　この句卯辰集に出づ。

○朝顔は　この句も卯辰集に出づ。

○川音や　この句も卯辰集所出、「霧ふかきあした、渡月橋を渡りて北嵯峨に分入るころ」と前書がある。

淋しさや一尺消えて行く螢

螢の光が明滅する瞬間の淋しさを言つたのである。パッと光つたのが消えて、次に又パッと光るまで、一尺程の距離を螢は飛んだであらうか。ほんの僅かの間だが、その一尺程の暗さがたまらなく淋しい感じがする。細かな詩人の情である。

朝顔は咲きならべてぞ凋みける

垣根に紅・白・紫と咲きならべた朝顔が、そのまゝ凋んで居るさまである。一脈のはかなさが感ぜられる。句は些か説明にすぎた嫌ひはあるが、これら北枝の細かな感情の動きと、豊かな感受性とが見られる。

川音や木槿咲く戸はまだ起きず

四邊は朝霧が深く罩めて居る。たゞ川の瀬音だけがその霧を破つて聞えて來る。訪ね寄つた家の垣根には、木槿の花が眞白く開いてゐるが、家人はまだ起きないのか表の戸もしまつたままである。北枝は暫くそこへ佇んで、この淸々しい朝の景色に見惚れて居た。

朝霧、川音、白い木槿の花、まだ人も起きぬ民家、淸爽新鮮な曉の氣分が滿ち溢れて居る。前書がなくとも十分わかる句であるが、北嵯峨のあたりといふので、一入靜かなあたりのさまが想はれる。

※しぐれねば又松風のたゞ置かず

この句は後世の諸集にも採錄され、北枝の作中では最も人口に膾炙されたものである。松に時雨の風情は古來和歌などにも多くよまれ、言はゞ松も時雨では一苦勞して居るわけだが、さてその時雨が降らねば又松風が只置かない。「琴の音に峯の松風通ふらし」などと、歌人ももてはやす。いづれにせよ苦勞は絕えないといふのである。要するに雨にもよく風にもよい松の情趣を言つたのであらうが、かう持つて廻つた言ひ方では嫌味を生ずる。しかもその嫌味のある點が、又一般に受けたのであらう。

○しぐれねば　この句初蟬集（元祿九年刊）に出で、その他浮世の北・續猿蓑・藁人形等にも採られてゐる。

○琴の音に　下の句は「いづれのをよりしらべそめけむ」

〇苔は色かふる　「苔は色かふる松の風」。苔は山林に入つてもなほ絶えぬもので、只その形をかへるだけだといふ意の諺。

〇池の星　この句白陀羅尼（寶永元年刊）に出づ。

〇元祿二の秋云々　卯辰集に載する三吟歌仙の表六句だけ抄出したのである。

なほこの句は、「苔は色かふる」といふ諺もふまへて居るのかも知れない。さうすると益々面白くなくなる。

池の星又はらはらと時雨哉

これは時雨の實境に見入つた作である。よどんだやうな池の水底に、二つ三つ星の影が寒さうにまたゝいて居る。晴れたなと思つて見上げると、又もはらはらと時雨が降つて來た。陰晴定まりない時雨の空模樣が、巧みにうつされて居る。

元祿二の秋　翁を送りて山中温泉に遊ぶ　三吟

馬かりて燕追ひゆく別れ哉　北枝
花野みだるゝ月の曲りめ　曾良
月よしと相撲に袴ふみぬぎて　翁
鞘走りしをやがてとめけり　北枝
青淵に獺の飛びこむ水の音　曾良
柴刈りこかす峯の笹道　翁

志田野坡

越前福井の人、通稱彌助。江戸に住んで三井兩替屋に勤めた。初め野馬と號し後ち野坡と改めた。元祿末年頃大阪に移つて樗木社を興し、又高津に淺生庵を結んで自ら高津翁と稱した。別に野翁・樗子・紗方齋・三日庵等の號がある。元文五年歿、年七十八。「炭俵」を撰び、蕉門中輕みを以て特色とした。芭蕉歿後中國・九州方面にその風を擴めた。句集に「野坡吟草」がある。

長松が親の名で來る御慶哉

長松は江戸時代に丁稚小僧の通稱として用ひられた。久三・二藏などと同じやうな名である。句は此の間まで「長松、長松」と呼び使はれて居た鼻たれ小僧が、年季も明けて今では一人前になり、しかも親の名を襲いで何屋何左衛門と言つたやうな鹿爪らしい名で年始に來たといふのである。輕い滑稽味がある。その所謂輕みが野坡の特色とした所で、この特色はなほ以下の句に於て十分見られるであらう。

○炭俵　野坡・利牛・孤屋の共撰。元祿七年刊。
○野坡吟草　野坡の門人九十九庵風之の編、寶暦九年刊。
○長松が　この句炭俵に出づ。
○久三　下男の通稱。
○二藏　鍛冶屋の徒弟の通稱。

○ほの〴〵と　野坡の高弟九十九庵風之の著した「俳諧耳底記」の如きは、この句をあげて、この一聲に「蕉門の鶯とは聞えたり」と稱して居る。

「野坡像（明和七年刊「芭蕉室歌仙圖」に據る）

この句は今日では野坡の代表作であるかの如く名高くなつてゐるが、彼の歳旦吟として蕉門の間に最も尊重されたのは、

ほの〴〵と鴉黒むや窓の春※

の吟である。これは元朝の清らかで物皆新たな感じが、實によくあらはれてゐる。野坡の吟中でも、最も佳作とすべきものであらう。これに比べると、「長松が」は何といつても些か低俗の調たるを免れぬ。

野坡像

因みにいふ、長松は單に町家の男兒の通稱とし、いつもは悪戯小僧の長松も、今朝は神妙に親の代長で年始にやつて來たと解する說があるが、それは江戸時代に於る長松の語感を無視した說であり、かつそれでは句の味も淺くなる。

苗代や二王のやうな足の跡

苗代田の實際を知つて居る者にはすぐうなづける句である。泥田に踏み込んだ足跡が、段々

○郭公　この句炭俵に出づ。

水に崩されて、人の足跡とも思へないくらゐ大きくなつてゐる。それを「二王のやうな」と言つたのは、例の輕みである。

郭公顔の出されぬ格子かな

郭公が一聲鳴いて空を斜に。「アレほとゝぎすが！」と、急いであとを見送らうとすると、生憎格子が邪魔して顔を出されないといふのである。格子を怨む主は、何となく遊女か町家の若い女のやうな句がする。それは格子といふものの聯想から來るのであらう。「格子一重がまゝならぬ」などと、輕く打恨んだ風情までが見られる。をかしみの中に艶な趣を含んだ句である。

夕涼あぶなき石にのぼりけり

恐らく川邊の夕涼であらう。川の中につき出てゐる乘ればぐらぐらする様な石に、危つかしい足つきでのぼつて涼む。「一つあの石の所まで行つて涼んでやらう」といふ様な、夕涼などによくある光景である。取立ててよい句とも言へぬが、夕涼の輕い氣持がよく出てゐる。そして

誰にも一寸經驗のありさうな事だけに、すぐ同感されるのである。

元來野坡が蕉門にあつて重きをなしたのは、何よりも彼が「炭俵」の撰者であつた事による。同書は芭蕉晩年の一風を示すべき代表的の集で、その特色とする所は、所謂輕みであつた。それは特に通俗卑近な事物の間に、一脈の詩趣を探らうとするのであつて、その點で野坡は即ち代表的な作者だつたのである。去來も「輕き事野坡に及ばず」と評して居る。而して以上あげた諸作は、いづれもさうした特色を見るべき作で、所謂風雅らしからぬ境地に詩材を捉へ、そこへ自然に浮んで來るをかしみを現はさうとして居る。しかもこのをかしみに主觀的な解釋を加へず、そのまゝ表現して居る所に自然な安易さが感ぜられる。

この俗中雅を得ようとする事は、一面から言へば詩境

野坡

○去來も云々　この事去來の「旅寢論」の自序中に見える。

〔野坡筆蹟〕（松宇文庫藏）

落柿舍之新式寫本御所持之由珍重ニ奉存候　但右翁より上方へ被遣候新式は一種君連歌新式御講談被成候（發起宵柏）などにて寫したる書物翁杉風傳被申候　其内よりぬき取入候事斗を書集翁所持被致候を讓被申候

本書は杉風より愚老方へ被遣候　其外之新式見不申候　去來も老□沙汰不申候　唯愚老方ノ新式見申度との事に候　土芳へは引かへにいたし見せ申候　遣ニ作意多可有と存候事

に御座候　其時分之連衆生之？故
に我意にはこられ候事初心之用可申
候存ごゐ末代翁之難ニ成可申哉と存
候いまだ見不申候
　窓前机上にたはぶれて
白うるり濟ぬ學者や爪つくり
先達に御聞可被成候
捨聞や蕣よれ[illegible]淺の手
其外貴面に御物かたり可申候風之方
へも宜様ニ御傳可被下候
七月廿四日　　[illegible]　華押
梅従様

筆蹟

の新しさを求める事である。野坡が許六に答へた手紙の中にも、

　句はしまりを第一にして新しみを願ひ申す事に候。

と明かに述べて居る。随つて四時の景物に對しても、

　松山や螢消え込む朝嵐
　靜さや梅の苔吸ふ秋の蜂
　此の頃の垣の結目や初時雨

等、努めて特殊の境地にその情趣を探らうとして居る。野坡の作を一概に平俗と評し去るのは些か早計である。しかし野坡の特色は要するに人事の輕いをかしみにあつた。言はゞ川柳的な所がある。それは一歩を誤れば低俗淺膚に陷る危險性が十分にあり、その破綻はすでに『炭俵』にも現はれて居るのであつた。

　はき掃除してから椿散りにけり
　衣がへ十日早くば花ざかり

等の如き類で、しかもこの種の句は彼の作中最も多いのである。特に晩年に至つては益々緊張味を失ひ、單に蕉門の古老として仰がるゝに止まる觀があつた。

行く雲を寢て居て見るや夏座敷

障子も襖もすつかり明けはなした涼しげな夏座敷、そこへ仰向けに寢ころんだまゝ、空行く雲をぼんやり眺めて居る。白く光つた入道雲が、色々な形になつては又崩れて行く。軒の風鈴が時々靜かに鳴る。誠に打寛いでのんびりした氣分である。

山伏の火をきりこぼす花野哉

秋の野を分け行く山伏が、しばし笈を石の上に卸して休んで居る。そして烟草の火でも燧り出すのか、カチ／＼と燧石を打つと、その火が下へパッとこぼれ落ちる。そこらあたりに美しく咲亂れた千草の花は、あの火花が散りこぼれたのではなからうか。ふとそんな思ひがしたのである。

○行く雲を　この句炭俵に出で、「ある人の別墅にいざなはれ、晝日うち和ぎ一物がたり、其の夕つかた、外のかたをながめ出して」と前書がある。

○山伏の　この句寒菊随筆（享保四年刊）に出で、「豊後國日田にて」と前書がある。

○花野　秋の野に千草の花の咲亂れたのをいふ。

▽野坡筆蹟（松宇文庫藏）

無名庵

夏涼し庵はよしともあしくとも　　野翁

○小夜時雨　この句炭俵に出で「旅寢のころ」と前書がある。

山伏といへば何となく神祕的な感じをもつて居る。燧火も清淨なものである。それはいかにもかうした幻想を呼び起すのにふさはしい。それでこの句がわざとらしい嫌味がなく、自然にうけ入れられるのである。これは野坡の特色とする輕みとは、全くかけ離れて居るやうだが、彼の句とても盡く輕みを主としたものではない。幽玄閑寂の趣もまた解しないのではなかつた。

野坡筆蹟

※小夜時雨隣の臼は挽きやみぬ

前書によつて旅亭での作たる事が知られる。隣の家でゴロ〳〵と挽き廻す石臼の音が喧しくて、いつまでも寢つかれなかつたが、いつかその音もやんだ。外には時雨が寒さうに降つてる。夜更の淋しさが身にしむやうだ。これなどは輕みとは全くちがつた趣に於て、野坡の作中佳句とすべきものであらう。

杉山杉風

通稱鯉屋市兵衛。幕府の納屋御用の魚屋であつた。採荼庵・五雲亭・衰杖等の號がある。初め談林の俳諧に進んだが、芭蕉が江戸に下つて以來、その忠實な後援者として師事し、かの深川の芭蕉庵の如きは、實に彼の別宅を提供したものであつた。享保十七年歿、年八十六。芭蕉追善『冬かつら』の撰があり、その句は『杉風句集』に收められてゐる。

子や待たんあまり雲雀の高あがり

句意は解するまでもない。『猿蓑逆志抄』にはこの句を評して、

雲雀の春色眼前に見えて、言外十分の句也。子や待たんにて魂出來たる也。揚雲雀の春和にして高あがりは趣向也。

と言つて居る。雲雀の高く舞上るさまを、「子や待たん」の上五で曲をつけたので、それは松倉嵐蘭の『焼蚊辭』に

○杉風句集　採荼庵二世平山梅人編。天明三年刊。

○子や待たん　この句猿蓑（元禄四年刊）に見ゆ。

○猿蓑逆志抄　空阿坊玄鉄著。文政十一年刊。猿蓑を注釋したもの。

○焼蚊辭　風俗文選に出づ。

子や啼かんその子の母も蚊の食はん

と同じく、憶良の歌※をふまへたのである。しかも嵐蘭の作より自然で面白い。

振り上ぐる※鍬の光りや春の野ら

杉風像

これも平易な句である。しかも長閑な春の野の情が十分に現はれてゐる。元來杉風は篤實な質ではあるが、感受性に鋭い詩人肌の人ではない。隨つて句もむしろ平板軟弱の風が多く、決してすぐれた作家とは言へなかつた。しかし流石に長い間芭蕉に師事しただけあつて、誦すべき佳句も少くない。たゞ機變の才に乏しくて、同門の人から※は流行におくるゝ事數年などと評せられたといふ。この句なども平明な彼の風調を代表した佳作であらう。

がつくりと※拔け初むる齒や秋の風

○憶良の歌　萬葉集「憶良らは今はまからん子泣くらん、その子の母もわを待つらんぞ」

○振り上ぐる　この句小柑子（元祿十六年刊）に出で、なほ小夜中山集には「鍬鋤」と前書がある。

○杉風像　（「杉風句集」に據る。）

○同門の人からは云々　白兎園筆耕によれば、其角がかつて杉風は耳が聾ひてゐるから三年の流行におくれたと評したといふ。

○がつくりと　この句猿蓑（元祿四年刊）を始め、西の雲・梅櫻等に出づ。

秋風が淋しく身にしみる頃、どの歯か一枚急に抜け落ちた。今まで年齢の事などあんまり考へた事もなかつたのが、これで自分もいよ〳〵老境に入つたのだなと、はつきり感じさせられて、急に淋しい氣がする。殘つたあとの歯も、その中又一枚々々と缺けて行く事だらう。さう思ふと益々淋しいのである。落莫たる秋風の裡に、身の衰へを嘆ずる情が深く味はれる。たゞし芭蕉の

おとろひや歯にかみあてし海苔の砂

に比して、杉風の句がやゝ露骨に失するのは、天稟の高下是非もない事であらう。

因みにいふ。杉風が芭蕉に送つた手紙の中に、

七月に拙者歯一ッぬけ初申候。古事申直し句に仕候

杉風筆蹟

▽杉風筆蹟（大崎園井氏蔵）

深川のほとりなる予茶庵のあたりちかき隠士うちより秋野のよふおせなと催しいづくへか立出むといひける予思ふ所あり一とせ聖護院の宮御下向の時角田川の御詠に

東路のせきやの里に宿もがな

よみだがはらのおかねながめを

と遊ばしければ此事をたづねてしらすみだ川あたりの野を今むとおひさき舟に竿さゝせ…にのぼりけるに岸ちかく舟とめて色黒き男腰たけ川に入うつぶけになりて水底の土を掬あげ舟に積世のわざといひながら秋の風身にしむ比水にひたりくるしむあはれなりければ

土さりよなにほど冷る秋の水　杉風

○杉風が芭蕉に送つた手紙

元祿三年九月廿五日の状で、當時湖南に滯在中の芭蕉にあてて、江戸から送つた手紙である。（西鑒氏蔵）

○川沿ひの　この句泊船集（元祿十一年刊）を始め旅袋・三日月日記・節文集等に出づ。

○月見るや　この句西國曲（享保二年刊）・雪薺（同十年刊）に出づ。

がつくりと身の秋や齒のぬけし跡

と報じてゐる。これを芭蕉が前掲の如く直して、「猿蓑」の中に入れたものと思はれる。當時杉風は四十七歳であつた。

川沿ひの畠をありく月見かな

安らかな句である。かうしてブラ〳〵と漫歩しながらの月見も、誠に樂々した氣分である。そこらの石に一寸腰をかけて、烟草の火をポンとはたきながら、芋の出來工合でも話し合つてゐるやうなさまが浮ぶ。

月見るや庭四五間の空のぬし

同じく月見の句だが、これは晩年の作である。流石に甚しく低調な所はないが、これでは平板陳腐を免れない。

○うらやまし　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

越智越人

通稱十藏。負山子・槿花翁等と號す。自ら北越の産だと言つてゐるが、後ち名古屋に住した。芭蕉歿後支考と激しく論難して、『不猫蛇』『猪の早太』等を著した。享保末年頃歿、享年不詳。『鵲尾冠』『庭竈集』等の撰がある。

※うらやまし思ひ切る時猫の戀

猫の戀は隨分執拗なもので、晝夜雌猫の傍につき纏つて居るやうだが、さて思ひ切るとなると誠に簡單なものだ。昨日まであんなに烈しく戀して居たものとも思はれぬほどあつさりして居る。それを愛欲の念絶ち難い人情に比して、羨ましいと言つたのである。

この句については、流布本の『去來抄』に、

先師伊賀より此の句を書き送りて曰、心に俗情あるもの一度口に出さずといふ事なし。かれが風雅是に至りて本情をあらはせりとなり。云々

○去來文　去來が越中の浪化に送つた手紙で、これを寛政三年に至り、右手紙の所藏者岸芷が、かく名づけて出版したのである。

▽越人像（明和七年刊「芭蕉堂歌仙圖」に據る）

○定家の歌　猿蓑逆志抄には「うらやまし世をもしのはすのら猫の妻こひさそふ春の夕ぐれ」を引き、これを一轉して歌の情をより上げた伴力を稱してゐる。なほ七部集大鏡をも參照。

とあるので、芭蕉が越人の俗情を批難したものだと解されて居る。しかし『去來抄』の古い寫本には、すべて「心に風雅あるもの」となつて居り、又『去來文』にもこの句をあげて、「思ひ切る時をうらやませるは越人の秀作と被存候」と言つて居るから、當時決して批難された句でない事は明かである。思ふに流布の『去來抄』は、後世越人を厭ふ者が、故意に本文の一部を改竄したものであらう。それはともあれ、『去來抄』には、なほ

　是より先に越人名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども爰に至りてはじめて本性を顯すとなり。

越人像

とあつて、この句によつて越人の名聲が一層揚つた事を物語つて居る。但しこの句が果してそれだけ賞讃すべき作であるか否かは疑はしい。『去來文』に言つてゐる通り、定家の歌を一轉したものとすれば、換骨奪胎の妙味はあるが、風雅の本情がこゝに始めて顯はれたといふ程の評は下せまい。着想が奇警で、しかもそれが人情の機微に觸れてゐるので名高くなつたのであらう。

○雁がね　この句曠野（元祿二年刊）に出で「深川の夜」と前書がある。

（越人筆蹟　松宇文庫藏）
初秋は葉に偸る夜の詠かな　越人

雁がねも靜に聞けばからびずや

「曠野」にはこれを發句として、芭蕉と兩吟した歌仙一卷がある。蘆荻蕭々たる深川の邊り、秋夜草庵の中に對坐した師弟の姿をまづ想ひやつて見るがよい。當時越人は名古屋から師に從つて木曾路を經、更科の月を眺めて江戸まで來て居たのである。さて句意は、夜毎に啼き過ぎる雁が音も、かうして靜におちついて耳を傾けると、實にからびた味はひが感ぜられるといふのである。遠くには水をうつ櫓の聲も折々聞えたであらう。短檠の下に危坐して、今までじつと目をつむつて居た越人は、かう一句を記して師の前に差出した。芭蕉はそのあとへ、すぐと脇をつけた。

酒強ひ習ふこの頃の月

清夜のわびを樂しむ情がある。

越人筆蹟

「からびずや」は「乾らびては居ないか、誠にからびて居る」といふ反語的な言方である。雁

聲の枯寂蕭殺たる情を看取し盡したのである。古註にこれを「かまびすや」と同じで、喧しい義と解したのは全く誤りで、それでは何等の詩趣もない句になる。

山寺に米搗く程の月夜哉

月が皎々と照り渡つて居る。山寺の庭先には、眞中に大きな臼を据ゑて、寺男や小僧たちが、トン〳〵と拍子も面白く米を搗いてゐる。一寸童話めいた感じが浮ぶ。

行燈の煤けぞ寒き雪の暮

行燈の煤けたのは侘びしい感じが深いものである。特に雪降りつもる夕暮、旅亭などでさうした行燈に對した時、つく〴〵寒さが身にしみる事であらう。この句には別に旅といふ事はないが、何となく旅中らしい情がする。

越人の初期の句は、此の如く相當に佳作に富むのであるが、すでに『曠野』には李夫人・楊貴妃などに白樂天の詩句を題したり、『莊子』の語を題とするなど、衒學的の傾向が見え　芭蕉

○山寺に　この句春の日（貞享三年刊）に出づ。

○行燈の　この句も春の日に出づ。

○李夫人・楊貴妃云々　次頁別欄参照。

○鵲尾冠　享保二年刊。
○庭竈　享保十二年刊。
○白髪には、清水をば　この二句鵲尾冠に出づ。
○入間言葉　物を反對にいふ言葉。若栄といふが實は老いてゐるからのしやれ。
○五月雨や　この句猫の耳（享保十四年刊）に出づ。
○かげろふの　以下二句曠野に出づ。李夫人に題したのは白氏文集、楊貴妃に題したのは長恨歌の詩句。

歿後にはその傾向が益々甚しくなつた。それは『鵲尾冠』『庭竈』等の集に著しく見られる所である。加之その衒學的でない作は、また

白髪には入間言葉の若栄哉
清水をばむすべば解くる暑さ哉
五月雨や月は通さぬ不破の關

等、全く低調なものになり了つてゐる。要するに越人の俳諧が眞に藝術的の生命を持つてゐたのは、わづかに『猿蓑』時代までの事で、享保以後はその俳壇的活動は盛んであつたにもかゝはらず、作品は次第につまらぬものになつてしまつたのである。

〜〜〜〜〜〜〜〜

李夫人
魂在何許　香煙引到焚香處
※かげろふの抱きつけばわがころも哉

楊貴妃
雲鬢半偏新睡覺　花冠不整下堂來
はる風に帶ゆるみたる寢顔かな

廣瀬惟然（ひろせゐぜん）

美濃國關の人。通稱源之丞、初め素牛と號す。別に梅花佛・鳥落人・風羅堂等の號がある。生家はもと富裕であつたが、感ずる所あつて妻子を捨て、一生を風狂の裡に終つた。芭蕉の歿後は諸國を行脚し、晩年は古鄉に辨慶庵を結んで隱栖した。寶永八年歿、年六十餘。『藤の實』『二葉集』『二千折』等の撰がある。性飄逸で奇行に富み、又句風も後ちには口語調の特異な風を示した。句集には『惟然坊句集』があるが、なほ洩れた句も多い。

※梅（うめ）の花（はな）赤（あか）いは〱※赤（あか）いはな

惟然の後年の風體（ふうてい）を代表するものとしてよく知られて居る。句意はたゞ梅の花が赤いといふだけの事であるが、それを「あゝ實に赤いな」と感じた刹那（せつな）の眞情のまゝ表現したのが、この句の特色である。この句に關しては、『去來抄』に

去來曰、惟然坊が今の風大かた是等の類なり。發句にはあらず。云々

○惟然坊句集　中島秋擧編。文化九年刊。

○梅の花　この句「去來抄」に出てゐるが、元祿寶永頃の俳書には見えない。一に下五「赤いはさ」とも傳へてゐる。

○赤いはな　「赤い花」ではない。「は」も「な」も共に感嘆の意をあらはした天爾波である。

と言つて批難し、許六の如きは、「あだ口のみ吐出して、一生眞の俳諧といふもの一句もなし。蕉門の内に入つて、世上の人を迷はす大賊なり」とまで罵倒した。去來は流石にこの評のあまりに過ぎて居ることをたしなめ、許六自身もまた『藤の實』時代の句は推賞して居るが、とにかく惟然のこの自由な口語調は、同門の人々から頗る批難を招いた。事實彼の口語調は、結局たゞごとに終つて居るものも少からず、決して正しい藝術的態度と評する事は出來ない。しかしそれは單に新奇を求める浮薄な考からではなく、畢竟心の赴くまゝに振舞はうとする彼の性格から發したものである。即ち眞情の最も自然な發露は、かうした全く粉飾のない口語でなければならぬと考へたのである。隨つて彼は又傳統的な季語の事なども重きをおかす、無季の發句をいくらもよんだ。播州地方には惟然のこの主張に贊するものが多く、『二葉集』『花の雲』『當座拂』等同地方の俳人を中心とした撰集も相ついで出た。それらの

惟然像

○あだ口のみ云々　「青根が峯」の贈落柿舎去來書中に見える。

○藤の實　元祿七年刊。惟然がまだ素牛と號してゐた頃の撰。

「惟然像」（『年の雲』所載）

贈二惟然坊一

嚢蟲褌兮嚢蟲褌　我傳懶有幸貽二君　竿頭時晒二脱塵俗一　錯莫三苦辛爲二卓文一

丈艸戲書

俳書には、皆雜體の部が特に設けられ、

猫の居る木は何ぢややら〳〵
どつかりと上から臼がこけました

等の句が採錄されて居る。

惟然のかうした主張は、その精神に於ては必しも批難すべきものではなく、一面からいへば俳諧の傳統的な形式を打破して、正しい自由な發想を求めるものでもあつた。しかし彼自身眞摯な反省を缺き、又その追隨者は徒らに形式の異常に對する好奇に墮して、遂には

鶯がそりや鶯が〳〵
さあ〳〵爰でサア、盃を

といつたやうな全く無意味な作を見るやうになり、久しからずしてその風は姫路地方にも行はれなくなつた。

新壁や裏も返さぬ軒の梅

まだ壁の裏も返さないまゝにして居る新築の家、その生々しい壁のあたりに、梅が一二輪咲

○新壁や　この句藤の實（元祿七年刊）に出づ。
○裏も返さぬ　壁の一方からだけ塗つて、その反對の方をまだ塗つて居ないこと。

いて居る。それが幽かな暖かみと情趣とを添へて居るのである。輕い寫生句として面白い。

これは惟然がまだ素牛時代の作で、なほ『藤の實』の中から二三の作をあげると

燕や赤土道のはねあがり

かるの子や首さし出して浮萍草

訪二元政法師墓一

竹の葉やひらつく冬の夕日影

蠟燭のうすき匂ひや窓の雪

等、すべて穩健な格調を守り、蕉風の正統な傾向を持して居る。

更け行くや水田の上の天の川

廣々とつゞいた水田の上に、天の川が長く横たはつて居る。夜が更けるに從つて、天の川の淡い光りも、澄んだやうに白く耀いて來る。水田の水に宿す影も光りを增して、一脈の幽韻が天地にひろごるやうである。芭蕉の「荒海や」の句は豪宕の氣に富み、これは縹緲たる趣がある。惟然が正調時代の佳作とすべきであらう。

○更け行くや　この句續猿蓑（元祿十一年刊）に出て、「七夕」と前書がある。

○近づきに　この句其便（元祿七年刊・有磯海（同八年刊）等に出で、後者は上五が「知る人に」となつて居る。

○別るゝや　この句續猿蓑（元祿十一年刊）に出づ。元祿七年の夏芭蕉に別れた折の吟だといふ。

○ひだるさに　この句其便（元祿七年刊）・小文庫（同九年刊）に出づ。

○彼が性云々　この事「青根が峯」に見える。

近づきになりて別るゝ案山子かな

飄逸洒脱な作者の俤が窺はれる。なほ惟然には、

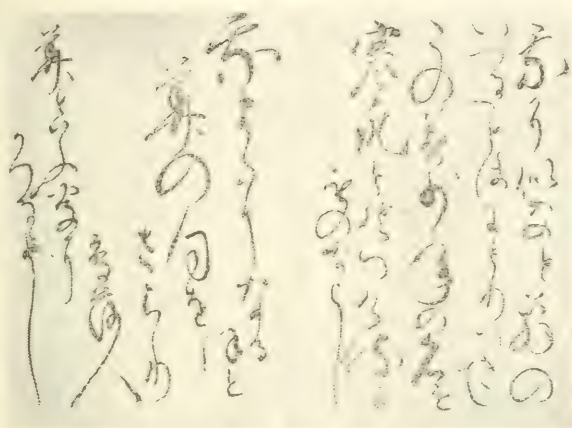
別るゝや柿食ひながら坂の上

の吟がある。いづれも作者の性格や生活を背景にして味はふと、一層感じが深い。

ひだるさに馴れてよく寢る霜夜哉

この句にもまた作者惟然の生活がにじみ出て居る。空腹だと寒氣が特に身に應へて、なかなか眠れないものである。ところがその空腹にさへ馴れてよく寢られるといふのだ。眠れないといふよりも、一層悲慘な生活である。だが惟然はこの貧しさによく堪へた。芭蕉が惟然を愛したのも、「彼が性素にして深く風雅に心ざし、よく貧賤にたへたる事をあはれみ、俳諧に導き給ふ事切」であつたのだと去來は言つてゐる。爲に芭蕉は惟然の特色を出來るだけ伸ばしてやらうと努め、俳諧はたゞ氣先を以て無分別に作るべきものだといふ風に導いたのであるが、惜しいかな、師の歿後その歸趨を誤つて眞の大成が出來なかつたのである。しかし少くともこの

句に現はれた作者惟然は、まことに愛すべき惟然であり、貴むべき惟然であつた。

水鳥や向うの岸へつういつい

水鳥が何の苦もなく、水面を辷るやうに游いで行くさまである。例の惟然の特異な風調で、しかもこの句の如きは下五の「つういつい」が、よく快適な情を現はして居る。卽ち彼の自然口語調の中最も成功した作の一であらう。なほ同じく水鳥を詠じた

水さつと鳥よふはふはふうはふは

なども、いかにも輕快な調子である。

惟然筆蹟

○水鳥や　この句「惟然坊句集」に出てゐるが、元祿當時の撰集には所見がない。しかしその風體から見て惟然の作と信ぜられる。

▽惟然筆蹟（「年の雲」所載）

我に似なと翁のいへることばにとりつきてこの美少年の名を素瓜さぞつけ侍るものならし

我まゝになるほど華の句をさらり　鳥落人

華といふ字にかへるよし

註、素瓜は播州姫路の人、井上千山の息。明和二年歿、年七十九。）

○水さつと　この句きれぐ集（元祿十四年刊）に出づ。

○野澤　この氏は或は確實でないが、しばらくこの說に從つておく。

○我が子なら　この句いづれも皆元祿二年刊「曠野」に出づ。これ凡兆が次郎といふ僕を夜中に出かける時の吟である。

○鶯や　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

○灰捨てて　この句も猿蓑に出づ。

野澤凡兆

加賀金澤の人、京都に住んで醫を業とした。初め加生と號す。去來と共に「猿蓑」を撰んで、一時大にその才を發揮したが、元祿六七年頃事に坐して下獄し、爲に師友との交りも絶えた。間もなく赦されて出獄し、又晩年俳諧に親しんだが、遂に往年の精采を見る事が出來ないで終つた。正德四年歿、享年不詳。妻とめ女も羽紅と號して俳諧を善くした。その句

我が子なら供にはやらじ夜の雪

はよく人に知られてゐる。

鶯や下駄の齒につく小田の土

雪解の田の畦道を歩いて居ると、どこからか鶯の聲が聞えたといふのである。下駄の齒につく土といふのに、早春の感じを十分盡して居るのは、凡手の言ひ及ばぬ所である。

灰捨てて白梅うるむ垣根かな

垣根にぶちまけた灰がパッと輕く舞ひ上る。と眞白な梅の花瓣が少し埃を帶びて、うるんだやうな色に見える。それが清楚な梅の感じをやはらげて、いさゝか艶なけはひを覺えさせるのである。

全く寫生的な句であるが、その纖細な美感が、きはめて印象的にはつきり浮んで來る。總じて『猿蓑』時代に於る凡兆の句は、當時の一般の句作傾向に比して、純粹な客觀的態度をとつて居るものが多い。しかもその對象の特性を捉へる事が適確で、隨つて印象が頗る鮮明である。その句風が天明の蕪村に近いので、かつて正岡子規が蕪村を推稱した時代には、蕉門の作家中凡兆の存在が俄かに問題とされるに至つた。實際『猿蓑』時代の凡兆について論ずれば、彼は少くとも蕉門に於る一異彩と稱する事が出來よう。しかし一身上の不幸から、彼のさうした俳壇的生命が極めて短く終つたのは、誠に惜しむべきであつた。

花※散るや伽※藍の樞※落し行く

もう參詣の人も絕えて、大きな寺の境内は靜に暮れて行く。雛僧が一人、本堂の重い扉をギーツとしめると、樞をゴトンと落して向うへ歩いて行つた。その樞の音が、ひつそりとした境

○花散るや　これも凡兆所出の句。
○伽藍　寺の梵語。
○樞　落し戸のさん。

○住吉や　この句百曲「モヽスヂリ」集（享保二年刊）に出づ。
○荒小田　舎羅撰。元祿十四年刊。

内に高く響いて、庭の櫻がハラ〳〵と散る。さうした春の夕べの物靜かな、そしてかすかな寂しみをおびた情景である。少しも主觀的な言葉を交へないで、しかもこの情景を適確に描き出してゐる手腕はえらいものだ。

住吉や河堀添へて春の海

これは彼の晩年の作である。同じく客觀句でも頗る平弱に傾いて、『猿蓑』時代の淸新さは全く見られない。この外『荒小田』等に見える彼の後年の句は、殆どこの類である。今左に二四句をあげて見よう。

眞似をして霞をかくす嵐哉
夕顏のあとから登るむぐら哉
老の手の籠に劣るや山淸水
雲雀鳴く下は桂の河原哉
あばら屋の戸のかすがひよなめくぢり

最後の二句の如き、往年の彼ならば決してこんな平弱な叙し方では滿足しなかつたらうと思

ふ。その他の句に至つては、これが同じ凡兆の作かと怪しまれるくらゐであらう。

市中は物のにほひや夏の月

店から店と軒を並べた市中の、むせるやうな物のにほひ。肉の匂、果物の匂、脂の匂、汗の匂、そんなものが入雜つたむし暑さの中に人はうごめいて居る。だが目をあげると空には涼しさうな月影が、地上の熱鬧を知らぬげに照つて居るといふので、感覺的なそしてやはり印象の鮮やかな句だ。芭蕉はこれに

暑し〳〵と門々の聲

と脇をつけ、以下去來と三人で一卷の歌仙を催して居る。

渡りかけて藻の花のぞく流哉

小川の土橋を渡りかけて、ふとそこに咲いてゐる藻の花に氣づいて、のぞいて見たといふ即興的な句である。白雄は「俳諧寂栞」に、

○市中は　これも猿蓑所出の句。

○歌仙　三十六句つゞける連句の形式の一。くはしくは連句篇五七四頁參照。

○渡りかけて　この句卯辰集（元祿四年刊）・猿蓑等に出づ。

道の邊に清水流るゝ柳陰
　　しばしとてこそ立止りつれ

の和歌を引いて據所としてゐる。感興一寸似よつた趣はあるが、凡兆の句は全く即興的だから、さうした引歌などには及ぶまい。

初潮や鳴門の浪の飛脚船

滿潮の鳴門を矢のやうに走る飛脚船、渦を卷く波の頭が舳先に白く碎け散る。さうした男性的な壯美がこの句の中核をなして居る。

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす

人は寢靜まつて夜もやゝ更けた。今迄ポトポトと滴つて居た灰汁桶の雫もいつの間にか止んで、その靜けさの中にきりぎりすが鳴き出した。秋夜の閑情が深く味はれる。なほ句解並にこれに附けた脇句以下については、連句篇に詳しく述べよう。

○道の邊に　西行法師の作として名高い歌。

○初潮や　この句も猿蓑に出づ。

○初潮　舊暦八月十五日の滿潮をいふ。

○灰汁桶の　この句も猿蓑に出づ。連句篇蟋蟀の巻（六〇〇頁）參照。

○灰汁桶　灰汁は昔時洗濯や染物に用ひられたので、桶に水を湛へ、その中に灰を投じ、その水を下の栓口から滴らせて、他の器に受けるやうに設備して灰汁をとつた。その桶である。

「和漢三才圖會」所載

○しぐるゝや　この句も續蓑に出づ。
○黑木　皮がついたまゝの雜木。
○積む屋　「積める屋」の意。
○禪寺の　この句も續蓑所出。

しぐるゝや黑木積む屋の窓明り

軒先近くまで高く薪を積み上げた百姓家などのさまである。外は時雨がして、家の中は薄暗くしめつぽい。たゞ一つ明いた窓からさし込む光が、ぼんやりそこらを明るくしてゐる。陰鬱な淋しさが漂つて居るやうな句だ。

この句についてはなほ一解がある。作者は家の外部に居るのである。さうして黑木を積んだ家の窓から洩るゝ灯影を、遠くから眺めて居るのだ。かう解すると、その情景は大分變つて來る。時雨に濡れて立つてゐる藁屋の影が黑く見える。その窓からぽつかりと黃色く洩るゝ灯影。まるで油繪のやうな光景である。凡兆の句としては、かうした印象鮮明な光景と見たいが、たゞ「窓明り」といふ語が、果して窓から外部に洩れる光の意にも用ひられたであらうか。それが疑問である。當時の用例に從つて「窓明り」を解釋すれば、やはり前說の通り解する外はない。

禪寺の松の落葉や神無月

禪寺の庭に松の落葉が散りしいてゐる初冬の景である。禪寺といへば同じ寺でも特に閑靜ら

○門前の　これも猿蓑所出。

○下京や　これも猿蓑所出。

しい。松の落葉も落花のやうな艶味は全くない。それが初冬の薄ら寒い感じとすべて調和してゐる。松の落葉の上をふむ冷やかさまでが感ぜられる。

門前の小家も遊ぶ冬至かな

冬至の日は昔は一般に業を休んで祝つたので、寺院でも衆僧に一日の暇を與へるならはしであつた。蕪村にも

書記典主故園に遊ぶ冬至かな

の句がある。句はその寺の門前の小家まで今日は遊んでゐるといふので、寺の冬至のさまを側面から敍したやうな作である。門前の小家を拈提し來つて、一山閑靜の狀を打出するともいはうか。巧みな手法といはねばならぬ。

下京や雪つむ上の夜の雨

この句については「去來抄」に名高い話が出てゐる。まづそれを抄出しておかう。

「凡兆筆蹟」（伊賀 亀井氏蔵）
私の見物や雪のみをつくし
留守がね所借よ後の月
二年芳野へ参候、旬日住候へども書
留無之候、覚不申候あら〱書きし
らせ候
　南行古跡にて
鍵子なくや我も鼻かむ苔清水
ここ吉野の花のきれ間やわかの…
もろこしの岸のすみれやよしの川
御読む六田や岩に舟つなぐ
あら〱田上候冬南都の古跡まごひ
ありき
我篠や庄屋さへたきむら時雨
いの子さもしらで餅屋に旅寝哉
　木津河にて

凡兆

この句始めに冠なく、先師をはじめいろ〱と置き侍りて、この冠に極め給ふ。凡兆あと答へて未だ落つかず。先師曰く、兆汝手柄にこの冠を置くべし。もし勝るものあらば、われ再び俳諧を言ふべからずとなり。去来曰く、この五文字の善き事は誰々も知り侍れど、この外にあるまじとはいかでか知り侍らむ。この事他門の人聞き侍らば腹痛く、いくつも冠置くべし。その善しと置かるゝものは、また此方にはをかしかりなんと思ひ侍るなり。

即ちこの句の「下京や」といふ上五文字が、いかに苦心の末に置かれたかといふ事が分る。謙抑な芭蕉の言葉としては受取れぬほど、幅つたい事を言つてるのも、芭蕉がこの五文字を置き得た事にどれほど會心の笑を洩らして居たかが想はれる。それでは「下京や」の五文字が何故それ程までに貴いのか。「去來抄」にはそれについて具體的な説明は少しもしてない。

布さらすうすや川添冬木立
柴舟の柴に着する氷けぶり
初霜や宇治の川行柴いかだ
　住吉にて
すみよしの花の頬か飄かけ身
なぐさみにちから入けり冬月
今ろくなき句とも多く候事ものしらず
さ／＼候へども此道隣人も無御座所
貴公様の耳に生前のなぐさみにおよ
いらせ候　さて／＼すきに愚か手つ
だひ出候事に御座候　御覧尤御返事
に不及候　以上　三月廿二日
凡兆
上　[illegible]　様
この一紙は、[illegible]いた、今
後年[illegible]。

○火燵行脚の句　二三〇頁を見よ。

筆蹟

箇中の消息は、自知に俟つたのであらう。よつて今その意を推測して見ると、それは要するに句の調和といふ點にある。凡兆によつて先づ案ぜられたのは、「雪つむ上の夜の雨」といふ十二字であつた。そしてこれだけですでに一つの客觀的な景色は、完全に現はされて居るのである。この上更に加ふべき事は、この景色から感ぜられ得べき情趣を句の中に定める手段である。さてこの雪が白く降りつんだ所へ、夜になつて、雨がサラ／＼と降りそゝぐ感じは、清く寒いだけでなく、そこに柔らかな溫かみが加はつて居る。そしたら讀者は「下京や」の五文字が、どうしてこゝに冠せられたかが自ら分るであらう。卽ち上京の貴族的な感じに對して、下京の親しみ易いやうな情調が、こゝにしつくりした調和を齎して居るのである。これは前出丈草の火燵行脚の句に於ても、些か說いた所であつた。

かう考へると、實は芭蕉の言もたゞこの工夫を十分門人に悟らせるために、故らにあゝした事を言つたので、決して漫然たる自負の言ではない事が察せられる。要するに巧みなそして親切な指導法であつたのだ。

長々と川一筋や雪の原

凡兆の句の印象が鮮明な事は、この句などで最もよく代表されてゐるだらう。見渡す限り白皚々として一物の目を遮るものもない廣野、そこに只一筋の流れが、遙かあなたから野を横ぎつて長々と黒線を劃してゐる。この大景をよくもかほどまで直截明快に敍し得たものだと思ふ。客觀詩人としての凡兆の腕の冴えを思はせる。たゞ現代人には句の描寫があまりに平淡で、複雜味がないのが物足りなく感ぜられるかも知れない。

○長々と　この句も猿蓑所出。

○元祿七年云々　これより先元祿三年すでに芭蕉に會つたといふ説もある。

○「浪化上人發句集」　野鶴編。慶應元年刊。

○首立てて　この句渡鳥集（元祿十一年刊）・蝶姿（同十四年刊）等に出づ。

○二十三日　この句住吉物語（元祿八年刊）・笈日記（同年刊）に出づ。なほ浪化發句集には下五が「五月雨」とある。又蝶夢編の「類題發句集」には「つりそめて蚊屋のにほひや二十三日」とある。

浪化

越中國井波町瑞泉寺十一代の住職で、東本願寺琢如上人の遺兒である。※元祿七年五月上洛中、去來の許で芭蕉に會しその直門となつた。作家としては必しも蕉門の雄ではないが、その社會的地位によつて北越蕉門の間に重きをなした。元祿十六年歿、年三十三。『有磯海』『刀奈美山』・『續有磯海』等、蕉門の俳書として重要な撰が多い。句集には「浪化上人發句集」がある。

首立てて鵜の群れのぼる早瀬哉

急流を押登る鵜の姿態が、鮮かに寫し出されて居る。水面にスッと首を眞直に立てた一群の鵜が、胸毛で水を切りながら溯るさまは、實に颯爽たる趣がある。浪化の作中最もすぐれたものの一であらう。

二十三日蚊屋のにほひや五月闇

五月闇の頃になつて、二三日前から蚊屋を吊り出した。その初めの數日間、萠黄の麻の匂が特に感じられる事は、誰しも經驗した所であらう。輕い捉へ所である。なほ句としては、

釣りそめて蚊屋のにほひや二三日

の方が整つて居るが、蝶夢は何によつて採録したのか明かでないので、姑く出所の明確な句形に從つておいた。

▽浪化筆蹟　松宇文庫藏

淨蓮社　翁塚記　井波

翁塚記　支考書

元祿庚辰のとしの春都にのぼりてはかならざる事に大無月中まてあり、か既に遠近を風の音に驚きて越路の方に歸らんとす　道のつてよろしく粟津の義仲寺に詣て故翁の墳前に跪きつく〴〵生前の事を思ふにまのあたり遠からでなつかしかりしが年月もはや七とせの秋に立變りて魂まつる頃は我住里にも魂を招かん　されは此塚の木の葉たに其ゆかり淺からねは墓下の小石を拾ひ取來りてかねて此塚を築かむことを思ふ　こゝに一宇の淨蓮社ありその所は人家遠からねど松杉の木だち深く俗を隔てをのづから物靜の閑寂をきかず　竹茂り水流れて淸閑その境を得たりといふべし　此寺の傍に地をえらぶに林紅がともがら心ざしまめやかに菴主もともに鍬とりて三尺の方墳をきまねびかの小石を壺中に貯へたれは神靈の契りもこゝに金石ならむとも也　予かつて京に年留の中にかね、蕉門の高弟ども處々の一願をこふて十月十二日には十百の韻を滿て此度の手向とおもひ侍れは遠近文通に合信して已に一願を得る事にぞありける　其月其日は殊に加越の門人を催し志を兼侍

浪化筆蹟

○水仙や　この句草刈笛（元禄十六年刊）に出づ。

○正月廿四日　元禄十五年。以下「白扇集」（寶永六年刊。浪化の追善集）より抜抄

○芳吟　大巓和尚が貞享二年正月遷化した時の芭蕉の追悼吟「梅戀ひて卯の花をがむ涙哉」

一讀清爽な感にうたれる。

水仙や藪のついたる賣屋敷

いづれは相當な舊家の屋敷であつたのだらう。後につゞいた藪もそのまゝ賣物となつて居る。つい覗き込んで見ると、庭先に眞白く咲いた水仙の花が、清い香を放つて居た。何となく都の町はづれと言つたやうな感じがする。水仙の氣高い趣から、その賣屋敷のもとの主も自らゆかしく想ひやられるのである。

〰〰〰〰〰〰〰〰

正月廿四日、けふは都に着く日なるが、まづは湖南の義仲寺に立寄り、故翁の廟前に跪く。九とせの春と立ちめぐりて、塚の竹まことに青々たり。昔圓覺寺大巓和尚の遷化に、師のおくり給へる芳吟にすがりて、今もその句を慕ふほどに、

梅戀ひてその梅をがむ涙かな　浪化

齋部路通

一に八十村氏。美濃の人、その出自を詳にしないが夙くから浮浪の生活を送つてゐる中、偶々芭蕉に知られて師事した。しかし素行修まらずして人々に忌まれ、一時は師の勘氣さへ受けた。元祿末年頃には遠く奥州岩城に赴いて居たが、晩年は大阪に住んだ。享保末年か元文初年頃歿、享年不詳。「勸進牒」「芭蕉翁行狀記」「桃舐」「彼岸の月」等の撰がある。

、肌のよき石に眠らん花の山

路通の一生を見た時、彼が定住的の生活を送つて居たのは、晩年極めて僅の間であつたらしい。それまでは終生殆ど漂浪の旅から旅へとさまよつて居た。彼は始めて芭蕉を訪ねて江戸に出て來たをり、長屋の端を一間仕切つた板庇に假の舍を定め、鍋一つと、冬は衾とし夏は蚊を防ぐべき蚊屋一張との簡素な生活をつゞけて居た。その中に春がめぐつて來た。梅が薫り雲雀が鳴き出すと、彼の胸にはまた漂泊の思がわいて來るのであつた。かの「返店文」は、即ちか

○肌のよき　この句いつを昔（元祿三年刊）を始め秋津島・卯辰集等に出で、又本朝文選に載する路通の「返店文」中にもある。

○返店文　本朝文選に收められてあるが、これを風俗文選と改題した折、故あつて削除した。

○芭蕉葉は　この句猿蓑（元祿四年刊）に出で、なほ葛の松原・眞木柱・今日の昔・根無草等にも見える。

うして再び旅に出た時のさまを記したものである。その最後に

ながれたる樝はぬしに返し、かの鍋は人にうちくれて、身は笠ひとつのかげを頼みて、行方なき方をぞたのしみけり。

と筆をとめて、この句を添へて居るのである。

山は浮かれ出た花見の人にざんざめいて居る。小袖幕を張り廻らした中には、緋毛氈を敷きつめて、佳酒美肴の備へも豐かであらう。「身は笠一つの影」と頼んで出で立つた自分には、さうした榮華などは思ひもかけぬ事だ。せめて肌の滑らかな石にでも眠らうと言ふのである。

草枕蛇をおさへて目覺めけり

雑煮ぞと引起されし旅寝かな

等、いづれもかうした漂泊兒路通の生活記録であつたのだ。

芭蕉葉は何になれとや秋の風

秋風が吹く度に、芭蕉の廣葉もあそこが裂けこゝが破れて、日毎に傷ましい姿になつて行く。かうしてしまひにはどうなつてしまふ事だらう。一體秋の風は、芭蕉葉はどうなつてしまへと

いつて、あんなに無情にも吹く事だらうといふのである。「何になれとや」といふ七文字に、切々として迫る哀音を聞くやうである。支考は「※一生の風雅をこの中にぞとゞめ申されけむ」と賞美してゐる。

『猿蓑』に入集した路通の句は、この句を始め以下にあげる如く、甚だすぐれた作が多い。當時彼はすでに同門の間に不評判であり、『猿蓑』の撰者凡兆とも不和であつた。それにもかゝはらず數句が採録され、中には師翁の褒美を受けたものさへあつた。門友乙州は評して、

我が俳門の友にして、此の坊や逸士なり。行ひ是非の沙汰あれども、俳諧は誠に希代の妙好をあらはす。

路通筆蹟

○一生の風雅を云々　この事支考の「葛の松原」に見える。

▽路通筆蹟　伊賀　龜井氏藏

此度は不思義の縁末に而得貴意候に御懇情わけて難有存候　かねて申出候通高野参詣仕候　御暇乞も有候而やかましきものに候條與風存立候　風雲の轉旅萬事御ゆるし可被下候　命の内又々再會願上候　已上

十月廿一日

かせや市兵衛様　路通

「かせや市兵衛は伊賀上野の人、號雪芝、芭蕉門」

と言つて居る。芭蕉に師事して以後數年間の路通は、實際俳諧そのものには眞面目に精進した。しかし悲しい性格の破綻が、やがて同門の指彈を受け、果は師翁の勘氣さへ蒙るに至つたのである。

ぼ※のくぼに雁落ちかゝる霜夜かな

前書によれば伏見の夜舟での吟であらう。苫には白く霜が置いて夜も更けた頃、雁が一聲側近く啼いて落ちて來た。それがまるで自分の頸元へでも落ちかゝつたやうな氣がして、思はず首をすくめたのである。「ぼのくぼに落ちかゝる」と言つた所に、寒夜雁聲に驚いた情が見るやうである。

※鳥どもも寢入つて居るか※余吾の海

寂寞たる湖北の冬の夜である。湖のほとりに立つた乞食路通は、うつすりと光を帶びた水の面をじつと眺めて居た。湖面には波一つ動かない。死んだやうに靜かである。もう水鳥どもも

○ぼのくぼに　この句鳥の道（元祿十年刊）に出で、「伏見の夜舟にて」と前書がある。又花の雲（元祿十五年刊）には下五が「夜寒哉」とある。

○ぼのくぼ　ぼんのくぼともいふ。後頭部の凹んだ所。

○鳥どもも　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。

○余吾の海　近江國伊香郡。琵琶湖の北にある小湖。

○いね〱と　この句猿蓑（元祿四年刊）に出づ。又誹林一字幽蘭集（同五年刊）には「無住處」と前書して出てゐる。

寢入つてしまつたのであらう。そしてあの枯蘆のかげに、どんな安らかな夢を結んでゐる事だらう。彼はその水鳥の上を、なつかしむやうに想ひやつてゐた。がさて自分はこれから何處に今夜を明かす事なのか。まだ宿さへとつて居ないのである。暗然として自ら憐れむ心もちが湧いて來るのだつた。

『去來抄』によれば、芭蕉はこの句を「細みあり」と賞したといふ。芭蕉の所謂細みとは、どういふ點をさしたのか極めて漠然として居るが、思ふにそれは作者の心が物の心に細く通じて行く事について言つたものらしい。芭蕉の風雅の要諦は、造化にかへり自然に同化する事にあつた。そこから細みも自らに生れるのである。路通が靜かな余吾の海の面にじつと見入つた時、彼の心はたゞ一筋に水鳥の心に通つて行つたのだ。芭蕉が「風雅の細み」と言つたのも、卽ちこの境涯をさすのであらう。

因みにいふ。この句の季題は水鳥で、冬の句である。

いね〱と人に言はれつ年の暮

乞食路通の悲しい姿である。あわたゞしい年の暮、人の門に佇んでも一飯を惠んでくれる人

ちない。たゞ「去ね〳〵」とすげなくあしらはれるばかり。だがそれは師走坊主の諺通り、乞食路通にとつてはあたりまへの事かも知れない。それよりは、師に疎まれ友に容れられないで、獨り寂しく追はれて行く漂泊兒路通の歎きが、こゝには見られるであらう。

※やつがれは此の三とせ折々のたがひめに、翁心ざはり侍りて、音信も遠ざかり侍りぬ。されど昔のあはれみ深きにこそ、却つてにくみも強からんと思ひながして、やをらうき世に任せうち暮らしぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心がかりなりとて、翁の方なだめまゐらせ、この度よろづ罪許し給へども、外のさはりなど侍れば、表むきうときさまにて、それよりはやつがれ加賀の國へ旅立ちける。そこにもむつまじき方ありて、日數經ぬ。この度翁遺言の次に「餘命たのみなし、なからん後、路通がおこたりゆめ〳〵恨みなし。必ず親しみ給へ。」その座各〻聞きあへり。今さらのくやしさのみぞせんかたなき。やつがれはせめて一七日の法事にぞ參りあひぬ。新しき塚の前、樒の花筒物あはれに、霰もふるひながら陀羅尼など唱へ、涙おさへて

ひからかす袖や小春の死出の山

○やつがれは　以下路通の「芭蕉翁行狀記」の拔粹である。路通と師翁との關係について自ら述べて居る。

○定光坊實永　江州三井寺の僧。

○伊勢新百韻　元祿末年頃、乙由・支考等と百韻を興行して、『炭俵』・『續猿蓑』以後の輕風を試みたもの。

○三疋猿　寶永元年、同じく乙由・支考等と百韻三卷を催して、俳諧の眞行草三體を示したもの。

○それもおう　元祿十三年の歳旦帖を始め一幅半・柿表紙等に出づ。

岩田凉菟（いはたりやうと）

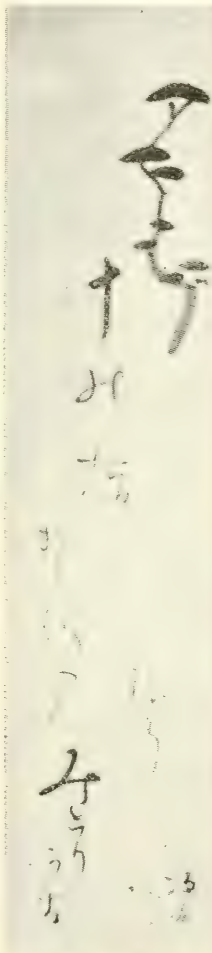
伊勢山田の人。名は正致、權七郎と稱す。神風館三世をつぎ團友齋と號した。蕉門として芭蕉生前に於る交渉は比較的薄かつたが、其角・支考等と接近し、『伊勢新百韻』や『三疋猿』等によつて次第に平明通俗な調を唱へ、支考の美濃風と相竝んで所謂伊勢風の祖となつた。享保二年歿、年五十七。撰著にはなほ『皮籠摺』『行脚戻』『山中集』『潮とろみ』等がある。

それもおうこれもおうなり老（おい）の春（はる）

凉菟の代表作として知られた句。その發句を集めた稿本（かうほん）にも、この句に因んで『それも應（おう）』と題せられてゐる程である。句意は老年の春を迎へて、何事にも逆（さか）らはず我（が）を立てないやうになつた心境を咏じたのである。支那の昔の賢人に、何を聞いても「それもよし、〳〵」と答へる人が居た。果ては我が子の死んだのを聞いても、又それを咎（とが）め立てしても、何もかも「よしよし」と言つてゐるだけだつたといふ。それは努めて至るべき境涯ではないかも知れぬが、常

人といへども年老い血氣衰ふれば、自然と感情が淡くなり、物と爭ふ心がなくなる。老境に入つて得る心の和平である。さうした心もちがこの句から味はれる。

※傾城の畠見たがる菫かな

廓の外には出られない遊女の身の上である。それがはからずも一莖の菫に對して、野外の春色に眷戀たる情抑へがたいものがあつたのだ。しんみりとした哀れさがある。菫の可憐な花のさまが、自ら遊女のしをらしく美しい姿を想はせる。

凉菟筆自畫賛

※鍬さげて叱りに出るや桃の花

○傾城の　この句皮籠摺（元祿十二年刊）に出づ。

「凉菟筆自畫賛　松宇文庫藏」
十の指そろへて松のみどりかな　凉菟

○鍬さげて　この句東華集（元祿十三年刊）に出づ。

○木枯の　この句伊勢新百韻に出づ。

桃の枝を折らうとした腕白子供たちが、百姓に叱られて居るのである。百姓は裏の畠でも耕して居たのだらう。鍬をさげたまゝ出て來てゐる。長閑な田園風景の一つである。句は例の平明な調子であるが、「鍬さげて叱りに出る」といふ所に、些か通俗的な興味をねらつてゐる。伊勢風の平俗な調は、かうした所からやがて出發したのである。

木枯の一日吹いて居りにけり

極めて平明の調である。たゞしこの句の如きは、平明といふだけでなほ卑俗に失せず、むしろ飄逸味に富んだ作とも言へよう。然るに次の乙由に至つては、漸く大衆的な通俗性を帶び來り、支考の美濃風と共に、後世支麥の徒と輕視されるやうになつた。

中川乙由

伊勢川崎の人、支考・涼菟に師事して一風を立て、平明通俗を主とした。號を麥林舍といふので、その風を麥林風ともいふ。元文四歿、年六十五。その子麥浪の編した『麥林集』『續麥林集』に發句・附句が集められてある。

花咲かぬ身をすぼめたる柳かな

涼袋の『南北新話』によると、この句はもと加賀小松の人、宇中が柳の句に、

花咲かぬ身は動きよき柳哉

とあつたのを、これは落花の論にかゝり、動けば散るといふ實に落ちて面白くないと言つて、自らかく一句に仕立てたのであるといふ。涼袋は

かく作れば本性を立て、花にまけたる柳の姿に語勢のさわやかなるも一入ならん。

と評して居る。成程「身は動きよき」では全く理窟に落ちてしまふが、さりとて「身をすぼめたる」が、柳の自然の風姿を言ひおほせたものとは思はれない。やはりそこには作者の理窟が

○花咲かぬ　この句麥林集に出づ。

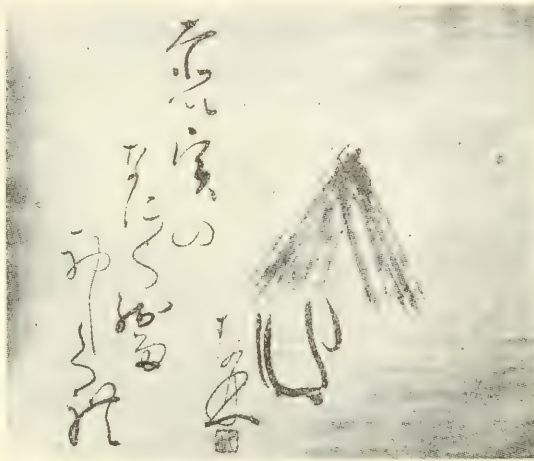
○南北新話　涼袋が専ら伊勢風の俳諧について論述したもの。寛延元年刊。

○浮草や　この句麥林集に出づ。

▽乙由筆自畫賛（松宇文庫藏）

赤い實のなに〳〵殘る初しぐれ　麥林

はひつて居るのである。しかもその理窟は、結局凡人の通俗的な解釋から得たものにすぎない。而してそれがこの句の一般人に喜ばれた所以であり、又所謂麥林風の特色とする點であつた。

浮草や今朝はあちらの岸に咲く

人口に膾炙した句である。それは專ら人生のある相を寓したものとしての解釋に基いてゐるやうだ。しかしそれでは純然たる談理の句になつてしまふ。一句としての解釋は、このまゝの意と見ておきたいのである。ところが作者は果してこの表面の意だけで滿足したであらうか。彼の句風から考へても、遺憾ながらやはり通俗的な談理を含むものと見なければなるまい。少くともさう見得る餘地があつたからこそ、名高くなつたのである。しかも其角の

乙由筆自畫賛

○稻妻や　この句曠野（元祿二年刊）に出づ。

○遊女の云々　この事「俳家奇人談」等に見えて、乙由が一日芝居見物に出かけると知り合の妓が隣棧敷に居て、共に酒を酌んだ。翌日又出かけると、今度はその妓は外の人につれられて向棧敷に來てゐたので、この詠があつたのだといふ。

▽乙由墓
（宇治山田市船江町に在る。）

○水仙や　この句も麥林集に出で「うかれ女に對して」といふ前書がある。

稻妻や昨日は東今日は西

に比べて、これは「今朝はあちらの」と言ふのによつて、自ら「昨日はこちらの」といふ意を含めた手段が、一層通俗的な喝采をねらつて居ると言へよう。

なほ此の句は遊女の境涯をよんだものだといふ說がある。いかにもそんな事でもありさうな氣がする句だ。さうした逸話も、恐らくこの句の解釋から捏造されたものかも知れぬ。「麥林集」に載せたこの句には、何の前書もないのである。但し別に遊女に對した句には

水仙やものにさはらぬ身のひねり

といふのがある。あくまで乙由調の句である。

乙由墓

○石田未得に云々　通說は荻田安靜の門としてゐるけれども疑はしい。

○不改樂　蔽柳編。調和の發句約百五十章を四季別に集めたもの。寶曆八年刊。

○花と見て　不改樂による。

○かもじ賣る　この句富士石（延寶七年刊）に出づ。

○職敵　商賣がたきともいふ。同業相嫉忌するをいふ諺。

岸本調和

奥州岩代の人、江戸に住す。石田未得※に師事し壺瓢軒と號した。點取俳諧を專らとして時好に投じ、相當に俳壇的勢力を得たが、その作品は低調で詩趣に乏しい。正德五年歿、年七十八。『富士石』『金剛砂』『題林一句』等の撰があり、なほ前句附の高點集を多く撰んで居る。發句集に『不改樂』※がある。

※花と見て蝶なり蝶と見て莊子

落花かと思つてよく見ると蝶であつた。だが更に考へると、この蝶も實は『莊子』に言つて居る通り、莊周が夢に化して居るのかも知れないといふのである。「花と見て蝶なり」までは有りふれた着想である。そこから『莊子』の本文によつて、一歩「蝶と見て莊子」と進めた所が句の眼目である。もとより只一種の理智的な遊戲にすぎない。

※かもじ賣る柳の門や※職敵

「調和像（「不改集」所載）

○時鳥々々とて　この句蓮の實（元祿四年刊）を始め新始（テウナハジメ）・俳諧移徙抄・反故集等に採錄さる。

柳の枝が髪のやうに垂れて居る門口にかもじ賣が立つて居る、その柳の髪は恰かも商賣物のかもじに對して商賣敵だと言つたのである。談林時代の句としても、極めて幼稚な着想に過ぎないが、實は蕉風時代になつても、なほ俳壇の一部には俳諧の眞の文藝的意義を解し得ず、かうした境地に止つて居るものも多かつた。調和の如きは卽ちその低級な作者たちの宗匠として、貞享時代以後の蕉風に追隨せず、しかも俳壇的に相當の勢力を持つて居たのである。調和の俳諧史上に於ける地位は、それで自ら了解されるであらう。

調和像

時鳥々々とて寢入りけり

これは下五を「明けにけり」として、千代女の作と誤り傳へられ、それで却つて名高くなつてゐる句である。しかし實は調和の作で、やはり古くから汎く知られて居たのであつた。而してその汎く知られた所以も、また千代女に附會された場合と同じく、專らその通俗的な點にある。

○須磨人は　不改樂による。
○源氏物語、須磨の巻の文句
「須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものはかゝる所の秋なりけり」
○日本紀や　この句富士石に出づ。
○日本紀　日本書紀。

須磨人はよくも生きけり秋の暮

須磨は昔から月の名所として知られ、歌や物語にも秋のあはれが語られてゐる。わけても『源氏物語』須磨の巻の文句は名高く、須磨とし言へば淋しい所がらとなつてゐる。その須磨の里に住む人は、淋しい中にも淋しい秋の暮を、よくも生きて居られるものだと想ひやつたのである。これも全く實感に卽しない机上で作つた句である。

日本紀や銀杏に埋む神無月

『日本書紀』には神代の歴史が書いてあるので、多くの神々の御名があげられてある。その神樣達も、神無月には皆出雲の大社に出かけられて留守になるわけだが、これは書物の事であるから、紙の上から御名が消え去る筈はない。その代り折から銀杏の落葉が一杯だ。銀杏の葉は蠹害を防ぐ爲、よく書物の間に挿まれるので、この銀杏で埋められて、『日本紀』の神樣たちも神無月の名に背かなくなると言ふのであらう。相變らず理智を弄した句である。

立羽不角

江戸の人、通稱定之助、初め遠山と號す。少時から岡村不卜に學び、貞享から元祿初年までは蕉門の人々とも交つたが、後ち調和と同樣に專ら點取俳諧を以て衣食するに至つた。句風は平俗でとるに足らぬが、俗衆の爲には却つて歡迎され、又顯貴の人々の寵を得て門人千餘に及び、自ら千翁と號した。その外松月堂・南々舎等の別號がある。寶暦三年歿、年九十二。撰著はその數八十餘に達するといふ。多くは高點前句附集である。なほ彼の句風を特に化鳥風と呼ぶが、それは誤と思はれる。

三日月は梅にをかしきひずみ哉

不角の句風がまだ甚しく俗化しない頃の作である。暗香浮動する黄昏頃、眉のやうな新月の光が一入情趣を添へる。それを「梅にをかしきひずみ」と言つたのは、やはり理智的な解釋を加へたのではあるが、この程度であればなほ恕すべきであらう。師不卜の判によつて勝を得て

○化鳥風　ケテウフウ。これは不角一派をよんだ稱でなく、當時俳諧の邪路に走つたものを一般に稱したものらしい。不角の俳諧を特に化鳥風と呼んだのは、安永四年刊「猿利口」に「不角は貞德にもあらず宗因にもあらず一風にして、その比世に化鳥風といふ」とあるのが、管見では最も古い。

○三日月は　この句續の原（元祿元年刊）の句合に出づ。

○ひずみ　歪曲する事。こゝは三日月の彎曲して居るのをいふ。

○誕生の　この句甕蘊輪〔ワクカセリ〕・前集、不角撰、寶永四年刊に出で「煩惱具足即是菩提」と前書がある。
○指似　男児の陰部をいふ。

▽不角像（「鶴の噂」所收）

浮世繪本　鶴の噂　全三冊

序

松月堂法眼不角千翁[illegible]九拾壹歳の影像一[illegible]の千[illegible]寿し[illegible]清風[illegible]の發句付[illegible]寒よい[illegible]木の榮を永日の[illegible]鶴の噂筆の命毛千代[illegible]

芳月堂　奥村文角

（畫者文角は奥村政信の俳號である。）

るる。

誕生の時こそ見たれ釋迦の指似

人間煩惱の基は色欲にあるが、その煩惱があればこそ又解脱もある。即ち煩惱具足是れ菩提たる所以である。ところが釋迦はすでに若くして出家の志があり、その色欲煩惱なら早く解脱したわけである。それを俳諧化したのがこの句で、をかしみの中に何か深い哲理を含んで居るやうな氣がする。だがそれは畢竟前書のこと〳〵しいのに惑はされただけで、實はつまらぬ洒落に過ぎない。しかもさうしたトリックが、俗衆に對する不角の魅力だつたのだ。なほこの句は季題から言へば、四月八日佛生會、即ち灌佛の句である。

不角像

入る月のさはるか動くむら薄

これも自ら得意にして居た句らしい。一寸感心させられる句である。しかし結局俗受けをねらつた作に過ぎない。

ごみ〳〵とする〳〵※

神農の舌は薬種の薬研にて　　豊角
　あゝ世の中や苦爪楽髪
若後家の不器量是非のなき賢女　　里青
　やはらかな事〳〵
上方の喧嘩は江戸のはなし聲　　友吟
　短い物と長い物有り
中の字を挾箱かと問ふ無筆　　無才
　笑ひこそすれ〳〵
古井戸を梯子の家に無理所望　　松色

○入る月の　この句蘆分船（不角撰、元禄七年刊）に出づ。

○ごみ〳〵とする　以下不角の高點附句集、元禄十六年刊「廣原海」〔ワタツウミ〕からの抜抄。その平俗な風體が知られるであらう。

〇折つて後　俳諧五子稿　大夢編、安永四年刊。言水・去來・素堂・沾德・東山五家の句を集む」所收の沾德句集による。「性善い心を」と前書がある。

水間沾德

初め門田氏、名は[illegible]、通稱次郎左衛門、合歡堂と號す。江戸の人、刀劍の磨師で始め關田露言に學び露葉と言ふ。後ち奥州岩城侯内藤風虎。露沾父子の教をうけ沾德と改めた。其角の歿後その一派は多く彼に從ひ、江戸俳壇に非常な勢力を占めた。しかしその句風は其角の洒落俳諧を一層墮落させたもので、只管奇警に走つて詩趣を失つた。享保十一年歿、年六十五。「文蓬萊」「一字幽蘭集」「余花千句」等の撰著がある。

折つて後貰ふ聲あり垣の梅

有りさうな事である。主じも咎めるわけにはゆかない。微苦笑して花盜人のあとを見送るだけであらう。何がそれだけの事ならば、もとより高雅な趣ではないが、なほ甚しく俗に墮したといふ事は出來ない。しかしもし前書のやうな意を含めるのがこの句の主眼であるとしたら、畢竟通俗な談理の句とする外はなからう。沾德にはこの外「長幼有序」と題して

梅折れば鼻をさし出す弟かな

とよんだり、「如渡得船」と題して

　　御忌やよぶ靈岸樣と渡し守

とよんだ類の作が多い。これらは全く俳諧を第一義的に利用したやうなもので、風雅の邪道とすべきであるが、沾徳が俗間に迎へられたのは、實はかうした類の作に巧みだからであつた。

　　帶ほどに川も流れて汐干かな

其角は「句兄弟」の終に發句の六格を示し、この沾徳の作を新句の一としてあげて居る。即ち汐干の句として、その着想の常套に流れて居ない點をとつたのである。皮相普通汐干の句といへば、獲物に興ずるさまや、海岸一帶の人出をよんだりするのだが、これは汐が遠くまで干てしまつた爲に、川と海との接續状態がいつもと變つた所を捉へたので、たしかに見つけ所は面白い。干潟の間を細長く川がうねつて居るさまは、汐干頃でなければ見られぬ景であらう。そ

沾徳筆蹟

○帶ほどに　この句、句兄弟（元祿七年刊）に出づ。

▽沾徳筆蹟（池田　小林氏藏）
人々と浦あそびにまかりて
網見に漕廻さけて浦の秋　沾徳

○低きかたへ　この句「泡津晴嵐」と前書あり、後集花千、百句に出づ。

○初嵐　秋の初めに吹く嵐。

の奇警な着想を其角は稱したのである。而してこの程度の奇警さなら勿論差支ない。しかしかうした傾向は年を追うて甚しくなり、又その門人沾洲等は益〻その勢を助長して、遂に譬喩俳諧等と唱へる邪道に陷つたのである。

低きかたへ水のあはつや初嵐

この句には自ら註を附して、

水の満つる時は泡立ちて先低き方へ走る物也」泡津は最も低き處也。

と言つて居る。即ち句意は、水は泡立つて低い方へ走る。その泡を名にした泡津は、又湖岸で最も低い所だが、そこへ水ではない秋の嵐がまづ訪れる」といふのであらう。作者はかうして手の込んだ技巧をこらし、わざ〳〵その種明しまでやつて居るのだが、畢竟これは種明しの興味が一句の眼目となつて居るので、到底純粋の藝術的精神は求むべくもない。

○淡々發句集　門人分外（書肆丹波屋傳兵衛の俳號）編、延享二年刊、
○淡々文集　門人東、富夫等編、寛保二年刊。

○口癖の　この句淡々發句集に出づ。

松木淡々

もと大阪の商家の出であるが江戸に下つて俳諧に志した。其角に最も多く接し、始め渭北と號した。享保初年京都に上つて半時庵淡々と號し、その俗才は巧に俳壇を操つて忽ち上方の俳壇に牢固たる地位を築いた。寶暦十一年歿、年八十八。撰者の數は頗る多いが、『花月六百韻』『晋子十七回』等が最も見るべきものである。作品は『淡々發句集』『同後篇』『淡々文集』等に收めらる。

口癖の吉野も春の行方かな

毎年のやうに春になると「吉野へ花見に出かけたい」と言つて居る。今年も相變らずさう言つてゐるだけで、はや春も過ぎ去つてしまつたといふのである。よくありさうな事で、それだけ大衆の同感を得易いのであるが、實はやはりさうした通俗性以上には認められぬ句である。

淡々の五十回忌追善集たる『一時集』には、この句以下次の五句をあげて「右生涯の的中」

○晉子十七回　淡々が師其角の十七回忌追善として撰んだ集。その中に淡々自身の俳論や隨筆を交へた雜談集がある。

○仙人掌の四字云々　これらの事列仙傳(洒落本)・東牖子等に見える。

○井戸掘に　この句淡々發句集に出で「不德といふ題を探り得て」と前書がある。

と註し、即ち彼の代表作としてゐる。

森の鵜のうきを羨む篝かな

初雪や波のとゞかぬ岩の上

この上は車一輛ほとゝぎす

曉や灰の中よりきり〳〵す

柴舟の登るは貧し三日の月

これらの作は、事實淡々の吟中最もとるべきものであらう。元來彼は決して斗筲の小人物ではない。「晉子十七回」中の雜談集等に徴しても、その手腕見識共に凡でなかつた事が窺はれる。たゞ彼はそれを以て名利の手段とし、しきりに權謀術數を弄して自家の地位を築くに汲々としてゐた。爲に仙人掌の四字に口傳があるとか、

梅の花答へて曰く梅の花

を公案として與へたり、徒らに奇を弄して衆目を惑くやうな事に努めた。かくして上方の俳壇を毒する事最も甚しかつたのである。

井戸掘にぬけ道はなし五月雨

▽淡々筆自畫贊（松宇文庫藏）
雲寂し只ありくと梅の花
高壽八十一叟

これは舜が父瞽叟の爲に苦しめられ、ある時は屋上にあげてこれを焚き殺さうとし、ある時は井戸に入らせて生埋にしようとしたが、その都度舜は笠を挾んで飛下りたり、井戸の中に拔道があつたりして助かつたといふ俗傳によつたものである。舜の如き聖人にはさうした助けもあるが、不德の井戸掘では、この降りつゞく五月雨に拔道はないと言つたまでで、要するに理智だけで解すべき句である。こんなやり方でつまり俗衆を感動させたので、それは江戸の洒落俳

淡々筆自畫贊

諧の如くあまりに奇巧でもなく、しかも美濃風・伊勢風の如き平易なものでもない。その中間をねらつて大衆の好尚に投じようとしたゞけである。而してそれがやがて淡々をして名を成さしめた所以であつた。江戸の不角が相當の俳壇的勢力を得たのも、やはりかうした中間的のねらひが成功したものと思はれる。享保の俳諧はかくして東西共に、風雅の誠から遠ざかるに至つ

たが、一面又享保末年頃には夙くもその反動が現はれた。即ち享保十六年の『五色墨』の如きは、全く江戸座の譬喩俳諧に對する反抗運動であつた。たゞし『五色墨』の人々はなほその實力が革新運動を大成するに足りなかつたが、爾來俳壇の内部には、再び芭蕉の精神に復らうとする機運が漸く動き、遂に天明の中興時代が現出するに至つたのである。

古き器を好ける風人、光悦が方に遊びて、この頃諸人の求めたる丸壺の茶入こそをこの物なれ。それに似よりたる大方なるべき丸壺を求め出し、渠に肝潰させんたくらうちひしめけるを光悦聞きて、沙汰の限りの御物ずきなり。丸壺を取出されても第二義に落つるなり。四角か長きを取出してこそ全[illegible]我が物なり。すべて手跡も書工も同じ事なりとは金言なり。俳諧にこそこの趣を離れては第二義ともいふべし。翁の常々言はれしは、嵐雪はよく〳〵我が道を丸くし、其角は角ながらしかも根を違へず、又我が道を取捨して世に異見なく、信多くして敬少からず。往く〳〵一道の聞え天下に有るべしと言ひ給ひけるよし。(中略)今又からびて閑に、しかも魂強く案じよれば、翁に先かけられ、(中略)芭蕉風とてすら〳〵とばかり言ひちらして、句表ばかり似て似ぬこそ、二義の論にも及ばず。

○五色墨　江戸の宗瑞・蓮之・咫尺・素丸・長水の五人が各自歌仙一巻づつを催したもので、江戸座の陰怪な句風に對して、頗る平明な調を以て、暗に俳風革新の氣勢を漲らしたのである。

○古き器を云々　「晋子十七回」の雑談の一節である。淡々の俳論として注意すべきものである。

建部綾足

津輕の藩士、二十歳頃事により國を去つて京都の東福寺に入つたが、間もなく還俗して野坡に師事し、その後希因・梅路等に學んで麥林の風に歸した。初め葛鼠、又都因といひ、後ち江戸淺草寺門前に住み凉袋、凉岱等と號した。寶暦末年頃から片歌の說を唱へたが、あまり行はれずして終つた。又繪を善くし小說の著もあつた。安永三年歿、年五十六。「南北新話」「俳仙窟」「片歌二夜問答」「片歌百夜問答」「古今俳諧明題集」等の撰著がある。

浦の春千鳥も飛ばず明けにけり

新春の句である、千鳥一羽すらも飛ばない、平穩靜謐な浦邊の春を祝つたので、泰平の象が自ら見られる。

孫つれて空へ杖つく雲雀哉

○古今俳諧明題集　五冊。寶暦十三年刊。古今俳人の發句を四季類題別にして集めたもの。當時に先つ事廿年前から編纂に志したものだといふから、綾足の發句標準をよく窺ふ事が出來る。

○浦の春　この句百題集（凉袋撰、延享五年刊。自句・諸國の句とを集めたもの）に出で、同書集中にも選び入れてある。諸國時代の作。

○孫つれて　この句も百題集に出づ。

○綾足像（紀行三千里所收）寒葉齋建凌岱字孟喬、號寒葉齋、又號俳諧號呼吸露庵涼袋、俳名號凉袋（又都因）後爲下以二片歌一一家者流上更書綾太理阿良多理安永甲午春三月十八日沒壽五十六葬高輪牛頭神林」

○水澄めば　この句古今俳諧明題集に出づ。

○ひぢりこ　泥土をいふ。

○片歌　五、七、七を基本とする詩形で、日本武尊が東征の御甲斐の酒折宮で「にひばり、筑波を過ぎて、幾夜かねつる」と仰せられたのに對し、火燒翁が「かゞなべて、夜には九夜、日には十日を」と答へ奉つた。これが卽ち片歌の最も古いもので、又連歌の濫觴も普通これにあると說かれて居る。

空高く舞ひ上つた雲雀の行方を、杖の先で指しながら孫に語つて居る老婆。左の手は後へ廻して腰に當てて居るのだ。「空へ杖つく」と言つたのが作者の得意とした所だらうが、實はその爲に一句が卑しくなつて居る。これは綾足がしきりに麥林の調に心醉してゐた時代の作で、その平明でしかも何か一趣向ある所を學ばうとしたのである。けれどもその一趣向といふのは、觀照の深さを言ひとる爲の工夫ではなくて、所謂氣のきいた見つけ所を求めようとするに過ぎない。爲に一寸面白さうではあるが深く味はふに足りないのである。

綾足像

水澄めば蛙浮き上る小田のひぢりこ※

綾足は寶曆末年頃から、俳諧の基く所は上つ代の片歌にあるといふ說を唱へ出し、しきりとその宣傳につとめた。しかしそれは決して眞摯な藝術上の省察と要求とから生れた說ではなく

〔綾足筆自畫賛・松宇文庫藏〕

畦ひとつよめりてよそのたうたかな　涼袋

て、元來名利の念に富み才氣溌剌たる彼が、故らに新奇な説によつて俳壇的地位を得ようとする野心に基いて居た。かくて彼はしきりに古學の知識を振廻したり、喚徂鳥・稻閃・沙噀等と故らにむづかしい字を用ひたり、又普通の五、七、五の發句の外に、かうした五、七、七の發句もよんだりした。卽ち上代の片歌の形式である。しかし彼の主張はむしろ識者の排斥をうけ、わづかに關東の田舍あたりに多少の勢力を扶植し得たに止つた。だから俳諧史上に印した綾足

綾足筆自畫贊

の足跡は、もとより到底蕪村や曉臺等に比すべくもなかつた。たゞ彼の片歌說も、畢竟當時の我が文藝界の主潮をなしてゐた古典崇拜の一つのあらはれである事を思へば、それは單に彼の山師的な野心と衒學癖とが生んだ個人的問題ではなく、やはり天明俳諧の一基調をなした古典的色彩と交渉する所が見られる。その點で綾足は最も時代にさきがけて居たとも言へる。とに

かくかうした時代的傾向の顯はれとして見る時、綾足の主張とその作品も、また歴史的に特殊の意義をもつて考へられねばならぬ。

句は澄んだ水田の底から、ムク／＼と泥が動き出したかと思ふと、ひよいと蛙が浮き上つたさまで、句境も面白く表現にもさして嫌味がない。「ひぢりこ」などといふ古語を用ひた所が一寸臭いくらゐである。元來綾足はその人物が眞面目さを缺いた爲に、藝術家としても大成するに至らなかつたが、彼は決して凡庸の徒ではない。伊勢風の平明調を擯してなほ卑俗に墮せざる、片歌の奇僻な說を唱へても詩趣を失はない所があつた。大ほ所謂片歌調の作二三を示すと、

奥山は山鳩鳴いて花も散りき

夜や寒き里におりくる熊の聲聞ゆ

柴垣にさゝ※ぎしば鳴く寒き夕べに

等、佳作とすべきものがあり、又普通の發句にも

道絶えて又山寺や春の雪

陽炎に鼻あたゝむる野馬哉

魂棚や灯せば外へ草のかげ

黒髪の顔へこぼるゝ砧哉

○さゝぎ　鷦鷯、みそさゞいのこと。

等、平明溫雅の調に富むものが多い。彼がこれだけの才を、正しく用ひなかつたのは誠に惜しむべき事であつた。

鶴の羽の霜干してゐる小春哉

世※に俳諧てふものの廣く行はるゝは芭蕉の後なり。故に芭蕉によらざる人なし。こゝに於て各々作る所の言の製も、芭蕉にも此の詞ありと許して、芭蕉の毒を流せる事を知らず。これら芭蕉は隱遁の人なり、よて※その末流その隱遁を好み、片歌※をもこ隱遁のものとす。これらの誤少からず。麥林※もまた世に聞ゆ。されど世の俳人芭蕉をもて祖とするが爲に、まづ芭蕉の毒をあげて、海内の謬となれる詞の本を正さむ。（中略※）—むきに芭蕉を尊み、芭蕉は天下の人の取る所、何のあやまちあらむ等いふ、痴れたる人とこれを言はむ。なほはた共に語るに足らず。後人眼なきは芭蕉の眼なきなり。後人醉へるは芭蕉の毒にあたれるなり。その故如何となれば、自ら辨へたる人ならば何ぞかゝる詞を殘さむ。これはた毒を流せるにあらずや。

○世に云々　續足の片歌二夜問答の一節で、彼の芭蕉論として見るべきものである。
○よて　よつて。
○片歌　俳諧の意。
○麥林　中川乙由。
○中略　以下芭蕉の用語に不當なものが多い事を論じて、これを芭蕉の毒する所と稱してゐる。もとより家鴉を黒く言である。

横井也有

名時敏、通稱孫右衛門。名古屋藩の重臣で祿千二百石を食んだ。家祖の感化を受けて性來文藝趣味に富み、始め野父と號して俳諧を嗜んだが、後ち野有、又也有と改む。別に紫隱里・蘿花堂・半掃庵・暮水・知雨亭等と號す。又俳文を善くし『鶉衣』の著がある。天明三年歿、年八十二。著書には『管見草』『短綆錄』『美南無寿比』等の俳諧の外小說的の雜著もある。句は『蘿葉集』に收められ、なほその後集『蟻塚集』がある。

※くさめして見失うたる雲雀かな

高く舞上つた雲雀の行方を見送つてゐると、突然嚏が出た拍子に見失つてしまつたといふのである。全く輕い滑稽味を主とした作であるが、元來かうした所が也有の特色であつた。彼の俳諧は巴雀・巴靜等に敎をうた關係からか、自然その影響を受けて伊勢風・美濃風の通俗平明な調に傾いた。かつ彼は性格的にも、徒に雅言艶詞を用ひて高雅を衒ふやうな事を厭ひ、その日常生活も極めて平民的であつた。彼は又「風雅を以て家業を妨ぐべからず」といふ態度で、畢

○鶉衣　俳文篇七四七頁以下の也有の俳文參照。
○蘿葉集　門人有支子・蘿月・文樵の編。明和三年刊。
○蟻塚集　也有の門人文樵の編で明和七年刊。
○くさめして　この句蘿葉集二篇に出づ。
○巴雀　尾張の人、武藤氏、反烏舍と號す。乙由の門。寶暦二年歿。
○巴靜　美濃の人、後ち名古屋住。太田氏、六々庵と號す。始め露川に師事し、享保以後は專ら支考について、延享元年歿、年六十四。
○風雅を以て云々　鶉衣所載『求先以辭』の中に見える

▽也有像（也有全集、俳諧文庫所載、内藤東甫筆）

○晝顔や　この句鶉衣を始め諸書に出づ。

○東甫　也有の親友内藤東甫。

竟俳諧は高尚な娯樂に過ぎず、風塵の中に餘裕ある境地を見出せば足るのであつた。隨つて曉臺一派のやうな高雅を旨とする風調にはあまり贊せず、むしろ通俗趣味の中に遊ばうとした。

たゞしその爲に甚しい卑俗に陥る事がなかつたのは、彼の清高な人格によるものであつた。而してこの句の如きは、即ち也有のさうした傾向をよく示したものである。輕いけれども卑俗には墮して居ない。輕快で上品なユーモア、それが也有の句の眞面目であらう。

也有像

晝顔やどちらの露も間に合はず

也有の作としてとにかく名高いものである。句意は說くまでもなからう。この句は彼の生前からなかなか問題にされたものらしく、當時江戸勤番中であつた東甫から也有に送つた手紙によれば、この句の評判が諸國までも傳はり、加賀の千代がこれを評して「どちらの露のめぐみより」としたなら、なほ宜からうと言つて居る旨を報じてゐる。也有はこれに對して、自分の句の

主意は、晝顔を賞翫のあまり、露の風情をも添へて見たいと思ふが、朝露はすでに消え、夕露は未だ置かずと恨んだ心であると答へてゐる。そして也有はこの句の辯難の爲に、わざ〳〵『的※なし』一冊を著してゐる程である。

今日から見れば、句の價値は多く論ずるまでもなからう。しかし當時この句が世に喧傳されたのは、要するにその通俗性にあつたので、これは又寶曆・明和の頃から漸く江戸の市井に喜ばれた雜俳・川柳の趣味でもあつた。右の晝顔の句の如きは、上五がたゞ「晝顔は」と一字變へられただけで、『武※玉川』六篇に出て居り、又後の『柳樽』にも見えて居る。『柳樽』の方は勿論剽竊であらうが、『武玉川』は時代が丁度同じ頃なので、或は也有自身の句がとられたのかも知れない。これによつても彼の句に、雜※俳的趣味の多い事が窺はれよう。

也有筆自畫賛

○的なし　寶曆十二年五月の著。

（也有筆自畫賛　名古屋　楠氏藏）
ひるがほやどちらの露も間にあはず　野有

○武玉川六篇　寶曆四年刊。

○雜俳的趣味　也有の句に雜俳趣味の多い事については、藤井紫影博士著「江戸文學研究」所載、横井也有の條參照。

○仲國　平家物語の小督による着想。小督の局を嵯峨に尋ねて行つた仲國は、小督の琴の音に耳を傾けてその在所をつきとめようとしたのだから、砧が邪魔になつたらうとの意。

ワ也有筆蹟（名古屋　石原氏藏）

長榮寺は予が世をのがれて年比すみける茅屋にいと近し　されは僕文維正汎なる者謂らく身後には此禪刹の地を請て一基の石を建て　予が名を永く此地にとゞむべしと　され共生前には忌々敷恐れあれはこつゝみて予には告ざりしを　蔭に聞知る事有て一日僕に云しかゝる事聞り　もとより予が望む事にはあらず　さりとて防ぐ心もなし　世にためし多ければ生前とても何かはくるしからむ　さる志あらは遂べしと　僕よろこびてさらは生前に此寸志をも見ゆべきは　翁が本意なりとて現住なる宝俊和尚に志を告て此地を請ふに　和尚もとより予にも舊知なる故にや　たやすくうけ引て傍なる地を免し給ひぬ　さるからしきりに此事營みて日あらずして落成しぬ　予も一たび杖を曳て我と我が名の石に向ふ　是も亦さる因縁のあれはにやあらむ

何にかも人はしのはむなき跡の
石にはかなき名はとゞむとも

明和六己丑年十二月

馬齒六十八翁蘿隱也有（花押）

（右は名古屋長榮寺の壽塚記で、文章は「俳諧夢之跡」にも出て居る。）

蜂の巣や討手に向ふ頬かぶり
小便はよその田へして早苗とり
暗がりに座頭忘れて涼かな
物まうの聲に物着る暑さかな
仲國が耳に邪魔なる砧かな
庭ばかりはやる醫者ありけふの菊
大將は負はれて出るや螢狩
公家の手に豆出來したる子の日哉
稻妻やくさめを一つしぞこなひ
芋賣は錢にしてから月見かな
提灯の旦那をそしる夜寒哉
その寒さ煮て取返せ大根引

等いくらでも例はあげる事が出來るのである。

蠅が來て蝶にはさせぬ晝寢かな

也有筆蹟

折角晝寢の夢を貪つて、莊周のやうに蝶にでもならうと思つてゐると、しきりと蠅が襲つて來て眠られぬといふのである。蠅と蝶とをかけ合せたしやれにすぎぬ。川柳子は

蠅が來て晝寢の顔を皺にする

と言つて居る。也有は蝶をもち出して、『莊子』を俳諧化した所が味噌であらう。

二三枚繪馬見て晴るゝ時雨哉

俄の時雨に駈込んだ繪馬堂、二三枚繪馬を眺めて居る中にもう晴れたといふのである。平易通俗、萬人向のする句であらう。

山は時雨大根引くべく野はなりぬ

山には時雨が降り出し、野は大根を引く時節になつたといふだけであるが、天象の自然に人事を配して、初冬の風趣をよく現はして居る。也有としてはむしろ異數とすべき作であらう。とはいへ、「大根引くべく野はなりぬ」といふ言ひ方は、さすがに也有らしい。

○蠅が來て　この句蘿葉集三篇に出づ。
○蝶にはさせぬ　莊周が夢に蝶になつたといふ故事による。莊子。
○二三枚　この句蘿葉集二篇に出づ。
○山は時雨　この句蘿葉集二篇に出づ。

從來也有は太祇と共に、天明新調に至る先驅者として屢〻說かれてゐるが、その作風主張から言へば、決してさうした史的地位を代表すべき人物ではない。彼はむしろ曉臺等の革新運動に對しては、消極的立場にあつたと言はねばならぬ。たゞ彼の輕妙無比な俳文は、全く獨自の特色を有し、その點に於ては永く俳諧史上に存在の意義を失はないであらう。

なま心得なる人の、この句に俳言なし、連歌の句なりと難ずる者まゝ有り。これ正風の本體を知らぬ故なり。昔の俳諧はひとへに俳言を以て連歌と分ちたれども、正風の俳諧は連歌にかゝはる事かつてなし。只凡俗平話を以て俳諧とす。俗談とてひとへに、猫の杓子木のとばかりいふ物にてはなし。たとへば、けふは寒き空哉といふは、常の俗語にして又歌によむとてもこの外はなし。しかれば俳諧の句にして連歌にも用ひらるゝ句は有るべし。連歌になりて俳諧にならぬといふ句作あらばいましむべし。それは平話にあらざる、例へばきゞすの、くだかけの類なり。只雉子、にはとりこそ平話なれ。このさかひよく〳〵心得べし。

○なま心得なる　也有の俳諧隨筆たる管見草（寶暦七年稿）の一節である。彼の俗談平話についての見解が窺はれる。

千代女

加賀松任の人、少時から俳諧を嗜み、夙く支考や露川にその才を認められた。特に就いて學んだ師はなかつたが、美濃派・伊勢派の人々の影響を受ける所が最も多かつた。寶曆四年剃髮して素園と名を改め、生涯を書と俳とに遊んだ。安永四年歿、年七十三。句集に『千代尼句集』※竝にその續篇『松の聲』※がある。

※澁かろか知らねど柿の初ちぎり

これは千代女が結婚した時の作として知られて居る。しかしこの句は『千代尼句集』『松の聲』等を始め、當時の俳書には全く傳へられてない。一體俳人として、その名聲だけから言へば、千代女は恐らく芭蕉と比肩すべき地位に居るであらう。それだけ彼女には種々の傳說も附會されて居る。今日一般に知られて居る彼女の傳の如きは、實は半ば好事者の附會によるものと言つても宜いくらゐである。通說によれば、千代女は享保五年、金澤の人足輕福岡彌八に嫁ぎ、同六年一子彌市を生んだが、同十一年夫に死別し、翌年彌市も亦夭折したので鄕里松任に

○千代尼句集　無外庵既白編。寶曆十四年刊。
○松の聲　同じく既白編。明和八年刊。「續千代尼句集」ともいふ。
○澁かろか　この句「續近世畸人傳」（寛政十年刊）千代女の條に「後[illegible]ごりせし時」としてあげて居る。

歸つたといふ。しかしこれは全く後世の說にすぎず、千代女在世當時の文獻に徴すると、却つて彼女が未婚で終つたと見るべき證が多い。隨つてかうした句が存在する筈もないわけである。但しこの未婚說はなほ斷定的のものでなく、又遊俳の句も千代女の作に非ずといふ反證もないから、まづ宜いとして、彼女が夫を失つた時の作として、よい名高い

起きて見つ寢て見つ蚊屋の廣さ哉

千代尼筆自書贊

の吟は、實は彼女が生れるより十年も前に出た『其便』といふ俳書に、遊女浮橋の吟として入集して居るのである。遊女の吟であつてこそこの句がふさはしい。それを何人かが彼女に附會したものだから、川柳子が「お千代さん蚊帳が廣けりや」などと、いかゞはしいふざけを言つたりするやうになつたのである。

この外千代女が初めて美濃の廬元坊に見え、時鳥の題を課されて成らず、遂に夜が明けてし

▽千代尼筆自書贊（加賀松任吉田氏藏）

かゝるつたなき身の　世をうし
とおもふにはあらでふる言葉
のはしまことに晝夜をながるゝ
水の心ぼそくそのまゝに
髪を結ふ手の隙あけてこたつかな
千代尼素園
七十一歳

○其便　泥足撰。元祿七年刊。その下卷にこの句が「物思ふ頃」といふ前書がついて出てゐる。

○廬元坊　仙石氏、美濃の人。支考の門。獅子庵二世を嗣ぎ美濃派の宣傳に努めた。延享四年歿、年五十六。

まつたので、

時鳥々々とて明けにけり

と詠じて師を驚かしたといふ逸話もよく知られて居るが、これは前に述べた如く調和の句を誤り傳へたもので、それに勝手な話を附け加へたにすぎない。又子を失つた時の作だといふ

蜻蛉釣り今日はどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さ哉

や、人からその肥滿して居るのを嘲笑されて答へたといふ

一と抱へあれど柳は柳哉

の如きも、實は何等彼女の作とすべき證はないのである。もしそれが確に彼女の作として世に喧傳されたものならば、「千代尼句集」や「松の聲」に採錄されぬ筈はない。思ふにこれらも亦後世の好事家が故らに揑造したか、或は他人の句が偶然混同されたものであらう。

かうして見ると、千代女の句として名高いものは、殆ど抹殺されてしまふ事になる。隨つてこれらの句で說明されてゐた彼女の傳も、亦甚だ怪しいものとなつて來る。元來彼女の名は、その實に比してあまりに高すぎたのである。たゞ彼女が女性として句を善くするといふ事が異數とされ、それが偶〻世の人氣を呼ぶに至つたのであらう。しかし眞摯に俳諧を硏究する者に

○時鳥々々とて　三一八頁參照。

○朝顔に　この句千代尼句集に出づ。

（千代尼筆蹟　松任　某氏藏）

朝がほやつるべとられてもらひ水　　千代尼

右、繪は岸駒の師たる四條派の筆。なほ句は千代尼句集には上五「朝がほに」とある。）

とつて、史實は出來るだけ正確を期し、批判はあくまで嚴正を保たねばならぬ。千代女の如きは、これを公平な史眼に照らして評すれば、もとより第三流以下の俳人とすべきである。その所以は更に次に說かう。

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

千代尼筆蹟

千代女の句中最も人口に膾炙されたもので、英・獨・佛語等に飜譯されて、海外までも聞えて居る。かつこれは彼女の作として、極めて確實なものであるばかりでなく、又彼女の面目を最もよく代表するものでもある。

句意は解するまでもなからうが、朝井戸端に出て水を汲まうとすると、釣瓶に朝顔の蔓が巻きついて居る。それをもぎとるのもあまりに殺風景なので、つい近所で貰ひ水をして來たといふのである。いかにもその風雅な思ひやりが優しく感ぜられる。利欲の外に他念がないと言

つたやうな俗人にすら、この風流心は成程と解せられるであらう。一體千代女の作が世間的に名聲を博した所以は、この何人にも風雅らしさが解せられるといふ點にあつた。しかしそれは眞に自然に同化し、深く對象の本質を捉へた所から發した風雅ではない。言はば風雅の何たるかを理智的に說明したやうな淺い所にとゞまつて居る。隨つてわざとらしい臭味すら感ぜられるのである。

此の如き句も、世間的にはある點まで許してよからう。少くとも俗念に凝り固つたやうな人に、一服の清涼劑となるだけの功德はある。しかしこれが藝術的に高く評價さるべき性質のものでない事は、こゝに更めて論ずるまでもなからう。

※月の夜や石に出て鳴くきり〴〵す

千代尼塚

▽千代尼塚（石川縣松任町聖興寺境內）

○月の夜や　この句千代尼句集に出づ。なほこの句は此柱（寛保三年刊）・月の夕（寛延四年刊）から鮭・金花傳等に採錄され、當時から汎く知られてゐた。此柱には上五が「月の夜は」とある。後ち改めたものであらう。

月が冴え渡つて居る夜、庭石などの上で鳴いて居るきり〴〵すの聲を憐れんだのである。冷たい石の光、切々と喞ぶ虫の音、秋夜の清婉な情が現はれて居る。この句の如きは、どこにも例のわざとらしさがなく、十分佳作として推賞するに足るものである。

この句は千代女の中年期の作であるが、晩年の作にはなほ眞に靜かな落着いた心で自然を眺めたものがある。あれだけの才をもつて、又一生靜かな清い生活を續けた彼女であるから、今少しよい俳壇的環境に惠まれ、適當の指導者を得てゐたならばと、遺憾に思はれるのである。

※だゝ廣い蚊屋に風雅な後家一人
蚊屋の廣さは五七五の仕立榮え
千代が蚊屋うらやましがる子澤山
蚊屋の中千代は小首を傾ける
後家の名は蚊屋より廣い發句也
朝顏の名句貰うた水で書き

○だゝ廣い　以下千代の句に關する川柳である。

炭太祇

江戸の人。初め雲津水國の門に入つて水語と號し、後ち慶紀逸に屬した。太祇と更めたのは寛延の頃で、なほ宮商洞・三亭等の別號がある。寶暦初年京都に上つて大德寺中の僧となり、道源と稱したが、間もなく島原に不夜庵を結んで、生涯俳諧に專念した。明和八年歿、年六十三。『都のつと』『鬼貫句選』『春夏』等の撰がある。その句は『太祇句選』『同後篇』に收める。※

欺いて行きぬけ寺やおぼろ月

「門内通拔無用」と書いた札が立つて居る。月に浮かれて散歩に出た横着な奴が、「一寸和尚さんに用がありますので」とか何とか門番をうまく欺して、靜かな寺の境内を思ふ存分ぶらついた上、こつそり裏口から拔けてしまふのである。

太祇は元來江戸座の俳人の間に育つて、かの『武玉川』式の人事趣味に養はれて來た。隨つて彼の句には實社會の出來事や、人情の複雜味などを多く題材とする傾向があつた。彼は上京

○太祇句選　太祇の友人嘯山と雅因の編。明和九年刊。

○同後篇　太祇の後らその不夜庵を世いだ几董の編。安永六年刊。

○欺いて　以下の句特に出典を示さないものは、すべて太祇句選・同後篇による。

○武玉川　太祇の師紀逸の選んだ高點の附句だけを集めたもの。寛延三年にその初篇が刊行された。

（下）太祇像（五[illegible]撰、太祇廿五回忌追善集「その秋」所載）

後暫く僧房の生活をしたらしいが、間もなく去つて島原に不夜庵を結び、妓樓の主人たちの後援によつて生活の資を得ながら、只管俳諧に精進した。その間蕪村一派の人々と風交を重ねる事が最も多かつたのであるが、その俳風は決して同一ではなかつた。彼はやはり江戸座の人事的趣味に立脚して、しかもその間江戸座の如き卑俗に墮せず、かつ益〻その複雜味を發揮する事が出來た。

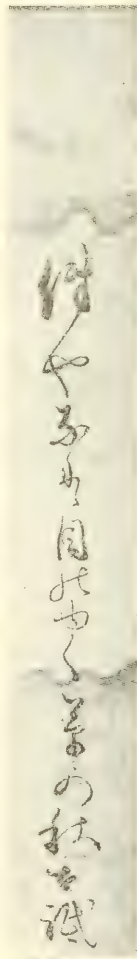
この朧月の句の如き、必しも彼の代表作ではないが、さうした彼の特色はこゝにもよく窺ふ事が出來る。上の五・七によつてやゝ複雜な事件が描寫され、それが朧月といふ景物によつて美化されてゐる。門番を欺いた男は狡猾なのではない。些か茶目氣のある氣輕い男だ。そして月に嘯くだけの風流心もある。朧月を背景としてゐる事によつて、一句に風流飄逸な趣が感ぜられる。

太祇像

東風吹くと語りもぞ行く主と從者

「太祇筆蹟（大津　村田氏藏）」
僞やなに、目のゆく萩の秋　太祇

太祇筆蹟

「暖になつた筈ぢや。東風が吹くぢやないか」と語る主人。「さやうでございます。全く暖になりました事で」と答へる一僕。主從二人の對話によつて、その中に春風駘蕩たる趣を寫し出さうとしたのである。しかし現代人にはその趣がすぐにぴたりと感ぜられないかも知れない。それは江戸時代の主從關係について、今少し理解をもつて居なければならぬからである。當時の封建時代にあつては、わづか一に僕を召連れた主人でも、從者との間には嚴然たる階級意識が存して居た。僕は滅多に心易く主人などと話せるものではないのである。その主從が親しく語り合つて行く。それだけで柔らかに和んだ氣分が醸し出されるのである。自然と人事と、まさに渾然たる融和を示してゐる。

しかしこの句の特色は、何と言つても會話をそのまゝに取入れた所にある。作者の苦心した點もそこにあつたらう。かうした手法は、太祇の好んで用ひた所で、これによつて複雜な情景を巧に描いて居る場合が少くない。例へば

な折りそと折りてくれけり園の梅

十三夜月は見るやと隣から

寢よといふ寢覺の夫や小夜砧

等の類である。これは古く鬼貫の句などにも屡ゝ見られる手法だが、太祇に至つてその運用の妙を極めて居ると言つてよからう。

山路來て向ふ城下や凧の數

嶮しい山路を辿つて來て、やつと峠に登りついた。向ふを見ると、城下の町がすぐ眼の下に現はれて居る。白堊のお城、櫛比した人家、ずつと竝んだ甍の上には、高く低く凧が揚つて居る。ほつと一息して、さてゆつたりと眺めやつた趣が、言外に味はれる。

表現は簡單なやうであるが、內容はかなり複雜な情景をもつて居る。山路の勞れ、峠に辿りついた安心、城下を見下した愉快さ、その城下の人家のさま、入亂れた凧の數。それらをかうして一句に纏め上げ、しかも渾然たる統一を保つてゐるのは、全く太祇のすぐれた手腕によるのである。

ふり向けば灯とぼす關や夕霞

今しがた通つて來た關所である。ふと振向くと、夕霞の中にもうぼんやり灯がともつて居る。春の夕の淡い旅愁が感ぜられる。

太祇の作は人事の句ばかりではない。かうした旅路の間から得て來たやうな作も少くない。しかもその中にも、やはり自然そのものよりも、暫し語り合つた道づれ、一夜を過した旅の宿等に多く心を惹かれた。だからこの句にしても、又前の「山路來て」の句にしても、やつぱり人をなつかしんだ所がある。

藤いけてしをれしまゝや旅の宿

矢走乘る嫁よ娘よ春の風

旅人や夜寒問合ふねぶた聲

等、旅の句でもすべて人を離れてゐない。所詮彼は人間に最も親しい詩人であつたのだ。

行く女袷着なすや憎きまで

▽太祇筆蹟（神戸 川西氏蔵）
山川はそれ我師なりと旅たつて書の題をしれるありその中に句あつて萬景を役し百意をおかすこゝにこの坊このものこのもしき筑波ね誰まつしまのこゝろにくゝてさいでたつむまのはなむけに送りける
たゞは居る百日紅や三百里　太祇
（右は友人紙隔の旅行に際して送つた餞別の句。）

太祇筆蹟

『太祇句選』に蕪村と嘯山とが序した言葉を見ると、太祇が一句を得る爲に、いかに拮据經營苦心慘憺したかが窺はれる。兩者の言ふ所によれば、彼は行住坐臥燕飲病床といへども句案を怠らず、佛を拜むにも神にぬかづくにも發句するといふ有樣であつた。そして一の題を得ると、十餘章を竝べて推敲に推敲を重ね、連句の席上では沈吟すること人に倍したといふ。又几董もその著『新雜談集』の中に、

題ひとつを得て、趣を百に分ちて句を案ずる時は、百樣の姿情を得るなり。さほど勞煩をなさずしては、さうなき一句の主になりがたしと、太祇は常々申されしか。

と語つて居る。かの芭蕉が「句若し成らずんば舌頭に千轉せよ」と教へた言葉と共に、文藝の士の以て紳に銘すべき言であらう。それほど苦勞した彼であつた。

○鉾　京都八坂神社の祭禮祇園會に曳出す鉾山車。長刀鉾・月鉾・何々鉾等種類が多く、町々によつてその山車が一定して居た。

この事實を知つてこの句に對すれば、成程と首肯かれるであらう。更衣して輕やかな袷になつた女の姿、その阿娜めいた着なしが、誠に心憎いまですつきりしてゐる。帶の締際、裾のさばきまでが見るやうである。かうした複雜な情趣が、巧みに言ひおほせられて居るのも、實は前に述べたやうな苦心の結果であつたのである。

山吹や葉に花に葉に花に葉に

側に置いて着ぬことわりや夏羽織

下り立つと形定まる田植かな

掃きけるが遂には掃かず落葉哉

かういふ言廻しには、彼の苦心のあとが十分窺はれるではないか。

鉾處々に夕風そよぐ囃子かな

祇園會の所謂宵山の光景である。四條あたりの町々には、とりどりの意匠を凝らした鉾が美しく飾り立てられてゐる。その鉾の中からは賑やかな祇園囃子の音が聞えて來る。作者は鴨の夕風が涼しくそよぐ頃、ぶらぶら歩きながら鉾を見て廻つたのであらう。宵山の實況を知つて

居る者には、特にこの句のうまさが感ぜられるにちがひない。

橋落ちて人岸にあり夏の月

太祇の作としてはあまり苦心のあとのないやうな句であるが、やはりこゝにも複雑な情景がある事を見遁してはならぬ。「橋落ちて」といふのは、今橋が落ちたのではない。それは「人岸にあり」とつゞいた感じからさう解される。卽ち「人岸にあり」と言ふのは、橋が落ちた刹那のあわて騒いださまではない。もう十分の餘裕をもつて居る人である。豪雨のため俄に出水して橋が流された。そのあと人々が見物に來て居るのである。もう雨はすつかり晴れて、空には洗ひ出されたやうな月が涼しく照つて居る。河水はまだ濁流の勢が衰へず、岸を浸して滔々と流れて居る。その流に月の光がきら／＼と耀く。作者はそれを遠くから眺めて居るのである。岸に立つた人々が、月下に黒く動いてゐるさまが鮮かに見えるやうだ。

角出して這はで止みけり蝸牛

全く何でもない一寸した出來事である。大がいの人はそれが句になる光景とは思ふまい。しかし太祇にとつては、彼の耳目に觸れるもの悉くとつて詩材とすべきものであつた。ほんの假初の感激でも、日常茶飯の出來事でも、彼はこれを俳諧化しようと努めたのである。彼にとつては、全く生活卽俳諧であつた。

この句は太祇のさうした生活態度から生れた作である。ふと見つけた蝸牛の小さな動作が、彼をすぐに句作の三昧境へ導いて行つた。そして童のやうな無心さでそのまゝを句にしてゐる。しかもその間表現に非常な苦心が拂はれてゐる事を、また見遁してはならない。誠に太祇の句集を通覽すると、この種の一見取るに足りない小事件が、好んで題目とされて居る事に氣づくであらう。例へば

ふらこゝ※の會釋こぼるゝや高みより

帷子のそこら縮みて晝寢かな

たばふ※ともなくて數ある扇かな

うちしめ蚊のひしとこたへぬ掌

今日の日もはや夜着かける火燵哉

頭巾おく袂や老のひが覺え※

○ふらこゝ　鞦韆、ぶらんこ。

○たばふ　貯ふ。惜み貯へること。

○ひが覺え　覺えちがひ。右の袂に入れたのをまちがつて左の袂を探つてゐるやうな場合を句にしたもの。

等、いかに彼が零細な事までを句材にしてゐるか、そしていかにそれを巧に表現してゐるかに驚くであらう。

脱ぎ捨てて相撲になりぬ草の上

これはもとより本格的の相撲ではない。村の若者たちが、晝休みか何かで草原の上に寝そべつて居る。誰かが「オイ、相撲をとらうぢやないか」と言出すと、すぐ應じた一人が立上つて、「よし、俺と一番やらう」と着物を脱ぎ捨てる。相手も帯を解いて裸になると、そのまゝ二人は取組んでしまつた。どつちが勝つたのか、ワッと喝采する聲。又誰かが立上つて着物を脱いだ。

さういふ面白半分の相撲である。それが「相撲になりぬ」といふ中七字で、いかにも巧に描き出されて居る。なほ太祇の相撲の句には

着物の失せてわめくや辻相撲

勝逃の旅人あやしや辻相撲

等がある。後の句は、蕪村の

飛入の力者あやしき角力かな

と類句で、共に小說的な光景が想像されるが、それでも勝逃の旅人より飛入の力者の方が、より怪奇的な浪曼趣味に勝つて居る。そこにやはり兩者の特色が見られるやうである。

初戀や燈籠によする顏と顏

戀の俳句として、恐らく名作の一に指折らるべきものであらう。由來和歌に戀の秀吟が多い事は言ふまでもないが、俳句では戀を詠じたものが極めて少い。勿論連句の場合には、月。花の句と共に、戀の句が重要なものとされ、芭蕉の附句などにもすぐれた作が少くない。然る發句となると、自然の景物や年中の行事などが專ら主題とされる爲、戀句の秀逸に乏しい結果となつてゐるのである。人事趣味の句に得意な太祇が、その戀の句に果してどれだけの手腕を發揮し得たであらうか、興味多い問題である。而してその問題は、この一句だけでも、美事に解決されて居よう。

近々と顏を寄せたうら若い男女のさゝやき、まだ戀の伊呂波を書きそめたばかりのあどない物語であらう。どちらも恥しげにポッと顏を染めて居る。それが盆燈籠の灯影を背景として、

美しくしんみりと浮き出て居る。

鯊釣や鼻おごめきて百とよむ

鯊釣の漁獲を誇つて居るさまである。「十尾、二十尾、三十尾、……百」と數へ上げて、得得として居るさまが句面に躍動して居る。同じ釣仲間と獲物の數を競つて居るのか、家に歸りついて家人に示して居るのか。その場合はどうでも讀者の想像に任せてよい。とにかく釣人の得意滿面たるさまを一句の眼目として、中七以下の措辭がいかに淸新味にみち、かつ效果的であるかを味はへば足るであらう。

○鯊釣や　この句は蕉窓に出づ。
○鼻おごめきて　鼻のあたりを動かして得意なさま。
○よむ　數へる。

塵塚に朝顔咲きぬ暮の秋

零れた種子から生えたのであらう、塵塚のあたりに這ひまつはつて居た朝顏が、もう秋も暮れようとする頃、小さな花を咲かせた。見る人もなく捨てられたはかな氣な花のさまと、行く秋の侘しい情とが句の中に融け合つて居る。

○犬にうつ　この句の上五、新五子稿に「犬を」となつて居るのは誤である。

犬にうつ石のさてなし冬の月

寒月が物凄い程に冴えて居る。夜更けの町をひとり歩いて居ると、どこからか一疋の犬が飛出して來て吠えついた。叱つても逃げない。いまいましく思つて石を投げ付けてやらうと、あたりを見廻したが、さて手頃の石がない。犬は益々吠え立てる。「さて」の一語が、瞬間の情景を寫して餘蘊なからしめて居る。この一着によつて句全體が生きたのである。いつもながら太祇の表現の巧さに感ぜさせられる。

寒月や我ひとり行く橋の音

寒夜獨行の趣である。下駄に踏み鳴らされる橋板の音のみが、徒に高く響き渡つて、それが一入寒く感ぜられる。太祇としては平易な作で、しかもよく實感を得て居る。

盗人に鐘つく寺や冬木立

いつもは平和な村である。ある夜突然小高い山手の寺から撞き出した早鐘の聲。夢を破られた村人は、すは火事か盜賊かと戸外に馳け出した。聞けば何屋の何左衞門さんの所へ盜賊が人つたげな。それ逃がすなと言つたさわぎである。寺を取卷く冬木立の荒寥たる姿を背景として、さうした出來事が巧に描き出されて居る。これなどはまさに太祇獨得の手腕を振ふべき好場面であらう。

美しき日和になりぬ雪の上

空はすつかり霽れ上つて、雪の上にキラキラと日光が耀く。見てゐると眩しいばかりである。物の影は紫色を帶び、すべてが美しい光の中に包まれてゐるやうな氣がする。「美しき日和となりぬ」と何の造作もなく言下して居るやうだが、雪後快晴のかゞやかしさを表はすべき言葉は、眞にこの外には求められ

太祇墓

▽太祇墓

（京都市綾小路通大宮西入南側光林寺境内）

ないだらう。そして下五に、「雪の上」と受けた措辭には寸分の隙も見出されない。

春風やとくとは見せぬ水鏡　（寛保元年―吾妻舞）
何里程聞えるものぞ雪おろし　（同　上）
春雨の何に急ぐぞ西の空　（寛保二年―柯木追善集）
※涅槃會や心よい日の北典司　（同　年―續の花）
鮓つけて蓼に水打つ一夜かな　（同　年―田植唄）
※水無月のいよ〳〵暑き涙かな　（同　年―西の奥）
引汐に雪のひろがる浮洲哉　（同　年―小ゆき）
雪打や先もうけ取る袖の上　（寛保三年―置土産）

えりどり十九文

さま〳〵な顔で泣くなり涅槃像　（延享二年―寶のつち）
行く人があつて生るゝ佛かな　（同　年―默※止）
起きかへる身延は寒し十三夜　（同　年―誹諧職人盡）
武藏野に鍬入るゝ日や桃の花　（延享五年―誹諧谷問抄）
百姓の欲に植ゑぬや家ざくら　（年代不詳―さくら集）

○春風や　以下太祇が水語と號した初期時代の句を、今知られただけ年代順に掲げた。
○涅槃會や　この句[illegible]（寛延二年刊）にも出づ。
○水無月の　蕪村の師早野巴人が歿した時の追悼句。
○默止　三田白峯の三回忌追善集。

與謝蕪村

本姓谷口氏、名寅、字春星、長庚・紫狐庵・夜半亭等の號がある。攝津東成郡毛馬村の人、夙く江戸に下つて早野巴人に學び宰鳥と號した。巴人歿後常總地方に漂浪すること約十年、寶暦元年頃西に歸つて京都に住んだが、幾許もなくして又丹後與謝地方に遊び、寶暦七年の秋再び京都の人となつた。與謝氏を稱したのはこの歸洛後の事である。明和三年以後三菓社を結んで俳諧に精進し、同七年師巴人の後を襲いで夜半亭二世となつた。天明三年十二月二十五日歿、年六十八。『蕪村七部集』を始め『新花摘』『夜半樂』『玉藻集』『芭蕉附合集』等の撰著がある。又句は門人几董の編した※『蕪村句集』に代表作が選ばれて居る。

公達に狐化けたり宵※の春

狐が眉目清秀な貴公子に化けて居る。それがなまめかしい春の宵なのだ。上臈の局などに通ふのではあるまいか。さうした小說めいた連想までが湧いて來る。

○蕪村句集　天明四年刊。その後明治以後[illegible]遺稿[illegible]、新[illegible]句集[illegible]編、蕪村句集後編(大野洒竹編)、蕪村全集(潁原退藏編)、新[illegible]蕪村句集([illegible]編)等が出て、遺漏を收むる事も殆ど完きに近くなつた。

○公達に　この句蕪村句集に[illegible]

○宵の春　春の宵と同じであるが、かく言へば春といふ感じを特に强める のである。

蕪村の句の一特色として、小說的傳奇的な色彩に富む事は誰しも認める所である。たゞしそれは必しも蕪村だけでなく、曉臺の作などにも同樣な傾向は見られ、寧ろ天明俳諧の一特色とすべきものである。元來天明の俳諧は、芭蕉の古へに復るといふ精神から出發して革新の實をあげたので、蕪村・曉臺・麥水・樗良・闌更・白雄・蓼太等各々主張は異つたにもかゝはらず、すべて蕉翁の光を尊ぶ點に於ては同一であつた。隨つてこれら中興諸家の俳諧は、また芭蕉のさび・しをりの精神を受けついだものでなければならぬ。しかしその俳風に至つては、元祿と天明と全く同一のものではない。蕪村や曉臺の作品は芭蕉のそれに比して著しく多角的であり、特に小說的・人事的・古典的な色彩に富んで居る。以下あげる所によつて、その特色は益々明にされて行くであらう。

蕪村像

指貫を足でぬぐ夜や朧月

一 蕪村像（月溪筆、京都寺村氏藏）

○指貫を　この句蕪村句集に出づ。

○指貫　昔直衣・水干・狩衣等を着用した際に穿く袴で、その裾を紐で括るやうになつてゐる。

これは前の句のやうな幻想的な所はないが、同じく春の夜のなまめいた感じを現はしたのである。恐らく若い男であらう。闇の中などで指貫を脱いでゐる。それが横になつたまゝ手も出さないで、足先でそろ／＼動かしながら脱いで居るのである。その物憂げなだらしないさまと、朧に霞んだ春の月との調和が、一のなまめいた感じを形るのである。

月は必しもその場に照つて居なくても宜い。指貫をぬぐ男は几帳の奥深く、女などにより添つて居るのかも知れない。勿論男一人だけでもよいのであるが、この句全體の感じが、さうした女のけはひさへも連想させるのである。――たゞ朧月はさうした光景全部を柔かに包む背景として、點出されて居るのである。

瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨

春雨が終日降り暮して、禁中もしめつぽくひそまつてゐる夕方、瀧口のあたりで「早く燈をともせ」などと呼んでゐる。その武士の太い聲があたりの靜けさを破つて、一層雨の夕の淋しさを増すのである。

これは勿論蕪村の實經驗ではない。さうした古典的な情景を想ひやつて作つた句である。蕪

○瀧口に　この句蕪村句集に出づ。

○瀧口　清涼殿の東北に當り、御溝水（ミカハミヅ）の流れ落ちる場所、こゝに禁中を警衛する武士が詰めて居り、これを瀧口の武士と言つた。

村はかつて門人召波から俳諧を問はれた時、「俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尚ぶ」と答へ、更に離俗の法について畫家に謂ふ所の去俗論を引いて懇に示した。それは要するに畫も詩も俳諧も、すべてその理想とする所は俗を離るゝに在り、而して俗を離るゝには何よりも多く讀書すべしと言ふのであつた。多く書を讀めば書卷の氣が上升して、市俗の氣が下降するのである。

この離俗の工夫は、畢竟蕪村が彼の藝術を純化せしむべき爲の修業で、芭蕉が所謂まことをせめて不斷の精進を怠らなかつたのと揆を一にする。句とすべき對象に囚はれたすべての俗情から脱却して、そこに至純な藝術的感激を見出すべく、蕪村はまづ讀書によつて美に對する高い鑑識眼を養ひ、所謂美的情操の陶冶をはからうとしたのである。これを芭蕉の工夫に對して見ると、芭蕉は直ちに對象の中に彼自身を沒入して句と身と一枚にならうとし、蕪村はかうして豫め洗煉された美意識の統制によつて對象を純化しようとして居る。隨つて芭蕉の俳諧は即ち芭蕉自身の姿といふべきであるが、蕪村の藝術には必しも蕪村自身の生活は見られない。この句の如きも、彼が古典的に得て來た美をこゝに創造したので、實生活とは全く交渉がないのである。要するに蕪村は芭蕉に比してより藝術至上主義者であつたとも言はれる。

○門人召波から云々　この事召波の句集「春泥句集」の序に見える。

○畫家に謂ふ云々　「芥子園畫傳」の序文。

○句と身と云々　この事土芳の三册子に芭蕉の敎へとして見える。

○高麗船の　この句俳諧新選・果報冠者等に出づ。

○指南車を　この句蕪村句集に出づ。

○指南車　黄帝が蚩尤「シイウ」を討つた時、蚩尤は大霧を起して四方を迷はした。よつて車上に木人があり、その手が常に南を指すやうに製した車を作つて方角を定めたといふ故事がある。その車をいふ。

○易水に　この句蕪村句集に出づ。

○易水　荊軻の故事。

高麗船のよらで過ぎ行く霞かな

指南車を胡地に引去る霞かな

いづれも空想から生れた句である。一は奈良朝頃の九州あたりの海岸、一は支那の太古に於ける原始生活への想像に基いて居る。前者は檣や舳に美しい飾をした高麗船が沖合遙に見える。博多の海岸あたりに群れた人々が、この港に立寄るのであらうかと思つて眺めて居ると、いつか霞の中に遠く消えて行つてしまつたといふのである。後者も遠く胡北の地へ霞んで行く指南車のあとを見送つて居るさまである。

かうした境地は所謂ロマンスの世界に外ならない。讀書によつて俗を離れようとした蕪村が、此の如き古典趣味を愛し、その間に空想的な美を求めたのは當然の歸趨であつた。しかも蕪村はこの古典的情趣の中に、常に新鮮な現實味をも失はなかつた。高麗船の句の如きは、或は事實作者の經驗に基く所があるかも知れないが、指南車や

易水にねぶか流るゝ寒さ哉

○春の海　この句俳諧古選を始め几董の句日記・井華集・蕪村句集・發句小鑑等に出で、又俳諧金花傳には「須磨の浦にて」と前書がある。

○俳諧金花傳　越中の人康工の撰著。安永二年刊。

等の類は、もとより純然たる空想であるが、さうしたロマンチックな世界を背景として、廣漠たる平野に搖曳する霞、寒さうに流れて行く葱の色、それらが強い現實味をもつて眼前に迫つて來るであらう。それは讀書によつて養はれた蕪村の美意識が、現實の物象を完全に統制し得たからで、卽ち指南車や易水は、現實の霞や葱から全然遊離したものでなく、逆に現實の中に入り來つてこれを詩化し美化したのである。

春の海終日のたり〳〵哉

寶曆年間の作で、蕪村の句としてはその大成以前に屬すべきものであるが、しかも最も人口に膾炙されて居る。蓋し何人にも分り易いのみならず、大成以後の作に比して優るとも劣らないからである。「俳諧金花傳」によれば須磨の浦での吟だといふ。この長閑な趣は成程須磨・明石あたりの景かとうなづかれる。一句の中心は、言ふまでもなく「のたり〳〵」といふゆるやかな音調にある。それで大きくゆつたりと浪のうねるさまが、眼前に髣髴されるのだ。誠に巧な言葉の用ひ方である。

○畑うちや　この句蕪村句集に出づ。
○法三章　漢の高祖が咸陽に入るや秦の苛政を改め、父老と約するに僅に法三章を以てした。即ち人を殺し、傷つけ、又は盗んだ者だけを罪にして、他はすべて秦の法を除いたといふ故事。
○白梅や　この句蕪村句集に出づ。
○鴻臚館　[illegible]外國の賓客を接待する爲に設けられた館舎。京都・難波・太宰府等にあつた。

畑うちや法三章の札の下

昨日まで秦の苛政に苦しめられた農民たるが、今日は高祖の善政に浴して泰平を謳歌して居る。これまた空想の句であるが、法三章を筆太に記した高札の下で、悠々と畑を打つて居る關中逸民のさまが、一幅の畫圖を見るが如く浮んで來る。

白梅や墨芳しき鴻臚館

昔外賓を接待する場合には、多く詩賦の應酬などをやつたものである。この句もさういふ光景として解される。和の學士、唐の秀才、卓を距てて對坐して居る。その卓上には白紙が擴げられ、一人は起つてまさに毫を揮はうとして居るのだ。庭上には白梅が香つて居る。すべてが清爽高潔な感じである。言はゞ支那の文人畫風な趣である。蕪村や曉臺は、かうした高雅な趣味によつて俳諧の純化をはからうとしたのであるが、特に蕪村は彼の南畫から來た好みが、句の上にも屢ゝ見られる。

「白梅」は特にこゝではハクバイと音讀したい。「芳しき」もカウバシキよりカンバシキとよんだ方が、一句全體の感じと調和するやうである。

梅遠近南すべく北すべく

野外に出て見ると、もう梅があつちにもこつちにも咲いて居る。南にしようと北にしようと、いづれへでも心の向いたまゝに杖を曳かうといふのである。

この句の面白みは主として表現にある。子規も調子の大變異つた例としてあげて居るが、「南すべく北すべく」といふ漢語調が、一種の氣のきいた清新味を齎して居るのだ。漢語調はすでに天和・貞享の頃、素堂や芭蕉が好んで用ひた所であるが、蕪村に至つては一層洗煉され、一句の感じと巧に調和されて居る。「遠近」はヲチコチと訓讀する說と、エンキンと音讀する說とがある。下の漢語調に續く點から言へば音讀が宜ささうであるが、言葉としてはどうも熟しない。やはりヲチコチとよむべきであらう。さうよんでもリズムの清新味に於ては同一である。「南」はミンナミとよみたい。

○梅遠近　この句蕪村句集に出づ。又蕪村の手紙には「野徑梅」と前書があり、安永六年の作と推定される。

○菜の花や　この句續明烏・佛の座等に出で、なほ蕪村句集には「春景」と前書がある。

▽蕪村筆蹟（大津　[illegible]住氏藏）
菜の花や月は東に日は西に　蕪村

○東の野に云々　この歌萬葉集卷一に出づ。

菜の花や月は東に日は西に

見渡す限り菜の花畑が續いた平野である。長い春の一日も暮れて、日は漸く西に傾いた。と、東の空にはもう淡い夕月の光がかゞやき初めて居る。一面に雌黃を塗つたやうな菜の花の色、その上に匂やかに漂つてゐる夕の氣、霞の中に赤く彩られて落ち行く日、東の地平近く浮き出た黃金色の圓かな月影。それらが大きなながめの中に融け合つて、縹渺たる美しさを湛へて居る。この句に對してすぐに思ひ出されるのは、人丸の「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」の歌である。これは曉の景色で、正に蕪村の句と相反するのではあるが、共に平野に立つて眺めた大觀たる事は同一である。而して、これを人丸は三十一文字に歌ひ、蕪村は僅に十七文字に攝して居る。しかもその色彩に富み、情緒の豐かな事は、萬葉の歌聖も遠く天明の俳傑に及ばないと評してよからう。

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

蕪村筆蹟

行く春や重たき琵琶の抱心

九十の春光も夢の如く過ぎ去つてしまつた。惜春の一曲でも奏でようと膝に載せた琵琶が、何となく重たく感ぜられる。その重たい抱心に暮春の感傷が象徴されて居るのである。

一句の解は右でほゞ盡して居るであらうが、暮春の感懐を琵琶の抱心に寄せたのは、やはり蕪村の古典趣味から來て居る事を見逭してはならない。同じく行く春の吟

　行く春や選者を恨む歌の主

の如きも、平安朝の歌人などが想像されて居るのである。

みじか夜や蘆間流るゝ蟹の泡

短夜を眠らでもるや翁丸

みじか夜や波うち際の捨篝

○行く春や　この句五車反古に出づ。

○行く春や　この句平安二十歌仙（明和六年刊）に見え、又は續明烏・蕪村句集にも出づ。

○みじか夜や　以下三句共に蕪村句集に出づ。

○翁丸　淸少納言の枕草子に見える犬の名で、宮中に飼はれて居た。

○波うち際の　蕪村の手紙には「さゝら波寄る」ともある。

○五月雨や　この句蕪村句集に出づ。

三句共短夜を主題として、それ〲にちがつた趣を得て居る。蘆間を漂つて行く白い小さな蟹の泡、それが流れ止まる間もなく消え去るはかなさに、短い夏の夜の感じが相通ふのである。次のは例の古典趣味の所産で、『枕草子』に見える犬の名から、明け易い宮廷の夜のさまを想像した句。第三のは短夜の明け離れた海岸のさまである。昨夜漁夫が焼き捨てた篝か、波打際にざぶり〱と打寄せられて居る。寝不足な重い瞼がはつきりとさめて行くやうな爽さである。

この三句は別に蕪村の特色を代表するものではないが、かうして並べて見ると、作者の美に對するすぐれた直覺力が感ぜられる。

五月雨や大河を前に家二軒

降りつゞく五月雨に水嵩を増した河は、滔々と濁流を漲らして居る。その物凄い流れを前にして、岸に並んだ二軒の小家。四邊をめぐつて雨はなほ降りしきる。その豪雨と濁流の中に、今にも押流されてしまひさうなさまである。芭蕉の

五月雨を集めて早し最上川

○御手討の　この句蕪村句集に出づ。

と同じく雄大で、その上に物凄い恐ろしさが迫つて來る。それは二軒の小家を點出した爲である。しかも一軒だけでなく、二軒有るのが一層不安な暗示を強めて居る。

御手討の夫婦なりしを更衣

蕪村の句に於る小說的構想の代表作として知られて居る。思ひ思はれて忍びあつた腰元と若侍、不義は御家の法度で、すでに殿の御手討となるべき筈であつたのを、奥方の情深いはからひでひそかに二人は驅落ちした。そして今は貧しい侘住居はして居るものの、晴れて夫婦の嬉しい仲である。今日は輕々とした初袷に着かへて、夢のやうな自分たちの身の上を思つて居る。

これはもとより一通りの解釋に過ぎない。それからそれと想像を逞しうするならば、一篇の戲曲をも作り出す事が出來るであらう。かうした句に對しては、その善惡を論ずるよりも、まづそれほど複雜な事件を僅々十七字に纏め上げた手腕に驚かざるを得ない。まさに神技と稱してよからう。前に述べた如く、太祇もこの種の題材をよみこなす事には、すぐれた手腕をもつて居たが、蕪村の多方面な才はまた決してこれに劣らなかつた。

○燃え立ちて　この句安永九年の連句會草稿に出づ。

燃え立ちて顔はづかしき蚊遣かな

蚊遣の火がぱつと燃え上つたはずみに、そこらが明るく照らし出されたので、あらはになつた自分の顔を、女が恥しく思つたといふのである。この句には別に戀と見るべき言葉はないが、「顔はづかしき」といふので、自ら若い女の姿態が見え、そこには男も一しよに居る事が想像されるのである。灯を遠く置いた縁先などで、男の傍に近々と寄つて居た女が、急に燃え上つた火の光に驚いて、ポツと頬を染めながらうつむいたといつたやうな可憐な情趣がくみ取られる。

前に太祇の戀の句をあげて評したが、蕪村の戀愛句にもすぐれたものが相當あるにも拘はらず、それはいづれも

かりそめの戀する日なり更衣
目に嬉し戀君の扇ま白なる
きぬ〴〵の言葉少なよ今朝の秋

等の如く、淡い情味に終始したものだけである。濃艶熱烈な趣は全く求められない。これはやはり芭蕉以來俳諧の境地に、自然のさびを尊ぶ事が多かつたからであらう。豪華艶穠の句に

も乏しくなかつた蕪村にして、なほこの程度である。

※ほとゝぎす平安城を筋違に

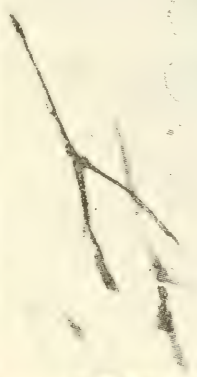
時鳥が京都の空を斜に啼いて飛去つたといふのである。たゞし作者は必しもその時鳥の飛去る姿を、はつきり認めたのではない。一直線を引いたやうに殘して行つた裂帛の聲が、作者の頭にさうした想像を描かせたのである。そしてそれがこゝに詩となり、句となつたのである。

蕪村筆自畫賛

子規はこの句について、平安城といふ漢語が句の勢を添へたので、もしこれを「都の空を」などと言つたら、全く凡句になつてしまふと評して居る。一體この句は芭蕉の

郭公聲横たふや水の上

○ほとゝぎす　この句蕪村句集に無し。

（蕪村筆自畫賛（著者藏、
卯月八日
おもたかの嘴に引ずる集河　蕪村
右は書風から見て寶暦初年頃の作と思はれる。句は從來句集類に逸されたもの。）

と相似て、更に鋭く動的な趣が見られるのであるが、その鋭さは一に平安城といふ漢語調から來て居る事は確かである。そして「筋違に」と簡潔にまとめた所に、動的な強さが生じて居る。句としてはむしろ概念的な嫌があるが、この措辭の妙は學ぶべきであらう。

夕風や水青鷺の脛をうつ

夕風が吹いて、淺瀬の水は白くさゞ波立つ。蒼黑い羽の色をした青鷺が、その水にじつと脚を浸して居る。實に爽凉な水邊の晩景である。由來蕪村の句は、客觀的な美を描くにすぐれて居ると言はれる。明治中期の俳壇に蕪村の名が高く顯揚されたのは、天保以後の所謂月並調が、專ら卑小な主觀に捉はれたマンネリズムに墮して居たのに對して、この自由清新な客觀的描寫の態度が、革新派の人々に喜び迎へられた爲であつた。

蕪村が客觀的美を描くにすぐれて居たのは、彼が畫家としての修養から得た點も多かつたであらう。しかしいづれにせよ彼の美に對する鋭い直覺の力が、畫家としても俳人としても、彼を大成せしめた所以である。そしてそのすぐれた直覺は、彼の天稟であると共に、また所謂離俗の工夫によつて、不斷に美意識の統制につとめた結果得られたものであつた。

○夕風や　この句幣袋・片折等に出で、安永三年の作である。

○**牡丹散つて**　この句俳諧附合小鑑・俳諧新選・明烏・俳ごころ・桃李・蕪村句集等に出で、最も汎く知られて居る。安永二年頃の作。なほ選句篇牡丹の巻參照。

○**新花摘**　蕪村が其角の「花摘」に倣つて、安永六年の夏に記した句日記である。

○**宅磨**　天暦の宅磨爲氏を祖とし、代代佛畫を善くした家。璉仁・澄賀が最も著はれ不動・阿彌陀佛等の遺作がある。

○**南蘋**　沈南蘋（シンナンピン）。清朝の畫家で筆法精緻着色妍麗花卉鳥獸をよく描いた。享保年間長崎に來た。

○**福濟寺**　長崎市下筑後町にある黄檗宗の寺、明の僧覺海の開基で支那人の香華寺となつてゐた。「新花摘」に「福西寺」とあるは誤。

牡丹散つて打重りぬ二三片

微風もない白日、花壇に咲き誇つた牡丹の花瓣が一片、ふうはりと散つた。と又一片、二片、その上に重つて散つた。土の上には紅い色が盛り上つたやうである。蕪村の客觀句が、決して物象の外形的な美だけを捉へて居るのでない事は、この句によつて十分證されるであらう。「打重りぬ二三片」といふ表現は、牡丹の散るのを本當にじつとながめた人でなければ言へない事である。その中に牡丹の花の重厚華麗な趣が、自ら浮んで來るのだ。

蕪村には牡丹の句がかなり多く、「新花摘」などには十數句もつゞいて吟んで居る程である。これらの句中には蕪村の特色を窺ふべきものが多いので、左に二三句を拔いて見よう。

不動畫く宅磨が庭の牡丹かな

南蘋を牡丹の客や福濟寺

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

閻王の口や牡丹を吐かんとす

第一・第二は共に例の空想の句であるが、牡丹の華麗さや唐めいたさまなどを、かうした背

景によつて強調しようとしたのである。第三。第四はそれが更に幻想的となつて居る。眞紅の燃えるやうな花の感じを、閻魔大王の舌で現はさうとしたのは、些かわざとらしい作爲はあるが、とにかく蕪村の特色を最もよく見る事が出來る。

愁ひつゝ岡に登れば花いばら

この愁ひは深い憂愁ではない。センチメンタルな郷愁である。蕪村は少年時代に早く兩親に別れ、又遠く故郷を離れて長い間漂泊の旅をつゞけて居た。彼の胸の中にはいつも郷愁の淡い感傷が宿つて居たのだ。それはかの「春風馬堤曲」によつてもよく窺はれる。この句はその詩人のなげきである。「かの東皐にのぼれば」といふ詞書を附した

花いばら故郷の道に似たるかな

の吟も、恐らく同じやうな郷愁から生れた句であつたらう。

初夏のたそがれ頃、何となく物悲しい心を抱いて岡の邊をさまよふと、そこの細徑に白い茨の花が咲いて居る。それが何となく故郷の道に似て居るのであつた。そして自分が少年の時、家の近くの岡に登つて戯れたさまなどが、なつかしくも淋しくも思ひ出されて來る。蕪村の心

○愁ひつゝ　この句蕪村句集に出づ。

○春風馬堤曲　俳文篇參照。

○東皐　東の岡。歸去來辭「登二東皐一以舒嘯、臨二清流一而賦レ詩」

○花いばら　この句五車反古に出づ。

○欠けゝて　この句几董の句日記に出で、なほ其雪影・俳諧新選・蕪村句集等にも出づ。明和六年の作。

○白露や　この句蕪村句集に出づ。

は遙の昔にかへりつゝ、この目前の景に對して傷むのであつた。

欠けゝて月も無くなる夜寒哉

一夜一夜に月が缺けて行く。それにつれて夜寒さも夜毎に身に入みるやうになる。そして遂々月も缺け盡きて闇になると、夜寒さも愈ゝ本格的になつてしまふのである。「欠けゝて」と時の推移を現はしたのが、募り行く夜寒の感じを深めて、一句の中心となつて居る。

白露や茨の刺に一つづつ

句意は明である。美しい露の玉が、茨の尖つた刺の先に一つづつ置いて居る。纖細な美しさである。そしてたゞそれだけを言つて、他に何等主觀的な說明を加へてない。宗因の

白露や無分別なる置き所

などと對照して、蕪村の特色がはつきりと分る。

○秋風や　この句蕪村句集に出づ。

○四五人に　この句蕪村句集に出で、「英一蝶が畫に賛望まれて」と前書がある。

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

蕪村の句に漢語調の多い事はすでに述べたが、この句などもその好みを最もよく代表したものであらう。これは實は村の居酒屋で、漁夫や木樵が酒に醉つて小唄でもうたつて居るといつたやうな情景だが、それをかうした漢語によつて、すつかり支那の南畫趣味に化してしまつたのである。しかも「秋風や」の上五が、一句を引統べて蕭殺枯淡の氣趣を生じ、人物は愈〻文人畫中のものとなつて來る。

子規はこの句を評して、簡潔な漢語の驅使により、複雜な意匠を十七字中に含めた好例としてゐる。しかしこれは必しも意匠が複雜なのではない。たゞ國語で言へば「秋風や酒屋に小唄うたふ漁夫木樵」と長くなつてしまふのを、かく十七音の中に纒められるといふだけである。この句の特色はさうした點よりも、漢語に伴ふ漢詩や文人畫的の情趣が、こゝに最も適切に利用されて居る所にあると思ふ。

四五人に月落ちかゝる踊かな

宵から集つた盆踊の群も、流石に夜が更けては踊り草臥れて、一人減り二人散じて、僅か四五人ばかりになつてしまつた。もう月も西に低く落ちかゝつて居る。殘つた四五人はなほその月下に踊りつゞけて居るのだ。

句は畫賛ではあるが、かうした情景は蕪村もかつて經驗し、面白く感じて居たにちがひない。前書にある英一蝶の繪といふのは、どんな繪であつたか知らないが、蕪村自身も亦この句意

蕪村筆自畫賛

を描いた俳畫を屢〻作つて居る。とにかく彼がこの情景を喜んで居た事は明で、畫賛でなく單獨に踊の句としても、勿論十分に獨立性がある。

※負くまじき相撲を寢物語かな

（蕪村筆自畫賛、京都 寺村氏藏）
四五人に月落かゝるおどりかな　夜半翁

○負くまじき　この句几董の句日記を始め、續明烏・蕪村句集等に出づ。明和七年頃の作。

「負くまじき」は、言葉のまゝに解すれば「負けないであらう」で、卽ち明日の勝負について言つて居るわけだが、それでは寢物語のしんみりした味はひが出て來ない。やはり「負ける筈でなかつた」と過去の意に解すべきである。この程度の文法的破格は、當然許されてよく、文法に拘泥して句の情趣を無視すべきではない。

必勝を豫期して出た力士が、ふとしたはずみで負けてしまつた。その口惜しさを寢物語に妻に洩らすのである。「決して負ける筈ではなかつたがなあ」と口惜しがる夫、それをとやかくと慰める妻。秋の夜は更けて行く。句は特にすぐれたものではないが、相撲の句としてかうした特殊の情景を捉へたのは流石に蕪村である。しかもかなり複雜な事が、上五の言廻しだけで巧に現はされて居る。

柳散り清水かれ石ところぐ

「蕪村句集」の前書は簡單であるが、この句が始めて見える「反古衾」には、

神無月はじめの頃ほひ下野の國に執行して、遊行柳とかいへる古木のかげに目前の景色を申出で侍る。

○文法的破格　正しく言へば「負くまじかりし」である。

○柳散り　この句反古衾（寶暦元年刊）に始めて見え、その他俳諧古選・名所方角集・名所小鏡・蕪村句集・新五子稿・題林集・不二烟集等に採錄されて汎く知られて居る。なほ蕪村句集には「遊行柳のもとにて」と前書がある。

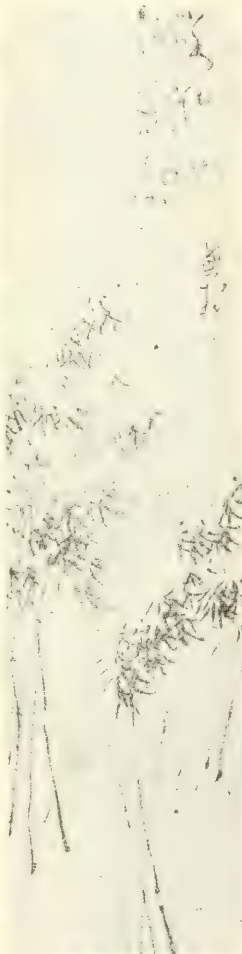
○反古衾　雁宕、阿誰の共撰。寶暦二年刊。當時の江戸俳人の發句、並に撰者が李井・百萬・蕪村等と催した連句を收む。

○執行　修行。

となつて居る。卽ち下野國蘆野の里の名高い遊行柳の下で、そのあたりの矚目を句にしたのである。蕪村は寛保二年六月、師宋阿※に死別して後、約十年間常總地方に漂浪の生活を送つて居た。その間遠く松島のあたりまで行脚した事は、「新花摘」に自ら述べて居る通りで、この句もその旅中の吟と思はれる。而してこの東北行脚の年代は、ほゞ寛保二年の秋以後翌三年冬頃までの間と思はれるから、卽ち蕪村が二十七八歳頃の作で、今日彼の句として傳はる最も古い作の一に屬する。

（蕪村筆自畫贊　京都 [illegible]井氏藏）

若竹やはしもとの遊女ありやなし　蕪村

蕪村筆自畫贊

柳は言ふまでもなく遊行柳、淸水は西行が「道のべに」とよんだ淸水である。その柳も今は葉が散つてしまひ、淸水は涸れて所々に石が露はに出て居るといふのである。而してこの荒寥たる景に對しては、かの「後赤壁賦※」の「水落石出」の語が思ひ浮べられる。實はこの時蕪村の胸中にもまたこの語が徂徠したので、彼は別に自畫贊の同じ句に、

○宋阿　早野巴人の晩年の號。

○後赤壁賦　前赤壁賦と共に蘇東坡の作。古文眞寶に出づ。

○俳諧の自在云々　この事宋阿の追善集「俳諧昔を今」の序に、蕪村自ら述べて居る。

○枯枝に　一〇一頁參照。

○楠の根を　この句蕪村句集に出づ。

赤壁前後の賦、字々みな絶妙なるが中に、山高月小水落石出といふものことにめでたく、孤鶴の群鷄を出るが如し。むかしみちのくに行脚せしに、遊行柳のもとにて忽右の句を思ひ出でて、

と題して居る。要するに蕪村はこの實景によつて「後赤壁賦」の句を思ひ、更にこれを俳諧の一句としたのである。一體寛保初年の頃といへば、江戸座の弊竇は窮まり、しかも革新の機はなほ至らない時であつた。然るに蕪村は夙く宋阿の机下に侍して、俳諧の自在を得べき事を教へられ、時風に反して古く『虚栗』『冬の日』の高邁を慕ひ、直ちに蕉翁の幽懐を探らうとする氣槪を持つて居た。この「柳散り」の吟の如き、句はもとよりなほ生硬を免れないであらう。しかし蕪村が後年眞に大成すべき素地は、すでにこゝに見られるのである。それは恰かも芭蕉が、「寒鴉枯木」の句を翻したやうな「枯枝に烏のとまりたるや」の吟に、蕉風の第一歩を踏み出したのと比して、面白い對照をなして居る。

楠の根を靜に濡らす時雨哉

默々として立つて居る楠の大樹、その根もとを靜に時雨が濡らして居る。たゞそれだけの景

▽蕪村墓（京都市左京區一乘寺金福寺境内）

○我も古人の　宗祇の名高い句に「世にふるは更にしぐれの宿り哉」の吟があり、芭蕉は更に「世にふるは更に宗祇のやどり哉」と言つた。句はこれらを追想してゐる。

○婆娑　舞ふ貌であるが、こゝは古傘の影の亂れ動くさまに言つてある。

であるが、古びた土のあたりに、しと〳〵としみ透つて行く雨の侘びしさが、こまかく感ぜられる。それは「靜に濡らす」といふ言葉のもつ感じである。「牡丹散つて打重りぬ」と同じく、これも楠の根に降る時雨をじつとながめ入つた心から生れて居る。たゞ一通りの寫生句ではない。

蕪村には時雨の句が非常に多い。その情趣を特に愛したものであらうか。二三の佳作を拔いて見よう。

しぐるゝや我も古人の夜に似たる

水際もなくて古江の時雨かな

古傘の婆娑と月夜の時雨かな

夕時雨蟇ひそみ音に愁ふかな

一番人口に膾炙してゐるのは、

蕪村墓

○むさゝびの　この句蕪村句集に出づ。

○斧入れて　この句秋しぐれ・蕪村句集等に出づ。

化けさうな傘貸す寺の時雨かな

である。

※むさゝびの小鳥食み居る枯野哉

句意は解するまでもない。枯野の荒寥たる趣が、この特殊の景を點じて一層物すさまじく覺える。噛み砕かれる小鳥の骨の音さへ聞える氣がする。

※斧入れて香に驚くや冬木立

もう葉がすつかり落ち盡した冬木立である。薪にでもしようと斧を打込むと、その切口から迸る芳烈な木の香が、プンと鼻をついた。枯木のやうな寒林の中に、思はずこの新鮮な香をかいだ驚きの情を句にしたのである。感覺的な匂の高い句である。

○樗庵麥水發句集　加賀の人押野谷雪袋編。稿本のまゝ傳へられた。

○蝶々や　この句樗庵麥水發句集に出づ。

○朱雀　京都島原をいふ。

堀麥水

加賀金澤の人。通稱池田屋長左衞門、四樂庵・樗庵等と號す。始め希因について學び支考・麥林に私淑したが、後ち漸くその平俗を厭うて芭蕉の古へに復らんことを思ひ、『蕉門一夜口授』『新虚栗』等を出して革新運動につとめた。天明三年歿、年六十六。その句は『樗庵麥水發句集』に收めらる。

蝶々や晝は朱雀の道淋し

昔の島原は全く田圃の中にあつたので、嫖客はその野道を浮かれ寄つて來たのであつた。夕べとなれば、三枚肩四枚肩で景氣よく駕籠を飛ばせる者もある。又ほろ醉機嫌の小唄節で歩いて來る者もあつたらう。大門をうつまでは、實に不夜城の賑さである。それに引替へて晝は殆ど通る人もない。たゞ菜の花の香を慕つて飛ぶ蝶ばかり。その淋しい趣をよんだのである。

麥水が始め踏み出した俳諧の道は、全く支麥の風調によつて導かれた。卽ち平易通俗を旨としたのであるが、その後自ら學んだこの支麥の風が、實は卑俗で蕉翁の意に隔る事が遠いのを

○虚栗　一八八頁頭註を見よ。

一八八頁頭註を見よ。

○新虚栗　安永六年刊。

▽麥水像　（追善集「落葉かく」所載）

悟り、こゝに諸家の風を訪ねて東西した。その結果『虚栗』の氣韻高致に最も傾倒するに至り、遂に安永二年の秋難波に旅寓中、『蕉門一夜口授』を著はして貞享の古風に歸るべき事を叫んだ。蓋し支麥調の卑俗さや、京阪地方を風靡した淡々の俳風の如きは、全く俗談平話を正さない爲であつて、これを救ふには蒼古遒勁な『虚栗』時代の調を以てせねばならぬと考へたからである。

この主張は實は夙く明和年間から抱いて居たのだが、この『蕉門一夜口授』によつて最も明にその考が示されたのである。これについで彼は又『新虚栗』を撰び、こゝにその主張に從つた實際の作品を世に問うた。隨つて彼の作品は自ら前後二期に分たれる。麥水の七回忌追善集『落葉かく』に、遺吟百章を前後二體に分けてあげてあるが、この蝶々の句は前體の部に入れてある。卽ち麥水がまだ平明の調を主としてゐた時代の作である。しかしこの時代でも、素質的にはすでに芭蕉の意に通ずるものがあつたので、平明ではあるが決して卑俗に墮しては居ない。次の二句もやはり前體の中にあげられた作である。

麥水像

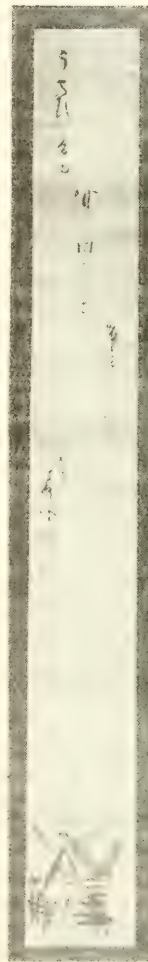
▽麥水筆蹟　松宇文庫藏

うぐひすや竹田のささは留主ばかり

金城　麥水

夕顔や物を借り合ふ壁の破れ

貧しい人たちの住んで居る長屋つゞき、壁一重を隔ててすぐ隣家である。夫婦喧嘩の聲も聞き合へば、足らぬ物がちな世帯の道具も、折々は壁の破れから借り合ふ。折から夕餉の支度をする頃、その長屋の軒端に夕顔の花が白く咲いて居る　わびしげな生活を背景として、黄昏に咲く花の色が物のあはれを感ぜしめる

麥水筆蹟

夕顔といへばすぐに『源氏物語』夕顔の卷の五條わたりの小家が思ひ出される。この句にも或はさうした聯想がはたらいて居るかも知れないが、たとひその聯想がなくとも、陋巷に咲く夕顔の情趣は十分に味ははれる。

石を出る流れは白し花薄

石の間から出た水は、白々と秋の野中を流れて居る。その岸邊に招く花薄が、銀のやうに光る。澄み切つた美しさがある。

椿落ちて一僧笑ひ過ぎ行きぬ

これは「落葉かくし」に後體の一としてあげたものである。用語が故らに固苦しくなつて居る點に注意せねばならぬ。麥水は前にも述べたやうに、俳諧の革新はまづ用語を高雅なものにせねばならぬとの主張から出發した爲、勢ひ無理にも佶屈な格調に從はうとしてゐる。だからそれは寧ろ生硬に失したものも少くないので、この句の如きも特に佳作とするに足りない。たゞ麥水のかゝる主張を窺ひ知る爲にあげたのである。

花はなし金陵一月の古小袖

蟬をいたみ杖水を打つて葉に添へり

水仙やこの花のもとの飯袋子

年經るやふるに飽く雪を一棒す

等、皆後體としてあげられたものである。作の可否は別問題として、麥水の志した所を見るべ

○風早み　正しくは「風が早いので」といふ副詞句の意味であるが、後世はたゞ「風が早い」といふくらゐの意に用ひられて居る。こゝもその意。

▽麥水筆蹟（松宇文庫藏）

鶴も來て菊に遊ぶやかくれ里　金城　麥水

○靜さや　この句樗庵麥水發句集に出づ。

○蓮の實の飛ぶ　蓮の實飛ぶは秋の季。

きである。

郭公穗麥が岡の風早み

この句も後體の部にあげてあるが、これはもはや佶屈な感がなく、平易の中に高雅な趣を保つてゐる。岡の穗麥を靡かせて、さつと青嵐が吹く。途端に郭公が一聲高く啼き過ぎたといふのである。「風早み」といふので、鋭い聲を殘して飛び去つた郭公のけはひが強く感ぜられる。

麥水筆蹟

靜さや蓮の實の飛ぶあまたたび

靜な池のほとり、幽かにポン〳〵と物の彈ける音がする。蓮の實が自然と穴から拔けて飛び出して居るのだ。じつと耳をすますと、又あとから〳〵と幾度も彈け飛ぶ。その音が一層四邊

の靜寂さを増すのである。これは麥水の作中、最も佳吟とすべきものであらう。「あまたたび」といふ措辭が　靜けさの中に動くものの生命をはつきり感じさせる。

※蕉門を以て世に鳴るもの多し。先づいはゞ美濃の東花坊、續いて此の地の※半時庵なり。東花坊は翁の枕席に陪し自ら※晤語をうけ、半時庵は其角に從ひて翁に一世を隔つ。皆正しく芭蕉の親韻をうく。世に鳴る眞に宜なり。然れども東花坊は道を俚俗に引下して大いに蕉門を說き廣む、其の功は多し。初め支考なるの日は、句々朴實にして翁の餘韻あれども、終には※三藏も長太も聞きうけんをこそとやらん云ひて、ひたぶるに俗談卑理損德の街に落つ。其の頃の小集は只※世話詞の俗本よりいやし、又見るべからず。半時庵は高情奇語、正しく其角が風韻は備はれども、只付句の意、※鄭聲をなし、蕩言に流れて父子同座して見るべからざるに至る。此の兩弊、皆これ俗談を正すの字を忘れたる失のみ。此の弊害を除けば、直なるも曲なるも、魂をうけたる句は蕉風ならざるはなし。さはいへ、又蕉風只直なる事のみよしと定めて、今日も月花の古み、翌日も雪ほとゝぎすの其儘なるをいふのみに時を費す一門あり。是は蕉門の木偶人にして、これ又正風ともいひがたし。俳諧はもと一作の表向きにて、諷諫談笑を以てすと云ひながら、正風の本意は諷諫の句に談笑の心なくとも、談笑の句に諷諫の心なくんば有るべからず。

○蕉門を以て　以下麥水の「蕉門一夜口授」の一節。その俳論を窺ふべきである。
○東花坊　支考。
○半時庵　淡々。
○晤語　うち解けて語ること。
○三藏、長太　三藏は鍛冶屋の徒弟、長太は丁稚等の通稱。
○世話詞　俗語をいふ。
○鄭聲　野卑淫猥なる俗曲。論語、衞靈公「放二鄭聲一、遠二佞人一」

加藤曉臺

又久村氏、名は周擧、通稱平兵衞、暮雨巷・買夜子。龍門等の別號がある。尾張名古屋の人、初め伊勢風の俳統をついだ蓮阿房白尼に學んだが、後ち師風に慊らずして俳風革新に志し、明和五年『秋の日』五歌仙を興行した。かくて貞享の古調に復る意を明にし、天明中興の業に與つて力が大きかつた。寛政四年京都に歿す、年六十一。『秋の日』『熱田三歌仙』『栗荻』『風羅念佛』等の撰著があり、その句は『※曉臺句集』に收めらる。

※雪解や深山曇りを啼く鴉

谷間の雪もそろ〳〵解け初めたが、深山の奧はまだどんよりと曇つた日がつゞく。そして高い杉の梢には、今日も朝から鴉がいやな聲で啼いて居る。さういふ早春の情景である。人氣もない山の中に啼く鳥の聲が、何となく空虛に響いて、もう春の氣は萌しながら、なほ冬の憂鬱さが去らない深山の感じを象徴して居る。

○曉臺句集　門人臥央の編。文化六年刊。

○雪解や　この句骨書　天明六年刊）・曉臺句集に出づ。

○灯ともせば　この句安永三年の几董日記を始め、續明烏・佛の座・無名集・發句題林集・曉臺句集等に出づ。

▽曉臺像（寛政八年刊「俳諧百家仙」所載）

春風の夜はあらしに亂れけり　曉臺

○日暮れたり　この句曉臺句集に出づ。

灯ともせば裏梅がちに見ゆるなり

今まではたゞ闇の中に白く匂つて居た梅の花である。灯をともすと花の一輪々々が、はつきり目にうつつて來る。氣がつくと、それが大がい裏向になつた花ばかりだといふのである。特に裏梅の風情に目をとめたのが面白いのである。曉臺の作中特にすぐれたものといふのではないが、比較的汎く知られて居るのは、人の氣附かぬ趣を見出した所が感心されたのであらう。

曉臺像

日暮れたり三井寺下る春の人

入相の鐘が餘韻を長く湖面に引いて、次第に暮色はあたりを包んで來た。三井寺に詣でた人

○鶯や　この句安永九年の几董初懐紙・はるのあけぼの（安永九年刊）等に出で、又檠節（天明二年刊）には「春鳥やものにまぎれて夕啼きす」とある。

人も、花に名殘を惜しみつゝ、一人二人と長い石段を下りて來る。眼下の湖水だけが、まだうつすりと暮れ殘つて、なごやかな光を湛へて居る。

まづさういつた光景である。「日暮れたり」と大きく夕べのさまを描き出し、それから三井寺を點出して、琵琶湖に臨む特殊の情景を明にし、最後に「春の人」と置いて畫龍點睛の妙を發揮した。即ち「春の人」といふので、琵琶湖の水の色も、三井寺の庭の景色も、さては石段を下りて行く人々の姿も、すべてなごやかな氣分に包まれてしまふのである。

※鶯やもののまぎれに夕鳴きす

人も氣忙しく立働いて居る夕方、何かの紛れにふと鶯の聲を聞いた。それだけの事であるが、何の奇もない所によく景情の機微を捉へて居る。元來曉臺も俳諧革新の理想を貞享の古調に求め、『冬の日』の光りを挑げて『秋の日』を興行したのであるが、彼は麥水の如く奇矯過激にわたらず、徐々と堅實に歩を進めて行つた。それで單に『虚栗』の外形的な格調のみを摸倣するやうな事をせず、より內面的な世界に革新の道を拓かうとした。その爲に彼はまづ詩材の選擇に意を用ひ、專ら典雅優麗な題材を俳諧化する事によつて、卑俗を脫しようと努めてゐる。隨

つて格調や着想の警拔なのよりは、寧ろ平正溫雅の間に詩境を求めようとした。この句の如きは卽ちさうした傾向をよく窺ふ事が出來る。

子規啼くや有磯の浪がしら

荒磯に打寄する波の頭が、眞白く崩れる先を掠めて、子規が一聲啼き過ぎるといふ光景である。些かきはどすぎて實感を薄める。道彥は「曉臺は遊女の風なり。人に思はるゝの姿をつくしたれども、人を思ふの實情薄し」と評して居るが、曉臺の句には實際皮相の粉飾に終つて生命感に乏しいものも見出される。それは彼が題材の高雅典麗のみを求めて、眞に十分な藝術的燃燒を經ない素材までを、そのまゝ投げ出したからであつて、畢竟彼には蕪村程の直覺の鋭さがなく、又芭蕉のやうに詩的心境を完全に統一する事も出來なかつたのである。とはいへ、それは蕪村や芭蕉に比してだけの事で、幽艷、豪華、蕭散、さまざまの情景をよく言ひ了せてゐる手腕は、中興俳壇の巨匠たる實に背かないのである。

かはほりや古き軒端の釣葱

○子規啼くや　この句曉臺句集に出づ。
○有磯　荒磯に同じ。荒い波の打寄する磯。
○かはほりや　この句曉臺句集に出づ。
○かはほり　蝙蝠。

○蚊柱や　この句曉臺句集に出づ。

○夕顔の　この句曉臺句集に出づ。

半ば朽ちたやうな軒先に釣しのぶがかけてある。夕闇が濃くその軒端に迫つた頃、どこからともなく飛出した蝙蝠が一羽、身を横にそのあたりを掠めて過ぎた。さういつた夏の夕暮の景である。「古き軒端」といふ言葉が、古典的な情趣をよび起して、その家の有様までが自らしのばれる。

蚊柱や棗の花の散るあたり

これも同じく夏の夕の景趣であるが、前句の暗く古びた情趣に對して、これは明るく清新な味がある。淡青色を帶びた白い棗の花がほろ〳〵と散る夕、蚊の聲が靜に聞えて來る。この句をよむと、同時に蕪村の

蚊の聲す忍冬の花の散るたびに

が憶ひ出される。全く同様な句境である。

夕顔の花踏む盲雀かな

もう薄暗くなつた夕方、友に遲れたのか一羽の雀が、がさ〳〵と夕顔の花のあたりに餌をあ

○秋の山　この句曉臺句集に出づ。

○風悲し　この句も比志遠理・安永五年刊・曉臺句集に出づ。霜明鳥には中七「夜々に缺け行く」とあり、自筆の眞蹟には「夜々におとろふる」ともある。

さつて居る。歩き方などが變なので、よく見ると盲目なのだ。可愛さうに子供にでも悪戯されたのであらう。巣にも歸れないでさまよつてゐるものと見える。

夕顔の花咲く黄昏頃の幽いわびしさが、この盲目の雀によつて一層深められて居る。だがこれは並々の作者では容易に捉へられない境地である。流石に曉臺の感受性の豊かさと、觀察のこまやかさとが窺はれる。

秋の山ところ／＼に煙立つ

平明な敍法の中に、秋の山の情趣が深く味はれる。こゝにも曉臺が作者として凡庸でない所以が窺はれよう。「秋の山」といふ上五で、まづ澄んだ大氣の中に聳える山の姿が描き出される。そして次に麓の所々から立ち昇る烟が、白く畫面につけ加へられる。それで單調な山容に、靜なうるほひが生じて來る。水墨で淡々と描いた一幅の繪を見るやうな句である。

風悲し夜々に衰ふ月の形

前にあげた蕪村の句「缺け※〳〵て」と相似た句境である。『續明烏』によれば、中七が「夜々に缺け行く」であるから、益々似て居る。「衰ふ」と改めたのは、あまりに蕪村の句に類する事を避けたのかも知れないが、この曉臺の句に於ては、まづ「風悲し」と主觀を打出したのであるから、「缺け行く」と具體的な表現より、「衰ふ」といふ抽象的な言葉がふさはしいのである。

さてそこでこれを蕪村の句と對照した時、「風悲し」といふ上五が、極めて痛切な悲しみを呼び起して居る割に、「夜々に衰ふ月の形」がそれほど強く響いて來ない。爲に一句が何となく空々しく感ぜられ、實情に薄い結果に陷つて居る。

曉臺筆蹟

蕪村と曉臺と、趣の相似た句を一二竝べて見ると、

○缺け〳〵て　三七九頁參照。

▽曉臺筆蹟（四日市 鈴木氏藏）

隆達がやぶれ菅笠　しめ緒の
かつら永く傳はりぬ
是から見れは　近江のや
あだしあだ浪　よせては歸る浪
朝妻ぶねの淺ましや
ア、又の日は誰に契りを
かはして　色を枕恥かし
僞がちぬる　我ここの山
よし　夫さて　世の中
右は北窓老人が已圖して
自此はさら言を其屑に
ものせし風流もしたはしくて
忍はるゝ人きゝ添こ柳陰　暮雨

（註、「僞がちぬる」は「僞がちたる」の誤記。北窓老人は英一蝶。）

玉霰漂母が鍋をみだれうつ　蕪村

玉霰鍛冶が飛火に交りけり　曉臺

妹が垣根三味線草の花咲きぬ　蕪村

きのふ見し妹が垣根の花あやめ　曉臺

等の如き、蕪村の句が古語を用ひ、故事にたよつて、しかも眞實感に富むのに比し、曉臺の句は徒らに題材と言葉とに捉はれて、迫眞力に乏しい憾みがある。こゝに兩者の天稟の相違が存するのであらう。しかし前にあげた蚊柱の句の如き、蕪村と伯仲の間にあるものもあり、とにかく兩者傾向を等しくする事が多いのは、彼等が革新の實をあげるべく目ざした所が、殆ど同一の境地にあつた事を物語つてゐる。

九月盡はるかに能登の岬かな

秋も遂に逝くといふ日、悵然として眼を放てば、北海の波は滄茫と果も無く、遙に能登の岬が雲烟模糊の間に横はつて居る。あの岬の彼方に秋は去つて行くのであらうか。その行方を追うて、愁人の恨は綿々として盡きない情がある。

○漂母　洗濯婆のこと。句は韓信が貧であつた頃食を恵まれた漂母の故事を些かふまへたのである。

○三味線草の　この句には「琴心挑美人」といふ題があり、司馬相如が琴心を以て卓王孫の女文君を挑んだ故事によつてゐる。琴心は琴を以て意を達する事。句は琴を三味線草に、文君を妹に轉じたのである。

○九月盡　この句曉臺句集に出づ。

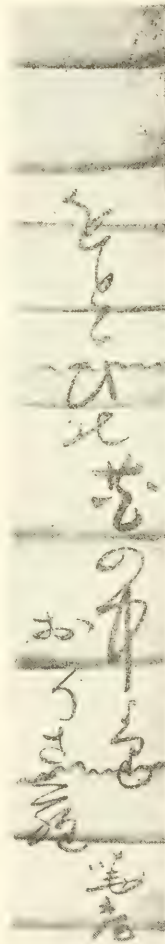
○九月盡　九月晦日、即ち秋の終をいふ。

○すら〳〵と　この句秋しぐれ（明和九年刊）・二三の文（安永三年刊）等に出づ。曉臺句集には上五「つら〳〵と」とある。

（曉臺筆蹟　京都　中野氏藏）

をさゝひの花の中よりおそざくら　　曉臺

すら〳〵と杉の日面行く時雨

この杉は一本立でなく、古杉が連り立つた所である。その片面に切れた雲間からパツと陽光がさす。濡れた幹の肌が赤く光つて、そこへ又時雨がはら〳〵と降り過ぎて行く。非常に光の變化の多い景色である。それをこの平明な敍法の中に言ひとる事が出來たのは、やはり深く自然を觀てゐるからである。

『曉臺句集』に上五が「つら〳〵と」となつてゐるのは、作者自身後に改めたものか、それとも最初から兩案あり、句集の編纂者が「つら〳〵と」を採つたものか明でないが、語感から言へば、「つら〳〵と」の方が日に光る雨の趣にふさはしく思はれる。

曉臺筆蹟

○曉や　この句曉臺句集に出づ。

○霜の海　霜凪の海をいふ。

○冬の情　この句津守舟初篇（安永四年刊）を初め、續明烏・左比志遠理・雪の薄・曉臺句集・新五子稿・題葉集等に出づ。

※曉や鯨の吼ゆる※霜の海

霜凪の靜な曉の海に、鯨が高く潮を噴いて居るさまである。鯨が潮吹くのを吼えると言つたのは、その豪壯な趣を强調する爲である。一讀凛冽豪宕な景を想起するが、しかも再讀するとあまりに道具立が註文にあてはめたやうな感じがする。蕪村の句にも、例へば

子規柩をつかむ雲間より

稻妻や二打三打劒澤

等の如き、こしらへ事めいた作もないではないが、蕪村は流石に甚しい破綻を見せて居ない。

曉臺のこの句は、中學生程度に示す作としては差支ないが、決して上乘なるものではなからう。

冬の情月明かに霰降る

曉臺の作中古くから人口に膾炙されたもので、作者自身も得意の句だつたらしい。上五で大

まかに一句全體の氣分を打出すのは、曉臺の常套手法であるが、この句では特にそれを利かさうとして居る。

月は氷るやうに冴えて居る。一片の斷雲に運ばれたのか、一としきり霰がはら〱と地上を撲つて、又ひつそりとしてしまふ。月明の霰、これこそ全く冬の情趣を象徴したものだといふのである。そこでこの上五「冬の情」は、以下を說明した事になつて居る。そして成程と首肯かせられるから、やがて一句が汎く知られるやうになつたのであらうが、こゝに說明的な主觀を交へる事は、やはり自然觀照の態度を淺くするものである。一歩を誤れば、そこからマンネリズムに墮しないとも限らない。

乾鮭をしはぶりて我が皮肉かな

病後の瘠せ細つた身體をかへりみると、まるで乾鮭見たやうな氣がする。それで自分のこの乾びきつた皮や肉は、あの乾鮭をしやぶつて養はれたものであらうと興じたのである。乾鮭の句としては面白い着想である。蕪村はこれに、

爐に氷とく硯匂へる

○乾鮭を　この句續明烏（安永五年刊）に出で「病後」と前書がある。曉臺句集には右の前書なし。又秋風六吟歌仙にはこれを發句として蕪村・几董・大魯・我則・月居の六吟歌仙がある。

○しはぶりて　しやぶりて。

と脇を附けて居る。

行きちがふ身の上にさへ、馴れる人のものいひかはす程もなくて流れ去りたる、頭を伸べ手をたゝきなどして、終には隱れぬるぞさらに力なし。まして二た年と此の國にさすらへ、なげの睦びにやは。ことし夏のはじめ、坊が家の國なつかしと言ひ出るより、燕の朋どち己れ〳〵に逢ひあひて、えぞ知らぬ境に思ひをめぐらし、あるは身を裂き分くるなど、句々にせつなる心ばせをかづき出でて、二なく名殘を惜しめるや、又は神祭の見もの、今樣の興にうつし、一と日〳〵と人々の放ちやらざれば、坊もまたえ行かであるなり。あはや水無月も半ばたちぬ。いとまたばやと、とみに羽づくろひす。その日は明けぬよりかねての儕かれらわまとゐつゝ、世にはかなきためしまでも引いて、こもごもわりなくぞ言ひわたる。時移るまゝことを厲ましていふ。別情戀々とはちすの糸をひくにひとし。あら果てしな。暁の千里なるものひとたびも後へを顧みず。唯おもへ、遊方獨歩の起行意氣なほ劔の如しと、几上を擊つて耳門に送る。

二たとせや身に添ふ蠅も打つて去れ　暁臺

○行きちがふ云々　安永五年の夏、[illegible]に出づ。暁臺の文として重要なものではないが、あまり知られてない。句だけは暁臺句集にも收む。

○樗良發句集　門人五尺編。天明四年刊。なほ寛政四年これを増補したものや、その改題本『八灘』（元治元年刊）がある。

○山寺や　この句我庵集（寶暦十二年成）を初め當時の諸集に出づ。

○涅槃像　釋迦入滅の圖。二月十五日の涅槃會に寺々でこの像をかけるのである。

三浦樗良

名元克、字冬卿、通稱勘兵衞、薙髮して後玄仲といつた。梅木庵・無爲庵等と號す。志摩鳥羽の人、少時から伊勢山田に住した。紀州長島の人百雄に俳諧を學び、又麥林系の人々と多く交つたが、寶暦九年『白頭鴉集』を撰んで一旗幟を樹て、蕉風復古に志した。安永頃は京都に住つて、蕪村等と來往する事が多かつた。安永九年歿、年五十二。『白頭鴉集』の外なほ『我庵集』『石をあるじ』『月の夜』『菊の香』等の撰がある。句は『樗良發句集』に收める。

山寺や誰も參らぬ涅槃像

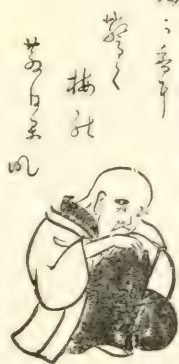
この句は樗良の作中最も知られたものの一である。今日は涅槃會といふのに、山寺の事とて誰も參るものもない。いつもと同じやうに境内はひつそりとしてゐる。しかし流石に本堂には涅槃の畫軸がかけられ、あたりも美しく飾られて居る。そして春の日は麗かに照る。寂しさの

一樗良像（俳諧百家仙所載）

梅の香に驚く梅の散る日かな　樗良

○嵐吹く　この句我庵集を初め、續明烏・几董日記・雪の聲等に出で、續明烏には「清光」と題す。又稿本乞食袋には「[illegible]かなく駒熊山に良夜の月見むと、酒さかなやうのもの携へておのが家々をうかれ出るに、秋の野らの夕まぐれいとあはれなる頃、月ははやにほやかに出る」と詞書がある。

中にほのめく暖さが感ぜられる。

頭註にあげた通り、この句は『我庵集』に見えて居る。樗良はこれよりさき、すでに『白頭鴉』『二股川』の二集を撰んで居るが、それらに於る作はなほ支麥の境地を多く出るものでなかつた。然るに寶暦十二年冬、山田の市中に無爲庵を營んで、

　我が庵は榎ばかりの落葉かな

と吟じ、社友と共に『我庵集』を出すに及び、ここに蕉風復歸の實は認められ、樗良獨自の風調も漸く定まるに至つた。この句や

像良樗

　嵐吹く草の中より今日の月

の吟の如きは、『我庵集』を代表すべき作品で、共に平淡の中に深い味を持つて居る。

「嵐吹く」の吟も人口に膾炙した作である。もう草の色も漸く枯れ初めた秋の野に、冷やかな夕べの嵐が吹渡つて、露も置きあへず亂れて居る。その草の中から團々たる名月の影が浮び上

○櫻散る　この句花傳（安永二年刊）・から鮭（安永五年刊）等に出で、共に中七「日さへ夕に」とある。今樗良發句集に從ふ。たゞ蘭の露（明和七年刊）に上五「櫻咲く」とあるのは誤か、若しくは初案であらうか。

○すかし見て　この句中の聲（安永九年刊）・靑葛（天明六年刊）等に出づ。

○俳諧の本體云々　この事樗良文集の序文の中に見える。

つて來る。亂れる草も一入の風情を添へて、良夜の興盡きないものがある。

櫻散る日さへ夕となりにけり

櫻もすでに散りかけた。名殘が惜しまれて心淋しいのに、その上日も夕になつた。更に傷心の思ひがするのである。平明な敍法であるが、措辭には苦心のあとが見られる。樗良の句には、かうした一見何の他奇もないやうで、しかも自然の幽情を深く味はふべきものがある。

すかし見て星に淋しき柳かな

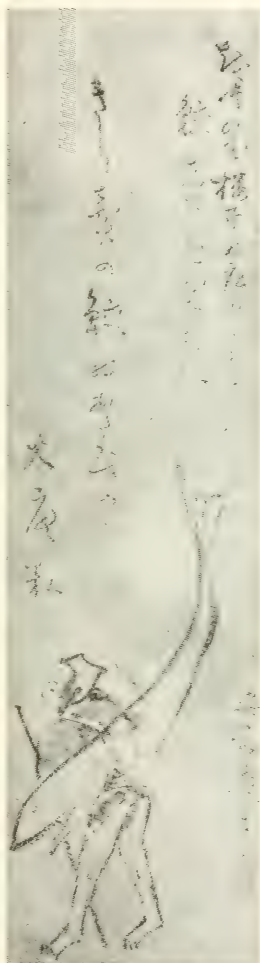
この句なども、樗良の特色を最も見るべき作で、淡々無味の間に、よく自然の眞情を捉へて居る。樗良は蕪村・曉臺・靑蘿等と相交はり、等しく蕉風復古の理想を掲げて天明中興の業に參したのであるが、その風調はそれらの諸家とは全く趣を異にしてゐた。元來彼は俳諧の本體はやはり俗談であるとし、俳風の革新に志しても、その根柢として伊勢風の平明調を常に保つて居た。その點に於て、麥水・曉臺等が努めて支麥の調を捨て、漢語・古語等を用ひて句品を高

「樗良筆自畫贊」京都 谷村氏藏
丹後の國櫻井の宮にて
鼓賣を見る　　無爲庵主
きり賣の鼓のあたへや大晦日

○道彦が云々　この事道彦の「無孔笛」に見える。

○山里や　この句樗良發句集に出づ。

めようとしたのと、全くやり方を異にして居る。卽ち樗良は麥林の句風をそのまゝに守つて、その中に芭蕉の精神を顯現しようとしたのである。

樗良筆自畫贊

樗良が敢へて佶屈典雅な調によらず、平明な麥林風を保持しつゝ、その間に革新をはからうとしたのは、もとより誤ではなかつた。たゞ彼は純眞で熱情的な所はあつたが、強い氣魄に乏しかつた爲に、その平明は屢ゝ平板なたゞごとに失する弊があつた。道彦が※

樗良は淡白にすぎて上天の如く、音もなく香もなくさらにたゞごとを言ふに至る。

と言つたのは、正に適評と言ふべきである。しかしその佳作に至つては、對象に對する純眞な感激が、自ら深い眞實味となつて現はれて居る。

※山里や屋根へ來て啼く雉子の聲

恐らく實景のまゝを句にしたのであらう。少しも巧んだあとがない。しかも決して平凡な取材ではない。山里めいた感じが十分それで現はされて居る。

五月雨や折々出づる竹の蝶

これも實景のまゝである。五月雨頃にはよく竹の毛蟲が發生するもので、雨の晴間に、薄暗い庭の隅などから、折々蝶になつたのが飛出す。それは竹の植込でもある庭や玄關先などで、誰しも經驗することであるが、かうして一句にして見ると、全く五月雨頃の陰鬱な氣分が實感される。そしてやはり平凡な取材でない事が氣づかれる。

初雁や月のほとりより顯はるゝ

かりがねの重なり落つる山邊哉

共に平淡な描寫の中に盡きない滋味がある。句意はそのまゝで何の巧もないが、幾度誦して

○五月雨や　この句雪の聲（安永九年刊）に出づ。
○竹の蝶　竹毛蟲蝶。鱗翅類に屬する昆蟲。竹の葉を食害する。
○初雁や　この句まだら雁（天明三年刊）・年尾集に出づ。
○かりがねの　この句石をあるじ（明和八年刊）に出づ。

○立臼の　この句雪の聲（安永九年刊）に出で、「田家に遊びて」と前書がある。

○初霜や　この句樗良發句集に出づ。

も倦く所がない。よく自然の實情を得て居るからである。一夜雁聲を聞いて空を仰げば、今し山の端を離れた月のほとりから、一羽、二羽、初雁の姿が墨繪のやうに浮び出て來る。又物靜かな秋の夜、遠くの山邊へ重なり合ふやうに下りて行く一列の雁がね、その啼聲に一入夜寒が感ぜられる。いづれも靜かに味はふべき句である。

立臼のぐるりは暗し夕時雨

百姓家の土間に大きな臼がすゑてある。外には寒々と時雨が降つて、もう日も黄昏れた。薄暗くなつた土間の中でも、ことに臼のまはりは濃くかげつて居る。物わびしい光景である。

初霜や飯の湯あまき朝日和

空は拭つたやうに晴れ渡つた冬の朝、空氣は急に冷えて、初霜が白くおいて居る。あたゝかく立上る湯氣を吹きながら、朝餉の膳に啜る飯の湯も、今朝は特に甘く味はれるといふのである。誠にこの湯の味の如く、淡々とした中にうまみのある句である。

○紛るべき　この句續明烏（安永五年刊）に出づ。

○消えもせむ　この句年尾集（安永年中刊）に出づ。

「樗良墓」（宇治山田市岩淵町、與坊境内）

○白魚や　この句續の原に出で、江戸の人、枳風の作。これを芭蕉の句と傳へるのは誤である。

紛るべき物音絶えて鉢叩

まだ宵の間は物音に紛れて、つい聞きすごした鉢叩も、夜が更けるにつれて往來の人も絶え、寒さうな空也念佛の聲と瓢の音のみが、靜かな夜の町にひゞき渡る。やがてそれも遠くの小路へ消えて行くらしい。

※消えもせむ有明月の濱千鳥

有明の月は白く西の空にかゝつて居る。その淡い月光の下に鳴く濱千鳥は、消えてもしまひさうなはかない趣である。

※白魚や石にさはらば消えぬべし

も白魚のかぼそくはかないさまをよんだのであるが、これは全然說明的な敍法であるのに對し、樗良が「消えもせむ」と詠歎的に言つたのは、一層餘情を深めて居る。

樗良墓

曉の海邊はしら〳〵として、月の影も今にも消えさうである。そこへチヽと飛びかふ千鳥のあはれは、白魚のはかない美しさよりは、更に詩人のおもひを傷ましめるであらう。芭蕉の

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜

に至つては、もつと烈しい感傷が籠つて居る。

こちへ來ればそちが戀しく、鱠を食へば蕎がゆかしく成り候。桂舟子歸り候に付、一書申上候。愈ゝ御安靜嬉しく候。御摺物も嬉しく候。此地俳事は海山の如く俳諧の中を分入る思ひに候。三里五里づつ人々迎ひ送りくれ候て嬉しく候へ共上手無之、俳諧の中に俳諧戀しく、樂しみは色事などを樂しみと致し居申候。句も挨拶のみ故御聞かせ申すも無之候。小松にて挨拶の句に、ことばに陳ぶるといふ心を

來し方を扇に畫く花しぐれ

又一夜語るといふ心を

梅が香も月のなさけも夏一夜

時鳥啼くやちらりと月にうつり

などなりけり。留主の後乞食せぬ樣に奉祈候。八月中には歸り可申候。御内樣方に可然御傳へ可被下候。頓首。

○手にとらば　この句甲子吟行に出づ。

○こちへ云々　樗良が北陸地方に旅行中伊勢の門人逸哉・只山・南洞の三人に送つた手紙。樗良の洒落な面影がよく窺はれる。

○半化坊發句集　蟠水編。天明七年刊。

○正月や　以下の句は特に註したものの外はすべて半化坊發句集による。

高桑闌更

名忠保、諱正保、通稱長次郎、半化房・狐狸窟・二夜庵・南無庵・芭蕉堂等の別號がある。加賀金澤の人。麥水と同じく俳諧を希因に學んだが、寶暦頃から芭蕉の遺風を發揚する事に努め、『花の故事』『有の儘』『落葉考』等を撰んだ。諸方を行脚して遂に京都に止り、晩年洛東双林寺中に南無庵を營んで住んだ。寛政十年歿、年七十三。なほ撰著には『芭蕉翁消息集』『俳諧世説』等がある。句は『半化坊發句集』に收めらる。なほ『闌更發句集』には洩れたものを多く集めてあるが、それは稿本のまゝ刊行を見ないで終つた。

正月や三日過ぐれば人古し

一陽來復、新しい年を迎へては、物皆新しく、我も人も生れかはつたやうに感ずるが、それも元日、二日、三日まで。四日となればはや屠蘇の香もさめ、裃の折目正しい年賀の客も稀に、やがて舊態依然たる我と人とに復る。

何人にも同感される世態人情の自然である。極めて解し易いかはりに、又平俗の氣を免れない。

梅が香や思ふことなき朝朗

闌更像

何の屈託もなく、のんびりとした春の朝、何處からともなく匂ひ來る梅が香。誠に思ふ事なきのび〳〵した氣分である。平明暢達の句風は、まさに闌更の代表的作品の一と許してよい。

闌更が希因の門に出でながら、支考・乙由の遺蹤を追はず、直ちに貞享・元祿の風調に接しようとしたのは、同門麥水と揆を一にして居た。だが彼は人と爲り溫順篤厚で、あまり急進過激な事を喜ばず、『有の儘』の中にも、

予が門派に至りては祖翁に延寶・天和の作あるを我が翁の魂とあやまり、或は漢語を用ひ大和言葉をかりて言を巧にし、或は無益の長句を作りて、これを祖翁の洒落と思ひ、云々

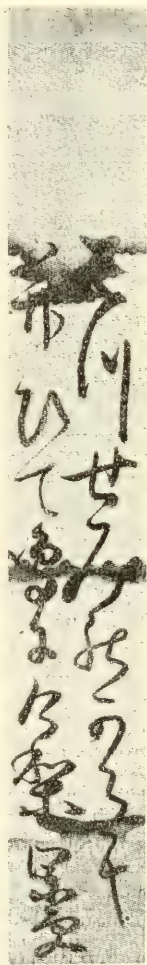
▽闌更像（『俳諧百家仙』所載）

薪盡て門を出れは春日かな　闌更

○有の儘　明和六年刊。闌更の俳諧に關する考を最もよく見るべきものである。

▽闌更筆蹟（京都 中野氏藏）
はつせみの雲に幷びて鳴にけり　闌更

と言つて、暗に麥水等の主張に對して反對の語勢を洩らして居る。かくて天地人情の自然に出でて、一毫の私を容れないのが風雅の本體だと論じ、奇矯に趨り粉飾を施すことを努めて排し、專ら達意平明を旨とした。隨つて彼の代表作とされるものの多くは、平常一般の境地を捉へて、少しも奇を弄する事なく、しかもその間によく自然の趣を得て居る。所謂有の儘なるよ

闌更筆蹟

みぶりが彼の特色であつた。しかし常にかうした境地のみに句を求めようとすると、動もすれば藝術的な緊張感を缺き、平板卑俗に墮する虞れがある。事實闌更にもその弊は少くなかつた。特に晩年彼の名聲が加はるに及んでは、世俗に迎合して一層俗調に傾く事が甚しく、遂に南無庵を所謂月並調の本山たらしめるに至つた。

月の夜や石に登りて鳴く蛙

蛙の句といへば、その啼聲をよんだものが多い事は勿論だが、これは月に浮れ出たか、石の

上に這ひ登つて、大きく口を明けたその姿態が主となつて居る。手をついて歌申上ぐる蛙と、一脈相通じた輕いをかしみがあるが、これは「古今集」の序文をもち出す必要もなく、自然なほゝゑみだけが殘る。

川船や雲雀啼き立つ右左

平野の中をゆるくうねつて川は流れて居る。兩岸は見渡すかぎり菜朧と麥圃、所々に藁葺の屋根が見えるだけである。春の日永を川船で暢氣に下つて行くと、その兩岸ではひつきりなしに雲雀が啼き立つて居る。何の技巧も加へない敍景の句として、いかにも川船の長閑な氣分が現はれて居る。

五月雨や鼠の廻る古葛籠

幾日も〳〵降續く五月雨。古びた葛籠が一つおかれてゐる。いづれ、廢寺か何か、荒れはてた住居であらう。雨漏のしみも見える樣な氣がする。さなきだに淋しきに、カサコソと鼠がそ

○手をついて　宗鑑の句「手をついて歌申上ぐる蛙かな」（五頁參照）

○川船や　この句發句三傑集（闌更門車蓋編、寛政六年刊）による。

○五月雨や　この句も發句三傑集による。

の古葛籠のまはりを驅けめぐる。陰鬱な、じめ〳〵として、そして一脈の凄味さへある。蕪村の

しぐるゝや鼠のわたる琴の上

と同工異曲と言つても宜からう。

曉は土に燃え入る火串かな

土にさした火串が、夜明頃になるともう短く燃え下つて、地面にくつつくばかりになつて居る。それを「土に燃え入る」と表現したのが一句の生命である。「土に消え行く」などと言つたのでは、たゞ事實の說明だけに終る。終夜待つて居た獸も來ず、空しく火は燃え盡き、夜は白々と明けて行く。その幽かな寂しい感じが、「燃え入る」といふ主觀的な言葉によつて言ひ現はされて居る。

因みにいふ、この句は一に、五七が「曉の草に燃え入る」となつて居る。燃え殘る曉の火串を主題としてゐるのだから、「曉は」は一本の如く「曉の」とありたい。たゞしその白々とした寂しい趣は、草よりも土の方によけい感ぜられる。もし添削が許されるなら

○火串　ホグシ。鹿などの獸を獲る時に、松火を串につけて地にさし立て、獸の火を慕ひ近寄るを待つてこれを狙ひ射る。その串を火串と言ひ、かくして獸を獲るを照射「トモシ」と言ふ。共に夏の季語である。

曉の土に燃え入る火串かな

としたいと思ふ。

大木を見てもどりけり夏の山

句意は平明解を須つを要しない。夏山に入つて、青々と繁茂した大木を仰いで歸つた。たゞそれだけであるが、一見てもどりけり」と平易率直に敍した間に、自然の壯大さにうたれた感激が自ら籠つて居る。前の句にあつては、主觀的な表現によつて一句の情趣を生かしたのであるが、これはあまりにも[illegible]な自然の偉力が見せつけられて居る。なまじつかな主觀的感激的な言葉をまじへるよりは、かうした平淡簡明な言葉の中に、むしろ素直なそして深い魂の驚きが見られるのである。許六の

大木を眺めて居たり下すゞみ

は、相似た句境のやうであるが、やゝ心を潜めて味はふと、これはたゞ高い緑の梢を眺めて涼を納れて居る、ほんの輕い感じにすぎない事に氣づくであらう。

○大木を　この句[illegible]（安永五年刊）を始め諸書に出で、半化坊發句集にも收めらる。

○雨乞や　この句發句三傑集による。

○水ありや　この句發句三傑集による。

※雨乞や火影に動く雲の峰

雨乞の篝火が天を焦さんばかりに燃え盛つて居る。その眞ツ赤な焰に照らされて、入道雲がむく〳〵と動くのである。大旱に喘ぐ人々の上に、壓へかゝるやうにのしかゝる雲の峰、烈々と燃え上る火影、暑苦しい中に壯大な趣を感ずる。同じく火影に描き出した句では、

鵜の面に川波かゝる火影哉

も面白い。水底から浮び出た鵜の面に、川波がざぶりとかゝる。それに篝火の火影がチラと映る。非常に動的な感じである。雲の峰の動くのは重々しく壓迫的で、これは輕く潑剌として居る。鵜飼の寫生的句として上乘なものであらう。

※水ありや家鴨の覗く萩の下

句意は明かである。子細らしく首をかしげて覗き込む家鴨の姿、萩の枝がわづかに揺いで花

が散つた。向うにはちよろ〳〵と淺く水が流れて居るらしい。可憐な情趣である。

薄月や水行く末の小夜砧

村はづれの小川の岸に立つて居る。薄月夜の淡い光の中を、水は靜かなせゝらぎの音を立てて流れて行く。その流れ行く遙か川下のあたりから、砧の音がかすかに響いて來るのである。夢のやうな情緒に包まれた句だ。

小坊主の門に立ちけり秋の暮

この句から私は全く異つた二種の情景を描き出す。それは小坊主と門との語義的解釋の相違に基いて居るのだ。

一は小坊主を寺の小僧と解し、隨つて門はお寺の山門と見るのである。正面の山門の傍には十四五の可愛らしい小僧さんが佇んで居る。門の片手には鐘樓がある。今撞き終つたばかりの鐘の餘韻が、まだかすかに殘つて居るやうだ。小僧さんは遠い山の彼方の故里でも思ひ出した

○小坊主の　この句發句二僕集によるる。

▽闌更筆蹟（兵庫 柴田氏藏）

日の影や我が肉ゆるき梅がもと
ほとゝぎす聲ある影の地をはしる
けふの月空はかぎりもなかりけり
驚かぬあびきのさまやはつしぐれ
　　　　　　　　　　闌　更

闌更筆蹟

のだらう。悲しさうな顔をしていつまでも門の傍から離れようともしない。まづさうした情景である。

　一は小坊主をたゞ子供と解し、門は普通の家の門と見るのである。こゝらには一向見なれない子供である。毬栗頭で背は低いが、眼が何となく異様に光つて居る。それがさつきから門のあたりに立つたまゝじつとして居るのだ。もう秋の日は暮れかけて、吹く風もうすら寒いのに、まだ立ち去らうともしない。一體あの小坊主は何だらう。さう言つた情景である。

　前解に從へばたゞ物淋しい秋の夕暮の景である。後解は淋しさの上に一種凄涼の感が加はつて來る。作者はそのいづれの情景を心に浮べたのか知らないが、前解はむしろ平凡に近い。後解の方が句としてはやゝまさるかと思ふ。たゞこゝに問題となるのは、かうした二解を容れ得

〔〕枯蘆の　この句「七部集」を始め諸集に出づ。明和初年の作と推定される。

〔〕もゝのやどり　文化七年刊。得終尼闌更の遺を撰ぶ。

べき場合、單に句として面白い方の解に從つてよいかといふ事である。この際他に句解の正否を決すべき標準が求められないとすれば、やはり作者の作風といふ點に最も重きを置かねばならぬのではあるまいか。卽ち闌更の奇を求めない作風からいへば、たとひ平凡でも前解に從ふのが穩當である。もしこれが蕪村の作だとすれば、當然後解が想ひ浮べられるであらう。——勿論蕪村ならばかうした平明な調では滿足しなかつたらうが。

枯蘆の日に〳〵折れて流れけり

闌更の七囘忌追善集「もゝのやどり」に、「二十年停二杖於東都一再二興一夜庵一、嘗有二枯蘆唫一、則世擧稱二枯蘆翁一」とあるのによれば、この句は闌更が江戸滯留中の吟で、當時すでに彼の俳名が高かつた事が知られる。今日に於ても、彼の作中最も汎く知られたものである。

川邊に茂つた蘆も枯れ果てて、日毎に折れては水に流れて行く。昨日も今日もまた明日も、——やがてはすつかり折れ盡し、流れ盡してしまふ事だらうといふのである。枯蘆が折れて流れて行くのは、今目前に見てゐる景である。そこへ「日に〳〵」と時間的經過を示す言葉を交へて、この景に對する詠歎の感を深めて居る。卽ちかうして昨日も流れ、今日もまた流れて行

くといふのに、蕭條たる冬の寂しさ侘しさが次第にまさり行く感じが味はれる。しかもそれがこの平明な敍法によつて表現されて居る所に、闌更の特色が十分見られる。世に枯蘆の闌更と稱されたといふ程、彼の代表的作となつたのも故なきではない。しかし由來物の長所は同時にまた短所である。彼の流風が遂に平俗な月並調の端を發いたのみならず、又「日に〳〵折れて」といふやうな平々坦々たる敍法が、時に句の力を甚しく弱めて居る。

糸遊の亂れ〳〵て靜かなり

同じ色を重ね〳〵て雲の山

等、流暢な調子がかなり有效に働いては居るやうだが、一面平弱な感を伴ふ事を否めない。

○白雄句集　門人碩布の編。寛政五年刊。

○二股に　以下句はすべて「白雄句集」によつて掲ぐ。

加舍白雄

信州上田の人。名吉春、通稱五郎。初め松露庵三世烏明に從ひ昨烏と號したが、後烏明の師烏醉にも親炙し、又號をしら尾・しら雄と改め、終に白雄の字を用ひた。明和六年烏醉の歿後諸方を遊歴し、安永九年江戸に春秋庵を開いた。その間事によつて師烏明と義絶し、江戸の俳壇に特立獨歩するに至つた。寛政三年歿、年五十七。「加佐里那止」「春秋稿」「俳諧寂栞」等の撰著がある。句は「白雄句集」に收められる。

二股になりて霞める野川哉

單純な敍景句である。野川の末が二股に分れて、霞の中に遠く流れ去つて行く。悠々として眠さうな景色である。特にすぐれた作といふのではないが、たゞ廣いながめの中から、巧に一のまとまつた視野を劃し取つて居る。

夕潮や柳がくれに魚分つ

▽白雄像（追善集「はなの」所載）

こゝにはかなり複雜な情景が描き出されて居る。夕潮がひた〳〵と川べりに寄せて來た。朝からそこの柳の陰に釣を垂れてゐた太公望連も、もうそろ〳〵歸り支度にかゝつた。めい〳〵の獲物を分け合つて、さて家路につかうといふのである。

白雄像

上五の「夕潮や」でまづ背景をなす自然が大きく眼前に浮べられ、次の「柳がくれ」で海近い川岸のさまがはつきりと定められる。そして更に「魚分つ」で人の動作が細かく描き出されるといふ順序だ。描寫の手法に少しも無駄やあぶなげがない。

木鋏の白刃に蜂の怒りかな

これは更に纖細な描寫である。庭の植込の間にちよき〳〵と音して光る木鋏の白刃、今までとまつて居た所を追はれた蜂が、羽音高く飛びめぐつて、小さな怒りを爆發させて居る。細か

な觀察であり、又巧みな表現である。

人戀し灯ともし頃を櫻散る

長い春の日もほのかに庭の隅から暮れそめた。はや書院の窓には淡い灯の影がほつかりと浮んで居る。何となく人戀しさの思ひに堪へないで、ぼんやり夕闇の空を見上げると、風もないのに櫻の花が二片三片、ほの白く散りかゝるのであつた。春の夕べの淡い感傷が、惱ましくもまた美しく描かれて居る。

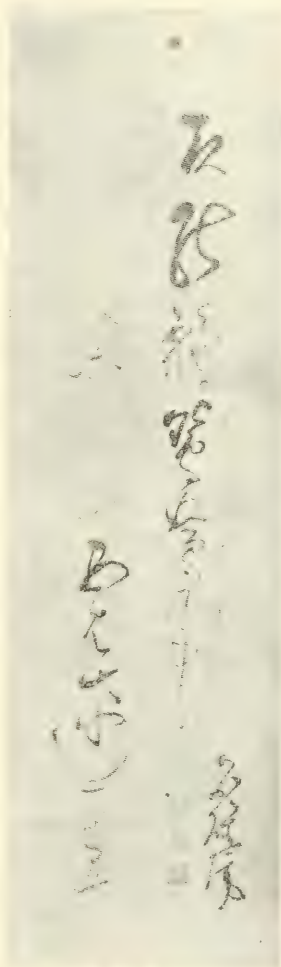
子規は白雄の句を評して、纖麗にして孱弱だと言つて居る。蜂の怒りや灯ともし頃の櫻については、確かにさうした批評も當つて居るであらう。しかしそれは決して巧緻な技巧から來たものではない。白雄は「加佐里那止」の中に明かに主張して居る通り、所謂飾りなき自然を貴ぶべきをその句作の根本精神とした。例へば

長々と肱にかけたりあやめ賣

町中を走る流れよ夏の月

の如きは、句の可否はとにかくとして、最もよく彼の理想とする所を見るべき作であつた。こ

○加佐里那止　カザリナシ。明和八年秋、白雄が京都の旅舍に滞在中著はした書で、當時の俳壇の傾向を評し、先師烏酔の精神を祖述して、自ら句作の態度を明かにしたもの。

には恰かも闌更の作風と同一であるが、白雄は闌更よりももつと複雑な性格の持主であつた。

白雄筆蹟

元來白雄は師と義絶したり、門人に難詰の書を送つて責めたりして居るのでも知られる通り、一面寛容の德に缺ける所があつた。しかしそれだけ自ら高しとして、あへて他と妥協しない藝術的な潔癖さがあつた。またその潔癖の中に多感な情熱も持つて居た。だから平明無技巧を主張しながらも、闌更の如き平俗單調に陷る事はなかつた。その複雜な性格と詩人的な多感性とは、寧ろ時に纖細な句を生み感傷の弱さをさへ示して居るのである。その外

瓜の香に狐嘘る月夜かな

我が心聲せで雁の歸れかし

等、彼のかうした特色を窺ふべき句はなほ多い。しかしその故に彼が専ら纖麗巧緻を尚んだと

▽白雄筆蹟（松宇文庫藏）

夜の鶴鶯の中よりもあはれなり　白雄房

○蕪村の牡丹の句

日光の土にも彫れる牡丹かな
不動畫く宅磨が庭の牡丹哉
金屏の赫奕として牡丹かな
ぼうたんや白銀の猫こがねの蝶
方百里雨雲よせぬぼたん哉
虹を吐いて開かんとする牡丹哉

等。なほ三七七頁參照。

するのは當らない。要するに巧まず作らず、所謂衒りなき心で句境に對しながらも、その中にたえず複雜な事情が流れてゐるといふのが、彼の藝術の姿であつた。

園くらき夜を靜かなる牡丹哉

蕪村の牡丹の句には、白日の花壇に咲き誇る華麗さを詠じたものが多いが、これは暗夜の園に音もなく靜まつてゐる沈重さである。闇の中にパッと大輪の花をかざして、默々とひそまつて居る牡丹の花。それは白日の牡丹よりもつと複雜な美感をもつて居り、沈重な中に妖艶の氣さへ帶びて來る。

子規啼くや夜明の海が鳴る

曉の枕に遠く海鳴の音が聞えて來る。とたんに一聲啼きすぎた子規。夏の夜明の氣分が鮮やかに寫し出されて居る。

菖蒲湯や菖蒲寄り來る乳のあたり

白雄の纖細な觀察を見るべき句である。しかもそれが故らに特異の句材を捉へたものでなく、かうした平凡な境地に想を構へて居る事は注意するに足る。

花芥子に組んで落ちたる雀哉

同じく細かな觀察であるが、「組んで落ちたる」はあまりに巧緻にすぎた嫌ひがある。もとよりそれがこの句の生命ではあるが、少くともわざとらしさを免れないと思ふ。

めくら子の端居淋しき木槿哉

盲目の子が人に交つて遊ぶ事も出來ず、一人しよんぼり緣側などに出て居る。そこへ木槿の花が咲いて居るといふ情景である。時刻はいつと句面には現はされてないが、自ら黃昏近い感

○山かつら　明方山の端にかゝる雲をいふ。

じがする。もう木槿の花も凋む頃なのだ。そして盲目子も色の白い女の子らしい氣がする。緣側の柱によつた目鼻立の細い美しい女の子、あはれや兩眼は盲ひて、俯向きがちに淋しい顏をしてゐる。日はすでに黃昏れかけて、垣根に咲いた木槿の花もいつか凋んでしまつてゐる。さうした解釋は、決して勝手な又無用な想像ではない。この一句の情趣から自然に生ずる連想であり、又この句を鑑賞する上にも當然考へらるべき事である。而してこの自然な連想が豐かである事は、卽ち句の內容の複雜さと、作者の構成の手腕とを示すものである。

作者はこの句で最初盲目の子といふ特殊なものを捉へた。讀者は普通の子供でなく、不具の子供といふ點から、すでにさまざまな連想を逞しくする。爲にそれが木槿の花に對して淋しく端居してゐる姿に定つても、單純な淋しさあはれさよりも、もつと複雜な情緒が味はれるのである。

霧の香や松明捨つる山かつら

まだ夜深い頃に宿を立つた旅人が、手にした松明も燃え盡きる頃、東の山の端はほのぼのと白んで、曉の雲が薄赤くたなびきそめた。「もう夜は明けてしまつたのだ」。さう呟いて松明を

ほんと投げ捨てると、あたりの空氣がかすかに搖いで、曉の霧の香がむせるやうに迫つて來る。冷え〴〵とした秋の夜明の感觸が、心にくいまで巧に現はされて居る。

冬近き日のあたりけり鳶の腹

大きく輪を描いて舞ふ鳶の腹に、斜にさした薄い日影が、寒々と白けて見える。もうすぐにあの雲から時雨が降るのだなと、冬近いわびしさがしみ〴〵と感ぜられるのだ。

前の霧の香にもこの句にも、感覺的な匂ひが著しく見られるが、更にこの句や

煤散るやはや如月の臺所

等は、季節の推移に對する作者の微妙な感覺のはたらきを想はせる。

炭竈や塗りこめられし蔦かづら

山深い炭燒小屋の竈のまはりに、泥と一しよに塗りこめられた蔦かづらがある。いづれは秋と共に枯れ行くべきものではあるが、かうした炭竈の泥の中に朽ち果てる運命が、殊に果敢な

くあはれに感ぜられるのである。

この句の季題は「炭竈」で「蔦かづら」ではない。卽ち冬季の句である。隨つて炭竈の泥の中から、塗りこめられた蔦の紅葉が美しく現はれて居るさまだと解するのは當らない。

いちはやく燃えてかひなし榾の蔦

これも季題は蔦でなく「榾」である。榾を圍爐裏にさしくべて居る。まだ榾に火が移りもしない中に、卷きついた蔦だけがめらめらとあつけなく燃えてしまふ。さうした何でもない事がらであるが、詩人の豐かな感受性に觸れては、それがやはり詩となり句となるのである。くべたかと思ふとすぐ燃え上つてしまふ。そして燃えてしまつたあとには、空虛なはかなさが殘つて居る。それが「いちはやく」といひ、「かひなし」といふ言葉によつて適切に表現されてゐる。

鷄の嘴に氷こぼるゝ菜屑かな

菜屑が落ちて居るのは、鷄小屋の中でも、臺所の土間でも、裏の畑の隅でもよい。今朝の寒

さに固く凍(い)てついてしまつてゐるその菜屑を、鷄がコツ〳〵とつゝき破るやうにして拾つてゐる。拾ふ度毎にこまかな氷の片(かけ)が、鷄の嘴からキラ〳〵と光つてこぼれるのである。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

○鳥醉※いへることあり。蕉流に忘るまじきはさびしみの實也。をかしみに雅俗をわきまへ、花鳥の風流をもととすべし。

○姿と情の事は道の大事也。姿を先として情を後にすべし。後にすれば餘情あり、姿とゝのひて餘情の深きを知るべし。句の力も作者の風流もその深き淺きに顯はるゝなり。

○自然といふは私をいれざる也。さればぞ無分別のところに分別ありと申されしなり。

○歌にもふとく大なるあり、ほそくからびたるあり、艶にやさしきあり。俳諧にもそのさまあり。人の心は一日の盛衰旦暮同じからず。まして春秋のさま、秋にはなど老をいはざるとありしも、むべなる哉。翁のくさ〴〵を感ずるに、古哲のいへる如く太きも細きも强弱共にさびしみの實あり。風骨は翁の風骨にして、同じ句作のみし給はざりしを猶も尊むのみ。

○鳥醉はたくみなるを嫌ひ、たゞ自然をと申されし。

○鳥醉云々　以下「加佐里那止」の一節。白雄の俳論を窺ふ事が出來る。

○蓼太句集　門人吐月編。安永六年刊。なほこの後門人完來が二篇（大明九年刊）・三篇（寛政五年刊）を編んで出した。

○むつとして、世の中は　共に蓼太句集に出づ。

大島蓼太

本姓吉川氏、通稱平助、名陽喬、里席・宜來・豐來・老鳥・老鶯巣・空摩居士等の別號がある。信州伊那郡大島の產であるが、少時から江戸に住んだ。元文頃から雪中庵二世吏登に師事して、遂にその三世を嗣いだ。爾來江戸座一派に拮抗して雪門の興隆に努め、遂に門人三千に餘ると稱せられ、俳壇的勢力を十分扶植する事が出來た。天明七年歿、年七十。その撰著は二百餘部に及ぶと言はれるが、就中『住吉千句』『百羽搔』『雪おろし』『發句小鑑』『附合小鑑』等は知られて居る。句は『蓼太句集』に收められる。

むつとして戻れば庭に柳かな

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

共に人口に膾炙した句である。その膾炙された所以は、共に一種の卑近な談理を含んで居るからである。前者は柳の無抵抗主義にならふべき事を示し、後者は世の轉變常なき事を教へて

○座右の銘の句　「物言へば唇寒し秋の風」（一四九頁參照）

▽蓼太像
（追悼集「藤衣」所載）

○芭蕉句解　[illegible]註解したもの。寶暦九年刊。

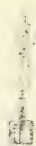
○七部捜　師吏登の口授を筆記したもので、七部集の註釋書として最も古い。寶暦十一年刊。

○栅さがし　俳諧に關する雜話を門人に筆録させたもの。安永五年刊。

○無門關　蕉門諸家の俳論を録したもの。寶暦十二年刊。

○俳塚　寶暦十三年深川要津寺境内に建てた芭蕉の塚。

居る。すでに芭蕉の座右の銘の句に於ても述べた通り、教訓の意を含むから藝術でないといふ事は言へぬが、もとよりそれは藝術の正道ではない。況んやこの句の柳や櫻は、作者が最初から談理の具として選んだもので、何等美的な感激を伴つて居ないのである。いかに人口に膾炙されて居ようとも、到底低級な作たるを免れない。

蓼太像

蓼太とても中興名家の一に數へられる作家である。あへてこの種の句を理想として居たわけではあるまいが、彼は元來高踏的な詩人肌でなく、實際的な事業家型の人であつた。一生の間東西の吟行數十度に及んだといつても、一蓑一笠の姿で山水の間に吟魂を練らうといふのではなく、駕籠に乘り供を連れ、到る所で歡迎の宴を張られ盛大な句會を催す有様であつた。だから彼が中興の業を大成すべく、或は奥の細道を辿つて芭蕉の遺草を拾ひ、或は『芭蕉句解』『七部捜』『栅さがし』『無門關』を選び、或は俳塚を築き芭蕉堂を再興したのも、眞に祖翁の遺德を追慕する念に出るといふよりも、寧ろこれを自家の宣傳に利用したのである。即ち時勢を見るに敏で、かつ實際の經營的手腕に富む彼は、當時俳壇の革新が叫ばれ、蕉風復歸の聲が盛んなのに乘じ

て、かうした宣傳的事業を以て、江戸座の勢力を壓へようとしたのであつた。爲にその指導精神としては芭蕉を說きながらも、努めて大衆に迎合する事を忘れなかつた。かくて蕉風復古の名の下に、平易通俗な句風を唱導したのである。

こゝに揭げた二句の如きは、蓼太も決して芭蕉の精神を體現したものとは思はなかつたにちがひない。彼の句集中にも相當に佳句が多く見出され、又「附合小鑑」「發句小鑑」等の說のよく蕉風俳諧の要領を得てゐる事を思へば、彼自身としては相當に藝術的理解をもつて居た事が分る。たゞ彼の性格上、かうした俗受けのする句によつて、大衆に迎へられる事を喜ばないわけに行かなかつたのである。

因みに言ふ。「世の中は」の句は解として二樣にとれる。櫻を全然比喩と見て、この世の中といふものは、僅か三日見ない間に咲き又は散つてしまふ櫻の如く、轉變常なきものだといふので、俗間「三日見ぬ間の櫻」と傳へて居るのは、全くこの比喩的意義に解した結果である。一は櫻をやはり實體と見て、世間は一寸引込んで居る間に、すつかり花盛りになつてしまつたわい（又はすつかり花が散つてしまつたわい。）と、嘆息したのであると解く。いづれにせよ理窟を言つて居るのは同じだが、後解に從へばとにかく櫻に對する幾分の實感が伴ふ。蓼太の名譽の爲にも後解を採りたいと思ふ。隨つて「三日見ぬ間の櫻」では、全く救ひ難いのである。

○附合小鑑　附合の作法を初心の爲に說いた書。安永四年刊。
○發句小鑑　同じく發句の作法を說いた書。天明七年刊。

〇馬借りて　この句五車反古・蓼太句集に出て、共に「行旅」と前書がある。

〇鳥遠うして　この句蓼太句集に出づ。

馬借りてかはるぐ＼に霞みけり

前書によつて旅中の景である事が知られる。二三人の道づれだ。急ぐ程の旅でもない。一匹の馬を傭つて、かはるぐ＼に乗る事にした。乗つた一人だけは遠く向うに霞んで、あとから徒歩の連中がゆつくりついて行く。暢氣な春の旅の趣である。

前の「むつとして戻れば」や「三日見ぬ間に櫻」にまさる事は萬々だが、かはるぐ＼に霞むといふのには、やはりわざとらしい巧みさがある。つまり俗受をねらつた所である。

鳥遠うして高欄に牡丹かな

「鳥遠うして」といふ漢文調、高欄。牡丹などの支那趣味。蓼太もまた時代の兒である。かうして蕪村や曉臺の後塵を拜したやうな句も作つて居る。「なあに、俺だつてやれぬ事はない」といつた程の心意氣を示したものであらう。もとよりこれは決して惡い句ではない。少くともある高雅な趣は示されて居る。しかしその趣も、結局言葉と道具立だけに求めようとして居るの

で、誦し去り誦し來つて見れば、何となく内容の空虚を覺えるのである。

※虫干や紙魚聲あらば句や啼かむ

これも前句と同じく漢文調であるが、「聲あらば句や啼かむ」は、芭蕉の眞蹟に對して居るだけに、この際前句ほど空粗に響かない。

※絶え〴〵に溫泉の古道や苔の花

「溫泉の古道」は溫泉場へ通ずる古道である。今は平坦な新道が開かれて、古道を通る人は全くない。所々崩れ落ちた石に塞がれたり、生ひ茂る雜草に埋れたりして、もう道も絶え〴〵になつて居る。その荒廢した古道のじめ〳〵とした岩陰などに、眞白な苔の花が一杯ついて居る。折々溫泉の匂がほのかに流れて來る。蓼太の句中では最も素直な佳句であらう。

※五月雨やある夜ひそかに松の月

○虫干や　蓼太句集二篇に出で「杉風家藏翁の眞蹟を見る」と前書がある。

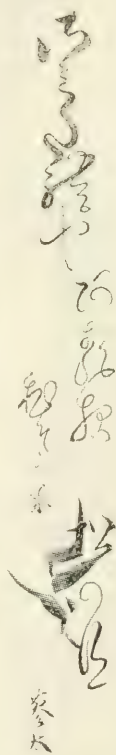
○絶え〴〵に　この句蓼太句集に出づ。

○苔の花　又花苔。苔が夏になると繁茂して、花のやうなものを細い莖につけて少し高く生ひ出る。それをいふ。勿論眞の花ではない。

○五月雨や　蓼太句集に出て居るはもとより、當時の諸書に多く採錄されてゐる。

▽蓼太眞自畫賛（松宇文庫藏）
さみだれやある夜ひそかに松の月　蓼太

この句も有名な句であり、蓼太自身も甚だ得意とした作である。降りつゞく五月雨に、もう月の影を見ぬ事も幾夜であらうか。ある夜ふと見上げた松の木の間に、思ひがけない月影を見出したのである。雨の晴間にこつそり姿を見せた月を、「ひそかに」と表現した巧みさがこの句の生命で、それが又この句を名高くさせた所以である。

蓼太筆自畫賛

この句を當時長崎に滯在してゐた清人程劔南が見て大いに感じ、

長夏草堂寂　連宵聽レ雨眠
何時懸二月色一　松影落二庭前一

と漢譯し、かつ文を作つてこれを賞した。宣傳に拔目のない蓼太の事であるから、早速一集を撰んでこの事を吹聽し、自ら

もろこしに見ぬ友ひとり初霞

と言つて大に喜んで居る。しかし句はもとより藝術的に高く評價さるべきものではない。「ある夜ひそかに」と月を擬人化した言ひ方は、全く理智的な解釋から來たもので、決して實感に

○つべこべ草　天明六年刊。蘆橘庵著。

○蓮二社中　蓮二は各務支考。その一派のこと。

○發願文　正德五年刊。

○我が影の、岩端の　共に蓼太句集に出づ。

即して生れたものではない。それだけ多くの嫌味が感ぜられる。しかもこの巧妙な理智的解釋が俗衆を感嘆させた所以であつた。

この句はあまり世評が高かつた爲、實は蓼太の許に田舍から添削に遣はした句を、蓼太が貰ひとつて自分の作にしたのだなどといふ浮説も行はれた。それは勿論信ぜられないが、『つべこべ草』に

近頃あづまの何某が句に「さみだれやある夜ひそかに松の月」といひてもてはやされしも、昔美濃の蓮二社中の菊佐が句に

木枯やある夜ひそかに松の雪

と出てあるからは、はめ句かとも思はる。

と言つてゐるのは事實である。卽ち右の菊佐の句は、支考の『發願文』に出て居り、偶然の暗合ではあらうが、すでにこの先作があるとすれば、程劍南の賞讃を得て有頂天になつたのは、ちと滑稽の感がする。

我が影の壁にしむ夜やきりぎりす

○あら蓑の　この句蓼太句集二篇に出づ。
○あら蓑　新しい蓑。

岩端の鷲吹きはなつ野分かな

蓼太が大衆を導く爲の範として、この種の句は最も適切であつたらう。「壁にしむ」「鷲吹きはなつ」といふわざとらしさが、却つて初心な大衆をうなづかせるのに都合がよい。ともあれかうした句の境地は、江戸座の作風に比して、少くとも芭蕉の風雅に近づく道の上にあるものであつた。蓼太の中興俳壇に於る功績は、つまりこの程度に一般大衆の創作態度と鑑賞眼とを引上げた所に在ると言つて宜からう。

あら蓑の藁の青みや初時雨

今年の新藁で作つた蓑を始めて着た。雨も初時雨である。ほのかに青みをおびた藁の色と、ハラ〱と降りかゝるかすかな時雨の音と、清澄な初冬の風物の調和が感ぜられる。これは言葉や道具立で胡魔化したものではない。本當にその感觸を味はひ知つた句である。蓼太の作中最もすぐれたものであらう。

○灯火を　この句蓼太句集に出づ。

○更くる夜や　この句蓼太句集に出づ。

灯火を見れば風あり夜の雪

静かな雪の夜である。寒燈を守つて危坐すれば、今まで部屋の空氣は氷つたやうに動かないと思つてゐたのに、灯火がゆら／＼と揺いで居る。それではやつぱり風があるのだなと、氣がついたと言ふのである。大きな部屋の中などで、じつと灯火を見つめて居るやうな實情はある。しかし「見れば風あり」といふ叙法は、やはり理智に訴へて感ぜしめようといふので、嫌味たるを免れない。

更くる夜や炭もて炭を砕く音

夜更けて寥然としてひゞく物の音、炭をとつて炭を砕くのである。それが恰も金石の響を發するのだ。自ら寒夜の情たる事を知る。「炭もて炭を」といふ叙法は、些か蓼太式ではあるが、とにかく佳句とすべきものであらう。

黒柳召波

通稱清兵衞、春泥舍と號す。京都の人、初め服部南郭に從つて漢詩を學び、後ち蕪村について俳諧を嗜み、初老の頃から洛西等持院附近に閑居して專ら風雅を樂しんだ。明和八年歿、享年不詳。その句は『春泥句集』に收めらる。

元日や草の戸越しの麥畑

元日といつても年賀の人通りがあるのでもない。草庵のあたりはいつもと同じくひつそりとして、裏の戸越しに見える麥畑に、のんびりと日がさして居る。さうした平常と變らぬ自然を敍して、その中に閑を樂しむ作者の境涯を現はして居る。元日の句としては一般の作と趣を異にし、しかもやはりあらたまつた心の靜けさが味はれる。

地車に起き行く草の胡蝶かな

○春泥句集　召波の遺子維駒（コレコマ）の編。安永六年刊。

○元日や　以下の句すべて「春泥句集」による。この句には「等持院寓居の頃」といふ前書がある。等持院は洛西衣笠山の南麓にあり、夢窓國師の開基、足利尊氏の建立にかゝる。

○地車　代八車ともいふ。重い荷物を運ぶ大形の荷車。

地をゆすつて響く車の音に、今まで甘い夢を貪つて居た草の蝶が、飛び立つて行くさまである。地車の重い大きな響と、輕やかに飛び立つ蝶の姿との對照が、作者の興味をそゝつたのであらう。蕪村にも

地車のとゞろと響く牡丹かな

の句があるが、これは共に重い感じをもつたものの配合である。

朧月獺の飛び込む水古し

青々と淀んだ古い淵の水をさッと波立たせて、獺がどぼんと飛び込んだ。その凄味を帶びた光景に、朧々と霞む春の夜の月を配したのである。それは夏・秋・冬のどの月よりも、一番神秘的な句をもつた背景であらう。

これは恐らく實景でなく、作者の空想から生れたものであらう。例の蕪村のロマンチシズムの影響たる事は言ふまでもない。蕪村も獺はちよいく題材に用ひて居るが、この句と對させるなら、

河童の戀する宿や夏の月

○詩句　劉廷芝、代悲白頭翁に「此翁白頭眞可憐、伊昔紅顔美少年」。許渾、秋思に「高歌一曲掩明鏡、昨日少年今白頭」

○運慶　鎌倉初期の名高い佛師。始め奈良に住し、後に鎌倉に移つた。各地にその彫刻と傳へる像が多い。

などが、むしろふさはしいであらう。

蒲公英もけふ白頭に暮の春

句は蒲公英の花も白くほうけて、もう春も暮れて行くといふのであるが、その白くほうけた花を「白頭」と言つたのが面白い。即ち劉廷芝や許渾等の※詩句の連想がこゝに加はつて、白頭翁に擬人された蒲公英のさまが、暮春の情にぴつたり調和するのである。

灌佛や運慶閑に刻みけむ

運慶の作といへば、多く二王とか四天王とかいつた豪壯なものだが、偶〻その手になる釋尊の像がある。それを灌佛に拜んで、この像は多分運慶が閑を偸んで、手すさびに刻んだものだらうと言つたのである。

これも果して作者が灌佛會に經驗した事かどうか分らない。しかし實際運慶作の釋尊像を拜したとしても、句の興味の中心は所詮想像の上に置かれて居る。大きな二王の腕や足がこゝが

つて居る中で、佛師運慶が寸餘の木片を机上に刻んで居る靜かなさまが、讀者の腦裏に浮んで來ればそれでよいのである。

浴みしてかつ嬉しさよ簟

夏の夕べ、一風呂浴びて汗をさつと流し、涼しさうな浴衣がけで簟の上にすわる。その快い氣もちを言つたのである。「かつ嬉しさよ」は全く蕪村の口吻を摸したのであるが、それによつて平凡になり易い情景を生かして居る。

白馬寺に如來うつして今朝の秋

言ふまでもなく空想の句である。白馬寺といふ名稱に、まづ初秋の爽涼な氣を感じ、こゝに始めて佛像を安置した故事をかりて一句としたのである。それは蕪村が易水に根深流るゝ寒さを想ひ、指南車を胡地の霞に引去らせたのと、全く同一の境地であつた。卽ち蕪村のそれらの句解は、そのまゝ召波のこの句解にもあてはめる事が出來る。

○簟　竹で編んだ筵。夏季涼をとる爲に用ひる。

○白馬寺　後漢の明帝の時天竺から摩騰・竺法蘭の二比丘が來て、佛像經卷を齎したので、よつて明帝は長安雍門外に精舍を建て、白馬寺と名づけた。これが支那に於ける寺院の始初であるといふ。白馬寺と名づけたのは佛像等を白馬につけて來たからである。

○易水に　「易水に根深流るゝ寒さ哉」(三六六頁參照)

○指南車を　「指南車を胡地に引去る霞かな」(三六六頁參照)

召波は蕪村の門人中最も早くから從つた一人で、かつ蕪村と同じく初め漢詩に親しんだ。かの蕪村の藝術觀を示すべき離俗の法は、實に召波に對して說かれたもので、詩も畫も俳も要するに歸する所は俗を離るゝに在り、俗を離るゝには讀書に如くものはないとしたのであつた。召波がこの敎へを服膺したのは言ふまでもなく、その格調取材共に師に最も近かつたのは當然の事であつた。凡そ蕪村門下中最もよく師の風格を奪ひ得た者を求めるならば、蓋し召波の右に出る者はなからう。彼が歿した時、蕪村が「我が俳諧西せり、我が俳諧西せり」と言つて嘆じたのは尤もであつた。しかし召波はあまりにも師風を摸するに急で、彼自身の獨自な境地を拓く事に疎かであつた。かくて彼のどの作品をとつて

春泥句集

○離俗の法　蕪村の條三六九頁參照。

（春泥句集　蕪村の序の終と本文の最初。序の板下は蕪村の自筆、本文は几董の板下になる。）

虎の皮を引かふたる羊に類すべからずといふことを洛下の夜半亭に於て
六十二翁蕪村書
于時安永丁酉冬十二月七日

春泥發句選
春之部
元旦
ことごとく申は盡じ花の春
けさ春の氷こほらぬ水の精
春やつや師に鶴の一歩より
素袍着た誰音苫こと花の春
筆持院寓居の頃
元日や草の戸越の麦畠

○我が俳諧西せり　「春泥句集」の序文の中に見える。

○天瓜粉　黄烏瓜の根を水飛してとつた白い粉末。子供の汗もに撒布薬として用ひる。

見ても、結局蕪村の型を小さくしたにすぎないで終つた觀がある。とはいへ一部の『春泥句集』中には、高踏的な藝術の香の高い作品が少からず、中興俳壇の一異彩たるを失はない。

子の顔に秋風白し天瓜粉

子供の顔に白く天瓜粉が塗つてある。夏の間は何とも感じなかつたが、秋風立つ頃になると、それが白々と目立つて、まるで秋風の白さを想はせるやうだといふのである。天瓜粉の白さに秋の風が象徴されて居る。白粉の白さではもとより秋風の句にならないのである。

傘の上は月夜の時雨かな

月夜の時雨はことに趣の深いものであるが、この句は傘を中心にしてその情景を巧に描き出してゐる。時雨する夜に傘をさして歩いて居る。ふと氣が附くと、いつの間に晴れたのか、傘の上には月が明るくさして、地上にはつきり影を落して居る。そしてまだ雨ははら〳〵と降つて居るのだ。

○化けさうな　「化けさうな傘貸す寺の時雨哉」。なほ時雨の句は三八五頁参照。

〔召波筆蹟（「天明短冊帖」所載）
舟橋の渡まうけや花曇　召波

蕪村の時雨の句にも、例の「化けさうな傘」を始め傘を配した作は二三ある。その中でも

古傘の婆娑と月夜の時雨かな

はこの句と全く想を一にして居る。たゞ婆娑といふ漢語を用ひた所に、特に蕪村らしさが現はれて居るが、いづれをとるかといへば寧ろ召波の平易な調を選びたい。

召波筆蹟

寺深く竹伐る音や夕時雨

竹藪がずつと續いた奥に寺がある。寒々と時雨が降る夕べ、その藪のあたりで竹を伐る音がする。それが森閑とした寺の境内に響いて、物侘びしい感じを深めるのである。これも平易でよく時雨の實情を得て居る。

憂きことを海月に語る海鼠かな

童話めいた空想の句である。水の面を暢氣さうに浮いて歩く海月に向つて、砂底に潛り込んでも人に捕る身の憂さを語つて居るのである。蕪村の

　　猿どのの夜寒訪ひ行く兎かな

も想ひ合はせられる。海鼠の句として想の奇拔なもの。

冬ごもり五車の反古の主かな

主は雜然とした堆紙の間に冬籠りをして居る。これが萬卷の書といふのならよいが、實は書きちらしの古反古なんだよといふのである。自ら「五車の反古」としやれた所に、主人の洒々落々たる境涯が見られる。

召波の子維駒は、父の十三回忌にこの句を立句として、

　　ひとり寒夜に甌うつ月　維駒

と附け、以下蕪村等と共に一卷を興行し、なほ諸家の句をこうて追善の一集とした。名けて『五車反古』といふ。『蕪村七部集』の一として知られて居る。

○五車の反古　五車の書は莊子、天下篇に「其書五車」とある事によつて、多數の書の義に用ひる。こゝはそれを反古にうつして用ひたのである。

一函の皿あやまつや煤拂

煤拂の間に出來した椿事である。十人前揃つた南京の皿、丁重にしまひ込んである箱を、棚から取卸すはずみに、手をすべらして箱もろ共にこはしてしまつた。程度こそちがへ、かうしたあやまちは煤掃の折に有りがちの事である。たゞそれを句にするのはむつかしい。否それが句になるとすら考へる人は少い。しかしかうして「一函の皿あやまつや」と巧に言はれて見ると、感心せざるを得ない。

春泥舍召波は東武南郭の門人にてからうたをたしみ、近來あながちに俳にかたむき、去來・嵐雪が風骨をしたひ篤實の人物也。予京師にのぼり馬下り※より交り深き俳友なりしを、惜しい哉、去年臘月八日に物故ことさらになつかし。(猿利口※)

春泥舍召波は黒柳氏にして維駒の父也。初老の頃より家を辭し郊外に閑居して、ひたぶるに俳諧を樂しび酒盃を弄し、座上客常に滿ちて春の日の暮るゝも、秋の夜の明くるも知らざるが如し。されば句々離俗の境に入りて嵐雪が高邁なる語勢ありけり。滅後草稿を選びて春泥句集といふ。(新※俳談集)

○馬下り　その地に初めて旅裝を解いた時の事。

○猿利口　背窓嵐山撰。明和九年成、安永四年刊。本文は嵐山が故友召波を憶つて記した條。

○新俳談集　四六六頁頭註を見よ。

吉分大魯

もと阿波の藩士。本姓今田氏、通稱文左衛門。初め京都の文誰の門に在つて月下庵馬南と號したが、後ち蕪村に屬し又號を大魯と改めた。安永二年大阪に移つて蘆陰舍を結び、安永六年又兵庫に轉じて三遷舍と稱した。安永七年歿、享年不詳。俳諧五子稿の編がある。その句は『蘆陰句選』に收めらる。

思ひ出て庭掃く春の夕かな

ふと思ひ出したやうに箒を取つて庭へ出た。もう夕の日影が長く地を這うて、そこここに落花が白くちらばつて居る。さういふ情景である。淡々たる描寫の中に、何となく物うげな氣分が感ぜられる。

牡丹折りし父の怒ぞなつかしき

大魯の傳記人物等は、なほ詳しく知る事が出來ないが、彼が夙く郷國を辭したり、又大阪か

○月下庵馬南　これは別人とする説もあるが、今は同人説に從ふ。

○蘆陰句選　几董編。安永八年刊。

○思ひ出て　以下の句すべて「蘆陰句選」による。

○牡丹折りし　「懷舊」といふ前書がある。

▽大魯筆蹟（大津 村田氏藏）

すだれして厠かくせし牡丹かな　　大魯

○我にあまる　「妻兒が漂泊ことに悲し」と前書がある。なほ當時この句と共に八句の感懷吟を殘してゐる。皆「蘆陰句選」に出てゐる。

ら兵庫に退いたりしたのは、全くその悲しむべき性格に災されたものらしい。當時の友人の言葉や蕪村の尺牘等によつても、彼の性行に面白くない點が多かつた事は察せられる。恐らく薄志弱行で激し易くさめ易く、かつ放縱狷介な人物であつたのだらう。しかしそれだけ又涙脆く純情的な所もあつた。彼が難波を追はれ、孤影悄然として兵庫に向つた時の感懷を洩らした

大魯筆蹟

我にあまる罪や妻子を蚊の食ふ

の如き、そゞろに人の涙を催ふものがある。

この牡丹の句にも、大魯のさうした悲しい性格は思はれる。句意は文字通りに解すると、「牡丹を折つた父の怒がなつかしい」であるが、大魯の意は恐らくさうではあるまい。牡丹を折つたのは大魯自身である。父が丹誠して花を咲かせた牡丹を、腕白坊主の大魯が悪戯に折つてしまつた。その折の父の憤怒が、今となつては悲しくもなつかしい思出であるといふのである。文法的には言葉のつゞきが無理であらうが、さう解して始めて大魯の眞情に觸れたものと言ひ得る。

初時雨眞晝の道を濡らしけり

眞晝の乾いた道を僅かにしめらすばかり、はら〳〵と初時雨が降りすぎた。極めて平淡な敍景であるが、初時雨の情趣は十分味はゝれる。

大魯は同じく蕪村門にあつても、召波や几董等の如く一に師の風に倣ふ事をせず、その純情的な性格のまゝに、平淡直截の趣を愛した。最初に掲げた「思ひ出て庭掃く」やこの句の如きは、さうした彼の獨自な句風を示すものである。蕪村も亦その藝術家としての天分を認めて、我が門の鍾馗と稱したのであるが、惜しいかな、性人に容れられず、天また年をかさずして、十分にその驥足を伸ばす事が出來ないで終つた。

河内女や干菜に暗き窓の機

藁屋の窓に干菜が一杯吊してある。その窓際に薄暗いあかりを受けて、河内女は終日木綿機を織つて居るのである。干菜の句としては、かはつた情景を描いて居て面白い。

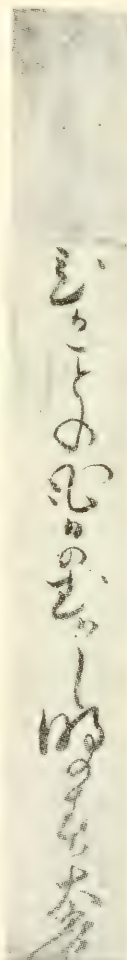
○我が門の云々 「蘆陰句選」の蕪村の序文中に見える。

▽大魯筆蹟（大津 村田氏蔵

ひがごとの昨日のむかし明の春　大魯

○この句 手紙には下五が「焦す哉」となつてゐる。

山風や霰吹き込む馬の耳

山風が烈しく吹きおろす峠道を、馬も身をすくめるやうにして通つて行く。折からバラバラと降り出した霰が、横なぐりに吹きつけて、馬の耳の中までころがり込んで行くといふのである。些か際どい描寫ではあるが、實景さもあらうとうなづかれる。

大魯筆蹟

灯火に氷れる筆を焦しけり

寒夜筆を執つて物を書かうとすると、穂先は堅く凍てついてしまつて居る。それを解かさうと、暫く傍の灯火にかざして居る中に、いつか穂先を焦してしまつたといふのである。

蕪村が安永六年の冬、大魯に送つた手紙の中に、この句をあげて、

愚句に

齒あらはに筆の氷を噛む夜哉

〇梅一木　以下「蘆陰句選」に洩れた句を抄出した。

と、貧生獨夜の感をつぶやき候。予もまた寒燈に狸毛を焦したるあはれ、云はんかたなく候。よき兄弟と存じ候。

と評して居る。蕪村の句は、あらはにした齒に感が深く、大魯の吟は筆を焦した所に興がある。共に寒夜のあはれである。

梅一木あるじ二人やかげひなた（明和九年春慶引）
梅の花去年からこぼす垣根哉（安永五年鷺喬春帖）
梅咲いて幾日になりぬ藪の中（津守舟）
新建やつばくら通ふ二三軒（明和八年春慶引）
山の端に月は殘りて霞かな（氷餅集）
世盛や馬鹿にならぶる雛道具（句双紙）
松に一歩櫻に一歩峯の花（津守舟）
一しきり春しづまつて藤の花（明烏）
啼かである時や妻呼ぶ時鳥（續寒菊）
晝顏や魚うち揚ぐる沙の上（十三興）
明けやすき一夜や竹の伏見船（津守舟）
誰が子ぞ太刀よく似合ふ菖蒲の日（續明烏）
何人とまぎれ入りけむ蚊帳の蠅（瓜の實）
石女の我が田植ゑけり朝の内（眞蹟）
庭の萩そこらこぼれて盛り哉（津守舟）
夢ゆるくうつゝせはしき砧かな（月の夜）
鹿の聲凄きあるじが鼾かな（瓜の實）
移し植ゑし萩にも置ける涙哉（萩の露）
岡野邊や楢の廣葉をうつ時雨（津守舟）
手に戻る鷹の眼に入る日哉（同上）
紙衣着て歩いてや見む寢てや見む（張瓢）
致仕の夕三椀を增すふぐと哉（新虛栗）

○井華集　寛政元年刊。

○戀々として　以下の句すべて「井華集」による。この句には「離別」と題してある。

高井几董

幼名小八郎、初號雷夫、別に晋明・高子舍・春夜樓・鷹山亭等の號がある。京都の人、早野巴人の遺弟で蕪村と同門たる几圭の子。夙くから蕪村に從つて、師風を守る事最も忠實であつた。蕪村の歿後夜半亭三世を襲ぐ。寛政元年歿、年四十九。『蕪村七部集』中『其雪影』『明烏』『續明烏』等は彼の撰ぶ所で、その外蕪村追悼集たる『から檜葉』、其角の『雜談集』にならつた『新雜談集』等があり、又年々自ら出した『初懷紙』十數卷がある。その句は自ら選んで編した『井華集』※に收めらる。

※戀々として柳遠のく舟路かな

岸の柳陰に見送る人の姿は次第に小さくなる。舟は心無く水と共に流れ去つて行く。もう打振る袖の影も見えなくなつた。たゞ柳の綠の色が見返られるだけだが、それも次第々々に遠のいて行くのである。誠に戀々の情切なるさまが見られる。

昔支那では人を送つて別れる時、柳の枝を綰ねるならはしがあつた。隨つて柳とだけですで

▽几董像
（「俳諧百家仙」に據る。）

○繪草紙に「市陌」と題してある。

に離別の情を伴ふものである。蕪村の

君ゆくや柳みどりに道長し

も、もとよりさうした連想で味はれるべき作である。几董のこの句の解には、必しも餞柳の故事を求める必要はないかも知れぬが、作者の心中にはやはりさうした連想がはたらいて居ただらうと思はれる。

几董像

繪草紙に鎭置く店や春の風

粗悪な刷ではあるが、紅黄青紫色さまざまな繪草紙が、店頭に美しく並べてある。折々春の風が一枚刷などを吹き散らすので、上に鎭が置いてあるのである。詞書に題した通り、街頭の一風景をそのまゝ句にしたのであらうが、いかにも春風にふさはしい光景である。吹き返される紙の端に、繪具の色がちらちら見えるやうな氣がする。

青海苔や石の窪みの忘れ汐

汐が引いてしまつたあと、石の窪みに忘れられたやうに取殘された汐の溜り、そこに青海苔が漂つて居るのである。いさゝかの所に見出した春の匂ひである。「忘れ汐」といふ言葉も面白い。

○忘れ汐　汐の滿ちた時石の窪みに溜つたのが、そのまゝ殘されてゐるのである。

門口に風呂焚く春の泊り哉

昔の旅籠屋には、門口に水風呂を設けてあるものが多かつた。かうしてちやんと風呂もわいて居ますと、道中の客に示す一の廣告でもあつたのだらう。春の日永をぶら〳〵と歩き暮して、やつと今日の泊りに着いた。門口には風呂を焚く烟がゆるやかに立ち昇つて居るのである。何の奇もない情景であるが、かうした平淡な敍景の間に、却つて春の夕の淡い旅情がしみ〴〵と味はれる。

○水風呂　桶の横からわかすやうにした簡單な風呂である。

几董はかねて其角の風骨を慕つて自ら晋明を別號とし、その書風までも摸した程であつたが、

性格は決して才氣渙發の人ではなかつた。寧ろ敦厚摯實の士で、師の道を守ること頗る忠實であつた。かくて結局彼の到達した所は、やはり蕪村の小なるものであつたが、しかも同門召波とはまた自ら相異る所があつた。蕪村や召波が所謂離俗の法によつて美を見出さうとした結果、古典的傳奇的等の傾向が強かつたのに比し、几董はこの春の泊りの句の如き、平淡の趣致の間によく自然の眞情を得るものがあつた。その他

磯山や小松が中を春の水
短夜や蟹の脱に朝あらし
葉隱れに虫籠見えけり庭の秋

等、いづれも蕪村以外の境地に向つて進んだ作と言つてよからう。しかしそれは彼の溫厚な性格が、偶〻さうした平淡な境地に向はせたといふにすぎず、所詮彼の努めた所はやはり蕪村の

几董筆蹟

▽几董筆蹟（丹後、宮津 三上氏藏）
さみだれや舞臺にちかき遊女町　春夜起
（繪は梅亭の筆。梅亭は紀氏、京都の人、九老と號す。畫を蕪村に學ぶ。後大津に移り住み近江蕪村と稱せられた。文化七年歿、年七十七。）

○苔清水　苔の生えた所に流れる清水。

特色を以て、自らの特色とするにあつた。

山寺や縁の下なる苔清水

山深く谷に臨んで建てられた古い寺、庭には苔が青く蒸して、崖のあたりから清冽な水が滾滾と湧き出てゐる。それがずつと高い縁の下を通つて流れて行くのである。一讀清涼の氣が生ずる。

湖の水かたぶけて田植かな

五月雨を集めて漫々と湛へた湖、その水を湖邊の田に引いて、苗を植ゑるさまである。多量の水を田に引くのを、「水傾けて」と言つたので、この巧みな表現によつて一句が生きて居る。しかもこれは決して想像だけで巧みに誇張したものではない。渺々たる水田と湖とを見渡した實感が、自然に生み出した言葉である。

やはらかに人分け行くや勝角力

「やはらかに」の上五が置き得て實に妙である。負けた方は急いで群集の中へ紛れ込む。勝つたのは喝采を浴びながら、ゆる〳〵と引つこむのだ。この場合の形容として、「やはらかに」より以上適切な言葉は、恐らく求められないであらう。几董も誠に作者である。

名月や朱雀の鬼神たえて出ず

名月の夜、羅生門の故址のあたりを徘徊しての吟であらう。昔都良香は「氣霽風梳新柳髪」の一句を得て、これに一句を賡がうと苦心したが成らず、羅生門の下を通りかゝると、忽ち樓上に聲あつて、「氷消浪洗舊苔鬚」と吟じた。それは羅生門の鬼が、良香の句に感じて之に對したのであると傳へられて居る。今は鬼神も絶えて出ぬ世の事であるから、今宵この良夜に吟じても、これに和するものもなからうといふのである。題の如く懷古の情が主で、蕪村の傳奇趣味の感化を受けた作である。

○やはらかに　この句は石なさり・蓮華會集等當時の俳書に多く採録され、几董も自ら得意にした句の一であつた。

○名月や　「月前懷古」と題してある。この句も月の夜・新雜談集・句帖新撰等諸書に出てゐる。

○朱雀の鬼神　朱雀通の羅生門に住んでゐたといふ鬼神。

悲しさに魚食ふ秋の夕哉

まぎらしやうのない淋しさである。魚を食ふといふやうな幼い欲望と興味で、堪へ難い淋しさに打勝たうとする。そのはかない自分の心が、又一層悲しくもいとしまれるのである。この句には几董の眞率な情が感ぜられる。

柚を焼くや味噌は釜中にありて泣く

「七歩詩」の「豆在二釜中一泣」を轉じた趣向であるが、詩の意と句の意とは何等關はる所はない。たゞ柚を火にかけると、中に入れた味噌がぶつ／＼煮えるのを、詩の句をもぢつて巧みに言つただけである。もとより深い詩趣を求むべき作ではない。蕪村の

大和路の宮も藁屋もつばめ哉

櫻狩美人の腹や減却す

の類を摸して、几董の才も亦相當に見るべき事を示して居る。

○柚を焼くや 「詠七歩詩」と題してある。七歩詩は魏の文帝が弟曹植を殺さんとて七歩の間に詩を作らせた故事。その時曹植は「煮レ豆持作レ羹、漉レ菽以爲レ汁、萁在二釜底一燃、豆在二釜中一泣、本是同根生、相煎何太急」と作つたといふ。

○宮も藁屋も 蟬丸の歌「世の中はとてもかくても同じ事宮も藁屋もはてしなければ」の文句どり。

○減却す 杜甫の詩句「一片花飛減却春」の文句どり。

○鳥羽殿へ　「畫賛」と題してある。

○鳥羽殿　鳥羽の離宮。應徳三年造營され、白河天皇・鳥羽天皇の離宮であつた。

○土佐日記　紀貫之が土佐守の任を終へて京都に歸る時の紀行文。

※鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪

夜の雪をふみ分けて、鳥羽殿へ御歌使が急ぐといふので、風流韻事に耽つた中古のさまを想ひやつた句である。この句に對して、誰しもすぐ思出されるのは、蕪村の

鳥　羽　殿　へ　五　六　騎　急　ぐ　野　分　哉

であるが、蕪村の背景をなすものは保元・平治物語などの軍記であり、几董が想を構へたのは優しい歌合の會などの趣である。而していづれにせよ、鳥羽殿といふ歴史的存在が一句の中心となつて居る事は同一である。

貫之が船の灯による千鳥哉

言ふまでもなく『※土佐日記』に題材を求めた歴史的空想の作である。貫之が土佐を立つたのは承平四年十二月廿一日の事であるから、事實かうした光景も見られたかも知れない。しかし勿論この種の題材による作は、必しも事實の如何を問ふ必要はないので、問題はその歴史的事實を背景とする事によつて、ある情趣がいかに效果的に描き出されて居るかといふ點にある。

▽几董筆蹟（兵庫 柴田氏藏）

山荘

手折置しもみぢかげろふ障子哉

しぐるゝや南に低き雲峯

右 几董（花押）

○桃李 連句篇六五七頁參照。

○手引蔓 連句篇六五七頁參照。

その意味に於て、貫之の歸任が夏の事であつたとしても、『土佐日記』を背景としてこの句の情趣が十分味ははるれば、それで少しも差支ないのである。たゞし『土佐日記』が平安朝時代の國守の海路の記だといふだけでなく、その內容までが一般に知られて居れば、やはり甚しく事實と齟齬する事は許されない。それは讀者に實感を齎し難いからである。

几董筆蹟

連句篇にあげた「牡丹の巻」と共に、『桃李』の中に收められた今一巻の發句である。蕪村は

冬木立月骨髓に入る夜哉

これに

此の句老杜が寒き腸

と脇を附けて、一句の風骨を杜甫の詩腸に比して居る。句解については、几董自ら『手引蔓』の中に

月の光のするどう冴えわたりたる夜に、冬枯せし木のつくゝとあらはなるを趣向にして、月の光も骨身にしむやうな夜ぢやといふを、月も骨髓に透るばかりなる哉と作つたものぢや。

と說明して居る。これ以上加へる所はないが、連句篇に於ても述べた通り、『桃李』の二歌仙は村・蕪師弟の彫心鏤骨に成る作で、右の發句と脇とだけを見ても、彼等がいかに高雅な詩趣を捉へ、用語の選擇に意を用ひたかが窺はれよう。

舟慕ふ淀野の犬や枯尾花

淀野あたりの草も尾花も枯れ果てて、滿目たゞ蕭條として居る。折々往來する川船の人を見かけて、村の犬が吠えながらあとを追つて來る。さういふ光景である。

几董筆蹟

『新雜談集』によれば、かつて蝶夢法師が『名所小鏡』を編纂した折、俳諧に淀野の作例が稀

▽几董筆蹟（大津 村田氏藏）
舟慕ふ淀野の犬や枯尾花　几董

○新雜談集　几董が其角の「雜談集」に倣つて撰んだ一種の俳諧隨筆。天明五年刊。

○蝶夢　京都の人。五升庵・泊庵等と號す。京都中川阿彌陀寺歸白庵の住職。寬政七年歿、年六十四。

だからといつて、この几董の句を選び入れた。その後蝶夢が大阪からの歸途、淀野のわたりで舟慕ふ犬を見て、特にこの句を思ひ出したと几董に語つたといふ。蓋し几董の句が机上の作でなかつた事を證したものである。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

俳諧に不易流行の沙汰は、古への書に讓りて暫くさしおく。今や世の風流漸變化して、その流行にとゞまるあり、前「ス丶」むあり、又後るゝあり。しかりといへども都て蕉翁の光をたとぶの一に止まれり。夜半の叟常に言へらく、今遠つ國々のもはら蕉門といひもてはやす、やゝ翁の皮肉を察してその粉骨を知らざるもの也。たとけど附句に

※敵寄せ來る村松の聲

有明の梨打烏帽子着たりけり

これらの意を味はふの徒稀也と。今や不易の正風に眼を開くるの時至れるならんかし。既に尾張は五歌仙に冬の日の光を挑げんとす。神風や伊勢の翁ともてはやせし麥林の一格も、今はその地にして信ぜざるの徒多し。加賀州中に天和延寶の調に髣髴たる一派あり。平安浪華の間にもまことの蕉風に志す者少からず。

○名所小鏡　蝶夢編。天明二年—寛政七年刊。諸國の名所をあげて、これを咏じた古今俳人の句を集めたもの。

○俳諧に　以下几董撰「明烏」に自ら序した文の前半。當時の俳壇に於る蕉風中興の機運をよく語つてゐる。

○敵寄せ來る　貞享二年廿角の初懐紙に出る千里と芭蕉の附句。

○青蘿發句集　門人栗本玉屑編。寛政九年刊。

○雪のまゝに　以下句はすべて青蘿發句集による。

松岡青蘿

播州姫路の人、山李房・幽松庵等と號す。幼時から江戸にあつて始め玄武坊の門に學んだ。後ち江戸を去つて諸國を遍歴し、希因・闌更に接して得る所が最も多かつた。明和四年播州加古川に三眺庵を結び、爾來同地を中心として播・但・淡・美地方に蕉風を鼓吹した。寛政三年歿、年五十二。「蛸壺集」「骨書」等の撰がある。句は「青蘿發句集」に收めらる。

雪のまゝに竹うちふして朧月

北の藪陰には、雪に撓められた竹が、まだ打臥したまゝ起きもやらずに居る。だが月の影はいつかもう朧々と霞んで、撓んだ竹の肌もつや〳〵と光つて居る。やはり春だなといふ感じが深い。

雪に臥したまゝの竹を點出して、まだ春淺い朧夜のさまを描いたのである。

春雨の赤兀山に降り暮れぬ

▽青蘿筆自畫賛（神戸 戸田氏藏）
ちるはなの花よりおこるあらしかな　青蘿

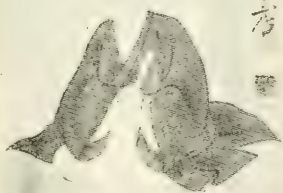
青蘿筆自畫賛

春雨のつれ〴〵を、終日窓の机によつて居る。窓を開けると、赤兀げた山が向うに眺められるのだが、今日もとう〳〵その赤兀山に春雨が降り暮れた。さういつた物わびしい夕の情景である。

青蘿の句は概して地味な色合のものが多い。それはもとより彼の性格に基くものではあるが、その最初接した所は美濃風。伊勢風であり、後ち中興の諸名家と來往するに至つても、蕪村・曉臺等の華やかなのに倣はず、樗良の平淡を學ぶ事が最も多かつたらしい。しかも彼は樗良のやうな純情的な詩人肌でもなかつたので、その句は質實穩健ではあるが、優艶典雅の趣を缺き精采に乏しい。この春雨の吟の如きにも、やはりさうした彼の特色が見られる。

角上げて牛人を見る夏野哉

夏草が茫々と生ひ茂つた野に、牛がのそり〳〵と歩いて居る。人が近づくけはひがすると、大きな角を振上げて、咎めるやうな顏で見上げる。何となく不氣味な目つきである。「角上げて」といふ上五で、牛の不氣味な動作が感ぜられるので、それが夏草の背景の中に生きて來る。

▽青蘿像（神戸　戸田氏藏）
はなのゆめのうす
　　く雲さらではほとゝぎす
寛政己未六月十七日拜書
（右は青蘿の門人栗本玉屑の筆である。）

青蘿像

秋風に白蝶果を狂ひけり

句意は明かである。狂亂の果に亡び行く美人の末路を想はせる。たゞし「果を狂ひけり」は些かいやみな表現である。

戸口より人影さしぬ秋の暮

短い秋の日は暮れて、もう家の中は薄暗い。戸口のところだけわづかに夕日の影が明るく殘つて居る。そこへ誰かしら人の影がすうつとさし込んだといふのである。人の影は誰とも分らぬ。何となく薄氣味惡く感ぜられる。秋の暮方のふとした情景が、巧みに捉へられて居る。

燈火のすわりて氷る霜夜かな

「すわりて」は焰がじつとして動かないさまである。一穗の青燈寂として瞬かずといつたやうな寒夜の情である。それが「すわりて」の一語でよく現はされて居る。

大伴大江丸

本名安井政胤、通稱大和屋善右衛門、大阪の人、江戸飛脚問屋を業とした。初號芥室、舊國。青年時代多くの俳士を歷訪して教をこうたが、後蓼太の門に歸した。蕪村、几董とも交はり遊俳として天明寛政の俳壇に獨特の位置を占め、その交友の範圍は頗る廣かつた。文化二年歿、年八十四※。俳話句集「俳ざんげ※」「はいかい袋※」の撰がある。

※いつはともあれ初烏初烏

春※の曙、やう／＼明けしらむ頃に飛び行く烏には、清少納言ならずとも趣を感ずるであらう。又夏の夕、夕燒雲の中に入る烏、秋の暮、枯枝に淋しくとまる烏、皆とりどりに趣はあらうが、元日の朝空を、カア／＼と啼いて行く初烏に及ぶものはないといふのである。「初烏初烏」とたゝみかけた所に、感嘆の意を深くしてゐる。

大江丸は、又別に大晦日の烏を詠じて、

めでたさや大卅日の夕がらす

○八十四　大江丸は晩年壽齡をさして實際の年齡に數歲を加へて自署する事が多かつたので、爲に享年に諸說を生じたのであるが、八十四歲が正しい享年である。

○俳ざんげ　寛政二年刊。

○はいかい袋　享和元年刊。

○いつはともあれ　この句俳ざんげに出づ。

○春は曙　清少納言「枕草子」冒頭の文句。

○雁はまだ　句ははいかい袋に出で、「一茶坊の東へ歸るを」といふ前書がある。

▽大江丸像（「若葉集」所載）
うつくしきむねのさはぎや
はつざくら　　八十五才大江丸
（註、この八十五歳は實際の年齢に加齢したものである。）

と言つてゐる。これはやゝ輕く理窟をこねた氣味がある。

雁はまだ落ちついてゐるにお歸りか

寛政七年春、讃岐觀音寺に越年した一茶は、大阪に來て此の地の諸俳人を訪うた。大江丸も亦其の時一茶と交歡した一人である。やがて一茶は、寛政十年春三月東へ歸つた。これは卽ち當時の送別吟で、春になれば北へ歸る雁さへも、まだ落ちついて歸らずにゐるのに、貴公はもうお歸りなのかといふのである。

大江丸像

一茶と大江丸。一は信州の貧乞士、一は浪華の富商で、世間的には大いに境遇を異にして居る。又齢をいへば一茶は三十餘歳の壯年、大江丸はすでに七十を過ぎてゐる。その二人がかうしてうちとけた挨拶をかはして居るのも、俳諧の道なればこそである。

○三尺の　この句俳ざんげに出づ。
○燒野原　春になつて野を燒いたあとの原。
○竹の子や　この句はいかい袋に出づ。
○後撰集の歌　源等「淺茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の戀しき」

三尺の松緑なり燒野原

野は燒かれて一面に黒くなつて居る。その燒野原の中に、みづ〲しい小松の緑が際立つて見えるのである。燒けたあとから生ひ出る生の力の象徴とも見られる。大江丸の作としては、かうした純粹の敍景的な句は珍しく、

紫蘇畠や雨の蹴上の薄ぐもり

等と共に、後の敍景句中佳作とすべきものである。

竹の子やあまりてなどか人の庭

後に出した「秋來ぬと」、「ちぎりきな」等の吟と同じく、古歌のもぢりによる興味が一句の中心となつてゐる。卽ち『後撰集』の歌の文句をそのまゝ中七に假り用ひて、これを意外な筍のことにきかせたのが面白いのである。しかもそのきかせ方が實に巧妙を極めて居る。竹の子の力あまつて、よその庭まで侵入して生ひ出たのを、「あまりてなどか」と咎めたのである。勿

論かうした趣向は、所詮眞面目な藝術の本義からは遠いものにちがひない。しかし大江丸はあへて自らそれを得意とし、又それで滿足して居たのである。

大江丸の本業は飛脚問屋であつた。彼が始めて俳諧に志したのも、尾張の千代倉鐵叟の狀を、半時庵淡々の許に屆けたのが緣となつたのであるといふ。その後諸家に教をこうて東西し、遂に俳壇の一名流として知られるに至つたのであるが、しかも彼の俳諧に對する態度は、あくまでも餘技として以上には出なかつた。

然れども家のわざに大事をふみ、三十餘年は此の道を捨てざるばかり、その日くの勤めを怠らじと守りつゝ、云々

と自ら語つて居るのである。すでに餘技であるから、必しも一派に偏したり、徒らに高遠の理

大江丸筆自書賛

○千代倉鐵叟　尾張鳴海の人。

▽大江丸筆自書賛（京都　中野氏藏）
まる二日不二みぬもよし赤つゝじ
七十八歲　大江丸
（花押）

○諸家　事の由は「はいかい袋」に詳しく、只能・鳥酔・凉袋・祇徳などに教を乞うたが、終に蓼太の松島の吟に感ずる所があつて、その門下に止る事になつたといふ。

○然れども　「俳ざんげ」中に見える言葉。

を唱へたりする要はない。たゞ俗中に雅趣を求めて樂しめばそれで宜い。

俳諧をもて修身齊家の道にあて、或は老佛の心に通はしめて高妙に說きなす者あるこそ心得ね。その道を高くせんとして、却つて知れる人の譏をひく。俳諧更にさやうのものならず。佛語聖言によらずして俗中の風雅を述べ、別に趣はある事なり。

とも言つて居る。これは「予が風雅は夏爐冬扇の如し」と喝破した芭蕉の本意と、多く相悖るものではない。けれども大江丸は芭蕉の如く、斯の道に一生を託する人ではなかつた。彼が求めた俗中の雅は、結局かうした輕い滑稽や、文字の技巧等を專らとするに至つた。とはいへその圓轉滑脫の機才と明朗輕快の格調とは、また俳壇の一異彩とするに足るべく、所謂遊俳の士としては、我が俳諧史を通じて、最もすぐれた一人と稱すべきである。

夕涼み地藏こかして逃げにけり

村の若い衆たちの夕涼みであらう。誰かが一寸した惡戲から、罪もない地藏樣をこかしてしまつた。「さあ地藏樣を誰がこかした。罰が當るぜ」と穿鑿し出すと、甲も乙も丙も丁も、「おれは知らない、〳〵」でいつの間にか逃げ出してしまつた。さういつた滑稽な場面である。又

○俳諧をもて云々　「はいかい袋」に出づ。

○予が風雅は　俳文篇「柴門辭」參照

○夕涼み　この句俳ざんげに出づ。

一人村はづれなどに涼んで居て、ふと地藏さんをこかして始末に困り、誰かに見つからない中に逃げ出したと解してもよい。とにかく下五の「逃げにけり」で、輕いをかしみを出したのが手柄である。

この蠅によく〱盧生寢坊なり

邯鄲の盧生の故事を描いた畫の贊である。故事の中に無い蠅をもつて來たのが一句の眼目で、これが卽ち大江丸の得意な俳諧手段である。

白團扇隣の※義之に書かれたり

新調したばかりの白團扇、夕涼みがてらに遊びに來た隣の男に差出すと、やをら取上げてひねくり廻した上「や、見事なお團扇ぢや。これを白地のまゝにしておくとは殘念。拙者一筆揮つて差上げませう」と、下女に命じて硯を取寄せ、主人が苦い顏をして居るのもお構ひなし、墨黑々とぬたくつてしまつた。さうした一風景である。

書道自慢の天狗殿を、「隣の義之」と言つたのが、一句の眼目たる事は言ふまでもない。俗中

○この蠅に　この句はいかい袋に出で、「畫賛」と題す。

○盧生の故事　盧生が邯鄲の旅亭で晝寢してゐる間に五十年間の富貴を夢みた。さめて見ると僅に黄粱一炊の間であつたといふ故事。（枕中記）

○白團扇　この句はいかい袋に出づ。

○義之　王羲之。支那晉時代の有名な書家。字は逸少。草書隸書に非凡であつた。

の雅がこゝに求められ、又同時に滑稽味の源泉となつて居る。

※秋來ぬと目にさや豆のふとり哉

秋の來た事は目にははつきり見えないが、この莢豆のふとり加減でよく分るといふのである。※得意の古歌どりであるが、これは更に「さや豆」と言ひかけ、又本歌の意をも句中に含めて、活用の妙を極めて居る。その圓轉滑脱の才は、蕪村の

秋來ぬと合點させたるくさめ哉

にまさること數等である。

※能因にくさめさせたる秋はこゝ

寛政十二年の秋、大江丸は家業の用をおびて江戶から東北地方にかけて旅行した。句は即ちその旅中の吟で、當時七十九歲の彼が、壯者をも凌ぐやうな元氣さで、諸方を步き廻つたさまは、かの『あがたの三月四月』に詳しく記されてある。

句は※能因法師の歌をふまへて、それを滑稽化したのである。即ち能因は昔白河關で秋風に吹

○秋來ぬと　この句はいかい袋に出づ。

○古歌　古今集、藤原敏行「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

○能因に　句ははいかい袋に出で、「白川二所が關餅屋宗左衞門にて」と前書がある。「あがたの三月四月」にも出づ。

○能因法師の歌　拾遺集「みちのくにまかり下りけるに白河の關にてよみ侍りける、都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」

○鴫の歌　「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」

▽大江丸筆自畫賛（信濃　住田氏藏）
けいせいのおやざとも今さくらかな
八十一歲　大江丸

○ちぎりきな　この句はいかい袋に出づ。

○古歌　後拾遺集、淸原元輔「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波越さじとは」

かれて、噓をしただらうが、その故蹟はこゝなのだといふのである。發想の態度から言へば、

西行の噓で鴫の歌が出來

の如き川柳と全く同一であるが、流石に「秋はこゝ」の下五が俳句としての季感を失はないでゐる。

大江丸筆自畫賛

※ちぎりきなかたみに澁き柿二つ

これも古歌のもぢり。「ちぎりきな」の意を全く別義に轉じたのが、作者の働きである。句意は「互に澁柿を一つづつちぎつた」といふのだから、内容は誠に下らぬ事なので、單に歌の文

句取だけの興味である。これなどはあまりに遊戲文字に墮したものと許してよからう。

※清盛の文張つてある火桶かな

前書と「清盛の文」とによつて、嵯峨の奥に行ひすましたといふ※佛御前か、祇王・祇女の俤を想像させたのである。あるじは墨染の衣を身に纏つては居るが、あでやかな眉のあと、花のやうな唇の色、端然と佛の前に坐つた姿は、流石に昔の色香を思はせる程美しい。庵室の片隅に置かれた火鉢を見ると、そのかみ清盛の寵を擅にした頃に送られた手紙が、無造作に張つてある。まづさういつたやうな情景である。

「清盛の文」が一句の眼目たる事は言ふまでもない。しかしそれは尼の身の上について、今昔の感を深くするといふよりは、やはり輕いをかしみをねらつたのである。

※昔男海鼠のやうにおはしけむ

業平といへば古來色男の代稱見たやうになつて居る。江戸時代の浮世草子には、色道の守

○清盛の　句は俳ざんげに出で「尼といふ題にて」と前書がある。

○佛御前・祇王・祇女　「平家物語」卷一、祇王祇女の事の條に出づ。共に當時の名高い白拍子で清盛の寵を得たが、後ち人間の榮枯盛衰常なきに無常を觀じて出家したといふ。

○昔男　句ははいかい袋に出で「在五中將年男の晝に」と前書がある。在五中將は業平。

○昔男　業平の作といはれる「伊勢物語」の本文が、すべて「昔男ありけり」といふ文句で始まつて居るので、業平の異稱とされてゐる。

本尊の如くされ、川柳子からは色事師の親玉に取扱はれて居る。それに

　　業平は高位高官下女小あま

で、どんな女にでも柔くなると相場がきまつて居る。それを大江丸は「海鼠のやうに」と揶揄したのである。これまた川柳趣味の域を脱しないが、下に「おはしけむ」と古語をつゞけて輕く一揖し、そこに俗中の雅を保つて居る。のみならず海鼠が自ら季語となり俳句としての傳統的形式もちやんと調つてゐるのである。その輕妙の機才は誠に驚くべきものがある。

　前書によるとこれは畫贊で、その畫がすでに業平を年男に仕立てたといふ滑稽なものである。そこへこの句が贊になる。大江丸の滑稽の才は、愈々光彩を發揮するわけである。

夏目成美

名包壽、通稱井筒屋八郎右衛門、號隨齋・四山道人等。江戸の人、淺草藏前の札差を業とす。父一雨の感化によつて俳諧を嗜んだが、特に定まつた師友はなかつた。しかし資性溫厚句質よく一家の風をなし、道彦・巢兆と共に江戸の三大家と稱せらる。晩年川向の多田森に隱棲しその居を茶亭といふ。文化十三年歿、年六十八。著書に『四山藁』『隨齋諧話』等がある。句は『成美家集』に收めらる。

東海道のこらず梅になりにけり

この句の如きは、前書の有無によつて全く句解を異にするので、今前書に從つて解すれば、道中双六の上に並べられためい〳〵の名札が、恐らく梅の花形に切つてあつたのだらう。それをかうして見立てただけの句となる。又もし前書を除いて解すれば、東海道五十三次にすべて春色の到つたさまとなる。

○成美家集　成美の男、吉田・子強の校合、門人久藏の補定に成る。文化十三年刊。

○東海道　以下の句すべて成美家集による。この句には「子供の道中双六といふものうつを見て」といふ前書がある。

▽成美像（享和三年刊「若葉集」に據る。）

○吉次　義經を伴つて奥州に下つたといふ金賣吉次。「義經記」に見える。

句としては前書の無いまゝに解したい氣がするが、作者自ら道中双六をよんだと言つて居るのだから仕方がない。しかし實はそこに作者のトリックが潜んで居る事も、また見遁してはならない。即ち表は道中双六をよんだのではあるが、同時に實際東海道の春色を想はせる所に、作者のねらひが存在してゐるのである。そんな事は俳諧の正道とすべきものではないと、言つてしまへばそれきりだが、かうした前書の句としては、はたらきのある所をやはり認めないわけには行かぬ。

成美像

朧夜や吉次を泊めし椀の音

矢矧か池田か、いづれ宿驛の長者の許であらう。今宵は金賣吉次の一行が泊るといふので、椀家具の音も賑々しく騒いでゐる。さうした傳說的な空想を、春の夜を背景にして描き出したのである。蕪村などの句風を摸した作。

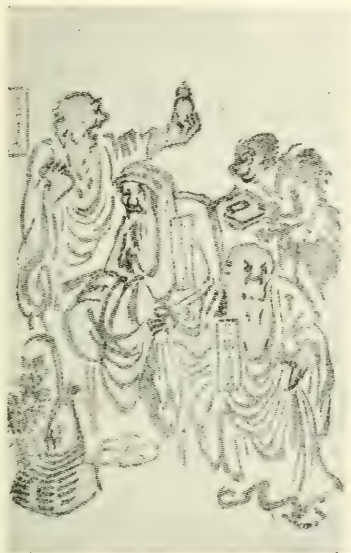
▽華江湖口繪（華江湖は素玩の撰集であるが、序は成美の筆になつて繪卷の體を摸し、又この口繪は巣兆の筆で、

紙雛は花見る顔に書きにけり

紙雛に目鼻を書く。そのあどけない表情を、花見る顔と言つたのである。なまじつか形容的な言葉を用ひないで、かうした言ひ方をしたのが面白い。芭蕉の

菜畑に花見顔なる雀かな

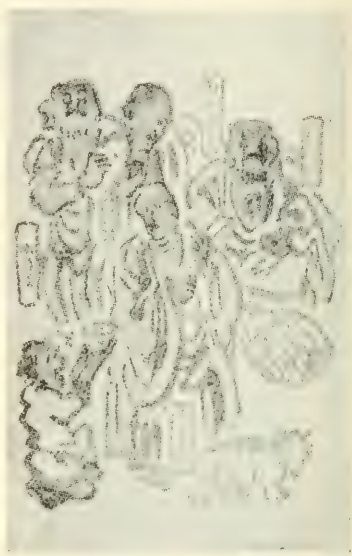
の句も思ひ合せられる。

蠅打つてつくさむと思ふ心哉

最初は一寸そこに止つた蠅を打つつもりだつたのだが、一匹打てば又一匹、又二匹、いくらでも蠅は飛んで來る。それを二匹、三匹と打つて居る中に、段々敵愾心が加はつて來る。ようし今に見ろ、この蠅打ちのつゞくかぎり、部屋中はおろか家中の蠅を皆殺しにし

［華江湖］

當時の俳人を尊者に見立ててある。當時の成美・巣兆等の趣味的な俳諧氣分を窺ふによい。)

○四山藁　成美の遺文をその男包德・包昌・包壽、門人久臧の共編で集めたもの。文政三年刊。

口　繪

てやるぞといふ氣になる。さうした人間の奇妙な心理を巧みに捉へて居る。

成美はその家業の風にも似ず、極めて溫厚篤實な性格の人で、俳道にも眞面目な態度で精進した。その俳諧觀はかの『四山藁』に載せる俳諧小言十則に盡されて居り、彼が決して道樂本位の遊俳でなかつた事がよく窺はれる。風雅の心を根本として、詞は自然の姿として出るべきものだと說いたのは、卽ちそのまゝ芭蕉の精神を承けるものであるが、更に句作の實際に於て、

句を作るに至りて、しひて雅を求むべからず。つとめて俗を去るにあり、俗なる心言葉だに去り捨て侍れば、雅は自らめでたかるべし。

と言つたのは、彼自身の眞摯な工夫のあとを見るべきと共に、又自ら蕪村の離俗の法に通ふ所がある。而してその實際の作品について見ると、流石に都會人的な特色として、むしろ巧緻纖細に傾き、雄渾蒼古の趣に乏しいが、概して溫雅明麗の調と評すべく、化政時代に於る江戸俳壇の第一人者たるを失はぬ。

撫子のふしぐにさす夕日哉

成美の纖細な特色をよく現はした句である。句意は解くまでもなからう。やゝ赤みを帶びた細い莖の一節毎に、夕日の色が鮮やかに映えて居るさまは、誠に纖細美の極である。

はや秋の柳をすかす朝日かな

柳の葉も一葉散り、二葉散り、はやその葉かげをすかして、朝日が洩れる程になつたといふのである。まばらになつた柳の葉、その葉をすかして洩れる日の影、初秋のあはれがしみ〴〵と感ぜられる。なほ句としては、少しのすきもない巧緻な表現に特に注意せねばならぬ。

後の月葡萄に核の曇り哉

後の月の頃になると、もう葡萄にもいさゝか核の曇りが生ずるといふのである。前の句にせ

▽成美筆自畫賛（松宇文庫藏）
陽炎やきのふはわすれあすは來ず　成美

よこの句にせよ、季節の推移に對する作者の鋭敏な感覺がはたらいて居る。

成美筆自畫賛

魚食うて口腥し晝の雪

この句にも鋭い官能的な句がある。清麗純白な雪に對して、魚を食つた口の腥さが、いつよりも鋭敏に感ぜられるのである。この感じは別にどう說明のしやうもない。しかもそれが朝の雪でも夕の雪でもなく、晝の雪なので益〻感じはこまかくなつて居る。

○蔦本集　ツタノモトシフ。門人谷川護物の編。文化十年刊。

○續蔦本集　門人氷狐編。天保九年刊。

○春の日や　以下の句すべて「蔦本集」による。

鈴木道彦

仙臺の人、町醫を業とした。江戸に出て白雄の門に入り、十時庵・金令舎等と號す。成美・乙二・士朗等と親交を結し、その聲望は同門中随一といはれ、俳壇的地位は最も高かつた。文政二年歿、年六十三。『高眠集』『そゞろごと』『澁四手』『鶴芝』『畑芹』等撰著は甚だ多い。句は『蔦本集』『續蔦本集』に收められ、又主要な撰集は『道彦七部集』として纒められてある。

春の日や松葉搔いても遊ばるゝ

別に仕事とてもない春の日長、暢氣に松葉など搔いて居ても、一日はどうやら遊び暮されるといふのである。平穩無事な田園の生活である。

月雪の外に霞の朝ぼらけ

▽道彦像（追善集「藤垣集」所載）

○太平三曲　安穴先生著。文政四年刊。

道彦像

佳景好趣といへば、月雪の眺めに限られて居るやうに思ふが、その外にまだ霞の朝ぼらけがあるといふのである。一讀まづ平俗の調たるを感じ、再讀更に月並の臭味厭ふべきものがある事を知る。元來彼が當時の俳壇に世間的の成功を贏ち得たのは、藝術家としての素質がすぐれて居たからではない。むしろ政治家的才能によつて當時の大家と相結び、その勢力を利用しつゝ、自家の地位を獲得したのであつた。かつ當時中興時代の潑剌たる精神が漸く失はれ、平俗低調に赴かうとする時代の傾向を察して、彼は敢へてこれに迎合しようとさへした。この「霞の朝ぼらけ」の如きは、彼のさうした面目を最もよく代表したものであらう。

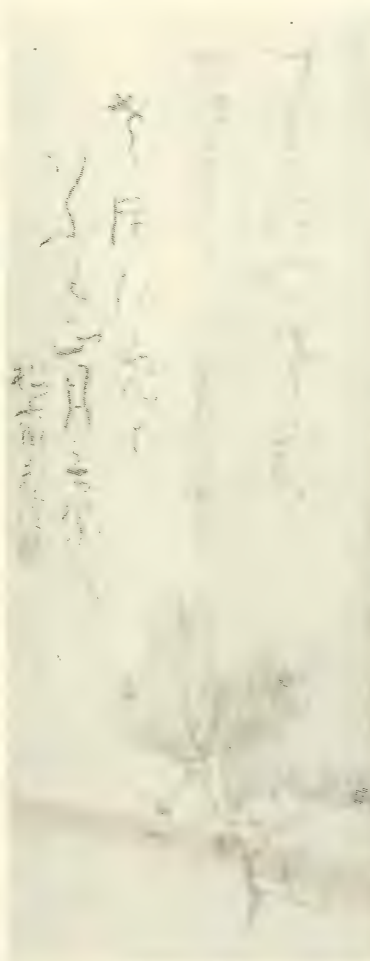
此の頃は面も洗はず男猫

猫の戀である。あまりにも卑俗だと評する外はない。當時の狂詩集『太平三曲』に、「俳諧

▽道彦・乙二筆蹟（松宇文庫藏）
つくばねや暮ゝ霞は野から立つ　金令句并書
さはひめといふも正月言葉哉　松窗 乙選

師」と題して

發句如レ掛レ謎　言是道彦風
止レ詩遣レ俳者　鼻張鬧ニ道中一

とよんで居る。平俗にあらざれば奇矯、以て俗人を驚かさうとするのは、大衆に媚びようとする俳家の常にとる所の手段であつた。享保時代の沾德。淡々の徒然り。今またこゝに道彦風がある。

道彦・乙二筆蹟

ゆさ〳〵と櫻もて來る月夜哉

「ゆさ〳〵」と言ふので、滿開の櫻のかなり大きな枝が想はれる。その櫻の大枝をかついで、朧月夜に浮かれながらやつて來るのである。非常にすぐれた句といふのではないが、道彦の作としてはまづ佳といふべきであらう。「ゆさ〳〵」で情景を明かにしたのは、流石に老練である。

家二つ戸の口見えて秋の山

淋しい秋の山の麓に、家が二軒並んで居る。その家の戸口が遠くから見えるのである。二軒の戸口がほつかりと開いて居るのが、何か空虚な淋しさを一層深くする。これも道彦の句中佳作とすべきもの。

隣る木もなくて銀杏の落葉哉

只一本空高く聳えた大銀杏、その葉もすつかり黄ばみ盡して、あたりを降り埋めるやうに散つて來るのである。敍景の句として面白いが、「隣る木もなくて」と說明的にことわつたのが、やはり句品を卑しくしてゐる。

建部巣兆

名英親、字徳父、秋香庵と號し又喜闘菜翁と稱す。武藏千住の人、後ち關屋の里に隱棲した。父は書家として知られた山本龍齋である。巣兆も亦書をよくし、又書を文晁に俳諧を白雄に學んだ。文化十一年歿。年五十四。「一簞集」「徳萬歳」「關屋帖」「玉の春」「俳諧隆達」「仙都紀行」「玉の市」「うきおり集」等、その撰になる集は頗る多い。句は「曾波可理」に收めらる。

※梅散るや難波の夜の道具市

その昔から「※さくやこの花」と歌はれた難波の津である。その難波の夜の道具市、燈火の影がちらめく中に賣られて行く道具の一つ一つにも、何となく心が惹かれる。そこへ散りかゝる梅の花は、一入の風情を添へるのである。

菜の花や小窓の中にかぐや※姫

○山本龍齋　俳號を百井といひ白井鳥醉の門であつた。巣兆が白雄に學んだのもその關係かららしい。

○曾波可理　ソバカリ。前半は巣兆の自撰、後半は門人加茂國村の編。文化十四年刊。

○梅散るや　以下の句すべて「曾波可理」による。

○さくやこの花　王仁の作と傳へる歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」。この花は梅をさして居る。

○かぐや姫　平安朝の小說「竹取物語」の女主人公。

▽巣兆像（「俳諧百家仙」所載）
霜むらの木をきる斧のひかりかな　巣兆

『竹取物語』に基いた空想の句である。菜の花が一面に咲きつゞいた中の一軒家、家のめぐりには小さな窓が一つあいてゐる。その中に竹取の翁が大事に〱育ててゐるかぐや姫が住んで居るといふのだ。竹取の翁に養はれて居る、美しく可愛らしいかぐや姫の背景として、菜の花がいかにもふさはしいのである。なほこの句は、實際田舍の舊家などで大事に育てられてゐる箱入娘を、かういふ風によんだと見ても面白い。しかしそれにしても、所詮一句の興味は、それをかぐや姫に結びつけた、古典的な連想に係つて居る事は言ふまでもない。

巣兆像

山寺や蜂に螫されて更衣

いかにも山寺などに有りさうな事件だ。蜂に螫されて大騒ぎした揚句、そらまだ袷の中にはひり込んで居るやうだとか言ふので、すつぱりと着物を脱いでしまひ、ついでに袷と着更へた

○龜田鵬齋　當時の名高い書家。
○酒井抱一　姫路酒井侯の次男、名忠因、風流韻事に長け繪畫・俳諧等をよくした。

▽巣兆筆自畫贊（松宇文庫藏）
うしろにも面着て行ぬさしの市　淺草[illegible]

と言つたやうな場合であらう。輕いをかしみと飄逸な氣分とがある。
　巣兆は龜田鵬齋※・酒井抱一※等とも親交があり、當時の最も洗煉された江戸趣味を、十分に理解し體得した人であつた。而してこの江戸趣味なるものは、洒脱優雅な氣品には富んで居るが、强く人に迫る力がない。どこかに遊びの氣分が漂つて居る。それは鵬齋の書、抱一の畫、巣兆の俳諧、それらを通じて明かに見られる事である。巣兆の俳諧にしても、その藝術味の豊かな事は、到底道彥などと同日の論ではない。又彼の撰んだ數多い俳書のどれをとつて見ても、裝幀に編纂に、頗る凝つた趣向が見られ、愛玩措き難いものがある。しかしその中には藝道に精進する意志的な氣魄よりも、趣味として樂しみ遊ぶ氣分の方が、より多く流れて居る。前の菜の花の句にしても、この山寺の句にしても、さうした俳諧に遊ぶ輕い氣もちから生れて

巣兆筆自畫贊

居る。

江に添うて家々に結ふ粽かな

豊かに水を湛へて流れる河に沿つた一村、こゝかしこの空には端午の幟が勇ましく川風にはためいて、家々では粽をこしらへて居るといふのである。上五文字に爽やかな大きい背景を描き出して、それから白々とした粽の餅を點出して居る。誠に老練な手法ともいふべく、又すつきりした趣味の現はれとも見られる。

※尻べたの蚊をうつ芋の葉風哉

「蚊をうつ」は下に續けてよむのでなく、そこで意は一旦切れる。裸御免の田園生活である。夕飯もすんで、縁側に大胡座をかいて涼んで居ると、蚊の奴めが尻べたをちくりと螫す。徐ろに平手でぴしやり叩き附けると、折から裏の芋畠の葉を動かして、涼しい夕風がサッと渡る。全くもつていゝ氣もちである。

○尻べたの　この句は「曾波可理」に秋の部に出してあるから、芋を季題としたのであらう。

老いぬれば西瓜に辷る踊かな

氣だけはまだ若いつもりだけれども、から意氣地がなくなつたものだ。西瓜の皮に辷つて轉ぶとは。誠に「我老いたり矣」の嘆を久しくせざるを得ない。それが踊だから輕く明るい笑を伴なふ。

柴の戸に夜明烏や初しぐれ

老の寢覺勝な草庵の枕に、夜明烏がカアと音づれた。だがまだ東も白ます、枕許の有明が寒さうに瞬いただけ。折からハラ〳〵と戸をうつ時雨の音がする。「おや初時雨だな。もうすつかり冬になつてしまつたわい」といつたやうな情景。夜明烏の聲が、初冬の曉のひそやかな寒さを感ぜさせる。

雪明りあかるき閨は又寒し

○清光云々　以下巣兆撰、仙都紀行（文化八年）の抜抄。月世界へ旅行した紀行文の體裁にして、間に諸家の月の句を交へ出したもの。趣向が高雅でかつ氣がきいてゐる。巣兆の撰集にこの種の趣向をこらしたものが多い。

○朱樹　七朗。

○隨齋　成美。

かねては薄暗い闇の中も、雪明りで明るくなつて居る。だがさうして物の姿がはつきり見え渡ると、暗い部屋の時よりも、又一入寒く感ぜられるといふのである。語調にやゝ巧みを弄したあとは見られるが、とにかく面白い調子ではある。

※清光疊を射て龍影こまやかなり。竹叢の白屋良夜をもてあそんで月の都遠しとせず。旅心立野の駒の迎へ來ぬれば、果老がへちま根をたえず、みづから先達として騎鶴に乘懸をしつらひ、玄鹿にから尻を追ふ。まだ寢ぬ里の槌の音、衣手寒き雲井の末　蓬が島を斜に見て、行く〳〵忉利天の黄道に至る。

天の川　舟あり、引渡してたゞのりに乘る。はるかに河原おもてを行けば、天津乙女の枕石あり。騷人の賜もの雲孫と號して玩ぶべし。こゝ吹上の濱ならねど面白き事限りなし。

雲の峯　晉の陶潛これを奇なりとして、攢峰かはる〴〵簇景をなす。八重だつこの嶮峻や我が黨の※朱樹・梅間も筆を捨つべく、※隨齋だも寫し得る事難かるべし。去來子が腰掛どころ今もなほ殘れりといへり。

井上士朗

名正春、通稱專庵、枇杷園・朱樹叟等と號す。名古屋の人、代々醫を以て業とす。國學を本居宣長に、書を范古に學び、又俳諧は曉臺門の逸足として知られ、その名聲江戸の道彦と伯仲した。文化九年歿、年七十一。その撰集になる俳書は頗る多く、『※士朗五七集』には三十五部收められて居る。なほ隨筆に『枇杷園隨筆』、句集に『※枇杷園句集』『※同後篇』『※枇杷園類題發句集』等がある。

※鶯に※清瀧の水しづかなり

清冽な清瀧川の水が、兩岸の翠巒をめぐつて靜かに流れて居る。と、どこからか聞えて來る鶯の聲、山も川も悠々としてまさに仙境の思ひがする。

句は佳作と稱してよいが、「鶯に」のにが些かこの句の純粹性を傷けて居る。即ちその爲に、鶯と水の靜さとの間に、何か人爲的な關係が結びつけられたやうで、一種のいやみが生ずる。しかも士朗は、そこに句の複雜味を求めて、むしろ得意であつたのだらう。

○枇杷園句集　門人卓池・椿堂・蕉雨・宇洋・岱兒等の共編。文化元年刊。
○同後篇　門人卓池・秋擧の編。文化九年刊。
○枇杷園類題發句集　門人梅間の編。文化八年刊。
○鶯に　以下特に註したものの外、すべて句は「枇杷園句集」による。
○清瀧　洛西清瀧川。高尾・栂尾・槇尾の三山を繞ひ、愛宕の麓を流れて大堰川に注ぐ。

青柳の東海道は百里かな

成美の「のこらず梅になりにけり」や、芭蕉の

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

も、同じく東海道の春色をよんだものであるが、これは海道筋至る所に緑の絲を垂れた柳に、五十三驛の春色を寄せたのである。下五の「百里かな」が、長々と緑のつゞいた光景を力強く現はして居る。東海道全體の春色をよんだ句とすれば、必しも「矢矧にて」といふ前書の必要もないのであるが、作者は恐らくあの矢矧の長橋のほとりに立つて、橋の彼方此方につゞく柳を遠望し、特にこの感を深くしたのであらう。

士朗像

たうたふと瀧の落ちこむ茂り哉

○青柳の　この句「矢矧にて」と前書がある。

○のこらず　成美の句「東海道残らず梅になりにけり」（四八二頁參照）

○梅若菜　芭蕉が湖南にあつた頃、大津の門人乙州が江戸に下るのを送つた吟。東海道は今まさに梅も盛り、若菜も萌え、鞠子宿の名物とろゝ汁も甘い頃であらうの意。

士朗像
（門人梅間筆、名古屋　照蓮寺藏）

〇曾洛　曉臺の後をついで暮雨巷二世を稱した臥央の門人。

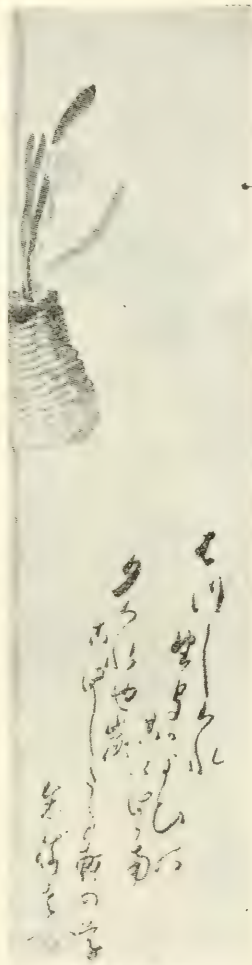
「士朗筆自畫贊（松宇文庫藏）」
はつしぐれ野守がよひのことばかな
夕ぐれや炭こぼしたる野の草
朱樹老人

〇俗談平話に云々　曾洛の「文庫開」に見える。

〇曉叟　曉臺のこと。

句意は明かである。鬱蒼たる新綠で覆はれた懸崖に、水は百尺の素練をなして落ち込む。轟轟たる水聲は全山をゆるがし、爽涼の氣自ら身に迫るやうである。措辭にいさゝかのたるみもなく、平明直截に言ひ切つたのが、句の内容を最も適切に表現して居る。

士朗の名聲が當時道彥と伯仲の間にあつたのは、彼もまた道彥と同じく、最もよく大衆の時代的な動きに從つたが爲であつた。曾洛が

士朗筆自畫贊

俗談平話に流れ過ぎ侍るを、曉叟見とめてこれを深くなげきつゝ、そのかみの正風に引戻し給へば、（中略）士朗いよ〳〵やはらかみを添へ、穩かなる風いたらぬ隈もなく、茂りそひ、云々

と言つて居るのは、畢竟高雅に過ぎた師曉臺の句風を平明化し、以て時代の傾向に應じた謂に外ならぬ。しかし平明化には當然低俗化の危險をも伴はねばならぬ。日々に狂吟する事三百餘

句、その中自得のもの僅かに八九づつを拾つて編したといふ『枇杷園句集』を繙いても、

鶯をもどすな梅に垣根して

年々に花の見やうのかはりけり

よき程によごるゝ萩の小庭哉

雪掃くやわがあとへ來て啼く雀

等、あまりにその調子の低いのに驚かずには居れない。卽ちこの程度の風流味と表現技巧とが、當時の俳壇大衆の好尙に最もよく投じたわけである。しかし流石に士朗は大衆と同じ水準に居たのではなかつた。

氣色を旨として作れる句はおのづから餘情あり、情を旨として作れるは第二におつる。

と、小主觀に捉はれる事を戒めてさへ居る。さればこそこの瀧の吟の如き、又次にあげた數句の如き、誦すべき佳什も相當に殘したのである。だが要するに彼が大衆より進んで居たのは、たゞ一歩だけであつた。そして實は數步でなく、たゞ一歩であつたが爲に、彼はよく時代の寵兒となり得たのかも知れない。

太秦は竹ばかりなり夏の月

○太秦　洛西太秦村。今京都市右京區に屬する。

○芭蕉も云々　芭蕉の句「ほとゝぎす大竹藪をもる月夜」（一四六頁參照）

太秦から御室、嵯峨あたりにかけては竹藪が多い。芭蕉も大竹藪に洩る月を詠じて居るが、この句は芭蕉のやうに竹藪全體の大きな景觀を描いたのではない。一本一本の竹の涼しさうな姿を見てゐる。どちらを向いてもすく／＼と延びた竹だ。その細かい葉は月の光を浴びて、どれも涼しさうにかゞやいて居る。芭蕉の句はむしろ暗い凄みがあるが、これは明るい爽さが感ぜられる。

大蟻の疊をありく暑さ哉

微風もない日盛りである。庭の石がギラ／＼と輝やいて、蟬の鳴く聲さへしない。ふと疊の上を見ると、大きな眞黑い蟻が一匹、緣側から這ひ上つたのだらう、のそり／＼と歩いて居る。疊の上に眞黑く動いて居る大蟻に、何だか日盛りの暑さが象徴されて居るやうである。

蚊帳越しに朝顏見ゆる旅寢哉

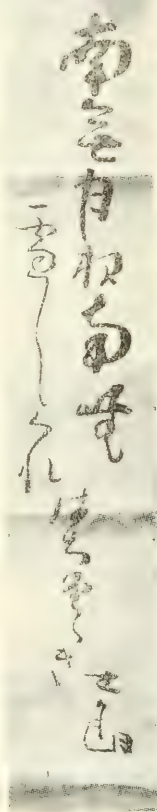
ふと目をさますともう雨戸は繰られて居る。美しく咲いた垣根の朝顏が蚊帳越しに眺められ

▽士朗筆蹟（松宇文庫藏）

南無月夜南無雪しぐれはおたゝき　士朗

○名月に　この句句集後篇に出づ。

る。目をさました途端には、そこが旅の宿りだといふ事も忘れて、そのまゝ朝顔に目をやつたのであるが、暫く眺めて居る中に、我が家の垣根でない事に氣がつく。そして旅寝のあはれがしみ〴〵と感ぜられるのである。

句はたゞ敍景のみに終つて、少しも旅のあはれについては語つて居ない。しかもその爲に一入餘情が深いので、それは自ら氣色の句と情の句とを對照して論じた事を、そのまゝこゝに示したものと言つても宜い。

士朗筆蹟

名月に露の流れる瓦かな

良夜月光が凝つて露となつたのであらうか。家々の瓦はしつとりと濡れ色にかゞやいて、やがては露が流れるやうにさへ感ぜられるのである。これも氣色を旨とした句であり、秋夜月明の情はよく得て居るが、「露の流れる」は些か俗衆の好みに投じた所がある。

足輕のかたまつて行く寒さ哉

場所は畷道か宿はづれなどであらう。うそ寒いなりをした足輕共が、寒風に吹かれながら一かたまりになつて行く。それを遠方から眺めたさまである。これまた氣色を旨として成功した句。

木枯や日に〳〵鴛鴦の美しき

冬が深くなるにつれて、鴛鴦の羽色が鮮かに美しさを增すといふのであるが、それだけでは勿論句にならない。「木枯や日に〳〵」で景が描かれ、情が浮んで來るのである。森は木枯の日每に落葉を增して行く。その森の奥深く隱れた古い池も、今は青い水の面があらはに見え

士朗墓

○足輕の　この句野並集（明和六年刊）に出づ。

▽士朗墓（名古屋市中區新榮町照蓮寺墓地内に在る。）

て、折々水の上に浮んだ鴛鴦の姿も見られる。そしてその鴛鴦の羽色が日に〳〵美しくなつて行くのである。蕭條たる四邊の風物に比して、それが際立つて美しく感ぜられるのである。

この句も大體に於て佳作と評してよからうが、「日に〳〵美しき」といふ敍法には、やはり平俗な句が漂つてゐないとは言へない。

曉叟※、正風復古にかたのごとく骨を折られたり。まづ美濃風のあまりに下々に俗間に落ち過ぎて、かゝらぬかた言など言ひ出て、文雅のはしをいふにも足らぬに至る。さるを句體を雲上に仕直し、或は又萬葉ぶりに發句なども作りて、ちといやらしきやうなり。士朗は曉叟の地ならし柱立をうけつぎて、又更に正風の深致、かつは句上に風流を盡して、付合は殊更翁の筋をよくも探り得たる人なり。曉叟なくば朗師の風流もかくまでには至らじ。朗師なくば東奥九州伊勢三河甲斐の風流、信濃近江の口きゝも出で來るまじ。實に蕉翁以後一人の俳仙といふべし。

○曉叟云々　士朗の門人梅間の著「力草」の一節。むしろ曉臺より士朗をあげた點は、師に私したといふべきであるが、士朗の當時の名聲がよく窺はれる。

小林一茶

信州柏原に生る。幼名彌太郎。三歳にして母を失ひ、繼母につれ添うたが、とかく家庭が面白くない爲、安永五年江戸に出で二六庵竹阿に師事した。當時は圯橋と號し、又師の歿後一時二六庵をついで菊明ともいつた。寛政年間諸方を行脚して一茶坊亞堂と號す。その間『旅拾遺』『さらば笠』等の撰があつた。晩年は故鄕に歸り住み、文化十一年五十二歳で始めて結婚したが、その後妻子も相ついで病死し、文政八年最後に娶つた妻とまだ生れない一兒とを殘して文政十年歿した。年六十五。前記二書の外なほ『三韓人』『おらが春』等の撰があり、なほ近時遺稿『七番日記』『八番日記』『我春集』『株番』等も翻刻された。句は『※一茶發句集』に收められる。

※梅が香に障子開けば月夜哉

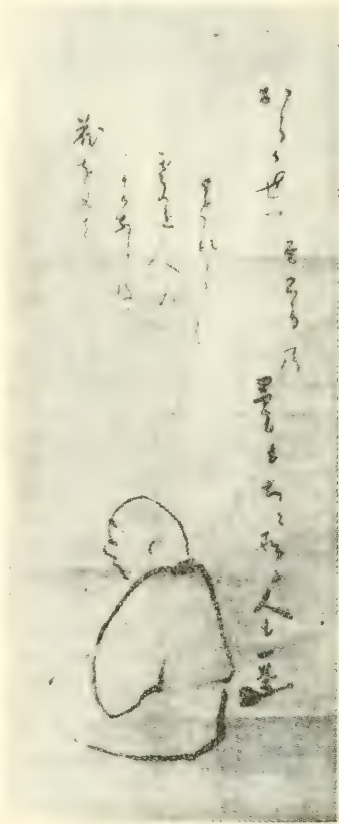
一茶のひがみは彼が幼時の逆境に出發して居ると言はれる。それは恐らくそれにちがひなからう。しかし彼の俳句そのものが、初めからあの皮肉に滿ちたものであつたと考へるのは早計

○一茶發句集　門人等の編。文政十二年刊。なほ別に増補を加へた嘉永版もある。

○梅が香に　この句寛政紀行に出づ。

▽一茶筆自畫像賛（信濃 中村氏藏）

おらが世やそこらの草ももちになる
　　　　　　　　　　人も一茶（花押）
花なめて月にかたしぶは
雲の上人のこゝにして

である。こゝにあげた一句は、寛政年代の作にかゝるものであるが、その頃まではまだ所謂一茶らしい特色は、少しも見られない。今寛政年間の紀行や句帖等から、當時の作を若干抄出して見ると、

一茶筆自畫像賛

五月雨や借傘五千五百番
白浪の夜は戻るか遠がすみ
里霞みぬ里人は我を霞と見なん哉
雨あがり朝飯過の柳かな
夕露やいつもの所に灯の見ゆる

等、むしろ成美等との交游から得た感化の方が大きかつた。

一茶が繼母、異母弟、郷里の人々等に對して、激しい反感をもつやうになつたのは、享和元年父の死にあつてからの事である。父の病中の看護日記によつても、當時の一茶のひがみは想ひやられる。かうして次第に彼の句には、世の强者を白眼視し、すべてを皮肉に見る傾向を深くして行つた。

三文が霞見にけり遠眼鏡

これも寛政時代の作であるが、こゝには彼の皮肉の片鱗がすでに見られる。しかしそれは、やはり同じ頃の作

逃げ込んで夕立ほめるをのこ哉

等と同じく、決してひがみといふのではない。寧ろ輕く明るい皮肉である。

めでたさも中位なりおらが春

○成美等との交游　夏目成美は一茶が江戸在住時代最もよき指導者であり、又物質的にも援助する所が多かつた。

○看護日記　「みとり日記」と題して飜刻されて居る。

○三文が　この句寛政二年刊「霞の碑」に出づ。

○めでたさも　この句おらが春に出づ。俳文篇七七九頁參照。

「おらが春」は我が春、即ち自分のお正月といふ意で、信州の方言をそのまゝ用ひたのである。上々吉の目出度さでもないが、さればとて下々の下の目出度さでもない。まづ〳〵中位の我が春だといふのである。

一茶にはなほ

　※我が春も上々吉ぞ梅の花

の吟がある。これは梅の花に滿足した心境を託したのであるが、一茶の眞面目はやはり「中位なり」の方に在る。

　※鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな

一茶は五十二歳にして初めて結婚し、三男一女を儲けた。老年の子である。その子供を熱愛した事は、『おらが春』の記事によつても知られる。この句は恐らく最愛の一女のさまをよんだのであらう。

女の子が手鞠をついて居る側に、可愛らしい小猫が來てじやれかゝる。猫もその鞠がほしいのか、頻りにニャー〳〵と鳴く。女の子はそれに赤ん目をして見せて、おかまひなく鞠をつき

○我が春も　文化八年稿本「我春集」に出づ。

○鳴く猫に　文政三年の作には中七「赤ん目といふ」とあり、文政四年の作にこの通りになつてゐる。なほ「小兒のあどけなさを」と前書がある。

續ける。かうした時の一茶は全く純な童心になるのである。

我と來て遊べや親のない雀

三歳にして慈母を失つた一茶は、この『おらが春』の文に見えるやうな、誠に我が身ながらもあはれなその日〳〵を送らねばならなかつた。その幼ない一茶の心に、親のない子雀の姿は、悲しくもまた親しいものであつた。彼はその悲しい親愛の情を、かうした言葉で呼びかけずには居れなかつたのである。

この句『おらが春』に「六歳彌太郎」と署してあるので、世にはこれを一茶が六歳の時の吟と考へて居るものもあるが、すでに『若水帖』には「六歳の頃を思ひ出て」とある通り、これは六歳の當時の情を追憶して、遙か後年によんだものである。なほ成美評一茶句稿には「八歳の時」と前書して、中七「遊ぶや親の」とある。これによると必しも六歳の時と限つたわけでもなく、單に幼時の悲しい生活を追憶しての吟と見ればよい。

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

○我と來て　この句おらが春に出で、「親のない子はどこでも知れる、爪をくはへて門に立つと、子供らに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、裏の畠に木萱など積みたる片かげに蹲りて長の日をくらしぬ。我が身ながらもあはれなりけり」と前文がある。

○若水帖　文政二年自筆の一茶遺稿。

○雀の子　この句おらが春に出づ。

○それ馬が　七番日記に出づ。文化十五年の作。

○悠然として　句は七番日記に出で文化十年の作。なほおらが春にはやゝ長い前文が添うて居る。

○陶淵明の詩句　陶淵明の飲酒詩に「采菊東籬下、悠然見南山」

まだ巣立つて間もない位の雀の子が、道の眞中で恐れ氣もなく餌を拾つて居る。そこへ馬が通りかかつたのだ。一茶はハッとした。「危い〳〵。お馬が通るぞ。そこを退いた、〳〵」と、氣をつけてやらずには居れなかつたのである。一茶が例の弱い動物に對する親愛の情が、溢れるばかりに現はれて居る。

一説にこれは子供が玩具の馬を走らせて居るさまだといふ。「そこのけ〳〵お馬が通る」といふのは、成程玩具の馬でも走らせる時の子供の口吻に近い。もしそれだと單に可愛らしい情景だけの句になるのだが、別に

※それ馬が〳〵とやいふ親雀

の作もあり、やはり「そこのけ〳〵」は一茶が親雀になり代つた情と見るべきである。かく解して始めて、句も一茶の作としての特色をおびて來る。

※悠然として山を見る蛙かな

前肢を突張つて、洒蛙々々然とした面構で山を望んで居る蛙。誠に悠々然たる態度である。※陶淵明の詩句を利用したのが、單なる技巧に陷らず、悠閑日月を樂しむ隱士の風丰をも想望され

○痩蛙　この句七番日記に出でゝ武藏の國竹の塚といふに蛙たゝかひありけるに見にまかる。四月二十日なりけり」とある。文化十三年の作。

○けろりくわん　七番日記に出づ。文化八年の作。

て面白い。

痩蛙負けるな一茶これにあり

逆境の間に育つた一茶は、強者に對しては執拗に白い眼を向けて居たかはり、弱者に對してはいつも溢るゝばかりの同情を持つて居た。それは一茶自身が弱者であつたからで、つまり彼はさうして自分自身をあはれみいたはつて居るのでもあつた。

蛙合戦が始まつた。その中に一匹痩せつぽちの貧弱な奴が居る。一茶はそれが強いのに虐められさうで、可愛想で仕方がないのだ。「よし、痩蛙、こゝにわしがついて居るぞ。頑張れ〳〵、負けるな〳〵」といふのである。卒讀すればむしろ滑稽の感が湧くであらうが、この弱者に對する一茶の心情を思へば、決して笑つてすまされない氣がする。

※けろりくわんとして鴉と柳哉

柳の枝に烏がとまつて居る。だがそれは梅に鶯、竹に雀ではない。烏はたゞ偶然に飛んで來

○陽炎や　文政二年の句帖に見え「居去り躄」と題してある。

○春雨や　七番日記に出づ。文化十年の作。

て、偶然にそこへとまつて居るのだ。鳥はけろりくわんとした顔つきで、二者は全く沒交渉である。一種の皮肉を含んだ輕いユーモアがある。人を小馬鹿にしたやうな鳥の顏も想ひやられる。

陽炎や手に下駄はいて善光寺

うらゝかに陽炎もゆる春の日、長野の町には善光寺參りの善男善女が引きつゞいて居る。その中に躄までが手に下駄はいてお詣りに出かけてゐるといふのである。「手に下駄はいて」がやはり一茶らしい見つけどころである。

春雨や食はれ殘りの鴨が啼く

しめやかに春雨が降る日、物うげに啼く鴨の聲がする。その情景はそれだけで一の句となり得る。普通の俳人ならば、勿論さうした情景のまゝに句案を定めるにちがひない。しかし一茶は、それをやはり皮肉な眼で眺めずにはをれなかつた。「おや鴨が啼くな。あれは冬の間にうま

く命を助つた、いはゞ食はれ殘りの鴨ぢやないか」。一茶はさう呟いて輕く皮肉な笑を浮べるのであつた。

一茶の性格は言はゞ大きな駄々つ子といふ感じがする。非常に無邪氣であるかと思ふと、又一度すね出したら執拗にすね通す。何でも眞直に物を言はないのだ。それは彼の悲しい性格でもあつたが、又彼の句に強い個性を與へた所以でもあつた。

下谷一番の顏して更衣

「下谷一番伊達者でござる」といふ手鞠唄の文句をきかせた作意。即ち「下谷一番の顏」は、「下谷一番の伊達者らしい顏」の意である。初袷を着すまして、我こそはと得々然としてゐる者を、輕く揶揄して居る。

大螢ゆらり〳〵と通りけり

言ひ得て妙と評する外はない。一茶の句は一見眞情の赴くまゝ、少しも巧む所がないかの如

○下谷一番　七番日記に出で「手まり唄」と題してある。文化十年の作。

○大螢　おらが春に出づ。

▽一茶筆自畫賛（松宇文庫藏）

又むだに口あく鳥のまゝ子かな　　つはめも一茶

○能因法師の故事　能因法師が「都をは霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」の歌を得、これをそのまゝ發表するのも折角の秀歌として遺憾だといふので、人々には陸奥に下つたと披露して一室に閉ぢこもり、顔だけ日に燒いて、さて日頃經てから歸洛したと稱して右の歌を發表したといふ。

く見えるが、それは全く皮相の見にすぎない。彼がいかに表現に苦心を重ねて居るかは、多くの遺稿を子細に檢べるとすぐ分る事である。一茶の趣向が日を隔て月を隔て、或は年を隔てて幾度となく、少しづつ作りかへられて居る事は珍しくない。又一茶自ら甲の場合によんだと言つてゐる句でも、實は必しもさうでなく、すでにそれより數年も前、乙の場合によんだ作であるといつた例すら少くない。それは乙の場合よりも、甲の場合の句とした方がより適切であつたからである。或は能因法師の故事にも比すべき苦心もあつたかもしれない。例へば『おらが春』にしても、その中の句文はすべて文政二年、一年間に於る作かの如く編纂されて居るが、實はそれより數年以前の作までも數十句取入れられて居るのである。たゞしこれは作爲といふよりも、むしろ彼の子供らしい物ずきによる事が多

一茶筆自書賛

○やれ打つな　「清水物語」文化六年刊、「千當撰」に出づ、

○涼風の　七番日記に出て「裏長屋のつきあたりに住みて」と前書がある。文化十二年の作。

いらしいが、とにかく一茶が非常に表現に意を用ひた人である事は注意せねばならぬ。この大螢の句の如きにも、表現上の苦心は必ずや存したにちがひない。

やれ打つな蠅が手をすり足をする

蠅を叩かうとする。蠅は打たれるとも知らずに、しきりに前肢や後肢をすり合せて居る。それが一茶の目には、手を摺り合せて命乞するやうに見えたのである。これも弱者に對する彼の同情であつた。「やれ打つな」とあわたゞしく制して、「手をすり足をする」と、蠅のいぢらしい有様を訴へて居る時、一茶の心は全く小動物への純な愛情で燃えて居たのだ。

涼風の曲りくねつて來りけり

をかしみといへばをかしみであるが、それは素直な笑ではない。やはり一茶のひがみを底にもつた苦笑である。しかしこれは一茶でなければ言へない境地だ。普通の作者であるならば、陋巷の奧までも吹いて來てくれる涼風に、素直に讃辭を捧げて居るのかもしれない。それなら

誰にでも出來る事だが、かうして思ひ切つてすねた所に一茶の面目がある。

蟻※の道雲の峰よりつゞきけん

庭の沓脱の上に蟻が行列をして居る。見るとそこから敷石までつゞいて居り、そこまで行つて見ると、又向うの垣根までつゞいて居る。そこから先まだ何處までつゞいて居る事だらう。それから垣根の外の畠に出、道を横ぎり橋を渡り、蜿蜒として延びた末は、あの遠くの雲の峰までつゞいて居るのではなからうかといふのである。奇想天外より來ると評してもよいが、一茶の童心がこの詩人らしい空想を生んだのでもある。

一※人と帳面につく夜寒哉

田舍の侘しい宿である。外には泊り客もないと見えて、夜寒の灯の下に書きつけられた宿帳には、自分の名が一人あるだけだ。たつた一人きりだと思ふと、秋の夜の淋しさが急に身にしみるのである。

○蟻の道　おらが春に出づ。

○一人と　句は一茶發句集に出で「旅」と題してある。七番日記、文化十五年の條には「獨旅」と題して「一人と書留めらる〻夜寒哉」、「一人と帳に附けたる夜寒哉」等とある。推敲の末發句集の形を得たのであらう。

因みにいふ、宿帳に自ら「一人」と書きつけることとして解した說もあるが、すでに別案に「一人と書留めらる丶」とあるのだから、それは泊り客合計一人と、宿の方で書きつけたのである。同行者もなく自分一人だけだといふのではない。宿の泊り客が自分一人だけなのである。

稲妻やうつかりひよんとした顔へ

ぼんやりと空でも眺めて居る所へ、突然ピカリと稲妻が光つたので吃驚したといふのである。句の內容は何でもないことであるが、「うつかりひよん」といふ俗語を用ひたのが、一茶の獨壇場ともいふべきで、それで驚いた樣子が躍如として來る。芭蕉の極初期の句にも、

夕顔に見とるゝや身もうかりひよん

といふのがあるが、これはひよんに瓢を言掛けた貞門風の手段にすぎない。然るに一茶に至つては、けろりくわん、づんつるてん、だまりこくる、あつけらこん等の俗語を、極めて大膽に使用し、しかもその俗語のまゝの意義に於て表現上の効果を得て居る。これはやはり一茶の大きな特色の一としなければならぬ。

○稲妻や　七番日記に出づ。文化十一年の作。

○けろりくわん　前出「けろりくわんとして烏と柳哉」

○つんつるてん　「たのもしやつんつるてんの初袷」

○だまりこくる　「晝の蚊やだまりこくつてうしろから」

○あつけらこん　「女郎花あつけらこんと立てりけり」

寢返りをするぞ脇よれきりぐ〱す

これも小さい動物に對する一茶の愛である。「そこのけ」より「脇よれ」の方が親しみの感じが深い。しかも丈草の句「つれのある」に比すると、こゝにも一茶のひがみはなほ潜んでゐる。

有明や淺間の霧が膳を這ふ

『七番日記』によると文化九年七月、一茶が江戸から歸鄕の際の吟らしい。有明の月がまだ淡く殘つてゐる早曉、早出立の膳につくと、明け放たれた窓先から、低く這つた淺間の霧が膳の上まで流れ込んで來る。早曉山驛の情景が遺憾なく描かれて居る。一茶の敍景句中最もすぐれたものであらう。

名月の御覽の通り屑家かな

一茶が自ら草屋を描いてこの句を請し、「わが家のさまを見て」と題したりしたものがある。

○寢返りを　一茶發句集に出づ。七番日記文化十三年の條には「寢返りをするぞそこのけ蛬」とある。

○つれのある　「つれのある所へ掃くぞきりぐ〱す」。[illegible]頁参照。

○有明や　株番・七番日記等に出で、株番には「輕井澤」と前書がある。文化九年の作。

○名月の　一茶發句集に出づ。

○屑家　貧しい小家をいふ。

句は皎々と照り渡る名月に對して、「御覽の通りのあばら屋でございます」と言つたのである。些かすねて茶化した氣味がある。そこが一茶式なのだ。蕪村の

　月天心貧しき町を通りけり

等とは全くちがつた境地である。

　※次の間の灯で膳につく寒さ哉

一茶がみじめな漂浪生活を送つて居た時代か、又はその頃を思ひ出しての作であらう。宿に泊ると言つても、乞食同様な彼は、どうせろくな宿に泊れる筈もなかつた。一人旅の乞食坊主、宿では部屋にあかりさへ點けてくれない。飯を食ふにも隣の部屋の灯をかりて膳につくのだ。そのあはれな自分をかへりみて、寒さはひし〳〵と身にこたへた事であらう。前の※一人と帳面につく夜寒さよりは、更に陰慘の氣が深い。

　※これがまあ終の栖か雪五尺

○次の間の　一茶發句集に出で「一人旅」と題してある。

○一人と　前出「一人と帳面につく夜寒哉」

○これがまあ　七番日記に出づ。文化九年の作。

○雪の日や　文化四年の作。
○古郷や　文化七年の作。

安永五年、十四歳の時故郷を出て以來、漂浪の生活をつゞける事三十六年、その間享和元年には父の死にあひ、遺産分配の爲に屢ゝ繼母や遺母弟と爭つた。文化五年祖母の法要を營む爲歸鄕した折、名主の仲裁で遺産分配の方案も立てられたが、なかく親族は埒を明けてくれない。却つて鄕里の人々は彼に白い眼をさへ向けるのであつた。

※雪の日や故鄕人のぶあしらひ
※古鄕やよるもさはるも茨の花

等の吟は、當時の彼の憤懣を洩らしたものであつた。その後彼は文化九年十一月故鄕に歸り、借家住ひをしながら、是が非でも異母弟仙六から父の遺産を受取らうと決心した。この句は卽ち當時の作である。

一茶ももう知命の年に達して居る。餘命も幾許を保つかはかり難いのである。そこで愈ゝ過去の漂浪生活を淸算して、故鄕を終焉の地に定めようと決心した。だが、今目前に見る五尺の雪、この大雪に埋もれた地が、自分の終の栖になるべき場所かと思ふと、誠に感慨無量なものがあつたであらう。況んや父の遺産はまだ手に入るかどうか分らない。一茶の心には前途に對する暗い危惧の念も、なほ橫たはつて居たのである。

しかしかうして一茶が腰をするたかひはあつた。翌年明專寺住職のあつかひによつて、遺產

一茶書翰（[illegible]）

[illegible]

十一月廿[illegible]

[illegible]

候かしこ

十二月四日

[illegible]

年内立春

終にちよつと春立つ月よ哉

[illegible]

など貴評入へ（　）候　一茶

文[illegible]様

○うまさうな　一茶發句集に出づ。七番日記には「ふうはりふはり哉」とあつて、文化十年の作。

○大根引　七番日記に出づ。文化十一年の作。

茶　筆　蹟

の半は無事に一茶の有に歸し、その上異母弟仙六からは、長い間一茶の有たるべき家を使つて居たといふので、借家料十一兩二分まで受取つた。それから翌十一年には菊女を娶つて樂しい新婚生活が始まる。一茶の一生中恐らく最も樂しく華やかな時は、當時の事であつたらう。

※うまさうな雪がふうはり〳〵と

大きな柔らかい雪片が、ふはり〳〵と落ちて來る。見て居るといかにも甘さうな氣がする。一茶の無邪氣な童心の發露である。この頃はもう自分の家におちついて、一茶の心も樂しかつた事であらう。

大根引大根で道を教へけり

○ひん拔いた　柳多留初篇（明和二年刊）に出づ。

○ともかくも　おらが春の掉尾、文政二年十二月二十九日の條に長い前文と共に出て居る。

卽興滑稽の作。『柳多留』に曰く、

　※ひん拔いた大根で道を教へられ

と。全く暗合であらうが、すでにこの先作がある以上、一茶も功をこれに讓らねばなるまい。

　※ともかくもあなた任せの年の暮

この句を解するには、『おらが春』の前文を一應よんでおかねばならない。今便宜その後半だけを左に抄出しよう。

さて後生の一大事は、その身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第、遊ばされ下さいませと御賴み申すばかりなり。如斯決定して人の上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長蜘の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、我が田へ水を引く盜み心をゆめ〳〵持つべからず。然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守り給ふべし。これ卽ち當流の安心とは申すなり。あなかしこ。

といふのである。句は全くこの心境を吐露したに外ならぬ。

○中位のめでたさ　前出「めでたさも中位なりおらが春」

○露の世は　下五は「さりながら」。俳文篇七八一頁参照。

一茶墓（信州柏原小丸山にある。）

文政二年の新春、中位のめでたさを壽いだ一茶も、その年六月愛兒さと女を失つて、「露の世は露の世ながら」と悲嘆の涙にくれた。この不幸は一茶の心境に大きな變化を齎らしたにちがひなかつた。そして何事も佛陀のはからひに任せ、他力信仰の安心を得ようとしたのである。しかしすべての執着を捨てゝあなた任せにするには、彼の我はあまりに強かつた。死ぬまで彼は執拗なひがみから拔けきれないで居る。その後生れた石太郎。金三郎の兩兒が夭折した際の如き、人を罵り世を恨んで居るさまは、はたの見る目も氣の毒なくらゐであつた。かうして彼は最後まで大きな凡夫として生きぬいた。そしてそれがまた俳人一茶の全面目であつたのである。

一茶墓

松窓乙二（しょうそうおつじ）※

奥州白石の人。本名百理清雄。白石の城主片倉氏の祈願所千住院の法印で修驗道の人であつた。俳諧は特に師とした人はなく、全く獨學工夫によつて上達した。文化七年函館の布席に招かれて同地に斧の柄社を作り、止る事三年であつた。北邊の地に蕉風の精神を鼓吹した功は大である。文政六年歿、年六十九。『蕪村發句解』『耳さらひ』『發句手爾葉草』等の著がある。句は『※松窓乙二發句集』に收められ、又別に『※斧の柄草稿』もある。

反古（ほご）焼（や）いて鶯（うぐいす）待（ま）たん夕（ゆふ）心（ごころ）

いつも夕方になると庭木に來ては鳴く鶯、今日ももう來鳴（きな）く頃になつた。何をしようといふ仕事もないので、そこらの反古など取集めて、庭の隅（すみ）で火をつけた。ほうつと薄（うす）い烟（けむり）がゆるやかに立ち上る。まだ鶯は來ないかな。何となく心待たれる思ひで、烟の行方（ゆくへ）をぼんやり見送つて居る。さういつたやうな情景である。春の夕のしめやかに落ちついた氣分がしのばれる。

○乙二　よみ方については諸説あるが、乙二の句の詞書に自ら「乙二とはをうなめきたる名なりといふ人に戯れに答ふ」と言つて居り、それは恐らく「お辻」に通ずるからだと思はれる。よつて今はオツジとよんでおく。

○松窓乙二發句集　門人一具・古翠の共編、刊年不詳。なほその續篇が「乙二七部集」の中に收めてある。

○斧の柄草稿　乙二の子十竹・きよ女が父の病中その句稿を上梓したもの。文政六年刊

○反古焼いて　以下の句すべて「松窓乙二發句集」による。

春雨や木の間に見ゆる海の道

春雨けぶる木の間を透して、遠く海へつゞく道が見えて居るのである。極めて平明な敍景であるが、よく自然の趣を捉へた所がある。

乙二像

乙二はかつて門人夢南に俳諧修行の仕様を問はれて、禽獸草木の本情を見定め、自然のさまを言ひとるべき事を教へて居るが、それは卽ち鬼貫が物の所詮を知れといひ、芭蕉が「松の事は松にならへ、竹の事は竹にならへ」と說いたのと、根本に於て相通ずるものであつた。この春雨の句の如き、當時の俳人に共通な趣味的な風流さがなく、たゞ平々淡々と自然の情趣を言ひとらうとしてゐる。

水二筋夏花そゝぐと田へ行くと

この前書はそのまゝ句につゞけて解するやうになつて居る。我が家のめぐりを二筋の水が流

▽乙二像　（文化十年刊「萬家人名錄」に據る。）

○物の所詮を云々　この事鬼貫の「獨ごと」に見える。所詮は本質といふ程の意。

○松の事は云々　この事土芳の「三冊子」に見える。

○水二筋　「我が家は」と前書がある。

○夏花　夏安居（ゲアンゴ。夏季三ケ月の間一室に籠つて佛道を修行すること）の間に佛に供へる花。

▽乙二筆蹟（東京　某氏藏）
たんぽゝや一日に見やる莖と花　　松窗乙二

○九日　門人一具の撰。

れて居る。一筋は佛に奉る夏花へそゝぐのと、一筋は門田へ行くのとであるといふので、簡素な生活のさまがしのばれる。

風薫る暮や鞠場の茶の給仕

「あり、あり」の掛聲も勇ましく、暮れるまで蹴鞠に興じた庭の中、烏帽子狩衣姿の人々が床几に腰を卸して休んで居る。そこへ前髪立の美しい少年が茶を運んで來る。折から庭木を搖かして涼しい風がさつと吹きすぎる。さういつた古典的な優雅清爽な情景が想像される。

乙二筆蹟

乙二の追悼集『九日』には、彼が折々門人を諭した言葉が錄されてあるが、その中に、
當時の俳徒おのれ〳〵が師家をあが佛とたふとびて、他の風格を知らず、俳諧を一途に落

○日々四老に云々　春泥句集の蕪村の序文中に見える。四老とは其角・嵐雪・素堂・鬼貫をさしてゐる。

○ともすれば　「老身」と題してゐる。

して死物とするは何事ぞ。師を信ずるはよし、過ぐるは偏固なり。素堂。鬼貫。去來。其角を友とし、祖翁を上首として修行する事なり。」云々

とあるのは、當時漸く天明中興の潑剌たる精神が失はれて、徒らに師傳系統を貴ばうとする傾が見えた際、識によつて時弊を穿つた言であつた。そしてそれは又かの蕪村が、日々四老に會すると言つた意氣を學んだものでもあつた。事實彼は蕪村に私淑する事が深く、自ら『蕪村發句解』を著はしたくらゐであつた。この薰風の句の如きも、恐らく蕪村の格調を學ばうとしたものであらう。もとより乙二の天分は到底蕪村と同日に論ずべきものではなかつたが、東北の邊陬に在りながら、當時の大家と伍して遜色がなかつたのも故なきではない。

　　ともすれば菊の香寒し病みあがり

老の身の病癒えて、やう〳〵起き上つた今日この頃、秋もいつの間にか深くなつて、庭の菊が眞盛りである。折々縁側までにじり出て眺めるが、ともすれば肌寒い氣がして、思はず着物の襟をかき合せる。身の衰がしみ〴〵感ぜられるのである。何となく芭蕉の晩年の句が思はれるが、「ともすれば」といふ上五が、さびの境地にまでなほ多くの間隙を作つて居る。

田川鳳朗

肥後熊本の藩士、初め嚴島原彌といふ。少時から俳諧を好んで京陵と號したといふ。父鼎山も亦同藩士久武綺石に俳諧を學んで居たので、その感化を受けたのであらう。かつて東都に役して途中蝶夢・曉臺に見えてその才を稱された事もあつた。寛政十年仕を辭して俳諧を專とし、文化十二、三年頃から江戸に定住して舊號對竹を鶯笠と改めたが、又天保初年から鳳朗と改號した。なほ自然堂の別號がある。江戸に出てから後『芭蕉葉ぶね』・『師說錄』を著はして、自ら越智越人の系統を承けたと稱し、江戸の俳壇に雄飛した。弘化二年歿、年八十四。右二書の外『自然堂千句』※の著がある。句は『鳳朗發句集』※に收めらる。

※暮遲き加茂の川ぞひ下りけり

春の日は遲々としてまだ暮れ初めようともしない。人は漫步しながら加茂の岸に沿うて下つて行く。悠々たる春の日長の趣である。天保時代の句としては、比較的素直な表現をとるべきであらう。

○自然堂千句　鳳朗の獨吟千句を收む。

○鳳朗發句集　西馬等の編になる。嘉永三年刊。なほ同じく西馬の編で嘉永五年後編が出版された。

○暮遲き　以下の句すべて「鳳朗發句集」による。

▽鳳朗像（「俳家百人一首」に據る。）

鶯に踏まれて浮くや竹柄杓

手水鉢に竹柄杓が置いてある。柄杓の頭はやゝ重いので、柄は鉢の縁に支へられたまゝ、頭は水の中に沈んで居る。そこへ鶯が飛んで來て柄の所に止つた。と、その鶯の重みで頭の方もほつかり浮き上つたといふので、誠にきはどい光景を捉へて居る。そのきはどい所が作者の得意とした點であらうが、一體自然の本情とか造化の眞趣とかいふものは、さうした小細工めいた光景の中に求めらるべきものではない。況んやその上「踏まれて浮く」といふやうな小主觀を交へたのでは、全く風雅の本質を取失つて、こゝに所謂天保の月並調を露呈してしまつて居るのである。

鳳朗像

天保時代に入つて何故俳諧は此の如く俗化したか。その理由はいろ／＼數へられるであらうが、要するに天明時代に中興された俳諧が、時と共にその清新味と潑剌たる意氣とを失ひ、形式的にも內容的にも固定化して來た故に外ならない。外にあつては既成俳團の地位と勢力との

支持に力が費され、内にあつては風雅の解釋が專らマンネリズムに流れて行つた。その爲に俳人は實力よりも師承の背景が重んぜられ、清新な句境を開拓するよりも、流俗的な着想に甘んずる風が多かつた。鳳朗が自ら越智越人の系統だと稱したのなども、畢竟これを背景として俳壇的地位を獲得しようとしたのに外ならぬ。又しきりに道彥・成美の風調を稱へて居るのも、實はこの二家の勢力の援引に賴らうとしたのかも知れない。かうして俳壇は遂に精神的に沈滯を來し、所謂月並の低俗な調が一代を風靡するに至つたのである。

たゞ天保の俳諧に於ても、その目標とする所は芭蕉にあつた。世に天保の三大家と稱せられた蒼虬・梅室・鳳朗の如きも、個人的に見ては決して凡庸の人物ではない。鳳朗の『芭蕉葉ぶね』の所說にしても、その論旨は頗る時流の弊を破るに足り、極めて眞面目な態度が窺はれる。

鳳朗筆自畫賛

○越智越人の系統　この爲に越人は熊本の藩士佐分利氏であると傳へられ、近時までそれが信じられてゐたくらゐであつた。勿論それは全く誤で恐らくこれは鳳朗一派が宣傳の爲に捏造した說であらう。

▽鳳朗筆自畫賛　松宇文庫藏

賢者は山を樂しむ
小鳥好て凡人ならぬ積かな

紫笠狂書畫

○芭蕉葉ぶね　文化十四年刊。

しかしすでに、全體的に顚落に傾いた俳壇の裡にあつては、これらの人々も芭蕉の精神を作品の上に生かすだけの力が無く、結局共に悲しむべき凡俗の渦中に捲き込まれてしまはねばならなかつた。

紙燭して垣の卯の花暗うすな

卯の花は闇の中にあつてこそ、白く目立つて居るのである。だから紙燭に火を點じて、却つて卯の花を暗くしてはいけないといふのである。これも一見甚だ面白い所に着目した吟のやうであるが、實はやはり見方に小細工を加へて居るのである。

湖へ富士を戻すか五月雨

富士山と琵琶湖とは、その昔孝靈天皇の御宇、一夜にして出現したといふ傳説がある。卽ち琵琶湖の方で陥落しただけが、駿河の方へ盛上つたのである。句はこの傳説をふまへた作。降りつゞく五月雨に、地上の物は何もかも流されてしまひさうである。流石の名山富士でさへ、

○紙燭　松の木を棒狀に削り先の方に脂油を塗つて點火するもの。

○支考云々　以下「芭蕉葉ぶね」の一節。越人に關する事は全く誤である。五三一頁の頭註參照。

○不名者　又「不猫蛇」といふ。越人が支考・露川を難詰した書。

○墳墓は云々　これは全く別人の墓である。

もとの琵琶湖へ押流されてしまふかもしれぬといふので、全く理窟づめの下らぬ句である。

支考、翁より俳諧の血脈をさづかりたりとみづからいひふらしたる、素より血脈とは傳統の系圖の事にこそ。勿論おのれがこしらへものながら、種なき事にもあらず。其の根元は越人に翁の語り給ひし箇條のうち、格別なる事をわかちて書留め置きたるもの有り。それを支考盜み取りたるが、越人と不和の初めなり。これを種としてかの血脈をもこしらへしとぞ。翁滅後、續猿蓑の爭論より遺恨に遺恨をかさねしが、支考とかくに越人を邪魔に思ひ、越人こそ翁の勘氣を請けたるなどふれ廻り、同門の中を隔てさせたり。その事もいさゝか不名者に匂ひを出せりと覺ゆ。野水・荷兮も勘氣を請けたりと言ひなしたる、これは越人が連衆なればなり。越人は肥熊の藩士、中比いさゝか事ありて浪人せし時名古屋にあり。後に歸參して舊祿につく。熊本にて終れり。佐分利氏にして其の家祿鄕に存す。墳墓は熊府流長院といふ禪林にあり。是歷代の檀寺なれば也。

○對塔庵蒼虬句集　天保十年刊。
○訂正蒼虬翁句集　門人梅通編。弘化四年編。
○蒼虬翁發句集　祖郷編。嘉永七年刊。
○蓬萊の　以下の句すべて「訂正蒼虬翁句集」による。

成田蒼虬

通稱久左衛門、加賀金澤の藩士であるが後ち致仕して京都に出で、高桑闌更に師事した。師の歿後東山の芭蕉堂を守つてその二世となり、又南無庵をも嗣號した。一時守村抱義に迎へられて江戸に下つた事もあつたが、晩年は京都八阪に對塔庵を結び隱棲した。天保十三年歿、年八十三。その作品は『對塔庵蒼虬句集』『訂正蒼虬翁句集』『蒼虬翁發句集』等に收められる。

※蓬萊の橙赤き小家かな

貧しい小家の正月である。蓬萊に飾つた品々も粗末ではあるが、赤い橙の色は流石に春めいた感じを與へるといふのである。蒼虬の句としては全くいやみのない佳作。

いつ暮れて水田の上の春の月

▽蒼虬像（享和二年刊「若菜集」所載）

庭はけば掃くほどさびし秋のくれ　蒼虬

長い春の日もいつか暮れてしまつたと見えて、水田の上に朧な月影が出てゐるといふのである。これも比較的素直な叙景句ではあるが、「いつ暮れて」にはやはり覆ふべからざる月並臭がある。自然の姿をそのまゝに見、又物に應じて動いたまゝの情は、たとひそれが藝術的洗煉を經て居ない爲に、全く一種のたゞごととなり了る事はあつても、決して月並に陥る事はない。月並とは要するに自然が小さな主觀で解釋されて居る事である。さうして描き出された自然は、もとよりその深い本然の相を示さないばかりでなく、常に淺く歪められた形を現はすであらう。「いつ暮れて」は、月が出たので始めて暮れた事を知つたといふ説明である。これはこの場合風雅の解釋となつてゐないから、比較的いやみが無いのであるが、少くとも自然の情景を描く上に、一抹の不純な色を加へて居る。

蒼虬像

紫陽花や仰山過ぎて折らずなる

かうなると全く月並調の典型的なものになつてしまふ。これは紫陽花の大きな花のかたまりに對する純な感激ではない。又その感激に伴ふ何等かの餘情を味はゝうといふのでもない。ただ紫陽花の花の仰山さを、間接的な說明でわからせようとしたのにすぎない。しかも俗衆は美を高い感情で味はゝうとせず、かうした低級な解釋を得て喜ぶのである。この紫陽花の吟や、

晝過ぎや命投げ出す雉子の聲

物かげは常よりくらしけふの月

等は、蒼虬の名吟として傳へられるものであるが、いづれも小主觀に囚はれた作爲の句で、眞情の掬すべきものがない。

蒼虬の主張は、要するに目前の俗談平話を以て、風雅の本意をあらはさうといふのであつ

蒼虬筆蹟

▽蒼虬筆蹟（松宇文庫藏）

ぬくもりは臥猪のあとかほとゝぎす　蒼虬

た。これはひとり彼のみならず、當時の俳人のすべてが唱へた指導原理であつた。勿論それは理論として不可はない。たゞこの俗談平話が俗談平話のまゝで風雅になるのではない。そこに芭蕉の所謂さび・しをり・細みを顯現すべき精神が動いて居なければならぬ。然るに天保の俳壇にはそれが缺けて居た。俗談平話のあるじとなるものは、俗意俗情であり、小さな主觀であり、さうして風雅のマンネリズムであつた。かくして遂に濟ふべからざる月並時代を現出したのである。たゞし鳳朗の條に於ても述べた如く、蒼虬にせよ、又梅室にせよ、人物は多く眞摯篤實で、特に蒼虬の如きは極めて熱心な態度で俳道に精進した。彼は詞を飾る事を深く戒め、門人を率るるにも嚴格であつた。だから、談林や洒落風等の如き弊には陷らず、時あつて風雅の本情を得た作も見られたのである。

涼しさや根笹に牛もつながれて

場所がはつきりしないが、牛を根笹に繋ぐといふのだから、牧童か牛方がつい一寸途中で一休みして居るといふやうな場合であらう。しつかり立木などにつなぐまでもなく、そこの根笹に輕くゆはへたまゝ、ごろりと横になつて涼風に吹かれて居るのである。「牛も」がやはり時代

の臭味をもつて居る。

我が立つる烟は人の秋の暮

自分が死んで荼毘に附せられたら、その烟を見て人は秋の暮の無情を感ずる事だらうと言ふのである。これは蒼虬が一世の手柄として自負したといふ句であるが、今日から見ると結局説明の句なのである。しかし説明としては誠に巧妙たるを失はぬ。連歌の有名な附句に、

身はいつの烟の種に殘るらん

といふのがある。蒼虬は或はこれから着想を得たのかも知れない。たゞし連歌の方は單に我が身の末をはかなく思ひやつたのであり、かつ附句としてのはたらきを主としたのだから宜いが、蒼虬の句に至つては人を感心させようといふ考がさきに見えて、何とも救ひ難い。

櫻井梅室

蒼虬と同じく加賀金澤の人、刀研業を以て藩侯に仕へた。少年時代から俳諧に志して闌更に學んだが、文化元年卅五歳の時致仕して上京し、專心俳道に携はるに至つた。初め雪雄と號し後ち素芯又素信と改めた。梅室はその軒號で方圓齋・遲速庵等の別號もある。文政五年より天保五年まで十餘年江戸にあつたが、その後は京都に住み鬱然たる大家として終つた。嘉永五年歿、年八十四。作品は※「梅室家集」※「類題發句方圓集」※「增補改正梅室發句集」等に收めらる。

※元日や鬼ひしぐ手も膝の上

日頃は鬼とも組むべき荒男も、元日の朝は流石におとなしく手を膝の上に乘せ、きちんと畏まつて居るといふのである。勿論例の月並調の好典型。

梅室も亦俗談平話を俳諧の詮として說いた事は、蒼虬と全く同一であつた。特に彼は「炭俵」

○梅室家集　林曹の校合になる。天保七年刊。
○類題發句方圓集　鶯宿編。嘉永六年刊。
○增補改正梅室發句集　柳壺編。安政四年刊。
○元日や　以下句はすべて「梅室家集」による。

の輕みを貴んで、しかも高く悟るべき工夫に缺けて居たので、その卑俗に失した事は蒼虬以上であつた。文政頃までの句には、

都にも鴨川ありて夜寒哉（文化三年―旅日記）

鶯の大川越えて初音かな（文化八年―いさなとり）

夕燕一つは谷へかへりけり（文化十一年―三韓人）

等、もとより多少の臭味はあつても、なほとるに足るべき作も見えるが、天保以後は眞に月並調の總帥といふ外はなかつた。たゞ彼は浪華の天來と爭つた時の說によつても分る通り、その式目に對する考の傾きは、極めて進歩的な自由主義であり、又特に連句には才氣の横溢したものが見られる。もし彼をして今少し時代に先後して生れさせたならば、決して月並の本山で終る事はなかつたらうと思はれる。

梅室像

買うた程こぼして行きし若菜哉

○浪華の天來と云々　天來が天保十二年「俳諧七草」を出して、梅室の附合の式目に關する說変を難じた時、梅室は門人九起に筆を執らせて「梅林茶談」を出し、その進歩的な自由な所論を示した。

▽梅室像（「梅室紀年錄」所載）

若菜賣が籠からつまんで取出した折、そこらにこぼして行つた若菜が、丁度買つた位の分量であつたといふのである。時代の傾向といふものは恐ろしいもので、梅室程の人物がこんな所に骨を折つて居たのである。

寢勝手のよさに又見る柳哉

別に眺めようとして見るわけではない。そつちの方へ向いて寢るのが勝手がよいので、寢返りをすると又柳が眺められるのである。「炭俵」風の輕い言ひまはしは確に得て居るが、結局調子の巧みさだけの句である。何にも内容があるわけではない。

名月や草木に劣る人の影

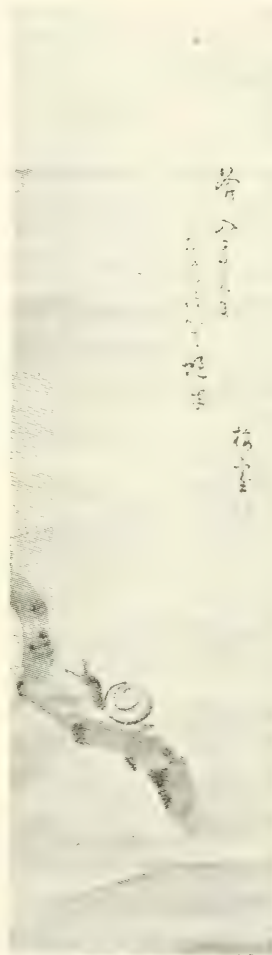
皎々とさえ渡る名月の夜、地上に黑く印した草の影木の影までも風情が深い。それに比べると人間の影は誠に殺風景なものだといふのである。これも說明の句である。しかもその裏に、萬物の靈長たる人間が草木にさへ劣るといふ道理を含んで居る。その理窟が俗衆に迎へられる

所以たる事は言ふまでもない。

▽梅室筆自畫贊（松宇文庫藏）
斧入る木におちついて蝸牛　梅室

梅室筆自畫贊

冬の夜や針失うて恐ろしき

冬の夜更、今まで縫物をして居た針がふと見えなくなつた。いくら探しても出て來ない。どうしたのだらう。通り魔のやうなものが、ふつとさらつて行つたのではなからうか。そしてそれを呪ひの人の胸にでも、ぷすりと刺すのではあるまいか。と、思ひなしか行燈の火影までが暗くなつて、急にわな〳〵と身ぶるひするのである。針が失くなつたといふ事に、冬の夜更の氣味惡さを高調したので、大したわざとらしさがなく、梅室の句としては最も佳作に屬すべきものであらう。

以上作者を主として評釋を進めた爲に、古來人口に膾炙された句でありながら洩れたものも少くないであらう。しかし人口に膾炙される句といふのは、すでに屢〻述べた如く、概して文藝的價値に乏しいものである。隨つて特にこれを評釋する程の必要も見ないのであるが、中にはそれらが芭蕉や其角等に附會せられ、そのまゝ汎く信ぜられて居るものも少くない。尤もこれらの類も、すでに機會ある毎にその誤を正したのであるが、なほ逸したものも二三あるし、こゝに一括して補遺とすることにした。

梅が香や隣は荻生惣右衛門

徂徠は日本橋の茅場町に住んで居て、これに因んで自ら蘐園と號し、その一派を世に蘐園派と稱した。然るに其角も亦同じく茅場町に住んで居た爲、右の句は京山の『近世奇跡考』等に其角の作と誤られて居る。しかし『俳諧新選』に珪琳の作として出て居るので、勿論この方が正しい。

○荻生惣右衛門　荻生徂徠の通稱。
○蘐園　蘐は茅の義。
○近世奇跡考　文化元年刊。
○俳諧新選　三宅嘯山編。安永二年刊。
○珪琳　松木氏、初號蓮之。寛保二年歿、年五十餘。

○五元集拾遺　延享四年刊。

○門涼み　元祿五年刊「誹林一字幽蘭集」には上五「夕涼み」とあるが、作者は同じく松濤としてある。又元祿十年刊「眞木柱」にも松濤の句として出づ。

珪琳は江戸の人ではあるが、徂徠よりも時代が遅れて居るから、もとより自分自身についてよんだ句ではない。恐らく梅が香の淸高な氣品を、江戸の大儒でしかも町學者の徂徠に配したのであらう。特に惣右衛門といふ通稱を用ひたのも、官學者でない面目をあらはさうとしたのである。

夕涼みよくぞ男に生れける

『五元集拾遺』に採錄されて居る爲、これまた其角の句として通用して居るのも無理はない。しかし元祿三年刊の『雀の森』に

門涼みよくぞ男に生れける　松濤

とあつて、正しい作者は松濤である。『五元集拾遺』の編者は「予晋子の書かれし自畫讃を見たり」と註して居るから、其角が何かの場合に松濤の句を流用したのであらう。

松濤の傳は詳かでないが、この句は諸書に採錄されて居るのを見ると、當時から名高い作であつたのだらう。それはいかにも萬人の同感を買ふべき內容であるからで、江戸つ子風の磊落な趣もあつて面白い。しかし句として高く評價さるべきものでない事は言ふまでもなからう。

さてはあの月が鳴いたか時鳥

時鳥が一聲鳴いたので、空を仰ぐともう鳥の姿は見えない。たゞ月だけが照つて居る。さては今の一聲はあの月が鳴いたのであらうかといふのである。後徳大寺右大臣の歌をふまへて更に一作意を出したのである。

この句は作者が種々に傳へられて居り、普通は『俳諧溫故集』や『俳諧古選』によつて藻風の作とされて居るが、なほ『鵲尾冠』には作者を友吉とし、その外不角・瓢水・元輔などを作者に擬したものもある。ところがこの句の俳書にあらはれた最初のものとすべき『新百人一句』には一三子の作となつてゐる。又延寶四年刊の『俳諧師手鑑』にも一三子の作とある。しかもこの兩書とも作者の眞蹟によつて掲げてあるのだから、疑ふ餘地は全くない。貞門時代の句としては、はたらきもあり面白い作である。嘯山は「語簡意長、與二詩歌者流一可二以爭レ衡也」と評して居る。

早乙女や子の泣く方へ植ゑて行く

○後徳大寺右大臣の歌　「時鳥鳴きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞ殘れる」
○俳諧溫故集　四頁を見よ。
○俳諧古選　三宅嘯山編。寶曆十三年刊。
○鵲尾冠　越智越人撰。享保二年刊。
○新百人一句　寬文十年刊。
○一三子　半孤軒と號し松江重頼の門人。
○俳諧師手鑑　井原西鶴編。

母性愛の發露として名高い句である。ところがこれまた作者が種々に誤まり傳へられて居る。

『五元集脫漏』の中に採錄されてあるので其角の作としたり、又一茶の『おらが春』の中にも錄してある爲、輕卒に一茶の句としたものもある。又『暮柳舍句集』中にもどうした間違からか收められて居る。しかし其角の『句兄弟』に

早乙女や子のなくかたへ植ゑてゆく　桒捨

とあるのが正しい。元祿十年の『眞木柱』、嘯山の『俳諧古選』等もやはり正しく桒捨としてある。なほ元祿十三年刊の『前句附集』にも、

まちつとぢやれまちつとぢやまちつとぢや

といふ前句に、

子の泣く方へ植ゑて行く苗

と附けたのがあるが、偶然の暗合かも知れない。いづれにせよ雜俳ならばまだふさはしいが、俳句としてはやはり低調なものにすぎない。

○暮柳舍句集　希因の句集。その子後川の編。明和三年刊。これは希因が古句を自分の草稿にかきつけてあつたのを、希因自身の句と誤認して收めたものであらう。
○句兄弟　元祿七年刊。
○俳諧古選等も云々　『俳諧古選』には中七「泣く子の方へ」とあり、作者を乘捨と誤寫してゐる。

連句篇

連句概説

一、連句の名義

連句とは五、七、五の形だけで獨立した發句に對し、更にそれから出發して、七七の句と五七五の句とを交互に交へ、五十句・百句と長く續けて一巻となるものをいふ。元來俳諧は言ふまでもなく連歌を母胎として生れたものであり、「俳諧」といふ名稱も、實は「※俳諧の連歌」の略稱であつた。隨つてこの長くつゞける連句こそ、俳諧の本體とすべきもので、元來發句卽ち今日の俳句は、俳諧の中のある特殊な句の稱に過ぎなかつたのである。だから古く俳諧といへば、卽ち連句を意味したので、特にこれを發句と區別して「連句」と呼ぶ必要もないくらゐであつた。別に「附合」といふ名稱も存したが、これは專ら前句と附句との關係について言ふので、連句の作品全體をさしていふ場合には、やはりたゞ「俳諧」とのみ稱したのである。

然るに明治以後、誤つた文藝觀から連句の文藝的價値が無視されるに至り、俳諧といへば專ら發句の制作に限られ、かつ發句の名もいつか「※俳句」と改められ、今日では却つて「俳諧」

○俳諧の連歌　俳諧とは滑稽の意で、本連歌に對して滑稽な餘興的の連歌をいふ。

○俳句　この名稱も古く存しないのではないが、それは專ら滑稽の句といふ程の意で、今日用ひるのとは大に意義を異にする。

の稱が發句即ち俳句と同義語のやうにさへ考へられるやうになつた。隨つて俳諧の本體を稱するには、特に「連句」の名稱を用ひるのが普通となつたのである。よつてこゝにも今日一般の用例に從つて、「連句」の名稱を用ひる事にした。しかし俳諧本來の名義から考ふれば、特にさうした名稱を用ひる必要がない事は、こゝに明かにされたであらう。

二、連句の文藝的意義

連句は一時考へられた如く、果して文藝的に無意義のものであるか。その問題については、もはやことごとしく論駁するまでもなく、識者はすでにそのすぐれた文藝的特質を認め、近時これに對する研究熱も盛んとなり、又一部にはその新しい創作を試みる者も見られるやうになつた。しかし連句には種々な傳統的形式が存し、その解釋に當つても豫備的の知識を要する事が多いので、なほ一般の人々には汎く理解されて居ない。例へば我が國人にして芭蕉の名を知らぬ者は殆ど無いと言つてよく、又芭蕉の名を知る程の人であれば、「古池や」の一句くらゐは必ず誦し得るにちがひない。そして多少文字有る人ならば、芭蕉や千代女の名高い二三句について、若干の知識は大概もつて居るであらう。然るに連句に至つては、『俳諧七部集』中の最も

○俳諧七部集　芭蕉關係の俳書中代表的なもの七部を選んだもの。芭蕉歿後美濃派（支考一派）の間で選定されたものであらうといふ。冬の日、春の日、曠野、ひさご、猿蓑、炭俵、續猿蓑。

名高い一卷をすら、よく理解し得るものは極めて稀である。畢竟芭蕉もその發句のみによつて知られて居るので、俳諧の本體とすべき連句については、殆ど國民の關心に與つて居ないと言つても宜い。これではいかに芭蕉の研究が進んでも、結局その一面だけを見て終る事になるであらう。

もとより發句は俳諧一卷の特質を、こゝに壓搾したものと言ふ事も出來よう。即ちそれは一卷中最も重要な句として、作者の苦心が拂はれ、又それだけで獨立の詩形として、創作もされ鑑賞もされた。隨つて俳文藝のすべての特質は、發句に於て最もよく見られるにちがひない。しかし或は前句への附け方に於て、或は一卷の變化に於て、連句には又連句特有の妙味が有る事は言ふまでもない。然らばその連句に特有と言ふべき文藝的特質は何であるか。一般文藝に對する連句の特異性は何處に求むべきであらうか。

俳諧の文藝的特質は、これを一言にして言へば、象徴的表現にあると言つて宜からう。芭蕉の所謂にほひの文藝である。元來藝術に於る象徴主義は、もとより西洋にもその發達を見たけれども、これを最も深い境地にまで進めたのは東洋の藝術であつた。而して我が國の連歌・俳諧の如きは、即ちこの象徴的美を文藝的表現に於て、最高度にまで發揚せしめたものではあるまいか。言ふまでもなく連句は全體として話の筋をもつたものではない。一卷を構成する各一

○犬筑波集　發句篇三頁參照。
○五十韻・百韻　連句の形式的種類の條（五七三頁）參照。

句は、その一句だけには完成された意味を有するが、一句一句の連續は話の展開ではない。ただ前句と附句との關係に於ては、その間に意味の連絡が存する事は當然で、そこには或は物語や小說の片鱗を見る場合もあるであらう。しかもそれすら芭蕉の匂附にあつては、必しも意味の連絡を主としないのである。匂附についてはなほ後に詳說するであらうが、連句の窮極の理想とする所は、畢竟にほひの調和に外ならぬのであつた。それはもとより發句に於ても理想とされたのであるが、第一句から第二句、第二句から第三句と變轉して止まない連句にあつて、にほひの象徵美とその微妙な調和とは、極度に發揮されるであらう。ともあれ連句は決して物語や小說と同じ種類の文藝ではなかつた。しかし連句は最初からさうした象徵美・調和美の文藝として發達したのではない。もとよりその母胎が連歌であつたのだから、二句の連絡調和、一巻の變化統一の如きは、その本質的な條件であつたにちがひないが、それが匂附にまで發達するには、やはり長い間の年月を經ねばならなかつた。今連句の特質を說き、匂附のいかなるものであるかを明かにする爲に、俳諧の史的展開に伴ひつゝこれを略述しよう。

連歌も俳諧もその發生の當初に於ては、全く二句だけの附合を主とし、一時の餘興とするにすぎなかつた。だから俳諧撰集の最初とされる『※犬筑波集』の如きも、その中に收められた連句は、すべて二句だけの附合に限られ、※五十韻・百韻等の全卷は全く傳へられてないのである。

○松永貞德　發句篇一〇頁参照。

今同書の卷頭にある一例をあげると、

霞の衣裾は濡れけり

佐保姫の春立ちながら尿をして

といふので、前句の意味を滑稽に解釋し、春の女神たる佐保姫が立小便をした爲、霞の衣の裾が濡れたといふ意につゞけたのである。又

切りたくもあり切りたくもなし

盜人を捕へて見れば我が子なり

の如きは、前句だけでは何の興味もないのであるが、かく附句をつゞけて始めて意味が完成され、をかしみが生ずるのである。要するに發生當初の俳諧は、かうして二句の連續から生ずる滑稽を喜んだのであつた。而してその滑稽は、右にあげた例によつて知られる通り、專ら二句の連續に於る理智的な意味の解釋に求められた。

江戸時代に入つて民衆文藝勃興の機運に乘じ、俳諧の形式的基礎を確立して、これに文藝的獨立性を與へたのは松永貞德であつた。しかしその獨立性といふのも、決して俳諧を連歌と對等的な地位に認めしめようといふのではなく、むしろ和歌や連歌に入るべき初步の階梯と解したのである。これは新興の民衆文藝に對する考として、あまりに消極的態度ではないかと思は

○俳諧とは　この解釋は貞德の「御傘」の序文や、季吟の「增山の井」などの中に見える。

○賦す　賦するとはよみ込むといふ意で、連歌俳諧の術語。「俳言を賦する」とは即ち俳言をよみ込むこと。

○犬子集　發句篇一七頁參照。

れるが、江戸初期の時代的精神の實情に即して見れば、實は當然な指導原理といはねばならなかつた。隨つて貞德は連歌と俳諧との區別を、その本質的な點に認めず、たゞ兩者の異る點は俳言の有無に存するとした。俳言とは和歌や連歌の用語とされない俗語・漢語等をいふのである。即ち貞德に從へば、※俳諧とは一句毎に俳言を※賦した連歌であるといふ。而して俳諧が滑稽の文藝たる發生時代からの意義は、もとよりそのまゝ繼承されたのであるから、要するに貞德時代の俳諧は、專らこの俳諧に特有な俳言の驅使によつて滑稽を求めるものであつた。だから發句篇に揭げた諸作によつて知られる通り、當時の發句は言葉の形式的技巧を主とし、好んで緣語や掛詞の類が用ひられた。それは連句に於ても亦同樣であつたので、前句と附句とを續けるには、專ら物附といふ方法が用ひられた。それは前句の中のある言葉から緣をたよつて附けるので、例へば『※犬子集』の中から一二の例をあげると、

　　鼠穴有るやをぐらの花の陰
　壁の色紙ののりけがすめり　　貞德

　　首にさせる日影のどけき
　梅花こそ二月の雪と見えわたれ　　貞德
　果報ある身や乘る玉の輿

美女はたゞ氏の無きをもてはやし　重頼

等の如き類である。第一は前句の「なぐら」の縁で「※色紙」を持つて來、第二は『※和漢朗詠集』の文句が橋渡しになつて居る。第三は言ふまでもなく前句の「玉の輿」に「氏の無き」を附けたのである。勿論かうして結局は二句の間に、理智的な意味の連絡を求めるのであり、又かうした方法はすでに『犬筑波集』時代から行はれた事であるが、とにかく貞德時代の連句の特色は、この物附にあつたと言つて宜い。しかしこの時代に至つてはもはや二句の附合のみでなく、五十韻・百韻の如き長篇が盛んに行はれ、それらの作品も數多く殘されて居る。貞德が宗鑑・守武について、俳諧中興の祖と仰がれるのも、要するにこの五十韻・百韻の俳諧に於る諸種の形式作法を確立した功績によると言つて宜いのである。隨つて一卷全體を通じての變化や統一も、連句の制作上注意された事は言ふまでもない。かの連歌の式目に倣つて定められた※指合去嫌等の如きも、つまりは一卷の單調を防ぐ爲のものであつた。

貞門時代の俳諧があまりに形式偏重であり、又その滑稽も千篇一律なのに飽かれて、やがて※宗因の率ゐる談林の新風が全俳壇を風靡するに至つた。宗因一派の人々が開拓した俳諧は、新興の民衆文藝として、貞門の俳諧よりは確に多くの藝術的重要性を持つて居た。まづそこには一切の傳統的な拘束が殆ど無視された。もとよりその特殊な文藝形態に附隨すべき諸種の約束

○色紙　定家卿の小倉の色紙の連想。
○和漢朗詠集の文句　同書、子日の條「倚二松根一摩レ腰、千年之翠満レ手、折二梅花一挿レ頭、二月之雪落レ衣」
○指合去嫌　連句の作法の條　五七九頁・參照。
○宗因　發句篇二六頁參照。

○宗因は云々　この事發句篇の談林の人々の句解參照。

○古風當風云々　これは延寶八年刊、木原宗圓撰「阿蘭陀丸二番船」に收めた宗因獨吟の詞書中にある文句。古風は貞德時代、當風は今の談林時代、中昔はその中間頃の時代をさす。

は、それが俳諧たるかぎり守られねばならぬものであつたが、これを貞門時代の指合去嫌等に比すれば、その自由さは同日の論でなかつた。五七五や七七の定型すらもあまり顧みられないくらゐであつた。又すでに述べた如く、※宗因は俳諧を寓言であると解した爲に、從來專ら言葉の形式的技巧によつた滑稽が、進んで全體的な一種の見立とも言ふべき譬喩的表現に求められるに至つた。これは談林俳諧の最も特色とすべき點であつたが、更にその文藝的理念として注意すべきは、もはや俳諧を以て和歌連歌に入る階梯とせず、それらの貴族的傳統的文藝と對立して、彼等民衆に與へられた自由な新文藝だといふ自覺に到達した事である。

談林の新風はかくして俳諧史上重要な展開を遂げたのみならず、又眞に我が近世文藝の先驅をなしたものである。新しい民衆小說たる浮世草子の作者が、西鶴を始め多く談林の俳諧師から出て居るのは、誠に偶然ではなかつた。しかし俳諧そのものに於て、談林俳人の自覺は、なほ藝術的の深い反省を伴つて居なかつた。宗因自身がすでに、

※古風當風中昔、上手は上手下手は下手、いづれを是と辨へず、好いた事して遊ぶにはしかじ。夢幻の戲言なり。

と言つて居るくらゐだから、俳諧を以て遊戲的文藝と見なす態度に於ては、貞門時代と相距る事遠くなかつた。隨つて見立の句といへども、遂には甚しい駄洒落に陷り、又貞門時代と同じ

く言葉の形式的技巧を用ひる事も多かつた。たゞそれが幾分清新味を加へたといふにすぎなかつたのである。連句に於てもまた相變らず物附は用ひられた。例へば『物種集』※の中から例をあげても、

八島の浦は算餅饅頭
二口屋能登の守とぞ名のりける　西鶴

の如き、八島に能登の守※、算餅饅頭に二口屋※を附けたやうな類は、なほ頗る多いのである。しかし談林時代の連句に特に注意すべきは、物附の如く單に前句中の一語二語を中心とせず、前句全體の意味を受けて、これに應ずべき意味の句を附ける事が多くなつた事である。即ち心附の方法である。同じく『物種集』から例をとると、

比丘尼馬かた鶯の聲
ま一人待たるゝものは渡し舟　西鶴
黑髮に伽羅の烟をほのめかし
首になつても知るゝ大將　梅翁※
味噌作り酒作り又菊作り
かやうの前句にのいたが本よ　西鶴

○物種集　延寶六年刊。西鶴撰。談林派の俳諧から、秀逸な二句の附合だけを拔いて集めたもの。
○能登の守　平家の勇士教經。
○二口屋　京都の名高い饅頭屋で能登守と稱した。それを教經にきかせたのである。
○梅翁　宗因のこと。

の類は、特に解するまでもなく明かであるやうに、前句全體としての意味を受けて附けたのである。勿論自然言葉との縁が存する場合もあらうが、それは附方の眼目ではない。例へば、黑髪、伽羅の烟、ほのめかし等の一語一語には、次の附句を案ずべき要素はなく、それらの言葉が集つた一句の意に、次の句が附けられて居るのである。最後の附句の如きは、「味噌作り云云」といふ前句全體をうけて、「かういふ附け難い句は、敬遠して附けないでおくのが本當だ」と揶揄したので、しかもそれを以て附句としてゐる。西鶴の自由な機才が窺はれて面白い附方である。

談林の連句に於る心附は、しかし決して談林特有の附方ではなかつた。それは俳諧の發生時代からすでに用ひられたもので、元來連句が前句と附句と、二句の關係の連續から成立するかぎり、心附はその附方の本體をなすべきものであつた。だからそれは俳諧の發生以來終始用ひられて來た所であるが、たゞ貞門時代特に緣語・掛詞の技巧が重んぜられた結果、所謂物附の方法が特に發達したのであつた。かくて中には全體的な意味の連絡は、殆ど解し難いやうなものさへ少くなかつた。然るに談林時代に至つて、この本格的な心附の方法が多く用ひられ、しかも極めて自由な發達を遂げた事は、俳諧史上やはり重要な展開と言はねばならぬ。又談林時代にも百韻・千句等の長篇は益々盛んに行はれたので、指合去嫌等に關する法式も甚だ自由に

なつたとはいへ、一巻の變化統一を重んずる事は、連句の性質上當然の事であつた。

俳諧が文藝として大成されたのは、言ふまでもなく蕉風時代になつてからの事である。俳諧の自由な民衆性は、談林時代に於てより内面的に理解されるやうになつたけれども、眞に文藝的の理念が確立されて居なかつた爲、その末流は甚しい放恣亂脈に陥るに及んだ。心ある人々は期せずしてこゝに眞摯な反省をせずには居れなくなつた。卽ち彼等は俳諧を遊戯視する態度に滿足せず、進んで和歌連歌と同樣な文藝的意義を求めようとするに至つたのである。この反省と要望とは遂に大きな時代の力となつて、俳壇全體を推し動かした。その機運の下から生れたのが、卽ち蕉風の俳諧であつた。だから蕉風俳諧の出現は、單に芭蕉といふ個人の力のみによつて出來たのではない。芭蕉を生んだものはやはり時代であつた。既に鬼貫※の如きは夙くから俳諧の根本精神について疑義を抱き、遂に貞享二年の春「誠の外※に俳諧なし」と悟つたといふ。かうした懷疑から俳諧の本質に對して眞摯な反省をしたものは、ひとり鬼貫ばかりではない。信德※・言水※・來山※・才麿※等もまた反省の程度に深淺の差こそあれ、等しく新しい俳諧の建設を目ざして進んだ人々であつた。而してそれらの人々の中、すぐれた天分に惠まれ、かつ不斷の精進をつゞけて、遂に最も深い俳諧の境地に到り得たのが芭蕉であつた。

芭蕉が俳諧の根本義としたものは風雅の二字であつた。風雅とは要するに造化に從ひ自然と

○鬼貫　發句篇七九頁參照。
○誠の外に云々　この事鬼貫の「ひとり言」に見える。
○信德　發句篇五四頁參照。
○言水　同六七頁參照。
○來山　同五七頁參照。
○才麿　同七五頁參照。

同化する義で、眞の俳諧はこの境地から發するものでなければならぬとした。かの『笈の小文』※の冒頭の一節、

西行の和歌に於る、宗祇の連歌に於る、雪舟の繪に於る、利休が茶に於る、その貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化に從ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

といふのは、實に彼の俳諧に對する根本觀念を喝破したもので、まづあらゆる藝術を通じてその根本精神は同一たるべき事を明かにし、風雅の根本精神は自然と同化融合する所に存する事を示したのである。これは從來俳諧を連歌の階梯と見なし、或はその寓言と解した態度を全く脫却して、直ちに俳諧そのものの中に連歌と同一の文藝的理念を見出さうとしたものであつた。門人が芭蕉を稱して※連俳直一の人と稱したのは、まさに至評といふべきであつた。

※芭蕉のかうした風雅觀は、もとより俳諧の和歌・連歌への復歸を意味するものではない。すでに民衆的文藝として發生し、又發達して來た俳諧の特質は十分に認識されつゝ、しかもその間に和歌・連歌の理想とする所を同じく理想としようとしたのである。かの所謂さび・しをり・

○笈の小文　芭蕉が貞享四年の冬東海道を經て故郷伊賀に歸り、翌年門人杜國と共に吉野の花を賞したりした折の紀行。一に吉野紀行ともいふ。

○連俳直一　土芳の「三册子」に「師はいかなる人ぞ、連俳直一なり」とある。

○芭蕉の云々　發句篇一一三頁以下の解說參照。

細みなどといふのも、畢竟和歌・連歌の理想とした幽玄美を、民衆文藝たる俳諧の中に顯現したものに外ならぬ。思ふに芭蕉の最も偉大とすべき所は、實にこの俳諧の民衆性を保持しつゝ、これを和歌・連歌と同じ水準線上に位すべき文藝として大成せしめた點にあると言ふべきであらう。而して芭蕉のこの大手腕は、連句に於ていかに發揮せられたか。彼は自ら

發句は昔よりさま〴〵變り侍れど、附句は三變にとゞまれり。昔は附物を專らとす。中頃は心の附を專らとす。今はうつり・響・匂・位を以て附くるをよしとす。

と言つたといふ。それではそのうつり・響・匂・位の附方とはどんなものであるか。今『去來抄』やその他の書に示された實例によつて説明して見よう。

まづうつりについて見ると、『山中集』の中に、

柴刈りこかす峯のさゝ道　芭蕉
松ふかき左の山は萱の寺　北枝

といふ附句について、芭蕉が「柴刈こかすのうつり、上五文字霰降ると有るべし」と評した事が見える。又同書に、

銀の小鍋に出す芹燒　曾良

といふ前句に、芭蕉自ら

○發句は云々　この事去來が芭蕉の教へを書殘したと傳へられる『去來抄』の中に見える。

○附物　物附に同じ。

○山中集　天保十年刊。芭蕉が奥の細道の旅行の途次、加賀山中の温泉で曾良・北枝と共に三吟の歌仙を試み、それを添削した評語を收む。もと北枝の筆記が傳來してゐたのを、金澤の俳人可大が板行したものである。

○芹焼　芹の根のここちを新番畑でいため鍋焼にしたもの。俳諧で冬季とする。芭蕉の句に「芹焼やすそわの田井の初氷」

手枕に思ふ事なき身なりけり

手枕に軒の玉水ながめわび

の二句を附け試みた上、「手枕移りよし。汝も案ずべし」と北枝に語つた事が見え、北枝らいろ〳〵附けてみたが、結局芭蕉の

手枕にしとねの埃うち拂ひ

といふ附句にきはまつたといふ。これらの言葉からうつりの意を案ずるに、第一の例の場合に於ては、「柴刈りこかす」といふ荒々しく烈しい動作や語氣から、「松深き」といふやうな落ついた物静かな感じへは、その轉移がどうも不自然たるを免れぬ。これに反して「霰降る」とあれば、あのはら〳〵とたゝきつけるやうに降るさまが、柴を刈りこかす荒い動作とよく調和して居る。即ちその間の氣分の移りが自然である。又第二の例について考へると、芹焼はむしろ田舎めいた料理ではあるが、それを銀の小鍋で出すといふのは、もとより農夫や賤しい者のさまではない。豊かな身分の人が閑とわびとを楽しんでゐるといふ風情がある。その風情に手枕が實によく照應して居るのである。而して「しとねの埃打拂ひ」にきはまつたといふのは、前の二句では閑を楽しむだけで、わびた情が薄いからであつたらう。これらの例によつて見ると、うつりとは畢竟句の情趣から情趣への自然の移りを意味するもので、それは同時に二句の

○くれ緣に　この附合は寛永六年刊、大西吟[illegible]撰「[illegible]集」に出て居り、實は「句前後し」て居る。即ち「身細き」が前句で重成の吟、「くれ緣」は宗本によつて「[illegible]緣」とある。が附句で柳流の吟である。かく前後しても說明上支障のないのが即ち響の附けたる所以でもある。なほ右の附合は元祿四年六月、芭蕉が人々と江州堅田で催した歌仙中の句である。

間の情趣が、相映發する義とも解されるのであつた。即ち移りは又映りでもある。

次に響については、『去來抄』に「打てば響くが如し」と說き、なほ

※くれ緣に銀土器を打碎き
　身細き太刀の反る方を見よ

先師此の句を引きて教ふるとて、右の手にて土器をうちつけ、左の手にて太刀に反をかくる眞似をして語り給ひける。一句一句に趣のかはる事なれば、言語に盡し難き所、看破せらるべし。

と傳へて居る。この附合は誠に響を說くに好適な例といふべく、前句に銀土器を打碎いた音が、そのまゝ附句に響いたのである。即ち黑木の緣に銀の盃を發矢と投げつけたその戛然たる響、鋭く細い金屬性の響は、細身の太刀の反る方を顧みて、キッと身構へした姿にそのまゝ象徵されて居る。それが嚴物作の太刀を落しざしにしてゐるやうなのでは、全然響き合はない。右の附合の妙味は、全くこの間髮を容れない響き合ひにある。意味の上に於る連絡の如きは、この場合第二義以下の問題である。故にもしこの附合を解して、細身の太刀を引拔いて銀土器を打碎いたさまなどと、因果關係を說明したやうな附方と見るならば、それは全く蕉風連句の神髓を沒却するものと言はねばならぬ。

○上置　副食物を別に盛らずに、飯の上に置き添へるやうにしたもの。この附合は「炭俵」に出て、前句は野坡、附句は芭蕉の吟。なほ原本には前句「上置の干菜」とある。

次に位については、「去來抄」に「前句の位を知りて附くる事なり」と言ひ、芭蕉の戀の附句をはじめ、多くの例をあげて説明して居る。即ち

　上置の干菜刻むもうはの空
　　馬に出ぬ日はうちで戀する

前句は人の妻にもあらず、武家町人の下女にもあらず、宿屋問屋の下女なりと見て、位を定めたるものなり。

　細き目に花見る人の頬腫れて
　　菜種色なる袖の輪違

前句、古代の人の有様なり。

　白粉を塗れども下地黒い顔
　　役者模様の袖の薰物

前句のさま、今様の女と見ゆ。

　尼になるべき宵のきぬぎぬ
　　月影に鎧とやらん見すかして

前句、いかにも然るべき武士の妻と見ゆ。

○ふすま　小麥のかす。洗粉の用に供する。

○問屋　昔の問屋は單に商品の取次販賣をするだけでなく、それらの商品を取扱ふ人々の宿屋をも兼業した。そして問屋の下女は蓮葉女「ハスハヲンナ」と呼ばれ、止宿の客の枕席にも侍したものである。

ふ※すまつかんで洗ふ油手
掛乞に戀の心をもたせたや

前句町家の腰元など言ふべきか。これをもて他はなずらへて知らるべし。

と說いて居る。これによつて位の何たるかは、ほゞ會得する事が出來たであらう。なほ念の爲若干の說明を加へるなら、位とは畢竟前句の人物の身分・性質・境遇等を十分見定めて、これに應じて調和すべき句を附ける事である。例へば上置の干菜を刻むといふ前句について、こうはの客」といふ言葉から戀の情を知り、さてその戀に氣もそゞろな當人はどんな人物かを見きはめる。上置の干菜を刻むといふのだから、普通の家の主婦とか、武家町家等の下女とは思はれない。商人や人夫等の出入の多い宿屋・問※屋の下女といふ風情が動かぬ所であらう。それでその戀の相手に馬かたをもつて來たのである。これなら二人の位がぴつたり合ふのは言ふまでもない。以下の例もすべて同樣な見方によつて解される。細い引目に下ぶくれの顏、どう見ても氣のきいた當世風ではない。だから古代めいた着物を着せたのである。黑い顏にコテ〳〵白粉を塗り立てるのは、いづれ贔屓役者の噂に夢中になるあばずれにちがひない。夫に心を殘させまいとする健氣な武士の妻、忙しい師走の節季にも身嗜を忘れぬ腰元の色氣、それらは皆前句の中に見定められた人物の情である。

○にほひ　古くは色艶の美しいことを言ひ、今は専ら香について言ふが、又この語は物の全體的・風韻・風致・情趣等、綜括的な感じをいふ場合にも用ひる。こゝはその意味。

○情を引來る　こゝの情とは前句の意味をいふ。卽ち前句の意味をすつと附句まで引張つて來て附けるのはいけないと言ふのである。

以上うつり・響・位等の言葉によつて説明された蕉風連句の特色は、これを一言にしていへば前句の情趣風韻を知つて、これに應ずべき句を附ける事に外ならぬ。卽ち一句全體のにほひを中心とした附方である。うつり・響・位等と種々の名稱を用ひては居るが、それはたゞ説明上の便宜にすぎぬので、これを從前の物附や心附に對して、匂附と稱して宜からう。而してこの匂附に至つて、はじめて連句の理想とする象徴的な美の調和が完成されたのである。もとより連句であるかぎり、前にも述べた如く二句間の意味の連絡を無視する事は出來ない。例へばかの響の例にあげた銀土器の前句と細身の太刀の附句との關係にしても、二句連續した上に生ずる一の狀景は説明し得ねばならない。二句全く獨立したものでは、連句と言ふ事は出來ないからである。右の場合では、出陣の門出に酌みかはした盃を投げ捨てて、勇躍進み出でようとして居る狀景と解しても宜い。たゞ注意すべきは、前句の意をかく解して、かくの如き意の句を附けたのではない。附方の眼目はあくまで前句の響に應じたのである。隨つてこれを鑑賞するにも、その響を感悟すれば足るので、意味の連絡、狀景の展開の如きは、響の感悟に從つて自ら解されるであらう。『去來抄』に

蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ。たゞ前句は是いかなる場、いかなる人と、その事、その位をよく見定め、前句をつきはなして附くべし。

と言ひ、又

附物にてつけ、又心附にて附くるは、その附けたる道筋知れり。附物をはなれ、情をひかず附けんには、前句のうつり・匂・響なくしては、いづれのところにてか附けんや。心得べき事也。

と說いてゐるのは、いづれも蕉風連句の神髓を道破したものである。

芭蕉がかうして大成した匂附は、畢竟俳諧の象徵的文藝たる特異性を、こゝに十分發揮したもので、やはり連歌の理想とした所を、俳諧に於て顯現したのに外ならなかつた。宗祇の連歌も芭蕉の俳諧も、基く所はこのにほひの象徵美に在つたのである。連歌にせよ俳諧にせよ、五十韻・百韻とつゞけた一卷が、全體として一のまとまつた筋をもち、一の情景を描き、或はまた一の感懷をうたつたものであるならば、それは敍事詩・抒情詩などと呼ばるべき普通の韻文にすぎない。然るにすでに屢〻述べた通り、連句に於て求められる美は、さうした具象的なものではなかつた。もし連句の文藝的特異性を、これと最も趣を同じくする他の藝術に喩へて說くならば、音の代りに言葉を以て構成された一の樂曲と言つてもよからう。これらの言葉の連續は、音の連續と同じく具象的な意味を語る事はない。たゞ所謂匂の象徵として語られる。一句一句は、ある時は金屬性の鏗然たる響を傳へ、ある時は蓮葉女の戀の囁として聞かれる。そ

して次の一句一句は、これをうけてそれ〴〵調和すべき音を以て應ずるであらう。更に次の一句一句は、又異つた調和音を以てつゞけられる。その間或は高く或は低く、或は強く或は弱く、變化と統一とが顧みられつゝ一卷は終るのである。それは恰もすぐれた音樂家が、ソナタの一曲を構成するさまにも比せられるであらう。しかも連句にあつては、言葉が單ににほひの象徴として語られて居るとは言へ、すでに言葉である以上、全然具象的な意味を現はさないといふわけには行かぬ。のみならず少くとも二句の間には意味の連絡も存する。隨つてにほひとにほひとの調和は、音と音との協和よりも更に複雜さを増すであらう。この複雜な象徴的表現こそ、連句の美として求めらるべきものであり、連歌・俳諧の文藝的特異性もまたこゝに存するのである。

以上は專ら連句に關してにほひを説いたのであるが、これはひとり連句のみならず、發句に於てもまた同じく見らるべきものである。發句篇に於てもすでに言ひ及んだ事であるが、例へば

※乾鮭も　空也の痩も　寒の内

の如き、「も」といふ天爾波でつゞけられては居るが、乾鮭と空也と寒との間に、直接的具象的な意味の連絡はない。それらはすべて、にほひの象徴として語られて居る。乾鮭と痩せた空也

○乾鮭も　發句篇一四二頁參照。

僧とのからびたにほひが、そのまゝ寒の内のかれきつたにほひと響き合つて居るのである。芭蕉が心の味を言ひ取ると言つたのも、畢竟この象徴的な味を表現する意に外ならぬ。又

※山里は萬歳遲し梅の花

※草臥れて宿かる頃や藤の花

等にしても、上の五、七は單に場所や時刻を定めただけではない。萬歳遲き山里の閑雅な風趣と、梅の花の清閑な風韻とが句中に映發して居るのであり、又終日歩き疲れて宿を求める頃の物うくたよりない氣持が、おぼつかなく咲いた藤の花にそのまゝ象徴されて居る。

芭蕉の所謂さび・しをりやにほひも、畢竟は※心敬・※宗祇等の先達がすでに說いた所ではあつた。しかし芭蕉はこれを連歌でうけついだのではない。俳諧といふ全く新しい民衆文藝の中に、それらの理念と精神とを生かしたのである。のみならずさびの境地に於ては心敬よりも更に深く至り、句附には宗祇の連歌よりもつと豐かな含蓄味が見られた。ともあれ附物・心附から進んでこゝに大成された匂附は、ひとり蕉風連句の特色とすべきものたるのみならず、實に連歌から出た俳諧の特異な文藝性を、最高度にまで發揚したものであつた。たゞし蕉風の連句といつても、一句毎に悉く匂附によつて居るのではない。例へば一卷の始めと終り、若しくは緊張した數句の後等の如き場合には、輕い心附を以てつゞけるのが普通である。これは一卷の

○山里は　發句篇一四四頁參照。

○草臥れて　同一一九頁參照。

○心敬　室町時代の有名な連歌師。その名著「さゝめごと」の中には彼が冷え・さび等を理想としてゐた事が論ぜられてある。

○宗祇　室町時代の連歌を大成したといはれる人。文龜二年寂、年八十二。その連歌の附方はやはり象徴味を主としたものであつた。

變化といふ點から必要な事で、句附と心附との適當な交錯排列によつて、一卷の抑揚頓挫が生ずるのである。又同じく句附の中にも、前にのべた諸例の如き、眞に打てば響くやうに緊張したものばかりとは限らない。見方によつては、單に心に附けただけのやうなものもある。それは句の附といつても、その間自ら意味の連絡は存するのだから、響が低い場合には心附とも句附とも解せられるわけである。しかし所詮連句の目ざすべき最高所は、句附の世界にある。一座の作者の氣分が張りきつた時は、自然句附の句がつゞけられるにちがひないのである。それらの具體的な例は、後の作品の評釋に讓ることにしよう。

三、連句の作法

發句にももとより傳統的な形式と作法とは存する。例へば必ず當季の詞をよみこむとか、切字を要するとかいふ如き類である。しかしこれもつまり連句の一法式に外ならぬので、卽ち連句一卷の最初にあるべき句としての法式である。俳諧のすべての作法形式は、此の如く連句を本體として生れたものであるから、古句の解釋鑑賞に當つては、やはり一通り連句の作法を心得ておくべき必要がある。しかもそれらの作法は、時代により流派によつて必しも一定せず、

○獨吟千句　六頁頭註を見よ。
○俳諧とて濫りにし云々　この事「獨吟千句」の跋文に述べて居る。
○獨吟百韻　寛文二年刊「伊勢正直集」に出づ。
○賦物　連歌では最初各句に一定の事物をよみ込む事が行はれ、これを賦物と稱した。後にはそれが全く形式的となり、發句にだけよみこむ事になつた。
○三島千句　宗祇が病氣平癒の祈として文明三年伊豆の三島神社に奉納した千句。
○二折　懷紙一枚を一折といふ。二折は五十句。

中には種々の口傳祕事等を設けて頗る煩瑣なものもあるが、此の如きは勿論末節枝葉の事にすぎない。よつて以下俳諧の發生以來、式目制定の事について、ほゞその綱領を略述し、なほ實際連句を解する上に必要な程度の作法形式を、概說するに止めよう。

俳諧の創始者といはれる山崎宗鑑は、連歌の煩瑣な拘束から脫しようとした一種の叛逆兒であつた。彼の本領は何等の束縛のない無法式の境に、自由な滑稽戲謔を弄する所にあつた。當時俳諧に何等特殊の式目作法が存在しなかつた事は自ら明かである。かの荒木田守武が天文九年『獨吟千句』を興行するに當つて、連歌師周桂に「この道の式目いまだ見ず、都にはいかん」と尋ねてやつたところが、「かゝる式目は予こそ定むべけれ、定めよ、それを用ふべき」といふ返事があつたといふのでも、當時據るべき式目がなかつた事が分る。しかし守武は俳諧とて濫りにし、笑はせようとばかりではいけないといふ信念から、「本連歌に露かはるべからず」と言つて、自ら連歌の式目に準據して獨吟を試みた。彼の俳諧として最も古い享祿三年正月九日夜の獨吟百韻を見ても、最後に「寢ながら百韻なれば指合も侍らんか」と言つてゐるので、その時から相當法式を顧慮してゐる事が分る。ついで『獨吟千句』には賦物もとり、かつ宗祇の『三島千句』にならつて追加二折を添へた事までも言つてゐる。だから俳諧の式目はまづ守武によつて創められたと言つてよい。さうしてそれは大體連歌の式目に隨ひ、春秋二句結んだ

折などがあつても、指合も時によると自ら許しておく程度のものであつたのである。

守武のこの態度は、松永貞徳によつて一層明らかに示されるに至つた。彼は「油糟」の終に、「俳諧は式目ぞなき大方は和漢の如く去嫌ふべし」といふのを始め、十首の式目歌をあげて、その據るべき標準を示し、なほ『御傘』を著はして序文に「これは應安の新式を立て、一座一句の物をば二句に定め、七句の物をば五句になすやうの事のみにて、私の新法を一つも出さず、誰も知りたる和漢の如くあひはからふものなり」と、式目制定の根本方針を明かにしてゐる。和漢とは連歌で和句と漢句とを連ねる一種の體をいふので、それは明應の『和漢法式』に普通の連歌より寛大な式目が定められてある。それで要するに貞徳も俳諧の法式制定には、守武と同様の態度をとつたわけで、それをやゝ具體的に述べ、更に『御傘』で一々の場合の指合去嫌を詳しく定めたのであつた。其の外立圃の『花火草』、重頼の『毛吹草』等によつて、當時俳諧の式目が十分確立されるに至つたさまが窺はれる。それはいづれも主として言葉の去嫌を説いたので、今日から見ると彼等が一旦連歌の羈束から脱しながら、再び又かやうな煩はしい法則を設けた事に、不可解を感ずる程のものである。だがそれは畢竟連句全體の調和と變化とを欲するための、人爲的法則にすぎない。その眞骨頭を會得すれば、これらの法則は勿論無視してもいゝものであつた。芭蕉は指合繰の上手といはれるよりは、俳諧そのものの手腕を練るべし

○油糟　宗鑑の「犬筑波集」の前句をとりて、これに貞徳が新に句を附け試み、以て附方の實例を示したもの。
○式目歌　式目を記憶し易いやうに歌に作つたもの。
○御傘　發句篇一〇頁參照。
○應安の新式　二條良基が應安五年制定した連歌の式目。
○花火草　俳諧の作法書。寛永廿年刊。
○毛吹草　發句篇一二頁參照。

と教へた。格に入つて格を出るは常に達人の態度である。よつて今はとにかく、かうして貞門時代に始めて式目が確立された事を述べるにとゞめ、以下それらの式目の大體を説明しよう。

（一）連句の形式的種類

連句は五七五の長句と七七の短句とを交互に連ねて、一卷を成すもので、その一卷の句數によつて、種々の形式が定まつてゐる。しかしその基本的形式は連歌と同じく、百韻即ち百句を連ねたものであつて、他は多くその變形に過ぎない。それでまづ百韻體のものから順次説かう。

(1)、百　韻　百句を懷紙四枚に記すものである。懷紙とは詠草の用紙のことで、その一枚を一折と稱し、又一折を各ゝ表と裏とに分け、最初の一枚を初折又は一の折、次を順次二の折、三の折、最後のを名殘折と呼ぶ。さうして各折の表裏に、次の如く句數を分けて記すのである。

初折　表八句、裏十四句
二ノ折　表十四句、裏十四句
三ノ折　同　上
名殘折　表十四句、裏八句

この百韻を數巻重ねたものを、それぐ\その數によつて三百韻・五百韻・十百韻等といふ。なほ百韻には連歌で本式と稱する古式の制がある。即ち古式百韻で、それは

初　折　　オ(表)十句、　ウ(裏)十四句
二ノ折　　オ　十四句、ウ　十四句
三ノ折　　同　　　　　上
名殘折　　オ　十四句、ウ　六　句

といふ體裁に記すのである。

(2)、五十韻　百韻の前半即ち初折と二の折とである。一に半百韻ともいふ。
(3)、四十四　百韻の初折と名殘の折との二折で句數四十四。
(4)、表　合　百韻初折の表八句だけのもの。古式であれば同じく初折表十句のもの。

右の外なほ七十二候・首尾行等の體もあるが、あまり多く行はれない。古くはこの百韻を基としたものが最も普通の體であつたが、蕉風以後は卅六句の歌仙と稱する一體が好んで用ひられた。この歌仙體にもまたいろ〳〵ある。

(1)、歌　仙　一卷三十六句で懷紙二枚からなる。そして

初　折　　オ　六句、ウ　十二句

○十百韻　即ち千句であるが、最初から千句興行(連歌俳諧を行ふこと)する場合には、又特殊の法式が別にある。

○七十二候　百韻の中の一折を省いたもので七十二句。

○首尾行　百韻の初折の表と名殘の折の裏と合せて懷紙一枚に十六句。

名殘折　　オ十二句、ウ　六句

と記すのである。もとこれは各句に歌仙の名を賦※したのから起つたのだといふが、後にはただ卅六句を連ねる一體を稱することになつた。芭蕉以後この式は最も好んで用ひられ、延寶頃から以後の連句は、慶弔など特別の場合を除けば、殆ど歌仙のみである。思ふに百韻・五十韻ではあまりに長きに失し、卅六句くらゐが最も適當な長さであつたからだらう。一に鯉鱗行・六々行・四九吟等ともいふ。

(2)、半歌仙　歌仙の前半一折だけのもの

(3)、首尾行　歌仙の初折表六句と名殘折裏六句とを懐紙一枚に記すもの。十二句。

(4)、表合　歌仙初折の表六句。

以上の外なほ源氏行※・米字※・易※・長歌行(四十八句)・短歌行(二十四句)・廿八宿(二十八句)・旋頭(廿四句)・廿四節※(廿四句)・十八公(十八句)等種々の形式があり、也有の四七韻※だとか、鬼貫の「禁足之旅記※」に見える一卷廿句のものなどもあるが、要するに連句として最も普通のものは百韻と歌仙との二體である。なほ三つ物といつて發句から第三まで三句のものが、特に歳旦に限り汎く行はれた。

○賦した　讀みこむこと。

○源氏行　歌仙の中間にオ十二句ウ十二句の一折を加へたもので、句數六十。源語が天台六十卷になぞらへたといふのでかく稱する。

○米字　一卷八十八句、懐紙四枚。

○易　六十四句、懐紙二枚。易の六十四爻に准へていふ。

○廿四節　暦の廿四節になぞらへて呼ぶ。

○四七韻　廿八宿と同體。

○禁足之旅記　元祿二年刊。鬼貫撰「犬居士」中に出づ。

○初表　初折の表の畧。

○その場所では云々　もつと實際的に言へば、この定座までに月の句をよめば宜いので、もし定座までに月の句がない場合は、そこで必ず月の句を出さねばならぬ。その意味で定座である。

○名表　名殘折の表の畧。

（二）季と月花の定座

俳諧には古來春夏秋冬いづれかの季をあらはす、所謂季の詞といふものが、非常に重視されてゐる。例へば發句には必ず季を必要とするとか、春季と秋季とは三句以上必ず續けるが五句以上は續けてならぬとか、夏と冬は一句から三句までとか種々のきまりがある。特に花と月とは春秋の二大景物であるから、特に一巻中必ずこれをよまねばならぬ場所が一定されてある。之を月花の定座といふ。それも句式によつてそれ〴〵定座が異るのであるが、今百韻と歌仙とだけについて述べよう。百韻では※初表の七句目・初裏の九句目・二及三表の十三句目・二及三裏の九句目・名殘表の十三句目の七ヶ所が月の定座で、卽ち※その場所では月の句をよむべきものとされてゐる。それから初裏の十三句目・二及三裏の十三句目・名殘裏の七句目の四ヶ所が花の定座となつてゐる。歌仙では初表五句目・初裏七句目（但しこれは後世の法式で、芭蕉時代までは初裏八句目であつた。支考一派の人々がこれを七句目に變更して後、それが定法となつたらしい）。※名表十一句目が月、初裏十一句目・名裏五句目が花の定座である。勿論かゝる規則は、初心者の爲に設けた便宜的のもので、月花が風雅の士に最も愛されるものであるから、ぜひこれを一巻の適當な所によみこませようとする工夫にすぎない。だから所謂「月は出るに

○宇陀法師　許六の著。元祿十五年刊。

○(月の定座)　芭蕉時代の定座。

任せよ、花は咲くにまかせよ」で、實際に當つては臨機應變必しも定座に拘泥する必要はないのである。「※宇陀法師」の如きには「月花の座定まれる所無し」とまで言つてゐる。なほ以上說明した事を分り易くする爲に、蕉風以後最も汎く用ひられた歌仙式について表示して見よう。

初折

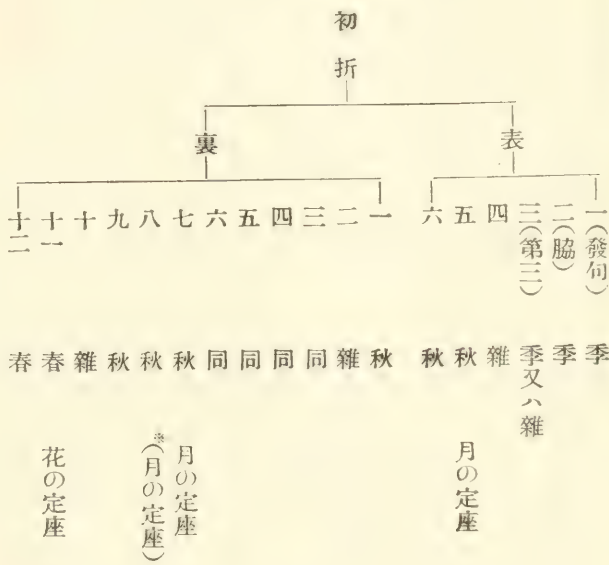
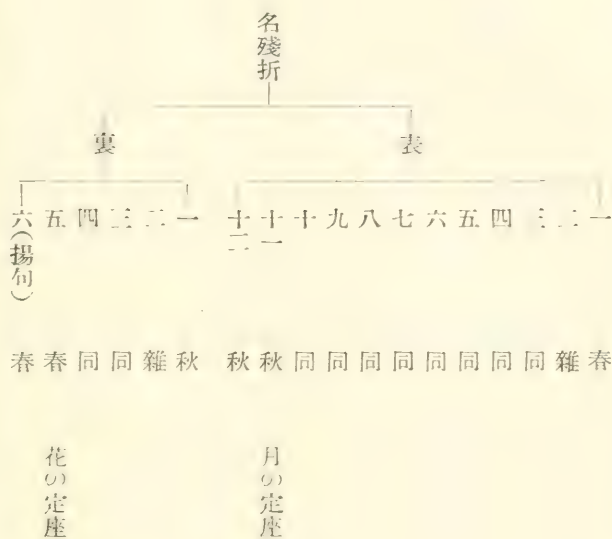
	句	季	備考
表	一(發句)	季	
	二(脇)	季	
	三(第三)	季又ハ雜	
	四	雜	
	五	秋	月の定座
	六	秋	
裏	一	秋	
	二	雜	
	三	同	
	四	同	
	五	同	
	六	同	
	七	秋	月の定座
	八	秋	※(月の定座)
	九	秋	
	十	雜	
	十一	春	花の定座
	十二	春	

名残折

表

一	春	
二	雜	
三	同	
四	同	
五	同	
六	同	
七	同	
八	同	
九	同	
十	同	
十一	秋	月の定座
十二	秋	

裏

一	秋	
二	雜	
三	同	
四	同	
五	春	花の定座
六(揚句)	春	

右は勿論法式を會得するのに便宜な一の場合を示したに過ぎず、實際は月花の句が定座以前に出るとか、同じ月でも朧月・寒月等の如く秋季以外の月をよむとか、種々の形が生じて來るし、又雜といふのは季の詞のない句をいふのであるが、これも勿論實際には雜ばかりと限らない。

要するに右の表は基礎的の型を示すにとゞまるものと心得ればよい。

（二）指合去嫌

俳諧の法則として、古來宗匠連の最もやかましくいふのは、この指合去嫌である。これは句を附ける場合に、それより以前の句と牴觸することを避ける爲に設けられた禁制で、例へばある語とある語とは何句を隔てねばならぬとか、何といふ語は一卷中何句以上用ひてはならぬとかいふやうな事を定めたものである。かゝる法則は前に述べた如く、『御傘』、『花火草』、『毛吹草』等以來、多くの作法書に煩はしい位記されてあるが、それは要するに一卷の變化と調和とをはかり、單調に流れしめないための便宜的法則である。その眞意を領會すれば、必しもこの法に泥む必要はないので、蕉門その他の作品に徴しても、準繩によらぬものもかなり多いのである。しかし古人はすべて一と通り、この指合を心得た上で、作句したのであるから、連句を解するに當つても、その大要には通じておく必要がある。今古く普通に行はれた『增補花火草』によつて、主なる法則を說くことにしよう。

一、句數の事　春秋の句は三句から五句までもつゞけてよい。夏・冬・神祇・釋教・旅・述懷・山類・水邊・居所・夜分等は一句きりでやめてもよく、又三句までもつゞけてよい。戀は二句か

○神祇。釋教云々　以下すべて連歌俳諧では、その類の詞が一定して居る。例へば神樂・伊勢講・狛犬等神に關する言葉は神祇、門跡・比丘・伽藍等佛に關する言葉は釋教と定めてある。山類は山・尾上・山姥等、水邊は海・池・水鳥・漁火等、夜分は夢・燈火等。その他類推すべし。

○聳物　そびくとは聳えたなびく意で、雲・霞・霧・烟の類をいふ。
○降物　雨・雪・霰等。

ら五句までもつゞける。人倫・衣類・聳物・降物・生類・國の名・名所・食物・藝能・植物・時分等は一句でも二句でもよい。

二、二句を隔つべき物　天象・降物・聳物・名所・人倫・人名の間は少くとも二句以上隔てねばならぬ。木と草・草木と竹・魚と鳥・蟲と獸とも同じく二句去らねばならぬ。

三、三句を隔つべき物　同字・水邊・山類・同生類・同植物・夜分・戀・旅・居所・述懐・神祇・釋教・衣類・無常等は三句去りである。

四、五句を隔つべき物　月・田・煙・夢・竹・枕・衣・舟・涙・松の字、及び同季の詞は五句去りである。

五、表の事　古人の名・神祇・釋教・戀・無常・述懐・名所等は表八句（歌仙であれば六句）のうちに嫌ふ。これは最初から卷の模様が重くなるのを避けるためであるから、その心得さへあれば勿論差支へないわけである。

其の他なほ細かな規則は甚だ多いが、大した必要がないからすべて省略する。『花火草』等には伊呂波順で、

一、岩　一座に二、（註、一座の百韻に二句以上用ひてはならぬとの意。）いはほ一・岩屋一、（註、岩の字がすでに一座二句用ひられてゐても、其外に巖・岩屋といふ形では各〻一句だけ更に用ひてもよいとの意。）か様の四の物（註、岩二巖一、岩屋一で合計一座に四句の物である。）は折をかへて也。（註、百韻は懐

紙四枚即ち四折であるが、右の岩。巖。岩屋等の語は折をかへなければよむ事が出來ないのである。結局一折に一語以上をよんではならぬことになる。）岩と磐によみても岩二の内也。岩に石面を嫌ふ也。（註、面とは懐紙の表裏に關せず、文臺にひろげて置いた見渡しの間をいふ。例へば初裏と二表とはひろげると同じ面に見渡されるから、之は同じ面である。面を嫌ふとは、その同じ面に岩と石と用ひてはならぬとの意である。）

といつたやうに、一々極めて煩はしい説明がしてあつて、とても諳記しておく事などは困難な程である。が畢竟指合繰りの上手といはれんよりは、一句に名譽の沙汰を得た方が本意である事はいふまでもない。

なほ古い百韻には連歌にならつて賦物をとる事が普通であるから、それもついでに説明しておかう。賦物とは各句に或る文字を賦する（よみこむ）事をいふので、連歌では五箇ノ賦・十箇ノ賦などとは、その文字が一定してゐた。その外賦物の一種として、※一字露顯・※二字反音・※三字中畧・※四字上下畧等といふやうなものもある。俳諧の賦物も大體連歌にならつてはゐるが、「※花火草」などにも「定りたる文字もあらざれば、五ケなどといふ事もなし。發句にしたがひ何にても興ある字を取る也」とある通り、わざと滑稽な文字なども取つた。而してこの賦物はもと一巻全部の句に亙るべきもので、後世のものにも名所百韻・源氏五十韻・鳥獸名盡しなどといつて、各句に名所や源氏物語の巻名や鳥獸の名等をよみこんだ類もあるが、多くは發句だけ賦物をとるので、全く形式的のものにすぎなかつた。例へば

○一字露顯　例「なげかじな寢ぬは浮世の時鳥」の寢を音させる類。即ち句中に他の語にとられる一字を賦する事。

○二字反音　例「籠でかふそら音も高しほととぎす」のぎすを反してすぎ（杉）とさせる類。即ち句中に反音すれば他の語となるやうな二字を賦する事。

○三字中略　例「去り來る年のあゆみの魚千里」のあゆみを中略してあみ（網）とさせる類。

○四字上下略　例へば、なにはづ（難波津）を上下略してには（庭）とさせるやうな四字を賦する事。

○花火草　五七二頁を見よ。

何毛

花よりも鼻にありけるにほひ哉

姉何

鶯の娘かなかぬほとゝぎす

の如きものが卽ち賦物である。しかしこれも後世は全く行はれず、表立つた形式的のものに、稀にとるにすぎなかつた。

(四) 各句の作法

發句以下連句中の主要な句については、それ〴〵一定の作法がある。これも古來俳諧の作法書などに、やかましく說かれてゐる事であるから、その大要を述べておかう。

イ、發句

發句には季の詞と切字とを必要とする。連句でなく一句きりのものでも、無季の發句といふものは、名所の句など特殊の場合でなければ普通よまないのである。俳諧と季語とのかゝる特殊的關係は、俳諧と和歌連歌等との傳統的な關係を考察する事によつて、その然るべき理由を知ることが出來るであらう。しかしその事については今詳說する餘裕がないから省略する。と

○花よりも　守武の「獨吟千句」第三卷の發句で、「何毛」が卽ち賦物である。それは發句の中に毛字といふ一つの熟語をなすべき文字をよみこむので、この類を上賦といふ。この句では鼻と熟して鼻毛とつゞくのである。

○鶯の　同じ千句の第四卷の發句で、これは姉何とつゞいて一語をなす字をよみこむので、この類を下賦と稱する。この句では姉娘とつゞくのである。

に角發句はその季節に應じて、必ず當季の詞をよみ込まなければならない。四季それ〴〵の景物・行事などは勿論、蒲團・汗などの如く、特にある季節のものとして定め難いやうなものでも、俳諧の季題としては一は冬季一は夏季といふやうに、約束的に一定されてゐる。そのこまかな事は季寄せなどを見ればすぐ分ることであるが、さうした季の詞がまづ必要である。但しこの季の詞も時代によつていくらかの變遷はある。例へばある行事の興廢とか新しい景物が加はつたとかいふ事で、季語に増減を來すやうな事はもとよりであるが、その外古く晝寢といへば雜であつたのが、後世は夏季と定められてしまつたり、西瓜が時代によつて——これは江戸と上方といふやうな土地的な區別さへあつた——或は夏季に或は秋季に取扱はれたりしたやうなものもある。花火や朝顔は秋季となつてゐるが、現代人には些か不思議に感ずるであらう。隨つて一方には季無用論の如きものも近來は起つてゐるのであるが、單に俳諧に關する文藝論としてならとにかく、古句を解するに當つて季語が重視さるべき事は言ふまでもない。

次に切字であるが、これは古來俳諧で最もやかましく論ぜられた問題の一つである。所謂傳書等と稱するものには十八切字だとか何々切だとか、種々な名目をつけて煩はしい説明をしてある。しかし切字といふのは要するに短小な詩形の中に、多分の含蓄をもたせようとする所から生じたもので、その根本を辨へて居れば勿論形式的の法則に拘はる必要はないのである。さ

て普通切字といふのは「や」「かな」の如き感歎の助詞、用言の終止形等をいふので、そこで暫く意が切れる事になる。そしてその休息の間に複雑な聯想をすべき餘裕を讀者に與へるのである。だから形は十七字すべて文法的につゞいてゐても、どこかで意が切れて居ればそれでよいので、實は心の切れる切れぬが根本要件である。古人もたとひ切字があつても心の切れぬ句は發句でなく、切字が無くても心が切れて居たら發句であるなどと說いてゐる。例へば芭蕉の

　　桐の木に鶉なくなる塀の内

の如きは、表面切字はないが上五文字で意を隔ててゐるのである。かの名高い

　　辛崎の松は花より朧にて

なども、大廻しの切れだとか辛崎祕傳だとかやかましく言はれてゐるが、要は心の切れにある。この句について「去來抄」にはかう傳へてゐる。

　或人にて留りの難あらんやと云。其角答へて云、にては哉にかよふ故、哉留の發句ににて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸云、にて留の事は其角が解有り、又是は第三の句なり。いかに發句とはなし給ふや。去來云、是は卽興感偶にて發句なる事疑なし。第三は句案に渡る　もし句案に亙らば第三等にくだらん。先師重ねて云、其角去來が辯皆理窟なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。

○辛崎の　發句篇一〇八頁參照。

○哉留の云々　連句の場合發句が哉で終つてゐると、第三の句をにてで留めることを避けるのが作法である。

○第三　連句の第三句目の意。

○平句　發句・脇・第三・揚句以外の一般の句。

○日の春を　發句篇一八二頁參照。

最後の芭蕉の言葉は誠に味はふべき教へである。蕪村も

　鍋さげて淀の小橋を雪の人

これは平句に似た發句であり、

　近江野や手のひらほどな雲起る

これは發句に似た平句であるといつて、その區別を示してゐる。

なほ發句の一般的心得としては、卷頭の句であるから、たけ高く大將の位があるやうに作らねばならぬと、大概な作法書に說いてゐる。これは連歌と同樣の教へで、もとより至極尤もな注意である。例へば

　日の春をさすがに鶴の步み哉　其角

の如きがその範に示されてゐる。しかしこれも實際にはいろ〳〵な場合があるわけだから、一概に律する事は出來ない。

ロ、脇句

脇句は發句の季に隨ひ、發句の餘情を盡すのを主眼とする。『三冊子』に

師云、第一發句をうけてつり合專に打添へて付くるよし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すわり宜くすべし。かな留め自然にある心得口訣あり。第一應對合體の心と思ふ

べし。

といひ、又『山中問答』※に

脇の句は發句と一體の物なり。別に趣向奇語を求むべからず。唯發句の餘情を言ひあらはして發句の光をかゞやかす也。脇に五つの附方あれども、これみな附様の差別にして外に趣向を求むるにあらず

などと說いてあるので、ほゞその要領を得ることが出來るであらう。古來連俳では、客發句に亭主脇、といつて、主客挨拶の場合には、客が先づ發句をよみ主人が脇をつけるのが禮式になつてゐるのも、脇はその句情が客たる發句の引立役になつてゐるからである。卽ち脇句はすべて奇拔な趣向などを求めずに、あくまで發句の餘情を十分盡すやうに作らねばならぬ。

脇の形式的條件としては、前に述べた如く必ず發句の季に從はねばならぬ。もし發句に三月※にわたる景物が出た場合には、脇句で當季を定めるのが、連歌以來の習はしとなつて居る。次に古來脇は韻字留めといつて、句の終りを漢字——實は體言といつた方がよいかもしれぬ。——で留める事になつてゐる。しかしこれはもと連句が漢詩の聯句を摸した名殘をとゞめて居るに過ぎない。卽ち詩の方では第二句に韻字をもつて來るので、連句でも脇を一名入韻とも言つて、最初はこゝに韻字を置いたのである。それが後世まで韻字留といふ形式で殘つたので、

○山中問答　芭蕉が「奥の細道」の旅行の際、加賀金澤の北枝に教へた旨を書留めたものだといふ。

○三月にわたる云々　例へば發句に七、八、九月の三秋を通じてよまれる景物が出たら、脇で七月なら七月の景物をつけて當季を定めることの意。

○五ッの附方、脇五體　普通打添附、相對附、頓留、違附、心附等の名目を設けて居る。

○手引蔓　天明六年刊。蕪村の門人高井几董の著。附合に關する作法を說いたもの。

○鳶の羽も　「猿蓑」に見える歌仙の發句。芭蕉の吟、脇は去來。

○雁がねも　「曠野」に出てゐる歌仙の發句。越人の吟、脇は芭蕉。

實際上名詞の方が句のすわりがよいから多く用ひられはするが、必しもこれに限る必要はない。現に貞門・談林の昔から脇を助詞・助動詞などで留めた所謂てには留の例はかなり多く、蕉門の俳諧では更により自由な態度をとつてゐる。

なほ脇には五ッの附方とか脇五體とか稱して、古來特にその附方を類別して說明して居る。例へば『手引蔓』の如き作法書には、

鳶の羽もかいつくろひぬ初時雨
一吹き風の木の葉しづまる

の脇は打添であるとか、

雁がねもしづかに聞けばからびずや
酒しひ習ふこのごろの月

の脇は相對であるなどと說いてゐる。しかし畢竟これらは實際句作上の便宜から說かれた作法にすぎず、もとより脇の形式がかく一定したものではない。

八、第三

第三は脇から一轉して新しい局面を展開させようとする第一歩のふみ出しである。隨つてここは最も作意を要する所で、『宇陀法師』に

○打越　ウチコシ。その句から一句を隔てゝゐる句。第三は發句からいへば打越である。

○市中は「猿蓑」に出てゐる歌仙。

○梅が香に「炭俵」に出てゐる歌仙。

第三の句第一難儀の場所也。上手の入るといふは第三也。發句の打越、脇の句にはなれて附くる上手の手際とはいふなり。しかも第三のふりを持ちて、留りに去嫌あれば第一の難所也。一卷の出來不出來、脇・第三より極まる也。

と説いてゐる通りである。元來連句は全體として統一があり、しかも變化に富む事を理想とする事は屢〻述べた通りであるが、發句から脇句までは殆んど一體であるから變化が求められない。この第三から變化の第一歩をふみ出すわけである。それで發句・脇と全くちがつた境地を見出して、句勢を轉換することが最も必要である。例へば

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
暑し〱と門々の聲　芭蕉
二番草とりも果さず穗に出て　去來

は、發句と脇とが市井の熱閙地を思はせるのに、第三はこれを轉じて田家の情景にしてゐる。又

梅が香にのつと日の出る山路哉　芭蕉
ところ〲に雉子の鳴立つ　野坡
家普請を春の手透に取付いて　同

○廿五箇條　芭蕉の遺書と傳へるが、實は支考一派の僞作だらうといふ。しかしその内容には取るべき點が多い。

○韻字留　名詞で留めるもの。

の第三は、前二句が全く自然の景色のみであるのを、轉じて人事に結びつけてゐる。大體からいふ調子に心得ればよいのである。

次に第三の形式的條件としては、句の終りの留字に一定の規則がある。即ち第三はて・に・らむ・もなしの四種の天爾波で留めるのが通則になつてゐる。其の他けり・はなし・なれや等も用ひられ、稀には名詞留の如き破格も見出されるが、最も多く用ひられるのはて留である。これについて「廿五箇條」に

第三の留りに文字の定まりたる事は、一句の様發句のやうなれども、下のとまらぬ所にて次の句へ及ぼすべきためなり。此の理を知る時はにの字ての字にも限らずと知るべし。されども此の句は第三の様なり、百句の中に置きても選び出す程に第三の様を知らざれば、やはり定まりたる留り然るべし。世に韻字留に傳授ありとて、或は初櫻或は郭公など、押字・かゝへ字の沙汰あるは知らぬ人の推量なり。

こほろぎもまだ定まらぬ鳴所

いづれの時か我も此の第三ありしが、一座を誡めて他聞を許さず。發句と平句などのさかひ、此の第三の韻字にても知るべし。されど尋常の留りにて事缺くまじき事也。

と言つてゐるのは、よくその精神を盡してゐる。要するに第三はこゝから一轉して次の新局面

を展げて行かうとする場所であるから、自然ての如き未了の詞が多く用ひられるやうになつたのである。隨つてその心得さへあれば、如何なる文字を用ひてもいゝわけであるか、それは「廿五箇條」に言つてゐる通り、好んで用ふべきではない。なほ第三の季は、發句が夏・冬であれば雜にしてもよいが、發句が春・秋の場合は、春・秋の句は三句まで續くべきであるから、やはり脇の季に從ふのが通則である。

○七名八體　七名は句の案方を七種類に分けたもので、有心・向附・起情・會釋・遁句・拍子・色立等。八體は附方についての名目で、其人・其場・其時・天相・觀相・時分・時節・面影等。

ニ、平　　句

第四句目以下は平句と稱し、一句の句作りに特別の定つた作法はない。ことに四句目の如きは、一般に輕く附ける事がならはしとなつて居る。これは發句から第三まで、それ〴〵特殊の法式作法があつて緊張した後だからである。しかしもとより平句だから輕視してよいと言ふのではない。一巻の大部分はこの平句なのであるから、その巧拙は即ち一巻の巧拙を左右するわけで、たゞ作法として特殊の定めがないといふだけにすぎぬ。古來七名八體などと稱して説かれてゐる案じ方附方の如きは、畢竟平句の全部に通じた心得である。たゞしこれらもやはり句作の實際上の便宜に出た作法であり、その詳しい説明は一々實例によらねばならないから、こゝにはすべて省くことにする。

ホ、月　の　句

月は秋の清光を賞するのを本體とするが、前句との關係によつて、他季卽ち春夏冬の月を附けても勿論差支ない。百韻などの長いものでは一卷の變化上、寧ろ他季の月を一二入れることをよいとする位である。月となるべき季の詞は、四季を通じてかなり多いが、大體朧月・寒月などの如く四季によるもの、三日月・後の月等の如く日次によるもの、有明・夕月夜等の如く時刻によるもの、又は嫦娥・かつら男等の如く種々の異名を用ひたものとがある。いづれにせよこれらの詞を、歌仙ならば初表五句目・初裏七句目（八句目）・名殘表十一句目の三定座に、それぐ\よみ込まねばならぬ。しかし既に述べた通り、これは只原則に過ぎないのだから、實際は隨意に月の句を出して差支なく、とにかく一卷中に月の句が三つあればよいのである。但し隨意と言つても、定座より前に月を引上げるのは普通の事であるが、定座より後に出すのは翻れ月と稱して、極めて特殊の場合でなければしない事になつてゐる。それは例へば前句や打越に、雨・雪・雲・闇等月の光を殺ぐ句があつたり、又朔・晦・立秋・八朔等特定の日次や、螢・稻妻・花火等月の情趣を奪ふ句があつたりする場合である。かゝる際は止むなく月を翻すか、あるいは所謂光らぬ月の趣向を構へる。光らぬ月とは例へば

伏見あたりの古手屋の月

秋暮れて月無き岡の一つ松

○伏見あたりの 『深川集』に出づる芭蕉の附句。

○秋暮れて 『[illegible]』、『歌仙』等に出づる芭蕉の附句

等の如く、月を虚字化したり、月を無くしたりして、とにかく月の意を弱めるのである。

なほ發句が秋季である場合には、脇か第三かに月の句を出すのが普通で、殊に百韻ではこの場合第三迄に月の句がないと、素秋と稱して忌む事になつてゐる。しかしこれらも實際句作の場合には、必しも拘泥する必要はないので、要は最も適宜の場所に適宜な月光を照させればよいのである。

へ、花の句

花の定座は前に示した通り、歌仙では初裏十一句目・名裏五句目の二箇所で、これまた一巻の飾りとして、主要な句となつて居る。凡そ花と言へば俳諧では櫻の花の事であるが、しかも花の句では必ず「花」といふ言葉を用ひねばならぬので、「櫻」といふ言葉を代へて用ひる事は、特殊の場合でなければ許されない。これは元來花と櫻との二語の間には、多少概念上の相違があるからで、花といへば爛漫たる櫻を抽象的に考へた言葉で、櫻は個々の花を具象的に見た言葉である。許六が『篇突』の中に「花といへば賞翫の惣名、櫻は只一色の上也」と說いて居るのは、卽ちこの意である。蕪村の句に

花に遠く櫻に近し吉野川

散るは櫻落つるは花の夕哉

などとあるのも、故らに花と櫻を使ひ分けて句を仕立てたのである。

花といふ言葉がかうした抽象的概念であるために、更にその意義を押しひろめて、比喩的に花と稱したもの、あるいは單に花の字が附いたものまでも、花の句として取扱ふやうになつた。そこで所謂正花・非正花の論も起るのである。正花とは實際の花と同樣に花の句に用ふべき言葉として認められたものをいひ、非正花とはたとひ「花何」と熟合した言葉でも、花の句に用ひられないものをいふ。さうしてそのどこまでを正花とし、どこからを非正花とするかについては、古來諸說紛々としてその標準を定めがたい。又それを正花と認めても、全然比喩的な言ひ方の言葉で、例へば花嫁・花聟の如き類は、これを春季とするか雜とするかといふ點でも見解が分れる。これに關して古人はいろ／＼言說を費して居るが、要するに花の本義、即ちはなやかで美しいといふやうな意に基いた譬喩的の言ひ方であれば、大體正花と見なして差支へないであらう。例へば花嫁・花の顏・花の都等は、その人世の春に逢つたさまや美しいさまを、花にたとへて言つたのだから正花とし、花鰹・花の兄等の如きは、前者はあまりに花の本義から遠く、後者は花の字はあるけれども、梅の異名に外ならぬのだから、非正花と取扱ふやうな類である。

櫻を花の句に代へる事は、前に述べた通り普通許されないのであるが、百韻中花四本の中一

○句の花　名殘の折の花をいふ。

本は戀を許すといふ說もあり、又實際の作品にも、例へば『猿蓑』の中に去來の

　　絲櫻腹一杯に咲きにけり

といふ句を、句の花に許した例もある。なほ花の句は定座より前に適當の前句があつたら、そこで附けて出すのは毫も差支なく、特に一座中の人が次に花を附けさせるため春季の句を出した時は、これを呼出しの花と稱して次の人は花の句を附けるのが常となつて居る。しかし定座より後に飜す事は、月の場合と違つて甚しくこれを嫌ふのである。隨つて花の定座の前に秋季の句や、花を附け難い句などをする事は、用捨せねばならない。その他なほ月・花の句にはさまざまの制が說かれてあるが、詳しくは土芳の『三冊子』などについて見るが宜い。

ト、戀の句

戀句も月花の句について特殊の地位を占めて居る。一卷中戀の句が一つもないやうなのは、律義な卷と笑はれるくらゐで、又戀句を一句で捨てるのも無念とされてゐる。普通戀は二句から五句までも續ける事が出來、五句若くは三句を隔てたら何回でも出し得る事になつてゐる。しかし歌仙であれば一卷中二三個所が最も適當とされ、初裏から揚句までの間何處で出しても差支へないが、只初折の表には普通出す事を許されない。扨それでは戀の句とはどんな內容の句までを意味するのかといふに、これには古來戀の詞として定まつた言葉があつて、連歌や古

〇前句云々　土芳の「三册子」に見える。

風の俳諧ではこれらの言葉を含んで居さへすれば戀句と認められた。例へば『毛吹草』によれば、僞り。よすが。あやにく等といふやうな言葉までが戀之詞となつて居る。しかし勿論かうした形式的な定めで戀句を分つべきものではなく、たとひこれらの言葉がなくとも、句の心が戀になつて居れば戀句であり、これらの言葉は有つても、戀の心が無ければ戀句と見なすべきではない。流石に芭蕉などは特に心に重きを置いたので、たゞ娘・女房・帶等の言葉だけで戀句にする事はなかつた。又婚禮・出産なども古制では戀として取扱つたが、これらも前句や附句の關係によつては必しも戀と見なさぬやうになつた。もし或句が戀の心が十分現はれて居なくて、戀とも非戀ともいづれにも見られるやうな場合には、次の附句によつてその意を十分に現はすやうにし、以て戀の意味を完全にするのである。そこに作者の手腕もまた存するのであつた。

前句戀とも戀ならずとも片附けがたき句ある時は、必ず戀の句をつけて前句ともに戀の句になすべし。

とあるのは、卽ちこの場合の敎へである。

チ、揚　句

揚句は一卷中の最後の句であるから、なるべく穩やかに安らかに結ぶのを宜いとする。そして前句が花であるから、通常春季の句を附けるのであるが、花が定座より前に引上げられて居

○たとへば云々　「三冊子」による。

○一卷表より云々　「去來抄」による。

る場合は、他季若くは雜の句を附ける事もある。例へば「炭俵」の「梅が香に」の卷の揚句

(前句)隣へも知らせず嫁をつれて來て　野坡

屏風のかげに見ゆる菓子盆　芭蕉

が雜で終つてゐる如きで、この卷では名殘の花が名殘表に引上つて居るからである。

連句の作法についてはなほ述ぶべき事が多く、ことに箇々の句に關した事の外に、一卷全體に通じて心得ねばならぬ事も少くない。しかしそれは要するに變化と統一とについての注意で、一句毎に新しい句境の斷えざる展開を期すべき事に歸着する。

※たとへば歌仙は三十六歩也。一歩もあとにかへる心なし。行くに從ひ心のあらたまるは、たゞ先へ行く心なれば也。

とか、

※一卷表より名殘まで、一體ならんは見苦しかるべし。

といふやうな根本的な精神と心得とを了得して居たら、自ら枝葉の事には通じ得るであらう。

○蟋蟀の巻　「猿蓑」の中に出てゐる歌仙で、芭蕉が同書を撰んだ去來・凡兆の外に、尾張の野水を加へ、四人で催したもの。元祿三年の作。

○焦　芭蕉の略。連歌俳諧では作者の名を第二回目からは略して、下の一字だけ記すのが普通である。以下去來は來、凡兆は兆、野水は水とだけ記されて居る。

○ウ　裏の略符號。こゝから懷紙の裏に記す。

蟋蟀の巻

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆

油かすりて宵寢する秋　芭蕉

新疊敷きならしたる月かげに　野水

ならべて嬉し十のさかづき　去來

千代經べき物を樣々子日して　蕉

鶯の音にたびら雪降る　兆

ウ 乘出して肱にあまる春の駒　來

摩耶が高嶺に雲のかゝれる　水

夕飯にかますご食へば風薫る　兆

蛭の口處を搔きて氣味よき　蕉

○名　名殘折の略。こゝから二枚目の懷紙に書く。

物思ひ今日は忘れて休む日に　水
　迎せはしき殿よりの文　來
金鍔と人に呼ばるゝ身の安さ　蕉
　あつ風呂好の宵々の月　兆
町内の秋も更け行く明屋敷　來
　何を見るにも露ばかりなり　水
花と散る身は西念が衣着て　蕉
　木曾の酢莖に春も暮れつゝ　兆
（名）歸るやら山陰傳ふ四十雀　水
　柴さす家の棟をからげる　來
冬空の荒になりたる北颪　兆
　旅の馳走に有明し置く　蕉
すさまじき女の智惠もはかなくて　來
　何思ひ草狼のなく　水

夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉

人も忘れし赤そぶの水　兆

うそつきに自慢言はせて遊ぶらん　水

又も大事の鮓を取出す　來

堤より田の青やぎていさぎよき　兆

加茂のやしろはよき社なり　蕉

物賣の尻聲高く名のりすて　來

雨のやどりの無常迅速　水

晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉

しよろ／＼水に蘭のそよぐらん　兆

糸櫻腹一ぱいに咲きにけり　來

春は三月曙のそら　水

凡兆九　野水九

芭蕉九　去來九

※灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆

「逆志抄」に「雫のいとなみに用ひたる灰汁桶に雫のたるゝ音、人しづまりてその音も止みたる頃きりぎりすの鳴出したる兆か。清貧閑寂をたのしむ情言外に聞くべし」とあるのでほゞ句意は解かれて居る。秋夜の閑かな情を言取つた句である。灰汁桶の雫も滴り盡きたといふのでゝ自ら夜の更けたさまも思はれる。

油かす※りて宵寢する秋　芭蕉

「かすりて」については諸說がある。一は油を節約する爲にかすり取るといふので『婆心錄』の說である。一は涸の義で油の自然と減る事だと說くので『逆志抄』に見える。而して前解を難ずる者は、油が高いと言つてかすり入れるといふのは餘りに卑しい情で脇句の氣品がないと言ふ。又後解に對しては、涸の義ならば下二段活用の動詞だから「かすれて」でなければならぬといふ批難がある。共に一理ある言である。然るに曉臺の說に伊賀・伊勢の方言で、物の漸く耗り盡きようとするを、何々がカスリテと言ふとあるので、幸田露伴氏の『猿蓑抄』等はこ

○灰汁桶の　發句・秋季、きりぎりす。

○灰汁桶　發句篇一九二頁參照。

○逆志抄　文政十一年刊。楳河坊蛩[illegible]著。「猿蓑」の註釋書。一名「猿蓑さかし」

○油かすりて　脇。秋季、秋、て韻字留。

○かする　かいかするは本來かすり取る義であるが、こゝでは節約する意に解してよい。この言葉については諸說があるから、當時の用例をこゝに列擧しておかう。今様廿四孝（[illegible]）「[illegible]は廿六夜の月をまたぬ出る深夜業に、かすりし油たらしまひ、はつさして消ゆる燈火、かの世へ參る夢のさの際もこんなものなるべし」これは油入の味までかすつて自己について意であらう。俳諧兩形集、平砂「賀茂祭、牛雨の油かするやもろかつら」。俳諧國文「素湯かする月の中の火燧釜　宜德」、「俗世笠」（露點）「ふろあがり、茶がまをかする酒の肴で　陳炎千」

鳥「・釜かする美濃の菅笠　曾良」好色堪忍袋卷三「近代は何事も輕く費なる詞をいはず、昔は廻り遠く念を入て短くて埒の明事をも細長ういへり。たとへば伊勢神明天照皇太神宮と申奉るを、今はお伊勢といひ、南無阿彌陀佛と唱へるをないだこいへは其事とうつる。神佛の上さへ舌に簡略にする、まして人の事をば三郎兵衛といふべきを三郎、五郎左衛門を五郎などかすりていふ。」この最後の例などは、かするが簡略にするといふ意で用ひられる事を證する。

○萎心錄　萬延元年刊。原田曲齋著。七部集の連句を評解したもの。

○新疊　第二十　秋季月。發句が秋であるから月の句をこゝにしたのである。

○新疊　シンダタミともアラダタミとも訓めるが、節文集「いろ／＼さ火燵塞いでぶら疊　章平」と假名書にした用例もあるから、今はアラダタミとよんでおく。

○敷きならしたる　敷きならすは敷均らすで、一面に敷いてある義。「敷きならしたる所の月影に」の意である。

れを據り所として『逆志抄』の說に隨つて居る。しかしこの際芭蕉が「かすれ」といふ普通の語法に從はないで、特に方言を用ひたといふのもをかしいわけである。

かうした用語の解釋に際しては、勝手に意を逆へて解いたり、この場合だけについて考へたのでは正鵠を得難い。やはり汎く當時の用例に徵して適解を定めねばならぬ。さうすると頭註の最後の例の如く、物を簡畧にする意に用ひられる場合がある。よつてこの句の「かする」も「節約する」意と解することが出來る。しかもそれは『萎心錄』に說くやうに、必しも油皿から油をかすり取る意でなく、たゞ抽象的な言葉であるから、燈心を引込めて消してもよいわけである。油ををしむのは卑情ではない。農民等の生活の貧しげなさまを現はしたので、即ちここに發句の餘情を示したのである。人はもう寢靜まつて灯火の影もなく、暗い藁屋の庭の隅にひとり啣々たる蟲聲を聞く。よい脇句である。

新疊敷きならしたる月かげに　野水

月光は美しく流れ入つて、新しい疊の香がさわやかに鼻を撲つ。宵寢したのはこの清光を愛しないのではない。もう肌冷えのする夜である、早く蒲團の中にでもはひつて、ゆつくり月影

▽其角「猿蓑」序
ちまち断腸のおもひを叫びけむ　あだに懼るべき幻術なり　これを元として此集をつくりたて　猿みのとは名付申されける　是が序その心をとり　魂を合せて　去来凡兆のほしげなるにまかせて書
元祿辛未歳五月下弦　雲竹書
（右は序文の終り部分である。雲竹は北向氏、芭蕉の書道の師で、この序文の板下の文字を書いたのである。なほこの最後の二行は「猿蓑」の初版本のみに存し、後刷の本はこの部分の版木を失つたか、或は僅か二行の為一枚の紙を費すのを節約したのか、省かれてある。）

其角「猿蓑」序

を仰ぎながら、その中うと〳〵と眠つてしまはうと言ふのであらう。前句の侘しく貧しげなさまから轉じて、屈託のない樂隱居などの生活が浮び上つて來る。

第三はかやうに境を轉ずる場所である。但しこの際前句の「油かすりて」は始末するといふ程重い意でなく、燈火もいらぬものと消して置くといふ位に輕く見なければならぬ。『逆志抄』に「前の場を新宅と見出して新世帯の若夫婦などの底意もあるべくや」と言つてゐるのは、宵寢があまりきゝすぎて寧ろ川柳趣味の解といふべきだが、「灯火の暗きより月影のうつりよろし」と

いふのは、面白い說である。

なら※べて嬉(うれ)し十(とを)のさかづき　去來

前句の新豐を客を待つための設(まう)けと見て、月下饗應(げつかきやうおう)のさまを附けたのである。座にはすでに十人の客が揃ひ、盃はそれぞれ膳に添へて並べられてある。十人の客といふのだから表向きの花々しい宴會などでなく、近親者だけのさゝやかな賀宴らしく思はれる。「嬉し」は主人の滿足した心情である。物數寄(ものずき)の蒐集家(しうしふか)が、特に愛藏する盃を並べて獨り悅(よろこ)んで居るさまだと解く說もあるが、それでは前句の敷きならした新豐からのうつりが味はへない。

千※代(ちよ)經(ふ)べき物(もの)を樣(さま)々(ざま)子(ね)の日(ひ)して　蕉

「千代經べき物を」は西行(さいぎやう)の歌詞によつて、之を子日の祝に轉じたのである。だからこゝで千代經べき物とは、『道志抄』に「小松を指していふ」と解いてゐるのでよい。次に「樣々」といふのは、小松(こまつ)を引くとか、松を歌に作るとか、松を中心として子日を祝ふことをあらはして

○ならべて　初表第四句目。雜。

○千代經べき　初表第五句目。春季(子日)。

○千代經べき物を　西行、山家集「千代經べきものをさながら集むとも君が齡を知らんものかは」

○子日　ネノビ又ネノヒと訓む。昔は正月初子の日に、野に出て小松を引き若菜を摘んで祝つた。

○鶯の音に　初表六句目。春季（鶯）。

○たびら雪　薄くたひらな雪。油糟「降る〱と思ひし花はたびら雪」

○乘出して　初裏一句目。春季（春の駒）。

○古集之辨　蓬田庵杜哉著。寛政四年刊。猿蓑・炭俵・續猿蓑の連句を解したもの。

○肱にあまる　手にあまる、もてあます等の意。卽ち馬を御しかねてゐるのである。

ゐる。一句は子日の遊びとして松を色々祝つたといふ意味で、前句の「ならべて嬉し」といふ祝賀の意に應じ、又「樣々」は「十の盃」のうつりである。

鶯の音にたびら雪降る　兆

句意は明かである。春寒の景色の附で、野外に小松でも引いてゐると、鶯の聲が聞えながら淡雪が降ると、前句を輕くさばいたのである。

乘出して肱にあまる春の駒　來

『古集之辨』に遠乘のさまといひ、『道志抄』に雪の降るに駒の勇み立つた景色だと言つて居る。共に句意のつゞけざまとしては適當な解であらう。しかしこの邊はすでに初折も裏に移り、漸く蕉境に入る時である。單なる景色附のみでは滿足し難い。況んやすでに前句が輕くさばいたあとである。更にこの附には、にほひの感得すべきものがある事を見遁してはならない。「肱にあまる」といふのは、春駒の勢つたさまのみについて言つたのではない。その言葉か

○摩耶が高嶺に　初裏二句目。雜。
○摩耶が高嶺　神戸市の東北に聳える山。山上に忉利天上寺があり摩耶觀音を本尊とする。

らおのづと馬上の人が暗示されて居る。勇み立つ駒を御しかねてゐると言ふのだから、もとより蛇に綱つけても乘るといふやうな荒武者ではない。瀟洒たる貴公子か、紅顏の美少年が連想されるのである。白馬銀鞍の上、細鞭を振うて早春の野外に遊べば、馬はしきりに勇んで、ともすれば手綱も引きなやむ。少年の紅顏は汗ばんで、きつと引きしまつた口元が凜々しくも可憐である。この些か艷でしかも凜とした風情、それは正しく前句のにほひをうけて居る。卽ち前句の早春の情趣――鶯の聲と、たびら雪と、二つの交錯から來る感じ――と、響き合つて居るのである。そこがこの附合の眼目たる事を逸してはならぬ。畢竟言外に騎手の姿を點じ來つて、始めて一句の趣致が味はれるのである。

※摩耶が高嶺に雲のかゝれる　水

『三冊子』に「前句の春駒といさみかけたる心の餘り、摩耶が峯とうつりて、雲のかゝれると進みかけて、前句に言ひかけて付けたる句也」とあるので盡して居る。卽ち前句の遠乘に勇み立つた春駒から、廣濶な野外の彼方に屹立した摩耶山を附け、更にその頂に雲のかゝつて居る雄大な情を描き出して居る。これは專ら前句の勇ましい情趣に應じたのである。

『道志抄』に初午の説※があるが、前句の春駒をこの初午に牽く馬と見たのでは、全く句附の中心點は失はれてしまふ。又縱令作者がさうした事實を知つて居て、その連想から摩耶が峯を附けたとしても、要するにそれは解釋上第二義以下の事にすぎない。

夕飯にかますご食へば風薫る　　兆

摩耶山を近く仰ぐ漁村などのさまである。縁先に膳をもち出して、かますごの膾でも食つて居る。山の頂には雲がかゝつて、サッと涼風が吹き過ぎるといふやうな光景である。前句は雜の句であるが、『要心鈔』に「前句摩耶が高嶺に雲のかゝるを見て、夕立ならむと待つ體と見立てし」とある通り、附句が夏季の句であるから、自然前句の雲をも夕立雲と見立てて解するのは、解釋上少しも差支ないのである。事實この附合では、前句にさうした趣が自ら含まれて居るので、薫風の句が附けられたのである。

摩耶山から麓の漁村のさまを出したのは心附であるが、高嶺にかゝる雲に、爽涼薫風の情は自ら孕まれて居る。

○初午の説　「摩耶山は（中略）昔は攝州第一の名刹たりしと云傳ふ。二月初午を以て吉日とし、諸人詣をなす。此の日近國の人、牛馬の装飾を新にして馬を牽いて參らせ、土產に昆布を調へ歸る。これを摩耶昆布と云ふ。駒にしをりたる所味はふべし。云々」

○夕飯に　初裏二句目。夏季　風薫る。

○かますご　魚の名。いかなごに同じ。ひしこに似て、體は細長く鎗形をして、長さ三四寸、銀白色である。普通に砂中に埋沒して生活してゐる。春夏の際を時として脂肪がつよい。煮て醬油を取る。畿内でその煮がらを誤り認めて、かますの子としてかますごといふ。

「日本動物圖鑑」所載

○蛭の口處を　初裏四句目。夏季（蛭）。

○口處　「婆心錄」にはクヒド、「標註七部集」にはクドコ等とよんでゐるが、このまゝではやはりクチドとよむべきであらう。たゞしクチドといふ言葉は今他に用例が見當らぬ。語意は蛭の吸ひついた場所をいふ事は勿論であらう。

○物思ひ　初裏五句目。雜。戀の句。

○桐壺の更衣　源氏物語桐壺卷に見える女の名。光源氏の生母。帝の御寵愛を一身に鍾めた爲、外の女御たちの嫉みをうけていろ〱苦しめられる事がある。

蛭の口處を掻きて氣味よき　蕉

終日田の草取りに働いて、今し夕餐の膳に向つた田家のさまと前句を解した。それで「蛭の口處」が點出されたのである。意味の連絡は說くまでもないが、「掻きて氣味よき」は、前句の薫風の爽快な感じに、そのまゝ響き合つて居る。

物思ひ今日は忘れて休む日に　水

「物思ひ」は必しも戀とは限らないが、すでに次の附句ではこれを戀と見てゐる通り、少くともこの言葉には戀を含んで居る。それも「忘れて休む日に」とあるから、かなはぬ戀に惱んで居るのではない。戀に關した何かの紛糾で苦しんで居るさまと思はれる。例へば桐壺の更衣のやうな女の身の上も思ひやられる。勿論これはさうした高貴な人のさまではないが、主人の寵を得過ぎた腰元などでもあらうか。奥方には辛く當られ、傍輩には嫉まれて、かねて氣苦勞の絶えない身が、今日は暇を貰つて自分の里に歸つて居る。そして日頃の物思ひも忘れて、ゆつくりと休んで居るといふのである。そのゆつくりと暢びやかになつた氣もちで、前句の「掻き

て氣味よき」に應じて居る。

この物思ひを、賤の女が農事を休んで、つれない男の顏も見ないから、しばし戀を忘れるのだと解した說もある。しかしあまり持つて廻つた解釋であらう。又前句の蛭に拘泥して、強ひて田舍の女とする必要もない。この場合は、肩の凝りか頭痛を癒す爲に、蛭に血を吸はせたあとなどの意に、自ら解されるのである。

※迎せはしき殿よりの文　　來

これは全くの心附である。僅か數日の里下りすら、その歸るのを待ちかねて、しきりと迎の使がやつて來る。前句を殿の愛妾と見ての附たる事は言ふまでもない。

※金鍔と人に呼ばるゝ身の安さ　　蕉

金鍔について諸說あるが、多くは殿に御氣に入りの者とか、權勢ある役人の渾名と解して居る。「古集之辨」にあげた說※の如きは、江戸時代の文献でその意味に用ひた例を全く見ないから、

○迎せはしき　初裏六句目。雜。戀の句。

○金鍔と　初裏七句目。雜。

○說　「古集之辨」には「人と和せざる底の世話」とある。世話は俗語の意。なほ金鍔の用語例は、俳諧だけの例をあげても枚擧に遑がないから省くが、要するに贅澤なこしらへたることは言ふまでもなく、虛榮のさまとして用ひられた例も多い。

○打越　一句を隔てた前の句。

恐らく一地方の用語にすぎないものであらう。金鍔の贅澤拵から、御氣に入り、權勢家等の異名に呼ばれるとは、さも有りさうな事である。たゞし下に「身の安さ」と言つて居るのからすれば、只御氣に入りだけなら差支ないが、權勢の武士などとは見難い。そんな身分では、さう樂々として居る筈はないからである、かつさうした權勢家なら、金鍔の大小を常用する位はあたりまへの事である。町人でも少し贅澤なものは金鍔の脇差をさしてゐる。元來渾名と言ふものは、あたりまへの事に對して附けるべきではない。金鍔などさせさうもない身分の者が、いつも金鍔をひけらかして居てこそ、渾名となる可能性を生ずるのである。かう考へると、この金鍔の渾名の主は、たゞ御伽役か何かを承つてゐる身分のもので、それが大變殿の御氣に入りなのである。例へば曾呂利新左衞門と言つたやうな格であらう。殿から拜領の金鍔の腰の物、それが大の自慢で遂々渾名に呼ばれて居る。さう言つた人物が考へられる。

前句との關係は、その御氣に入りの金鍔氏に、殿からしきりと迎が來るといふので、これも全く心附である。なほこゝに問題となるのは、殿の迎を受ける人は、前句では女である。然るにこゝでは男として附けて居る。そこに多少無理はないかといふ點である。元來附句は前句に附けるので、打越に附けるのではない。隨つてもはやこゝでは打越との關係は忘れてよいのであるが、連句では三句のわたりと稱し、前句だけでなく前々句からのつゞきがらが、特に顧慮

されねばならぬ事になつてゐる。それは專ら變化に注意を拂ふ爲である。しかもあまりに不自然な變化ではいけない。古風では※取成附などと稱し、前句の意を全く他にとりなしてつける事などもあり、むしろその技巧を誇りとしたりしたが、蕉風の連句ではもとよりそんな附方はない。この金鍔の附句も、古風の技巧的な取成附などとは全く異るが、三句のわたりとしては些か不自然の嫌を免れぬであらう。しかしこれは戀の句を轉ずる場合であるから、芭蕉も止むなくかうした附方をしたものと思はれる。

※あつ風呂好の宵々の月　兆

「熱風呂」には遊び人、伊達者、などの感じが伴ふ。それが「宵々」なので生活が現はれて來る。卽ち前句の人の位を見定めて、その生活の一面を描いたのである。

※町內の秋も更け行く明屋敷　來

「宵々の月」のうつりが「秋も更け行く」である。一昨日は三日月、昨日は四日月、今日はも

○取成附　例へば前句「重代のものを質に置きそめて」の重代を十代にとりなし、勅撰集の第十番目をもち出して「食はで居られぬ續後撰集」と附ける類。

○あつ風呂好　初裏八句目。秋季（月）。月の句。これは定座に出て居る。

○町內の　初裏九句目。秋季（町內の秋）。

○何を見る　初裏十句目。秋季（露）。

○二弟準縄　其角・嵐雪二人が連句について説いたものだといふ傳書。安永二年刊。

○花と散る　初裏十一句目。春季（花と散る）。花の句。定座に出てゐる。

○西行の歌　山家集「もろともに我をもぐして散りね花浮世を厭ふ心ある身ぞ」

う五日月。秋も更けて行くなと感ずるのである。「町内の秋」は前句を風呂屋通ひと見て附けたので、明屋敷は途中の景色であらう。風呂屋の窓から覗いたのでも宜い。それで秋の淋しさが一層深く身に入むのである。

何を見るにも露ばかりなり　水

「二弟準縄」中の嵐雪の傳に、これを寂の附方として、

傳曰、前句の明屋敷を見れば露ばかりなりと、たゞ寂にて附くる。これらも華やかなる句の續きたるをしづむる附方と知るべし。

と説いて居る。前句の明屋敷に、榮枯常なき世相を觀じたのである。金銹や熱風呂に浮き立つた句が、こゝに至つてすつかり沈潛の氣を帶びて來る。

花と散る身は西念が衣着て　蕉

「花と散る」は花の如く散る、花と共に散る、二樣に解されるが、それが西行の歌をふまへた

ものとすれば、當然花と共にの意とせねばならぬ。西念については、これを西行の師とする說があり、一句をすべて西行の事に解しようとして居る。しかし西行の師を西念とするのは、別に定かな據所があるのでもなく、又假に芭蕉が俗說のまゝに從つたとしても、「西念が衣着て」を直ちに西念の衣鉢をついだとするのも、あまりに理窟づめである。すでに『七部集大鏡』にも、西念を特定の人の名とするのを難じて居るやうに、これはむしろそこの山寺、かしこの草庵などに、有りふれた僧の名として見るべきであらう。蕪村の句

西念はもう寝た里を鉢叩

の如きも、もとより法然の弟子でもなく西行の師でもない。所謂西念坊。妙心尼の類である。一切有爲の世界を如露亦如電と觀じ、うき世を厭ふ心はやがて花と共に散つて出家した。一句の意竝に前句とのつゞきは、それだけに解して宜からう。西念が衣を着るとは、衣鉢を傳へるのでもなければ、急に出家した爲、しばし借着をするのでもない。西念坊が着るやうな衣を着ての意である。卽ち粗末な黑衣に身を包むのである。前句の無常觀から、直ちに遁世出離の境涯を附けたのは言ふまでもない。

こゝに季移りの事を附說しておかう。前句は秋季でこれは春季である。二句の意味をつゞけて解く上に甚しい不自然であるにちがひない。しかしこの場合、前句の露も附句の花も、共に

○七部集大鏡　七部集中の難解の句を註したもの。月院社何丸著。文化六年刊。
○西念を云々　「西念の名は世上にいかほどもあるものを、かく取離したる註者の心いかゞ覺束なし」
○西念坊。妙心尼　「古今短冊集」の蕪村の題文に「はては西念坊が夜の衾に糊せられ、妙心尼が醬の瓶にまつはる。恥づべからざらむや」と言つてゐる。これに卽ち有りふれたつまらぬ僧尼の通稱として用ひてゐる。なほ桃の首途「鳥と起きて[illegible]の鳴音　里紅」、「豆腐より西念坊は辛子あへ　若推」等の例は多く見られる。

虛として働いて居るので、現實に露が置く秋の野と、花が散る春の夕とを示して居るのではない。だから二句の連絡には少しも不自然を生じないのである。こゝは花の定座でしかも後に翻す事の出來ない場所である。そこへ前句が秋季である。さうした場合には所謂季移りの苦心が非常に要するので、そこに連句の形式的約束から生ずる不自然さもあるかはり、又作者のはたらきも見られるのである。例へば

道心の起りは花のつぼむ時　去來
能登の七尾の冬は住み憂き　凡兆

の如き、春季から急に冬季に移つて居るが、前句を過去の事件と見て附けたので、その間少しも連絡に差支がない。これなどは別に冬季の句を附けねばならぬ場合ではないが、凡兆が季移りのはたらきを見せたのである。連句の鑑賞上には、又かうした方面の事も注意する必要がある。

木曾の酢莖に春も暮れつゝ　兆

前句の發心者を諸國行脚の雲水と見て附けたのである。丁度木曾路のあたりを廻る頃、春も暮れようとしてゐる。その季節の推移感を、酢莖の味で現はした所が面白い。素堂の句

○道心の　これも「猿蓑」に見える附合である。

○木曾の　初裏十二句目。春季（春も暮れつゝ）。

○酢莖　「七部集大鏡」に「酢莖の事は成美曰、下學集飮食門。莖、スイクキ、酢莖は青菜に溜酢を加へて二十日程ねかす。納豆の如く白み引きねばり出づるを飯の上に置きて食ふ。木曾福島の奥御嶽山の邊りにてする事なり」とある。今京都で產するものは蕪菁を麴漬にしたもの。冬から春の始にかけての食物である。

春もはや山吹白く苣苦し

ら、苣の味に暮春の情を寓したので、食物にはかない季節感が深いものである。

歸るやら山陰傳ふ四十雀　　水

「婆心錄」に「故鄕を偲ぶ情をのべたり」とあるのは宜い。山陰を傳ひ飛ぶ四十雀を見て、彼も故里に歸るのであらうかと歎ずる意には、自ら望鄕の念禁じ難いものがある。前句との關係は、木曾路に春を暮らした旅人の情を寄せたのである。酢莖の味に早くも春の暮れた事を驚き、家を離れてすでに數月なるを思つては、小鳥の歸るのを見てすら心を傷ましめるのである。

柴さす家の棟をからげる　　來

「柴さす」とは如何なる事をいふのか、諸說があるけれども定かでない。思ふに板屋根の板を新に仕替へる事を「板をさす」といひ、その板を「さし板」といふと同じく、藁屋根の所々を綴ぢからげる爲の柴を、新にしかへる義ではあるまいか。なほ確な事は他の用例を知るか、現在

○春もはや　前句續き。其季續く。

○歸るやら　名殘表一句目。春季四十雀歸る」。

○柴さす　名殘表二句目。雜。

○諸說　「附合考」には「田家の屋根葺には家建てゝ柴をならべ、その上へ藁にて葺くなり。屋根の裏夜の替りなり。然ればその柴をさすなるべし。棟をからげる竹など棟には繩にて結ぶならむ」。「婆心錄」には「柴さす家と云ふは柴の庵の事にて、さすは葺く事也。しはとは小なる木草の葉の惣名。柴も芝も同義にて草の庵と云ふも同じ」とある。又幸田露伴氏の「猿蓑抄」にも諸說がある。

農村などで用ひられる言葉を調べるか等によつて定めねばならぬが、ともあれそれが藁葺の屋根を繕ふさまである事は明かである。

句は雜であるが、前句との關係から、春の農閑期などを利用して、屋根の修繕をして居る山家の長閑な氣分が味はれる。

　處々に雉子の啼き立つ　野坡
　家普請を春の手透に取附いて　同

に、些か似た趣である。たゞしこの「柴さす家」は、さしてはたらいた附句ではない。

　冬空の荒になりたる北風　兆

屋根の修繕を北風の荒に備へる爲としたので、平明な心附である。

　旅の馳走に有明し置く　蕉

「有明し」は頭註にあげた諸例によつて知られる通り、有明行燈等と同じく終夜點じて置く燈

○處々に　「炭俵」の中にある附合。

○冬空の　名殘表三句目。冬季（冬空）。

○旅の馳走　名殘表四句目。雜。

○有明し　用例

風や戸をぬけて來る有明し　呂房
（淡路島）

尙「渡鳥集」には中七を「戸を明けて來る」と誤つて居る。

その餅つきの曉の戀　支考
鷄はなく臺所には有明し　先放
（渡鳥集）
春の夜や鼠の消やす有明し　[illegible]
（何袋）

○置く　原本は「をく」と假名書しである。

○すさまじき　名殘表五句目。秋季（すさまじ）。戀の句。

火である。旅人へのもてなしとして、せめて有明しの光にでも、寒夜の旅情を慰めようといふ宿の主の心づくしである。前句の荒模様をうけて、旅亭の情を附けたのである。

『三冊子』に「馳走の字さび有り。あれになりたると心のしをりに、旅亭のさびを附けて寄する也」と說いて居る。心のしをりとは何を意味してゐるか、これだけではやゝ解し難いが、思ふに荒模樣になつた空を氣遣ふといふ中に、旅人の心細い情を看取して、こゝに旅亭のさびを附けたといふ意であらう。馳走の字にさびがあるとは、それで食物・寢具などは粗末ながら、せめて燈火でも明るくしてもてなさうといふ餘情が味はれるからである。卽ち田舍めいた旅亭の侘しさと、旅人をいたはる亭主の心づかひとが、その中に自ら籠つて來る。

※すさまじき女の智惠もはかなくて　來

『道志抄』に「前句の旅亭に何ぞをかしき洒落やあらんと探りて、扨はその旅亭の女に言ひかはして、今宵忍び逢はんと約せしその女の、男を思ふより有明しを置きたる也と見て、働きある女なれども流石に女の智惠ははかなきものにて、有明しのある故に、忍び逢ふ事の人目堤の出來かねたると思ひよりて附けたる也」と說いてある。甚だ二句の間の文字の筋を辿つたやう

○何思ひ草　名殘表六句目。秋季思ひ草。○戀の句。

○思ひ草　露草・女郎花・龍膽・薄・茅・南蠻煙草・紫苑・萩・撫子等の異名。

な解し方である。しかし去來は一體眞摯な質で、師翁の教は一々服膺したが、これを實際の作品として表現するには才が乏しかつた。それで芭蕉に教へられた道理を、そのまゝ筋書にしたやうな句を屢々作つて居る。作品の中にうまく消化しきれなかつたのだ。彼の作を解する場合は、だからかなり理づめに頭を働かさねばならぬ事がある。『逆志抄』の解の如きも、必しも排する事は出來ないのである。たゞ有明しを置いた爲忍び逢へなかつたとまで說くのは、あまりに文字の筋を辿りすぎては居るまいか。男に思ひを打明けかねた宿屋の女中が、せめて有明しの優遇ぶりにでも、自分の意中を悟らせようとする。その淺はかな智慧といふくらゐに解したい。

すさまじは無興。荒涼等の義で、女の思慮の淺さを言つた言葉ではあるが、同時にこれを季の詞として用ひたのである。冷じは冷かと同じく、連歌俳諧共に秋季の詞で、古風の俳諧などでは鬼や地獄のすさまじさまで季語にしてゐる。この場合もやはり古風の用ひ方に類して居り、もとよりあまり好んですべき事ではないが、芭蕉もこの程度までは許したのであらう。

何※思※ひ草狼のなく　　水

思ひ草は頭註にあげた通り、諸種の植物の異名に用ひられて居るが、こゝはとにかく秋季の

○萬葉集の歌　卷十、人丸「道のべの尾花がもとの思ひ草今さらになに物か思はむ」

○かき消ゆる　この附合は元祿二年六月芭蕉が羽黑山本坊で興行した歌仙中にあり、其角の「華摘集」に出づ。なほこの例「芭蕉俳諧研究」中の小宮豐隆氏の追記による。

植物たるべき事は勿論である。たゞしこの句に於ては、たゞ戀の詞として用ひられただけであるから、實體の何であるかは別に詮議する必要はない。

一句の意、前句とのかゝりについては諸說區々である。「變心錄」に山家育ちの女が大聲上げて恨み泣きするのを、狼のやうな聲だと男が笑ひつゝ宥めるさまだと解して居る如きは、もとより取るに足りない愚說である。又一筋に思ひつめた女が、物凄い道も厭はずして通ふさまだとも解され、それには更に萬葉集の歌を引いて、思ひ草の典據とする說もある。この萬葉の歌に基いて解く說の如きは、就中聽くべきかに見える。しかし「何思ひ草狼のなく」の一句を、虛心坦懷に誦する時、「何を戀ひ思つて狼があんなに啼くのだらう」と解するのは、最も自然ではなからうか。たゞ狼の戀があまりに殺伐突飛なやうに感ぜられるので、或は狼を比喩とし、或は通ふ途中の光景とするのであるが、すでに芭蕉にも

かき消ゆる夢は野中の地藏にて　露丸
　妻戀ひするか山犬の聲　芭蕉

の作がある。俳諧で取扱ふ動物の戀は、何も猫に限つた事は無いのである。

よつて句解を試みると、前句のすさまじき女のひゞきが狼の聲となり、一句の戀の情を思ひ草でうけたのである。要するに前句の無智な女のすさまじき戀を、狼の戀にひゞかせたと見る

べきであらう。この場合前句との意味の連絡の如きは、多く顧慮する必要はない。女が戀に淺はかな智惠をめぐらして居ると、遠くで狼の啼く聲がする。その物凄い聲も、女の心には相手を呼ぶ戀の合圖かと思はれる。まづその位の程度に解しておいて宜からう。

この戀の句は二句とも尋常な趣向ではない。特に一卷の模樣として工夫を凝らしたのかも知れないが、去來の戀はあまりに理づめにすぎ、野水の句附はむしろ淺露に失し、共に佳作とは評し難い。

夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉

萱ねは萱に同じ。萱ねの御廟は萱に埋もれた御廟である。前句の凄涼たる氣に、荒廢した御廟の景を以て應じたのである。

※人も忘れし※赤そぶの水　兆

御陵のほとりに古い泉か井がある。昔は何の清水などと呼ばれた名水も、今は水銹が赤く浮

○夕月夜　名殘表七句目。秋季（夕月夜）月の句。これは定座より前に出てゐる。

○人も忘れし　名殘表八句目。雜。

○赤そぶ　赤澁、赤い水の銹をいふ。

○うそつきに　名殘表九句目。雜。

○又も大事の　名殘表十句目。夏季（鮓）。

いて、全く人にも忘れられてしまつて居る。さういふ情景である。世に埋もれて御廟守る人、人に忘れられて殘る赤澁の水、二者の感合は說かずして明かであらう。

うそつきに自慢言はせて遊ぶらん　水

前の赤澁の水の來歷について、何か出鱈目を誠しやかに述べ立てて、得意になつてゐる。それを「ふん成程」、「中々君はよくしらべたものだね」等と、合槌までうつて煽て上げ、腹の中では馬鹿にしながらなぐさんで居るのである。前句との間に、にほひで付いた所は感ぜられない。輕い滑稽の附である。

又も大事の鮓を取出す　來

「逆志抄」に「前の嘘つきに自慢言はせて遊ぶ人が、大事の鮓ながらその嘘つきに振舞はんと取出す附也」とあるのは、一わたり通じた說であるが、「又も大事の」といふ語氣は、やはり嘘つき自身の事について言つたと思はれる。『婆心錄』に「自慢するは天狗の茶人也。朋友の來たる

○口から高野　「口は災の門」と同じく、口舌の爲に自ら災禍を招く意の諺、高野へ登るとは出家する義。

○堤より　名殘表十一句目。夏季（青田）。

折から、何と皆天狗顏しても正眞の源五郎鮒は拜むまい。こちにはしかも二十年の古鮓の寶物があると言ひければ、それは閉口、しかし咄ばかりは有難からず。何卒一喉開帳し給へと言はれて、口から高野へ登りかけ、さらばと調じて出すを見て、此の間も人に乘せられて振舞はれ、今日も亦まあ大事な鮓を取出すと、家の子などの思ふさま也」と說いたのが近い。

蕉風の連句としては、あまり感心した附句ではない。前句の輕いをかしみから、その調子に乘りすぎたのであらう。

堤より田の青やぎていさぎよき　兆

「堤より」のよりは比較の言葉とも、起點を示す助詞とも見られるが、一句に廣く見渡した趣があるので、「堤の所からずつと」の意に解すべきであらう。

前句とのかゝりは、『一弟準縄』に景色の附とし、「前句は鮓など取出してもてなす體なれば、堤より田の青やぎて酒飮むべき景色にて、前句をつなぐなり」とあるので宜い。大事の鮓といふに、待遇ぶりを附けたので、見晴しのよい二階座敷などに、客を請じたさまとしたのである。

舌を酸く刺戟する鮓の味と、一望萬頃の青田の綠と、その間一脈爽凉の氣が相通じて居る。

なほ『婆心錄』などの如く、堤の上あたりから青田の景を賞しつゝ、度々辨當包の餅を取出すと解する說もあるが、それでは「大事の餅」が利かない。辨當に携へるくらゐであれば、取出すのはあたりまへである。大事のには珍重し惜しむ風情がある。それを閑却してはならない。

加茂のやしろはよき社なり　蕉

一句の意は極めて平明、前句に附く所は極めて精勁。流石に芭蕉の大手腕を想はせる。『俳諧有耶無耶關』にこれをやり句だと言つて居るが、その輕く附け流したさまについて、さう說くならそれでも宜い。しかしやり句としても、これはなみ〱のやり句ではない。芭蕉にして始めてなし得る底のやり句である。

前句とは賀茂神社あたりの景色としてつゞいて居るのだが、附味の中心は、見渡す青田のいさぎよい感じをうつして、「加茂のやしろはよき社なり」と直截簡明にひゞかせた所にある。その間に盡きない妙味が存する。

○加茂の　名殘表十二句目。雜。

○俳諧有耶無耶關　芭蕉の遺書と傳へるがもとより信ずる事は出來ない。たゞしその說にはとるべき點もある。明和元年刊。

○やり句　前句がむつかしくて附け難い場合、輕くすら〱と附け流すこと。

○物賣の　名殘裏一句目。雜。

○雨のやどり　名殘裏二句目。雜。

※物賣の尻聲高く名のりすて　來

前の賀茂の社は、上賀茂下賀茂いづれにも見られるが、この句とのつゞきでは、民家なども多い下賀茂あたりのさまがおもはれる。句意は物賣が呼び聲の尻を長く引かず、高く短く言ひ切つて行くといふので、下賀茂あたりの寸景として前句につゞく。而して前句の簡明に言ひ下した齒切のよさが、この尻聲高く名のり捨てるのにひゞいて居る。前句を一度突離して、あとに殘つた氣分をすぐにつゞけたやうな附方である。

※雨のやどりの無常迅速　水

しばしの雨舍りに、同じ軒下に集つた二三四五の人、雨が晴れると忽ち東西南北と別れ去つて、あわたゞしくも會者定離の相が示される。それを無常迅速と言ひ切つたのである。句のつづきは前句の物賣を、雨舍りから出て行つた人と見たので、名のり捨てた呼聲のみ殘つて、その人の姿はもはやどこへ行つたか分らない。そこに無常を觀想したのである。

この句は無常といふ詞で釋教の句になつて居る。打越は賀茂の社で神祇である。普通神祇と

○晝ねぶる　名殘裏三句目。夏季青鷺。但し古くは青鷺を夏季の詞としてあげたものがなく、尤も青鷺だけで夏季の句とした實例が見當らぬやうだから、或は芭蕉時代には雜の取扱であつたかも知れぬ。蕪村時代にはもはや夏季の題となつてゐる。

釋教とは三句以上隔てねばならぬ定めで、かく接近して附ける事は許されないのであるが、芭蕉がさうした從來の法式に拘泥しなかつた事が、この附句によつて明かに示されてゐる。

※晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　　蕉

水邊に立つたまゝ、うつら〱と眠つて居る青鷺の姿に、悟りすました安住の尊さを感じたのである。前句の無常迅速の觀想から、安心解脱の心境に轉じた事は言ふまでもない。芭蕉の發句に

稻妻にさとらぬ人のたふとさよ

といふのがある。この附句もまた無爲無念の境界を尊んで居る。前句とのつゞきは、雨の舍りに無常を觀じた人が、その雨も無情も知らぬげに眠つて居る青鷺を見てゐるさまとして宜い。もとよりこゝでは句意の連絡より、「無常迅速」にひゞく「たふとさよ」の心境が主體である。

この一卷を通じて芭蕉自身の句に、

金鍔と人に呼ばるゝ身の安さ

花と散る身は西念が衣着て

書ねぶる青鷺の身のたふとさよ

と、二度まで身の字を使つて居る。それは恐らく偶然であらうが、所謂指合去嫌から言ふと、三十六句の間に三句も同字を用ひるのは、たとひ句去の法式には觸れないとしても、まづ嫌ふべき事にちがひない。然るに芭蕉が自らかうした例を示してゐるのは、やはり式目に拘泥しない態度を特に明かにしたのかも知れない。

しよろ〳〵水に蘭のそよぐらん　　兆

諸註多くその場の附、卽ち青鷺の眠つて居る場所の景色を附けたとして居る。現實的意味の連絡としてはそれでよい。しかしその象徵的意味に於ては、更に深い所でつながつて居る事を看取せねばならない。たゞうつら〳〵と居眠る青鷺、水の流れにまかせて靜にそよぐ蘭、それは共に無我無心の姿を象徵したものではないか。二句は決して寫生的な景色としてつながつて居るのではない。この相通じたにほひと象徵とを感得して、始めて正しい理解は得られる。

糸櫻腹一ぱいに咲きにけり　　來

○句去　同字は三句去るのが法。

○しよろ〳〵　名殘裏四句目。夏季蘭。たゞしこれも古句では蘭の花・蘭を詠むは夏季だが、蘭だけで夏季とした例が見當らぬ。或はこれも雜の取扱かも知れない。

○しよろ〳〵水　ちよろ〳〵流れる水。

○糸櫻　名殘裏五句目。春季（糸櫻）。花の句。こゝは花の定座である。

一巻もすでに終に近づいた。長閑な景色を以て前句に附けたのである。『要心錄』に「晴天無風のさま」と言つたのは、よく言外の情を得て居る。「腹一杯」といふ卑語も、この場合思ふ存分に咲きほこつたさまを形容して、誠に適切である。

こゝは花の句をすべき所であるが、櫻を以てこれに代へて居る。これについて『去來抄』に、去來と芭蕉との問答がある。芭蕉は去來が「畢竟花は櫻をのがるまじ」といふ言を肯定して、「さればよ、古へは四本の内一本は櫻なり。汝が言ふ所も故なきに非ず。とかく作すべし。されど尋常の櫻にてはかはりたる詮なからん」と答へた。よつて去來はこの句を作つたのであるが、芭蕉は「何我がまゝなり」と言つて笑つたといふ。右の如く百韻では四花中、一を櫻で代へる例はあるが、歌仙では僅に二花であるから、その一を櫻で代へる例はないのである。然るに芭蕉は、あへてこれを許して居る。こゝにも芭蕉が古來の法式に拘らなかつた態度が見られる。たゞし櫻を正花に用ひたのは、芭蕉一代中でもこの一巻だけであるといふ。

春は三月曙のそら　　水

爛漫たる櫻花に、紅雲搖曳する曙の空を配して、一入その美しさを榮えさせたのである。「曙

○古へは云々　百韻では四花八月（一巻の中花の句が四、月の句が八あるべき定め）で、四本とはその花の句四をさす。その中一句は櫻を以て代へた。

○正花　連句の作法の條（五九三頁）參照。

○春は三月　揚句。春季（春は三月）。

○曙のそら　枕草子「春は曙、紫だちたる雲の云々」

の空」には、『枕草子』の文句をふまへた心もちが幾分あるのだらう。揚句としては、極めて穏やかな常態の句である。

○蛭子講の巻　「炭俵」の中にある歌仙。

○神無月　「炭俵」は元禄七年の刊行だから、これは元禄六年十月と推定される。

蛭子講の巻

※神無月廿日深川にて即興

振賣の雁あはれなり蛭子講　芭蕉
降つては休み時雨する軒　野坡
番匠が樅の小節を引きかねて　孤屋
片禿山に月を見るかな　利牛
好物の餅を絶さぬ秋の風　野坡
割木の安き國の露霜　芭蕉
ウ
網の者近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊に軍の大事なり　芭蕉

淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡
明けしらむ駕籠挑灯を吹消して　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上置の干葉刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉
絹買の七ツ下りをおとづれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
この島の餓鬼も手を摺る月と花　芭蕉
砂にぬくみのうつる靑草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹きとられたる笠取りに行く　利牛
川越の帶しの水をあぶながり　野坡
平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へゐざらせて　利牛

鹽出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立つる京すまひ　芭蕉
又沙汰なしに娘よろこぶ　野坡
どたくたと大晦日も四ツの鐘　孤屋
無筆のこのむ狀の跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらひ　野坡
壁をたゝきて寢せぬ夕月　芭蕉
風やみて秋の鷗の尻さがり　利牛
鯉の鳴子の綱をひかふる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行き戻り　芭蕉
目黒参りのつれのねちみやく　野坡
どこもかも花の三月中時分　孤屋
輪炭の塵を拂ふ春風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛　各九句

振賣の雁あはれなり蛭子講　　芭蕉

振賣といへば行商の一ではあるが、賣り歩く品はどうせ大したものではない。貧しい小商人の業である。恰も蛭子講の日に當つて雁を振賣して歩くものがある。商家では商賣の緣起を祝つて、百兩。千兩などと高値をつけて、景氣の宜い取引の眞似をして居る折柄、その振賣の雁が特にあはれに感ぜられたのである。前書にある通り、これは席上振賣の聲をきいて、卽興に發した句である。

なほ此の句を解する上に、左に揭げる吟笑宛の芭蕉の書簡は、參考とするに足るであらう。

追而申入候。此中歌遊ケ夷講大勢客呼び候へば、參候而見物致候樣に申越候故、愚身が右の中へさし出候てはいかゞに候へども、見物に來よと申候故、下心いかゞしく與風參り候て、一句

ふり賣の雁あはれなり蛭子講

右の句を致して歸り申候。とかく雁になりてもいろ〳〵有り、大勢に賞味せられ喜ばす雁もあり、振賣にせらるゝ雁もありと申事ばかり。又々あとより可申承候。以上。

これによると、夷講の賑かな人々の中に交つてゐる芭蕉が、自分自身のわびしい姿を、振賣

○振賣の　發句。冬季　蛭子講。
○振賣　賣物の名を呼びつゝ賣りあるくこと。
○蛭子講　舊曆十月二十日に商家で夷神を祭り、親戚知友を招いて宴を開くこと。「歳時記栞草」に「蛭子の像前に於て賓主相混じ、諸般器物に至るまで假に價を定む。或は千兩或は萬兩、賣る者諾する時は必ず手を拍つ。これを夷講の賣買といふ。一時酒興の戯なり」とある。
○吟笑　書簡の原文の「吟」は書體明ならず、從つてよみも不確である。書簡の眞贋は別問題として、これも、句作の參考とするに足るものと思はれる。

○降つては　脇。冬季　時雨。韻字留。

○番匠が　第三。雜。て留。

○番匠　大工。

○片禿山に　初表四句目。秋季（月）。月の句。

の雁に比したやうな心もちが見られる。

降つては休み時雨する軒　野坡

降つてはをやみする時雨に濡れまいと、軒下傳ひに「雁や、雁や」と賣り歩くのである。發句のあはれな風情に、笠も冠らぬわびしい振賣の姿を添へて居る。

番匠が樅の小節を引きかねて　孤屋

大工小屋のさまである。軒には時雨が降りみ降らずみ、淋しい音を立ててゐる。樅の硬い小節を挽き切りかねた大工が、腰を伸して雨を眺めて居る。そんな情景である。侘びしい情はここまで引いて來てゐるが、發句・脇が戸外の振賣であるのから轉じて、屋内に立働く大工とした。それが第三の轉である。

片禿山に月を見るかな　利牛

片禿山は片側だけ禿げた山である。番匠が縦の小節を挽きかねて居る中に日も暮れた。向うの片禿山にはもう月が淡く光つて居る。「おや、もう月が出たな」と、鋸の手を休めて見上げて居るのである。第四は輕く附けるのが常法である。

好物の餅を絶さぬ秋の風　野坡

片禿山の月に秋風を配し、その月をながめ風に吟ずる人を附けた。風月を樂しむ人と言へば、まづ酒を愛するのが普通であるのに、これは些か風變りの下戸である。この風變りが前句の片禿山からのうつりである。幸田露伴氏の『炭俵抄』に「片禿山の月見、何となく偏したることなれば、底心に偏したる味をもて附けたり」とあるのは、よく二句のうつりを解して居る。

割木の安き國の露霜　芭蕉

はや晩秋の霜が置いて、そろ／＼薪の用意が必要になる頃だが、この地方では薪の値が安いので、寒さを恐れる心配もないといふのである。前句に安易な生活の趣があるので、そのにほ

○好物の　初表五句目。秋季（秋の風）。

○割木の　初表六句目。秋季（露霜）。

○露霜　ツユジモ。水霜ともいふ。晩秋に置き初める霜をいふ。

○網の者　初裏一句目。雜。

○それに云々　この說「婆心錄」に見える。

○或は　この說「七部集大鏡」に見える。

ひを以て附けて居る。この句の薪を惜氣もなく焚いて、前句の餅をふんだんに作るのだと解いては、極めて淺薄な心附になつてしまふ。かくては二句の間に映發する情趣は、全く解せられない。

ウ　※網の者近づき舟に聲かけて　利牛

「婆心錄」に「近づき」は「近づく」の書損じであらうと言つて居る。さうすれば意は聞え易いが、勿論妄りに原本を改めるべきではない。又「近づき舟」を一語として解する說もある。句の形はその方が調ふが、「近づき舟」といふ語もあまり耳なれない。姑く「近づき、舟に」として解したい。

岸に網打つ者、川に舟を操る人、相近づいて挨拶するさまである。前句に暮らしの樂な趣があるので、その地方の人々の穩やかな人情を附けて居る。氣の荒い漁者、船夫までにも、人情の親しみが見られるのである。意味のかゝりは、聲をかけ合つた二人が、薪が安くて冬も暮らしよい事など話し合ふさまとして宜い。

從來の諸說多く前句を割木舟とし、※それに漁船が近づいて魚を賣るのであるとか、※或は割木

舟が網の中を乘切らぬやうに注意するさまとか解して居るが、それはあまりに句面の意味のみを辿りすぎた解であらう。『炭俵』は輕みを專らにした集であるとはいへ、その輕みは日常茶飯事の間に詩趣俳味を求め、徒らに高雅優麗の調に執しない謂であつて、決して淺露平俗を意味するのではない。安い薪で餅の釜を焚き、漁船が割木舟に魚を賣附けるのでは、平易は平易であらうが、平易な解卽ち輕みではもとよりない。かくては蕉風連句の妙味は遂に沒せられてしまふのである。

星※さへ見えず二十八日　孤屋

陰曆二十八日の闇、その上星さへ見えぬといへば、あや目も分たぬ暗さであらう。前句の「聲かけて」を注意する聲と見、暗夜舟行を咎める網の者のさまとしたのである。これは前句の餘情を探らず、むしろ表面的な意味だけでつゞけてゐる。廿八日に『※土佐日記』を引く必要はあるまい。

ひ※だるきは殊に軍の大事なり　芭蕉

○星さへ　初裏十一句目。雜。

○土佐日記　「七部集大鏡」には土佐日記正月二十八日の條に「今夜雨やまず、今朝も」とあるのを引き、「星さへ見えずとは雨をかくしたるなり」と言つてゐる。

○ひだるきは　初裏十二句目。雜。

○曾我の仇討　『古集之辨』の說。
○本願寺合戰　『七部集大鏡』の說。
○淡氣の　初裏四句目。冬季（雪）。

『二弟準繩』に

傳曰、前句は只暗夜のすがたなるを、附句より夜討と定め一句を攄む。即ち名人の場なり。云々

と說いて居る。それで解は十分であらう。前句の何となく物々しい暗夜のさまに、夜討の情を探り得たのは流石に芭蕉である。この夜討を曾我の仇討であるとか、本願寺合戰であるなどと定める必要はもとよりない。

淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡

「淡氣の雪」は沫氣の多い雪、即ち沫雪であらう。すると正しくは「沫氣」とあるべきである。句解は『婆心錄』に、「前句兵粮盡きし籠城勢の戰ふ氣もなく、手を束ねたる體と見立て、寒天の難義を附けたり。淡氣の雪に雜談もせぬとは、淡雪に甲冑そほ濡れて寒氣肌に入み、物さへ言はで衆軍凍て渡りたるを、哀れと見たる主將の情を述べたり」とある。主將の情と限つたのには賛し難いが、ほゞ要を得た解であらう。

前々句から前句へのつゞきは、腹がへつては軍は出來ぬと、夜討にかゝる前の用意であるが、

これは籠城久しきに亙つて、すでに兵糧も盡きかけ、寒氣さへ募るといふ陰慘な情景へ一變して居る。雜談をかはす元氣さへなく、ひそまり返つて居る士卒のさまである。

※明けしらむ※駕籠挑灯を吹消して　孤屋

前句に何となく騷いだあとの靜けさ、――例へば今まで仇口たゝいてはしやいでゐた連中が、しやべり勞れていつとなく靜まつてしまつた。そこへ雪が降つて來るといつたやうな淋しみの風情を見て附けて居る。

夜明を急ぐ駕籠である。折から雪がチラ〳〵と降り出した。いつか四邊は白々と明るくなつた。駕籠先の提灯をフッと吹消すと、妙に白けきつた感じがして、今まで「ホイコラ〳〵」と元氣のいゝ懸聲を出してゐた棒組も、だまりこくつてたゞ道を急ぐだけである。そんな情景が思はれる。駕籠の主は定めなくとも宜いかも知れぬが、この夜が明けた時の白けた感じからいふと、何となく廓から朝がへりの客を思はせる。歡樂のあとの淋しさといつたにほひがある。

※肩癖にはる※湯屋の膏藥　利牛

○明けしらむ　初裏五句目。雜。
○駕籠挑灯　原本「籠挑灯」とある。駕籠の前をてらす挑灯といふ說に從つて今改めた。籠に紙を貼つた提灯とか、箱提灯の誤寫などといふ說には賛し難い。駕籠を籠とのみ書くのは古書には多い例である。
○肩癖に　初裏六句目。雜。
○肩癖　痃癖が正しい。肩・頸などの筋が凝つて痛むこと。
○湯屋の膏藥　昔は風呂屋・床屋などで簡單な膏藥類を賣つたものである。

前句を駕籠舁の休む體と見たのである。夜通し駕籠を舁いで凝つた肩の所へ、いつも用意してゐる湯屋の膏薬を貼るのであゐ。棒端などのさまであらう。駕籠舁から肩の凝りとは、あまりに意がつき過ぎて餘情に乏しい。

※上置の※干葉刻むもうはの空　野坡

前句の肩癖に心の鬱して晴れない情を捉へ、これを戀に轉じたのである。しかもその戀に惱む主は、湯屋の膏薬ぐらゐを貼つて居るのだから、決して上流の人ではない。そこで上置の干葉を刻む下女を附けたのである。前句とのかゝりの要點は、結局右に說いた所に存する。この句と次の句との關係は、「去來抄」に位の好適例として說かれて居るが、前の「肩癖に」とこの句の關係も、また位を以て十分說き得られるであらう。

下女に片肌を脫がせ、肩癖に貼つた膏薬を示さねば、二句の連絡が說き得られぬと考へる如きは、蕉風連句の神髓を遂に了得せざるものである。

※馬に出ぬ日は內で戀する　芭蕉

○上置の　初裏七句目。雜。戀の句。
○上置　連句概說六四頁參照。
○干葉　續五論・去來抄等には「干菜」とある。
○馬に出ぬ　初裏八句目。雜。戀の句。

この句が前句の位を定めて附けられた事は、『去來抄』に詳しく說いて居る通りである。前句を問屋。宿屋等の下女と位を定めたから、その相手に馬士をもつて來たので、日頃は馬追に出て女と語る暇さへないが、今日は馬を休んだので積る思ひを語るのである。支考は『續五論』に

卑しき馬かたの戀といへど、上置の干菜に手をとゞむるといへば、針をとゞめて語るといへる宮女の有樣にも、心の花はなど劣り侍らん。かくの如きは戀の本情を見て、戀の風雅をつけたりといふべきか

と評して居る。

絈買の七ツ下りをおとづれて　　利牛

前句「馬に出ぬ日」に田舍の民家の趣を見、「內で戀する」に暮待つ風情を探る。この句の附味は自ら知られるであらう。紡績の業は昔は民家の手內職にしたもので、纑買がおとづれる夕暮頃の情趣は、前句の暮れるを待つ戀心と、幽かなそしてデリケートな調和を保つて居る。

○去來抄に云々　その說については連句概說五六四頁參照。

○絈買の　初裏九句目。雜。

○絈買　絈は又纑の字を用ふ。糸を枠木にかけて一とかゞりにしたのを纑糸といひ、纑買はこの纑糸を家々から買集めて織屋に渡す仲買人である。

○七ツ下り　今の午後四時過。

○塀に門ある　初裏十句目。雜。

○この島の　初裏十一句目。春季花。花と月とを、對等に用ひると、春季にも秋季にもならず、雜とすべきであるが、次の附句は春季の句でついで居るので、前句も自然春季に取扱はれるのである。月の句。こゝは花の定座である。

塀に門ある五十石取　孤屋

五十石取といへば小身の武士である。妻や娘は家計を助ける爲に、紡績の手内職もやつて居るだらう。ずつと塀が續いた屋敷長屋、所々に小さな、それでも武家の門口らしい門が立つてゐる。さうした暮近い屋敷町を、緡買が「緡買はう」とふれながら通つて行く。淡い淋しさが二句の間に通つてゐる。前々句と前句とのかゝりから、すつかり情景を一轉したのも手柄である。

この島の餓鬼も手を摺る月と花　芭蕉

この句は前人も多く說いて居るやうに、前句の「塀に門ある」といふのを、風を防ぐ爲の石塀圍等と見て、島役人の屋敷と思ひよせたのである。「手を摺る」は崇め尊ぶさまで、餓鬼の如き島人も、島役人に深く歸服して居るのである。「月と花」は具象的な月と花を意味するのでなく、島役人の仁政を仰いで、これを月とも花とも稱へて居るといふので、言はゞその仁政の象徵である。

○飜す　月花の句をその定座より後に出すこと。連句の作法の條（五九一頁）參照。

○裏の終　こゝを折端「ヲリハシ、又はヲリハ」といふ。

芭蕉の附句としては附味に深みがないやうであるが、これはこゝに月と花の句を同時にしなければならぬ爲、止むを得なかつたのであらう。卽ちこの裏に出づべき月の句が、こゝまで飜されて來て、しかも次は裏の終だからもうこれ以上飜す事は出來ない。かつこゝは花の定座でこれも飜す事は出來ない。一體月花の句を同時にする如きは、もとより强ひて好むべき事ではないが、かうした場合は仕方がない。月花を同時にした句の例は、蓼太の『俳諧附合小鑑』などにあげてあるが、例へば

　　婆々に渡せば赤兒泣きやむ

こゝもとは花の彌生も蛸の月

　　枕も二つ鴛鴦にならべる

浮舟をまはす花の瀨月の淀

　　曲突焚きつける妻の尻輕る

花の露月の鏡もそれながら

等の如く、月花はいづれも句作の用として輕く取扱はれてゐる。ともあれこれは功者のすべき事で隨つてこゝも特に芭蕉が附けたのである。

○砂に　初裏十二句目。春季（草青む）。

○新畠の　名殘表一句目。春季（雪解）。

○新畠　原本「新畠」とある。右傍の線は音讀すべき事を示すのである。

砂にぬくみのうつる青草　　野坡

前句は仁政に浴した島民のさまである。その中に自ら和平沖融の象が漂つて居る。春の日は暖に照つて吹く風も柔かに、濱邊の草も青んだ。その草のぬくみは冷かな砂にさへ移つて行く。それは春日和煦たる島の景趣で、しかも直ちに前句和沖の象を、そのまゝ具象化したものではないか。これを單にその場の景附と看過する如きは、作者の苦心を思はないものである。

新畠の糞もおちつく雪の上　　孤屋

前句の春暖の氣漸く萌したさまを承けたのである。今まで凍てついてゐた砂にぬくみが通つて、雪もそろ／＼解け始めた。新畠に施した寒肥料も、雪が解けたので土に落ちつくといふのである。砂にぬくみがうつるので雪解を附けるのは、あまりに附き過ぎた嫌がある。

この句の季語は「雪」であるから、一句としては冬季と見ねばならない。しかし前句は春季であり、かつ春季の句は三句は續かねばならぬのだから、勿論こゝに冬季の句を附ける事は出來ない。即ち前句との關係上、自ら雪解の句と取扱はれるやうに句作りしたのである。そこは

○吹きとられ　名殘表二句目。雜。

○川越の　名殘表三句目。雜。

○帶し　帶しはりの略で腰腹のあたりの骨のなくて帶をしめる箇所をいふ。用字類抄には䏶の字を宛ててある。用例

禁好物を御配膳〔テナガ〕に問ふ　風國

汗取に帶仕の下は紙を敷き　丘粒

（陸奧千鳥）

村雲と見る間に月は出でしほの　芬醉

帶しあたりをさする抑灸　有佐

（湯島集）

此か作者の手柄とした所であらう。

吹きとられたる笠取りに行く　利牛

前句早春の趣と見て、まだ風寒い景を附けたのである。川沿ひなどの開墾地に、まだ雪が斑に消え殘つて居る。通りかゝつた旅人が、笠を川風に吹き飛ばされて、慌てて拾ひに行くといつたやうな光景。輕く景を以て附けて居る。

川越の帶しの水をあぶながり　野坡

「川越」は特に川越人足を言ふのではない。たゞ汎く川を越す事、又越す人である。「帶し」については、前人妄解を試みたものが多いが、これは毫も難解とすべき言葉ではない。江戸時代の文獻には頭註に掲げた通り用例が多く、今日もなほ方言として存在してゐる。

句意は川を越す旅人が、わづか腰際迄の深さの水をあぶながつて居るといふので、前句とのかゝりは、その旅人が川風に笠を吹き取られ、生憎深みの方へ流されたので、今まで渡つて居

○平地の　名殘表四句目。雜。

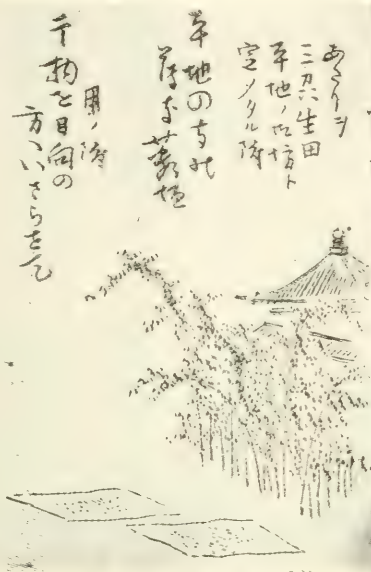
※續繪歌仙　卷。[illegible]宜麦撰。文化八年刊。芭蕉の連句のいくつかを句毎に繪で以て示したもので、附合を直觀的に會得せしめようとしたのである。句心者を啓發する所が多いと共に掲げたのはこの附合の部分の繪である。

續繪歌仙

あたりは三州生田平地ノ御坊ト
定メタル附
平地の寺の薄き藪垣
用ノ附
干物を日向の方へいざらせて

た淺瀬から腰際まで水につかつて、それを取りに行くと言つたやうな場合である。笠を吹きとられると、水をあぶながるとの間、わづかにうつりを感ずるけれども、大體淺い心附である。

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉

「平地の寺」は『續繪歌仙』に、三州生田平地の御坊と定めた附だと言つて居るが、特に固有名詞と見る必要はない。高地に對する平地である。寺とか社とかは普通小高い所にあるものだが、これは平地にあつて、しかもまはりの藪垣も薄い。何となく地形も不安で、しつかりしない感じがする。それが前句の「あぶながり」にひゞいて居る。

續繪歌仙

『婆心錄』の如きは、これを土手の低い川端の寺だとし、川越す人をこちらから見て、もう一尺も出水したらあの薄い藪が切れて、

○干物を　名殘表五句目。雜。
○ゐざらせて　原本「いざらせて」とあるのを今改めた。位置をずり動かすのである。
○鹽出す　名殘表六句目。雜。

水が溢れようと危ながつてゐるさまだと說いて居る。此の如く前句との言葉のかゝりを緊密に解かうとするのは、決して蕉風連句の本意ではない。冗いやうであるが、まづそのひゞき、匂ひを味はねばならぬ。

干物を日向の方へゐざらせて　利牛

前句の藪垣から日向の干物を案じ出したのである。場所は寺の境内、薄い藪垣を透して處々に日向が出來てゐる。日がうつるに從つて干物の位置を動かすのである。前句の貧相な寺の趣をうけて、狹い庭にほした干物――多分は干大根か干蕪などの類であらう。――が、何となく侘びしさを感じさせる。『婆心錄』に

藪の陰なす夕方、本堂の前の方へ和尙のひとりでに莚るざらせて乾すさま、冬枯れし田舍の寂見ゆ。

と言つてゐるのは、よく餘情を得て居る。

鹽出す鴨の苞ほどくなり　孤屋

○算用に　名殘表七句目。雜。

「雪つむ上の　凡兆の句。發句篇二九七頁參照。

「鹽出す鴨」は、これから鹽出ししようとする鴨である。前の干物に家の背戸口あたりの趣を見て、臺所近い場所のさまを附けたのである。附け方としては、さまで深くにほひを探つたものではない。輕い附である。一方には日向に干物がしてある。こちらでは鹽鴨の苞を解いて水で洗はうとして居る。さうした情景である。とにかく二句いづれにも、日常生活の手近い一場面が取入れられてゐる。

算用に浮世を立つる京ずまひ　芭蕉

「算用に浮世を立つる」は、世智辛く世渡りをする、勘定高い生活をする等の意。江戸・大阪の人氣の鷹揚で大氣なのに比し、京都の人情がこまかくしみつたれて居る事は、浮世草子等の類に屢々描かれて居る通りである。前句を到來の鹽鴨の苞と見て、さてこの世智辛い京のすまひを附けた芭蕉のねらひ所は、すでに響・匂の附を了得した讀者であるなら、自ら默會するであらう。山鳥のつがひ、目の下一尺の鮮鯛、さては百目何圓の初松茸、小判で換へる初松魚の類ならで、苞入りの鹽鴨に見出した生活相は、實に「算用に浮世を立つる京すまひ」であつたのだ。二句の連絡の微妙にして、しかもいかに緊切を極めてゐるか。かの「雪つむ上の夜の雨」

○又沙汰なし　名殘表八句目。雜。戀の句。

○よろこぶ　原本「産」にヨロコブと振假名してある通り出產の意。「娘よろこぶ」は「娘をよろこぶ」で、卽ち女兒を生むこと。娘がよろこぶのではない。

○どたくたと　名殘表九句目。雜。

○四ツ　午後十時。

に、「下京や」と置いた程の、不卽不離な妙味がある。

又沙汰なしに娘よろこぶ　　野坡

前句の生活相の一面を附けたのである。子供が生れたが、男の兒ならとにかく、又女の兒だ。二度目の女の兒だもの、萬事手輕にといふ調子で、親戚知人にも知らせないで入費を節するのである「又」の一語がよく利いてゐる。たゞし句はあまりに前句にもたれすぎた嫌ひがある。

この句古風に從へば、出產によつて戀の句とされるのであるが、蕉風ではたとひ戀の詞があつても、一句の意が戀でなければ戀の句とせず、又戀の詞がなくても一句の意により戀とする事は作法で述べた通りである。この句なども一句で捨てゝゐるのから見ると、芭蕉は戀の句として取扱はなかつたのかも知れぬ。

どたくたと大晦日も四ツの鐘　　孤屋

前句「沙汰なしに」といふのから、どさくさ紛れの大晦日を附けたのである。四ツといへば、

掛乞もこゝを先途と駈け廻つてゐる時である。そのどたくたの最中に女の兒が生れたといふさわぎ。西鶴の『世間胸算用』にも見ない珍景である。人をして笑を催させる。

無筆のこのむ狀の跡さき　利牛

「このむ」の語義は頭註の通りである。「たのむ」の誤ではない。前句のどたくたと混雜するさまから、跡や先に亂れた文言が出て來る。それはやはり響である。大晦日の忙しい最中に手紙の代筆を頼まれ、しかも文言が跡や先になるので困つて居る。二句のつゞきはさう解して宜い。

中よくて傍輩合の借りいらひ　野坡

一句の意は、親しい友人同士が金を借り合ふといふので、前句の手紙の内容である。多く心で附いて居るが、文盲な者などの心安立な交際が、幾分ひゞきとなつて居る。

○世間胸算用　大晦日の町家の種々相を描いた小說。

○無筆の　名殘表十句目。雜。

○このむ　他人に代筆して貰ふ時、こちらの書いて貰ひたい事を註文する事。好色一代男卷一、「はづかしながら文言葉の樣子はゞかりながら文章をこのまんと申せば」

○跡さき　文言の順序が亂れて前後すること。

○中よくて　名殘表十一句目。雜。

○借りいらひ　「いらひ」は原本「いらゐ」とあるを今改めた。借ることの古言であるが、關東地方の方言では今日もなほ用ひられて居る。「婆心錄」に「借り笑ひ」の誤寫としたのは妄斷である。又「炭俵集註解」(俳偲堂碌々著、明治卅年刊)に「いらひはいらへに通ひ答ふる義なれば、貸したり借りたりする事なり」とあるのも誤りである。

壁をたゝきて寢せぬ夕月　　芭蕉

「壁をたゝきて」は、もとより前句「中のよき」のうつりである。しかも物を借り合ふといふのから、その生活程度を見定めて、長屋住居の隣同士を附けた。それは位を定めたのである。壁隣に住む仲の宜い同士、長屋住居はして居るけれども、全くの八公・熊公の徒ではない。些か風流を解し、寢酒も月を相手に樂しまうといふ輩。壁をトン〳〵と扣いて、「おいもう寢たかい。どうだ、この月を眺めないとは惜しいもんだぜ」と言ふと、「あゝ俺も寢ながら眺めて居るんだ」と、寢床の中からの答へらしい。かうして二人は夜更けまで、壁を隔てて語り合つて居るのである。

この夕月を踊や祭禮などに結びつけて、一句の意を複雜に解する說もあるが、すでにこゝまで人事の句は數句つゞいたあとである。こゝはたゞあつさり夕月を賞するさまと見た方が宜からう。況んや踊や祭禮は、この附合のうつり・位を鑑賞する上に、何の必要もなきに於てをやである。

風やみて秋の鷗の尻さがり　　利牛

○壁をたゝきて　名殘表十二句目。秋季「夕月」で月の句。定座より翻されて居る。稀な例であるが、初裏の月がずつと後に出て居る關係から、こゝも翻されるやうになつたのである。

○風やみて　名殘裏一句目。秋季「秋の鷗」。鷗は貞德の「御傘」などには水鳥と同じく冬季としてゐるが、後には一般に雜季として取扱はれた。こゝは特に「秋の」と冠して秋季を定めたのである。

俗に物の尻がはね上つてゐるのを鷗尻といふ通り、鷗の尻は常に上つて居るものである。一句は、今まで風に逆つて特に尻をはね上げて居た鷗も、夕凪したので自然尻を垂れて、靜かに波の上に浮んで居ると言ふのである。そこへ前句の夕月が淡くかゞやいて來る。海に近い川沿ひあたりの光景であらうか。曉臺は隅田川の趣だと言つて居るが、實際この歌仙を興行した深川あたりの矚目かも知れない。前句の壁をたゝくといふのは、この良い景色を外に宵寢するとは不風流だと、叩き起すさまなどと見て宜い。

「婆心錄」に「前句柳が壁を扣きて寢せぬ荒れの靜まりし夕月と云ふ句と見立て、云々」と言つて居るのは、人事の句が多くつゞいたあと、全く自然の景として解するのだから、面白い一說だと思ふが、「壁をたゝく」だけでかく解するのは些か無理であらう。

鯉の鳴子の綱をひかふる　孤屋

鯉の鳴子については諸說あるが、頭註の諸解はすべて非で、『七部集大鏡』にあげた一書の說が正鵠を得て居る。卽ち生洲の鯉を守る爲の鳴子で、水面近く浮いて來た鯉を捕へようとする鳥などを追ふのである。鳴子がこの句の秋季を定めて居るのだから、鈴繩などではその詮がな

○鯉の鳴子の　名殘裏、一句目。秋季（鳴子）。

○鯉の鳴子　「七部集大鏡」に「鈴繩の類にて鯉の上り下りを知らむ爲の鳴子なり」、湖中の「蕉打集」に「漁者のまち網をかけて賑繩を手にさり」、「婆心錄」に「入江淀などに屯したる鯉を、大堰より關八網して、さる日を待つ間、鳥來て魚を追ふ時は魚は網をこえ逃ぐる故に鳴子かくる也」、「標註七部集」に「鈴繩なり」等とある。

○ひかふる　引き留める。鳴子の綱を引いたまゝ留めておくのである。

い。かつ鈴繩ならば「綱をひかふる」も意味をなさぬ。

鷗は風が強いと海から川に入つて來、風が靜かであれば海に出て遊ぶのが性である。今風が止んで鷗は沖の方へ浮び去つた。生洲の鯉を捕られるおそれもないので、鳴子の綱も控へたままにしておくのである。前句の海近い川沿の趣によつて附けた句。

ちらはらと米の揚場の行き戻り　芭蕉

前句の鯉の生洲のある場所を、米の揚場に近い河岸と定めたのである。俵物を積んだ荷船が着いたのであらう。揚場あたりをちらほらと行き戻りする人影が、段々多くなつて來た。生洲の番小屋から首を出した爺も、暫し鳴子の手を休めてそれを眺めて居る。さまで苦心をした附とは思はれないが、深川の河岸あたりの實況が自ら籠つて居るのであらう。

目黒參りのつれのねちみやく　野坡

「ねちみやく」の語義は頭註に說いた。一句の意は目黒の不動參りにつれを誘ふと、行くとも

○ちらはらと　名殘裏三句目。雜。
○ちらはら　ちらほらと同じ。
○目黒參りの　名殘裏四句目。雜。
○目黒參り　江戸の郊外、下目黒の瀧泉寺不動に參詣するのである。
○ねちみやく　ぐづ／＼して物を決せず、しかもしつこくねついさまにいふ語。和訓栞に執脉の義かと言つて居るが語源は明でない。用例

我戀は思邪上下略　定之
ねちみやくしたる君にぞありける　仙庵（由庸姿）

明日大坂へすべるお僧論　糸風
ねちみやくなつれ待合す秋の月　可遊　尚すたれ

松持の花の外には蜆蛇　氷花
巣を金樋に鳥のねちみやく　園水
（乙酉十歌仙）

ねちみやくは後住相傳恵相和尚　諄角
傘借りに馬の挨拶　不騎
（女音鶴）

○どこもかも　名殘裏五句目。春季（花、三月）。花の句。花の定座である。
○中時分　中旬といふに同じ。

行かぬとも決せず、煮え切らないでぐづ／＼してゐると言ふのである。「ねちみやく」が前句「行き戻り」からのうつりたる事は言ふまでもない。

前句の米の揚場を、河岸から品川あたりの海岸に轉じて附けて居る。目黒參りを口實にして、品川でどらをうつて歸るのは、川柳子の好題材となつて居り、それは多く明和・安永後の事であらうが、とにかく目黒參りをもつて來たのは、品川高輪あたりの米揚場と見ての附にはちがひない。或はこのねちみやくをもつと深入りして、目黒參りの途中品川遊びの謀叛を起してつれにはかると、遊びたい氣は山々ながら、歸つてからの不首尾を思つたりしてぐづ／＼して居るさまなどと解するのも面白からう。ともあれ催つた友はなか／＼話がきまらない。いら／＼した氣もちで、行き戻りする人を眺めて居るのである。もうさつきから何人位人通りを數へたらう。いつそ一人きりで決行してやらうかしらなどと考へてゐる。「行き戻り」をねちみやくして行き戻りすると解しては、意味の上だけの附になつてしまふ。うつり・匂ひはもつと離して味はふべきものである。

どこもかも花の三月中時分　　孤屋

花の彌生の中頃である。人は東に西に南に北に浮れ歩く。前句をその春の行樂と見てつけたのである。すでに揚句に近く、輕くあしらつて居る。

輪炭の塵を拂ふ春風　利牛

茶の湯に用ひる炭は、清潔にする爲豫ねて水で洗つて置く事がある。茶室めいた瀟洒な屋作り、日當りのよい緣側には洗つた輪炭が乾してある。庭の櫻樹は十分の滿開を呈し、春風は柔かに炭の塵を吹き拂つて行く。さういつた光景で、これも揚句の常法にかなひ、穩かに終つて居る。

○輪炭　揚句。春季　春風。
○輪炭　炭を小さく輪切にしたもの。多く茶の湯に用ひる。

○牡丹の巻　「桃李」に收めた歌仙の一。

牡丹の巻

牡丹散つて打重りぬ二三片　蕪村

卯月二十日の有明の影　几董

すはぶきて翁や門を開くらん　同

聟の選びに來つるへんぐゑ　村

年經りし街の榎斧入れて　同

百里の陸地とまりさだめず　董

歌枕蘚落ちたるきのふけふ　同

山田の小田の早稻を刈る頃　村

夕月に後れて渡る四十雀　董

秋を愁ひてひとり戸に倚る　村

目ふたいで苦き藥をすゝりける　董

當麻へもどす風呂敷に文　村

隣にてまた聲のする油賣　董

三尺つもる雪のたそがれ　村

御に飢うる狼うちに忍ぶらん　董

兎唇の妻のたゞ泣きに泣く　村

鐘鑄ある花の御寺に髮切りて　董

春の行方の西にかたぶく　村

名

能登殿の弦音霞む遠かたに　同

博士ひそみて時を占ふ　董

粟負ひし馬倒れぬと鳥啼いて　村

桃咲きちる畷八町　董

立ちあへぬ虹に淺間のうちけぶり　村

勅使の御宿申すうれしさ　董

江に獲たる贄の魚の腹赤き　村
　日はさしながらまた霰降る　董
見し戀の兒ねり出でよ堂供養　村
　つぶりにさはる人憎きなり　董
十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ　村
　しころ打つなる番場松本　董
駕舁の棒組足らぬ秋の雨　同
　蔦も鳥もあちら向き居る　村
祟なす田中の小社神さびて　董
　旣に玄蕃が公事も負色　村
花にうとき身に旅籠屋の飯と汁　同
　まだ暮れやらぬ春のともし火　董

牡丹散つて打重りぬ二三片　蕪村

句はすでに發句篇にあげたから、句解はこれを略し、この卷を收めた『桃李』について、些か解說を試みておかう。『桃李』は安永九年の刊行で、蕪村と几董との兩吟歌仙二卷を收めたものである。蕪村の序文に、

いつの程にか有りけむ、四時四まきの歌仙有り。春秋は失せぬ、夏冬は殘りぬ。云々

とあり、又蕪村のこの發句は既に安永二年刊行の『俳諧新選』に見えるから、その興行は『桃李』の刊行より數年前に成つたものの如く思はれる。しかし几董が當時兩吟した折の草稿に添へて下村春坡に與へた書によれば、やはり安永九年の作たる事が知られる。恐らく蕪村の言ふ所は文章のあやであり、又發句は舊作を用ひたものであらう。而して右の几董の書中に述べて居る如く、僅かに二卷の歌仙であるが、師弟が彫心鏤骨の末に成つたもので、當時二人の間に往復した手紙の中には、この歌仙についての苦心を物語るものが多い。又實際その現存する草稿を見ても、推敲彫琢のあと歷然たるものがあり、實に蕪村の連句中最も代表的とすべきものである。几董が後に自ら『附合手引蔓』の作例として、特にこの一卷中から句を選んで居るのも、誠に故無きではない。今その中夏の一卷をとつて、こゝに評釋を試みようとするのである。

○牡丹散つて　發句。夏季（牡丹）。

○發句篇に　發句篇一七七頁參照。

○几董が云々　六九八頁、六九九頁寫眞版參照。この草稿もなほ現存し居る。

○下村春坡　京都の人、几董門。文化七年歿、年六十一。

○草稿　大阪砂原氏藏。

○卯月二十日の　脇。夏季　卯月。月の句　有明。

○手引蔓に曰く　以下「手引蔓」に解がある分は、作者自身の說であるから、つとめてこれを引くことにする。

○すはぶきて　第三。雜。らむ留。

○すはぶく　しはぶ(咳)くに同じ。

▽几董自筆「桃李」原稿の添書（大阪砂原氏藏）

往昔安永庚子のとしにやありけんひと日師と夜半亭に遊べる事あり時に花落鳥啼春の名残もをしいなき夕暮しめやかに降出たるに師と閑席をやぶる賓客もなかりければ師おもむろ燭を點し筆を坐して示て曰我むかし東武に在てひとり蕉翁の幽懐を探り句を吐事識者もはらみなし葉冬の日の高き趣をしたふしかれども世人その佳境をしらず時に蕪村年二十有七歳いまだ弱うして句法の老たるをもて世人我が見る所俳諧のごとくす時に或人余が譲て曰はいかいは滑稽也人と相和して談笑するをもて最とす子が如き奇僻のものは其本意にあらず何ぞ打て人情に隨はざるや余此言を聞て亦一見解をひらき遂に野總常武のあいだに歴して麥林支考を尚ぶ境に入ては則支麥が句法を用ひ其角

卯月二十日の有明の影　　几董

『手引蔓』に曰く、

その時節を定めて卯月の二十日頃としたが發句の見込にして、有明の影と又時分を定めて、散つた牡丹の上に露などきら〳〵として、有明月の影の美はしうよい天氣のさまが見えるやうな。是を牡丹に廿日草といふ異名があるによつて、廿日と定めたると見ば、この脇大きに句位を減ずる事ぢやぞ。是打着といふ脇にて、付は其の時也。

と。牡丹の散るのを四月二十日頃と見こみ、更に時刻を有明月の出てる時として、發句の風情を一層添へたのである。

すはぶきて翁や
　門を開くらん　　同

几董自筆「桃

嵐雪を好む處にしては明其嵐の風韻を吐京師に於ては淡々羅人が語氣に倣ふされは往ところとして過ざる事なくをの／＼我俳諧をもて壇場とす實は世を玩味して俗俳を蔑視すのみしかして我俳諧に遊ぶ事凡五十有餘年今齢七旬になん／＼とすいまだ自得のよいかいをせず此比おもふに汝が俳諧既に熟せり我に予と両吟をすべしとこゝにおいて夏冬の二句をたてゝ師と予と句を吐事百有余章或は連綿を正し或は一巻の變化をかうがへ或は一句を琢磨し日を積月をわたりて二歌仙成ぬ行よに及て表題をもゝすもゝと號し師が序詞を添ふ印刻の冊子に世にしる所也此たや其原本にして師の筆痕と余が愚筆と混じ雑へるところ塗りまた可々も師の粉骨を盡し肝膽をくだかれし一字一涙の記念とひめ置けるを門人下村氏春坡しきりに懇望の志念深くかの張良が橋下に書を博せし心底の中に伏たりしにもおさらざりしかは其至誠を感じて永くこれを譲る所也

天明七丁未年夏六月中浣　　几董誌

○しはぶる　しやぶる。

○聟の選び　初表四句目。雜。聟このみは古い俳諧でも非戀としてゐる。

○へんぐゑ　變化。妖怪である。

一句の意は、ごほ／＼と咳入りながら、門番の老爺が出て來た。門を開けに行くのだらうといふのである。發句と脇とがたゞ絢爛清白な美しさである所へ、衰老枯寂の趣を加へ、かつ自然に人物を點じて居る。第三の轉の用をよく發揮したものであらう。一句は「猿蓑」中の

魚の骨しはぶるまでの老を見て　芭蕉

待人入りし小御門の鎰　去來

の附合も思ひ合せられる。

聟の選びに來つるへんぐゑ　村

前句の異様な咳をする翁に、妖怪めいた連想を働かせたのである。御伽噺の中にでも出て來

李原稿の添書

○年經りし　初表五句目。雜。

さうな化物の國、今日はお姫様の聟選びの使者が來るといふので、白髯長身の翁が門を開けて居るといつたやうな所であらう。或は傳說によくある化物に娘をやらうとか、聟にとらうとか約束した話などを思ひ浮べても宜い。ともあれさうした全くロマンチックな空想から成つて居る。

蕪村の妖怪辨は有名なもので、かの「新花摘」に狐狸の怪が屢〻語られて居る事は誰も知る通りで、發句にも

公達に狐化けたり宵の春

河童の戀する宿や夏の月

化けさうな傘貸す寺の時雨哉

等の類の作はかなり多い。これは畢竟彼の文藝上に於けるロマンチシズムの現はれに外ならない。その特色が同じやうに連句にも見えるのである。又「へんぐゑ」などと、ことさら古語を用ひたのも蕪村らしい好みである。

年經りし街の榎の斧入れて　同

これも前句の妖怪趣味を延長したやうな附である。そのへんぐゑが大榎の精だと話をつゞけ

○百里の　初表六句目。雜。
○陸地　リクチ、ロクヂ、クガヂなどと訓まれるが、當時としてはクガヂとよむが適當であらう。

たのである。些か蕪村の好む所に偏して、變化に乏しい憾みが無いではない。

百里の陸地とまりさだめず　董

前句の榎から着想を得たものであらう。榎は昔から一里塚の標木として植ゑられたものである。いつの昔に植ゑられた一里塚の榎であらう。今はそのあたりも街に變つて、榎も伐られる時になつた。そこに羇旅の感を發し、泊り定めぬ漂泊の身を悲しんだのである。

蕪村が當時几董に送つた手紙によれば、最初は

百里の陸地とまりわびしき

であつたらしく、「此の句旅魂客愁の光景の姿情のがれがたくて述懐めき云々」と評して再考を促して居る。蓋し初表には述懐めいた句は好ましからぬ事になつて居るからであらう。特に「すはぶきて」、「年經りし」、「わびしき」と三つ同じ調子が出て居るのがいけないと評し、その中一つはぜひ改めねばならぬと言つてゐる。それで結局この「わびしき」を「さだめず」となほして落ちつく事にしたのであらう。

この表は第三以下すべて雜で、季の句は發句と脇だけである。こんな一表一季は普通單調な

爲嫌ふのであるが、蕪村はそれよりも一句の作に苦心を拂はうとしてゐる。

歌枕蘚落ちたるきのふけふ　同

百里の歌枕を訪ねて、身を行雲流水に任せた風狂の士である。偶ゝ旅路の果に病みふしたのが、昨日今日は些か心地よく、そゞろ漂泊の境涯を思ひめぐらして居るのである。

山田の小田の早稲を刈る頃　村

時節を附けたのである。思ひめぐらせば都を出たのは春霞立つ頃であつた。はや昨日今日は山田の早稲を刈る程になつたかと、感慨無量の體である。あの名高い能因の「都をば」の歌も思ひ出されるやうな餘情がある。

夕月に後れて渡る四十雀　董

○歌枕　初裏一句目。雜。

○山田の　初裏二句目。秋季（早稲を刈る）。

○都をば　後拾遺集「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」

○夕月に　初裏三句目。秋季（夕月、四十雀渡る）。月の句。初表の月より路に出てゐるから、裏でも早く出したのである。

〇八體　連句概説、作法の條（一五九〇頁）參照。

〔秋を愁ひて　初裏四句目。秋季（秋）。

「手引蔓」に曰く、「これは景氣を延ばすといふ附也。かの八體※に曰ふ時節也」と。即ち前句に附けた時節の景を、そのまゝ延長したのである。これは變化を貴ぶ連句としては、もとより好ましい事ではないが、一卷の模樣によつては、機に臨み變に應じて用ひて差支ない。こゝでは第三以下、純粹に景だけを敍した句はなかつたので、早稻刈る頃の山里の景を今一句つゞけたのである。空には夕月が淡くかゞやいてゐる。友におくれた四十雀が淋しげに渡つて來るさまは、一句としても佳く、前句を背景として愈ゝ面白い。

秋を愁ひてひとり戸に倚る　村

「手引蔓」に曰く、「これ起情也。前句のけしきより人情を向はせて情を起し來る。附は八體に曰ふ觀想也」と。觀想とは前句の餘意餘情に關して、作者の主觀的な解釋をさすものと見てよからう。例へば

瓦が寄れば諸願成就　芭蕉
二三年立つのは夢のその如く　支考

の如き、一二枚づつの瓦の奉加が、積り積つて伽藍が成就したといふのから、そこに振返つて

歳月の早いのを歎ずる餘情を定めて居る。それが觀想である。この句では、夕月に後れて渡る四十雀の寂しい餘情から、秋を愁へて戸に倚る人の姿を定めて居る。一句の情趣は、蕪村の例の漢詩趣味から來てゐるらしい。

目ふたいで苦き藥をすゝりける　董

『手引蔓』に曰く、「前句秋を愁ふるといふより、戸に倚るといふを、ぶら〳〵病の人と見て趣向を立てたものである。附は八體に曰ふ其の人也」と。この上說明する必要はあるまい。心附の行き方である。

當麻へもどす風呂敷に文　村

隣にてまだ聲のする油賣　董

『手引蔓』に曰く、「これ人情三句にわたる附也。前句は打越の人の用也。その用を取つて當

○目ふたいで　初裏五句目。雜。

○當麻へ　初裏六句目。雜。

○當麻　大和國北葛城郡當麻村。名高い當麻寺がある。

○隣にて　初裏七句目。雜。

○打越　一句隔てた前の句。即ち前々句。

厩へもどしたい物が有る、誰ぞ來よかしと、人待つ用をうけて、後句に油賣と趣向を立て、一句の作は隣にてと餘所の事を起して來たものぢや。これ七名に曰ふ向附也」と。

目寒いで藥を飲む病人は、大阪あたりに出て居る奉公人であらう。大和の親里へ戻す風呂敷と一しよに、手紙をことづけるのである。その手紙をことづけるといふのから、更に人を待つさまを附けて居る。油賣といへば、俗に無駄口をたゝいて怠ける事を、「油を賣る」とさへ言ふ通り、家々を賣り廻るのにひまがかゝるものである。その手紙を油賣に託しようとして待つてゐるのだが、なか〳〵やつて來ない。聞くとまだ隣で何かしやべつて居るのだ。「まだ」といふ一語に待つて居る情がよく寫されて居る。

※三尺つもる雪のたそがれ　　村

『手引蔓』に曰く、「これは油うりにたそがれ時といふあしらひ附也。三尺積る雪というたが一句の作である。これ七名に曰ふ會釋也」と。會釋とは前句の意、又は前句中の事物をうけて、これに適當な事物を定めてあしらひ、そこで一句を仕立てるのである。例へば

ぐわら〳〵と音する物を聞きにやり　　芭蕉

○油を賣る　寶暦頃の雑俳に「江戸の水呑むと油を賣りたがり」とある由だから、蕪村時代にはすでにこの諺も行はれてゐたらしい。しかしこの油賣をすぐ無駄口たゝく義と解する事は出來ぬ。大和は當時地方からは上等の菜種油を産するといふ。

○三尺つもる　初裏八句目。冬季（雪）。

瓦が寄れば諸願成就　同

は前句のぐわら〳〵音する物を、瓦と定めて句作したのである。又

本膳が出れば各〻かしこまり　芭蕉

金を崩して錢を積み置く　同

も、前句の意により賴母子講をあしらつたのである。たゞしかうした名目は、後世の宗匠達が説明の便宜上分類したものにすぎず、實は所謂七名八體の間に截然たる區別があるのではない。見方では會釋とも起情とも解せられるやうな場合は頗る多い。又一々それらの案じ方附け方に從つて句作する必要もない。しかし蕪村時代にはこの種の説明が一般に行はれて居たので、几董も亦かうした分類をあてはめて説いたのである。

油賣にたそがれ時は自然の連想で、誰しも思ひ定め得べきあしらひであるが、三尺積る大雪の夕としたのは作者のはたらきである。雪がしんと降り積つた黃昏など、隣の人聲が遠く聞える感じが、自ら湧いて來るであらう。

餌に飢うる狼うちに忍ぶらん　董

○餌に飢うる　初裏九句目。雜。

兎唇の妻のたゞ泣きに泣く　村

○兎唇の　初裏十句目。雑。

○寢顏に　同じく「桃李」中の他の歌仙の句。

『手引蔓』に曰く、「これ前句は三尺の雪と言ふに、餌に餓うる獸と趣向を附けて、日暮るゝと見て忍ぶらんと句作を結んだものぢや。次の句は前を狩人と見て、其の妻を向はして兎唇とした趣向は狩人へのよせ也。たゞ泣きに泣くと情を起したは、商賣が殺生をする事故、我が身もこのやうな不具かしらぬ。さても歎かはしい事ぢやと、ひとり留守をして泣いてゐる體也。これ前句を噂にして情の向附也」と。

大雪の爲に餌に餓ゑた獸が村里まで徘徊してゐる。もう薄暗い黄昏頃、恐ろしい狼がそこらにこつそり忍び込んで來て居はしまいかといふのである。それは勿論氣味惡がつて居るのであるが、今度は狩人がかういふ好い機會に狼を仕留めてやらうと窺つてゐるさまと見、その狩人の妻を附けて居る。向附の名目は前の油賣の句にも出たが、前句の人又は事に對すべき他の人又は事を附けるのである。例へば

寢顏にかゝる鬢のふくだみ　几董
いとほしと代りて歌をよみぬらん　蕪村

の如き、前句の人をいとほしがり、代つて歌をよんでやらうといふ他の人を對させた附で、即

○鐘鑄ある　初裏十一句目。春季（花）。花の句。花の定座である。

○自にして　句に現はれた人物自身の動作としたものを自（ジ）といふ。他に對する言葉。

○句前　句をすべき場所の意。

ち向附の一例である。

鐘鑄ある花の御寺に髪切りて　董

『手引蔓』に曰く、「これも人情三句にわたる也。打越の人は夫也。前句の人は妻也。その妻の用を自にして附けたものぢや。さて一句の趣向は、兎唇といふ支離の女を見込みて、浮世の中にも飽き果てて、我が身の罪障消滅のため、鐘の供養に參りて髪をおろして尼になるといふ意也。さて此の句前は花の定座に當りて、是非とも花の句をせねばならぬ所也。然れども前句よりの情を起して來たれば、それをうけて附けねば、わたりも悪しく附の手柄もない。やはり其の人の情を附けねばならぬ。そこで鐘供養として花をよせ合せたものぢや。よつてむつかしい中にも山寺などの花の景色も、自然と餘情に現はれて、花の句になるやうに仕立てたは、花の御寺といひつゞめた句作の所が、大きな骨折ぞ。これ案じ方は七名の有心也。附は其の人也」と。

作者自身の効能書によつて、もはや加へる所はなからう。有心とは極めて意義の漠然たる名目であるが、几董は又、同じ『桃李』の他の一巻中の句、

彌たしむ能登の浦人　几董

○春の行方　初裏十二句目。春季（行く春）。
○能登殿の　名殘表一句目。春季（霞）。
○能登殿　平家の武士中最も驍勇のほまれたかつた能登守教經。

女狐の深きうらみを見返りて　蕪村

も、有心の案じ方だと說明してゐる。要するに前句のこまかな一字一句の意、かすかに漂ふ餘情までに心を留めて、次の句作を定める謂である。

※春の行方の西にかたぶく　村

名の※能登殿の弦音霞む遠かたに　同

『手引蔓』に曰く、「これ前句は鐘供養の花の寺に、春の夕暮と氣色にて附け流したる逃句なり。次は西に傾くといふ句をといて、西海に漂ひし平家の俤を附けたものぢや。春の行方といふに霞む遠かたと句を結びしが、前句の機嫌を合すといふものぢや。これ景色に打添へて、附は八體に曰ふ俤也」と。

逃句とは前に人情の句がつゞいた場合、天象・季節などを附けて輕く流すのをいふ。後の「鳶も烏も」の附け方もその類である。俤附については『去來抄』に、

牡年曰、面影にて附くるといふはいかゞ。去來曰、うつり、ひゞき、匂ひは附樣の鹽梅也。

面影は附様の事なり。昔は多くはその事を直に附けたり。それを面影にて附くるといふは、

草庵にしばらく居てはうち破り

命嬉しき撰集の沙汰

初めは「和歌の奥儀は知らず候」と附けたり。

先師曰、前を西行・能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附けんは手づつならむ。たゞ面影にて附くべしとて、かくなほし給ひぬ。いかさま西行・能因の面影ならんとなり。また人を定めて言ふのみにも非ず。例へば

發心のはじめに越ゆる鈴鹿山

内藏の頭かと呼ぶ人は誰そ

先師曰、いかさま誰ぞが面影ならんと也。

と、芭蕉の教へを傳へて居る。卽ち實在の人として附けるのでなく、その實在の人に類したやうな人として附けるのである。隨つて

この春も盧同が男居なりにて

とあつても、これはたゞ盧同のやうな茶人であり、

日東の李白が坊に月を見て

○草庵に 「猿蓑」市中はの巻中の附合。前句は芭蕉、附句は去来の作。

○發心の 「猿蓑」梅若菜の巻中の附合。前句は芭蕉、附句は乙州の作。

○この春も 「猿蓑」鳶の羽もの巻中にある史邦の附句。

○日東の 「冬の日」木枯の巻中の芭蕉の附句。

○博士ひそみて　名殘表十一句目。
雜。

とあつても、直に石川丈山の事として解するには及ばない。要するに實在の人そのまゝとして附けては、句意に含蓄が無く、餘情に乏しくなるのを嫌ふのである。

蕪村のこの句は、蕉風の俤附としては、むしろ實在の能登守を出し過ぎて居る。だがこれは蕪村の例のロマンチシズムの現はれで、西海の波に榮華の春も消え行く平家の姿を、能登殿の弦音に描き出したのである。一體芭蕉の發句は、所謂閑寂を好んで細いといふ一方に偏して居るが、連句になると實に多方面な特色を發揮して居る。然るに蕪村に至つては、發句も連句も全く同じ行き方で、別に連句としての特色は存しない。附け方に於ても、芭蕉の如くにほひ・響等を主とするよりは、やはり發句と同じく、一句に高雅優艶な情趣を得る事を專らとして居るやうである。それはこの卷中の諸句によつても、十分窺はれるであらう。

博士ひそみて時を占ふ　　董

前句の歴史的な情景をうけたのである。遠くかなたには弦音が高く響き、軍の結果やいかにと人々は氣遣つてゐる。陰陽博士はひそかに時を占つて戰運を察してゐるが、何となくその面上には憂色が見える。さういつた光景が浮んで來る。

粟負ひし馬倒れぬと鳥啼いて　　村

一句の趣向は、恐らく※公治長の故事から得たものであらう。前句の何となく神秘的な趣を受けて、公治長の故事に思ひよせ、時を占ふ陰陽博士が、鳥の啼聲にその意を解するさまを附けたものと思はれる。

※樗咲きちる畷八町　　董

場所を附けたのである。畷に馬が倒れて積荷は道にころげ出てゐる。それを哀れむやうに鳥が啼いて居るといつたやうな光景。歴史的、故事的な句がつゞいたので、あつさりとした附でうけて居る。畷八町は特に固有名詞といふ程でなく、たゞ畷の長く續いた所をいふ。必しも八町きちんと有るわけではない。土手八丁、大津八丁など言ふのもその類である。

※立ちあへぬ虹に淺間のうちけぶり　　村

○粟負ひし　名殘表三句目。雜。
○公治長　支那周代の人、孔子の門人。善く鳥語を解したと傳へられ、その爲にかつて疑はれて罪に問はれた事があるが、丁度その時雀が、城外に荷車が顚覆して米が零れたと語つて居るのを聞き、その事を述べて人を遣はして見ると、果してその通りだつた。よつて鳥語を解する事が實證され、疑が晴れたといふ。
○樗咲き　名殘表四句目。夏季（樗）。
○立ちあへぬ　名殘表五句目。雜。
○立ちあへぬ　虹が十分に立つ事が出來ぬこと。

○虹の根を　「曠野集」に出づる鈍可の句。

○勅使の　名残表六句目。雑。

○江に獲たる　名残表七句目。雑。

一句の意は淺間山の烟の爲に、虹の根も打消されて、はつきり半圓形を描ききれないといふのである。前句を前景とし、その背景を遠く描き出したのである。なほやゝ物附らしい解し方だが、樗の花の色から虹が連想されたのではあるまいか。

　虹の根をかくす野中の樗かな

といふ古句もある。もとより附け方としては、たゞ景色の附であるが、蕪村の制作心理まで立ち入ると、さういふ連想が有りさうに思はれる。

　勅使の御宿申すうれしさ　董

前句を日光街道から眺めた景と見ての附である。日光街道は一に勅使街道とも言ひ、東照宮奉幣の勅使が往來したものである。

　江に獲たる簣の魚の腹赤き　村

勅使を宿す喜びの情から、そのもてなしぶりに轉じたのである。腹の赤い魚は鱒などであら

う。事を敍してゐる間に、突然魚の赤い腹を見せて印象を鮮かにしたのは、流石に蕪村らしい手段である。だがなほこれには腹赤の奏の連想があるのだらう。卽ち前句の物使からの案じである。これは全く物附の行き方で、蕉風の連句としては忌む所であるが、蕪村はむしろ古典趣味の着想として喜んだのかも知れない。

　※日はさしながらまた霰降る　　菫

句の意は解するまでもない。魚を捕る時季を附けたのである。

　※見し戀の兒ねり出でよ堂供養　　村

『手引蔓』に曰く、「これ前句、日はさしながら又といふ時の移り行くけしきあれば、堂供養の場に參りゐるさまが眼前ぢや。さて見し戀のといふは、かねぐ見そめたる兒の、けふの供養の儀式に、定めしよそほひ立てて出らるゝで有らう。見たいものぢやがといふ情を起して、ねり出でよといふ、其の人の心の※下知也、句作なり。これ七名に曰ふ起情也」と。

○腹赤の奏　古、正月元日の節會に、肥後國宇土郡長濱から供御の料として腹赤を獻るならはしがあつた。これを腹赤の贄（にへ）といひ、その贄を内膳司から奏上する公事を腹赤の奏といふ。腹赤は鱒のことだといふ。

○日はさし　名殘表八句目。冬季（霰）。

○見し戀の　名殘表九句目。雜。戀の句。

○下知　命令に同じ。

○つぶりに　名殘表十句目。雜。戀の句。

○一句に自他の有る　頭にさはるのは他の人で、憎く思ふのは句の主人公たる女自身の上たるを言ふ。

解はこれで明かである。この前句の中から堂供養の趣を探り出し、しかもこれを戀の句に轉じたのは、流石に蕪村の凡手でない事を思はせる。

※つぶりにさはる人憎きなり　董

『手引蔓』に曰く、「これ前句の兒待つ人を女にして、髪なども立派にこしらへ立てて出たる姿を趣向にし、さて頭にさはる人といふは、堂供養などの場の群集して、我がちに物見たけき中なれば、人の髪にさはるも何も思はぬ體をあしらひ、さて女の情として髪にさはる事を至つて嫌へる趣を一句に作したものぢや。人憎きなりと輕う言ひ放してあれど、情は甚だ深き句也。これ※一句に自他の有る有心附也」と。

これまた作者自身の解説だから、外に言ふ所はないが、「頭にさはる」を兒の頭にさはると解し、自分の戀して居る兒に誰かなれなれしく接して居る。それを憎らしく思ひながら見てゐる意としてはどうであらうか。凡董の作意には反するが、解としてはこれも亦成立するのみならず、『手引蔓』の説がなかつたらさう解するのがむしろ自然ではあるまいか。

○十六夜の　名殘表十一句目。秋季十六夜。月の句（十六夜）。
○世のいそぎ　生活のためせはしなく立ち働くこと。
○しころ打つ　名殘表十二句目。秋季（しころ打つ）。
○しころ打つ　砧をうつこと。
○番場松本　大津の東方に接した地名。今は共に大津市内になつてゐる。

十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ　　村

『手引蔓』に曰く、「この附け方はよく味はうて見るがよい。打越の句は兒ねり出でよといふにて、たゞ心に物待ちしてゐるのみ也。それに頭にさはる人と附に一句の趣向を立てたれば、其の人に向はして、暗きひまさへ世のいそぎと、暗がりにて髪に行き當りし體を現はした物ぢや。世のいそぎといふにて、三句の輪廻をのがるゝ也。世の字が大事である。これ前句の情をおし出すといふ附にして、又時分を定めて轉じたるなり」と。

輪廻とは前の打越へ心の戻ることで、變化を貴ぶ連句としては最も嫌ふ所である。こゝに今一句戀をつゞけるとしても、その情の續けがらは前と趣を異にせねばならぬ。几董が「世のいそぎ」で輪廻を免れると言つたのは、上の五、七だけでは宵闇だから、又戀になりさうな所を、世智辛く世帶じみた言葉で、全く戀の情を離れてしまつた事を言つたのであらう。

しころ打つなる番場松本　　董

『手引蔓』に曰く、「しころは砧也。番場・松本は大津と膳所の際也。附はいさよひの闇に世

のいそぎといふをとがめて、暮砧急はしなどの面影にて、碪を附物と定めたる會釋也。これ八體に曰ふ其の時節也」と。卽ち世のいそぎを砧打と定め、宵闇の暗がりにさへ、砧を打つにいそがしい番場・松本あたりのさまを附けたのである。

駕舁の棒組足らぬ秋の雨　　同

『手引蔓』に曰く、「前句の場を見定めて駕舁と趣向し、棒組足らぬは前句の移りをとりての句作なり。秋の雨は季節のあしらひにして、二句のよそほひなり。これ八體に曰ふ其の場也」と。番場・松本は共に東海道に沿うた小驛だから、その場を宿端れの棒端などと定めたのである。今日中に草津までは行きたいといふ旅人、はや日は暮れる、雨は降る。仕方がなく駕を賴むと、小驛の事とて生憎棒組が一人足らぬ。さういつたやうな情景である。砧の音も淋しい秋雨の暮、駕舁がたつた一人しか居ない小さな宿驛、それが二句の間のうつりである。

※鳶も烏もあちら向き居る　　村

○駕舁の　名殘裏一句目。秋季（秋の雨）。

○鳶も烏も　名殘裏二句目。雜。

「手引蔓」に曰く、「これ八體に曰ふ逃句也。四五句の運びといふも爰ぢや。そもそも堂供養の句よりして、頭にさはるといひ、世のいそぎとうけ、砧打つと場を定め、駕舁と人を出して皆人情の體用あれば、爰では秋雨といふ天象に生類をあしらうて逃ぐる也。然れどもあちら向かせて置くが、一句の趣向なり。これ三體に曰ふ逃句也」と。

逃句については既にさきに述べた。こゝらは逃句をするに最も適當な場所で、これで氣分が輕くなつて來る。たゞ前句の淋しげな餘意をうけて、鳶も烏も向うを向かせたのは、即ち作者の趣向である。

※祟なす田中の小※社神さびて　董

鳶や烏さへも祟を恐れてか、あちらを向いて居ると見た附である。現存して居る『桃李』の草稿は、その添削された形はすべて刊本と一致して居るが、この句だけ「田中の鎮守」となつて居る。だから愈々印刷に附するやうになつてから、更に「小社」と直したものであらう。それだけでも良匠の苦心は窺はれるのだが、實際鎮守の神では人と親しい感じが除かれない。小社といつたので物凄い感じを深めて居るのである。

○祟なす　名残裏三句目。雑。
○小社　ホコラなどとよむべきか。

○既に　名殘裏四句目。雜。
○公事　訴訟事件をいふ。

○花にうとき　名殘裏五句目。春季花。花の句。花の定座である。

既に玄蕃が公事も負色　村

玄蕃はたゞ假に設けた人名であるが、何となく敵役らしい人物を想はせる。人々に憎まれて居る惡代官でもよい。一時の權威に任せて隨分無理も通させた。村人が祟を恐れて指もさゝぬ社さへ、通路の邪魔だからとて引除けさせようとした。だが土を掘り石を動かした人夫が、忽ち血を吐いて死ぬといふやうな目前の祟に、これだけは思ひとまつた。しかしそれからは次第に落ちめであつた。遂に訴訟事件も負けに終るらしい。まづかうした物語でも想像されさうである。やはり蕪村らしい着想である。

※花にうとき身に旅籠屋の飯と汁　同

訴訟事件は今も昔も長引きがちなので、地方の人たちは長い間宿屋生活をしなければならなかつた。江戸の馬喰町などは、全くこの種の公事宿ばかりあつた所である。隨つて附意は自ら明かであらう。折から世は花の盛りといふのに、明けても暮れても奉行所通ひ。御白洲でのしらべは段々旗色が惡い。いつも相變らぬ旅籠屋の飯も汁も、ますく不味からうといふもので

〇まだ暮れやらぬ　揚句。春季（春の灯）。

ある。

まだ暮れやらぬ春のともし火　　董

花も見ずして宿屋生活をして居る身の、まだ暮れやらぬ燈火に對して、流石に淡い哀愁を覺えるのである。これまた揚句の常態である。

俳文篇

○笑の説　この題は今假に設けた。立圃の文集「六日の菖蒲」に出で、又その句集「空礫」の詞書にも見える。今「六日の菖蒲」による。

○うぶの神　産靈神（ムスブノカミ）に同じ。萬物を産み成す靈徳ある神。

○猿はさきへ行く云々　諺に「猿の尻笑ひ」、自ら顧みずして他を笑ふ喩。

○烽火を見て笑ふ　周の褒姒の故事。

○くすみて　眞面目くさつた顔をして。

笑※の説

立圃

わらひ草の種は誰が世にか蒔きて今まではびこるらん。うぶ※の神の愛し給ふ時笑ふといへば、神代よりやはじまりけん。さてはえびす三郎殿こそもとつ根ざしなるらめ。それよりしてにつこと笑ひ、くつ〳〵と笑ひ、にが笑ひ、そら笑ひ、高笑ひと成りて盡せぬ物は笑ひなるべし。かく書付くるを見ても笑ふ人あるべし。よしよし諸鳥はふくろふをわらひ、猿※はさきへ行くしりをわらひ、烽※火を見て笑ふもあり。又一枝の花を笑ひ給ふもあり。非情の草木も花のゑみをふくみ、繩ぶしだにも笑ふとなれば、世は皆わらへり。我のみくすみ※て益なしと思ふ物から、ひとりわらひして口にまかせ筆にまかす。

聲なくて花や木ずゑの高わらひ

惠比須大黑棚

元隣

福は馬の角牛の玉もあれど、近くは金銀米錢の事也とや。其の故に儒者は禮儀に紛らしてたくはへ、法師は功德にかこちてむさぼれり。まして其の下なる者をや。こゝにふたばしらの福の御神おはします。八大龍神の浪を蹴立つる恐ろしげなる形にもなく、十王の抹香くひたる苦々しき顔ばせにもなく、共ににこやかにして常に諸人に憐れみをたれて、祈るに從ひて福を與へ給ふとかや。一柱は葦原國の御神、一柱は西天の御神なりけれど、いづれの人か引合せ參らせけん、隣づからの住居をなして、御中よろしくわたらせ給ふは、げに福の神のふくさなる御心なりけらし。本地はいづれの御佛にましませるもはかり難けれど、なほ垂跡の御姿は、手に持ち給へる神變の棹にはめでたいを釣り、足にふまへ給ふ方便の俵には心のままにたく八木ををさめり。十月には八百萬の神たち出雲の國へわたらせ給ふに、此の三郎殿

○惠比須大黑棚　元隣の俳文集「寶藏」（寛文十一年刊）による。
○元隣　山岡氏。京都の人、もと商家に生れたが、病弱の爲醫を業とした。北村季吟に學び假名草子の作者として名あり、又俳諧をよくした。寛文十二年歿、年四十二。
○馬の角　燕丹の故事。世に珍しいものをいふ。
○牛の玉　牛黄に交つて稀に排出される石のやうな堅い物。これも珍しい物。
○十王　閻魔王の別名。
○西天　天竺、即ち印度の事。惠比須は海外渡來の神とされてゐる。
○ふくさ　物の柔かく温和なこと。
○めでたい　目出度いと鯛とをかく。
○心のまま　心の儘と飯とをかく。
○八木　米の異名。

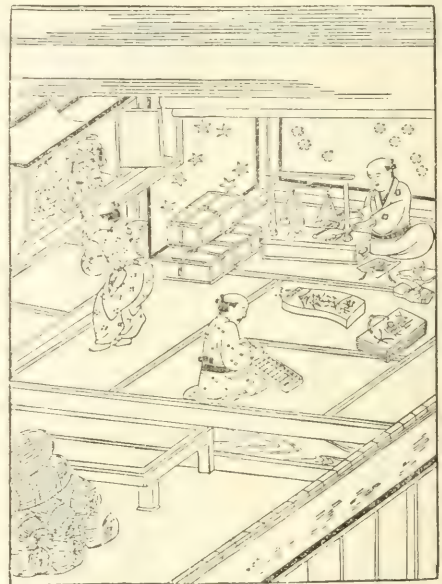
○算用酒の三寸　十月二十日の夷講に商賣繁昌を祈つて飲む酒。三寸は御酒「ミキ」の宛字。

▽寶藏挿繪

○子祭　陰暦十月甲子の日に大黒天を祭ること。二股大根等を供へる。

○磯邊の岩のいはず　頭韻をふみ、惠比須の縁語で「いはず」の序詞の如く用ひてゐる。

○しろ鼠のしろしめして　同じく大黒の縁語で、白鼠を出したもの。

「寶藏」挿繪

なん屋のうちにとゞまり給ひて、富貴を守らせ給ふにや。廿日といへるには工商これを祭りて、※算用酒の三寸をいただき、霜月は子祭して、二股大根のひとかたならず、いりまめのかずかず敬ひ奉れり。しかのみならず月の朔日廿八日には、もる飯の白きをいとはず、かき鱠の細きをいとはず、物ごとのはつほを手向けて崇めまゐらせば、※磯邊の岩のいはずとも、※しろ鼠のしろしめして福たまらんこそ頼もしけれ。

金もちやなほおもしろき月と花

守護屋中夷大黒　顔持下種近憐玄

信心次第逃貧賤　富貴却如不在天

莊子像讃

宗因

こゝにすき人あり。岡西氏なにがしとなのる。いとけなきより入木の道にたづさひ、十有五にして學に志すあまり、しきしまの道を好みて、ことさら俳諧の道に名あり。作においては備前の出來もの、目きゝにおよばぬ名作なり。抑ゝ俳諧は雜體のそのひとつとして、連歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ、守武が餘風を仰がざらんや。今此の畫圖にむかへば、栩々然として花にたはぶれ、蘧々然として枕をそばだて、夢うつゝの間にあり。世はみなまつかう、むかしはまつかうあそんだがましぢや。

世の中よ蝶々とまれかくもあれ

○莊子像讃　岡西惟中の獨吟に宗因が批判を加へたものの中に記されてある。
○岡西氏なにがし　岡西惟中。四七頁參照。
○入木の道　書道をいふ。
○十有五にして　論語「爲政篇」吾十有五而志于學」
○作においては　備前作の名刀に比して言つたのである。
○雜體　連歌集「菟玖波集」に俳諧は雜體の一として收めてある。
○栩々然　欣々としてよろこぶさま。
○蘧々然　自得のさま。一說、ありありと形あるさま。
○まつかう　「先づ此の如し」の意。それから「一昔眞向猿の顔」といふ諺にもぢつて續けた文。
○とまれ　「止まれ」と「兎まれ角もあれ」との言掛。

○女人形の記　來山追悼集「木の葉駒」享保二年刊）・「今宮草」等に出づ。今「木の葉駒」による。「今宮草」所出とはかなり異同が多い。

○よいかげんに暖にして潤ひあり　原文この次に數行あるが、や、猥雑に亙るので中略した。「今宮草」にもその部分は省いてある。

○女の石に　松浦佐用姫の故事。

※女人形の記

來山

西行法師に、銀猫を賜ひけるに、門前の童子にうちくれ通りけるよし。いはくこそあらめ、我は道にてやきものの人形にあひ、懐にして家に歸り、晝は机下に据ゑて眼によろこび、夜は枕上に休ませて、寢覺々々の伽として玩ぶ。世には畫木の達磨などを崇めて、科もなき身をにらみつめらるゝあり。それよりは遙にまさりなんや。ものいはず笑はぬかはりには、腹立てず悋氣せず、蚤蚊の痛みを覺えねば、いつまでも居ずまひを崩さず、留主に待つらんとの心づかひなし。酒を呑まぬは心うけれど、さもしげに物喰はぬにてよし。白き物塗らねばはげる事なし。四時同じ衣裝なれども、寒暑をしらねば此方更に氣のはる事なし。夏は向ひ見るに涼しく、撫づるに心よく、冬爐のもとをゆるさねば※よいかげんに暖にして潤ひあり。※女の石に

なりしためしを思へば、石が女に化すまじきものにもあらず。物にさへ當らずば千とせを過すとも變せぬかたち。なからんあとの若後家、さりとも氣遣ひなし。舅殿は何國の土工ぞや、その出所はしらず。あらうつゝなのいもの物語やな。

　折る事も高根の花や見たばかり

蓑蟲說　　素堂

蓑蟲々々、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ／＼となくは、孝に專らなるものか。いかに傳へて鬼の子なるらむ、淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも、瞽叟を父として舜あり、汝は蟲の舜ならむか。

蓑蟲々々、聲のおぼつかなくて且つ無能なるをあはれぶ。松蟲は聲の美なるが爲

○いも　妹。妻のこと。今宮草には「いもせ」とある。

○蓑蟲說　風俗文選による。別に素堂家集所出の文もある。

○ちゝよ／＼云々　枕草子「蓑虫いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似てこれも恐しき心地ぞあらんとて、親のあしき衣ひききせて、今秋風吹かん折にぞこんずる、まてよと言ひて逃げていにけるもしらず、風の音きゝしりて八月ばかりになれば、ちゝよ／＼とはかなげに鳴く、いみじくあはれなり」

○瞽叟　舜の父、性頑愚で舜を甚だ憎んだが、舜はよくこれに事へた。

○からうじて云々　辛うじて賤の手に養はれて後死ぬ。

○少しき　小さき。

○これを解きて云々　葉居卿「鷺裏歩魚缺二酒錢一、酒家門外繫二漁船一、幾回欲レ把二蓑衣一當、又恐明朝是雨天」による。

○太公すら云々　太公望が渭水に釣して文王に見出され、文王の師となつたといふ故事。史記齊世家に見える。

に籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くによりからうじて賤の手に死す。

蓑蟲々々、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとなむにより往來おだやかならず、誰が爲にこれをあまくするや。

蓑蟲々々、形の少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば其の身をうるほし、一葉を得ればこれがすみかとなれり。龍蛇の勢ひあるも、多くは人の爲に身をそこなふ。若かじ、汝が少しきなるには。

蓑蟲々々、漁父が一絲をたづさへたるに同じ。漁父は魚を忘れず、風波にたへず。幾度かこれを解きて酒にあてむとする。太公すら文王を釣るの謗あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

蓑蟲々々、玉蟲ゆゑに袖ぬらしけむ、田蓑の島の名にかくれずや。生けるもの誰かこのまどひなからむ。鳥は見て高くあがり、魚は見て深く入る。遍照が蓑をしぼりしも、ふるづまを猶忘れざるなり。

蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて定家の心を起し、秋は荻ふく風に音をそへて寂蓮に感をすゝむ。木枯の後は空蟬に身をならふや、骸も躬

○子陵も云々　會稽餘姚の人子陵は少時光武帝の學友であつた。後澤中に釣して、帝位についた武帝に見出された故事。後漢書逸民傳に見える。

○玉蟲ゆゑに　玉蟲草紙に、もろもろの蟲が玉蟲を戀ひ懸想文を送つた事が見える。

○田蓑の島　古今集、貫之「雨により田蓑の島をけふゆけば名にはかくれぬ物にぞありける」

○鳥は見て云々　莊子、齊物論「毛嬙麗姫、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛」の轉用。

○遍照が云々　遍照が初瀬寺で、妻の詣でるのを見ながら名乘らず、一夜を泣き明かし、着てゐた蓑が血涙に染まつたといふ話。大和物語に見える。

○春は柳に　和泉式部集「雨降らば梅の花笠あるものを柳につける蓑蟲やなぞ」

○櫻が塵に　拾遺愚草「春雨のふりにし里を來て見れば櫻の塵にすがるみの蟲」

○荻ふく風に　夫木抄、寂蓮「契りけむ荻の心もしらずして秋風たのむみの蟲の聲」

○男文子　漢文の意。

○四季　鬼貫の「獨ごと」による。題は今假に設く。

も共にすつるや。

又以男文字述古風

蓑蟲々々　落入䆫中　一絲欲絶　寸心共空
似寄居状　無蜘蛛工　白露甘口　青苔粧躬
従容使雨　飄然乘風　栖鴉莫啄　家童禁叢
天許作隠　我憐稱翁　脱蓑衣去　誰識其終

四季

鬼貫

鶯は、聲めづらしき朝より、障子にうつる日影ものどやかに覺え、きのふけふ野山もけしきだちて、閉ぢたる水もおのづから流るゝ比、聲も共によくほどけて、霞

○瀨田　近江瀨田川。

に伴ひ花に遊ぶ。又靑葉が枝に囀る比は、ひたすら惜しき。
蛙は、水の底にて鳴きそむるより、上に出でて雨戀ふ聲もあはれに、旅にあれば故鄕の空なつかしく、あるは夜もすがら野になく聲の、枕につたふ寢覺こそたゞならね。
柳は、花よりもなほ風情に花あり。水にひかれ風に隨ひてしかも音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水にうかみて風に步み、冬は時雨におもしろく、雪にながめ深し。
桃の花は、櫻よりよく肥えてにこやかなり。
梨の花は、ひそかに面白し。
螢は、一つ二つ見えそむる軒端、夜道ゆく草むら、瀨田の奥に舟さし入れて、花と見る柳の盛り。
蟬は、日のつよき程聲くるしげに、夕暮は淋しく、又山路ゆく折節、梢の聲谷川におつるも涼し。
蟲は、雨しめやかなる日、籬のほとりにおろ／＼鳴き出でたる、晝さへ物あはれ

○かい　「すつかり」といふ程の意。
○其の里人の云々　古今集、壬生忠岑「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ」
○名にたてる山　嵐山を指す。
○あからめなせそ　金葉集、源経信「大堰川岩波たかし筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ」
○おのが影さへ云々　或は大和物語の「わたつみの中にぞ立てるさを鹿は」好き者、「秋の山べやそこに見ゆらん」（檜垣の御）の連歌の句に據つたものであらうか。

なり。月の夜は月にほこり、闇の夜は闇に埋れず。あるは野ごしの風におのれおのれが吹き送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋限る命の程ぞはかなき。つくねんとして夜も更け心も沈みて、何にこぼるゝとは知らぬ涙ぞ落つる。

紅葉の比は、きのふの雨にけふの梢を思ひ、けふ又あすの時雨を思ふ。時しも空定めなければ、※かい打晴れて枝も葉も雫だちたるに、夕日こぼるゝ風情こそ色ことにうるはしけれ。遙に遠山をのぞめば、耳に通はぬ鹿の聲さへ心にうごきて、※其の里人の目をさましけん夜々の寝覺を思ひ、あるは※名にたてる山の嵐はげしき折節は、※あからめなせそといひけん筏士がつゞりの袖も、いつしか錦にかはりて、※おのが影さへ底に見ゆらん。花は散るをいとへど、紅葉は散りてだに眺めをのこす。

雁は、一つ／＼山越えて跡なく見果つる、舟の上にて故郷の方に行きちがふ聲、又番ひ／＼並びゆく中に、はしたなる鳥のまじはりたる、いづくの網にか身を失ひけんと、妻の心ぞ思ひやらる。

霰は、松にたまらず竹に聲もろく、地に落ちては米簸るに似たれば、雀鷄なんどのまがへて嘴を費しけるもわりなく見ゆ。消ゆることは露よりも猶速かなれば、眺

めもまた共にいそがし。
煤拂は、人の顏みな埃におぼれて、誰とも更に見えわかねば、聲を姿に呼びかはすもをかし。又置所わすれて、日ごろ尋ぬれども見えざりし物の出でなんどしたるは、我が物ながら拾ひたる心地ぞする。
餅搗は、家々に其の日をたがへず、けふはあすはと親しき人々行きかはして、とりどり賑ふ中に、老いたる女の例知り顏に下知なんどしたる家は、物※ごもりて見ゆ。又幼き人の柳※が枝に餅むしり附けて花と見る喜びこそ、其の昔戀しくは侍れ。

柴※門辭　　芭蕉

送歸許六之故郷餞別之文也

去※年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別れを惜む。その

○物ごもりて　物のあらはでなく奥まつたやうな感じ。こゝは大家とか舊家らしく見えるといふ程の意。
○柳が枝に云々　兒女等の玩とする餅花。

○柴門辭　風俗文選に出づ。又韻塞（許六・李由撰、元祿九年刊）には「許六離別詞」と題してある。今風俗文選による。
○去年　元祿五年壬申の秋。

別れにのぞみて、ひと日草扉をたゝいて、終日閑談をなす。

其の器、繪を好み、風雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其の學ぶ事二にして用をなす事一なり。まことや、君子は多能を恥づといへれば、品二にして、用一なる事、感ずべきにや。

畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用ふる所なし。たゞ釋阿、西行の言葉のみ、かりそめにいひ散らされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふると、のたまひ侍りしとかや。されば此の御言葉を力とし、その細き一筋をたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅もまたこれに同じといひて、灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

○君子は多能を恥づ　論語、子罕篇「吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不レ多也」

○師　許六をさしてゐる。

○徹に入り　徹は微の誤であらう。

○夏爐冬扇　王充、論衡に「作二無レ益之能一、納二無レ補之説一、猶下以レ夏進レ爐以レ冬奏上レ扇、亦徒耳」

○釋阿　藤原俊成の法名。

○後鳥羽上皇の云々　後鳥羽院御口傳に釋阿、西行の歌を稱した御言葉が見える。

○南山大師　弘法大師。叡山を北山といふに對して高野を南山といふ。その著性靈集に「書亦以レ擬レ古爲レ善、不下以レ似二古跡一爲上レ巧」

○柴門　草扉に同じ。卽ち芭蕉庵の柴門である。

○閉關說　芭蕉庵小文庫・今日の昔・風俗文選等に出づ。文に殆ど異同はない。今風俗文選による。
○くらぶの山の　古今集「梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞありける」
○忍ぶの岡　忍ぶの浦の誤であらう。新古今集「うちはへて苦しきものは人目のみ忍ぶの浦のあまのたく繩」。徒然草「忍ぶの浦のあまのみるめも所せく、云々」
○あまの子の　新古今集「白波のよするなぎさに世を過すあまの子なれば宿も定めず」
○人生七十云々　杜甫、曲江詩「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」
○はじめの老　初老。四十歳をいふ。

閉關說

芭蕉

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめに置くといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなるかた〴〵も多かるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下臥に、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も、守る人なくばいかなるあやまちをか仕出でん。あまの子の波の枕に袖しをれて、家を賣り身を失ふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、僅に二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したる、寢覺の分別何事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱增長して、一藝すぐるゝものは、是非の勝るゝもの也。是をもて世の營みにあてて、貪欲の魔界に心

を怒らし、溝洫におぼれて、生かす事あたはずと、※南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならんこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり、出ては他の家業を妨ぐるもうし。※尊敬が戸を閉ぢて、※杜五郎が門を鎖さんには。友なきを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫、自書しみづから禁戒となす。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

※幻住庵記　　芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、※翠微に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮たたせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。※唯一の家には、甚だ忌むなる事を、※兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふもまたたふとし。

○南華老仙　莊子。
○尊敬　尊敬の時、孫敬字は文寶、常に戸を閉ぢて讀書し、睡れば縄を首に繋ぎ、これを梁上にかけ一覺めるやうにしたといふ。(蒙求)
○杜五郎　穎昌の人、門を出でざる事三十年に及んだといふ。(宋史)芭蕉は長嘯子の文「うたゝ松」から引いたのであらう。
○幻住庵記　猿蓑・風俗文選等に出で、芭蕉の眞蹟も現存する。又支考の和漢文操にはその初稿「幻住庵賦」を載せ、なほ他の初稿も傳へられて居る。今風俗文選による。
○翠微　山の半腹をいふ。爾雅「山未ㇾ及ㇾ上、曰二翠微一」
○唯一の家　唯一神道の家、兩部神道に對していふ。吉田家。
○兩部光をやはらげ云々　止觀第六曰、「和光同塵結縁始、八相成道以論二其終一」

日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に、住み捨てし草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ、やねもり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。※あるじの僧何がしは、※勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかりむかしになりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年ばかりにして、※五十年やゝちかき身は、簑蟲のみのを失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、※高すなごあゆみぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、※今歳湖水の波に漂ひ、鳰の浮巣のながれとゞまるべき、蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣ね結ひそへなどして、卯月の始め、いとかり初に入りし山の、※やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名殘も遠からず、つゝじ咲き殘り、山藤松にかゝつて、時鳥しば／＼過ぐるほど、※宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、※魂呉楚東南にはしり、※身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、※城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びか

○あるじの僧何がし　膳所藩士菅沼修理定知。法名幻住宗仁居士といふ。曲翠の父定澄の兄。

○勇士菅沼氏曲翠　通稱外記といひ膳所の士。馬指堂と號す。享保二年奸臣曾我權太夫を斬りて自盡す。

○五十年やゝちかき　四十七歳。

○高すなご　砂の高く盛り上つたのをいふ。

○今歳　元祿三年。

○やがて出でじと云々　西行の山家集に「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん」

○宿かし鳥　燕をいふと。西行「山さわけ花をたづねて日はくれぬ宿かし鳥の聲もかすみて」。支考の百鳥譜に「かの法師の宿かし鳥とよみつゞけぬるより」とあるのに燕を言つてゐる。

○魂呉楚東南にはしり　杜甫登岳陽樓詩に「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、呉楚東南坼、乾坤日夜浮云々」。

○身は瀟湘洞庭に立つ　黄山谷題鄭防畫夾詩に「惠崇煙雨歸鴈、坐我瀟湘洞庭、欲喚扁舟歸去、故人言是丹青」

○城あり、橋あり　城は膳所城。橋は瀬田の橋。

ふ夕闇の空に、水鶏のたゝく音、美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野のふるきすみかもおもひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峰、袴腰といふ山あり、黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけむ萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峯に這ひのぼり、松の棚作り、藁の圓座を敷きて、

「幻住庵記」芭蕉

「幻住庵記」芭蕉

○士峯　富士山をいふ。

○田上山に云々　無名抄に「或人云、田上の下に曾束といふ所あり、そこに猿丸太夫が墓あり、庄のさかひにてそこの券に書きのせたれば皆人しれり云々」とある。今も曾束村に猿丸神社がある。

○網代守るにぞ　この歌は萬葉に見えぬ。近江輿地志略に古歌として引いた「田上や黒津の庄の痩男あじろ守るとて色の黒さよ」を誤ったのであらうか。

▽幻住庵記真蹟(部分)　(大津　村田氏藏。この文の初めと終の部分を示す。)

○かの海棠に云々　黄山谷、題ニ書峰閣一詩「徐老海棠巣上、王翁主簿峰菴、梅葩破ニ顫氷雪一、綠葉不レ見ニ黄柑一」註に「徐樂道、隱ニ於藥肆中一、家有ニ海棠數株一、結ニ巣其上一、時與レ客登ニ其間一、王道人、學ニ顫四方一、嘗結ニ一牢ケ主簿峰上一、嘗有ニ毛人一至ニ其間一問レ道」

○孱顔　王子瑞の詩に、「門前剣陳定住客、簷外孱顔皆好山」。蘇東坡の句に「摂衣步ニ孱顔一」。孱は巉に通ず。孱顔は山のそばだつ様をいふ。

○空山に云々　石林詩話に、「青山捫レ虱坐、黄鳥挾レ書眠」。又王荊公の詩句に「捫レ虱對ニ青山一」

○とく／＼の雫を　西行の歌と傳へられるものに「とく／＼と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかな」

眞筆　其の一

眞筆　其の二

猿の腰掛と名づけ、※かの海棠に巣をいとなみ、主簿峯に庵を結べる、王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡辟山民となりて、孱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく／＼の雫を侘びて、一爐の備へいとかろし。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物

ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此のたび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞ふ。いとやす〳〵と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。

晝はまれ〳〵とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、ゐのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞きしらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は痩せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずや

○高良山　筑後御井郡にある。
○加茂の甲斐何がし　加茂の祠官藤木甲斐守敦直。書家で加茂流又甲斐流といふ。高良山の僧正はその子寂源一山僧正で、高良山蓮臺院主であつた。
○農談、日既に云々　朱晦菴の雲谷雜詠の詩に、「野人敲門來、農談日西夕」
○燈を取りては罔兩に是非をこらす　莊子、齊物論「罔兩問景曰、曩子行今子止、曩子坐今子起、何其無特操與、景曰、吾有待而然者邪、吾所待又有待而然者邪」郭象の註に、「罔兩景外之微陰也、言天機自爾、坐起無待、無待而獨得者、孰知其故而責其所以哉、若責其所待而尋其所由、則尋責無極、卒至於無待、而獨化之理明矣」
○佛籬祖室　惠能禪師語錄に、「吾三十而窺佛籬祖室」
○樂天は五臟の神をやぶり　白氏文集、思舊詩に、「飢來呑熱麵、渴來飲寒泉、詩役五藏神、酒汨三丹田」
○老杜は痩せたり　李白、贈杜甫詩、「飯顆山前逢杜甫、頭戴笠子日卓午、爲問緣何太痩生、只爲從前

と思ひ捨ててふしぬ。

　先づたのむ椎の木もあり夏木立

奥の細道　　芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひてやゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の關越えんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

作レ詩苦こ」

○月日は百代の過客　李白の春夜宴二桃李園一序に「夫天地者、萬物之逆旅、光陰者、百代之過客、而浮生若レ夢、爲レ歡幾何、古人秉レ燭夜遊、良有レ以也」とあるによる。

○古人も多く旅に死せるあり　芭蕉の敬慕した古人、即ち李白・杜甫・西行・宗祇等は何れも旅で亡くなつたといはれて居る。

○海濱にさすらへ　貞享四年十月から翌五年にかけての吉野の吟行に際して、和歌浦・須磨・明石を巡覽した事をいつたのであらう。

○去年　貞享五年（元祿元年）。この年八月、芭蕉は名古屋から木曾路をへ、九月に江戸に歸つた。

○江上の破屋　隅田川沿岸（今深川區常盤町）の芭蕉庵をいふ。

○そゞろ神　人の心をそゞろかし（誘惑し）落着かせない神。

○道祖神　八衢彦及び八衢姫を祀る。俗には、猿田彦を祀るとも言ひ傳へてゐる。旅路の安全をまもる神といふ。

○三里　膝頭の下部の兩側の窩んだ處を三里といひ、そこに灸をすゑると道中健脚になると言傳へて居る。

○杉風が別墅　杉風は杉山氏。蕉門。幕府の御用魚商人で鯉屋とも稱した。深川六間堀の別墅を採荼庵と呼び、こゝに簗「イケス」を設けておいたといふ。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

※表八句を庵の柱にかけおく。彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として、※月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵よりつどひて、舟にのりて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

これを※矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ちて、※呉天に白髪の恨を重ぬといへども、耳に觸れていまだ目に見ぬ境、もし生きてかへらばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く※早加といふ宿にたどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨て難くて、路次のわづらひとなれるこそわりなけれ。

○表八句　草の戸の句を發句として作つた詞表の八句をいふ。五十韻百韻を懷紙四枚に書く時第一紙の表に八句を記す。

○月は有明にて　源氏物語、帚木「月は有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えてなかなかをかしき曙なり」

○矢立　矢立硯。昔、出征の士が箙の中に矢と共に入れて行つたのであるが、後旅行にも用ひられるやうになつた。

○呉天に白髪の恨を重ぬ　詩人玉屑、間信可上途僧詩に「笠重呉天雪、鞋香楚地花」。なほ白氏文集に「去年九日到東洛、今年九日來吳郡、兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黄」とあるに據つたとも、呉は五の誤で、李洞、送三藏歸西域詩「五天到日應頭白」に據るとも言はれる。

○早加　武藏北足立郡草加。千住から約二里。

○室の八島　下野國室の八島。大神「オホミワ」神社がある。

○富士一體　富士山麓大宮町にある淺間神社を指してゐる。

○無戸室に入りて云々　古事記・日本書紀に出てゐる傳說

室の八島に詣す。同行曾良が曰く、此の神は木花咲耶姫の神と申して、富士一體なり。無戸室に入りて燒け給ふ誓のみ中に火々出見の尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙をよみ習はし侍るもこの謂れなり。將このしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世につたふ事も侍りし。

三十日、日光山の麓に泊る。主の云ひけるやう、我名を佛五左衞門といふ。よろづ正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕もうちとけて休み給へといふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、主のなすことに心をとゞめて見るに、たゞ無智無分別にして正直偏固のものなり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の淸質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今この御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、國民安堵の栖穩かなり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

○煙をよみ習はし云々　室の八島の附近に淸水があり、そこからたちこめる水煙だといふ。古來歌に詠まれて名高い。

○このしろといふ魚を禁ず　このしろ一名つなし。慈元抄等に出てゐる傳說。

○日光山の麓　芭蕉はこの時、麓から二里ほど手前の今市に泊つたのだといふ說がある。

○佛五左衞門　蕉翁夜話（珪山撰、安永七年刊）によれば、元祿中の戸籍に今市宿上町西側に五左衞門といふのがあると。

○濁世塵土　佛說には現世を濁惡の世と見、五濁五塵ともいひ、（五濁は、劫、見、煩惱、衆生、命。五塵は、色、聲、香、味、觸）いづれも罪障の因となるものである。

○桑門　沙門と同じく梵語沙門摩那の音譯で、勤息即ち善を勤め惡を息める義、僧侶をいふ。

○剛毅木訥の仁に近きたぐひ　論語、子路篇「剛毅木訥近仁」

○御山　家康公の葬られてゐる日光山をいふ。

○今この御光　東照公の御威光をいふ。

○八荒　東西南北の四方と其の間々の四隅をいふ。どんな未開地の隅々にまでもの意。

黒髪山は、霞かゝりて雪いまだ白し。

剃り捨ててくろかみ山に衣更　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松島象潟の眺め共にせんことを悦び、かつは覊旅の難をいたはらんと、旅だつ曉髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘町を登つて瀧あり。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏より見れば、裏見の瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧に籠るや夏の初め

那須の黒羽といふ所に知る人あれば、これより野越にかゝりて直道を行かんとす。遙に一村を見かけて行くに、雨ふり日くる。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中をゆく。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。如何すべきや、されども此の野は縱横にわかれて、うひ／＼しき旅人の道ふみたがへん怪しう侍れば、此の馬のとゞまる處にて馬を返し

○黒髪山　日光山の主峰男體山。八雲御抄には下野へ名所に入れられてゐる。
○裏見の瀧　舊名荒澤の瀧、一名阿含の瀧ともいひ、裏面から見られるので世に裏見の瀧と呼ばれて名高い。
○夏　夏行（ゲギャウ）の事。安居（アンゴ）ともいふ。一夏九旬（陰暦四月十六日より七月十六日まで）の行で、靜室に安居して寺門を出でず修業をする。
○黒羽　日光から十六里、大關氏の城邑。
○野越　野を横ぎる事。
○直道　ヒタミチ。眞直な近道。
○歎きよれば　泣きついて頼みこむさまをいふ。
○野夫　田舍男。
○うひ／＼しき旅人　旅に馴れぬ人。
○怪しう　不安の意。

給へと貸し侍りぬ。ちひさき者ふたり、馬の跡したひて走る。一人は小姫にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結ひつけて馬を返しぬ。

黒羽の館代、淨坊寺何がしの方に音づる。思ひかけぬ主の悦び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠などいふが朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴ひて、親屬の方にも招かれ、日を經るまゝに、ひと日郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、別しては我が國氏神正八幡と誓ひしも此の神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺といふあり。そこに招かれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

たてよこの五尺にたらぬ草の庵

○小姫　小娘。
○館代　館主の留守役。
○淨坊寺何がし　大關氏の家老、淨坊寺圖書高勝、俳號秋鴉。
○桃翠　鹿子畑左太夫豐明、翠桃の誤りであらう。[illegible]
○犬追物　那須野に逃れた玉藻前の化した狐を射る爲、犬を以て騎射する事を習つたのに始まるといふ。武士の騎射の技として用ひられるやうになつたのである。
○玉藻の前　[illegible]
○與市扇の的を云々　平家物語、源平盛衰記に出づ。
○別しては　源平盛衰記「別しては下野國日光の權現、宇都宮、氏の御神那須大明神」
○修驗光明寺　那須の餘瀬村にある。修驗道、所謂山伏宗で、役小角を祖とする。
○行者　姓は役公、名は小角、役の優婆塞とも稱す。
○雲岸寺　黒羽の東、里餘にある。正しくは雲巖寺、臨濟宗の名刹。
○佛頂和尚　常陸鹿島根本寺の住僧で、芭蕉の參禪の師。

○十景　雲巖寺記によれば、竹林峯、海岸閣、十梅林、龍雲洞、玉几峯、鉢盂峯、水分石、千丈岩、飛雪亭、呑月橋をいふ。なほこの外に五橋三水の勝景があつたといふ。
○妙禪師の死關　南宋時代の高僧原妙禪師が坐禪して、十五年間外に出なかつたといふ洞窟。
○法雲法師　[illegible]時代の高僧で、庵を[illegible]に結び、[illegible]かつたといふ。石室とはその庵を言つたのであらう。
○殺生石　玉藻前の惡狐が化したといふ石で溫泉神社の附近にある。
○溫泉　湯町、那須溫泉。今の湯本にある。
○清水ながるゝの柳　新古今集、西行「道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ち止りつれ」

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩にかきつけ侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲巖寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道の程うちさわぎて、覺えずかの麓に至る。山は奧あるけしきにて、谷道遙に松杉黑く苔したたりて、卯月の天いま猶寒し。十景盡くる所、橋を渡つて山門に入る。

さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るが如し。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、取りあへぬ一句を柱に殘し侍りし。

是より殺生石に行く。館代より馬にて送らる。此の口付のをのこ短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬引きむけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出づる山陰にあり。石の毒氣いまだ滅びず、蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほど重なり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里に有りて田の畔にのこ

る。此の所の郡守戸部某の、此の柳みせばやなど折々にの給ひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日此の柳の蔭にこそ立ちより侍りつれ。

田一枚植ゑて立ち去る柳かな

心もとなき日數かさなるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へとたより求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人心をとゞむ。秋風を耳にのこし、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔の筆にとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川をわたる。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。影沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらず。須賀川の驛に等窮といふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

○いかで都へと　拾遺集、平兼盛「たよりあらばいかで都へ告げやらん今日白河の關は越えぬと」

○三關　念珠關、白河、勿來を奥羽の三關といふ。

○秋風を　後拾遺集、能因「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」

○紅葉を　千載集、源頼政「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關」

○古人冠を正し　清輔の「袋草子」に、竹田大夫國行が白河の關を過ぎる時、能因が「秋風ぞ吹く」と詠まれた所だからといふので、裝束を改めたといふ話が出て居る。

○會津根　磐梯山。

○岩城　内藤能登守、七萬石の城下。

○相馬　相馬彈正昌胤、六萬石の城下。

○三春の庄　秋田信濃守五萬石の城下、庄は莊園の意。

○影沼　今は鏡沼といふ。影をよくうつすと傳へられる。

○等窮　相良伊左衞門、乍單齋、又異庵と號し須賀川の驛長で、かつて俳諧を石田未得に學んだといふ。寶永二年歿、年七十八。

風流のはじめやおくの田植うた

無下に越えんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三巻となしぬ。

此の宿の傍に、大きなる栗の木蔭をたのみて世をいとふ僧あり。橡ひろふ太山もかくやと閒に覺えられて、物にかきつけ侍る。その詞、

栗といふ文字は、西の木とかきて西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此の木を用ひ給ふとかや。

世の人の見つけぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿をはなれてあさか山あり。路より近し。此のあたり沼多し。かつみ刈る比もやゝ近うなれば、いづれの草を花がつみとはいふぞと、人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼をたづね人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島にやどる。明くれば、しのぶもぢ摺の石をたづねて忍ぶの里に行く。遙か山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童部の來りて教へける、昔は此の山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして此の石を試み侍るをにくみて、此の谷

○三巻　一巻の誤寫であらう。
○僧　名可伸、[illegible]
○橡ひろふ太山　山家集「山深み岩にせかるゝ水ためんかつ〳〵落つる橡拾ふほど」
○栗といふ文字は　[illegible]
○行基菩薩　泉州大鳥郡の人、聖[illegible]一年寂、年八十二。
○檜皮　古名安積の宿。今日和田町。
○あさか山　日和田[illegible]古來和歌に名高い。
○沼　あさか沼と、あさか山と共に古[illegible]名高い。
○かつみ　[illegible]
○かつみ刈る比　[illegible]
○二本松　今の安達郡、[illegible]
○黒塚の岩屋　[illegible]こもれりといふはまことか」の歌に[illegible]
○しのぶもぢ摺　信夫里の名物。

石の上に麥を[illegible]その上から忍草[illegible]
[illegible]
[illegible]名高い。

○月の輪の渡　福島から一里[illegible]

○佐藤庄司　[illegible]

○飯塚　飯坂の誤[illegible]今の飯坂溫泉場。

○鯖野　佐場野。飯坂の南。

○丸山　飯坂の西字甲、佐藤庄司[illegible]

○古寺　醫王寺[illegible]

○女なれども　佐藤繼信、忠信兩人の死後、二人の妻が甲冑を着て[illegible]

○墮淚の石碑　晉の羊祜が[illegible]

につき落せば、石の面下ざまに伏したりといふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪の渡を越えて、瀬の上といふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山ぎは一里半ばかりに有り。飯塚の里鯖野と聞きて、尋ね〳〵行くに、丸山といふに尋ねあたる。これ庄司が舊館なり。麓に大手の跡など人のをしふるに任せて泪をおとし、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先づ哀なり。女なれどもかひ〴〵しき名の世に聞えつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、こゝに義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日のことなり。其の夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座に莚を敷きてあやしき貧家なり。灯もなければ圍爐裏の火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて、雷鳴り雨しきりに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて消え入るばかりになん。短夜の空もやう〳〵明くれば、

○桑折　古の伊達驛。飯坂から一里[illegible]
○伊達の大木戸　[illegible]入る關門の稱。伊達の關ともいふ。
○鐙摺　[illegible]
○白石　仙臺の家臣片倉氏の城下。
○笠島　名取郡にある地名。[illegible]
○藤中將實方の塚　一條天皇の[illegible]通り、落馬して死んだといふ。（源平[illegible]）
○かたみの薄　新古今集、西行[illegible]
○岩沼　[illegible]
○武隈の松　[illegible]

又旗立ちぬ。猶夜の餘波こゝろ進まず。馬かりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をかゝへて、かゝる病覺束なしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縱橫にふんで、伊達の大木戸を越す。

鐙摺、白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程ならんと人にとへば、これよりはるか右に見ゆる山ぎはの里を蓑輪・笠島といふ。道祖神の社、かたみの薄今にありと敎ふ。このごろの五月雨に道いと惡しく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、蓑輪・笠島も五月雨の折にふれたりと、

　笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目さむる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先づ能因法師思ひ出づ。往昔陸奧の守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしとは詠みたり。代々あるは伐り、あるいは植ゑつぎなどせしと聞くに、今はた千歳の形とゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

あやめ草足に結ばんわらぢの緒

かの畫圖に任せてたどり行けば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年々十符の菅菰を調へて國守に獻ずといへり。

壺碑　市川村多賀城に有り。

つぼの石ぶみは、高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ちて文字幽なり。四維國界の里數をしるす。此城、神龜元年、按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣猲修造。而十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道改まり、石は埋れて土に隱れ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳存命の悦び、羇旅の勞を忘れて泪も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松のあひ〳〵みな墓原にて、羽をかはし枝を連ぬるちぎりの末も、終はかくのごときと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜

○奥の細道　[illegible]

○十符の菅菰　古歌に、「陸奥の十[illegible]

○壺碑　古歌に知られた壺碑は、實[illegible]だともいふ。

○四維　四方四隅をいふ。

○猲　朝猲「アサカリ」の一字を脱落[illegible]

○野田の玉川　鹽竈の南多賀城址附近。六玉川の一で古歌に名高い。

「沖の石　[illegible]あつて、古來歌枕として名高い。

「末の松山　[illegible]

「羽をかはし云々　[illegible]

かすかに雛が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて肴分つ聲々に、つなでかなしもと詠みけん心もしられて、いとゞ哀なり。その夜目盲法師の琵琶をならして奥淨瑠璃といふ物をかたる。平家にもあらず舞にもあらず、鄙びたる調子うちあげて、枕近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階九仭にかさなり、朝日朱の玉垣を輝かす。かゝる道のはて塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、今目の前に浮びてそゞろにめづらし。渠は勇義忠孝の士なり。佳命今に至りて慕はずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名も亦是にしたがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其の間二里餘、雄島の磯につく。

抑も事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。東

篇[illegible]玄宗皇帝と楊貴妃との間の悲戀をうたつたもの。

○つなでかなしも　古今集、東歌「みちのくはいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟の綱手かなしも」

○奥淨瑠璃　[illegible]淨瑠璃と、[illegible]淨瑠璃は他國に無きもので、此の國に限るなり。二十八[illegible]、鄙びたる妙唄なり、今[illegible]と云ふ[illegible]の事など語るところである。[illegible]

○平家　平家琵琶[illegible]

○舞　幸若舞をいふ。

○鹽竈の明神　鹽竈神社、今國幣中社。

○國守　伊達政宗。慶長十二年修造す。

○和泉三郎　秀衡の三男、藤原忠衡。父の遺言を守つて義經に味方し、兄泰衡に[illegible]

○佳命　佳命は佳名、通用させたもので、令名、芳名の義。

○人能く道を勤め云々　出典未[illegible]

○雄島の磯　[illegible]の西南、古歌に名高い。

○扶桑　山海經、淮南子、十洲記などに見えてゐる東海中の日の出る處にある神木で、長者數千丈、大[illegible]、兩[illegible]同根偶生して相依倚するので扶桑といふ、とある。それから東海の[illegible]國にある日本の名に用ひられた。

○洞庭　揚子江の南、湖南省に屬する大湖で、湖畔に名所多く、詩にも詠まれてゐる。

○西湖　[illegible]杭州にある名[illegible]風光の美で[illegible]

○江の中三里 [illegible]
○浙江の潮 浙江は浙江省にある[illegible]河口の潮の滿干が甚しく奇觀を呈す。
○兒孫云々 [illegible]
○窅然 [illegible]
○美人の顏を粧ふ 東坡、飲湖上初晴後雨「若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」[illegible]らうか。
○大山祇 大山祇神。山嶽を司る神
○造化の天工 天地を創造した神のふしぎなはたらき。
○雲居禪師 京都妙心寺の僧、寛永十三年伊達忠宗に招かれ、瑞巖寺の[illegible]。
○原安適 [illegible]江戸[illegible]に住む。和歌を善くし、芭蕉は和歌をこの人に學んだとも傳へられてゐる。
○松が浦島 宮城郡七ヶ濱村菖蒲田の海岸をいひ、松島とは別の地。
○瑞岩寺 瑞巖寺[illegible]寺、松島寺ともいつた。
○眞壁の平四郎 僧名法身。入宋して經山の無準禪師に學び、歸朝し

南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右に連る。負へるあり抱けるあり、兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色窅然として美人の顏を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。はた松の木陰に世を厭ふ人もまれ／＼見え侍りて、落穗松笠など打烟りたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階をつくりて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれ時鳥　曾良

予は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩有り、原安適松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。かつ杉風・濁子

が發句あり。

十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世のむかし、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の德化によりて、七堂甍改りて、金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。

十二日、平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに、雉兎蒭蕘の行きかふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ。こがね花さくと詠みて奉りたる金花山海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を爭ひて竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の萱原などよそ目に見て、遙なる堤

て瑞巖寺を開いたと傳へられる。この人についての俗傳は多い。

○金壁　金碧の誤か。

○見佛聖　鳥羽天皇の御宇の人で、庵を雄島に結び十二年間苦行して法華經六萬部を讀誦したといふ。

○あねはの松　伊勢物語に「栗原やあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを」。古くから歌に詠まれて有名な松である。今の栗原郡澤邊村字姉齒附近にあつたのである。

○緒だえの橋　後拾遺集「みちのくの緒絶の橋や是ならん踏み見踏まずみ心まどはす」その他古歌に多く詠まれて名高い。陸奥國に、岩城小名濱、多賀城、鹽竈及び古川の四處に緒絶の橋の名を傳へてゐる。

○雉兎蒭蕘　孟子、梁惠王下に「文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉」とある。之を芭蕉が借り用ひたのである。雉兎をとる獵人や芻蕘すなはち草を取る賤人、即ち山賤の事。

○こがね花さく　萬葉集、家持、「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのくやまに黄金花咲く」。黄金獻上の事は續日本紀天平勝寶元年の條に出て居る。聖武天皇の御代の事である。

○金花山　石の卷から海上十三里を距て、實は石の卷からは金花山は見えないので、芭蕉は他の岬などをそれと誤認したものらしい。元は萬葉集にいはゆるみちのく山は小田郡で、今の金花山は牡鹿郡であるから、勿論兩者は全く別であるが、後世これを黄金花咲くといふ歌に附會し、芭蕉もその附會說のまゝに信じて居たのである。

○袖の渡り　石の卷の北方、北上川の渡しで、古來歌に名高い。新後拾遺集に「みちのくの袖のわたりの涙川心の中に流れてぞすむ」

○尾ぶちの牧　石の卷の對岸。後撰集に「みちのくの尾ぶちの駒も野飼ふにはあれこそまされなつくものかは」

○眞野の萱原　今稻井村大字に眞野村がある。萬葉集、笠郎女、「みちのくの眞野の萱原遠けれど面影にして見ゆといふものを」

を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に至る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門のあとは一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金鷄山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

　　夏草や兵どもが夢の跡

　　卯の花に兼房みゆる白毛哉　　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍みて甍を覆ひて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

○長沼　[illegible]通つた道程からは大分離れてゐるので、之はたゞそのあたりの沼地について、心細き長沼とつゞけた語法と[illegible]

○戸伊摩　[illegible]。石の巻の北八里。

○三代の榮耀一睡の中　三代は[illegible]所謂黄粱一炊の夢で、盧生の故事に基づいたものである。

○大門　總門、表門をいふ。

○秀衡が跡　[illegible]今も其の跡一帯を御所屋敷と呼んで[illegible]

○金鷄山　高館の西南、[illegible]を頂上に埋めたといふ傳説がある。

○高館　平泉驛の北[illegible]一名衣川館、又俗に判官館と呼び、義經の居館で[illegible]

○和泉が城　[illegible]

○泰衡　[illegible]秀衡の次男。
○衣が關　高館を去る一町許の所に古關の跡がある。衣が關の址と[illegible]謠「イセ八幡日吉[illegible]山明神の附近[illegible]」[illegible]。
○國破れて云々　杜甫の春望に「國破山河在、城春草木深、感時花濺涙、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪」。
○兼房　[illegible]高館で義經の最期を[illegible]、館に火をかけ白髮を亂して奮戰した事が義經記に見える。
○二堂　中尊寺の經堂と光堂をいふ。光堂は金色堂ともいひ[illegible]ある。
○三將　清衡、基衡、秀衡の三代。經堂には三將の像と文殊菩薩、優塡大王、善財童子で、芭蕉は之を誤つたらしい。
○四面新に圍みて云々　正應元年、鎌倉幕府七代の將軍惟康親王の時、貞時及び宣時に命じて、金色堂の[illegible]雨露を防がしめ、堂の上に覆堂を作らせられたことをいつたのである。

五月雨の降りのこしてや光堂

南部道遙かに見やりて、岩手の里に泊る。小黑崎、みつの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて、漸として關を越す。大山をのぼつて日すでに暮れければ、封人の家をみかけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

主の云ふ、是より出羽國に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を頼み侍れば、究竟の若者反脇差をよこたへ、樫の杖を携へて我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にも逢ふべき

○南部道　盛岡街道。
○岩手の里　古書古歌類にいふ岩手の里は、多くは陸中の岩手郡を指したものゝやうであるが、こゝの岩手の里は、陸前玉造郡岩出山町を指したものと思はれる。陸奥衛、「磐提山、卽ち城下の名なり。いはての關こゝなり」。
○小黑崎、みつの小島　古今集、東歌に「をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを」。岩出山町の西北鍛冶谷澤玉造川の北岸に小黑崎があり、その川中にみつの小島があるといはれる。
○鳴子の湯　岩出山町から五里餘。今も有名な溫泉である。
○尿前の關　鳴子の西半里。
○大山　鳴子から羽前へ越える中山越をいふ。
○封人　國境を守る人の義だが、こゝは只國境の住人をいつたものと思はれる。

日なれど、暑き思ひをなして後について行く。主のいふにたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜行くがごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中踏分け踏分け、水をわたり岩に蹶きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此の道必ず不用の事あり、恙なう送りまゐらせて仕合したりと、悦びて別れぬ。あとに聞きてさへ胸とゞろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ふ者をたづぬ。かれは富める者なれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日比とゞめて長途のいたはりさまざまにもてなし侍る。

　涼しさを我が宿にしてねまる也

　這出でよかひ屋が下の蟾の聲

　眉掃を俤にして紅粉の花

　蠶飼する人は古代のすがた哉　　曾良

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々の勸むるによつて、尾花澤より取つてかへし、其の間七里ばかりな

○一鳥聲きかず　宋の王安石の詩「鍾山即事」に「澗水無聲遶竹流、竹西花草弄春柔、茅簷相對坐終日、一鳥不レ啼山更幽」

○雲端に土ふる　杜甫、鄭駙馬宅宴洞中に「主家陰洞細煙霧、留客夏簟青琅玕、春酒杯濃琥珀薄、冰漿碗碧瑪瑙寒、誤疑茅堂過江麓、已入風磴霾雲端、自是秦樓壓鄭谷、時聞雜佩聲珊珊」

○最上の庄　羽前最上郡新庄をいふのであらう。

○尾花澤　羽前北村山郡にある。新庄の東南五里餘、紅花の名産地として知られた。

○清風　鈴木八右衞門。芭蕉の門人。紅花問屋で富裕であつたといふ。

○ねまる　すわる、寢る等の意の羽東、東北方言。芭蕉は故らにこの方言を用ひたのである。

○かひ屋　萬葉集、十六「朝霞かひやが下に鳴くかはづしぬびつゝありと告げむ子もがも」。かひやの語義については、鹿火屋・蚊火屋・飼屋等の諸說があるが、芭蕉は蠶飼する家の義に用ひたのである。

○立石寺　山形の東北三里。東村山

り。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川乘らんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。こゝに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一卷のこしぬ。此の度の風流こゝに至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。碁點・隼などいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻つみたるをやいな舟といふならし。白絲の瀧は青葉のひまひまに

郡山寺村にあり、天台宗、貞觀年間の建立にかゝる。俗に山寺といふ。

○慈覺大師　圓仁。傳教大師に學び、延暦寺の座主として天台宗の基礎を固めた名僧。

○乘らんと　川舟に乘つて下らうと。

○大石田　尾花澤から一里ばかり西方の最上河畔にある。

○古き俳諧の種　貞門、談林風等の俳諧が風に行はれ、その風流の道をなほ忘れずに居る事をいふ。

○蘆角一聲の心　支那の北方の胡人が吹きならす蘆笳（蘆笛）一聲の心といふので、我が東北邊陲の人の風流心を喩へたのである。

○一卷　大石田高野平右衞門の許で催された一卷の歌仙で、今も此の家に傳へられてゐる。

○最上川　菅菰抄に「最上川は同國米澤より出る大河なり。みちのくより出て山形を水上とするものは須川と云て別なり。須川もながみ川におちる大河にて、最上領のうち溫江といふ村のあたりにて最上川に落入く。翁（芭蕉）は川下よりやうやく舟を[illegible]の景色見給はぬ故に、人の云にまかせて、お[illegible]くはしるし申されたるなるべし」

○碁點・隼　ごてんは鹽川村の西の渡津をいひ、はやぶさは隼瀨ともいひ、ごてんの北約一里半の富並村にある。菅菰抄に「川中あなたこなたに大岩六七散在して碁を打ち散らしたるが如し。故に碁點といふ。はやぶさは隼ごとく鳥の名なり。此處は水底に盤石ひしと[illegible]、行く[illegible]早く[illegible]矢を射落すが如し」

○板敷山　月山山系の北端の最上川に限られた處に當る。[illegible]古抄に「みちのくに近きいではのいたしきの山に年ふるわれぞわびしき」

○いな舟　古來歌に名高い。古今集、東歌に「最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」

○白絲の瀧　板敷山の北方、最上川の北岸にかゝる[illegible]として

落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲つて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山にのぼる。圖司左吉といふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において俳諧興行。

ありがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師は、いづれの代の人といふことを知らず。延喜式に羽州里山の神社とあり。書寫、黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して羽黒山といふにや。出羽といへるも、鳥の毛羽を此の國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明かに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法をはげまし、靈山靈地の驗效、人貴びかつ恐る。繁榮長へにして、めでたき御山と謂つべし。

八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、強力といふものに導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んで登る事八里、更に日月行道の雲關に入る

○仙人堂　[illegible]存を祀るといふ。堂下に仙人が薦[illegible]

○圖司左吉　[illegible]丸)と號す。羽黒山麓の手向村の人。[illegible]

○別當代　別當心得といふ程の役。

○會覺阿闍梨　[illegible]も一座してゐる。

○南谷の別院　[illegible]南谷は山中の谷の名で、北谷南谷などとい[illegible]鳥に「別當は若王寺、高山の嶺をうけておびたゞしき一構、風景言ふに[illegible]の用水は瀧をうけて湛へ、圓は高野に同じ」とある。この若王寺は即ち本坊である。

○權現　[illegible]といふ。今の國幣小社出羽神社。

○能除大師　境內の蜂子神社を能[illegible]が、能除大師の本身は明かでない。

○延喜式に云々　[illegible]里山[illegible]

かとあやしまれ、息絶え身こゞえて、頂上に臻れば、日沒して月顯はる。笹を敷き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋といふあり。此の國の鍛冶靈水を選びて、こゝに潔齋して劔を打つ。終に月山と銘を切つて世に賞せらる。彼の龍泉に劔を淬ぐとかや。干將莫耶の昔をしたふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる櫻の蕾半ば開けるあり。降りつむ雪の下に埋れて、春をわすれぬ遲櫻の花の心わりなし、炎天の梅花こゝに薫るがごとし。行尊僧正の歌の哀れもこゝに思ひ出でて、猶まさりて覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍つて筆をとゞめて記さず。坊にかへれば、阿闍梨の需に依つて、三山順禮の句々短册に書く。

涼しさやほの三日月の羽黑山

○鳥の毛羽を云々　かゝる傳説はあるが風土記には見えない。

○武江東叡に屬して　江戸の東叡山寛永寺に屬し、天台宗であるといふ意。

○止觀　梵語。止は停止又は止息の意、諸法停止して動かず、妄念を止息する事をいふ。

○圓頓融通　天台の[illegible]。圓は圓滿、[illegible]此弘誓[illegible]

○木綿しめ　[illegible]紙縒にて[illegible]したる[illegible]山に登る人人[illegible]

○寶冠　白布で頭を包[illegible]頭巾のやうにしたもの。

○强力　强力ともいふ。山伏や登山者の荷物を負うて先導する者をいふ。

○鍛冶小屋　月山に鍛冶小屋があり刀を鍛へたといふ。月山鍛冶の作刀は、月山物又は出羽物と呼ばれ、永曆の頃の鬼王丸といふ者を祖とし、その子月山から代々相ついで居る。

○龍泉　龍泉は泉の名で、晉太康地記に「汝南西平縣有龍泉水可用淬刀劍、特堅利」この龍泉で鍛淬された劍が堅利な所から、後には利劍を龍泉ともいふやうになつたといふ。

○淬ぐ　焼いた刃を水に浸して金質を堅くすること。

○干將莫耶　呉越春秋、闔閭内傳に、呉王が闔閭、干將の二人に名劍二口を作らしめた所が、干將は其の妻莫耶と共に良劍二口を作り、二人の名を、之に名づけたとある。

○炎天の梅花　禪林句集に「雪裏芭蕉摩詰畫、炎天梅蕊簡齋詩」

○行尊僧正の歌　金葉集、雜に「大峯にて思ひがけず櫻の咲きたるを見て詠める、もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」

雲の峰幾つくづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　　曾良

羽黒を立つて、鶴が岡の城下長山氏重行といふ武士の家にむかへられて、俳諧一巻あり。左吉も共に送りぬ。川舟に乗りて酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海に入れたり最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸をせむ。酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひいさごを踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く比、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して、雨も亦奇なりとせば雨後の晴色又たのもしと、蜑の苫屋に膝を入れて雨の晴るゝを待つ。其の朝、天よく霽れて朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかうの岸に舟をあがれば、花の上漕ぐとよまれし櫻の老木、

○錢ふむ　この山では參詣者は錢を惜しまず賽し、又道に散つた賽錢にも目をくれない風習である。

○鶴が岡　今鶴岡市。羽黒山から四里餘。

○長山氏重行　酒井侯の家臣、通稱五右衛門、字は重行、俳號を重行といふ。

○淵庵不玉　伊東氏玄順。酒井侯の醫であつた。不玉はその俳號。

○象潟に方寸をせむ　自分の長い行脚も、もう僅か象潟といふ方寸の地を餘すばかりにおしつめて來たの意。

○闇中に莫作して　莫作は、摸索に通ず。手さぐりして。

○雨も亦奇なりとせば云々　蘇東坡、飲湖上初晴後雨に「水光瀲灔晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」

○花の上漕ぐ　西行の詠と傳へられる歌に「象潟の櫻は波に埋もれて花の上こぐ蜑の釣舟」

西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり、神功后宮の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず。いかなる事にや。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影うつりて江にあり。西はむやむやの關路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道遙かに、海北に構へて浪うち入るゝ所を汐ごしといふ。江の縱橫一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は怨むがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴脛ぬれて海すゞし

祭禮

象がたや料理何くふ神まつり　曾良

蜑の家や戸板を敷きて夕すゞみ　美濃の國の商人　低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

浪こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

○神功后宮　后宮は皇后の誤である。神功皇后の御事はもとより附會の說である。

○南に鳥海　實は東南。隨つて以下に記す方角も順にちがつてゐる。

○むや〳〵の關　うやむや、もやもや、いなむや等ともいふ。陸前と羽前の境にあつた關。

○西施が　前掲東坡の詩句による。なほ發句篇二三二頁參照。

○料理何くふ　象潟は殺生禁斷の地で、明神の祭には精進したといふ。

○浪こえぬ　後撰集、元輔「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは」。詩經、關雎「關々雎鳩在河之洲、窈窕淑女君子好逑」による。

○加賀の府 [illegible]意。

○鼠の關 [illegible]と越後との國境に當る。鶴岡の西南[illegible]

○市振の關　古へ關塞のあつた地で[illegible]越後[illegible]

○親知らず子知らず　越後[illegible]以下の難所があつた。

○白波のよする汀に云々　[illegible]にとつて言ふ。

○業因 [illegible]

酒田の餘波日をかさねて、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國市振の關にいたる。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡に横たふ天の河

今日は親知らず・子知らず・犬もどり・駒かへしなどいふ北國一の難所をこえて疲れ侍れば、枕引きよせて寢たるに、一間隔てて面の方に、若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老いたるをのこの聲も交りて物語するを聞けば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとて、此の關までをのこの送りて、あすは故郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白波のよする汀に身をはふらかし、蜑のこの世をあさましう下りて、定めなき契日々の業因いかにつたなしと、物いふを聞く〳〵寢入りて、あした旅立つに、我々に向ひて、行方知らぬ旅路のうさ、餘り覺束なうかなしく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣のうへの御情

に、大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れども、我
我は所々にてとゞまる方多し、只人の行くに任せて行くべし、神明の加護必ず恙な
かるべしと云ひすてて出でつゝ、哀れさ暫らく止まざりけらし。

　一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書きとゞめ侍る。

　黑部四十八か瀨とかや、數しらぬ川をわたりて、那古といふ浦に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものをと、人に尋ぬれば、これより五里磯づたひしてむかうの山陰に入り、蜑の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと云ひおどされて、加賀の國に入る。

　早稻の香や分け入る右は有磯海

　卯の花山・くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり、それが旅宿を倶にす。

　一笑といふ者は、此の道にすける名のほのぼの聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善をもよほすに、

○結縁　佛語。佛の道に縁を結ぶ事。

○那古といふ浦　那古は放生津（今新湊町）の舊名である。萬葉集に「奈呉の海の釣する舟は今こそは舟棚うちてあへて漕ぎ出め」又、「奈呉の海の沖つ白浪しくしくに思ほえむかも立別れなば」等詠まれてゐる。

○擔籠の藤浪　萬葉集に「多祜の浦の底さへにほふ藤なみをかざして行かむ見ぬ人のため」。今氷見町附近の十二町潟が古への布勢湖の面影をとゞめたもので、多祜の浦は布勢海の一の浦であつた。

○卯の花山　くりから山の續きにある。「[illegible]、日かげさす卯の花山の小忌衣誰ぬぎかけて神[illegible]りけむ」など、古歌に多く詠まれて居る。

○くりからが谷　倶利伽羅峠の山中の谷で、源平の戰によつて名高い。

○何處　傳不詳。猿蓑等に句が見える。

○一笑　小杉氏、茶屋新七と稱す。もと高瀬梅盛門。元祿元年十一月六日歿、年三十六。

○其の兄　ノ松と號し、一笑の爲に追善集「西の雲」を撰んだ。

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あか〳〵と日は難面も秋の風

小松といふ所にて

しをらしき名や小松吹く萩薄

此の所太田の神社に詣づ。實盛が甲、錦の切あり。往昔源氏に屬せしとき、義朝公より賜はらせ給ふとかや。げにも平士の物にあらず。目庇より吹返しまで、菊唐草の彫りもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ちたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり緣起に見えたり。

むざんやな甲の下のきり〴〵す

山中の温泉に行くほど、白根が嶽あとに見なして步む。左の山際に觀音堂あり。

○あか〳〵と　發句篇一二三四頁參照。

○小松　能美郡小松町。

○太田の神社　今小松町上本折町にあつて、多太八幡といふ。

○實盛　齋藤別當實盛。越前の人で、始め源氏に屬して源義朝に從ひ、後平氏に歸して平宗盛に仕へ、北國の合戰に、維盛に屬して從軍し、源氏の軍と戰ひ、篠原の役に手塚光盛の爲に討たれた。

○錦の切　赤地錦の鎧直垂の切。實盛が錦の直垂を着て戰つた事平家物語に見える。たゞし平家物語によれば宗盛から賜はつたとある。

○平士　ひらざむらひ。普通の兵卒。

○むざんやな　謠曲、實盛「あなむざんやな、齋藤別當にて候ひけるぞや」

○白根が嶽　加賀の白山。

花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名づけ給ふとや。那智・谷組の二字を分ち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其の效有明に次ぐと云ふ。

山中や菊は手折らぬ湯の匂

あるじとするものは久米之助とて、いまだ小童なり。彼が父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかしこゝに來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞徳の門人となつて世に知らる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずといふ。今更昔がたりとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

行き〱て倒れふすとも萩の原　曾良

と書き置きたり。行く者の悲しみ殘る者のうらみ、隻鳧の別れて雲に迷ふがごとし。予もまた

○那智　紀伊。
○谷組　谷汲とも書く。美濃。
○有明　有馬の誤寫かといふ。
○久米之助　泉屋久米之助の事。後甚右衛門といふ。この時十四歳か。桃夭の號を與へられた。[illegible]
○彼が父　泉屋久兵衛、俳號武矩。
○洛の貞室云々　この事歷代滑稽傳や俳諧家譜傳等に見えて居るが、事實か否かは確でない。
○長島　伊勢桑名郡、桑名町の北にある。
○行き〱て　山家集「いづくにか眠り〱て倒れふさむと思ふ悲しき道芝の露」
○隻鳧の云々　隻は雙の誤であらう。蒙求、「李陵初詩」蘇武を送るに別れる時に「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留斯館、我當歸故鄉」

○書付　笠に同行二人と書いてあるのをいふ。
○大聖持　正しくは大聖寺。
○衆寮　禪宗で修業する僧衆の寄宿舍をいふ。
○鐘板　雲板ともいふ。唐銅製のもので、厨前又は齋堂に掛け、主として衆僧に二度の食時を報ずる時にうつ。
○庭掃きて　禪寺などに宿つた者は、出發の際淸掃して去るのが禮である。
○吉崎の入江　入江は北潟でその潟の北口に吉崎村がある。
「蕪村筆奥の細道圖卷」池田　石井氏藏、説明略す。七三〇頁九行目より七三一頁二行目まで參照。

けふよりや書付消さん笠の露

大聖持の城外。全昌寺といふ寺に泊る。猶加賀の地なり。曾良も前の夜この寺に泊りて、

終宵秋風きくや裏の山

蕪村筆「奥

と殘す。一夜のへだて千里に同じ。吾も秋風を聞きつゝ衆寮に臥せば、明ぼのの空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃きて出づるや寺に散る柳

取りあへぬさまして、草鞋ながら書き捨つ。越前の境、吉崎の入江を舟に棹さ

〔一〕汐越の松　吉崎の對岸濱坂の南一帶の松を汐越の松といふ。
○終宵　この歌西行作といふ徴證なく、菅菰抄には「蓮如上人の詠歌なるよし、彼の宗の徒皆云へり。今蓮如山より此海を望むに、此一歌の風情よく叶へり」とある。
○無用の指云々　莊子、駢拇篇に「駢於足者、連無用之肉也、枝於手者、樹無用之指也」
〔一〕丸岡天龍寺　此の寺は曹洞宗。吉田郡松岡町にある。本文に丸岡とあるのは誤りである。
〔一〕北枝　二六三頁参照。
〔一〕邦機千里　機は畿の誤。詩經、商頌「邦畿千里、惟民所止」

して、汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて
　月を垂れたる汐越の松　西行

此の一首にて數景盡きたり。若し一辯を加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古きちなみあれば訪ぬ。又金澤の北枝といふ者、かりそめに見送りて此處まで慕ひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別にのぞみて、

物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入つて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦機千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴き故ありとかや。

の細道」圖卷

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たど〳〵し。爰に等栽といふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて予を訪ぬ。遙か十とせ餘りなり。いかに老いさらぼひてあるにや、將死にけるにやと人に尋ね侍れば、いまだ存命してそこ〳〵と敎ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまの這ひかゝりて、鷄頭帚木に戸ぼそを隱す。さては此の内にこそと門を叩けば、侘しげなる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此のあたり何がしと云ふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ね逢ひて、その家に二夜泊りて、名月は敦賀の湊にと旅だつ。等栽も共に送らんと、裾をかしうからげて、路の枝折とうかれ立つ。漸く白根が嶽かくれて、比那が嵩顯はる。あさむつの橋を渡りて、玉江の蘆は穗に出でにけり。鶯の關を過ぎて、湯尾峠をこゆれば、燧が城・歸山に初雁を聞きて、十四日の夕暮敦賀の津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れたり。明日の夜もかくあるべきにやといへば、越路のならひ猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭

○等栽　福井の連歌師櫻井元輔の門人。等栽は連歌の號で、俳號は[illegible]といふ。
○昔物語にこそ　源氏物語、夕顔の巻に「昔物語などにこそかゝる事は聞け」とある。夕顔の宿の風情を聯想し、その語を借り用ひたのである。
○比那が嵩　菅菰抄に、「又雛ヶ嶽、日永だけとも書く、越前府中(武生)の東の山にて、[illegible]」
○あさむつの橋　[illegible]にある。福井の南約二里。
○玉江　諸説あるが本文に「あさむつの橋を渡りて、玉江の蘆云々」とあるから、麻生津の江[illegible]といつたものと見るべきである。
○鶯の關　菅菰抄に「鶯の關は關の原といふ名所なり。鶯の啼きつる聲にしきられて行きもやられぬ關の原哉。今民俗誤つて關が鼻といふ」とある。南条郡湯尾村と鯖波との間。
○湯尾峠　今庄驛の北一里、其間の小嶺を湯尾峠といふ。柚尾ともある。
○燧が城　菅菰抄に「燧が城は湯尾の向ひの山にて、木曾義仲の城跡なり」とある。

神さびて、松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるが如し。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥渟をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今に絶えず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると、亭主の語りける。

　月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

　名月や北國日和さだめなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何がしといふもの破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとり乗せて、追風時の間に吹きつけぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。こゝに茶を飲み酒をあたゝめて、夕暮の淋しさ感に堪へたり。

　寂しさや須磨に勝ちたる濱の秋

　波の間や小貝にまじる萩の塵

其の日のあらまし、等栽に筆をとらせて寺に殘す。露通も此の湊まで出むかひて、

○歸山　今庄驛の西、杉津浦の東北に當る。後撰集に「我をのみ思ひ敦賀の越ならばかへるの山は惑はざらまし」

○明夜の陰晴云々　孫明復、八月十四夜「諸杯莫先賞、明夜陰晴未可知」

○氣比の明神　敦賀町にある今の官幣大社氣比神宮

○遊行二世の上人　眞敎。他阿彌陀佛と號す。故に他阿上人と稱す。氣比神宮附近の沼に蘆葦が茂つてゐたのを退散させる爲、僧侶と共に土砂を運んで之を埋めた。のち砂持の起りだといふ。

○ますほの小貝　山家集に「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあるらん」。貝の一種で、眞赤な色をしてゐる。

○種の濱　前項山家集の歌參照。敦賀灣の西方半島の岬端に當る。此處の貝殼の色が赤いのでいふと。

○天屋何がし　天屋太兵衞、敦賀の廻船問屋。

○破籠　食物を入れる器。

○小竹筒　酒を入れる竹筒。

○法華寺　京都本能寺の末寺で、本隆寺といふ。

○露通　路通に同じ。二二五頁參照。

美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて、大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集まる。前川子、荊口父子、其の外親しき人々日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふがごとく、かつ悦びかついたはる。旅の物うさもいまだ止まざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと又舟にのりて、

蛤の　ふた見に　わかれ行く秋ぞ

○大垣の庄　今大垣市。
○越人　二八〇頁を見よ。
○如行　近藤氏、大垣の藩士、貞享元年の冬芭蕉を宿して「霜寒き旅寢に蚊屋を着せ申す」と吟じ、爾來蕉門となる。
○前川子　大垣の人。傳不詳。
○荊口　宮崎氏、大垣の藩士。此筋、千川、文鳥の三子あり、共に蕉門。
○伊勢の遷宮　二十一年目毎の改築の遷座式。元祿二年には、内宮は九月十日、外宮は同十三日であつた。

嘲佛骨表

其角

古文傳類準讀孟嘗君傳之例

むかし韓退之、表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀んで、退子を嘲る。人死して骨となり、骨朽ちて土とかはる。佛骨何の王位をけがさむ。佛骨もし人を穢さば、禽獸の皮骨はなほ人を汚すべし。人は天地の靈にして、禽獸人に及ばず。それ束帶の飾には象牙をたふとび、珍簟の舖物には、虎豹の皮にふす。鼈甲は簪に作り、尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸・牛角・鯨の鬚のたぐひ、宮室を飾り器物を作る。たゝき醢は嘗めて口中を潤し、雉子の胴殼・蕪骨は、嚙んで直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし、禽獸を尊しとするは何の謂ぞや。もし佛骨細工の助にもならずといはゞ、はやく疾鬼に與へて錢かねとせざる。假令拂底の鬼なりとも、虎の皮の犢鼻褌はとるべしと、彼が淺見を嘲つてしかいふのみ。

しばらくは蠅を打ちけり韓退之

○嘲佛骨表　風俗文選、卷九、表類に出づ。
○古文傳[illegible]云々　この文[illegible]孟嘗君傳」を傳類に收めた例にならひ、表類に收めたとの意。
○表を奉つて云々　退之は憲宗に[illegible]
○佛骨何の云々　退之の表に「枯[illegible]
○珍簟　珍しいしき物。
○鹿茸　[illegible]
○蕪骨　[illegible]
○疾鬼に與へて云々　[illegible]利は即ちその佛牙であると。この傳說[illegible]

落柿舎記

去來

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど、このみも持ち來らず。代がふるわざもきかねば、もし雨風に落されなば、王祥が志にもはぢよ。若鳶烏にとられなば、天の帝のめぐみにももれなむと、屋敷もる人を、常はいどみのゝしりけり。

ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこより、商人の來り、立木にかひ求めむと、一貫文さし出し悦び歸りぬ。予は猶そこにとゞまりけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひし／＼と庭に

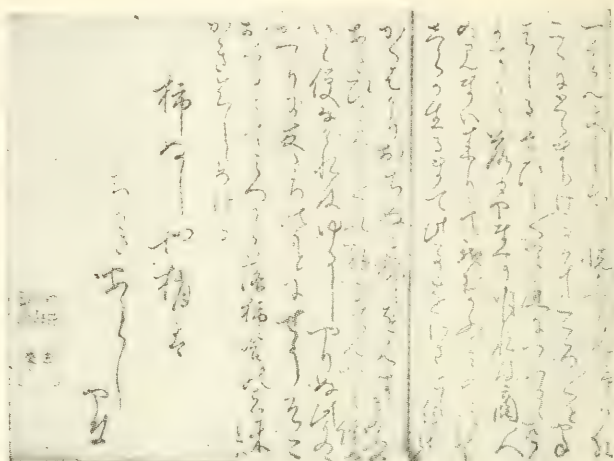
○落柿舎記　風俗文選、巻五、記類に出づ。又落柿舎日記・芭蕉翁手鑑等にその異稿が掲げられてある。今風俗文選による。

○王祥が志　晋書、王祥傳「有丹奈結實、母命守之、毎風雨祥輒抱樹而泣、其篤孝純至如此」

○ことし　元祿二、三年頃と推定される。

▽落柿舍記 （井上重厚撰「落柿舍日記」所載。去來眞蹟の模刻。）

○むかふ髪　前髪。即ち少年の頃からの意。

柿舍記

つぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞來たり。梢つく〴〵と打詠め、我むかふ髪の比より、白髪生ふるまで、此の事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず。きのふの價、かへしくれたびてむやと侘ぶ。いと便なければ、ゆるしやりぬ。此の者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舍の去來と書きはじめけり。

柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

鼠賦（ねずみのふ）并引　去來

此賦以二五音相通假名字一爲レ綴

鼠。一つの名はよめが君、又よめともよめり。其のたね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして、大なるは五六寸、小さきは寸にみたず。山椒（さんしよ）の眼、小豆（あづき）の鼻、齒は絲をつけて小袖（こそで）も縫ふべく、耳は木の芽のめだつに似たり。尾を切つて錐（きり）のさやとなさばなしてむ。背腹（せはら）の色にめでて、うすくも濃（こ）くも染出だせり。其の行くや夜出でゝ晝隱（かく）る。常にぬすみをもて身を養ふ。まことに憎むべきものの一つなり。乃（いまし）賦を作りて曰く。

二月鼠の穴を塞（ふさ）ぐ。つくづく汝がいたづらを思ふ。家にゐて人を恐るゝは足のうらに疵（きず）持ちけらし。油を飲むこと世の酒にひとしけれど、いつしか沈醉（ちんすゐ）を見ず。粟（あは）を盡（つく）し、器をそこなふは殊更にいはじ、大棗（なつめ）をかむ牙にふるれば病を生ず。恥（は）づかし

○鼠賦　[illegible]に出[illegible]これは[illegible]である。

○引　[illegible]

○五音相通云々　[illegible]ゐる。原文には一々符號をつけて韻を示して居るが今省いた。

○圖はづれ　並外れ。

○尾を切つて　[illegible]鼠の尾まで[illegible]

○二月云々　詩、豳風「十月蟋蟀入二我牀下一」[illegible]

○大棗をかむ牙云々　[illegible]る。

○男女の中　古今集序「男女の中をも和らげ[illegible]

○あやしき巣を作りて　平清盛の愛馬の尾に鼠が一夜の中に巣をくひ、子を産んだが、是は平家滅亡の前兆であつたといふ事が平家物語、盛衰記等に見える。

き文をちらして男女の中をもさまたげ、あやしき巣を作りて源平の亂をきく。何を一つらひて佞人のためしに引出でられ、いかにすゝめてか書を焚く代の宰相となしぬる。神佛のたふときも尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は俊成卿のうらみなりけり。つく／＼汝が危きを思へ。それ人の賢しきや、番木鼈をまき、吹矢をまうけ、黐をぬりて、往來もたやすからず。けはしき城をたのむとも鼬を防ぐ手段はあらじ。杳なる空をながめては鳶のつかまむ愁忘るべからず。桁走り、障子のぼり、早業得たりとほこるも、思はず升にかゝりていかばかりの思ひをすらむ。虚死して仕合せに東坡が袋を逃げたりとも、生捕られしなまなか張湯が文を受けなむ。或は鈴を頸にさげて兒童の戯れとなり、或は筆の用に髭をぬかれて老の恥を殘せり。あやまりて晝鼠とあなづられ、濡鼠と笑はれ、更に吹鼠と苦しみて、人の爲にぞ悅ばれぬる。猶さへかなしきを、燒鼠となりて狐狸の命とらむこそ、あさましく罪ふかけれ。つく／＼汝が尊きを思へ。日よみの初に呼ばれて、位司いやしからず、百數のかしこきも甲子をむかへて年の號改め給ふぞかし。あら玉の春立ち返れば

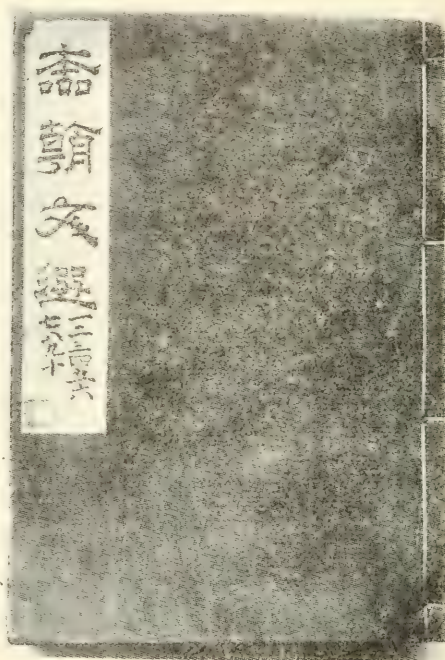
○佞人のためし　佞人を鼠輩、或は城狐社鼠などいふのによる。
○書を焚く代の宰相　李斯が厠中の鼠と倉中の鼠とを見て感ずる所があり、荀卿に學んで遂に秦始皇帝の丞相となつたといふ事が、史記李斯傳に見える。
○草の根をはむ云々　夫木抄、俊頼「[illegible]の草の根をはむ鼠そ[illegible]」[illegible]月の鼠とは、佛說に人が[illegible]に追はれて野中の井に[illegible]、草の根を摑んで身を支へ、居ると、下には毒龍が呑まうとしてゐる、上には黒白の二鼠が出て其の[illegible]る草の根を嚙むといふ話に基く。これは人命のはかない喩で鼠を日月に當る。
○虚死して　[illegible]に鼠の[illegible]死といふ。
○東坡が袋を逃げ云々　東坡、黠鼠賦に「聲在二橐中一、視レ之無レ有、舉レ燭而索、中有二死鼠一、覆而出レ之、墮レ地而走」
○張湯が文　漢書、張湯傳に「張湯杜陵人也、[illegible]鼠盜レ肉、[illegible]劾二鼠一掠治、傳二爰書一、訊鞫論報、幷取二鼠與一レ肉、具獄磔二堂下一、父見レ之、視二文辭一如二老獄吏一」
○吹鼠　鼠の皮肉の間に管を入れ空氣を吹込むと膨脹して鼠は苦しむ。兒童の惡戲。
○甲子をむかへて云々　甲子改元の事、村上天皇の康保に始まる。

子の日の御賀あり。子祭といへるはいづれの長者の傳へなる。からの日本の歌にもよめり。海原や、もしほの隂に友なふなまこは、海鼠と書かれ、秋風の尾花が末に妻戀ふ鶉は、田鼠の化したる也。烏羽玉の暗き夜は、雷ともなれり。象といへる獸すら、かつ恐ぢ懼れぬる。麝香鼠は筑紫に住みなれてこと國に行かず。かづき姿の若やかなるは嫁入の繪空事にぞ。どこの乙子を七郎とは申す。新左衛門とつけるはさかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら、將廿日鼠と名のり、月々十二の子をうむ。誰が家にかとりつくし得む。もし白子出でて福の神にや愛せられむ。汝が隱里はいづくのほとりぞや。武藏野の鼠穴にや。出羽の境の鼠が關なるか。信濃の奥の鼠宿なるか。目出度き身をもてかりそめの世を貪る、などか歸らむ事を思はざる。窮鼠かへりて猫を嚙むの志ありとも、三井の賴豪が千疋のいきほひすら、本意を遂ぐる事は猶きこえざりけり。

瓢辭　許六

○子の日の御賀　正月初子の日に朝廷にて、公卿近侍に宴を賜はる。
○子祭　大黒天の祭。日次紀事、十一月の條に「凡諸商賈此月子日子時祭之、皆買實之圖形、甚則[illegible]也、[illegible]比之鼠子之蕃息一也」
○鶉は田鼠の化したる也　呂氏月令に「田鼠化爲鶉」と云。
○象といへる獸すら云々　五雜組に「師子畏金鼓、虎畏火、象畏鼠、狼畏[illegible]」
○麝香鼠は云々　和漢三才圖會に「麝香鼠、俗呼曰麝香鼠、出於外國、今舶來長崎、未審其何物」と見える。
○かづき姿　昔女が頭に衣を被る風俗であつたのをいふ。
○七郎　倭訓栞に「つらねこ、本草啓蒙、今七郎鼠と云ふ」
○さかやきすりて　童謠に「京都鼠をとらまへて、さかやきすつて、髮ゆうて」
○大ねら小ねら　大鼠、小鼠。
○白子　俗説に白鼠は福神の使者といふ。
○鼠穴　[illegible]青山[illegible]にある。
○鼠が關　念珠ケ關。羽前西田川郡

にある。
○鼠宿　信濃國埴科郡。
○窮鼠云々　鹽鐵論、刑法篇「窮鼠嚙レ猫」
○三井の賴豪　平家物語卷三、源平盛衰記卷十に、三井寺の賴豪が死んで數千の鼠と化し山門の經卷を食ひ破るといふ話が見えるのによつた。
○風俗文選　風俗文選卷一、辭類に出づ。
〔下〕本朝文選　「風俗文選」と改題しない前の初版本）
○男鹿なく　新後撰集に「さがにまかりて鹿のなくをきゝてよめる、小鹿なく此の山里のさがなれば悲しかりける秋の夕暮」。平家物語、小督の條參照。[illegible]にはこれを業平の詠として居る。
○つり兀　髮をひきつつて結ふために額際のはげあがつたのをいふ。こゝは武士あがりの浪人のさま。
○わり菱　武田家の紋。
○甲州の劔も今は菜刀　「昔の劔今の菜刀」の諺による。
○あまり淋しさに云々　當時の俚謠による。
○かの岡に草刈るをのこ　諺岡、秋萩かの岡に草刈るをのこ野を分けて、か〻るさになる夕まくれ。」など人丸の歌（和漢朗詠集）による。

男鹿なく此の山里と詠じける嵯峨野の方に隠れたる人あり。まだつり兀の跡もきえかね、わり菱の系圖咄に、甲州の劔も、今は菜刀一丁の身代にて、あまり淋しさに、垣に瓢箪を植ゑて、折ふしの筆次手にや、中にもした〻か物に書き付け侍る。

本朝文選

甲にもならで果てたるふくべ哉

無名子とは見え侍れど、身は雲水の便りなき、浪人ひがみとぞおぼえける。
かの岡に草刈るをのこあつまり、此の甲のにくさに、わざと返しとはなくて、

かまきりに降參したるふくべ哉

とぞ笑ひける。あるじき〻つけて、陋巷にあつて一瓢のたのしびは、賢人の上。里の子はしるまじ。草刈の中より、其の賢人くらべならば、許由はかしましとて捨てたりとの〻しる。あるじいよ〳〵勝に乘りて、か〻る名物もしらず、汝等は田植い煎茶を入れ、種物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむつかしき色もなくて、楊墨がこ〻ろざしに叶ひ、源氏の卷の名となり、歌人の腸にまとひたる夕顏ぞかし。

抑も夕顏の玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず、たゞ喰物とぼしき五條あたりに徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く、汝宇治の物語をしらずや。答へて曰く、其の拾遺の瓢も、咎なき隣人が一命をたてり。是全く瓢の罪といはむ。か〻る目出度きひさごに、何の罪かあらん。かれ佛緣深きゆゑ、空也上人には携へられ、鉢た〻きの祖師とはなりける。かのさゞ波や、堅田の海士が海老すくひも、佛緣の内かとぞいひける。隱士大きに打腹立ちて、汝がいひ分、皆〻理窟の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の樂は、身の後の金よりは勝したりといへり。草刈が云く、其の樂といつぱ、上戶の情也。瓢のかたちをいはむ。腹便々と肥えふと

○陋巷にあつて云々　論語、雍也篇に「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也」とあるによつたのである。

○許由は　逸士傳に「許由隱箕山、無盃器、以手捧水飲之、人遺一瓢、得以操飲、飲訖掛木上、風吹瀝瀝有聲、由以爲煩、遂去之」。この事徒然草にも引いてゐる。

○花はむつかしき色もなくて云々　[illegible]

○源氏の卷の名　夕顏の卷。

○宇治の物語　宇治拾遺物語。その卷[illegible]に雀が[illegible]の瓢に米を滿たしたが、これを眞似た隣人は瓢の中の毒蟲に[illegible]

○空也上人　元亨釋書に「釋光勝不言所出、[illegible]

○鉢たゝき　[illegible]

[illegible]鉄、今代ニ[illegible]ニ」

○海老すくひ　瓢を竪に切り割つたもの。海老をすくひ取る。

○古人生前一瓢の樂は云々　白氏文集に「身後堆ㇾ金柱ニ北斗ニ、不ㇾ如ニ生前一樽酒ニ」とあり、古人は白居易をさしてゐる。

○滄浪の水　滄浪は水の名で、[illegible]滄浪之水清兮、可ニ以濯ニ我纓ニ、滄浪之水濁兮、可ニ以濯ニ我足ニ」

○鯰を押ふ　[illegible]瓢箪で鯰を押へる。

○去つて共に物いはず　漁父辭「遂去不ニ復與言ニ」

○宴柳後園序　風俗文選、卷四、序類に出づ。[illegible]撰、[illegible]紙（元禄十五年刊）に收められたもの。今風俗文選に[illegible]柳後園[illegible]の門人[illegible]

○心に天遊あり　莊子、外物篇「心有ニ天遊ニ」

○日あらず　日を選ばず、常にの意。

○大小の額　大字を表に、小字を裏に書いた額をかけておいて、月の大小によつて月々かけかへる。柿表紙所載には「月々大小の額」とある。

○東花坊　支考のこと。

りて、日のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは、下戸のなげきなりと大笑して、歌つて云く、滄浪の水、すめらばつけて泳ぐべし。濁らば鯰を押ふべしといひて、去つて共に物いはず。

宴柳後園序

支考

世に遊ぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしぶ時は、樂つきて後たのしむものなし。山林樹下に遊ぶ者は、心に滿たざれば世に羨む方も出で來ぬべし。此の二つの境に居らざるものを、心に天遊ありとぞ昔の人もいへりける。されば柳後園の何がし、三四の友達ありて遊ぶ事日あらず。額には閑の一字を題して、靜ならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置きて、其の時の心に隨ひ行くは、大小の額見る心にや侍りけむ。此の日東花坊も此の中に遊びて、人々酒のまむと催したるに、心に

物をとめ口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒も惜しからむ。俳諧に案じ入りたる時は、ことよりといふものして嚔させむとぞ戯れける。

手足辯　汶村

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈挑灯をとりちがへたるは、昔より國中みな誤り覺えければ、却つて改めたる人をあやまりといふも理ならむ。こゝに一身の中、足を賤しとし手を貴しと定め置きたるは、いづれか賤しとし、いづれか貴しとせむや。賤しとて終に斬り捨てたる人も聞かざれば、持にこそ定め置きたけれ。それ足は行歩を産として外の用を知らず、沓木履をかけ草履草鞋をはきて、直に土をふまず。居る時は足袋韈に包みまはし、歩み疲るれば馬駕籠に扶け乘せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にして、定めたる産なし。頭の虱を捫

○金谷の酒　李白、春夜宴桃李園序「如詩不成、罰依金谷酒數」
○手足辯　風俗文選、卷九、辯類に出づ。
○汶村　彦根藩士、松井氏、名師喬、九花亭、野鶉齋の號がある。芭蕉に師事し又許六に從つた。正徳三年歿、享年不詳。
○甲冑の云々　正しくは甲はよろひ、冑はかぶと、然るに俗にはその反對に用ひる。
○持　歌合、圍碁などで勝負のない事、引きわけ。
○産　生業。こゝでは自分の專門の業といふ意。
○手は一身の奴　方丈記「今一身をわかちて二つの用をなす。手の奴足の乘物よくわが心にかなへり」

○僣上　高ぶる、思ひ上る事の意。
○古風　貞門の俳風をいふ。
○德利子　手のない不具者をいふ。
○愛尊說　淡々文集、前篇（寛保二年刊）に出づ。周茂叔の愛蓮說を摸した作。
○花の富貴なる　牡丹をさす。愛蓮說「牡丹花之富貴者也」

り、跟のあかぎれを撫づる、至らざる所なく、又なさずといふ事なし。これ賤しき事の第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓のつとめあれど、厠の役ある事を聞かず。されば我が脚にて他の鼻端の塵を拂はゞ、人怒つて我を罪せむ。人また我が頭の蠅を足にて追はゞ、我これを貴しとおもへど、世の人我に代つて憎みの、しり、怒をうつして、我を阿方と號するこそ大きなる僣上なれ。其の僣上人、蒲團簟に臥して休する時も、必ず足を伸すを一番とす。湯に入る人も、足からならでは這入りがたし。向後足に新しみをつけて、手を古風のふるみに落さむ。但し德利子は格別の沙汰なるべし。

愛尊說

淡々

水の艸、陸の花を愛する中に、世人は花の富貴なるをもて遊びて、唐の名をつけ

品をかへ、風情をいとふために竹を割つて樓をなせる、菊好める人のむつかしくや思はん。また枝あらず香風の遠き花は清し。蓴菜も泥より出でて、小倉堤の朝日にはたふれ、夕陽に亂す。君子をまねくあつものとなつて、亭々茶亭の器に誇りて、盃の數一盌喫茶

じゆんさいのゆらぐは葛か玉かつら

空にすみたるときのこも、横川のおくに月をやどし、勿來の關の櫻にそむく。渠もいたはるべき葉のさま、初鴨を待たず、曉の腹を轉ずるも亦むべなり。

臍の頌　　友水子

お袋の針さきいと細やかにして、頭の百會より足の至陰まで、皮肉の縫ひよせを臍とはいふ。醫者は神闕と理窟めき、臍は和國の和らぎなり。天地開闢より諸役御

○枝あらず云々　蓮をさして愛蓮説「不蔓不枝、香遠益清」
○小倉堤　山城伏見の南、巨椋［オ[illegible]］の堤。
○亭々　愛蓮説「亭々浄植」
○ときのこ　[illegible]子、羽子板につく羽根のこと。
○横川のおくに　[illegible]
○臍の頌　風狂文草　延享二年刊　に出づ。
○友水子　[illegible]
○百會　ひやくゑ。頭頂の中央、旋毛のある部の稱。全身の精氣の集まる所といふ。
○至陰　足の小指の尖をいふ。
○神闕　臍の中央、針を禁ずる。

免にして何のいとなみもなし。漠々淡々として、もとより目もなければ、あだなる色に心を動かし、切なる思ひに堪へやらぬ惑ひもなし。鼻なければかりの匂ひに染みて、移香をなつかしむ情もなし。手なければ穢れにもふれず。足なければ千里の勞なし。夏は納涼の夕べ、扇子團にあふがれて暑を忘れ、冬は幾重の綿入に包まれて寒をしらず。喰はざれば飢ゑたる事なし。飲まざれば渇せる事なし。怒らず笑はず憂へず喜ばず。南華の老人も柱下の翁も、斯の境界に身を處く事は難かるべし。鍋釜の臍は日々に焼かれて、殊に水無月の苦しみいかばかりならん。石臼の臍は常々引木に追ひ廻されて、身の痩せるを覺えず。麝香は臍を奪はれて死し、麻絲は臍を亂されて仆る。これらはあだ物の類ひなり。これ這臍こそ安樂なれ。たゞ雷をのみ一生の氣遣ひとして、用心に苦しむ所もあればにや、雷を地に引下し、地震を空へ上げたしとは、此の隱者の願ひたるべし。

○南華の老人　莊子をいふ。
○柱下の翁　老子をいふ。老子は柱下の史といふ卑賤の役であつたのによる。

○出代の辯 [illegible]文 [illegible]
[illegible]。
○[illegible] [illegible]に富み、かつ一篇毎に俳句を交へて[illegible]來る。
○あられ 霰餅。小さく四角に切つた餅。
○二日灸 陰曆二月二日に灸點すれば特に効があるとて行はれる。
○うしと見し世ぞ 新古今集、清輔「ながらへばまたこの頃やしのばれむうしと見し世ぞ今は戀しき」
○衣更着の事納 昔は衣更着（二月）八日に正月の諸行事を終へた事を祝ふ習はしがあつた。これを事納といふ。
○中年 一年半年の短期、十年位の長期の奉公に對し、四五年間契約の奉公をいふ。
○出入 主家に住みこまず、出入して奉公すること。
○勝彌 若衆（少年）の名。
○釣ぬけ 釣はけに同じ。七三九頁頭註を見よ。

出代の辯　　蜷局

昨日たち今日くれて、寒水漬の餅も彼岸過の暖氣に色を變じ、きざむ時欠伸せしあられも、二日灸の傷に過半盡きて、大かた雛のもてなしを漸々にまかなひ、今少しあれかしと先の困窮を忘るゝも、うしと見し世ぞ今は戀しきの心なるべし。睦月はうか〳〵と過ぎて衣更着の事納、涅槃會の長閑には穴の蛇もよろめき出でて、世のいそ〳〵にその日の暮るゝもおぼえず。彌生に至りて始めて驚く年季明、中年五年出入十年も夢の覺むるは一時ながら、振袖にて目見せし勝彌も、今は髮際の釣ぬけを歎き、國染のすそちらしに此の頃迄笑はれしおかやも、いつしか腰に數鍵つけて、賄姥の名目にかはり、日來いや〳〵といひふれながらも、廿日の塵に膾くり金の、も少し心にまかせぬにや、今一年もと定まりの五日を恨み、盛飣の輕目に憎まれし飯焚のおふくも、おさらばといふ朝には、殘り多き習ひ、ましてや此の頃若旦

那の御不食に、こちらも二三日頭痛氣はさらなり、井戸端のこんたん、お湯殿のちよこ〳〵咄も、胸つかへて云ひとげず、終には櫃のうしろに下駄と盥をからげつけて、ゆく〳〵足元の覺えもなく、見ゆるだけはと幾度も立ちとまる有樣、げにや篠田へ戻りし安倍氏の離縁も、今日こそ思ひやられぬ。

出代も　狐　ふ　り　む　く　姿　哉

奈良團讃　　也有

青によし奈良の帝の御時、いかなる叡慮に預かりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゝまれて公界に諂ふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯

○國染　田舍風の染め方。
○數鍵　澤山の鍵。
○定まりの五日　昔の奉公人の出代期は三月五日であつた。
○若旦那の云々　この下女若旦那に氣があつた事を示す。
○こんたん　魂膽、井戸端會議の心くみであらう。
○篠田へ云々　安倍晴明の母は篠田の森の狐が人に化けて契つたのだといふ傳說による。
○奈良團讃　以下也有の作はすべて鶉衣に出る。
○青によし　奈良の枕詞。
○多能　論語、子罕篇「吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也」
○公界　公開の場所、世間。
○木の端　法師のこと。枕草子「思はん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ。さるはいと賴もしきわざを、たゞ木の端などのやうに思ひたらんこそいといとほしけれ」

ならむ。さるは桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕涼み、晝寢の枕に宿直して、人の心に秋風立てば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足に汚さるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇には勝りなむ。我汝に心を許す、汝我に馴れて裸身の寢姿を、あなかしこ人に語ること勿れ。

袷着る日はやすますする團かな

鬼傳　也有

昔は佛の國に住みしが、舍利を盜みし科により、天竺牢人の部になりて唐土へ渡りしを、鬼も十八のあだし心より、楊貴妃の枕にしのびて、鍾馗といへる髭男に追はれ、隱蓑の身も住みうしとや、十郎姫にも引別れ、赤裸に身代たゝみて、始めて日本へ親に似ぬ子と生れ出でけるとかや。其の頃はまだ涙脆くもありけむ、

○ひさごがもとの夕涼み　長嘯子の作と傳へる歌に「樂しみは夕顔棚の下涼み男はてゝら女は二布「フタノ」して」

○舍利を盜みし科　足疾鬼、舍利を奪ひし時、韋駄天に追はれ取り返されたと云ふ。

○天竺牢人　よるべない浮浪人をいふ。江戸時代には浪人をわざと牢人とも書いた。

○楊貴妃云々　玄宗皇帝の妃、病鬼のために病んだが、鍾馗大臣の亡[illegible]鏡に姿を寫し、病鬼を退治したといふ。（謠曲、皇帝）

○隱蓑　保元物語、卷三「然れば[illegible]等は鬼の子孫か、さん候、さてこそ聞こゆる寶あらば取り出せよ、見む、と宣へば、昔正しく鬼神なりし時は隱蓑隱笠浮履劍などいふ寶ありけり」

○十郎姫　鬼の娘の名。

○親に似ぬ子　諺に「親に似ぬ子は鬼子」

○朝雄云々　天智天皇の御宇藤原千方といふ者四つの鬼を使って國を亂しし時、紀朝雄一首よみたりければ大

君の國へ我はいづくか鬼のすみかなる、さ」といふ。昔の[illegible]を作つて鬼の話に[illegible]るにや、鬼を[illegible]四方に失せ去て[illegible]。太平記卷十六。

○役の行者　名は小角、大和國葛上郡茅原村の人。葛城山に[illegible]山に石橋をかけんとし、諸神の[illegible]多くの[illegible]

○煎餅　[illegible]に鬼に煎餅。

○芥川の暗まぎれに云々　伊勢物語[illegible]女を負うて逃[illegible]話がある。

○鈴鹿山の好色　勢州鈴鹿山に大竹丸といふ鬼あり、美女を愛し、田村將軍之を亡すと傳ふ。

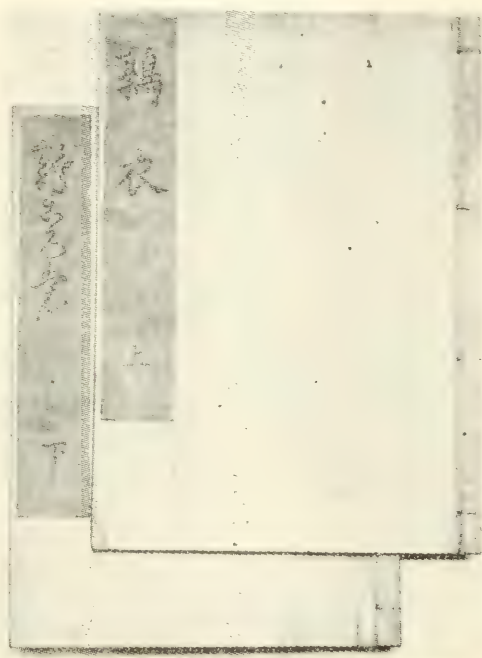
▽鶉　衣

○大江山の醉狂　酒顚童子のこと、[illegible]、謡曲などに多く見える。

○戸隠山にて云々　戸隠山は信州にある。鬼美女に化けて紅葉見物の平惟茂に酒をすゝめ、却つて惟茂に亡ぼさる。（謡曲、紅葉狩）

○鰯・柊・煎豆　節分の日には門に鰯の頭を柊に刺す、鬼を忌んでその鼻を刺すの意。又煎豆をまくは鬼の目を打つ意だといふ。

○業の秤目　地獄で罪業の輕重を量る秤目。

朝雄が歌の理窟につまりて、一先づ分散しけるまでは、流行に横道なしと役の行者の情深く、大峯・葛城の荷持にも雇はれしに、次第に身持惡しくなりて、煎餅も珍しからずと、芥川の暗まぎれに鬼一口のあばれ喰に昔男を泣かせ、これのみならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隠山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留守にと、世上物躁になりけるにぞ、神々の怒つよく、鰯・柊の責道具にかり出され、遂に煎豆の追放にあうて、娑婆にもたゝずむ方なくて、冥途の出代りに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合はぬ生れつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火の焚き加減を覺

鶉衣

○六尺　人足。
○瘤とられたる　瘤をよくとる翁が鬼に瘤をとられたる話、宇治拾遺物語に見える。こゝは富をとらるゝの[illegible]
○安達ヶ原の黒塚　奥州安達原に、鬼女が黒塚に住んで居て、行脚の僧に祈り伏せらるる話がある。
○下戸と鬼　諺に「下戸と鬼はない」又「下戸と化物はない」
○鬼は伯母に化け云々　渡邊綱に腕を切取られた鬼が、後日伯母に化けて之をとり返したといふ[illegible]
○狐は叔父に化けて　狐が獵師の叔父伯藏主といふ僧に化けて、狐をとる事を戒めた事を、狂言「釣狐」に作つてある。
○正風　蕉風。
○湯立　巫子が神前で熱湯に笹の葉を浸し、之を身に注ぐこと。心身穢るゝに至ると、神之に移るといふ。
○三才圖會　[illegible]

え、呵責の荒仕事に獄卒と呼ばれ、地獄の六尺とはなりける。さてこそ瘤とられたる天下となりて、萬民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も松風淋しく、安達ヶ原の黒塚も草茫々としてとふ人なければ、今はたゞ棟瓦に俤を殘し、大津繪に笑はれて、下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

妖物論　也有

世に妖物といふものありて、多くは女となり兒とあらはれ、大坊主の沙汰は聞けど、月代剃りたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなる故ぞと、ある人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさにと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとればその藝殊に出來榮えして、武功の人に出合はすれば思ひの外の過ちを蒙る。鬼は伯母に化けて腕を取返し、狐は叔父に化けて罠の異見

をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらむは、其の姿をかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また・河童はたま〳〵の沙汰なれども、その正體の穿鑿は樂屋の見えて面白からず。たゞ理窟なき化物といふものこそ殊にゆかしけれ。抑も神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此の化物は百物語に感應して、何と定まれる姿なければ、三才圖會にも載せられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、唯赤表紙の小雙紙に恥しき姿はとどめられける。さるに昔今の美婦國色すら身の終は見苦しく、關寺におちぶれ檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見立もうるさきに、唯此の物の終はかり、引幕の陰をも賴ますあとに箒も雑巾もいらず、搔消すやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

○訓蒙圖彙　動植器物等に就いて圖説したもの。中村惕齋著の外類書が多い。

○赤表紙　赤本。小兒の慰みとした繪本をいふ。

○關寺　小野小町をいふ。おちぶれてここに住んだといふ傳説。（謠曲、關寺小町）

○檜垣　筑紫の老女をいひ、日々の水を汲んだといふ傳説。（大和物語、謠曲檜垣）

○猿澤の池　天皇の帝の寵を受けた采女が、猿澤の池に投げた話が大和物語に見える。帝は悲しみのあまり、池の邊に行幸されたが、その時人丸のよんだ歌に「わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」

○馬嵬が原　楊貴妃の害せられた處。

○東坡か九相　蘇東坡の九相詩をいふ。美人が死後白骨と化して行く相を、九つに分けて述べて居る。

○籠に苦しむ身　宗因「もし啼かば蝶々籠の苦[illegible]」

○莊周が夢　莊子、齊物論「昔者莊周夢爲胡蝶、栩々然胡蝶也。云々」

○阿呆の鼻毛　諺に「鼻毛で蜻蛉つる」又「阿呆の鼻毛で蜻蛉つる」

○美人の眉　蛾眉といふ。詩經、衞風、碩人「螓首蛾眉」を始として、美人の眉に譬へた例多し。

○他の蟲をとりて　似我蜂のこと。我が子に非ざる他の虫の子をとつて、咒して我が子とするといふ。

○かゝる　その子供の世話になる意。

百蟲譜

也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、※籠に苦しむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ※莊周が夢もこのものには託しけめ。只とんぼうのみこそ彼にはやゝ並ぶらめど、絲に繫がれ黐にさゝれて、童の弄びとなるだに苦しきを、※阿呆の鼻毛に繫がるゝとは、いと口惜しき諺かな。※美人の眉にたとへたる蛾といふ蟲もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の※他の蟲をとりて我が子となす、老の行方を※かゝらむとにもあらず、何を讓らむとてかくは骨折るや。我に似よ〱とは、いかに己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる藥師堂に大きなる巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人

○古今の序　古今集、序「花に啼く鶯水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける」
○古池に飛んで　支考、俳諧十論「古池や蛙飛こむ水の音といへる幽玄の一句に自己の眼を開きて、是より俳諧の一道は弘まりけるとぞ」
○初蝶　元祿頃の俳句に行蝶の句散見す。これは也有の誤である。
○やがて死ぬ　芭蕉「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」（猿蓑）
○貧の學者　晉の車胤の故事。晉書・蒙求等に見え、よく人の知る所である。

には憎まれじを。

蛙は、古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此のもののこと更にも誹りがたし。

蟬は、たゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日盛りに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、此のものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、此のものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は、たぐふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく、五月の闇はたゞ此のものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者に取られて、油火の代りにせられたるは、此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とこのませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

蜩は、多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならむ。

つくつくぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此の

○蜀魂　時鳥の異名。蜀の望帝の魂が化して時鳥となつたといふ。（蜀王本紀）
○待つ暮の歌　古今集衣通姫、「わがせこが来べき宵なりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも」（書紀には第四句「くものおこなひ」とある。）
○退隠の媒　楚の賢舎、蜘蛛の網に衆虫のかゝるを見て、仕官も亦人の羅網だといつて退隠した故事。（圓機活法）
○朝敵の始云々　土蜘蛛。
○蜘　雲助。
○油蟲　人にうるさく附纏ひ、只で飲食遊興などする者をいふ。
○蜉蝣　淮南子、説林訓「蜉蝣朝生而暮死」
○不物好き　人の好まぬ變つたものを好むをいふ。

ものになりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。待つ暮の歌によまれ、又は退隠の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の始として、賴光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれそふ折もあらむか。彼はかひがひしく巣つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘とはいかで言ふやらむ。芋蟲は腹だつものにたとへ、毛蟲はむつかしき親仁の號とす。背むし・吝むしは、名のみして蟲ならず。油蟲といふは、蟲にありてにくまれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火とり蟲はたが爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲は不物好きの誹となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲はやさしく、黄金蟲はいやし。

蟻は、明暮に忙がしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求

めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安きことを得む。さるもたよりあしき方に穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手に探らるゝ虱は、逃るゝこと難かるべし。

虱を千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、げぢげぢが異名なりや、先後今は知り難し。

蝸牛は、只水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくても歩くべくは、蜈蚣・をさむしの數多きは不用のことなり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇りより、その心いかつなり。人の上にも此のたぐひはあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕に乗りて、富士を眺めゆく人には似たり。

○槐安の都　大槐安國南柯郡は古槐樹の南枝に通ずる蟻穴で、淳于棼が夢にその郡守となつた故事。（大槐宮記）

○千丈の堤　韓非子「千丈之隄、以螻蟻之穴潰」

○蠅は歐陽氏に憎まれ　宋の歐陽修に、「憎蒼蠅賦」の作がある。

○紙魚は長嘯子にあはれまる　木下長嘯子の著擧白集に、「紙魚辭」がある。

○をさむし　筬蟲。やすでともいふ。

○蟷螂　文選、檄呉將校部曲文「欲以螳蜋之斧禦隆車之隧」

○原。吉原　駿河の宿名。其の間凡そ三里。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名に呼べる、松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人に疎まる。一在所に二人の八兵衞ありて、ひとりは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きり〴〵すの※つゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、※藻にすむ蟲は我からと、只身の上をなげくらむを、※蓑蟲の父よと呼ぶは、※守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひてなどかは母を慕はざるらむ。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕べ、はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり燒く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの※七賢の夜咄には、いかに團の隙なかりけむ。

むかし銀に執心殘せし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、※花に愛著せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる蟲にかなるらむ。花に狂ひ月にうかれて、更け行く行燈の影を慕ひ、※奈良茶の匂ひに宵を啼くらむこそ哀

○つゞりさせ　古今集、在原棟梁「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく」

○藻にすむ蟲　古今集、典侍直子「蜑の刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそ泣かめ世をばうらみじ」

○蓑蟲の父よと呼ぶ　枕草子に見える。前出蓑蟲の辭說參照。

○守宮の妻を思ふ　ゐもりは匹偶相愛し執心の深いことをいふ。それで守宮を粉にして女につけておくと、もし女に非行があつた場合直に落ちてしるしを見せるといふ。

○七賢　竹林の七賢。晉の嵆康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎をいふ。

○花に愛著せし佐國　大江佐國が花を愛し、死して蝶となつてわが子の庭園に遊んだ事發心集に見える。

○奈良茶の匂ひ　動物には奈良茶を用ひる事が多いからかくいふ。

なるべけれ。

洛東芭蕉庵再興記

蕪村

四明山※下の西南一乘寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼ぶ。階前より翠微※に入ること二十歩、一塊の丘あり。すなはち芭蕉庵の遺跡なりとぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔やゝ百年の人跡を埋むといへども、幽篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行き雲とゞまり、樹老い鳥睡りてしきりに懷古の情に堪へず。やうやく長安名利※の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵を厭ふとしもあらず。鷄犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家も近く、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詩人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢をふせぐまうけも自在なるべし。抑もいつの頃よりさは唱へ來りけるにや、草刈

○洛東芭蕉庵再興記　安永五年[illegible]日蕪村の發企で、一乘寺村金福寺境内に芭蕉庵が再興された時の記で、その折の記念撰集たる「寫經社集」中に出づ。又蕪村文集にも收める。今寫經社集による。
○四明山　比叡山の最高峰。
○翠微　山の中腹をいふ。爾雅、「山未レ及レ上、曰二翠微一」
○長安名利の境　白氏文集、「長安古來名利地、空手無レ金行路難」。ここでは京都をさす。

る童女打つ女にも、芭蕉庵を問へば必ずかしこを指す。むべ古き名なりけらし。さるを人其の故をしらず。窃に聞く、いにしへ鐵舟といへる大德、この寺に住み給ひけるが、別に一室を此のところに構へ、手自ら雪炊の貧をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしけるが、蕉翁の句を聞いては泪うちこぼしつゝ、あなたふと忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其の比や蕉翁山城の東西に吟行して、清瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薫風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒夜獨行の鉢叩を憐み、あるは薦を着て誰人いますとうちうめかれしより、昨日や鶴を盗まれしと孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳いては麻の袂に曉天の霞をはらひ、白河の山越して湖水一望のうちに杜甫が背を決き、つひに唐崎の松の朧々たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都徑徊のたよりよければとて、折々此の岩頭に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなり給ひしのち、かの大德ふかく嘆きて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへ給ひけるなるべし。雨を喜びて亭に名いふなど、こと國にもさるためし多かるとぞ。しかはあれど、此のところにて蕉

○雪炊　清貧な炊事。
○清瀧の浪　芭蕉「清瀧や浪に塵なき夏の月」
○嵐山の雲　芭蕉「六月や峰に雲おく嵐山」
○丈山の夏衣　芭蕉「丈山の像、風かをる羽織は襟もつくろはず」
○長嘯の古墳　芭蕉「長嘯の墓もめぐるか鉢叩」
○薦を着て　芭蕉、都近き所に年をとりて、「薦を着て誰人います花の春」
○昨日や鶴を　芭蕉「京にのぼりて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ、梅白し昨日や鶴を盗まれし」
○孤山の風流　林和靖が孤山の隠棲に二鶴を飼つた故事。世説、隠逸篇。
○大日枝の　芭蕉「大比叡やしの字を引いて一かすみ」
○杜甫が背を決き　杜甫の登岳陽樓一詩による。「幻住庵記」参照。
○唐崎の松　芭蕉「唐崎の松は花より朧にて」
○枯野の夢　芭蕉終焉の句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」
○雨を喜びて　蘇東坡の共喜雨亭に

翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず。まして書い給へるものの筆の記念だになければ、いちじるく爭ひはつべくも覺えね。住侶松宗師の曰く、さりやうき我をさびしがらせよと、わび申されたる閑古鳥のおぼつかなきは、此の山寺に入りおはしてのすさみなるよし、此の頃まで世にありし耆老の、ふみの道にも心かしこきが物語りし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流れ去る水莖の跡などか殘らざるべき。さるを無功德の宗風こゝろ猛く、不立字の見解まなこきらめき、佛經聖典も捨てて長物とす。いかでさばかりのもの貯へ藏むべきなんど、いと騷々しき狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりと滅びにけむ、びんなきわざなりなど悲しみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず。たゞかゝる勝地に、かゝるたとき名の殘りたるを、あいなく打捨て置かむこと罪さへ恐ろしく侍れば、やがて同志の人々をかたらひ、かたの如くの一草屋を再興して、ほとゝぎす待つ卯月のはじめ、をじか啼く長月の末、必ず此の寺に會して翁の高風を仰ぐこととはなりぬ。再興發起の魁首は自在庵道立子なり。道立子の大祖父坦庵先生は、蕉翁のもろこしのふみ學び給へりける師にておはしけるとぞ。されば道立子の今此の擧にお

吏たりし時旱魃で民が憂へたが、やがて大に雨が降つたので、偶ゝ東坡の亭が成つたので喜雨亭と名づけ、喜雨亭記を作つた故事。

○うき我を　芭蕉「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」（四六頁參照）。

○無功德の宗風　禪家の宗風をいふ。

○不立字　禪家では道は心を以て悟るべきで、文字を以て傳へる事は出來ぬとし、不立文字以心傳心と唱へる。

○追ふべくもあらず　陶淵明、歸去來辭「悟已往之不諫、知來者之可追」

○たとき　尊き。

○自在庵道立　樋口氏、通稱源左衛門。伊藤坦庵の曾孫、江村北海の第二子。家代々儒を以て立ち蕪村に俳を學ぶ。文化九年歿、年七十五。

づかり給ふも、大方ならぬ宿世のちぎりなりかし。

葛の翁圖讃

蕪村

張九齢は明鏡の裏に白髮を憐み、丈山は淺き流に老の面影を恥づ。爰に一人の隱士あり。いづれの所の人といふ事を知らず。常に葛てふものを嗜めば、人呼んで葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、自らかきつばたの秀句を遁れ、資朝の卿に

葛の翁

○葛の翁圖讃　安永八年紬澤杜口の古稀の賀の時、蕪村が自畫に賛して贈つたもの。[illegible]集に出づ。

○張九齢は云々　張九齢、照鏡見白髮「宿昔青雲志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐」

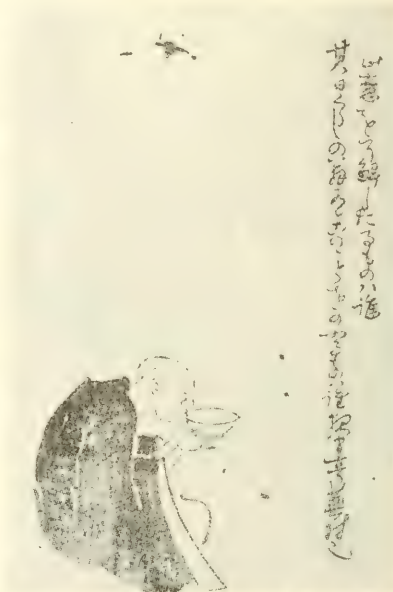
○丈山は云々　丈山が「わたらじな蟬の小川の淺くとも老の涙のそふ影ははづかし」といつて、後水尾院の御召を辭したといふ故事。

○龍山公の云々　近衛龍山公がまだ[illegible]宗鑑を訪うた時、宗鑑の姿を見て「宗鑑が姿を見ればがきつばた」と仰せられたのを、宗鑑は即座に「のまんとすれば夏の澤水」と附けたといふ事が、其角の雜談集に見える。

○資朝の卿に云々　徒然草に、西大寺の靜然上人の年たけた樣を見て西園寺内大臣が尊げな氣色があつたので、資朝卿が後日あさましく老いたむく犬を引かせて「このけしき尊く見え候」といひ、内大臣へ參らせたといふ話がある。

▽葛の翁圖讃（「杜口追善集」所載）

○生前一杯の云々　白氏文集、勸ㇾ酒「身後堆ㇾ金柱ニ北斗一不ㇾ如生前一樽酒」

○その日ぐらしの翁　杜口の號其蜩庵に因んでいつたのである。

逢ひ奉らざれば、むく犬のそしりもなし。只※生前一杯の葛水、身後の榮辱にかへなまし。されば清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかじ清からむよりは寧ろ濁らむには、明かならむよりは將晦からむには。

圖讃

葛水や鏡に息のかゝる時
葛水に見る影もなき翁かな

此の意を了解したるものは誰、※その日ぐらしの翁あり。この事をのぶるものは誰、夜半亭蕪村なり。

○宇治行　天明三年九月、蕪村は宇治の奥田原の門人奥田治兵衛（俳號毛條）に招かれて宇治に遊んだ事がある。文は當時の紀行で蕪村文集に收められる。なほ眞蹟も數種あつて多少異同があるが、今は文集に從つた。

○宇治大納言隆國　宇治拾遺物語の作者と傳へられる。

○ひら茸の　宇治拾遺物語卷一に、丹波國篠村といふところに平茸が澤山生えた話が見える。

○拾遺　拾ひ殘した意と、宇治拾遺物語に書きもらした意とをかけてある。

○米かし　田原村高尾の北にある米浙灘。

宇※治行

蕪村

宇治山の南、田原の里の山ふかく、茸狩し侍りけるに、若きどちは獲物を貪り先を爭ひ、余ははるかに後れて、心靜にくま／＼さがしもとめけるに、菅の小笠ばかりなる松茸五本を得たり。あなめざまし、いかに※宇治大納言隆國の卿は、※ひら茸のあやしき沙汰は書いとめ給ひて、など松茸のめでたき事はもらし給ひけるにや。

　君見よや※拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲鮎を業として世わたる便りとなすよし。茅屋雲に架し、斷橋水に臨む。かゝる絶地にも住む人ありやと、そゞろに客魂を冷やす。

　鮎落ちていよ／＼高き尾上かな

※米かしといへるは宇治川第一の急灘にして、水石相戰ひ、奔波激浪雪の飛ぶが如

く、雲のめぐるに似たり。聲山谷に響いて人語を亂る。※銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、四絃一聲如裂帛と、白居易が琵琶の妙音を比喩せる絶唱をおもひ出でて、

帛を裂く琵琶の流や秋の聲

※春風馬堤曲　　蕪村

余一日問耆老於故園、渡澱水過馬堤、偶逢女歸省郷者、先後行數里、相顧語、容姿嬋娟、癡情可憐、因製歌曲十八首、代女述意、題曰春風馬堤曲、

○やぶ入や浪花を出て長柄川

○春風や堤長うして家遠し

○堤下摘芳草　荊與蕀塞路

荊蕀何※妬情　裂裙且傷股

○溪流石點々　踏石※撮香芹

○銀瓶云々　白樂天の琵琶行中の句。

○春風馬堤曲　安永六年の蕪村の歳旦帖「夜半樂」に出づ。なほ蕪村文集にも收めらる。原文には訓點はないが今假に加へた。

○耆老　六十歳以上を耆、七十歳以上を老といふ。

○故園　攝津東成郡毛馬村。澱水は淀河、馬堤は毛馬の堤で、長柄川の堤をいふ。

○妬情　蕪村文集には「無情」とある。

○撮　とる。採る。

○教儂云々　「われをして裾をぬらさしめず」とよむ。

○江南語　浪花の言葉。

○三緡　緡は音ビン。錢を貫くさしなは。

○榻　タフ。店の床几。

○記得す去年　三體詩、僧詢宗、小樓「記得去年春雨後、燕泥時汚二太玄經一」

多謝水上石　教儂不沾裙

○一軒の茶見世の柳老いにけり

○茶見世の老婆子儂を見て慇懃に
無恙を賀し且儂が春衣を美む

○店中有二客　能解江南語
酒錢擲三緡　迎我讓榻去

○古驛三兩家猫兒妻を呼ぶ妻來らず

○呼雛籬外鷄　籬外草滿地
雛飛欲越籬　籬高墮三四

○春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ

○たんぽゝ花咲けり三々五々五々は黄に
三々は白し記得す去年此の路よりす

○憐みとる蒲公莖短うして乳を泡せり

○むかし〳〵しきりに思ふ慈母の恩

○行き行きて　文選、古詩「行々重行々、與君生別離」。和漢朗詠集、行旅「行々重行々、明月峡之暁色不レ盡」

○くだれり　蕪村文集には「くれたり」とある。

慈母の懐袍別に春あり

○春あり成長して浪花にあり

梅は白し浪花橋邊財主の家

春情學び得たり浪花風流

○郷を辭し弟に負いて身三春

本をわすれ末を取る接木の梅

○故郷春深し行き行きて又行き行く

楊柳長堤道漸くくだれり

○矯首はじめて見る故園の家

黄昏戸に倚る白髪の人

弟を抱き我を待つ春又春

○君不見古人太祇が句

藪入の寝るやひとりの親の側

蒿里歌

曉臺

夜半の鐘の　音絶えて
目に見るよりも　霜のこゑ
聞く耳にこそ　しみはすれ
友ちどり　呼子どり
都どり　はかなし
はかなしやみやこ鳥
昨日は墨水に杖を曳いて　柳條に月を悲しび
けふは杖を黄泉に曳いて　弘誓の棹歌に遊ぶかし
夜半の鐘の　音絶えて
空しき松を　まつの風

○蒿里歌　高井几董の追善集「鐘の夜」（宮本虎杖編、寛政二年刊）に出づ。蒿里歌は挽歌の意で、もと人が死ぬとその魂魄が蒿里に歸するといふ事を作ったもの。捜神記に見える。
○夜半の鐘　几董の號夜半亭三世に因んでいふ。

聖護院の杜の空巣には
　妻鳥こそまどふらめ
難波江の蘆の浮巣には
　友鳥こそわぶらめ
わぶらめやいたく〳〵し
伊丹のいめぢいたく〳〵し
さらでだもしぐれの雨は降るものを
心に雲の行きかひて　晴れぬは誠なるかも
友ちどり呼子どり
あゝ都鳥はかなしや
みやこ鳥はかなしや

○聖護院　几董の家は洛東聖護院にあつた。
○伊丹　几董は寛政元年十月摂津伊丹なる松岡仁里の別業に遊び、そこで急逝したのである。
○いめぢ　夢路。
○誠なるかも　定家の歌の句「誰が誠よりしぐれそめけむ」による。

○春雨辯　原文には「聽自鶴間春雨辯」とある。續俳文集　春之編、天明六年刊に出づ。

○淺澤水　「淺き澤水」とよむか。

○くれ竹の　伏見の枕詞に用ふ。

○地主の櫻　京都清水地主權現の櫻。

春雨辯

樗良

宵より降りつゞく軒の雨、柳に匂ひ、梅につたひ枕に音信れて、夢中に廬山に入るがごとし。音を聞けば深山の櫻の枝をしぼり、目に見れば山海に雲を亂して其のすがた眼前にさへぎる。愛すべし、春の雨心の底にうれしく、おもひ鳥にあり、風にうつり花をいそがし月を曇らす。夜はおぼろにとみ、晝は霞を濁す。淺澤水に小鮎をいさまし、野邊にはつくしすみれの色をあらそふ。田家は圍爐裏に芋を燒きくらひ、門に糀俵の口くゝる。男は茄子種をまきちらし、女は蠶を懷にして、老いたるを慰め、いときなきを愛して三人四人物がたるなどいと靜なり。水は苗代にたたへ、雫は牛部屋の軒に凉し。人呼ぶ聲答ふる聲、ひとつとして雨をよろこばざるはなし。くれ竹のふしみの夜船の苫もるにほひのなさけぶかく、淀のわたりの灯も霞みがちに、山崎の松の音八幡の鐘の聲も、雨をつたひてさわがしからず。地主の櫻

○たかまの峯　高間峯。大和葛城山の上方に當る、古來櫻の名所として知らる。
○六田　ムタ又はムツダ。吉野山の麓、吉野川の渡津。附近に柳が多い。
○旅の云々　徒然草「いづくにもあれしばし旅だちたるこそめさむる心地すれ」
○某　太田道灌の故事。

は紅をふくみ、嵐山はあらしまちてや咲出づらん。やゝ晴間ありて日のきよらに照りわたすこそ、すゞろになつかしき事の多ければ、よしやよし野の川の筏も絶間なく、※たかまの峯は夕日にそみて、※六田の柳青だちて、玉川の蛙もほのかに啼くらん。降るときはものの戀しさぞまさりける。來ぬ人をまつ妻戸のしめりも、人目をしのぶ袂の雫も、雨のかをりのなくてやはある。まいて※旅のをかしみは目ざむる心すと、むかしの人のいひけんもさかし。船に明かすをり／＼、野にくらすふし／＼、いさゝか哀をそへざるにもあらず。かの※某が鎧の袖に、みのひとつだになきぞかなしきと聞えしも、此の雨の日の風流なるべし。

夜はうれしく晝は靜なり春の雨

吉野紀行

白雄

彌生十一日なりけり。けふは花供養となん。花は咲きものこらず散りもはじめず、さきの年此の山の霜を踏みて、命なりけりと契りしが誠に命なりけらし。羽翼せし斗墨・古慊ともに命なりけりと浮かれありくに、勝手・子守のみやしろもあとに、花見る人の徒らにつく蒲牢の聲、このあたりをなべて雲井櫻といふなるべし。

　命ありて春ありて花のよし野山

勝手・子守ふた神の御輿を、藏王堂なる四もとの櫻がもとにかきすゑ、花に對してのみ祭り、四手も幣もかをれるばかりかたじけなしや。

　花供養神の御心匂はしや

枕の下に玉はしる音ときこえさせ給ひしおほみ歌を吟じつゝ、吉水院へまゐりて、御簾まぶかく玉座のあとを拜みて、

○吉野紀行　[illegible]のによつた。

○命なりけり　西行「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」

○蒲牢　鐘のこと。班固賦「發鯨魚鏗華鐘」注に「海中有大魚、曰鯨。海邊又有獸、曰蒲牢。蒲牢素畏鯨、鯨魚擊蒲牢、輒大鳴。凡鐘欲令聲大者、故作蒲牢於上、所以撞之者爲鯨魚」とある。

○枕の下　吉水院で後醍醐天皇の御製「花にねてよしや吉野の吉水の枕の下に石はしる音」。本文「玉はしる」とあるは誤つたのである。

花の香に寢殿さぶきむかし哉

御廟は峰の半より又九折阪をのぼりつゝ、山深み薜蘿のしづく身にしむばかり、花のほかには一鳥の聲もまれ〳〵なりける。

山陵にせめて櫻の盛りなる

御廟もる如意輪寺はともに苔むしつゝ、

かへらじとかねておもへば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

救世大士の御扉に、矢の根もてかいつけられし楠氏のいさぎよきに涙こぼれて。

思ひやるむかしをけふの落花哉

春の日のゆふづきて、燈籠の辻福田何がしのもとにやどる。

つぐの日なりけり。貘の觀音・貝止の地藏菩薩をがみて、

御ちかひ貘も喰はじな華の夢

峰の花ふく螺貝の音も嵐かは

とく〳〵の清水は、杉の枯葉踏み行く山ぞひの奥にて、そが傍らに草の庵いとち

○薜蘿　まさきのかづら。

○かへらじと　太平記巻二十六に、正行がこの歌を如意輪堂の壁板に書留めた事が見える。たゞしこの事實は誤りで更に後世矢の根で書いたなどと附會したのである。

○救世大士　聖徳太子のこと。

ひさく、西上人の昔をしたひし人のむすびけんと思ふに、それさへ軒端かたぶきてかすかなりけり。

　岩が根や花の隙間を水つたふ

大瀧・宮瀧見ありきて櫻木の宮に出る。

　たゞさくら賽もたゞ櫻

吉野川の川上夏箕川をわたりて

　鮎くむや櫻うぐひも散る花も

この日もおなじ宿にとまりぬ。せみ瀧のひゞきかすかに、象谷のきゞすの聲、花の夢見む今宵なりけり。

　小夜の嵐梢にわたりて、やちもとの花びら曉の裳にさぶし。つたひきく、雅章卿は花の名殘に櫻木あまた植ゑさせ給ひしと。我は

白雄自筆「吉野紀行」

○西上人　西行法師のこと。

「白雄自筆吉野紀行」（大森國吉氏藏）

さよの嵐梢にわたりてやちもとのはなびら曉の裳に白し　つたひきく雅章卿は花のなごりにさくら木あまた植させたまひしと　われは櫻がもとに老を嘆て

いのちあらははるあらはまたはなのよしのやま

　右吉野記行

　　應錢月觀主人索

　　東都春秋菴白雄

○雅章卿　飛鳥井雅章卿。その吉野記に藏王權現の前に櫻を三十本植ゑさせた事が見える。

ひとときのもとに杖をたてて、
命あらば春あらばまた花のよし野山

三猿箴　成美

幼きものあり。兄を久二といひ、妹を糸とよぶ。しばらく閑を得て机によれば、やがてとゝ〳〵と呼びて、筆を握り、書を散らす。これをすかせば、喜びて更に傍を去らず。また白眼を見すれば、泣きおちて耳かしましし。こがねも珠もなにせむと愛せし昔の人の心にはたがひて、常に腹立たしく憎みがちに、今さらになに生ひ出づらむとうちつぶやかるゝ折もあるに、出づれば門に待ち、入れば袖にすがりなどする時は、さすがに捨て難きものから、兄を膝に据ゑ、妹を左にかきのせて、三猿の遊びをなす。そのさまけしからず。久は眼をふたぎ、糸は耳をかくし、我は中にあ

〇三猿箴　成美の文集「四山藁」（文政三年刊）に出づ。寛政二年の作である。

〇こがねも珠も云々　萬葉に、憶良「しろがねもこがねも玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」

〇三猿　孔子家語の三緘誠、老子の三尸虫、或は右心要に「耳不聞人之非、目不見人之非、口不言人之過」云々とある等から起つた事だといふ。

りて口を蔽ふ。これ三尸をさるといふ、庚申の夜の神すがたなりとぞ。これを三猿の遊びと名づけて、朝三暮四にかくしつゝ戯る。かの五禽の戯れより心を養ふことはまされり。またつく／＼思ふ。久が憎さげなる眼ざしの、人ともならばかりの色を見てはかく目ふたぎて、はかなきすさびに身をはふらかすな。小姫が物の情しる程にもならば、僞多きたはぶれごとに耳ふたぎて、花にうつろふ人の言の葉、ゆめ聞き入るゝな。五色は人の目しひ、五音は人の耳しひせしむとぞ。さて我は常に無益の辯を好みて、人と爭ひ、或は恨み怒られて、悔ゆる事あまた度あり。犬のよく吠ゆるをよしとせず、人のよく物いふを賢とせずとかや。今より此の物言はざるのかたちを、わが身の戒めとして、長く口をして鼻の如くならしめむと、やがて三猿の箴書きて、自ら戒め、かつかの二子に頒ち與へ侍る。

○三尸　[illegible]、三尸虫の字 [illegible]、人皆有二尸蟲[illegible]、處腹中、伺[illegible]、又[illegible]、日庚申[illegible]人之罪過、出至天帝、以求[illegible]、云々」

○庚申の夜の神すがた　庚申〔カノエサル〕の日には、三猿の像を掲げて、庚申青面、猿田彦命などを祭る。この夜は皆睡らずして遊び明かす風習である。

○朝三暮四　こゝは唯朝夕といふ程の意。猿の縁によつてかく言つたのである。

○五禽の戯れ　後漢書、華佗傳「古之仙者爲二導引之事、熊經鴟顧、引二挽腰體、動二諸關節、以求二難老、吾有二一術、名二五禽之戯、一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猿、五曰鳥、亦以除疾、兼利二蹄足、以當二導引、體有二不快、起作二一禽之戯、沾濡汗出、因以著粉、身體輕便而欲食、普施二行之」云々」

○小姫　少女の愛稱。

○口をして鼻の如くならしめむ　說苑「使二口如一鼻、終身不レ失」。十訓抄四「口をして鼻の如くにすれば後あやまる事なし」

○青田づら　建部巣兆が文化九年四月成田山に詣でて、その地の門人奏迪の許に旅寢した折、奏迪の撰集に繪を添ふべきよしを乞はれたので、江戸に歸つた後書き送つた。それを上梓したものである。文化九年刊。

○附合　連句のこと。

○秋香老人　建部巣兆のこと。

○太山亭　奏迪の居。

青田づら跋

成美

俳諧の變化は、夢に遊ぶごとく、附合のおもむきは、旅するおもひをなすべし。その故は、夢中の憂喜はまことの心ながら、さめ來りてはじめてその虛妄なるをしる。これをまことゝならずとする、うつゝのこゝろも、つひに大覺の時ありて、それもまた實ならず。さればこの夢の中に、有無のふたつを說きがたし。たゞなにとなく、その中にあそぶこと、水上に瓢をまろばすごとく、手にとらむとすれば、したがつてまろびゆく。これを俳諧の變化にたとふべし。さて旅の景境は、山を過ぎて川あり、川をこえて里あり。忽ち嶮峻のみちとなり、忽ち曠平の地に出づ。市井あり、林木あり、海路あり、原野ありて、ひとつももとのみちに戻らず。ひきたがへ〳〵行くべしと。是ある上手の俳師の、予に示せる言葉なり。秋香老人は、旅好、寢ずき、よくふたつながら趣を得たり。此の頃下總上總の間をめぐりて、太山

〔 〕青田づらの跋　（この跋文は成美の自筆をそのまま挿刻したのである。）

〔 〕六夢　周禮、春官占夢に見える六種の夢。正夢　普通の夢、噩夢、思夢　思ひおもって見る夢、寤夢　目のさめる時に見る夢、喜夢、懼夢の六。

青田づら跋

亭にわらぢをとく頃、主人の撰集に書をそふべきよしあるに、筆のたくみ、何ともおもひよらず、例の旅枕をかたぶけて、一鼾の中にひとつの趣向を得しより、筆を採りてただちに圖をなす。さればもろこしの六夢も、佛の夢幻も、おしくるめて此の集の模様となし、人をしてこの夢中におそばしめむといふ。世にいひふるしたる夢物語のおもむきながら、筆頭にいさゝか新奇を書きませぬれば、その心か

へりてあたらしとも申すべきか。われまた晝臥の枕をおどろかされて、心むつけ、脣ほどけずながら、半睡半覺の中にこれを書く。

新小莚序

巣兆

水田の鴈の多く居て、もの喰ふおとひし／＼ときこゆ。ひしくひなど申すにや、この鳥の中にも、ふくらかに大きくて侍り、沼にをらば沼太郎などともいふめると、人のをしへ給はりし事、ものの數に覺え侍りしが、その太郎とは何れの事を申すにかあらん。川の大きなりとて、坂東太郎と申さば、何の業、何の家にも太郎ものなからましやは。何れの年にか太郎闇吏さむしろといふふみをつくり、御當地の面目に備へ侍りなんとて、東都旅宿の什物に殘し傳ふよし。そののちそのたび家の太郎になりたるもの、跡をつゞりて續小莚、續々小莚、いやがうへあみつらね、根合、草

○新小莚序　萑庵蟹守編、新編俳諧文集（文政六年刊）に出づ。
○沼太郎　鴻をいふ。
○坂東太郎　利根川の異名。
○太郎闇吏　闇吏、江戸に二夜庵を結んだ時の事で、闇吏は江戸の二夜庵の最初の主だから太郎と言つたのであらう。
○御當地　江戸をいふ。

○したゝるき　じめ〳〵として汚れたさま。

○淨名居士　印度の維摩のこと。居士。方丈の室に三萬二千の獅子座を容れたといふ。

○せき屋　巣兆が住んで居た關屋の里。

○おらが春　一茶の句文集「おらが春」（嘉永五年刊）から二三節を抄出したのである。

あはせ、敷きふるし侍りしより、きり〴〵すいつを霜夜のしたゝるきさむしろも多かりけん。かの寒月に鼓を拍すといへる八畳敷に、おとがひもたせ侍らんよりも、淨名居士の方丈に疲れたらましにはとて、このたびの莚には、新小莚とかき付け侍るとなり。さもあらばあれ、梅のたて、柳のぬきして、めでたく織り出でなば、こののち青莚とも何むしろともなづけ侍りなん。次郎冠者がはたらきたるべき條、撰者太郎他念なく申給へりけるを、江戸根元の因縁にまかせて、せき屋の巣兆演舌。

おらが春　一茶

昔丹後の國普甲寺といふ所に、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は世間祝ひごとしてざゝめけば、我もせむとて、大晦日の夜、一人使ふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〴〵せよと、きと言ひ教へて本堂へ泊りにやりぬ。小法師は

○屑家　小さき茅屋。

○目出度さも　發句篇五〇八頁參照。

元日の日、未だ隅々は小闇きに、初鳥の聲と同じくがばと起きて、教への如く長門を丁々と敲けば、内よりいづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧に候と答ふるより早く、上人裸足にて躍り出でて、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、昨日の手紙をとりて恭しく頂きて讀みて曰く、其の世界は衆苦充滿に候間早く我が國に來るべし。聖衆出迎ひして待ち入り候と讀み終りて、おゝ〳〵と泣かれけるとかや。此の上人自ら工み拵へたる悲しみに自ら歎きつゝ、初春の淨衣を絞りてしたゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふ樣ながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝ひの骨張なるべけれ。それとはいさゝか變りて、己らは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも、厄拂ひの口上めきてそら〴〵しく思ふからに、から風の吹けば飛ぶ屑家は屑家のあるべきやうに、門松立てず煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

目出度さも中位也おらが春　一茶

去年の五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を据ゑて、

〇正月元日　文政二年。

▽おらが春稿本（一）（長野縣中野町、小林氏藏）

〇甘露を降らせ　漢書「元康元年、甘露降未央宮、大赦、以甘露連降、改年爲甘露」

〇乙女の天くだりて　天武帝吉野山に行幸遊ばされし時、琴を彈ぜられしに、神女が天降りて舞ひたといふ。（本朝月令等）

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

「おらが春」稿本（一）

〇

正月元日の夜の丑の刻より始まりて、うちつゞき八日目〳〵に、天に音樂あるといふこと、誰言ふともなく言ひふらして、いつ〳〵の夜そんじようそこにてしかと聞きしといふ人もあり、又吹く風の迹なしごとゝけなす者もあり。其の噂東西南北にぱつと弘まりぬ。つら〳〵思ふに、全く有りと信じがたく、又ひたすら無しとかたづけがたし。天地不思議のなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天くだりて舞ひしためしなきにしもあらず。今この天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優して樂しむならめ。それを聞き得ざるは、其の身の罪の程によるべし。何にまれ

〇頭鼓うち　[illegible]、[illegible]民間[illegible]に[illegible]、行不[illegible]、合[illegible]、鼓[illegible]

〇樂しみ極まりて　漢武帝、秋風辭「歡樂極兮、哀情多」

〔おらが春稿本〕二
（長野縣中野町　小林氏藏）

〇みどり子　名さと。文政二年二歳で歿した。

悪しからぬ取沙汰なりと、三月十九日夕過より、誰彼我が庵につどひつゝ、おの／＼息をこらして、今や／＼と待つ中、夜はしら／＼明けて、窓の梅の木に一聲あり。

今の世も鳥はほけ經鳴きにけり　一茶

（一）

樂しみ極まりて愁起るは浮世のならひなれど、未だ樂しびも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寝耳に水のおし來る如きあら／＼しき痘の神に見込まれつゝ、今水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨に萎れたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。是も二三日

おらが春稿本二

○笹湯　正しくは酒湯。小兒の疱瘡が癒えた後湯に酒を加へて浴させるをいふ。
○母　菊女。
○行く水　[illegible]、長嘯行「百川東[illegible]海、何時復西歸」
○散る花の　[illegible]「落花難上枝、破鏡不重照」
○茶摺小木　二[illegible]門人[illegible]南法師[illegible]の撰。文政四年刊。
○天暦の帝云々　拾遺集に天暦御製「よひに久しうおほとのごもらで御[illegible]わける、[illegible]夜ふけて今はねぶたくなりにけり」、滋野内侍「御前にて[illegible]ける、夢にも[illegible]き人や待つらむ」といふ唱和が見える。
○枯野を　芭蕉「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」
○花に死なん　越人「花に埋もれて夢より直に死なんかな」
○池塘春草夢　南史卷十九[illegible]傳第九「惠連[illegible]年十歲能屬文、族兄靈運嘉賞之云、每有篇章對惠連、輒得佳語。嘗於永嘉西堂思詩、竟日不就、忽夢見惠連、即得池塘生春草。大以爲工」

經たれば瘡はかせぐちにて、雪解の峡土のほろ／＼落つるやうに、瘡蓋といふもの取るれば、祝ひはやしてさん俵法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ます／＼弱りて昨日よりけふは頼み少く、終に六月廿一日の蕣の花と共に此の世をしぼみぬ。母は死顔にすがりてよゝ／＼と泣くもむべなるかな。此の期に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢にもどらぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても思ひ切り難きは、恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

茶摺小木序　乙二

そも夢ほどゆかしきものはあらじ。東風我が晴窗の夢を載せて、吹落せ江湖白鳥の邊とつくりし醉仙も、天暦の帝の滋野内侍が逢ふべき人や待つらんとありし名句

も、枯野をかけ廻る翁のあはれも、花に死なん越人が願も、池塘春草に惠連をおもひ出せし名詩も、呂翁が嚢中の枕をかりて、黄粱を炊ぐ間に榮達を見しも、枳里紀王十夢のうちに眞珠を鉄に換ふも、ばせを葉のあけぼの鬪鷄野の霜も、夢ほどなつかしきものはあらじ。夢子蚊柱に瀬田の浮橋をかけてそこらさまよひありきて、岡の堂佛幻庵の古き跡を訪ふ。あるじの僧は几に憑りて、荅焉としておはしぬ。夢子やをらさしよりて、俳諧の一大事を問ふ。主の曰、待つ事は梅にあるかも茶すり小木　公を待つこと梅よりもまちぬ。そも此の句は幽趣雅致新奇をふくめり。この茶摺小木をさゞく、深く工案のたすけとせよとてかき消しうせぬ。夢もまたさめぬ。あはれ江淹が彩毫を得て、かの文藻ます〳〵さかんなるが如く、花の座主の筵に膝をならべて、盧同が七碗腋下に清風を生じ、曉臺が旅ゆく空の茶一盃の泡、生涯誰の人かうらやみめでざらん。この集や、あぶくまの川浪月と共にたえず世をてらし、夢子がなつかしき心しのぶの山の豈しのばざらめやも。

○呂翁が云々　盧生が邯鄲の夢の故事。
○枳里紀王云々　枳里紀王は又訖栗枳とも書く。哀愍王と譯す。一夜に十種の夢を得た話が、佛説給孤長者女得度因縁經、下・俱舍論記、九等に見える。
○ばせを葉の曙　鄭人が鹿を獲て芭蕉葉にこれを包んで隱しておいたが、その場所を忘れてこれを夢と思ったといふ故事。列子、周穆王篇
○鬪鷄野　攝津國夢野の古名。鹿の夢の傳說がある。
○夢子　[illegible]
○佛幻庵　[illegible]の龍ケ岡にあり、丈草の隱棲した庵。
○荅焉　荘子、齊物篇「荅焉似喪其耦」[illegible]
○江淹　字は文通、濟陽考城の人。少くして孤貧、嘗て司馬長卿、梁伯鸞の人と爲りを慕ひ、章句の學を事とせず、情を文章に留め齊に仕へて侍中秘書監となり、梁に入りて金紫光祿大夫に至る。南史列傳。その作恨賦・文選、に出づ。
○盧同　唐の人、茶を好んで茶經の著がある。古文眞寶、盧同謝孟諫議寄新茶歌に「一椀喉吻潤……七椀喫不得也、唯覺兩腋習々清風生」
○曉臺が云々　曉臺　旅行[illegible]

○豆太鼓頌　新編俳諧文集に出づ。
○寥松　江戸の人、八木氏、八朶園と號す。葛天門の秀才、天保四年歿。年七十三。
○鞉鼓　ふりつゞみ。
○師曠　晋の有名な音樂家で、よく音調を聞き分けたといふ。孟子に見える。
○與二郎兵衛　釣合人形のこと。
○島の千歳　鳥羽天皇の頃の遊女で、若の前と共に舞が上手であり、世に白拍子の始と稱せらる。
○五つのたなつもの　五穀。
○煎りたるにさへ　諺に「煎り豆に花が咲く」。稀有な喩。

豆太鼓頌

寥松

春の日影のうら／＼と、巷に徊ふる嬰兒のもてあそぶ、をかしげなるものを見るに、かたちは曲李とかいへるものに似て柄有り。裏となく表となく、染紙をはり、墨に花形をおして飾とす。豆に絲つなげるを縁につけ、振り動かせば撃つて聲をなす事、僅かに春分發生の音を象るといへども、さながら絲竹の淫靡なるにたぐへるのあやもなさず、是唐人の所謂鞉鼓のたぐひなるべけれど、麁小なるさまは、全くやまとぶりのおごりをうつさざるつくりにして、誠にをさなきを慰むるのうつはものとこそ見ゆめれ。鳴らすに、九序の習もいらねば、師曠が耳をかるにもあらず、只與二郎兵衛を舞はすに、拍子よく合ふは、島の千歳が扇とるよりもいとおもしろし。たゞをしむらくは、五つのたなつものにかぞふ豆をなん、無下にあつかふ事を。しかはあれど、煎りたるにさへ花さく春の有りときけば、是も採つてつちにほどこ

す時は、かならずもとの圃くさとなりて廢るることなく、年々量り增の實のりに盡くる日あらじと、しばらく鳴らし見てかたはらにおく。

索引

一、本書所載の句を發音式假名遣によつて五十音順に排列した。
一、各句の下の括弧内は各作者名、數字は所載頁數を示す。

あ

い（ゐ）

う

え（ゑ）

お（を）

か

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

と

な

に

ぬ

ね

ひ

ふ

へ

ほ

道のべの木槿は馬にくはれけり　芭蕉　一四
みつゝしや鶴なくなり・わく・くれいり　西鶴　四三
皆子なり蓑蟲寒く鳴盡す　乙州　二二七
水無月のいよ〳〵暑き涙かな　太祇　三六一
皆人の晝寝の種や秋の月　貞德　一四
峯入は宮もわらぢの旅路哉　宗因　一七
峰の花ふく螺貝の音も嵐かは　白雄　七七一
身細き太刀の反る方を見よ　重成　五六二
都にも鴨川ありて夜寒哉　梅室　五四〇
明星や櫻さだめぬ山かつら　(其角)　一九〇
身は老いぬ指かまれたるきり〴〵す　東山　六六

む

迎せはしき殿よりの文　去來　六〇八
昔男海鼠のやうにおはしけむ　大江丸　四八〇
昔聞け秩父殿さへ相撲取　芭蕉　二一九
麥の穗を便りにつかむ別かな　芭蕉　一六三
聟の選びに來つるへんぐゑ　(蕪村)　六五九
むさゝびの小鳥食み居る枯野哉　蕪村　三八六
武藏野に鐵入るゝ日や桃の花　太祇　一六一
むざんやな甲の下のきり〴〵す　芭蕉　七二六
むしつてはむしつては捨つ春の草　東山　六〇
虫干や紙魚聲あらば句や啼かむ　蓼太　四三八
むつとして戻れば庭に柳かな　蓼太　四三四
無筆のこのむ狀の跡さき　利牛　六四八

め

名月に露の流るゝ瓦かな　士朗　五一二
名月の御覽の通り屑家かな　一茶　五一九
名月や雨戸をあけてとんで出る　(鬼貫)　八一
名月や草木に劣る人の影　梅室　五四一
名月や烟這ひ行く水の上　嵐雪　二一三
名月や今宵生るゝ子もあらん　信德　五六
名月や朱雀の鬼神たえて出ず　几董　四六二
名月や疊の上に松の影　其角　二二
名月や北國日和さだめなき　芭蕉　七三一
冥途にても饒貴にあはんこそ猶をかしき　(松瑞)　三四
女狐の深きうらみを見返りて　蕪村　六六九
惠み雨深し獨活の大木一夜松　松意　五〇
めくら子の端居淋しき木槿哉　(白雄)　四二九
目黒參りのつれのねおみすく　(野坡)　六五一
目出度さも中位也おらが春　一茶　五〇八　七七九
めでたさや大卅日の夕がらす　大江丸　四七二
目におやし麥藁一把飛ぶ螢　(高政)　四五　四六
目に嬉し戀君の扇ま白なる　蕪村　三七四
目には青葉山時鳥初鰹　(素堂)　九三
目ふたいで苦き藥をすゝりける　(几董)　六六四

も

燃え立つて顔はづかしき蚊遣かな　(蕪村)　三七四
物言へば脣寒し秋の風　(芭蕉)　一四九
物賣の尻聲高く名のりすて　(去來)　六二三
物思ひ今日は忘れて休む日に　野水　六七
物書いて扇引きさく餘波かな　芭蕉　七二九
物かげは常よりくらしけふの月　(蒼虬)　五三六
物まうの聲に物着る暑さかな　(也有)　三三八
もみにもみきり〴〵すなく夕べ哉　(守武)　九
森の鶴のうきを羨む霞かな　(淡々)　三二七
居士に富士あらにけふの月も見よ　素堂　九二

よ

ら

り

れ

ろ

わ

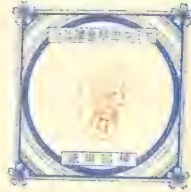
昭和十年九月二十五日印刷
昭和十年十月二日發行

評釋 江戸文學叢書
俳諧名作集

著者 京都市上京區大將軍西町三十六番地 頴原退藏

發行者 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地 野間清治

印刷者 東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二 井上源之丞

印刷所 東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地 大日本雄辯會講談社
（振替 東京 三九三〇番）
電話 牛込(34) 代表（五三〇〇番 六一〇〇番 六二〇五番）

（天海地製本）